

中国歴史研究入門



Mamoru Tonami

磯波 護

Mio Kishimoto

岸本美緒

Masaaki Sugiyama

杉山正明

— 042

中国歴史研究入門

Mamoru Tonami Mio Kishimoto Masaaki Sugiyama
礪波 護 岸本美緒 杉山正明——〔編〕

名古屋大学出版会

はじめに

中国とはなにか。これは、現代に生きる日本の人びとにとって、これまでもまして重要な問いかけとなっている。そのさい、ときに不幸な誤解や思い込みに類することもなくはない。この巨大な隣人といかに共に生きるか、国民的な命題とわいていい。

それは、世界の人びとにとっても、程度の差はあれ、おなじ想いがあるだろう。そしてまた、おそらくは「いま」をひたすらに生きている当の中国の人びとにとっても、個々の人間の立場をこえ、「かたまり」としてのみずからの姿をどう見つめ、現在と今後をいかに方向づけ、構想するかは、根源的な課題であるに相違ない。

その中国は、長久の歴史の歩みをもつ文明体・連続体である。さまざまな変転と再編を重ね、より多元的に、より複合的に、そしてより巨大になりゆき、現在にいたった。壮大な歴史の積み重ねと歩みのはてに、今の中国があること、いいかえれば名実ともに「歴史の国」であることは、世界の他の国々よりもまして際立っている。すなわち、中国とはなにかとの問いは、中国史とはなにかと問うことと大きく重なり合う。

本書は、中国とその歴史を知り、考えるうえでの手引き書として広く活用されることを念願とする。利用の仕方はさまざまにありえる。中国や中国史の学習・勉強・研究にかかわる大学生・大学院生・専門家のみならず、日本史・西洋史・世界史など、隣接分野の研究者の便にも供すべく編まれた。くわえて、中国とその歴史に関心をもたれるより広汎なかたがたに、ときに問題発見・解明への水先案内として、あるいはときに文献収集の一助としてなど、ご利用いただけるならば、幸いである。

これまでも中国史の入門書は各種つくられた。しかし、文化大革命を終えた中国が改革開放路線に転じてよりおよそ四半世紀、その間に文献・遺物・遺跡な

どが次々と出現し、また閲覧・利用の便も開かれて、史料状況は根底から一変した。そして、それにもなって中国史の全般にわたり、研究そのものも大きく変化した。中国の大変化は、中国史研究の大変化でもあった。本書はそうした状況に対応して、対象・構え・内容ともに根本的に一新したものとなっている。

ひるがえって、いうまでもなく日本は中国と長い交流と多様な関係をもつ。もとより、中国への関心は古くから広く、かつ深く、中国の歴史についての研究も長い伝統とぶ厚い蓄積がある。中国とその歴史について、これほどの研究の質量をもつ国は世界にほかになく、中国自身による中国史研究と匹敵するといっているほどである。他者による歴史研究として、日本の中国史研究は独自のスタンスと重みを国内外においてもっている。それは、今もなお変わらない。

本書は、中国や欧米の研究を除外するものではないが、基本的に日本人研究者による中国史研究を主体とする。つまり、日本のまなざしによる中国史を扱う。それが本書の最大の特徴である。現在の日本の一線の研究者たちの協力をえてなった本書は、日本における中国史理解の基礎力を端的に示すものである。日本のみならず、中国や世界各国においても利用されるならば、望外の幸せである。

なお、本書の編集実務にあたっては、中砂明德氏の特段の御助力をえた。ここにしるして深謝の意を表したい。

2005年11月

編者一同

目次

はじめに i

序説 I

- 1 中国人の歴史意識 1
- 2 正史二十四史とその周辺 8
- 3 中国通史概説と工具書 14

第I部 研究と史資料

第1章 先秦 28

- 1 研究の視点 28
- 2 研究の展開と史資料の解説 30

第2章 秦・漢 51

- 1 研究の視点 51
- 2 研究の展開 52
- 3 史資料の解説 65

第3章 三国五胡・南北朝 76

- 1 研究の視点 76
- 2 研究の展開 77
- 3 史資料の解説 92

第4章 隋・唐 100

- 1 研究の視点 100
- 2 研究の展開 103

3 史資料の解説	116
第5章 五代・宋	127
1 研究の視点	127
2 研究の展開	129
3 史資料の解説	142
第6章 遼・西夏	158
1 研究の視点	158
2 研究の展開	161
3 史資料の解説	167
第7章 金・元	172
1 研究の視点	172
2 研究の展開と史資料の解説	173
第8章 明代	190
1 研究の視点	190
2 研究の展開	191
3 史資料の解説	208
第9章 清代	214
1 研究の視点	214
2 研究の展開	216
3 史資料の解説	236
第10章 近代	240
1 研究の視点	240
2 研究の展開	242

3 史資料の解説	255
第11章 現代	264
1 研究の視点	264
2 研究の展開	266
3 史資料の解説	281
第12章 世界のなかでの中国史	290
1 中国史と世界史	290
2 ユーラシア世界史のなかで	297
3 世界史の転回	301
4 近代アジアと西洋	307

第Ⅱ部 中国歴史研究のために

A. 史資料を読むために	316
1 目録学——読書の門径	316
2 金石学・考古学	326
3 地理学——歴史的舞台の理解に向けて	334
B. 付録	349

文献一覧

第1章	366	第2章	371	第3章	377	第4章	388	第5章	396
第6章	408	第7章	411	第8章	417	第9章	429	第10章	440
第11章	451	第12章	460						

執筆者一覧 468

序 説

磯波 護

1 中国人の歴史意識

◆中国において歴史のもつ意味

中国の歴史を研究しようとして、本書をひもとかれる方に対して、まず中国における歴史という学問のもつ意味、について述べておきます。中国は古代から現在にいたるまで、きわめて歴史を重視する、歴史の国でした。かつて島田虔次が『アジア歴史研究入門 第1巻 中国I』（同朋舎出版、1983年）の「序論」で紹介しましたように、中国が歴史の国であることは、ヨーロッパでも早くから知られていました。ドイツの哲学者ヘーゲル（1770～1831）の『歴史哲学講義』（長谷川宏訳、岩波文庫、1994年）でも特筆していました。

ヘーゲルは、その本論の第一部・東洋世界の第一篇を中国にあて、冒頭から「中国とともに歴史がはじまります。歴史のつたえるところ、中国は最古の国家であり、しかも、その共同体の原理は、この国にとっては、最古の原理であると同時に、最新の原理でもあるのです」と説きはじめ、「中国ほどつぎつぎに歴史家の輩出した民族はありません。アジアの他の民族にも太古からの伝承はあるが、歴史はない。インドの『ヴェーダ』は歴史書ではないし、アラビアの太古の伝承も、国家や国家の発展とかかわりをもつものではない。が、中国には国家があり、それが独特の形をしめています」（上巻 195～96頁）と述べていました。

清末から中華民国にかけての思想家・政治家で、欧米の学問事情にも通じていた梁啓超（1873～1929）は、政界引退後に公刊した『中国歴史研究法』（商務印書館、1922年）の第二章「過去之中国史学界」で、「中国では各種の学問のうち、史学だけが特に発達した。少なくとも二百年前まではそうであった」と書き、「その原因はいま断言できないが、しかし史官が早く置かれたこと、その職責が重視せられたことが、おそらく一因であろう」（17頁）という興味ある見解を述べていました。そこで中国における史官の職責について紹介することにしましょう。

◆史官・歴史家の職責・理想像

中国で、〈歴史は事実を記すもの〉とするのが、紀元前770年に始まる春秋時代からの伝統です。官僚機構が世界でもまれな、極度に発達した前近代の中国社会では、歴史書を編纂するのは〈史官〉とよばれた国家の官僚であって、在野の歴史家という存在は想定しにくいのです。そして官僚である史官は、たとえ皇帝や権力者の意向に逆らっても、善も悪も必ず書かねばならない、と期待されてきました。

『春秋左氏伝』の宣公2年（前607）の条には、晋の史官であった董狐が最高権力者の趙盾の意向に従わないで、「趙盾その君を弑す」と書いた記事が載っています。また襄公25年（前548）の条には、斉の崔杼が部下に主君を殺させるという事件がおこった際、斉の史官の大史が「崔杼その君を弑す」と書いて殺され、その弟も同じことを書いて相次いで殺され、ついに三人目の弟によってその記録がまっとうされた次第を記録しています。晋の董狐と斉の史官兄弟は、歴史家の理想像として、後世まで伝承されていきます。8世紀の前半、唐の史官であった呉兢は、『則天実録』を編纂した時、宰相の張説に書き換えを要求されましたが、きっぱりと拒絶したため、「今の董狐」と言われたのです。

父の司馬談の遺命をうけて太史令という史官となった司馬遷が、途中で宮刑をうけるといふ屈辱に耐えながら、紀伝体の『史記』を完成させたのは、史家の職責をまっとうさせたかったからであると思われる。中国人の歴史意識についての議論を集録した川勝義雄『中国人の歴史意識』（平凡社ライブラリー、1993年）には、「東アジア世界の精神史における司馬遷の位置は、西洋世界におけるヘロドトスの位置に当たるのでは全くなく、むしろアリストテレスの位置にこそ相当する」（30頁）とか、「中国における〈諸学の学〉は、哲学よりもまず『史記』のような世界史として結晶した。古代中国のもっとも壮大な、そしてもっとも体系的な〈諸学の学〉が哲学になるよりも、むしろ世界史になったということは、中国の精神の基本的な性格を暗示する」（69頁）といった文章がみられます。哲学ではなく史学こそが中国における〈諸学の学〉である、と川勝は主張するのです。

◆鏡鑑としての歴史

中国では紀元前の古い時代から、歴史は過去を写しだす鏡鑑である、と考えられてきました。そして現在でも、中国政府は日本に対して、〈歴史問題〉や〈正しい歴史認識〉すなわち60年前に終結した日中戦争の戦争責任を強調した発言をくりかえしているのです。

中国最古の詩集『詩経』は、紀元前4世紀にはできあがっていたとされますが、その大雅・蕩に「殷鑒不遠、在夏后之世（殷鑒とおからず、夏後の世にあり）」という句がみえます。鑒という字は鑑と同じであって、殷王朝の人びとが鑑として反省すべきことは、遠い時代にあるのではなく、すぐ前の夏王朝の主君たちの歴史にこそあった、という意味です。また理想的な君主、周の文王を歌った『詩経』大雅・文王に、殷王朝がまだ天下の人びとの心を失っていないかたには、よく上帝の意向にそっ

た統治を行っていたとし、「宜鑒于殷（よろしく殷を鑒とすべし）」という句が含まれています。過去の歴史は現在と将来に対する鑑であり、過去の王朝の興亡の事実を鏡鑑としなければならない、歴史は何よりも現在の鑑戒（いましめ）のために存在するという歴史観は、このように周代からつちかわられていたのです。

11世紀末に、宋の神宗の詔をうけて司馬光が完成させた編年体の『資治通鑑』は、史実の正確無比をもって知られます。当初は『通史』と名づけたのに、神宗から『資治通鑑』という名を賜ったのは、歴代の史実を明らかにして、皇帝が政治を行う際の参考に資することができる、という意味からです。日本の平安時代、歴史文学の代表作『大鏡』やそれにつづく『今鏡』『水鏡』などの〈かがみもの〉とよばれる作品群も、このような観念の系譜につながります。

司馬光が『資治通鑑』を執筆したとき、編集協力者として唐代の部分を担当した范祖禹は、みずからの著作として『唐鑑』という史書を執筆しました。この書物の価値は、歴史事実を述べた点にはなくて、むしろ歴史事実に対する選択および評論をとおして為政者の参考に供した点にありました。歴史を鑑としてみる、という考えは、中国絵画の題材として〈鑑戒図〉というジャンルを生みだしました。〈鑑戒図〉としては、『女史箴図巻』『孝子図』『耕織図』なども描かれましたが、『資治通鑑』『唐鑑』の系列、つまり帝王学としての史書と〈鑑戒図〉との結びつきとして登場したのが『帝鑑図説』でした。

明代の政治家、張居正と呂調陽の共著『帝鑑図説』は、図説中国史と称すべき書物でした。その前半部、堯帝の「賢に任じて治を図る」より唐・太宗の「陵を望みて観を毀す」などをへて、宋・哲宗の「燭もて詞臣を送る」にいたる八十一事は、ともに善にして模範とすべき故事を、その後半部、夏・太康の「遊畋して位を失う」より、秦・始皇帝の「儒を坑にして書を焚く」などをへて、宋・徽宗の「六賊を任用す」にいたる三十六事は、いずれも悪にして戒めとすべき故事を選んでいきます。一事ごとにまず故事を画き、ついで解題を付しています。八十一と三十六という数字は、善事は陽であり吉であるから陽数の九の九倍、悪事は陰であり凶であるから陰数の六の六倍、という事例を歴史故事から選択したのです。

いずれも歴史を為政者のための鑑とする認識にもとづいて編纂されながら、『資治通鑑』よりは『唐鑑』、『唐鑑』よりは『帝鑑図説』の方が、歴史事実そのものの重視よりは、歴史事実への価値判断、儒教思想にもとづく勧善懲悪の観念で史評を試みる方向に傾斜していきました。これら三種の〈鑑〉という字をふくむ書物は、『資治通鑑』と『唐鑑』のみならず『帝鑑図説』も、日本に舶載されて、江戸時代に訓点をほどこした和刻本、今でいえば翻訳本が出版されました。そして最近の中国においても、『資治通鑑』は中華書局から、『唐鑑』は商務印書館から、『帝鑑図説』は中州古籍出版社から標点本が刊行されています。

中国では歴史は過去を写しだす鏡鑑であるとみられてきたために、政治革新運動の際にも、王莽や則天武后のように、はるか上代の理想的な周王朝を鏡に映しだして、

現実の政治を改革しようとしたのです。しかし鏡は、青銅製であれガラス製であれ、表面に歪みがあったり、十分にみがかれていなかったりすると、そこに写しだされた影は、もとの姿を歪めたり、不鮮明にしてしまうものです。ときには、故意に歪んでうつるのを意図して凹凸をつけたトリック鏡もつくられます。したがって、歴史が鏡として使われるばあい、往々にして〈影射害人〉つまり影を射て人を害し、あてこするのための具として利用されがちになります。

中華人民共和国が成立して以後の政治運動を跡づけると、ある指導者を批判しようとする際に、しばしば歴史上あるいは文学作品中の人物になぞらえて、批判運動が展開されたことが注目されます。これは世界のほかの国ぐにでは考えられないことです。たとえば、文化大革命（1966～76）の進行過程で、王洪文・張春橋・江青・姚文元の、いわゆる四人組は、孔子が周公をもっとも理想的な人物として尊敬したというので、同姓の周恩来を批判するために、孔子批判運動に託したり、鄧小平を狙って、『水滸伝』の主人公である宋江の投降主義批判の運動が展開されたりしました。まさに〈影射害人〉、影を射て人を害することが行われたのでした。また唐の高宗の没後に中国史上唯一の女性皇帝となった則天武后を賛美する運動を展開させることによって、毛沢東夫人の江青は、みずから則天武后の現代版たらしめたのです。四人組が逮捕され、文化大革命が終焉して以後、中国の史学界で、影射史学を批判し克服しなければならぬという反省の動きがおこりました。歴史を鏡鑑としてみようとする際の危険性に警鐘を鳴らしたのです。

◆四部分類（経部・史部・子部・集部）の成立

中国で漢籍の分類がどのようになされてきたのかという〈目録学〉の全般については、いきとどいた井波陵一『知の座標——中国目録学』（白帝社、2003年）がありますし、とくに歴史研究をこころざす方には、本書の第II部のA-1、井上進「目録学」をお読みいただくとして、ここでは四部分類の第二〈史部〉が独立した状況について述べておきます。

漢籍目録の始まりは、前漢末すなわち紀元前1世紀末に、劉向・劉歆父子によって漢の帝室図書館の蔵書目録として編纂された『別録』と『七略』です。劉向『別録』は書物の一つひとつの解題でしたが、劉歆『七略』は図書の分類に重点がおかれていました。『七略』は序文にあたる〈輯略〉のほか、『六芸略』『諸子略』『詩賦略』『兵書略』『術数略』『方技略』の六略、あわせて七部分からなっていました。『六芸略』とは儒家の經典をあつめた部分であり、〈易〉〈書〉〈詩〉〈礼〉〈楽〉〈春秋〉〈論語〉〈孝経〉〈小学〉の九類に細区分され、『諸子略』は諸子百家の思想を記した書物をあつめた部分であって、〈儒〉〈道〉〈陰陽〉〈法〉〈名〉〈墨〉〈縦横〉〈雜〉〈農〉〈小説〉の十類に細区分されています。六芸と諸子とはいずれも思想学説を説く哲学の学派なのに区別したのは、孔子が顕彰した六芸すなわち六経を特別扱ったからです。『詩賦略』は文学の書物をあつめた部分で、五類に細区分されています。六略のうちの前半の三略は、いわば文科の書物群です。つづく『兵書略』『術数略』『方技略』の三略

は、名称から類推されますように、軍事関係書・占いの書物・医学書といった技術関係の書物で、六略の後半の三略は、いわば理科の書物群です。

班固が編纂した正史『漢書』の芸文志は、『七略』に基づいて編集されたもので、それによって六つに区分された漢の帝室図書館では、『六芸略』『諸子略』ならびに『詩賦略』と名付けられた哲学書と文学書は、それぞれ独立した分野として、まとめて配列されていました。しかし、歴史書は独立した分野としては扱われないで、『戦国策』や『太史公百三十篇』すなわち司馬遷撰『史記』などの歴史書は、『六芸略』の〈春秋類〉のなかに収められていたのです。

歴史学が哲学や文学なみに独立した分野として認定されるのは、3世紀末、西晋の武帝の治世に、荀勗が宮中の書物を整理して『中経新簿』という四部分類の蔵書目録を作成した時です。『隋書』経籍志によりますと、「一を甲部といい、六芸および小学等の書。二を乙部といい、古の諸子家・近世子家・兵書・兵家・術数。三を丙部といい、史記・旧事・皇覽簿・雜事あり。四を丁部といい、詩賦・函讚・汲冢書あり」とあって、『七略』の分類とくらべますと、乙部に、もとの『諸子略』のほか、『兵書略』『術数略』と、おそらくは『方技略』が合併される一方で、歴史書を中心とする丙部が独立したのです。1世紀の末、82年に班固が完成した『漢書』芸文志では、『七略』を受けついで、『六芸略』の九類の一つ〈春秋類〉のなかに分類されているにすぎなかったのに、その二百年後、古墓から発見された竹簡の『汲冢書』を整理した直後の281年頃に荀勗が作った『中経新簿』では、甲・乙・丙・丁の四部に分類した際に、丙部として独立させるほど、宮中所蔵の歴史書が急増したことが確認されるのです。

荀勗の『中経新簿』は、宮中所蔵の書物を甲・乙・丙・丁の四部に分類して、歴史書を丙部として独立させましたが、西晋が〈八王の乱〉につづく〈永嘉の乱〉で五胡に侵入されて滅亡し、王室の一族の司馬睿が江南で即位したのが東晋の元帝で、その宮中の蔵書は激減していました。唐・道宣撰『広弘明集』卷三所収の梁・阮孝緒「七録序」によりますと、李充が荀勗の目録にもとづいて宮中の蔵書を点検し、『晋元帝書目』を作成した際、荀勗目録の乙部と丙部とを入れかえ、乙部を歴史書、丙部を諸子百家の書としたのです。

南北朝後半期の全国蔵書目録、7世紀前半に編纂の『隋書』経籍志が、計627部で5371巻からなる「六芸と経・緯」すなわち六経と経書と緯書を収めた『経部』、計817部で1万3264巻からなる「史之所記」の『史部』と、計853部で6437巻からなる「諸子」の『子部』、計554部で6622巻からなる「集」の『集部』の四部分類になっていますが、このように『経部』『史部』『子部』『集部』の順で分類する方式の雛形は、李充の『晋元帝書目』で成立していたことになります。

何部何巻といっても、小さい書物では1部が1巻の『孝経』や皇甫謐『逸士伝』などから、大きい書物では1部が300巻の何承天『礼論』や620巻の徐僧權『華林遍略』などがあります。ですから、部数で比べるのは不都合ですので、巻数で比べます

と『隋書』経籍志が著録する書は、《経部》が5371巻、《史部》が1万3264巻、《子部》が6437巻、《集部》が6622巻となり、《史部》の書がほかの三部のほぼ二倍になることが分かります。隋代の中国社会では、歴史書がきわめて多かったのです。

なお、『隋書』経籍志には、経・史・子・集の四部分類の後に、道教関係の《道經》と仏教関係の《仏經》がとりあげられています。《道經》は377部1216巻で、《仏經》は1950部6198巻となっています。阮孝緒『七録』目録では《經典録》《記伝録》《子兵録》《文集録》《術技録》《仏法録》《仙道録》の順であり、仏教が先で道教が後であったのに、『隋書』経籍志では道教が先で仏教が後に入れ替わっていますのは、『隋書』が編纂された唐の太宗朝では、道先仏後すなわち仏教よりも道教の方を優遇する政策がとられていたことの反映であると思われる。

唐代以後は、『隋書』経籍志で確立した経・史・子・集の四部分類がうけつがれ、清の乾隆帝のときになされた文化事業の成果『四庫全書』は、経・史・子・集の四部に分類されて書写保管されたので、四庫と名づけられました。朱野のなかに楷書できちんと書写され、表面は絹で美しく装幀されましたが、経部は黄緑、史部は紅、子部は青藍、集部は灰色と色分けされています。私が愛用しています邵懿辰撰、邵章統録『増訂四庫簡明目録標注』（中華書局、1959年）の巻頭の記事によりますと、文淵閣などに所蔵される『四庫全書』は、全部で3万6000冊、経部十類は1万214巻で960函、史部十五類は2万1359巻で1584函、子部十四類は1万7566巻で1584函、そして集部五類は2万6757巻で2016函とあります。18世紀後半の『四庫全書』の四部の巻数と7世紀前半の『隋書』経籍志に著録された四部のそれとを比べてみますと、経部と史部の増加率よりも、子部と集部、とりわけ後者の増加率ははるかに大きく、とくに文学関係の集部の巻数が歴史学関係の史部の巻数を凌駕していることが注目されるのです。

◆紀伝体・編年体と紀事本末体

『四庫全書』に著録された四部分類の《史部》の2万1359巻の書籍は、十五類に細区分されています。第一が漢・司馬遷撰の『史記』を筆頭とし、後漢・班固撰『漢書』以下にうけつがれた《正史類》で、第二が『竹書紀年』や漢・荀悦撰の『漢紀』、宋・司馬光撰の『資治通鑑』などの《編年類》、第三が宋・袁枢撰『通鑑紀事本末』を筆頭とする《紀事本末類》の順になっています。

第一の《正史類》に収められた正史とは、『史記』から『明史』にいたる二十四史を指し、すべて〔紀伝体〕とよばれる体裁で編集執筆されています。第二の《編年類》は〔編年体〕で、第三《紀事本末類》は〔紀事本末体〕で編集執筆され、中国の歴史叙述の代表的な体裁である、これら〔紀伝体〕〔編年体〕〔紀事本末体〕の三つを、「史の三体」と呼びます。

〔紀伝体〕とは、『史記』に始まる形式で、少なくとも歴代の帝王の事績を記した「本紀」と、政治家などの有名人の伝記を述べた「列伝」をそなえています。それ以外に、諸侯年表や宰相世系表などの「表」や、部門別文化史、ないしは制度史にあつた

る「志」（『史記』では「書」）、中央政権の権力や威光が及ばなかった諸侯や割拠政権の歴史を述べた「世家」、あるいは「載記」と称する巻をそなえる正史もあります。『漢書』以下の正史がこの形式を踏襲したため、『隋書』経籍志では〔紀伝体〕の史書をすべて《史部》《正史類》に分類するので、「正史の体」ともいいます。

『史記』のばあい、最初におかれた「本紀」は、黄帝をはじめとする五帝から、司馬遷が生きた時代の漢・武帝にいたるまでの帝王の記録で、主権者の興亡交代の跡を年代順に記している王朝の年代記で、儒教の經典『春秋』の体裁にのっとり、政治史を中心とする歴史過程の大綱を示しています。つぎの歴史過程を簡略化して一目瞭然たらしめる「表」は司馬遷の創意にもとづき、三つ目の「書」は、礼楽・天文や国家財政など、社会全体の動向を部門別に述べたもので、これも司馬遷の創意にかかります。つぎの「世家」は、封建諸侯の国別の年代記ですが、前半が秦による統一以前の名実ともなった封建諸侯の歴史であるのに対し、後半は漢代のほぼ名目的な封建諸侯の歴史で、その中間におかれた孔子世家のばあいは、無冠の素王として特別に優遇されているのです。最後の全書130巻の半ば以上を占める「列伝」70巻は、さまざまな面で存在感を示した多くの人物の伝記を述べたもので、あわせて当時知られたかぎりの諸外国に関する地誌・民俗と歴史も取り扱っています。「本紀」と「列伝」は、帝王であるか否かをとわず、いずれも人間個人の年代記あるいは評伝であるのに対して、「志（書）」と「表」は、国家あるいは社会全体の動向を述べています。ですから、ある個人の主義主張や人生に興味をもたれる方は「本紀」あるいは「列伝」を丹念にお読みになり、ある時代の国家構造や社会動向に関心をもたれる方は「志（書）」と「表」に目をこらされることになります。

つぎの〔編年体〕とは、年月順に史実の発生・発展を叙述していく年代記の形式で、中国ではもっとも古くから使われ、『春秋』やその注釈書である『春秋左氏伝』はこの形式を使用していました。『隋書』経籍志では〔編年体〕の史書を《史部》の《古史類》に分類するので、「古史の体」ともいいます。〔編年体〕の代表格は、司馬光撰『資治通鑑』で、紀元前770年からの史実を記載する『春秋』の編集方法を踏襲しつつ、周の威烈王23年（紀元前403）から始め、五代後周の顯徳6年（959）で終えました。すなわち、戦国時代から北宋政権の成立直前にいたる計1362年の歴史を叙述した中国通史で、本文全部で294巻あります。その他に、『資治通鑑目録』30巻と『資治通鑑考異』30巻がありますので、合計354巻になります。なお、司馬光『資治通鑑』の簡略化を目指して編集された、朱熹（朱子）の『資治通鑑綱目』は、中国のみならず、東アジア諸国の歴史観に大きな影響を与えました。また〔編年体〕の史書として編纂されながら、北宋時代の歴史を知るのに、正史の『宋史』よりも重要な文献とされる李燾撰『統資治通鑑長編』があります。

〔紀事本末体〕とは、南宋の袁枢が『資治通鑑』をもとにし、歴史的事件の発生から終末までを一見しうるスタイルを考案して、『通鑑紀事本末』と名付けたのが最初です。事件の歴史的意義の大きさによって記述の分量を案分しながら、それぞれの事

件がいかに発生し、いかなる経過をへて、どのような結果をもたらしたのかを、因果関係として理解するのに便利です。清の『四庫全書総目』にいたって初めて〔紀事本末体〕が史書を分類する形式の一つとして認められました。これにならった書物には、『宋史紀事本末』を始めとする《九朝紀事本末》があります。この叙述形式の書物の数は必ずしも多くはありませんが、章学誠ら清朝以降の歴史家に重んぜられました。紀事本末とは称しませんが、45年間にわたる北宋・南宋と金の交戦・講和の過程を記した『三朝北盟会編』なども、この体裁を用いています。

歴史叙述の三形式、〔紀伝体〕〔編年体〕と〔紀事本末体〕は、それぞれ優秀ですのに、権威ある〈正史〉と認定された二十四史の編集は、すべて〔紀伝体〕だけだったのです。

2 正史二十四史とその周辺

◆正史二十四史

中国の史書で、上古から明朝までを対象とした、もっとも基本的で権威ある書として〈正史〉とよばれる二十四史は、すべて〔紀伝体〕で書かれています。二十四史を順番どおりに列挙しますと、『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『旧唐書』『新唐書』『旧五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』『元史』『明史』になります。この二十四史の順序で注意を喚起しておきたいのは、『隋書』の位置です。本書『中国歴史研究入門』もふくめまして、現代の中国や日本では、隋王朝と唐王朝を連続させて、「隋唐」とひとくくりにするのが普通ですが、伝統中国では、隋王朝は北朝の最後の王朝と考えられてきました。

二十四史の第一、司馬遷の『史記』は、上古から漢の武帝にいたるまでの〈通史〉ですが、つぎの班固の『漢書』以後の正史は、おおむね〈断代史〉、すなわち一王朝の歴史のかたちをとり、まれに南朝史をまとめた唐・李延寿の『南史』、北朝史をまとめた同じく李延寿の『北史』や、五王朝である五代をひとまとめにした宋・薛居正の『旧五代史』、宋・歐陽脩の『新五代史』のように、通史的なかたちをとることもありました。正史二十四史としては『史記』が有名ですが、伝統的な中国では、通史の『史記』よりも、断代史の『漢書』の方が模範的な史書と考えられてきたのです。

南朝の宋・南齊・梁・陳の四王朝の正史『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』を簡略にまとめ、体例を変えたにすぎない『南史』に対して、『北史』は北朝の北魏・北齊・北周・隋の四王朝の正史『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』を簡潔にまとめたにとどまらず、遺漏を補ったので、高く評価されています。ですから、隋代の歴史を調べるには、『隋書』のみならず、『北史』をも繙かねばなりません。

唐以前の正史は、〈史官〉の職にあった一代の学者が畢生の著作として書いたもの

が多く、宮中の図書館に所蔵される史料を使って、見識のある記述を行っていました。しかし、唐・宋以後の正史は、政府に歴史編纂所が設けられ、宰相が名目的な編纂者となり、多数の学者が協力分担して編纂にあたるのが通例となりましたので、いたずらに巻帙の多さを誇ることになり、残念ながら、やや質が低下しました。

正史の名称は『隋書』経籍志に初めて見えますが、勅撰と私撰にかかわらず、紀伝体の体裁のものを正史としたのでした。宋代になり、政府によって公認された特定の史書に正史の名称を与えることにし、『史記』から『新五代史』にいたる十七種の紀伝体の史書を〈十七史〉としました。明代に汲古閣による分刻本があり、『宋史』『遼史』『金史』『元史』を加えて〈二十一史〉、清代に『明史』を加えて〈二十二史〉としましたが、乾隆年間の武英殿版で、『旧唐書』と『旧五代史』を加えて〈二十四史〉として刊行しました。

『旧唐書』と『新唐書』を一つとみなし、『旧五代史』と『新五代史』を一つとみなして、〈二十四史〉を〈二十二史〉と呼ぶこともあるので、清の考証学者によってなされた本文校訂の代表的な成果である、錢大昕の『二十二史考異』や趙翼の『二十二史劄記』の〈二十二史〉とは、〈二十四史〉のことなのです。中華民国になって大總統の徐世昌は柯劭忞の『新元史』を入れて〈二十五史〉としましたが、最近の中国では代わりに『清史稿』を正史に準じるあつかいにし、〈二十五史〉に算入しています。

さきに『隋書』の位置について注意を喚起しましたので、この機会に〈二つの五代史〉について触れておきます。二つの五代史とは、いわゆる『旧五代史』と『新五代史』を指すのではなく、唐の直前の五代史と唐の直後の五代史のことです。唐・高祖の武徳5年(622)に南北朝後半の梁・陳・北齊・周・隋の五王朝の正史の編纂が始まりましたが、未完成に終わりました。ついで太宗の貞観3年(629)に重ねてそれら五王朝の正史を編纂する事業が始まりました。『隋書』は魏徵が主編者となり、著名な学者が執筆陣に加わり、7年後に〈帝紀〉と〈列伝〉が、そのほかの四朝史と同時に完成し、「五代史」と合称されましたが、「五代史」には〈志〉の部分がありませんでした。ひきつづきその編纂が始まりました。この「五代史志」30巻が15年かかって完成した時、すでに『梁書』と『陳書』が単独で世に出ているので、『隋書』の〈帝紀〉〈列伝〉と合編されるようになったのです。したがって、現行本の『隋書』は、〈帝紀〉と〈列伝〉の部分は隋朝の歴史に直接かかわるだけですが、〈志〉の部分は隋朝に叙述の重点がおかれているとはいえ、南朝の梁・陳ならびに北朝の北齊・周といった、四王朝の社会経済や文化を考察する際にも、必読の文献なのです。前に言及しました『隋書』経籍志4巻は、「五代史志」30巻の一部です。

〈二つの五代史〉のもう一つ、唐の直後の分裂社会である五代十国の通史、五代史について触れますと、『旧五代史』と『新五代史』のうち、『新五代史』は正式には『五代史記』とよびます。これには『史記』にならって〈十国世家〉10巻が設けられて、主に江南に割拠した十国について述べています。〈世家〉という枠は『史記』と『新五代史』にはしかありませんが、同じような分裂社会であった華北の五胡十六国を

描いた『晋書』載記30巻の〈載記〉は、〈世家〉と同じ役割を果たしていたのです。

ここで正史二十四史のテキストについて述べておきましょう。従来は百衲本と武英殿本が代表的でした。清朝の乾隆帝の時に刊行された〈欽定〉の武英殿本の場合、各巻の末に校証がなされているので便利なのですが、『遼史』『金史』『元史』の、いわゆる〈後三史〉では人名などに手を加えているので、取り扱いに気を付ける必要があります。また〈後三史〉のみでなく、北宋時代の基本文献『統資治通鑑長編』の場合も、欽定四庫全書本では少数民族の人名や地名を改竄しているのです。浙江書局刊本を底本とし、諸本で校勘した中華書局標点本を用いるのがよいのです。

またいつしか失亡してしまっていた『旧五代史』を、『冊府元龜』や『永樂大典』などから復元し、劉承幹嘉業堂校刊本では出典の巻数を注記していましたが、〈欽定〉であるがために、雅ではないと判断して、注記の部分削除してしまっているのです。中華書局刊の標点本をふくむ百衲本系統の『旧五代史』を用いるべきなのです。なお〈前四史〉は二十四史のうちの最初の『史記』『漢書』『後漢書』と『三国志』をさし、歴史研究者はもちろんのこと、哲学や文学を志す者にも必読の書とされ、多くの注釈が施されました。

標点本二十四史は、平装本ではA5判で241冊です。しかし精装本の冊数は一律ではありません。たとえば『三国志』のばあい、平装本は5冊ですが、精装本は4冊あるいは5冊です。そして、1995年に出された標点本二十四史の豪華版はA4判で精装の80冊なのです。『三国志』のばあいは2冊なので、巻数や頁数を指定するのであれば何ら問題はないのですが、冊数をいうのは危ないのです。しかし、卒業論文や修士論文の作成準備のために本書を活用される方がたの便宜上は、平装本のA5判の冊数を挙げておくのが親切な配慮でしょう。

◆三通（『通典』『通志』『文献通考』）

史書を編纂する方式の〔紀伝体〕のうち、社会全体の動向を部門別に述べた文化史ないしは制度史にあたる「志」（『史記』では「書」）の項目は、一王朝を対象とする断代史では沿革影響や変化盛衰などが分からず、通史のかたちこそ望ましいものです。このような要望に応え、上古から唐・玄宗の天宝年間までの諸制度を沿革的に要をえて通観した書物が、801年に完成した杜佑撰の『通典』200巻です。内容は食貨・選舉・職官・礼・樂・兵・刑・州郡・辺防の九門からなります。財政経済史ともいえる食貨門を首位において、選舉と職官をこれに続ける分類配列は、まず経済が政治の根本であるという主張からで、礼法や天地を首位においてきた従来の価値観を一変させた新機軸でした。ただし、礼門に全書の半ばを割いていて、社会経済史、法制史のみならず礼制史の研究に際しても便利な書物で、とくに隋唐時代にかかわる部分は、きわめて重要な文献です。『四庫全書』では《史部》の〈政書類〉に属しています。

正史の「志」の項目を通史的に述べた『通典』は評判がよく、その体裁にならう書物が現れました。その代表格が、宋末・元初の馬端臨が著した『文献通考』348巻で、1317年に完成しました。上古から南宋までの歴代王朝の制度と沿革を、田賦・錢

幣・戸口から輿地・四裔にいたる二十四考に分けて記述しました。天宝以前は『通典』の不備な点をおぎない、それ以後については史書にもとづいて書き、とくに五代と宋に関しては他の書に見られない記事を含んでいます。同書も〈政書類〉に属しています。同書をつぐものとして、清の乾隆年間に出された欽定の『統文献通考』と『皇朝文献通考』がありますが、史料的に重要なのは1584年に完成した明・王圻の『統文献通考』です。南宋の嘉定年間から明の万曆初年にいたる貴重な記事を含んでいます。

馬端臨よりも先輩である宋・鄭樵が著した『通志』200巻は、『通典』『文献通考』とあわせて〈三通〉とよばれ、〈政書〉に分類されることが多い書物です。しかし、その総序で『史記』を褒めて『漢書』を貶めていることから明らかなように、鄭樵は断代史ではない通史を著そうとしたのであって、本紀18巻、后妃伝2巻、年譜4巻、略52巻、列伝124巻、あわせて200巻あり、〔紀伝体〕で書かれているのです。ですから、『四庫全書総目』では〔紀伝体〕で書かれていながら正史と認定されなかった、『東觀漢記』『建康夷録』や『東都事略』と同じあつかいで、《史部》の〈別史類〉に配列していたのです。ただし、『通志』の本紀と列伝は旧来の正史の記事を簡略にまとめただけなので、評価できませんが、正史の「志」に相当する「略」52巻の部分は特色があり、史料価値がきわめて高いので、いつしか『通典』『文献通考』とあわせて〈三通〉とよばれ、近年の漢籍目録では《史部》の〈政書類〉に編入されることが多いのです。「略」は全部で二十部門あって「二十略」とよばれ、唐の劉知幾の『史通』の意見にもとづく〈氏族略〉〈都邑略〉〈昆虫草木略〉や〈六書略〉〈校讐略〉など、旧来の「志」にはない新項目が設けられて評価が高く、『通志二十略』として出版されています。

これら中国制度史の通史である〈三通〉と、王圻の『統文献通考』などの要旨を手際よくまとめ、対応する日本の制度との関係を項目別に述べた書物として、江戸時代に出版された伊藤東涯『制度通』13巻があります。内容は天文・暦法・地理・官制・官吏任用・税役制・度量衡・礼樂・律令格式・兵制・法制といった制度の全般にわたり、中国の上古から明にいたる間の沿革変遷を簡明に跡づけるとともに、それぞれの条に〈本朝之制〉の名目を唐の記事に続けて設け、唐制と比較しやすくしています。

◆三国鼎立の時代

三国鼎立の時代といえ、3世紀の中国で魏・呉・蜀（漢）の三国が鼎立していた時代か、古代朝鮮で4世紀から7世紀にかけて高句麗・百濟・新羅の三国が鼎立・抗争した時代をさすのが普通ですが、中国歴史ということになると、〈六朝初の三国〉時代を連想されることでしょうか。しかし、〈三国〉というのは三つの国ということで、とくに〈六朝初の三国〉に限定されるわけではありません。

〈六朝末の三国〉が書物の名称に見えるのは、唐の丘悦撰『三国典略』です。従来はほとんど注目されていませんでしたが、近年になって丘悦撰、杜德橋（Glen Dud-

bridge)・趙超輯校『三国典略輯校』(東大図書, 1998年)が出版されました。北宋・王堯臣等奉勅撰『崇文總目』卷三によりますと、「関中・鄴都・江南を以て三国となす。西魏から起きて後周に終わり、東は魏・北斉を含み、南は梁・陳を総ぶ。凡そ三十篇、いま巻第おおく遺す。二十一より以下の巻は欠く」とあります。すなわち南北朝の末期を三国鼎立の時代とみ、関中の長安に都した西魏と北周を正統とみなし、関東の鄴に都した東魏と北斉、ならびに江南の梁と陳についての歴史を編年体で編纂されたものです。『三国典略』の三国とは、関中と河北と江南の三地域に鼎立した王朝のことで、それら三国の編年史でした。オックスフォード大学のダッドブリッジらが、勝村哲也「六朝末の三国」(『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』1973年)に示唆をうけ、『太平御覧』などに引用された記事を輯録した労作です。

史書に〈三国〉という名称が見えなくても、実質的に〈三国鼎立の時代〉とよべる様相を呈したのは、11世紀から13世紀前半にかけてでした。チベット系遊牧民族タングートがたてた大夏(宋の北西に当たるため、宋では西夏とよびました)が、小国ではありましたが、モンゴル軍によって滅ぼされるまでの190年間、東の遼(後には金)および東南の宋とともに、三国鼎立の状態を維持したのです。西夏と遼(後には金)と宋は、まさに三国鼎立の時代を現出していたのです。元朝で正史の『遼史』『金史』のみならず、『西夏史』が編纂され、『遼史』『西夏史』『金史』『元史』を〈後四史〉とよぶような研究環境を迎えていたら、の感を深くします。

◆四角号碼検字法による索引

中国歴史を学ぼうとする方は、正史二十四史などの書籍を読み進めるにあたって、まず本書の第II部「中国歴史研究のために」のB、中砂明德による「付録」の諸項目をお読みいただくとして、ここでは〈四角号碼検字法〉の活用をお薦めするため、できるだけ身近な具体的な話題をとりあげ、史料を正確にむよ上で要注意な点に言及しておきます。

私が初めて〈四角号碼検字法〉の便利さを認識したのは、東洋史を専攻したばかりの学生時代に、『中国人名大辞典』(商務印書館, 1921年)、『中国古今地名大辞典』(同, 1931年)を利用した時でした。そして諸橋轍次『大漢和辞典』の最終巻「索引」も、「総画索引」「字音索引」「字訓索引」とともに「四角号碼索引」が用意され、総画や音訓よりも四角号碼索引の方が手取り早いことを知り、当時の教室の雰囲気では邪道とみなされがちでした四角号碼索引に頼るようになったのです。

やがて唐代を対象とする研究にしたがうにつけ、平岡武夫編「唐代研究のしおり」シリーズを利用する機会がふえ、そのシリーズの多くが索引などに〈四隅番号法〉、すなわち〈四角号碼検字法〉を用いていましたし、平岡が主宰する『白氏文集』会読の研究会に参加して、語句の出典を確かめるため、四角号碼順に配列の『佩文韻府』全7冊(商務印書館, 1937年)の分厚い第7冊「索引」を愛用するうちに、四角号碼検字法に習熟するようになったのです。

平岡は『唐代の曆』(京都大学人文科学研究所, 1954年)巻末の「〈唐代研究のし

おり〉の編集と刊行」(礪波護編『平岡武夫遺文集』中央公論事業出版, 2002年に再録)で、索引部分の編集を四隅番号法によった理由を、つぎのように述べています。

これは王雲五氏によって決定づけられたものである。しかし、それは、王氏の偶然の思いつきに成るものではない。漢字の整理に対する中国の人々の努力と熱意は、非常に大きい。……彼らの長い間の思案の末におちついた一つの方法が、王氏の〈四角号碼〉の方法である。漢字を、その四隅の形によって十の類型に分類して、その四隅のそれぞれの形に相当する番号を読む方法である。この方法は、わが国にはまだ一般に行われていない。しかし、編集と検索とを通して、漢字の分類と整理に従事した経験は、この方法をもっともすぐれたものと、私に認めさせた。……これは、漢字に馴れないこれからの人々に、東洋人と西洋人とを問わず、もっとも利用しやすい方法である。わが国で刊行される漢字辞典の類も、近い将来に、四隅番号によって分類されるであろう。

平岡の見通しは的中し、諸橋『大漢和辞典』の「索引」にも「四角号碼索引」が完備されましたし、中国の出版界では、いろいろな索引類に採用されました。

たとえば、正史二十四史の場合も、標点本二十四史に対する『二十四史紀伝人名索引』(中華書局, 1980年)は、本紀と列伝に立てられた人物の姓名を四角号碼によって配列し、巻末に筆画索引を付していました。やがて二十四史の各史ごとに、書中に見えるすべての人名を網羅した索引が、中華書局と上海古籍出版社から、アトランダムに編集出版され、見事に完結しましたが、それらも四角号碼順に配列されています。

この二十四史の人名索引シリーズは、機械的に一史ごとに編集されたのではなく、『旧唐書』と『新唐書』を一つにまとめた『新旧唐書人名索引』(上海古籍出版社, 1986年)、『旧五代史』と『新五代史』をまとめた『新旧五代史人名索引』(同, 1980年)として編集刊行されましたので、非常に便利になりました。ところで、すでに述べましたように、南北朝の正史に関して、『南史』は『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』の四史を簡略したものですから、これら五史を総合した『南朝五史人名索引』(中華書局, 1985年)は、有り難い索引でした。『隋書』については『隋書人名索引』(同, 1979年)が出されていました。しかし、隋は北朝の最後の王朝で、『北史』は『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』を簡略したものですから、五史を総合した『北朝五史人名索引』として編集されるべきだったのに、『北朝四史人名索引』(同, 1988年)が出版されたため、『隋書』と他の四史所収の人名の対照ができません。注意していただきたいことです。

3 中国通史概説と工具書

◆東洋史・アジア史と中国史の入門書

本書の第I部「研究と史資料」の諸章では、ほぼ時代順に、すなわち断代史的に、それぞれの時代の〈研究の視点〉〈研究の展開〉〈史資料の解説〉が、第II部「中国歴史研究のために」では、ほぼジャンル別に、論じられます。この序説では、それら時代別の諸章では扱われない通史的な概説書や工具書について、第I部と第II部の文章となるべく重複しないように配慮しつつ、紹介することにいたします。

まず日本において東洋史・アジア史と中国史が、どのように認識されてきたかについて整理しておきましょう。宮崎市定(1901~1995)は、70歳代後半になって書き下ろした『中国史』上・下(岩波全書, 1977~78年)を『宮崎市定全集 第1巻 中国史』(岩波書店, 1993年)に再録した際、「自跋」の冒頭で「東洋史は私の生涯の学問領域である。だから東洋史の講義は何遍繰り返したか知れない。併し中国史となると事情が全く異なる。どう考えて見ても、私は中国通史を学校で講義した覚えがない。どうやら私が本気になって中国史の体系を考えたのは、この『中国史』の執筆を前にしてのことであったようである」と述べています。全集の各巻末に付された「自跋」は、宮崎の没後、一周忌の日付で、私の解説付きで、宮崎『自跋集——東洋史学七十年』(同, 1996年)として上梓されました。宮崎の歴史観のみでなく、当時の中国史の学界事情を知るうえからも、必読の書物だと思います。

『宮崎市定全集』全25巻の場合にかぎらず、生前に刊行された研究者の全集や著作集に付された各巻の「あとがき」の中には、その巻に収載されている各論考の解説に止まらず、その当時の学界状況や雰囲気伝えてくれる文章があります。たとえば、貝塚茂樹(1904~1987)の『貝塚茂樹著作集』全10巻(中央公論社, 1976~78年)や『小倉芳彦著作選』全3巻(論創社, 2003年)に付された自著「あとがき」は、私にとって興味深いものでした。

日本では宋末元初の曾先之がまとめた『十八史略』が、中国史の入門書として、江戸時代から明治期にかけてひろく読まれました。十八史とは正史の『史記』から『新五代史』までの十七史に『宋史』の記事を加え、それらを簡略にした本という意味です。史料的价值は低い編年体の俗書ですが、多くの故事やエピソードを含めて、要領よくまとめられていたので、大いに歓迎されたのです。『十八史略』の後をつぐ編年体の史書として、1880年頃に石村貞一の『元明清史略』が現れます。

その一方、正史二十四史の編集ぶりを批評した清朝考証学の成果、趙翼の『廿二史劄記』が、頼山陽の推薦文を載せ、書画家の賈名海屋が訓点を加えた和刻本として、江戸時代末期の1861年に上梓されました。この趙翼『廿二史劄記』に依拠して、明末までの中国文明略史を綴ったのが、『日本開化小史』の著者として有名な経済学者、田口卯吉(1855~1905)の『支那開化小史』全5巻(経済雑誌社, 1883~88年)で、

漢文仮名交じり文で書かれていました。

この『支那開化小史』に踵を接するかたちで刊行された、那珂通世(1851~1908)の『支那通史』全4巻5冊(1888~90年)こそ、世界最初の中国通史概説でした。ただし内容は、『十八史略』と同じく南宋で終わっています。同書は訓点つきの漢文体で書かれ、線装本で出版されていたこともあって、羅振玉の序文を冠した重刻本が清国でも歓迎され、流布しました。漢文で書かれた『支那通史』は、和田清によって翻訳され、上・中・下の3冊として岩波文庫に入れられ(1938~41年)、今も時どき復刊されるという名著です。同書は歴代の中国王朝の政治史のみならず、学術や制度についても正確な情報を提供していますし、「外国事略」という項目を設けて、四方の異民族の興亡と、それらの中国との交渉についても、かなりの頁数をさき、日中交流史についても、「倭漢の通交」と題して、かなり詳しく述べています。

日本の文部省が中等学校に東洋史という学科目の新設を認めたのは、日清戦争の始まった明治27年(1894)のことですが、文部省が開催した歴史科の会合の席で、外国歴史を西洋歴史と東洋歴史とに二分すべきだと提議したのは、高等師範学校教授の那珂で、列席者全員がこれに賛成したのです。その那珂が校閲した桑原隲蔵(1871~1931)の教科書『中等東洋史』上・下(大日本図書, 1898年)は、東洋史の名を定着させた名著として知られますが、このとき桑原は数え年29歳、文科大学の大学院学生でした。この年、羅振玉によって上海に東文学社が設立されて、藤田豊八(1869~1928)が清国学生の教育を担当することになるのですが、桑原の一年先輩で生涯にわたるライバルとなる藤田は、さっそく『中等東洋史』の漢訳を企画しました。翌光緒25年(1899)の年末に樊炳清によって訳され、『東洋史要』と題して出版されました。羅振玉が題箋を書き、若き日の王国維(1877~1927)が序文をしたためています。

『支那史』と題する膨大な書物を著していた市村瓚次郎は、『支那史要』上・下(吉川書店, 1893~94年)を改訂して、1897年に『東洋史要』を著し、那珂自身も1903年に『那珂東洋小史』を刊行しました。このように『支那史』『支那開化小史』や『支那通史』の書名にみえる〈支那史〉が、1900年前後に『中等東洋史』『東洋史要』や『那珂東洋小史』の書名にみえる〈東洋史〉に代わっていく例がふえました。

〈東洋史〉という科目が中等教育の場で誕生したのは、日清戦争が開戦した1894年でしたが、高等教育の場である大学で〈東洋史〉専攻が最初に誕生するのは、13年後の明治40年(1907)、京都大学文学部の前身、京都帝国大学文科大学の史学科発足時においてでした。やがて東京大学などの諸大学で、支那史専攻が東洋史専攻に衣替えしたのです。ところが、その京都の地で、歴史学に関しては〈東洋史〉あるいは〈東洋史学〉の名称が定着したにもかかわらず、哲学や語学文学を含めた人文学の総称としては、〈東洋学〉と呼ばれることは少なく、むしろ〈東方学〉と呼ばれたという事実は意外に知られていないようです。

昭和4年(1929)に東方文化学院が設立され、東京と京都に研究所がおかれ

が、同13年(1938)に両研究所が分離独立した際、東京が東洋文化研究所と称したのに対し、京都は東方文化研究所と称しました。そして東京が東方の名を捨て、機関誌『東方学報』を廃刊して、新たに『東洋文化研究所紀要』を創刊、また『東洋文化』を創刊します。ところが、京都の東方文化研究所では『東方学報』を継続し、昭和23年(1948)に京都大学人文科学研究所に吸収合併されても、その〈東方部〉として半独立の体制を維持し、依然として『東方学報』の名称と判型に拘泥してきたのです。

第二次大戦後、京都大学の東洋史学の分野で、〈東洋史〉に代えて〈アジア史〉の名称を使う動きがありました。宮崎市定は、概説書『アジア史概説』(のちに『アジア史概説』と改称)を皮切りに、個人論文集を『アジア史研究』全5巻、『アジア史論考』全3巻、といった具合に命名し、アジア史家をもって自任し、晩年には『アジア歴史研究入門』の序文を執筆しました。また田村實造(1904~1999)は、昭和30年(1955)に羽田明とともに『アジア史講座』全6巻を監修し、晩年に『アジア史を考える』を出版しました。しかし、それらは全体の潮流にはならず、宮崎主導で刊行された概説書が『京大東洋史』で、田村主導で編集された辞典が(京大)『東洋史辞典』であることから分かるように、教室あるいは専攻・講座の名称は〈アジア史〉に変更されなかったのです。

〈東洋史〉と〈アジア史〉についての対応を検討しました機会に、〈東洋〉と〈アジア〉の呼称に関して考察した加藤祐三の見解を紹介しておきます。加藤は『東洋の近代』(朝日選書、1977年)において、中国語では日本をさす〈東洋〉という語は、現代の日本語では〈西洋〉に対する広い範囲をさし、地域的には〈アジア〉とほぼ同じ括りをもつこと、大学での講義の際に調査した結果によると、〈東洋〉に対しては「きれい」「おちついた」「平和的」「魅力的」というイメージを感じる者が多いが、一方〈アジア〉に対しては「きたない」「無秩序」「戦闘的」というイメージを感じる者が多く、〈東洋〉〈アジア〉という二つの語から受けるイメージは、全く正反対である、と述べていました。また、東京都区部の電話帳をみても、企業名で〈東洋〉を冠するものの方が、〈アジア〉や〈亜細亜〉を冠するものより圧倒的に多く、人気が高い。〈東洋〉がプラス価値で、〈アジア〉がマイナス価値であるとは一概にいえないが、前者からは文化的・伝統的な魅力を、後者からは「立ちあがるアジア」という政治的・新興的な印象を感じとっているということはできるだろう、と論じていました。加藤の所見が披露されてから、30年近い春秋をへました。〈東洋〉と〈アジア〉という言葉がかもしたイメージが、どのように変容したかを再調査したら、同じ結果をもたらすのか否か、すこぶる興味があります。

本書『中国歴史研究入門』の前身にあたる入門書の類いが、いつ頃どのようなメンバーによって編集と執筆がなされてきたのかを確認しておきます。まず第二次大戦後の1950年代に2冊が刊行されました。1冊目の東方学術協会編『中国史学入門』(平安文庫、1951年)は、敗戦直後の昭和21年(1946)10月から12月にかけて、京都

北白川の東方文化研究所内に事務局をおく東方学術協会の主催で、「教養としての東洋史」と題して、13回連続で開催された講演会の記録です。翌年9月に前半が高桐書院から、紙質の悪い平装本で『中国史学入門』上巻と題して刊行され、好評を博したようですが、諸種の事情により遷延のやむなきにいたってしまっていたのを、その4年後に上下巻を併せて箱入りの精装本として刊行されたのです。講演会の際は〈東洋史〉でしたのに、出版された時に〈中国史学〉と命名されたのです。したがって『中国史学入門』下巻は幻の書物です。

序文は羽田亨、総論は宮崎市定が執筆、その後は時代順に、先秦を貝塚茂樹、秦漢を大島利一、魏晋南北朝を宮川尚志、隋唐を塚本善隆、五代宋を外山軍治、遼金を藤枝晃、元を愛宕松男、明を田村實造、清を安部健夫がそれぞれ担当し、つづいてジャンル別に、考古学を水野清一、歴史地理を森鹿三、東西交通を羽田明が担当しています。講演録なので、文献解題などに深くは立ち入らない傾向があります。各章の構成は、本書『中国歴史研究入門』と似てはいますが、近現代史の部分が欠落しているのが注目されます。東京の東洋文化研究所と京都の東方文化研究所はどちらも東方文化学院を母体として再発足したのですが、前者には近現代史の専門家が多かったのに対し、後者は中国の古典学者がほとんどで、近現代史の専門家がなかったからです。

2冊目が下中彌三郎編『世界歴史事典』の第23巻「史料篇・東洋」(平凡社、1955年)で、翌年に下中彌三郎編『東洋史料集成』(同、1956年)として装丁を新たに、単行本の形で再版されました。全国の研究者を動員して入念に編集され、重厚な内容で、厳密そのものです。とくに巻頭の第1篇「一般書」を担当した松本善海の記事は、短編ながら日本における東洋史学の発達史の潮流を見事に描ききっていますし、第4篇「中国」に収められた各時代の詳細な文献解題などが綿密なので、半世紀をへた今もなお、貴重な入門書の役割を果たしています。

ほぼ30年後の昭和58年(1983)秋になって、二種類の入門書が相次いで出版されました。最初の山根幸夫編『中国史研究入門』上・下(山川出版社、1983年)は、総説を書いた山根幸夫をはじめ、おもに東京大学関係の研究者によって執筆されました。島田虔次他編『アジア歴史研究入門』1~3(中国I~III、第II巻の一部は朝鮮史)(同朋舎出版、1983年)は、6冊からなる『アジア歴史研究入門』の前半の3冊で、おもに京都大学関係の研究者によって担当されました。それぞれ特色があり、相互補完の関係にあります。

今回、20年あまりの歳月を閲して、東西の研究者が協力し、最新の情報を満載した『中国歴史研究入門』が世に出るわけです。大いに活用していただきたいものです。

◆時代区分と中国史概説

イタリアの哲学者かつ歴史家のクロッチェ(1866~1952)は『歴史の理論と歴史』(羽仁五郎訳、岩波文庫、1952年)の第1部《歴史叙述の理論》の「事実の選択と時代区分」の節で、「歴史を思惟することは確かにこれを時代区分することである。…われわれ近代ヨーロッパ人は古代、中世、近世、を分ける。そしてこの区分は批評

家の側から充分繊細に論難されている」(147頁)と述べていました。また宮崎市定は『古代帝国の成立』(京大東洋史1, 創元社, 1952年)の「総論」(『宮崎市定全集第17巻 中国文明』岩波書店, 1993年に再録)で、「東アジア史の時代区分」の節を設け、「歴史の理解は時代区分にはじまり、また時代区分に終るといって過言でない。……さてわれわれは東アジア史の時代区分を、ヨーロッパ史の研究法を参照しながら、第一期・古代帝国の成立、第二期・貴族社会、第三期・独裁政治時代、第四期・東アジアの近代化進行の時代という4期に分って考察を進めたいと思う」(11頁)と書きだしていました。このように時代区分は大切で、中国史の時代区分論争が華やかなりし頃に研究を始めた私には、いつも念頭にあります。

中国史研究に時代区分の観点を初めて導入したのは、京都大学の内藤虎次郎(号は湖南, 1866~1934)の講演録「概括的唐宋時代観」(『歴史と地理』9-5, 1922年)であって、史学理論に詳しい国史学の同僚、内田銀蔵の『日本近世史』(1903年)と西洋史学の同僚、原勝郎の『日本中世史』(1906年)の所論に誘発されたものでした。彼らの同僚となった内藤は、その影響下に中国史の時代区分を考え、近世史は宋代から始まるとする構想を講義したのです。ただし内藤の時代区分論は、生前には学界でほとんど取り上げられず、1944年公開の内藤の講義録『支那上古史』(弘文堂)の「緒言」で、その時代区分が示され、注目されるようになりました。内藤の京都大学における講義録、『支那上古史』『中国中古の文化』と『支那近世史』は、『内藤湖南全集』第10巻(筑摩書房, 1969年)に収録され、最近、夏応元によって漢訳されました。『中国史通論——内藤湖南博士中国史学選訳』上(社会科学文献出版社, 2004年)がそれです。

内藤の時代区分の特色は、〈過渡期〉という時期を設定することでした。この内藤の時代区分に対し、宇都宮清吉(1905~1998)が「東洋中世史の領域」(『東光』2, 1947年)を書いて、秦漢時代の政治性と六朝時代の自律性を対比しつつ〈時代格〉という概念を創出し、過渡期概念の不明瞭さを批判しました。これに対して、マルクス主義的方法にたつ歴史学研究会の再建に積極的に関与した、東京大学出身の前田直典(1915~1949)は「東アジアにおける古代の終末」(『歴史』1-1, 1948年)を発表して宇都宮説を批判し、「内藤博士の優れた時代史観がここでは曖昧になってはいはないかと憂うものである」と述べ、また宮崎市定『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会』(支那歴史地理叢書, 富山房, 1940年)の時代区分を批判し、唐代までが中国の古代で、宋代以後に中世封建社会が始まるという新説を提出したのです。

前田はその翌年に病没しますが、中国の中世は宋代から始まる、とする時代区分論は1950年の歴史学研究会大会における西嶋定生と堀敏一の報告と質疑応答によって体系化されました。時あたかも新制高等学校で、社会科教育として〈世界史〉の授業が始まり、その教科書の編集時期に際会したために、大半の教科書に宋代中世説が採用されることになったのです。内藤の後継者である宮崎は、文化史的な内藤説を祖述しつつ、みづから培った社会経済史の成果を盛り込んだ『東洋的近代』(教育タイム

ス社, 1950年)などを発表し、そこから華やかな時代区分論争が始まったのです。

時代区分論争については、鈴木俊・西嶋定生編『中国史の時代区分』(東京大学出版会, 1957年)に、中国の翦伯贊や西嶋定生らの論文を掲載し、付録として前田「東アジアにおける古代の終末」を収録しました。また劉俊文主編『日本学者研究中国史論著選訳 第1巻 通論』(中華書局, 1992年)に、内藤の「概括的唐宋時代観」を始め、宇都宮の「東洋中世史の領域」、前田の「東アジアにおける古代の終末」および宮崎の『東洋的近代』が、黄約瑟によって漢訳され、中国の学界に紹介されました。

中国の各王朝史の概説を書く際には時代区分に拘泥する必要はないのですが、中国の通史的な概説を書く段になると時代区分に触れないわけにはいかない、と思われがちでしょう。しかし、これまでに出版された中国通史概説は、意外なほど時代区分を避けたものが多く、また東洋史概説やアジア史概説はたくさんありますが、中国史概説は少ないのです。

信頼にたる中国歴史の最初の概説は、和田清『中国史概説』上・下(岩波全書, 1950~51年)です。同書の「はしがき」で、和田は「時代区分については私には前から成案があり、その点では今日でも変りはないが、問題がむずかしくなったから、そのために数言を費し、特に最後に結言を補って、更なるその旨を闡明した」と断っていますように、時代区分については、深入りしませんでした。今では絶版となっています。

貝塚茂樹『中国の歴史』上・中・下(岩波新書, 1964~70年)は、『貝塚茂樹著作集』第8巻(中央公論社, 1976年)に再録された際の自著「あとがき」で、「中国の時代区分については、深く立ち入らない」「時代区分論を避けた」と書いていました。

その点で宮崎市定『中国史』上・下(岩波全書, 1977~78年)は、まず「総論」において、歴史とは何か、時代区分論、古代とは何か、中世とは何か、近世とは何か、最近世とは何か、を問いつづけた上で本論に入っていて、全編を通じて時代区分をきわめて重視した中国史概説です。宮崎はこれまで、最近世史(近代)の開始時期を阿片戦争の時点においていたのを、辛亥革命の時点に引き下げているのが注目されます。同書は全25巻からなる『宮崎市定全集』の第1巻(岩波書店, 1993年)に、自跋を付して再録されました。この点に関して、本書『中国歴史研究入門』の第1部第10章「近代」の冒頭の文章を参照してください。

礪波護『中国』上(地域からの世界史2, 朝日新聞社, 1992年)と森正夫・加藤祐三『中国』下(同3)は、もともと『週刊朝日百科 世界の歴史』の共編者であった三人が連載して、各世紀の中国社会を展望した文章を、新シリーズとして単行本にまとめ、体裁をととのえたものですので、読みやすい中国通史になっていると思います。礪波は中国文明の発祥から15世紀までを、森が16世紀から18世紀まで、加藤が19世紀から20世紀までを担当しています。時代区分には触れていません。

寺田隆信『物語 中国の歴史』(中公新書, 1997年)は、十話からなりますが、第

四話を「古代から中世へ」、第七話を「近世とよぶ時代」と題しているように、宮崎の門下生として時代区分をつよく意識した物語に仕上がっています。

中国史の時代区分論争についての論評で、しばしば京都学派と歴研派、すなわち歴史学研究会学派との対立という形で語られますが、京都学派の実態はそう単純ではありません。田村實造・羽田明監修『アジア史講座 第1巻 中国史1』（河地重造責任編集、岩崎書店、1955年）の「序説」の「中国史の時代区分」の節に、「本講座は、一応そのたてまえからすれば、春秋時代以後、唐代中期の安史の乱ごろまでを古代、五代・宋朝以後19世紀半のアヘン戦争、太平天国革命ごろまでを中世、それ以後を近代と考えている。ただし中国社会のように、その発展が、きわめてゆるやかである場合には、古代・中世・近代の3区分の間にそれぞれ比較的長い過渡期を考えねばならないであろう」と述べていまして、京都大学内外の東洋史研究者の時代区分がさまざまであったことが分かります。

一人あるいは数人による中国史概説よりも、はるかに多いのは、多数の研究者が参加した叢書、あるいはシリーズに、中国史をひとまとめにしたものがあることです。たとえば、小倉芳彦編『文化史』（中国文化叢書8、大修館書店、1968年）は、中国文化史上の諸問題や時代について考察したもので、多くの研究者が寄稿しています。

また岩見宏が企画した《新書東洋史》全10巻（講談社現代新書、1977年）のうち、前半の5巻を化粧箱に収めて《新書東洋史上》「中国の歴史」全5巻としたものもあります。その内容は①伊藤道治『中国社会の成立』、②谷川道雄『世界帝国の形成』、③竺沙雅章『征服王朝の時代』、④岩見宏・谷口規矩雄『伝統中国の完成』、および⑤小野信爾『人民中国への道』です。

『中国文明の歴史』全12巻（中公文庫、2000～01年）は、かつて宮崎市定らが監修した『東洋の歴史』全13巻（人物往来社、1966～67年）を、第13巻「人名事典」を省いて文庫化するに際し、日比野丈夫と礪波護が文庫版監修の任にあたり、シリーズの名称を内容に即して《中国文明の歴史》と命名したものです。ほぼ一人で1巻を執筆していましたが、30年ぶりの再刊でしたので、考古学と現代史の部分には、新進の研究者による増補の文章が追加されています。

最新の概説シリーズは、礪波護・尾形勇・鶴間和幸・上田信編『中国の歴史』全12巻（講談社、2004～05年）で、講談社創業百周年記念企画として出版されました。全体の構成は第01巻・宮本一夫『神話から歴史へ——神話時代・夏王朝』から、第02巻・平勢隆郎『都市国家から中華へ——殷周・春秋戦国』、第03巻・鶴間和幸『ファーストエンペラーの遺産——秦漢帝国』、第04巻・金文京『三国志の時代——後漢・三国時代』、第05巻・川本芳昭『中華の崩壊と拡大——魏晋南北朝』、第06巻・氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国——隋唐時代』、第07巻・小島毅『中国思想と宗教の奔流——宋朝』、第08巻・杉山正明『疾駆する草原の征服者——遼・西夏・金・元』、第09巻・上田信『海と帝国——明清時代』、第10巻・菊地秀明『ラストエンペラーと近代中国——清末・中華民国』、第11巻・天児慧『巨龍の胎動——毛

沢東 vs 鄧小平』で、ここまでは、ほぼ時代順に一人一巻を執筆しました。最後の第12巻『日本にとって中国とは何か』は、四人の編者のほか、中国の葛劍雄と王勇の二人による共著です。

このシリーズは、30年前の旧版、『中国の歴史』全10巻（講談社、1974～75年、企画委員は貝塚茂樹・西嶋定生・野村浩一）を受けつぎました。旧版は①貝塚茂樹・伊藤道治『原始から春秋戦国』、②西嶋定生『秦漢帝国』、③川勝義雄『魏晋南北朝』、④布目潮風・栗原益男『隋唐帝国』、⑤周藤吉之・中嶋敏『五代・宋』、⑥愛宕松男・寺田隆信『元・明』、⑦増井経夫『清帝国』、⑧佐伯有一『近代中国』、⑨野村浩一『人民中国の誕生』、⑩日比野丈夫『目で見る中国の歴史』です。ストレートに王朝名を書名にかかかっている、まさに断代史の積みかさねの観がありました。旧版の大部分は、講談社学術文庫に入り、今なお好評を博しています。

多数の執筆者による概説書としては、簡便な一冊ものとして、尾形勇・岸本美緒編『中国史』（新版世界各国史、山川出版社、1998年）があります。時代区分には触れていません。同書の前身は、鈴木俊編『中国史』（世界各国史、山川出版社、1954年）、および鈴木俊編『中国史（新版）』（同、1964年）で、長年にわたって版をかさねてきましたが、編者と執筆陣そして内容が面貌を一新させています。

やや詳しいものとして、竺沙雅章監修『アジアの歴史と文化』（同朋舎出版）は、全10巻が完結する前に出版社が倒産しましたが、そのうちの第1巻から第5巻まで、すなわち《中国史》1「古代」、2「中世」、3「近世I」、4「近世II」、5「近現代」が、1994年から95年にかけて刊行されました。いわゆる京都学派の時代区分によっています。

もっとも詳細なのは、松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編『中国史』全5巻（世界歴史大系、山川出版社、1996～2003年）で、たとえば『中国史3 五代▶元』のように、断代史のかたちをとって、各巻とも綿密な概説がなされていますが、同じ出版社から出された、前掲の新版世界各国史の『中国史』と同じく、やはり時代区分には触れていません。各巻末にかなり詳しい「年表」と「参考文献」があげられていて、きわめて有益です。

◆事典と年表（工具書1）

ここでは中国史全般にかかわる事典類と年表を列举しておきます。日本では中国史だけの本格的な事典はありませんので、東洋史やアジア史の事典のなかから、該当の事項を検索するしかほかに手立てはありません。最初に編纂された本格的な東洋史の事典は、『東洋歴史大辞典』全9冊（平凡社、1937～39年。縮刷復刊、全3冊、臨川書店、1986年）で、同じ出版社から刊行された『世界歴史大系』の東洋史の各巻ともども、若き鈴木俊が中心となって編集したものです。中国に関しては、正史二十四史の本紀や列伝などにもとづいて丁寧な執筆されています。

『東洋歴史大辞典』の後身にあたるのが、『アジア歴史事典』全10巻（平凡社、1959～62年）で、書名どおり西アジア史やインド史などにもかなりのスペースが充

てられ、第10巻の「アジア歴史事典索引」は、首字画順一覧・首字音順一覧・漢字索引・カナ索引・ローマ字索引・系図索引からなり、まことに行き届いた配慮です。当初は別巻として広告されていた、松田寿男・森鹿三編『アジア歴史地図』(同、1966年)は、地図作成に手間取ったために、出版時点では、別巻の称ははずされませんでした。ところがこの事典は、第1巻出版の四半世紀後になって、『アジア歴史事典』全12巻(同、1984年)と銘打って再刊されました。12巻とは、本巻9巻・索引1巻のほか、別巻のアジア歴史地図1巻と、同じく別巻の東洋史料集成1巻です。『アジア歴史地図』を別巻扱いするのは、当初の編集事情から見て、ごく自然です。しかし、『東洋史料集成』を『アジア歴史事典』の別巻として再版するとは、驚きでした。けれども、すでに入門書の項で述べましたように、同じ平凡社から刊行された『東洋史料集成』、すなわち『世界歴史事典』の第23巻「史料篇・東洋」は立派な入門書なので、大局的にみて、『アジア歴史事典』の別巻に取り込まれたことは首肯できるでしょう。なお、『アジア歴史地図』の橙色で装丁された1966年版は、地図の部分には、俗に「下駄をはかす」という製本技術がほどこされていましたので、見開き2頁の地図でも、真ん中の部分が鮮明に読み取れます。しかし、茶褐色で装丁された1984年版の製本は手抜きされていますので、真ん中の部分は不鮮明になっています。図書館に両方が並べられている場合は、できるだけ1966年版を使用されることをお勧めいたします。

一冊ものの事典としては、京大東洋史辞典編纂会編『新編 東洋史辞典』(東京創元社、1980年)があります。手頃で簡便ですが、信頼できる辞典です。他に中国で出版されたものとして、『中国大百科全書 中国歴史』全3冊(中国大百科全書出版社、1992年)をあげておきます。

次に百科事典を取り上げます。『ジャポニカ大日本百科事典』全23巻(小学館、1967~72年)から、世界歴史に関する項目を取り出して再編集した『万有百科大事典』9「世界歴史」(同、1975年)が役に立ちます。『ジャポニカ大日本百科事典』中国史の項目は、『日本大百科全書』全26巻(同、1984~94年)に継承されました。

『大百科事典』全16巻(平凡社、1984~85年)は、世界のさまざまな地域の細部とその全体像をとらえる項目を、地域ごとの委員会に各分野の専門家を結集した「エリアシステム」で編成され、中国委員会の場合は島田虔次が委員長でした。その島田執筆の大項目「中国」は、島田の論集『中国の伝統思想』(みすず書房、2001年)の巻頭に冠され、読みやすい魅力的な文章で書かれています。この『大百科事典』は、1988年に豊富なカラー図版が増補され、日本地図・世界地図の巻も加えられ、『世界大百科事典』全35巻として出版されましたが、各項目は『大百科事典』と同じ内容です。

中国史上の人名事典としては、『中国人名事典——古代から現代まで』(日外アソシエーツ、1993年)があります。中国語で書かれたものとしては、『中国歴代人名大辞典』全2巻(上海古籍出版社、1999年)が信頼できます。また瀧本弘之編著『中

国歴史人物大図典』「歴史・文学編」(遊子館、2004年)は、「神話・伝説編」(同、2005年)ともども、人物の肖像を集大成しています。

中国史を学ぶ上で必要な漢籍の解説としては、前掲の『東洋史料集成』、すなわち『世界歴史事典』の第23巻「史料篇・東洋」よりも詳細な、神田信夫・山根幸夫編の『中国史籍解題辞典』(燎原書店、1989年)があり、15名の分担執筆者によってなされた解説は、出色のものです。

次に中国史の年表について紹介します。日比野丈夫編『カラー版 世界の歴史』別巻「年表」(河出書房新社、1972年)の中国を含むアジアの部分は、私が担当したものですので、私には便利なものです。前半は総合年表、後半は特殊年表で、総合年表の部分は、見開き2頁ごとに、右頁をアジアに充て、三つの欄のうち「中国・その周辺」と「日本」の欄を設けました。後半は特殊年表で、辛亥革命やベトナム戦争、仏教史の作成にかなりの時間を費やしたことを思いだします。翌年に日比野丈夫編『世界史年表』(同、1973年)と題して単行本となり、順調に版をかきね、現在は第4版(1997年)です。同じような年表として、歴史学研究会編『世界史年表』第2版(岩波書店、2001年)がありますが、中国の欄はなく、「東アジア・日本」の一部に入っていますので、中国史の年表としては使いにくいのです。

中国で出版された年表で簡便なのは、翦伯贊主編『中外歴史年表(公元前4500年~1918年)』(中華書局、1980年)です。より詳細な年表としては、張習孔他主編『中国歴史大事編年——高等学校文科教学参考書』(北京出版社)があり、第1巻「遠古至東漢」(1986年)、第2巻「三国兩晋南北朝隋唐」(1987年)、第3巻「五代十国宋遼夏金」(1987年)、第4巻「元明」(1987年)、第5巻「清近代」(1987年)となっています。清朝に関しては、中国人民大学清史研究所編『清史編年』全12巻(中国人民大学出版社、1985~2000年)という立派な年表がありますが、ほかの時代もこのような年表を作成していただきたいものです。なお、史学史に関して私が愛用しているのは、楊翼驥編『中国史学史資料編年』第1冊「先秦至五代」(南開大学出版社、1987年)、第2冊「兩宋時期」(同、1994年)、第3冊「元明」(同、1999年)です。第4冊「清」もやがて舶来されてくることでしょう。

◆漢籍目録と金石目録(工具書2)

中国の前近代史を対象とする研究に従事しようとするとき、漢籍の利用をさけて通ることは不可能です。漢籍史料を正確に読解するのが最も大事なことです。その前に図書館に所蔵されている漢籍の所在を確かめねばなりません。漢籍を所蔵する大学図書館などでは、分類法は十進法にはよらないで、四部分類によっている例が多いのではないのでしょうか。四部分類についてはすでに述べましたので、ここでは漢籍目録をどのように利用するのかを、京都大学の人文科学研究所と文学部の所蔵漢籍目録を例に説明しておきます。

人文科学研究所所蔵の漢籍の目録としまして、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』上・下(1963、65年)と『京都大学人文科学研究所漢籍目録』上・下(1979、

80年)の二つがあります。いずれも下巻は書名と人名の通検、すなわち索引です。書名について、前者には「分類」の二字がありますが、後者にはありません。よく似た名称ですから、「分類」の二字があるかないかということは、注意されないで、後者さえあれば、前者は不必要と思われるかも知れませんが、実は両方とも大事なので、気をつけていただきたいと思います。後者は〈配架目録〉、すなわち書庫の書架に並べられている順序のままに、叢書や全集に入っている場合も含めて、書名をあげています。それに対し、前者は〈分類目録〉でして、叢書や全集に入っている書物も含め、同一の書物は一カ所にまとめて四部分類の順に書名をあげています。それだけではありません。前者では、四部分類された漢籍のあとに、「新学部」という欄を設けて、中華民国以降に出版された洋装本などを網羅し、日本の十進分類法によって分類されていましたが、後者では「新学部」は省かれました。また、前者には史部地理類のなかに「輿図之属」、すなわち歴史地図の項目があったのですが、後者では省かれたといった塩梅なのです。ですから、新旧の漢籍目録は両方とも有用なのです。

『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』の編纂手法をそのまま採用したものの代表格が『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』上・下(1973, 75年)で、下巻の書名は通検とは言わないで、『同書人名索引』と改めています。東京大学東洋文化研究所は、この〈分類目録〉だけで、〈配架目録〉は編集されませんでした。なお東京と京都の両研究所漢籍分類目録の「書人名索引」と「書人名通検」を合併した『四角號碼検字表』(東洋学文献センター叢刊・別輯1, 1977年)が東京からでています。

京都大学文学部の漢籍目録として、『京都大学文学部漢籍分類目録』(彙文堂書店, 1959年)というものがあります。しかし、この目録では〈史部〉の漢籍は貧弱です。それもそのはず、編者は京都大学中国哲学史研究会・中国文学会となっていて、東洋史とは無関係だったのです。同書は『京都大学文学部漢籍分類目録第一』(京都大学文学部, 1959年)の市販本なので、ひきつづいて東洋史研究室所蔵の漢籍目録を「第二」として編集刊行する予定でありながら、頓挫してしまっただけです。京都大学文学部は、創設時点で、支那哲学文学の狩野直喜が哲史文と一緒にした支那学科をつくることを提案したにもかかわらず、桑原隲藏の主張が通り、東洋史は史学科に所属することになりました。それ以後、図書室も中国哲学と中国語学文学の蔵書は一カ所にまとめられてきましたが、東洋史研究室所蔵の蔵書は史学科図書室の一角をしめてきたのです。

ことは漢籍目録にかぎる問題ではありません。京都大学だけが例外だったのではなく、中国哲学と中国語学・文学の研究者の多くは、学会活動として日本中国学会に所属していますが、東洋史の研究者は史学関係の学会に参加して、日本中国学会には属していません。したがって『日本中国学会五十年史』(日本中国学会, 1998年)をひもといても、日本の中国史の動向を知ることはできないのです。

次に金石史料の目録についても紹介しておきましょう。『金石萃編』や『八瓊室金

石補正』を始めとする石刻書を網羅した、台北の新文豊出版会社が影印した『石刻史料新編』叢書の有用さは、あらためて述べるまでもありません。ただここで注意を喚起しておきたいのは、『石刻史料新編』(三十)に影印された、楊殿珣編『石刻題跋索引』には「筆画検字表」があるのに、肝心の「四角號碼検字索引」の107頁分が欠落していることで、索引の用をなしていません。ですから、元版の商務印書館、1957年版を利用せざるをえないのです。

石刻の研究には拓本あるいは拓本の写真がまず必要です。その要望に応える叢書として、北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』100冊(中州古籍出版社, 1989~91年)が刊行されたことは、ありがたいことです。その内容は第1冊が「戦国・秦・漢」、第2冊が「三国・晋・十六国・南朝」、第3冊から第8冊までの6冊が「北朝」、第9冊と第10冊の2冊が「隋」、第11冊から第35冊までの25冊が「唐」、第36冊が「五代、十国」、第37冊から第42冊までの6冊が「北宋」、第43冊と第44冊が「南宋」、第45冊が「遼」、第46冊と第47冊が「金」、第48冊から第50冊までの3冊が「元」、第51冊から第60冊の10冊が「明」、第61冊から第90冊の30冊が「清」、第91冊から第100冊までの10冊が「中華民国」となっていて、完結後に『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編 索引』(同, 1991年)が出版されました。この索引には、「一、各冊一覧表」「二、地区索引」につづき、筆画順の「三、標題索引」が載せられて、行き届いた配慮がなされています。

◆おわりに——新出土の文物

第I部の各章では解説されない事柄を中心に、卑近な例をあげて、これから中国の史林に入られる方がたのために、言葉をつらねてきました。おわりに当たり、新出土の文物の紹介のされ方について一言つけくわえておきます。

新しく発掘などによって出土した史料が研究環境を一変させてきました。たとえば1900年前後に発見された〈甲骨文字〉と〈敦煌文献〉は、先秦時代と南北朝隋唐時代の研究環境を一変させました。木簡や竹簡に書かれた文字資料が初めて発見されたのは1907年で、オーレル・スタインが第二次中央アジア探検の途中、敦煌付近の漢の長城の望楼近くで発見した辺境守備隊関係の漢代木簡でして、1980年前後から木簡や竹簡といった出土文字資料がつぎつぎと発掘され、秦・漢から三国時代にかけての研究を深化させました。

北魏から隋唐にかけての社会では、墓誌銘などの石刻史料が豊富でしたので、新出土の墓誌銘などが、伝世の石刻や新たな都城址の発掘成果とあいまって、北朝隋唐の研究をゆたかにしてきました。ただし、陵墓から発見された壁画の場合、文化大革命以前の報告書では、仏教などの宗教文物については、故意に隠されてきたことがある点には、注意すべきです。

1999年9月に山西省の太原から隋の虞弘墓の発掘がもたらした衝撃は強烈でした。地下の墓室から発見された殿堂型石槨の内外側面に、中国ではあまり目にしたことのない珍しい画像が、浮彫や壁画のかたちで何面も描かれていたのです。出土した墓誌

によりますと、中央アジアの魚国出身の虞弘はソグド系の人らしく、石槨の画像にはソグド人が信仰したゾロアスター教の拝火壇が描かれていました。その後、2000年7月に陝西省西安の北郊で北周の安伽墓が、そして史君墓や康業墓などの発掘があいつぎ、これまで桑原隲藏や羽田亨らが文献によって指摘してきたソグド人の活躍が、新出土の文物によって裏付けされようとしています。今後の研究が大いに期待されます。

第I部 研究と史資料

第1章

先秦

浅原達郎・吉本道雅・江村治樹

1 研究の視点

この章では、先秦時代の歴史研究の手引きとして、殷・西周時代、春秋時代、戦国時代の三段に分けて、述べる。まず、本来はこのまえに「新石器時代」の一段を置かねばならないのであるが、この時代については考古学の話題がほとんどを占めるので、直接に考古学の概説書を読まれた方がよいと考えて、割愛した。参考までに、第II部のA「史資料を読むために」の「考古学」の項を御覧いただきたい。さらに、この三段については、それぞれに異なった研究のスタイルが可能である。したがってあえて統一をはかることをせず、それぞれのスタイルでそれぞれの時代の歴史研究を素直に導くのが、読者にとっても最良であろうと判断した。

であるから、研究の視点とはいっても、三者三様であろうと思われるが、殷・西周時代の部分の筆者としての視点をまず述べさせていただくと、先秦時代の歴史研究の困難さというものは、これはだれしも痛感するところであろう。最初から意気のあがらない話で恐縮だが、正直なところ、なかでも殷・西周時代の部分については、はたして歴史研究というものが成り立つのかどうかと、疑問に思うことさえある。ひとつの要因は、史料の乏しさにあって、まず文献史料の量が格段に少なく、しかも史料の成立の時期が、かなり後の時代にかたよるものばかりである。同時代史料としての金石史料、すなわち甲骨文や金文などが、それを補ってはくれるものの、史料の性格上、この時代の歴史のどれほどの部分を反映しているものかは、たえず疑っていただければならない。しかしそれ以上に深刻なもうひとつの要因は、その同時代史料に取り組むについて、古文字学という大きな壁が存在することにある。李零 [1993] の自序の回想に、古文字学の世界に足を踏み入れようとする李に与えられた、ふたりの先輩の助言を紹介する。まず李学勤は、古文字は難しすぎる、六、七種類の外国語にも劣らない、この門に入りあらためて別の門に入ろうとしても、そのときはもう無理

なのだ、と言ったという。また林澧は、そもそも古文字を研究したのは歴史研究を志してのことだったが、ひとたび研究を始めてわかったことは、永遠に戻れなくなってしまったということだった、と自己の経験を語ったという。つまり古文字学とは、乗り越えられない大きな壁というより、いったん足を踏み入れたらもはやそこから出られない大きな森のようなものなのである。

古文字学とはいっても、単に古代の漢字をマスターするというだけであつたら、たやすいことではないにしても、引き返せない迷い道のようなものではないはずである。それがなぜそうなるのかというと、古文字学について関係する学問があまりに多方面にわたるからである。古文字学といっても、狭義のそれと広義のそれとがあり、狭義の古文字学は古文字そのものについての研究で、言語学の一つといえよう。そこですでに、文字学や音韻学の素養が必要となり、これだけでも、歴史学者にとってはかなり荷が重い。しかも古文字学というとき、狭義のそれをさすことはまれで、多くの場合、広義の古文字学のことである。広義の古文字学とは、古文字で書かれた資料についての研究がそこに加わる。資料の内容によって、ありとあらゆるものが関わってくるから、いったんそこへ足を踏み入れたら最後、つぎつぎと新しい学問が必要になってくるのである。もちろん個人の能力には限度があるから、どこかで妥協しなければならないのだが、それにしても、入ってきた入り口から無事に出ていくことができるのかというと、実際、林澧と同様の感慨をいっている古文字学者は多いのではなかろうか。

ただし、古文字学の森に迷い込んでくるのは、歴史学者ばかりではない。李零はもともとは思想史に興味を引かれていたのだそうである。日本を代表する古文字学者についてみても、島邦男は、中国哲学の研究から甲骨文字に関心を持ったのだし、白川静は、最初は文学から入ったのだといえよう。その森は、歴史学とも哲学とも文学とも通じているのである。さらに、そのような体系的な学問ばかりでなく、もっとこまごまとした学問や技術や事象へも通じているところがあって、脇道にそれることは、いともたやすい。古文字学者として、それらのすべてに対処することはとうてい不可能であるし、それが義務づけられているわけではない。ただ、それらのいくつかを究めることは必要になるし、またそれが必ずしも退屈な修練を要するものばかりではなく、そうこうするうちに、入ってきた道から帰っていく機会を、失ってしまうのである。

そうはいっても古文字学を敬遠して、殷・西周時代の歴史研究を行うことは、どうみても不可能である。殷・西周時代の歴史研究が成り立つのかどうか疑問に思うというのはそこにある。春秋・戦国時代はどうかというと、近年、状況が急変しつつある。もともと古文字学の森は、春秋・戦国時代にまで広がっていたのであろうが、あいつぐ楚簡の発見によって、戦国時代のところに大きな出入口があいてしまったのである。これからは、春秋・戦国時代の研究を志す者も、この森に思いきって足を踏み入れるかどうかの決断に、一度は迫られることになるだろう。この入り口は、開いて間

もないので、その先がどこへどうつながっているのか、だれにも詳しいことはわからないから、自己責任で飛び込むしかない。

ともかく先秦時代の歴史研究を志すならば、いったん歴史研究をあとにして、古文字学の森に飛び込んでみることは、それほど悪くない選択だといえる。飛び込んだあとで、歴史研究にもどることができるかどうかは、保証の限りでない。あくまで歴史研究への回帰の意志を持ち続けるべきなのかどうか、一概にはいえない。李零は、思想史への志を重んじて、李 [1993] を著したという。この書物を愛する者のひとりとして、初志を尊ばれることに、敬意を禁じ得ないが、しかし彼が思想史に強くこだわり続けて古文字学に足を踏み入れなかったとしたら、この書物が書かれたであろうか。一方で古文字学に没入しているかにみえるかた、たとえば李家浩が、つまらない学問をしているなどとは、だれも思わないのであって、ともかく、飛び込んだあとで、自分の興味のわくところ、能力の適するところを見極めて、どちらに向かうかを決めればよいのである。

(浅原達郎)

2 研究の展開と史資料の解説

〈1〉甲骨学と金文学（殷・西周時代）

少なくとも、殷・西周時代の歴史研究についていえば、どのみち飛び込まざるをえないところなのであるから、ここは開き直って、直接に古文字学の森の道案内をしてしまう方が、かえってすっきりするのではなからうか。そこで、この時代の古文字学すなわち甲骨学と金文学について、簡単に解説することにしたい。とはいっても分量の問題もあるので、森のすみずみまで紹介することはできない。それぞれの研究の急所に焦点をしばって述べることにする。

◆甲骨学の研究と史資料

甲骨学と金文学は、かなり対照的な性格を持っている。甲骨学はどちらかというところ、閉じた世界で、研究史的にも1899年の甲骨発見をさかのぼらない。若干の例外を除いて、殷代後期の資料であり、ほとんどが殷虚の小屯村付近から出土したと思われ、さらにその数分の一を、ひとつの穴から出土した一括遺物が占めている。

甲骨学の対象となる資料は、例外もあるが、殷代後期の占いにに関する記録、すなわち卜辞である。占いに使われた甲骨、すなわち亀（ほとんど淡水産の亀、まれに陸亀）の腹甲・背甲や、主として牛の左右の肩甲骨に、ナイフで刻まれている。どういうふうに刻んだのかは、ナイフの実物が確認されているわけではないので、よくはわからないが、実物について筆跡を詳しく調査した艾蘭 [1992] を参照されたい。このわずか12頁ほどの論文は、甲骨学においてこれまでに存在したいくつかの誤解を正すとともに、いくつかの新しい発見を提示している。

甲骨学は、この十数年のうちに、大きな転機をむかえた。ただし、それに賛同する人もあれば、賛同しない人もあって、転機をむかえつつあるといったほうが、いまだに正確なのかも知れない。この問題については、まず松丸道雄 [1988] を読むのがよいだろう。従来、貞人あるいは卜人と呼ばれる人物が卜辞の前辞に見えることを発見したのは、董作賓の功績であるが、同時に貞人のはたらきを大きく見積もり過ぎたきらいがある。松丸は、貞人が契刻者（卜辞の刻り手）でないこと、甲骨文の書体が契刻者の個人的なくせであることを強調し、その観点から卜辞を書体によってグループ分けしそれにもとづいて編年をやりなおす必要性を、説いたのである。ところが実は、書体による分類の作業は、そのころすでに中国においては完成されつつあった。まさに1988年、ともに1949年の生まれである北京大学の黄天樹と四川大学の彭裕商が、それぞれに提出した博士論文がそれである。

ふたりの博士論文はのちに黄天樹 [1991] および彭裕商 [1994] として公刊された。彼らの仕事はもちろん同一ではないが、同じ主旨のものであり、一致するところも多い。彼らの新説は、一般には断代研究の新説とみられていて、実際そうなのであるが、どこが新しいのかと言うと、書体による分類をすべての基本に置くというところであって、契刻者がだれかという視点を残念ながら欠いている点以外は、ほぼ松丸道雄 [1988] の主張に沿ったものである。もちろん彼らの理論的根拠を提供したのは松丸ではなくて、林漢ということになるのだろう。あとから振り返ってみると、林 [1984] が、書体による分類の優越性を明確に説いた最初の論文であって、いまや、新しい甲骨学を理解するうえで、必読の論文である。

旧説においては、貞人を基準として、さらに書体を含む種々の手がかりを運用して、卜辞を分類し編年するという、董作賓によって確立された手法にもとづく。その結果として、第一期から第五期までの分期が定説として認められてきたのである。ところが、新説は、そのような総合的な判断を行う前に、まず書体のみによって卜辞を分類するという作業が必要だという立場に立つ。書体による分類とはいっても、名前の上では、貞人を基準にしていた旧説のなごりをひきずって、賓組や出組といった貞人のグループ名が使われているが、注意すべきはあくまでそれは書体による分類なのであって、貞人に着目しているのではないということである。そして、その分類から出発した断代研究によれば、必ずしも五期の分期が最良のものではないのである。

書体による分類は、このように断代研究の基礎として重要なのであるが、それ以外の甲骨学研究も、書体による分類を念頭におきつつ行われなければならない。つまり、材料となる卜辞について、それが書体による分類においてどの類に属するかという点に意識のない研究は、不完全なものでしかない。というのは、書体による分類は、資料の編年に関係するばかりか、それ以外のいろいろな性質にも関係してくるのであって、たとえば卜辞のなかである現象がみられたとして、それが書体による分類のどの類にみられるのかということは、おろそかにできないことなのである。これからの甲骨学においてまず求められるのは、書体による分類をしっかりと自分のものにするこ

であろう。

と、言いたいところなのであるが、目下、甲骨学の論文で、書体による分類を注記して卜辞を引用しているものは、そう多くない。残念ながら、新説がまだまだ受け入れられていないことを示す。それはなぜかということになるのだが、結局のところ、黄天樹と彭裕商の説の検証が、両者以外の人物によって行われていない、行われていたとしても公表されていない、というところにあるだろう。ふたりの説の検証は、ふたりの説を互いに突き合わせてみるところから始まると思われるが、それさえもまだ行われていないのが現状である。ふたりとも、お互いの仕事にはあまり関心を示していないようで、お互いの説の異なるところについて、何も意見を公表していない、ということが、あるいは影響しているのかもしれない。ともかく、いま求められるのは、第三者が、ふたりの説の異同・得失について、きちんとした検証を行い、今後の研究の展望を示すことであろう。ここでは、とりあえず、ふたりの分類の対照表のみかかげることにする。見てのとおり、互いに微妙に名称が異なる。「賓組二類」が別の分類を指すなどというのは、なんとも頭の痛いかぎりだが、しかたがない。どちらの名称を用いているかを明確にしながらか議論しないと混乱を招きかねないから、注意を要する。また、歴組や無名組において、彭の分類がやけに細かいのには、何か原因があるのかもしれない。実は彭 [1994] は、いわば未完了のまま公刊されたものであって、歴組や無名組の部分は、李学勤・彭 [1996] になってはじめて世に問われた。あるいはそのとき、先行する黄の仕事を超えようとする意識が強くはたらいたのではないだろうか。歴組や無名組の彭の小分類について、黄はその後まったく発言していない。はたしてそこまで細かく分類することが適当かどうかは、第三者として冷静に見極める必要がある。

黄天樹		彭裕商
自組肥筆類	—————	自組大字類
自組小字A類	—————	自組小字一類
自組小字B類	—————	自組小字二類 (二A類)
	└──┬──	自組小字二類 (二B類)
𠄎類	—————	自組大字類付属 (大字二類)
自賓間A類	—————	賓組自賓間組
自賓間B類	—————	
賓組一類	—————	賓組一A類
賓組二類 (典賓類)	—————	賓組一B類
賓組𠄎類		
賓組賓出類 (賓組三類)	—————	賓組二類

出組賓出類 (出組一類)	—————	出組一類
出組二類	—————	出組二A類
	└──┬──	出組二B類
自歴間A類	—————	自組小字類付属 (自組小字三A類)
自歴間B類	—————	自組自歴間組 (自組小字三B類)
歴一類	—————	歴組一A類
	└──┬──	歴組一B類
歴二類	—————	歴組二A
	└──┬──	歴組二B類 (甲乙丙)
		歴組二C類
歴草体類		
賓組事何類		
何組事何類	—————	何組一類
何組一類	—————	何組二類
	└──┬──	何組三A類
何組二類	—————	何組三B類
歴無名間類	—————	歴無名間組
	└──┬──	歴無名間組晚期
無名類左支卜	—————	無名組一A類
	└──┬──	無名組一B類
		無名組一C類
無名類右支卜	—————	無名組二類
		無名組三類
無名黄間類	—————	無名黄間類一類
	└──┬──	無名黄間類二類
黄類	—————	黄組
午組	—————	午組
子組	—————	子組
子組円体類	—————	子組付属
婦女卜辞	—————	非王無名組

この新説に賛同するにしろしないにしろ、今後の甲骨学の進展を考えるうえで、この書体による分類が、研究の急所になっていることはまちがいない。これから甲骨学を志されるかたは、ぜひ、そのことを考慮しつつ、研究を始めてもらいたい。というのも、甲骨学において、書体の認識は、もともと基礎的な学力として必要だったが、旧説の五期区分の上でそれを修得しようとする、わけのわからなくなるところが生じる。五期区分と書体による分類とは本質的には別個のものなのに、一期と二期と同じ書体(賓出類)があったりすると、混乱してしまうのである。新説にもとづいて、書体による分類はあくまで書体による分類として認識し、その上で旧説の五期区分との関係をみた方が、ずっと明快である。その意味でも、この最初の一步を誤ってはならないのである。

◆金文学の研究と史資料

金文学の対象となるのは、金文すなわち青銅器に鑄込まれた銘文である。例外的に、鑄造後に刻された銘文もある。どういうふうに銘文を鑄込んだのかというのがすでに、多くの金文学者を悩ませている厄介な問題であって、現在のところ定説があるとはいえない。興味のあるかたは松丸道雄 [1984][1990]を参照されたい。

甲骨学に対して、金文学の世界は、ある程度の広がりをもっている。研究史としては宋代まではさかのぼらなければならないし、資料も殷代後期から秦漢時代まで存在する。ほとんどが王室関連の卜辞である甲骨資料に対して、作者の階層にはかなりの開きがあり、そこに焦点をあわせた研究もある。出土地も広範囲に及ぶので、地域差というようなものも考えねばならない。内容も多方面にわたるから、単純な方法論では対処できない。たとえば、書体による分類というようなことは、金文に対しては無効である。すると、金文学においては何が研究の進展をもたらすのかというと、それは新資料である。甲骨学においても、小屯南地甲骨が林漢 [1984]に手がかりを与えたように、新資料の発見が研究の進展を促すことはあったのだが、金文については、ある程度の波はあるものの、それがわりあいコンスタントに起こってきた、という印象がある。もちろん新資料自身が何かをしてくれるわけではなくて、それをもとにした研究が、新しい進展をもたらすのである。

古文字学の初歩の入門小冊子である李学勤 [1990 (原書 1985)]にも載っている顕著な例として、散氏盤にみえる「眉」の字が、実は「履」と読むべきだということが、1975年に出土した五祀衛鼎・九年衛鼎を手がかりとして、明らかになったというものがある。その時点ではまだ論文が公刊されていなかったのが、李 [1990 (原書 1985)]には明記されていないけれども、この説を提出したのは裘錫圭 [1991]で、1982年の執筆である。また、兮甲盤などにみえる従来「貯」と読まれてきた字が、実は「賈」である、という李 [1984a]の説は、当初は何かの新資料に啓発されたというものではなかったが、この字が五祀衛鼎で重要な役割をもっていたり、「賈子」を作者とする青銅器が出土したりしたことから、大きな反響を呼び、現在もお議論が続いている(最新のものは彭裕商 [2003])。これらの文字は、土地制度に関する金

文史料の解釈の鍵となる文字である。もはや、のんびりと旧説によって、「眉」または「貯」と解釈してすまずことは、許されないのである。

そういうことから、金文学においては、資料集や目録や索引については、どこまでの新資料が収録されているかを、念頭におきつつ利用することになるし、研究論文に関しては、どこまでの新資料と、さらにそれをもとにした研究とが、参照されているかが、重要になってくる。

さかのぼってみるに、1970年代は、新資料の豊作の十年であった。文化大革命の収束という政治的な要因も考えねばならないのであろう。主なものを列挙すると(いづれも陝西省)、

臨潼県零口出土の利簋

扶風県庄白出土の或諸器

岐山県董家村窖藏出土の裘衛諸器

扶風県強家村窖藏出土の師執鼎等諸器

扶風県庄白窖藏出土の微氏家族諸器

扶風県齊村出土の獸簋

があり、さらに、何尊や班簋の銘文の発見も重要であった。以上は西周時代であるが、春秋戦国時代の金文についても、

陝西省宝鶏県太公廟村出土の秦公鐘

湖北省隨県擂鼓墩1号墓出土の曾侯乙編鐘

河北省平山県中山王墓出土の諸器

といった、大きな発見があった。

これを受けて、1980年代には、多くの資料集や目録、また研究論文が発表された。資料集としては、中国社会科学院考古研究所 [1984-90]、上海博物館商周青銅器銘文選編写組 [1986-90]がある。前者は金文史料を網羅的に集めていて、とくに青銅器の所蔵状況についていねいな調査がされているところには、注目されたい。後者には、史料価値の高い金文が集められ、美しい拓本と、銘文の穏当な釈読とが、有益であるが、ただ、史料の各王世への配当はあくまでひとつの仮説と思ったほうがよい。また、目録としては孫稚離 [1981]がある。研究論文については、いちいちあげきれないが、古文字学の論文集として1979年に第1輯が発刊された『古文字研究』は、第18輯までが1980年代に刊行されている。金文学のみならず、甲骨学などを含めて、古文字学の多くの論文がここで発表されるとともに、新しい古文字学者の育つ場ともなった。

ところが、1980年代から90年代のはじめにかけては、新資料の発見が下火となる。『古文字研究』の刊行のペースも、1990年代になって急におとろえた。だからつまり、金文学については、この1970年代の新資料と1980年代の研究とを、押さえておくことが、まずは重要である。さきほどあげた「眉」「履」や「貯」「賈」の例は、まさにそれにあたる。また、資料集などを使うときも、1970年代の新資料と1980年代の研

究に対応しているかどうかを知っておく必要がある。たとえば、日本語で書かれた最良の金文資料集である白川静 [1964-84] は、1978年以降に出された「補綴編」でかろうじて新資料の主なものをカバーしているが、当然ながら1980年代の新研究には対応していない。金文の字書としてもっとも有用な周法高編 [1974-77] は、1970年代の新資料に対応しておらず、周編 [1982] を参照しなければならない。ただし当然ながら、1980年代の新研究は収録していない。残念なことに、1980年代以後の新研究を通観できる書物はないのが現状である。

それに加えて、1990年代から、ふたたび金文史料に新しい発見の波が寄せてきているけいはがある。従来、西周時代の金文といえば、陝西省の西周畿内の地から発見されるものが多く、外蕃諸侯の領域から出土するものは、それほど多くなかったし、重要なものはめずらしかった。ところが、そのような常識を打ち破る発見があった。それは山西省の晋国の領域での新発見で、曲沃・翼城県境の天馬-曲村の晋侯墓地の副葬品は、西周時代の諸侯の墓からの出土というだけでも、その価値ははかりがたい。なかでも8号墓出土とみなされる晋侯蘇鐘は、銘文の内容はいうをまたず、単にそれが刻銘であるというようなことだけでも既に貴重な資料なのである。このほか小国であるが、河南省平頂山市から応国の墓地が発見され、青銅器も出土している。また甘肅省の礼県大堡子山からは、「秦公」の銘文をもつ青銅器が出土しており、初期の秦侯墓ではないかといわれている。今後、西周時代の諸侯の金文にも、史料価値の高いものが発見されることがあるのではないかと、期待を抱かせるものである。

残念なことに出土状況はわからないのだが、古物市場から回収される青銅器にも、貴重な史料が含まれるようになってきている。資金の潤沢な美術館などに、それはおさめられて、ともかくも史料として使える状態にはなっている。保利芸術博物館の戎生鐘や楚公盃はその例である。この種の「新発見」にも、今後留意が必要である。晋侯蘇鐘や礼県大堡子山の秦公諸器のいくつかも、いったんこのルートを通して、「再発見」されたものである。

陝西省からは、しばらく大発見はありえないのかと思ったら、2003年になって、眉県の楊家村から、大きな青銅器窖蔵が発見された。史料価値からいっても、1970年代の董家村等の窖蔵に匹敵する。研究が進むのはまだこれからであろうが、ともかくまだ地下に眠っている史料の多いことを、再認識すべきであろう。

中国社会科学院考古研究所 [1984-90] などの、1980年代に出された資料集には、当然これらの新資料は採録されていないことに、注意しなければならない。もちろんこれからのち発見される新資料にも、目を光らせていなければならない。それと同時に、これらの新資料を用いた新しい研究の流れに留意しておかないと、大きな見落としを招くかもしれない。1992年の第18・19輯を最後にしばらく刊行されていなかった『古文字研究』も、2000年の第20輯から2002年の第24輯まで、急に刊行のペースを上げている。これは、必ずしも金文学だけの情況変化を示しているのではないが、金文学についても新しい波が生まれる要素は、揃ってきている。なかでも、すこし前

までは思いもよらなかった波のひとつは、戦国時代の竹簡資料によって、それ以前の金文資料解読の手がかりが得られるという動きである。この方面での代表的な研究者は、若い陳劍である。これからは戦国文字に明るい研究者の仕事には格別の注意を払わなければならないし、戦国文字そのものについても、無知でいることは許されなくなってきた。

さらに、金文学にはもうひとつの特徴として、青銅器自体についてもかなりの理解が要求されるということがある。その理由の大きなものとしては、林巳奈夫 [1984] によって、金文学からは独立した青銅器研究というものが確立され、とくに金文の編年について、もっとも頼るべき基準として、青銅器そのものの編年がわかっていなくてはならない、ということがある。またその理由の小さなものとして、金文については、偽物の排除というのが深刻な課題で、そのためには青銅器自体のことがわかっていないと話にならない、ということがある。この問題については松丸道雄 [1977] をまず読むべきである。ただ、青銅器自体の研究においても、林 [1984] 後の新資料の検討は欠かすことができないし、また、青銅器研究も金文をまったく読まずに成り立つものではないから、金文学の新しい動きに無関係ではいられないはずである。

要するに、金文学については、研究の急所は、この新資料とそれに依拠した研究とに、どれほど離れずについていけるかということにある。もちろん、過去の研究や資料集が無意味だというのではなく、それがどこまでの資料あるいは研究に目を配ったものであるかを知って、はじめて現在におけるその研究の意義というものが生じるのである。たとえば白川静 [1964-84] は、現在にあってもたいへん優れたものであるが、いかに優れたものであっても、その後に見れた資料や研究というものを無視できるほど、金文学というものには、確乎たる方法論が打ち立てられていない、ということなのであろう。過去の優れた研究をいまに生かす唯一の方法は、それを利用するわれわれが、そのうえにその後の資料や研究を重ねてみて、過去の研究のまことに優れたところを検証してみることである。

(浅原達郎)

〈2〉春秋時代

戦後日本における中国古代史研究は、殷周史と秦漢史に大きく二分されてきた。春秋時代は殷周・秦漢二つの時代の間中に位置する。従って、春秋時代の研究は、殷・西周との連続面において春秋時代を理解しようとする殷周史の側からの研究と、秦漢古代帝国の形成過程の冒頭に春秋時代を位置付ける秦漢史の側からの研究に二分される。

殷周史の側からなされた春秋史研究の代表としては、貝塚茂樹の [1976a] などの一連の著作がある。貝塚は、春秋時代以前の国家を「都市国家」と呼称し、甲骨・金文や『左伝』（『春秋左氏伝』）などの文献を駆使することで、「都市国家」の具体像をかなりの程度に解明した。

これに対し、秦漢史の側から、秦漢古代帝国、専制国家の起源として春秋期を理解しようとする立場において、いくつかの重要な問題提起を行ったのが増淵龍夫 [1970][1996] である。秦漢史の側における春秋期の基本的なイメージを確立したものであり、今なお示唆的だが、春秋期の「氏族制」ないしは「共同体」的要素を強調する増淵の議論は、秦漢帝国の基層社会を奴隷制の完成形態とするエンゲルスの国家論に規定されたものであったといわざるを得ない。榎山明 [1994] は、春秋時代の「氏族制」解体を媒介として秦漢専制国家の形成を論ずる増淵説再検討の必要性を説く。

◆中原の政治史

春秋史全体の概括的な記述としては、江村治樹 [1994]、吉本道雅 [2005] などもあるが、初学者におかれては、上掲の貝塚茂樹・増淵龍夫の著作で春秋時代のおよそのイメージを把握し、『左伝』を通読された上で、個別研究に進まれるがよからう。

春秋時代の政治史が展開する舞台を歴史地理的に把握するには、伊藤道治 [1968] が有益である。

春秋時代の政治史は、大きく四期に区分されよう。春秋時代は、周王朝が東遷した前 770 年に始まるが、春秋時代を編年的に記述した『左伝』の年代記的記述が始まるのは、前 722 年である。従って、前 770～前 723 年の半世紀については、『左伝』以外の断片的な材料から、その推移を復元しなければならない。そのような資料的条件に鑑み、この時期を、①「東遷期」と称しう。春秋時代の中原の政治史を特徴付けるのが、覇者の存在だが、相原俊二の [1975] などの諸論文が指摘するように、いわゆる「五覇」は五行説により整序された戦国期の観念であるに過ぎない。現実の覇権は、齊桓公・晋文公・楚荘王・呉王闔廬・越王句踐の「五覇」に継起的に移動したのではなく、前 632～前 506 年の約 120 年にわたって、晋が一貫して中原の覇者でありつづけた。この点に注目し、晋の覇権の成立以前の前 722～前 633 年を、②「春秋前期」、晋の覇権の存在した前 632～前 506 年を、③「春秋中期」、晋の覇権解体後の前 505 年から『左伝』の年代記的記述が終わる前 468 年を経て、趙・韓・魏三氏が知伯を滅ぼして晋国の実権を掌握した前 453 年までを、④「春秋後期」と称しう。①～④の時期の中原の政治史については吉本道雅 [1990a][1990b][1993][1998a] に通史的記述がある。また、東遷期・春秋初期については、上原淳道 [1993] 所収の鄭・虢関係の諸論文がなお示唆的である。

◆国家と社会

春秋時代の出土文字資料では、「晋邦」「楚邦」など、諸侯国の全領域は「邦」と称される。「邦」は、「国」と称される国君（諸侯）の都城と、その他の邑を含む。吉本道雅 [2003] が指摘するように、「国」（或）は西周金文では、「東或」「南或」など、周王朝の軍事的支配権の及ぶ広い領域を指すが、西周後期の『詩経』には、個々の諸侯国の軍事的支配圏を指す「邦国」の語彙が出現し、春秋期には、諸侯の都城そのものを「国」と称するようになっていく。とりわけ、西周後期から東遷期の政治的混乱

の過程で、諸侯国では都城が強化され、領域内の兵役負担者を都城に集住させることによって春秋的な「国」が成立したのである。春秋時代の都城については、杉本憲司 [1986] のほか、五井直弘 [2002]（第一部）、佐原康夫 [2002]（第一部第一章）、谷口満 [1988] がある。

「国」に居住し、いわば身分的特権として兵役を負担するものが「国人」である。「国人」の政治的力量はおそらく戦国中期までは維持されたが、その一方で、「国」以外の邑から兵員を徴発することが、前 6 世紀後半から本格化し、「国」の軍事上の特権的地位は喪失された。「国」は都城ではなく、都城である「国」によって支配される全領域を指すようになり、「邦」と混用されるようになる。このように、春秋期の「国」は特殊春秋的な歴史的存在であるといえる。

春秋時代の国家権力は、祭祀と軍事において発動された。春秋以前にあっては、「天」「上帝」は祭祀を超越した最高神格であり、国君の祖先神を介してようやくはたらきかける存在であった。従って国君は、軍事的指導者であると同時に、「国」の最高の祭司でもあった。斎藤（安倍）道子の [1991] などの諸論文や水野卓 [2002] は、春秋時代の国君や、国君の居住する「国」、あるいは国君による支配の聖性を解明し、江村知朗 [2002] は各国の始祖に対する言及を手がかりに春秋時代の外交を考察する。高木智見 [1990] は春秋時代の「神・人共同体」を論じ、池澤優 [2002]（第二章）は西周～春秋の祖先崇拝を分析し、小林伸二の [1989a] などの諸論文は、滅国・遷徙・侵伐・取国・会盟地・卒葬・取邑を手がかりに春秋時代の政治社会的構造を考察する。国君の婚姻については、江頭廣 [1970]、斎藤（安倍） [1992] があり、花房卓爾 [2000] は出奔と通婚の関係に言及する。西周期王侯の婚姻規制が、春秋期にはすでに解体に向かっていることは、吉本道雅 [2000a] が指摘する。同論文は、春秋期の公位継承がなお兄弟相続に従うものとする宇都木章 [1965] に対し、父子相続が殷末以来すでに基調となっていたこと、兄弟相続は相続規範ではなく政治的混乱にともなうものであることをも論ずる。春秋期の社会習俗については、江頭 [1987] [1992] や高木の [1985] などの諸論文がある。

『春秋』『左伝』において国君は公侯伯子男の「爵」を称するが、これらは『孟子』に見えるような一連の「五等爵」ではなかった。吉本道雅 [1994] は西周～春秋における「爵」の多様な実態を解明する。

『左伝』には国君以下、卿・大夫・士・庶人・工商およびその他の隷属民といった諸身分が見える。これら諸身分の存在は春秋金文の記述により傍証を得る。卿や大夫上層の身分を世襲的に独占し、「国」の支配層を構成したのが世族である。世族の動向を中心とした中原諸国の国別史としては、後藤均平 [1957]、山田統 [1981]、宇都木章の [1969] などの諸論文、太田幸男 [1969]、相原俊二 [1969]、佐藤三千夫 [1989][1992]、小林伸二 [2002] などがある。晋の世族は三軍の将佐をつとめたが、佐藤 [1973][1982]、花房卓爾 [1978][1979] は晋の軍制を考察する。これら各諸侯国ごとの研究に対し、吉本道雅 [1995a] は、中原全体の政治史的推移に世族を位置

付け、晋の「覇者体制」と各諸侯国における「世族支配体制」を春秋期に規定的な政治社会秩序とする。なお松井嘉徳 [1992][2002] (第IV部第二章) は西周史との連続面において周・鄭の世族を論ずる。世族以下は、官職を保有することがあったが、春秋時代の官職については、江頭廣 [1977] がある。世族宗主はその家臣から「主」と称されることがあったが、「主」の総合的考察としては小野沢精一 [1982] (二・附篇一) がある。世族の家産たる「室」については、松本光雄 [1956]、小野沢 [1982] (二・附篇二) があり、谷田孝之 [1989] は、国君・世族の家族形態につき論ずる。

「国人」は身分的には、大夫下層・士に重なる。「士」については、河地重造 [1959]、松木民雄 [1981]、「国人」については、吉本道雅 [1986] がある。『国語』齊語・『管子』小匡に見える「参国伍鄙」の制を春秋齐国の実態とする岡崎文夫 [1950] が今なお引用されることがあるが、これらは戦国後期の国制プランを管仲に仮託したものに過ぎない。

邑の支配については、松本光雄 [1952][1953] があるが、具体的なことはほとんどわかっていない。

春秋・戦国時代には鉄製農具と牛耕の普及による生産力の上昇により、氏族共同体が解体し、小農民が析出されたとされる。渡辺信一郎 [1986] (第一章) は、この推移を労働過程の面から説明する。増淵龍夫 [1996] (第三篇第三章) は『左伝』宣公14年(前595)の「初めて畝に税す」を私的土地所有に対応した税制の変化と評価するが、一般にあって、小農民析出過程を編年的に確認することは困難である。また谷口義介 [1988] (第九章) は、春秋時代の籍田儀礼と「助法」につき論ずる。

「商」については、松木民雄 [1990][1991]、隷属民については、宇都木章 [1979] がある。

◆辺境の王権

春秋時代の中原の諸侯は、西周初年の「封建」によって成立したもののだが、中国の辺境には、春秋時代までに、西方の秦、南方の楚、東南の呉・越、東方の邾・莒などが自立した。これらのうち、『左伝』における記述が最も充実していることを反映して、楚を対象とする研究に多くの蓄積がある。

楚の建国については、谷口満 [1975] が、若敖より以前を「説話」とする見解を提示したが、これに対し、吉本道雅 [1997] は、『史記』楚世家の系譜を批判的に検討することによって、西周中期における楚の建国を推定する。

春秋期の楚の政治史については、野間文史 [1972]、斎藤(安倍)道子の [1979] などの諸論文、谷口満の [1981] などの諸論文などがあるが、中原との比較という観点から、問題が楚に踰越され、楚史研究が春秋史の総合的理解に展開していかないという憾みがあった。吉本道雅 [1995b] はそのような批判的見地から、中原との対比において、春秋楚史の包括的理解を図る。

楚の世族に関連するものとしては、山田崇仁 [1997] がある。

晋の中原の同盟に対抗して、楚は南方に勢力圏を構築した。楚の覇権については、

山田崇仁 [1998]、楚に従属した諸国については、茂沢方尚 [1982]、宇都木章 [1985]、小林伸二 [1989b]、谷口義介 [1990] がある。

楚に関わる重要な研究課題として、かつて増淵龍夫 [1996] (第三篇第二章) が提起した「県」の問題がある。春秋楚県については、平勢隆郎 [1998] (第二章第一節)、斎藤(安倍)道子の [1984] などの諸論文、谷口満 [1987] などがある。春秋晋県については、五井直弘 [2002] (第二部第一・二章)、平勢 [1998] (第二章第二節) があり、のちに晋県となったと思われる樊邑の西周～春秋における推移については、谷口義介 [1996] がある。春秋県研究には、このように一定の蓄積があるものの、何より問題になるのは、県でない邑のありかたがほとんど研究されていないこと、さらに、県に限らないが、戦国前・中期の資料の欠如から、春秋県から秦漢的県への推移を明らかにしえないことである。さらに、松井嘉徳 [2002] (第IV部第一章) は、西周の「遷」の春秋「県」との連続性を確認するなど、従来の春秋県研究のありかた自体に再考を促す。

都城をはじめとする楚の歴史地理的研究としては、谷口満の [1978] などの諸論文がある。

呉・越については、後藤均平 [1967]、手塚隆義 [1961]、田上泰昭 [1981]、江村治樹 [1995]、吉本道雅 [2000b] がある。

秦については、『史記』の戦国期の記述が秦に偏していること、秦漢帝国形成の直接の起点として商君变法研究に蓄積があること、さらに1970年代以降、睡虎地秦簡をはじめとする出土文字資料が獲得されたことによって、戦国中期以降を対象とする研究は盛んである。しかしながら、商君变法以前の秦史については、専論がほとんどない。吉本道雅 [1998b] は、秦の建国など『史記』秦本紀の記述が、前325年の秦恵文王の称王の際に大幅に改竄されたことを論じ、吉本 [1995c] は、東遷期から戦国中期に至る秦史の推移を、中原との比較のもとに概観する。

戎狄については、後藤均平 [1960]、田中柚美子 [1974][1975]、渡辺英幸の [2000] などの諸論文、東夷系の諸国については上原淳道 [1993] の萊に関する論文のほか、宇都木章 [1983][1984] がある。

◆法 制

春秋期の国家は暴力装置の独占をなお達成しておらず、「条件付刑罰の予告」を強制力とする「法」は未発達であったが、その一方で祭祀的権威が有効であったことから、「条件付呪詛」を強制力とする「盟」が覇者と諸侯国、国君と世族・国人など多様な局面において取り結ばれた。滋賀秀三 [1976] は「法」以前の秩序原理を概論する。

盟に際しては、「載書」が作成されたが、1970年代以降、山西省侯馬や河南省温県で、春秋後期の載書が出土した。江村治樹 [2000] (第三部第三章) は侯馬載書に関する包括的な概論、高木智見 [1985] は社会的習俗としての「盟」を論じ、吉本道雅 [1985a] は『左伝』所見の載書の文言との比較によって侯馬載書の歴史的位

する。江村 [2001] は盟の参加者を分析することで春秋期の地域的差異の解明を図る。平勢隆郎 [1988] は侯馬載書の索引、同 [1998] (第三章・第四章) は侯馬載書に関わる専論、吉本道雅 [1985b] は侯馬・温県載書を包括的に分析する。

舩山明 [1980] は、春秋時代には戦時に限定されていた厳格な秩序原理が、社会の軍事的再編成によって平時の社会に拡大されたものが戦国期の法秩序であるとし、舩山 [1988] は、『左伝』を素材に春秋時代の訴訟を論ずる。成文法の成立とされる「刑鼎」の公開については、久富木成大 [1986] がある。滋賀秀三 [1989]、高木智見 [1993] は、『左伝』の法制資料としての性格を論ずる。なお張家山漢簡『奏讞書』には衛の史鰌・魯の柳下恵の登場する二章があり、池田雄一 [1996] は春秋期の実態を記録したものとすが、戦国後期の法家の説話とみなすべきものであろう。

◆考古資料・出土文字資料

春秋時代の考古学的概観としては、飯島武次 [1998]、小澤正人他 [1999]、江村治樹 [2000] がある。

春秋金文を概観するには、白川静 [1973][1980] がなお便利である。金文を資料として利用するには、それが記された青銅器の断代に基づく確実な年代観を獲得する必要がある。林巴奈夫 [1984][1989] は殷～戦国青銅器の最も確実な年代観を提供する。江村治樹 [2000] (第一部・第三部第一章) は、春秋時代の青銅器に関わる包括的な研究である。

石鼓文については、その年代になお定論がないが、秦史の重要史料には違いない。赤塚忠 [1989] は秦穆公 (前 659～前 651) の制作とするが、近年、秦景公 (前 576～前 537) の墓から出土した編磬銘との類似が指摘されている。なお秦の考古学的遺物全般については、岡村秀典 [1985] がある。

◆文 献

『詩経』の国風や魯頌・商頌は春秋時代の詩篇を集めたものと思われる。編年的でないため、歴史学の資料としては十分には活用されていないが、社会史資料としての利用可能性がある。白川静 [1981] を参照。

『論語』が今日のかたちに確定したのは前漢末期のことだが、『左伝』よりは明らかに古い言語で書かれており、春秋後期の同時代資料に準ずるものとして使用することが可能である。『論語』および孔子については、貝塚茂樹 [1976b]、木村英一 [1971]、白川静 [1972]、渡辺卓 [1973] (第一部)、浅野裕一 [1997] などがある。『論語』の邦訳は枚挙にいとまがないが、貝塚 [1973] の殷周史研究の成果を踏まえた解釈は示唆に富む。また、『論語』の春秋史資料については小野沢精一 [1982] (三) がある。

『左伝』の年代記的記述が開始される以前、前 770～前 723 年の「東遷期」については、『史記』の記述が最も充実している。『史記』の資料的性格については、吉本道雅 [1987][1996] を参照。『史記』の春秋時代に対する記述については、吉本 [1988] がある。なお、平勢隆郎 [1995] は、『史記』の先秦紀年の全面的錯誤を主張するが、

これについては吉本 [1998c] の批判をまずは読みたい。

先秦時代の王侯・世族の系譜を記した『世本』については山田崇仁 [2001] がある。

『春秋』(『春秋経』) は魯の年代記の形式を採る文献で、今日では『左伝』『公羊伝』『穀梁伝』の春秋三伝にそれぞれ組み込まれたかたちで伝えられている。前 722 年に始まり、『左伝』の経は前 479 年、『公羊伝』『穀梁伝』の経は前 481 年で終わる。『春秋』が孔子の孫の子思のころ、前 5 世紀末にはすでに儒家の經典とされていたことは、吉本道雅 [1995a] を参照。『春秋』については漢代以降の「春秋学」に関わる研究が一般的だが、山田崇仁 [2004] は、『春秋』の同時代的記録としての側面を検討する。

『左伝』は『春秋』の注釈書の形式をもつ年代記であり、春秋史研究の最も基本的な文献である。前漢末期の王莽篡奪前夜に博士官が置かれて経書としての地位を獲得したが、そのため、康有為『新学偽経考』によって、劉歆が王莽篡奪を正当化するために偽作したものと主張された。このあたりの経緯は、鎌田正 [1963] に詳しい。『史記』は『左伝』を孔子の同時代人である魯の左丘明の著作とするが、顧炎武など清代の学者たちは、『左伝』に戦国時代の事件が予言のかたちで見えることから、戦国時代の成立とした。スウェーデンの歴史言語学者カールグレンは、『左伝』の使用言語が、『論語』などの「魯語」や、「前 3 世紀の標準文語」とは異なることを確認して前 4 世紀の成立を主張し、新城新藏は、『左伝』の歳星記事が前 365 年頃の観測に基づくことを確認した。これらの議論を踏まえつつ、吉本道雅 [2002] は、『左伝』に言及される戦国時代の事件の年代を確定し、劉向『別録』が『左伝』の伝承に関わるとする呉起・呉期父子が楚において編纂したことを推定した。今日の中国古代史研究では、これら戦国中期成立説が基本的に受容されている。なお、平勢隆郎 [1998] (第一章) は、『左伝』についての独自の議論だが、初学者におかれては、浅野裕一 [2001] の批判をあらかじめ読まれるがよからう。

『左伝』が戦国中期に編纂されたものであるとすると、その記述の全てを春秋時代の同時代的記録とみなすことはできなくなる。吉本道雅 [1992][1995d] が指摘するように、『論語』や『礼記』の比較的早い時期に成立した諸篇を引用した部分が確かに認められる。『左伝』の後代性につき正面から取り組んだのが、小倉芳彦 [2003a] である。小倉は、『左伝』の記述を、①春秋時代の事件を比較的忠実に伝えている実録的部分、②説話の中で展開されている演説調の部分、③段落の末尾に附加された人物評や、『春秋』の書法を説明した部分、の三層に分ち、『左伝』の原資料の重層性を論じた。小倉には、『左伝』の邦訳 [1988-89] があり、さらに [2003b] は小倉個人の研究史を綴ったものだが、初学者には強く勧めたい。

『左伝』が戦国中期以降の材料をも含む以上、上掲の春秋時代を対象とした論著のうち、小倉の②③の部分为主要な材料とし、「思想」を問題にする研究が解明したものは、実のところ、春秋そのものではなく、春秋から戦国中期までの重層的な事象である可能性を孕むことになる。とはいえ、『左伝』は『論語』や『礼記』の古い諸篇を除けば、春秋時代に最も近く年代付けられ、従って②③の部分にしても、春秋時

代に対する最古の注釈となるのであり、さらに、使用言語の点から、『孟子』や「前3世紀の標準文語」を用いる諸子百家の文献より古いことは確実である。とくに「思想」を問題とする場合は、『左伝』と諸子百家などを比較分析することで、春秋・戦国のより長期的な時間の推移に位置付けるといった方法が有効であろう。小野沢精一 [1982] (二) は「春秋説話の思想的考察」である。なお、『左伝』など経書を読む場合には、やはり伝統的な注疏を参照する必要がある。『左伝』の注釈学については、野間文史 [1989] が読みやすい。

『左伝』に関連するものとして、『国語』があるが、吉本道雅 [1989] が指摘するように、その成書はおおむね戦国後期に降り、『左伝』の記述を踏まえつつ、言論の部分をふくらませたものである。『国語』に類似した説話集として、馬王堆漢墓から『春秋事語』が出土している。吉本 [1990c] を参照。ちなみに、近年、郭店楚簡・上海博楚簡など戦国時代の出土文献が大量に紹介されるようになった。上海博楚簡には『左伝』が含まれるとのことである。本項の所見もほどなく大幅な修正を迫られるかもしれない。(吉本道雅)

〈3〉 戦国時代

◆ 秦漢帝国形成論

日本における戦国史研究は、その後の中国の歴史を大きく規定した秦漢帝国の形成期としてきわめて重視されてきた。秦漢帝国の形成に関する問題は、戦後日本の古代史研究の中心課題であり続けており、他の時代の研究に与えた影響も大きなものがある。この形成期の問題は、当然秦漢史研究に直接関わり、秦漢史研究者は多くの労力をこの問題に割いてきた。この課題は秦漢史の分野と多く重なるが、その歴史的重要性と研究の厚さを考え、あえて重複をいとわず動向を紹介する。

秦漢帝国形成に関する研究の出発点は西嶋定生 [1949] にある。西嶋は、この論文において、漢の高祖集団を、春秋時代以後形成されてくる家父長的家内奴隷制的豪族集団と規定した。続いて西嶋 [1950] では、この考えをより構造的に整理して提示した。すなわち、周代の氏族的共同体は春秋戦国期に次第に崩壊していくが、生産力の不均等発展によって、社会には家父長的家内奴隷制的豪族が形成される一方、共同体的な遺制も残存する。そして、戦国から秦漢の国家権力は、このような前者が後者を経済的に支配するところに成立するとする。西嶋がここで示した論点は、以後の秦漢帝国形成論において問題となる論点をほとんど網羅していると言ってよい。

ところが、この西嶋定生の集団理解に対して、増淵龍夫 [1951] は根本に関わる批判を行った。増淵は、春秋戦国期に新しく形成されてくる集団を、家内奴隷制という普遍的概念で一義的に捉える前に人間関係の内面を具体的に検討すべきだとし、氏族制秩序の崩壊後に普遍的に形成される民間秩序として任俠的人的結合に注目した。しかし、このような民間集団のあり方は、一方的な支配体系である秦漢帝国とは明らか

に矛盾する。そこで、増淵 [1955a] で人的結合関係の内面に一方的支配の存在を強調するとともに、増淵 [1955b] では人的結合関係と集権的国家組織としての官僚制の連続性を論証しようとした。また、増淵 [1957][1958] などでは、民間集団や古い勢力の上にかんじて巨大な専制国家が成立してくるかを、経済的基盤や県などの組織から解明しようとした。

一方、木村正雄 [1958][2003] は、専制国家の形成の問題を農地のあり方から解明しようとしたものである。木村は、個別の県の分析を通して、古くから開発された独立性の高い第一次農地を基礎とする旧県の分布する地域と、戦国時代になって開発された中央依存性の強い第二次農地を基礎とする新県が分布する地域があることを明らかにした。すなわち、第二次農地は大規模水利灌漑を必要とする黄河下流域に主として分布し、古代帝国はこの地域を開発して新県を置くことによって齊民支配の基礎としたとする。しかし、このような支配は黄河中流域の独立性の高い旧県の父老的大土地所有とは矛盾するものと考えている。ただし、ここでの木村の主たる関心は古代専制国家形成の基礎の問題にあり、地域的統合体としての国家自体のあり方を問題とするには至っていない。

1960年代に入ると新しい展開が起こる。まず、西嶋定生 [1961] は改めて増淵龍夫の考え方を批判した。西嶋は、国家の問題は、増淵が重視している君主と官僚との関係にあるのではなく、君主と人民との関係にあると考え、二十等爵制を詳細に検討した。すなわち、氏族制崩壊にともなう古い里秩序の喪失が起こり個別化された人民が析出するが、伝統的な齒位(年齢)による階級制を合わせ持つ爵制によって、これら人民に対する支配を実現したのが皇帝支配であるとした。西嶋の考えは、支配の正当性をも視野に入れた、きわめて隙のない構造論と見られたが、増淵 [1962] はすぐさま反論した。西嶋が、皇帝支配の成立に古い里秩序の喪失を前提としたことを「動きのとれない構造論」とし、結果的に歴史の内在的發展を否定する「東洋的専制主義」の捉え方と異ならないと見なした。そして、増淵自身は、氏族制崩壊後には民間には自然に土豪、豪族の自律秩序が形成されると考え、漢の武帝の孝廉察舉以後はこのような自律秩序が国家権力との接続を果たすと見なした。しかし、武帝以前においては国家と自律的秩序とはそれぞれ別個に独立した存在にとらえ、利用あるいは共同の関係にあると考えており理論的統一はなされていない。この考え方は増淵 [1970] でも変わっていないが、在地の社会集団は支配を支えるとともに抵抗の可能性も内包したとし、その関連性をより明確にしている。

宇都宮清吉 [1963] も、増淵龍夫と同様に国家権力と民間の社会集団をやはり別個に対置する見方である。だが宇都宮は、両者を氏族制的宗法秩序解体後に新たに出現する人間把握の二つの型にとらえ、より理念的に把握しようとしている。すなわち、墨家に体现される一方的支配従属関係としての「首領制」と、儒家に体现される自然な家族関係にもとづく「家族制」という二つの人間関係の原理が出現すると考えた。そして、この両者は、戦国、秦漢時代の個人、家族、国家において矛盾的に相互媒介

されながら統一を形成していたと見なした。しかし、ここではその統一の具体的原理は明らかにされていない。

1960年代初めまでの秦漢帝国形成論には二つの立場が存在した。西嶋定生や木村正雄、初期の増淵龍夫のように、強力な専制権力がいかにして形成されたかを主要な問題関心とする立場と、後の増淵や宇都宮清吉のように、専制権力に対して自律的な民間の社会集団を対置し、両者の関係の中で秦漢帝国の形成を考えようとする立場である。この立場の相違は、具体的な社会集団に対する認識の相違とともに、支配の概念そのものに対する考え方の相違から来ていると考えられる。1960年代後半以後は後者の考え方が主流となり、秦漢史研究者による両者の関係の統一的把握の試みが続けられる。好並隆司 [1971] は、前漢の武帝までの皇帝権力の二重性を制度的に検討し、「斉民制」と「家産制」という二種の支配体系が矛盾的に並存しているとし、秦漢帝国二重構造論を提示した。一方、尾形勇 [1979] は、漢代の官僚は私的な家の世界から「出身」することによって公的な国家における個人身身的な君臣関係に入るとし、漢帝国における国家と家という相対立する要素の相互関連性の究明を目指した。

◆地域的研究の進展

その後は新しい理論的展開は見られず、戦国秦漢史研究者たちはしだいに個別の実証的研究に傾斜して行く。1970年代から顕著となる地域性を考慮した研究は、このような傾向の中での全体を把握しなおすための一つの摸索と考えられる。それ以前にも、地域的な視点は上記の西嶋定生、増淵龍夫、木村正雄などにも見られる。ただし、それは旧県や新県というように県単位のもので、その分布傾向は注目されてはいるが、戦国国家の個別のあり方の差異は問題とされていない。

新しい地域的研究が課題としたのは、秦が天下統一に成功した理由を、秦と東方六国という国家ごとの具体的対比のもとに解明することであった。まず太田幸男 [1969][1975] は、戦国の田齊は家父長的支配の進展により国家の自己崩壊へと向かったのに対して、秦は商鞅の変法により家父長権力の発展を抑えて中央集権体制を確立することに成功したとする。すなわち、後れた秦がより進んだ東方六国を支配することになったのであり、これがアジア的専制権力としての秦漢帝国の本質であった。また、古賀登 [1976] は、魏の李悝による尽地力説と商鞅の阡陌制を比較して、中原諸国は奴隷制の矛盾を解決できなかったのに対して、秦では封建制への移行が成功したと考え、やはり秦が天下を統一することができたのは後進地であったからであるとした。一方、好並隆司 [1978a] は、東方諸国が庶民における農耕民的「デモクラシー」の社会であったのに対して、秦は君主権における北方遊牧民系の「専制主義」が発達し、後者が前者を支配する形で成立したのが秦漢帝国であるとした。

このような東方六国の具体的なあり方への注目は、秦を中心に秦漢帝国の形成を考える見方に対して新しい可能性を含むものであったが、いくつかの限界があった。一つは、東方六国を一括して扱い、それぞれの国の性格の差異を問題としていない点である。これは、秦に関する文献史料に対して、東方六国の文献史料が圧倒的に欠乏し

ていることからいたしかたないとも言える。もう一つは、秦の天下統一理由の解明が目的とされ、東方六国の歴史的役割がほとんど問題とされず、次の漢代への全体的な展望が十分示されていない点である。東方六国が占めた領域の広さ、人口の多さ、経済力、そして秦による統一の短かさなどから考えて、地域的な差異が当然漢代にも持ち越されたはずであるが、このような点はほとんど考慮されていないのである。

1980年代以後、注目されるのは、秦漢帝国が形成される場の問題として戦国時代の都市の研究が盛んとなる点である。戦国から前漢にかけて都市の発達が顕著になることは否定できない事実であるが、日本においてはその発達の要因に関して二つの見方がある。一つは経済的な要因を重視する見方である。宇都宮清吉 [1951] は、前4、3世紀における世界経済圏の成立という純粋に経済的な要因により都市が発達したとし、都市人口も全人口の3割に達し、その住民も商工業者が大部分を占めていたとする。これに対して、宮崎市定 [1962] は、戦国時代の都市の本質は商工業都市ではなく農業都市であり、この時代の大都市の発達は政治的、軍事的な理由によるものであり経済的な側面は二次的なものに過ぎないとした。すなわち、都市の発達は政治的な中央集権政策の強行によって生じたもので、首都や一部の軍事都市以外は微力な農業都市に止まっていたとするのである。

中国の研究者は現在でも宇都宮清吉のように経済的要因を重視するが、日本においては伊藤道治 [1963] が宮崎市定の政治的、軍事的要因説を考古学的に補強して以来、その後の影山剛 [1979]、池田雄一 [1981]、五井直弘 [1982]、佐原康夫 [1984] など、ほとんどの研究者はその考え方を継承している。その理由は、宇都宮説のように考えると、中央集権的専制支配を体現する秦漢帝国の形成が十分説明できないだけでなくむしろ矛盾するのに対して、宮崎説では都市の発達と専制支配との関係が無理なく説明できるためである。

しかし、このような相対立する見方が生じるのはそれなりの理由が存在すると考えられる。江村治樹 [1989] は、1980年代以後の考古学の発展を踏まえて、戦国時代の都市の発達を地域的な視点から見直したものである。戦国時代の都市遺跡の分布には明らかに片寄りがあり、このことは出土文字資料や文献史料からも証することができる。都市が発達したのは黄河中流域の三晋諸国（韓、魏、趙）であり、その周辺地域の齊、燕、秦、楚などの諸国では国都や二、三の都市を除いてそれほどでもなかったのである。したがって、三晋諸国では宇都宮説が正しく、周辺諸国では宮崎説が正しかったことになる。また、出土文字資料の検討によって、三晋諸国の都市は軍事的、経済的に自律性が高く、周辺諸国では都市の未発達によって中央集権的専制支配が展開したことを明らかにした。そして、秦による天下統一は自律的な三晋都市を強権によって支配しようとして崩壊したが、次の漢帝国は異なった性格を有する地域の統合体として理解すべきだと考えた。

しかし、ここで改めて問題となるのは、増淵龍夫 [1962] が提示した専制的な国家と自律的な社会との関係の問題である。自律的な社会の存在を否定できない以上、秦

漢帝国を総体として捉え直すには、従来の秦漢帝国に対する支配理念や法制的な外郭機構自体の見直しも必要かと思われる。増淵はすでに上述のように、秦漢帝国を「東洋的専制主義」の体系と見なすことへの強い疑義を呈しているが、それに代わる新しい支配の体系を提示しているわけではなく、その後議論が深められたとは言えない。ただし、ようやく1990年代以後、秦漢帝国のあり方自体に対する再検討の試みが見られるようになってきている。鶴間和幸[1992]の秦の天下統一の実体に対する再検討や大櫛敦弘[1995]の戦国期の「国際」秩序が漢初に持ち越されるとする議論、渡辺信一郎[1992]の漢代の国家機構における支配の重層性への注目などをそのような例として挙げることができる。また、戦国、秦漢の支配体系としての官僚制のあり方を、法制的な制度の側面だけでなく、理念の問題にまで踏み込んで再検討する必要があるが、これは主として秦漢史の分野の問題となる。

◆文献史料

戦国時代に関する文献史料は、前の春秋時代に比して格段に増加する。しかし、その多くは諸子の書である。諸子の書は、その学派的理想を述べることに重点が置かれており、現実の政治、社会に言及している部分は意外に少ない。『韓非子』『呂氏春秋』などには興味深いエピソードが多く含まれているが、それらをそのまま歴史事実と見なしてよいか考慮が必要である。

戦国時代の歴史研究の中心となる文献史料は、やはり『史記』と『戦国策』である。ところが、『史記』の記述には年代を中心としてかなりの混乱がある。近年、日本では『史記』の史料的問題について根本的に問い直す研究が進んでいる。平勢隆郎[1995]は、『史記』の年代に関する矛盾がなぜ生じたのか、その根本的原因を追究し、『史記』の東周関係の紀年を全面的に再編した。この研究の特色は、本来矛盾は存在しないという前提のもとに、矛盾をもたらした原因をすべて説明するという方法を取っている点である。この研究は単に紀年の問題にとどまらず、歴史の事実関係に影響すること大であり、この時代に関する研究においてまず参照する必要がある。

『史記』には内容に関しても、対象とする地域や国によって精粗が相当ある。秦に関する記述はある程度詳しいが、東方諸国の記述には簡略な部分が目立つ。これは、秦の始皇帝が『秦記』以外の東方諸国の史官の書を焼いたことが大きいと考えられ、司馬遷は十分な史料を持ち合わせていなかったと考えられる。司馬遷の用いた史料に関しては、藤田勝久[1997]が『史記』秦本紀、戦国世家の構成を分析し検討している。秦本紀は紀年資料や系譜を多く利用し、戦国世家は紀年資料と戦国故事を二大材料として構成され、両者とも部分的な系譜や説話資料など様々な資料を組み込んだ形跡があるとしている。

『戦国策』は国別の構成になっており、東周策2篇、秦策5篇、齊策6篇、楚策、趙策、魏策各4篇、韓策、燕策各3篇、宋衛策、中山策各1篇から成る。秦以外の東方諸国のエピソードも豊富に含まれているが、『史記』と内容的に食い違う部分もかなりあり、記事の年代確定が困難な部分もある。Crump[1964]は、この書を遊説

家による架空の雄弁の集録と見ており、そのまま歴史事実として使用するには慎重な配慮が必要である。

◆出土文字資料

以上のように、戦国時代の歴史を研究する上で史料上の制約が多いが、史料上の欠乏を補い混乱を正す材料として注目されるのは、主として考古学的に発見された文字の書かれた資料、すなわち出土文字資料である。近年、中国における考古学の発達はめざましく、出土文字資料の発見も膨大な数量に達している。とくに戦国時代になると、前の時代に比して文字の書かれた材質の種類、書かれた内容ともに極めて多様になる。すなわち、青銅器の他に、陶器、漆器、印章、貨幣にも文字が記されるようになり、絹織物に文字の書かれた帛書、木片や竹片に文字の書かれた簡牘も出現する。

このような戦国時代の出土文字資料を国別に最初に全面的に整理し紹介したのは李学勤[1957]であり、その後の新発見のものを補って再編されたものが李[1984b]である。また、江村治樹[2000]の第二部第一章は、1997年末までに公表された青銅器、陶器、漆器、印章、貨幣などの銘文のうち、字数が少なくあまり歴史研究に利用されてこなかったものを全面的網羅的に整理紹介し、その特色について概観したものである。なお、近年中国では戦国時代を中心とした先秦の貨幣研究が盛んである。新しい考古学的発見により貨幣に対する認識は改められつつあるが、黄錫全[2001]はその問題点と最新の認識状況を提示している。考古学の発見はとぎれることなく続いており、このような出土文字資料の整理は絶えず更新される必要がある。『文物』『考古』『考古学報』など全国的なレベルの考古学関係の雑誌や各省で発行されている雑誌、『考古与文物』『文博』『中原文物』『華夏考古』『江漢考古』『東南文化』『北方文物』『内蒙古文物考古』『文物春秋』『文物季刊』『四川文物』などにも目を通していく必要がある。そして、増加し続ける資料に対してコンピュータを用いた整理も必要になってきている。

出土文字資料には、この他字数の多い特別な内容を有する材料が多数存在する。戦国時代の歴史研究において特に注目されるのは帛書、簡牘の類である。長沙子弹庫の墓葬から発見された楚帛書は神話的な内容を含んでおり、その性格や文字の釈読に関して多くの研究がある。現在発見されている、最も早い時期の簡牘類は曾侯乙墓から出土した竹簡である。この竹簡には葬儀に用いられた車馬、兵器などが記されていた。戦国時代の簡牘類は、出土環境の関係からほとんどが楚墓と秦墓の出土である。楚の竹簡で注目されるのは包山楚簡である。その中には楚国の裁判関係文書が含まれ、楚の制度の研究に重要な材料を提供してくれる。また、最近、荊門郭店の楚墓からは、『老子』『礼記』等の書籍の竹簡も発見され、古典籍や楚の文字の研究の進展が期待される。なお、漢代出土の帛書、簡牘の中にも戦国史料を含むものがある。馬王堆帛書『戦国縦横家書』には現行『戦国策』に含まれない説話が含まれている。また、銀雀山竹簡『守法守令等十三篇』も失伝の戦国制度、思想を豊富に含んでいる。この他にも、現在伝わらない文書、著述の断片は各地で多く発見されており注意する必要がある。

る。

最後に、史料集ではないが、楊寛 [1980] は戦国時代において研究上問題となる事項をほとんど網羅した専門的な概説書であり、複雑な戦国時代を研究する上で必携の書であることを付け加えておく。
(江村治樹)

第2章

秦・漢

榎山 明・佐原康夫

1 研究の視点

具体的な研究の紹介に先立って、日本における秦漢史研究の動向を簡単に整理しておこう。整理の基準は研究の潮流、すなわち志向性・方向性である。過去50年間に限ってみると、日本における秦漢史研究には、大きく三つの潮流を認めることができる。

第一の潮流は、秦漢帝国形成史論と呼ぶべきもので、秦漢両帝国を中国における古代国家の完成形態とみて、その生成過程・構成原理を追究する研究の流れである。この潮流の淵源が、増淵龍夫 [1960a]、西嶋定生 [1961]、木村正雄 [1965] の三著にあることは、誰しも異論がないだろう。後述の通り、三者は対象へのアプローチを大きく異にしているが、古代国家の中国的特性の解明という点で共通の基盤に立っていた。その影響力の大きさは、後続する主要な研究業績が、三著のいずれかと向き合うことで展開されている点から窺えよう。たとえば、好並隆司 [1978]、尾形勇 [1979]、近年では李開元 [2000] といった著作や、多田狷介 [1999]、五井直弘 [2001] に収められた諸論考などがそれである。この第一の潮流は、秦漢時代のみならず、隋唐時代や東アジア世界の研究へも波及する。しかしその反面、秦漢帝国の画期を強調するあまり、先立つ時代の理解がいささか平板になった感は否めない。

第二の潮流は、古代帝国崩壊論と呼ぶべきもので、後漢国家の内部矛盾・崩壊過程を追究する研究の流れである。その源流は、宇都宮清吉 [1977] の豪族論や、谷川道雄 [1976]、川勝義雄 [1982] といった六朝史研究者の著作に求めることができる。そこでは六朝貴族制社会の形成という問題関心のもとに、後漢時代における社会的矛盾に焦点を当てて、漢から六朝への展開——谷川・川勝の言う古代から中世への展開——がダイナミックに描き出されていた。後漢時代史の専著、狩野直禎 [1993]、東晋次 [1995]、渡邊義浩 [1995] 等には明らかにその影響が見て取れる。前掲の多

田狹介や五井直弘の論集中にも、谷川や川勝の所論への批判的対応が含まれていた。第一の潮流において手薄であった後漢時代の研究が、この第二の潮流によって推進されたことは否定できない。それはまた一面で、現在の後漢史研究の関心と方法が、六朝史研究と共通することを意味しよう。

第三の潮流は、出土文字資料研究である。むろん前二者の潮流においても、出土資料に対しては相応の注意が払われている。しかし、そうした潮流とは一定の距離を置きつつも、出土資料の分析によって新たな歴史像を提示しようとする研究が、とりわけ1980年前後から顕著になってきたことに注目したい。代表的な著作としては、工藤元男 [1998]、富谷至 [1998]、佐原康夫 [2002a]、富谷編 [2003] などが挙げられる。この潮流の直接的な源泉は、大庭脩 [1982] や永田英正 [1989] に示された漢簡研究まで遡る。さらに視野を広げれば、甲骨や敦煌文書の研究を含む、より大きな流れの中に位置付けることができるだろう。この潮流の身上は資料に即した立論にあり、研究のテーマや方法はいきおい出土資料の性質に制約される。近年の秦漢史研究において、地方行政や法制を扱った論考が量産される傾向にあるのは、研究が資料に規定されたことに原因の一端がある。

以上三つの潮流は、内部に複数の対立する学説を含みつつ、時に大きく交差する。そうした情況、とりわけ前二者の流れの交差に関しては、太田幸男 [1974] や小嶋茂稔 [1999] などの学説整理に詳しい。

(初山 明)

2 研究の展開

<1> 通史・概説書

この項では秦漢時代の通史と概説書を、日本語の書籍に限って紹介する。まず秦漢史全体にわたる概説としては、大島利一他 [1960] に収める文章が今日もお一読に耐える内容をもつ。単独執筆の著作としては、西嶋定生 [1974] が創見に富む通史として評価されよう。ただし後漢後半期については、続巻の川勝義雄 [1974] を参照する必要がある。前節で述べた研究の潮流の違いから、両者の描く漢代史像は必ずしも整合しない。その後の新たな史料情況は、鶴間和幸 [2004] に反映されている。大庭脩 [1977] と松丸道雄・永田英正 [1985] とは、豊富な図版に特色がある。松丸他編 [2003] は、近年の研究動向をふまえた、やや専門的な通史である。学説史を扱った著作としては、堀敏一 [2000] と松丸他編 [2001] の二書を挙げておく。いずれも秦漢以外の時代を含む。堀の著作は単独執筆の利点が生かされた、通読向きの一書である。

個別テーマを扱った書物としては、農業生産と国家構造に関する標準的歴史像を提示した西嶋定生 [1981] のほか、刑罰については富谷至 [1995]、貨幣については山

田勝芳 [2000] といった個性的な概説がある。匈奴については、沢田勲 [1996] と加藤謙一 [1998] に、異なる立場からの歴史的位置付けが試みられている。

歴史人物の伝記は少なくないが、全体像を描いた著作のみ列挙するならば、始皇帝については吉川忠夫 [1986] と初山明 [1994]、漢の高祖については堀敏一 [2004]、武帝については影山剛 [1979]、王莽については東晋次 [2003a] などが、それぞれに特色ある著作と言えよう。また、護雅夫 [1974] は、李陵の悲劇を広くユーラシア史の中に位置付けた名著である。

簡牘（木簡・竹簡）資料に関しては、まず大庭脩 [1984] が入門書として推奨される。より立ち入った概説書としては、簡牘を用いた漢代辺境史として初山明 [1999]、簡牘と紙の史料論として富谷至 [2003] などを挙げることができよう。画像石・画像磚については渡部武 [1991]、林巳奈夫 [1992a] の二書がある。また、林 [1992b] は考古遺物を活用して物質文化の復元を試みており、林編 [1976] の新編普及版とも言うべき一書である。

<2> 政治

◆皇帝と天子

「皇帝」という称号は、秦王嬴政すなわち始皇帝自身によって、旧来の「王」号を超える尊称として案出された。西嶋定生 [1970a]（関連する他の論考とともに西嶋 [1983] に所収）によれば、「皇帝」とは「煌煌たる上帝」の意味を込めた位号であった。上帝すなわち万物を主宰する宇宙神に由来する称号こそ、何者にも制約されることのない絶対者としてふさわしい。その反面、天への従属を意味する「天子」の称号は、始皇帝にそぐわないという理解になろう。自らを受命の君主とする「天子」思想は、漢の文帝時代に儒家的思想の影響のもとで復活したものであるという。

この西嶋定生の見解に対して、栗原朋信 [1972] は、「皇帝」号は三皇・五帝から選択されたのであり、所詮は地上の最高君主を意味する称号に過ぎないと批判する。漢初の祭祀儀礼復活の状況をみれば、秦でも上帝を祀っていた可能性が高い。とすれば始皇帝にとって、自らを加護してくれる上帝に取って代わることなどあり得ない、というのが栗原の理解である。一方、浅野裕一 [1992] によれば、自らの功業をいにしえの五帝を超えるものと意識していた始皇帝は、皇一帝一王一公という尊号の基本序列をふまえ、最上級の「皇」にも比肩すべき「帝」であるとの意味を込めた「皇帝」号を案出したという。皇帝は天子と異なり、上帝や上天など自然法的存在によって正当性を保証されることがない。浅野はそこに、絶えざる功業の顕示を通して権力の正当性を実証し続ける始皇帝の宿命を読み取っている。

西嶋定生 [1970a] はまた、皇帝玉璽の分析を通して、漢王朝における皇帝・天子両称号の機能の違いを明らかにしている。皇帝とは王侯に対する称号で、国内政治における君主としての地位と権威を示し、他方、天子とは蛮夷ならびに天地鬼神に対す

る称号であった。蛮夷に対しても天子と称する理由は、中国皇帝と彼らとの盟約が天の呪力によって保証されているためだと解釈される。これに対して尾形勇 [1979] は、蛮夷と天地鬼神の双方に対する関係を、独自の「家」概念を軸として統一的に理解しようと試みる。尾形によれば、一人の「臣」として天地鬼神に仕える天子は、出自する「家」すなわち「何家」（漢代であれば「漢家」）をもつ。「漢家」より出て天地に臣従する漢の天子は、また「漢家」を代表して蛮夷・諸外国に対する、というのが尾形の想定する構造である。いずれの理解によるにせよ、漢代における天子概念の整備によって、東アジア世界を制度的に結びつける論理が準備されたことになる。

東アジア世界形成のもう一つの端緒として、西嶋定生 [1970b] は郡国制の施行を挙げる。封建諸侯の王国・侯国が皇帝直轄領と並存する郡国制の体制が、周辺諸民族の首長に王・侯の爵位を与え中国の政治秩序に組み込むことを可能としたという西嶋の理解は、後述する爵制的秩序論の延長上にある。栗原朋信 [1960] は、文献に見える漢の印綬の制度をもとに、内臣と外臣とから成る漢帝国の構造を明らかにした。栗原 [1970] とともに、東アジア世界の構成原理に関する先駆的な研究であるが、文献史料を主体とした立論に対しては、阿部幸信 [2004] など、漢印の実物を重視する立場からの批判がある。

◆官僚制度・政治機構

「恒久的官僚制」（E・バラージュ）と評される通り、極度に発達した官僚制度は中国史を貫く特徴であり、いずれの分野の研究であれ官制の把握を避けては通れない。官僚制度の全体を見渡すには、Bielenstein [1980]、安作璋・熊鉄基 [1984-85]、ト憲群 [2002] などの著作が有用である。また、地方行政制度の体系的な専著としては、嚴耕望 [1961] がまづ緋かれるべき書物であろう。

秦漢時代の中央官制は、一般に「三公九卿」と総称される。ただし、伊藤徳男 [1954a][1954b] が指摘するように、前漢時代の史料に見える「三公」「九卿」の語は多分に理念的・慣用的な呼称にすぎず、特定の官職を意味する語となるのは、「古制」にもとづく官制改革を経た前漢末から後漢にかけてのことである。制度を固定的にとらえることなく、歴史的・動態的に把握する姿勢が、官制研究には求められよう。大庭脩 [1970] は、そうした研究の嚆矢となるもので、秦から漢にかけての中央政府の官庁がなお皇帝の家政機関としての性格を色濃く残していること、その代表格となる少府から様々な職掌が漸次分化していったこと、などが指摘されている。

地方行政制度については、鎌田重雄 [1962] が第一に挙げられるべき専著である。秦の郡を対象とした第1編に続き、同書第2編には漢の郡・国について、官制や上計制度、王国抑損策などを扱った諸論考が収められる。また、漢には列侯の封地として侯国（列侯国）が存在したが、その基本的な性格については布目潮風 [1955] に分析がある。諸侯王や列侯の地位・封邑の継承に対して厳しい制限が加えられたことは、牧野巽 [1932] に詳しい。紙屋正和 [1982a][1982b] は、鎌田の先駆的な研究を受けて、郡国制度の歴史的変遷を解明した論考である。紙屋によれば、前漢景帝期まで

の地方行政は県を中心として担われており、郡・国の関与は軍事・監察を除けば限定的なものに過ぎなかった。しかし続く武帝期になると、上計や官吏登用制度の整備を背景に、郡・国の二千石とりわけ守・相が県への支配権を強化していくという。監察制度に関しては、王勇華 [2004] が最新の研究成果と言えよう。秦～前漢中期を対象に、行政権と監察権の分化、中央と地方における監察諸官の機能などを総合的に論じた著作である。

制度の運用、すなわち人的スタッフの登用、配属、昇進などの分析も、官制研究の重要な研究課題である。地方官の任用における本籍地回避や郡県長吏の守官の原則などを解明した浜口重国 [1942][1943] は、この分野における基本的文献としての価値を失わない。また大庭脩 [1982] には、官吏の兼任、功次による昇進、休暇といった制度運用の実態を、敦煌漢簡や居延漢簡など簡牘史料から明らかにした論文が含まれる。官吏登用制度に関しては、福井重雅 [1988] が最も体系的な専著と言えよう。同書の主眼は、漢代の察挙すなわち人材の推挙制度を、賢良・方正の制挙を中心として実証的に解明することに置かれているが、論及される問題は思想史の分野にも及ぶ。また、察挙とならぶ官吏登用制度として後漢期に盛行する辟召について、周制への復古を説く福井に対し、西川利文 [1989] は前漢以来の属吏任用制度の変質・発展としてとらえることを主張する。

官吏や官衙の実態についての研究としては、佐原康夫 [1997][2002a] が注目される。前者は行政の末端における官吏の斥免・弾劾手続きを居延漢簡によって解明した論考。後者は官衙という空間と、そこに展開される官吏の生態とについて、画像石資料などを援用しつつ明らかにした労作である。このように、文献史料では十分にうかがい知れなかった地方行政の実態に、出土資料から光を当てる研究が、近年の官制研究の趨勢であると言ってよい。とりわけ注目を集めているのは、江蘇省連雲港市の尹湾6号漢墓から出土した簡牘（尹湾漢簡）である。西川利文 [1997] は県の属吏や郡府の官員構成について、紙屋正和 [1997][2000] は郡・国の上計・考課制度や列侯国の官制について、鶴飼昌男 [2003] は郡太守のもつ人事権について、この新資料を用いて解明した研究で、鎌田重雄・浜口重国以来の認識を補完・訂正する部分が少なくない。また、池田雄一 [2002] の「地方行政編」には、県制や郷などの行政機構、地方少吏や官衙などに関する論考が収録される。尹湾漢簡や睡虎地秦簡をはじめ出土文字資料を広く用いた研究であるが、全体として地方行政における国家の関与の限界性・在地社会の自立性を強調する点に池田の特色がある。最後に、永田英正 [1989] を挙げておく。居延漢簡の簿籍類を集成・分析することにより、漢代文書行政の底辺を探り当てた研究である。

◆法制

法制史研究の専著としては、大庭脩 [1982] が最初に緋かれるべき著作である。同書には、漢律における不道概念や徙遷刑の実態、漢の公文書と訴訟手続きなどを扱った実証的な研究が収められているが、なかでも圧巻は、居延漢簡の冊書の復元を通し

て制詔による立法手続きと法令の伝達過程を解明した論考であろう。大庭の研究に見られる通り、秦漢時代の法制史研究は、公文書の正確な理解と表裏の関係にある。この方面の専著としては、汪桂海 [1999] が漢代の各種公文書を手際よく整理しており有益である。

刑罰制度に関しては、強制労働刑や笞刑を扱った浜口重国 [1936][1937][1938] の諸論考が、まず参照すべき基礎研究と言えよう。しかし、1975年の雲夢睡虎地秦簡の出土によって、研究状況は一変したかの感がある。この出土資料を用いた刑罰史研究は多数にのぼるが、日本語による本格的な研究としては富谷至 [1998] に指を屈するべきだろう。富谷の著書の根幹となるのは、死刑から罰金刑まで横系列に並んでいた秦の刑罰体系が、漢の文帝による刑政改革の結果、労役刑を主体とする縦系列に一本化された、との見解である。ただし、文帝の改革を伝える『漢書』刑法志の文章については、テキストに混乱があるとする張建国 [1996] の主張が看過できない。また、新たに出土した張家山漢簡の記載によって、富谷の復元した刑罰制度に一部修正を要することは、水間大輔 [2002] が指摘する通りであろう。なお、刑罰史研究の争点となる隸臣妾刑の性格と刑期の有無に関しては、榎山明 [1995] が無期説の立場から学説を整理している。

司法制度に関しては、雲夢睡虎地秦簡にもとづいた榎山明 [1985a] や、張家山漢簡をも視野に入れた宮宅潔 [1998] などにより、訴訟手続きの大筋が押さえられた。また、「侯栗君所責寇恩事」の表題をもつ居延漢簡の冊書は、事案の経緯や官吏の対応などを具体的に記した貴重な出土資料であるが、細部については解釈が分かれ、扱いの難しい文書でもある。その難しさの一端は、浅原達郎 [1998] から窺えよう。

法源とりわけ律令については、中田薫 [1952][1953] が古典と呼ぶべき業績である。その後の研究成果を踏まえた概観としては、滋賀秀三 [2003] に収める「法典編纂の歴史」が必読であろう。滋賀は法典としての律令の特徴を、①法規を刑罰・非刑罰の観点から分類し編纂する、②律典・令典は一時期にただ一つしか存在しない、③ひとたび制定された律典・令典は部分的に変更を加えられない、という三点に整理した上で、戦国・秦・漢時代に律・令と呼ばれた法規が、この特徴のいずれも具備していないことを指摘する。①の特徴の不存在ゆえに、秦漢時代の「令」の性格は、中田以来の追究によってもなお不明瞭な部分が残る。その意味で、甘肅省武威市の漢墓から三次にわたって出土した「王杖」に関する漢簡は、張家山漢簡「二年律令」とともに漢令の実態を知る手掛りとして注目される。最初に出土した王杖簡については富谷至 [1992] が「黄泉文書」とみる立場から詳細な検討を行い、その後の出土例については大庭脩 [1995] が「契令」としての史料価値を説いている。律令以外の法源については、集団の約（約束）がもつ拘束力の根源を探った増淵龍夫 [1955] のみ挙げておきたい。

◆外戚政治

王莽の新朝樹立に至る外戚政治の展開は、まず内朝と呼ばれる側近集団の形成とし

て現れる。その端緒となったのは、武帝の死後、幼い昭帝を補佐した外戚の霍光が「尚書の事を領」し、政権を掌握したことであった。山本隆義 [1968]、鎌田重雄 [1968] などの概観によれば、尚書とは本来、王命の起草をつかさどる秘書官であるが、その職掌ゆえに次第に国政への関与を深めていった。この尚書を中心とした皇帝近侍の集団を内朝と呼ぶ。増淵龍夫 [1952] の理解によれば、霍光の政権掌握により国政の実権は内朝に壟断され、制度上の中央政府である丞相・御史大夫は外朝として単なる行政機関と化すに至ったという。西嶋定生 [1965] も同様に、内朝の出現により丞相以下の外朝は執行機関に過ぎなくなったと述べている。内朝の実権掌握、外朝の疎外化という評価は、先の鎌田にも共通する。

これに対して富田健之 [1986] は、内朝・外朝は分離・対立するのではなく、皇帝個人の支配意思を国家統治へと転換すべく相互補完的に機能したと考える。藤田高夫 [1990] もまた、側近官僚集団としての内朝を、皇帝の力量が及ばぬ点を輔翼する機構として位置づける。外戚を皇帝政治の阻害要因と見るのではなく、政策スタッフとして積極的に評価しようとする点が、富田や藤田の特徴と言えよう。富田 [1994] [1995] は、こうした視点から霍光政権を分析した論考である。ただし、富田や藤田の理解に対しては、霍光政権は後の貴戚政治の先駆けであり、絶対的な皇帝権の相対化としてとらえるべきだとする東晋次 [1995] の批判がある。

◆党錮

後漢末期、政権を私物化した宦官勢力による、二度に及んだ批判的知識人の弾圧が、党錮（党人の禁錮）と呼ばれる事件である。この弾圧の対象となった批判的知識人、自らを「清流」と称した士大夫層に、六朝貴族の淵源を見出した論考が、川勝義雄 [1950] であった。川勝は党錮事件を、清流派官僚と首都の太学生・地方の塾生らが、儒家的国家理念・道徳感情にもとづく広汎な輿論の支持に支えられて展開した、一種の政治改革運動であると理解した。この川勝の理解を理念的であると批判した増淵龍夫 [1960b] は、逸民的人士の存在に注意を喚起する。彼らは宦官勢力のみならず、清流派官僚や太学生に対しても、名を求める徒であるとして批判的な態度を固持した。そうした逸民的人士を支える社会的基盤の探究が、増淵の提起した課題であった。

川勝義雄 [1967] は、増淵龍夫の批判を受けて、清流勢力と逸民人士との間に明白な一線を画し難いとした上で、その社会的基盤を考察した論考である。川勝によれば、清流・逸民・黄巾による一連の抵抗は、宦官による権力機構の掌握、それと結んだ濁流豪族による郷邑秩序の破壊という危機的状況に対し、古き共同体的郷邑秩序の再建を志向したレジスタンスとして評価される。このレジスタンス運動が、武人領主の階級形成を阻むとともに、文人的な士階層を成立させた。川勝の議論の根底には、西ヨーロッパ的な封建社会との対比において中国の中世社会を捉えるという、比較史的な関心があった。

近年の後漢史研究の専著である渡邊義浩 [1995] と東晋次 [1995] は、ともに党錮に一章を割いている。渡邊は、清流・濁流というカテゴリーを退け、「党人」をもつ

で党錮理解の鍵とする。渡邊によれば、党人の宦官に対する抵抗は、相対的に地位の低い豪族層による自らの命をかけた上昇運動であった。それは全国規模に広がった、自律的な秩序をもつ運動であったが、党派性と分裂性ゆえに、自ら安定した権力となることはできなかったという。一方、東は大筋で川勝義雄を継承しつつも、清流派が再建しようとしたのは、豪族によって秩序が維持される共同体的社会であったと考える。その点で、本来の郷邑社会を志向する逸民の人士との間には、思想的断絶があった。東によれば、清流派士大夫が六朝貴族へと転化するには、豪族としての矛盾の自覚、逸民の人士の志向する「邑里と之を共にする」方向への転換が必要であった。

〈3〉社会

◆爵制的秩序

漢代においては、奴婢や賤民を除くすべての庶民男子が爵位を有していた。この事実の中に皇帝支配の正当性を見出そうとした研究が、西嶋定生 [1961] (西嶋 [1983] にも関連論文を収める) である。皇帝が庶民に賜与する爵すなわち民爵は、賜爵に与る機会の多い高齢者ほど高爵位となることにより、郷里社会に伝統的に潜在していた年齒秩序を顕在化する。かくして郷里の社会生活は賜爵によって秩序づけられ、秩序の形成者たる皇帝は正当性を付与される。西嶋の議論の特徴は、皇帝支配を庶民の生活の場から説明しようとする点にあった。

これに対して増淵龍夫 [1962] は、内在的な歴史理解の姿勢を評価しつつも、社会秩序が民爵賜与によって外側から他律的に規制されたとの解釈は、動きの取れない構造論に陥るものだと批判した。かわって増淵が着目したのは、民間における自律的秩序、具体的には土豪・豪族のもつ社会的規制力と、それを支える郷里の輿論とが、行政の末端を支える構造であった。制度という骨格に血と肉を与える固有の社会条件を重視する増淵の姿勢は、後述の任俠的習俗論にも共通する。

初山明 [1985b] は、西嶋論文の根拠となった史料を再検討し、民爵賜与は郷里の秩序形成を必ずしも意図したものではなく、賜爵の意義は王権への奉仕者を認定することにある、との試案を示した。これに対して、楠山修作 [1997]、東晋次 [2003b] は、賜爵に飲酒儀礼を伴う事例が前漢後半期から増加することに注目し、そこに皇帝権力による郷里社会への関与を読み取ろうとする。郷里社会から皇帝支配を説明する西嶋定生の視点を生かしつつ、賜爵の意義を固定的にとらえることなく、歴史変遷的に理解しようとする点に、両者の提言の意義があろう。こうした見方の先蹤としては、前漢後期に頻発する吏爵の授与を、吏となった地方豪族の社会的規制力を公認する方策と解する五井直弘 [1961] の論考がある。ちなみに、張家山漢簡の「二年律令」には、爵位に伴う身分規制や襲爵規定などが含まれており、秦から漢初にかけての新たな事実が明らかになっている。爵制をめぐる議論の帰趨は、なお流動的な状況にあると言えよう。

◆任俠的習俗

中国古代における任俠・游侠の気風に初めて注目した論考は、宮崎市定 [1934] である。しかし、国家の制度や支配関係を内側から支える人的結合関係として積極的に評価したのは、増淵龍夫 [1951] (関連する他の論考とともに増淵 [1996] に所収) をもって嚆矢とする。漢の高祖劉邦と功臣たちとの関係を、家内奴隸制にもとづく支配関係と規定した西嶋定生 [1949] の見解に対し、増淵はそれを任俠的習俗の中から形成された家父長制的な集団として理解した。任俠的習俗とは、春秋末から戦国にかけて新たに形成されてきた民間秩序、然諾を重んじる対人的信義関係のジッテである。

上田早苗 [1972] は、漢初の史料に「長者」と評される理想的人間類型が、自尊を重んじる点では任俠と重なり、重厚を体現する点では黄老術と表裏一体の関係にあることを指摘する。上田によれば、こうした長者が儒教に圧倒されて退潮を余儀なくされた武帝時代に、司馬父子は漢初への追慕の情をもって『史記』を編纂したという。

一方、宇都宮清吉 [1963a] は、増淵龍夫による「家父長制」概念の使用に異議を唱える。宇都宮によれば、中国古代の集団原理は、儒家学団に体现される「家族制的人間関係」と、墨家学団に体现される「首領制的人間関係」とに類型化できる。当時の郷里社会は家族制的人間関係の濃密な世界であったが、その特徴は強権的な「父権」の色彩が弱い点にあり、これを家父長制の語で呼ぶことは適切でない、というのが宇都宮の主張であった。

増淵龍夫による問題提起の継承を目指す東晋次 [1997] は、ソシアビリテ、マンタリテなどヨーロッパ史における社会的結合論に呼応して、任俠的習俗を広く中国史の中に位置づけることを提唱する。東の議論は習俗の汎歴史性に傾くかに見えるが、それは裏を返せば、任俠的習俗だけを単独に論じることへの警鐘とも言える。増淵の言葉を借りれば、習俗・心性は骨格に対する血と肉であるが、血と肉のみでは形を成さないこともまた確かなのである。

◆家族と豪族

漢代の家族に関しては、牧野巽、宇都宮清吉、清水盛光、守屋美都雄らによって展開された論争が有名である。守屋 [1962] や宇都宮 [1963b] など当事者の回顧に述べられる通り、主たる争点は漢代家族の典型的形態が三族制か小家族かという点にあった。三族制家族とは、父母・妻子・兄弟が同居する家族形態のことである。論争は結局、牧野 [1942] の詳細を極めた論証によって、小家族説に落ち着いた感があるものの、それで終息したわけではない。宇都宮 [1955] では、旧稿「漢代における家と豪族」を加筆訂正して収めるにあたり、自己の三族制家族説を再確認し、あわせて家族の動態的な把握を提示した。同じ主張は宇都宮 [1963a] でも繰り返されている。

その後の研究の展開は、宇都宮清吉の示した方向に沿っているかに見える。稲葉一郎 [1984] はその代表的な研究で、戦国以来の貨幣経済の活況が武帝の抑商政策によって沈滞化し、人々が生活の合理化と家計の共同化による生活防衛をはかった結果、家族同居の傾向が出現したと論じている。動態的把握の一例と言えよう。堀敏一

[1996]もまた、知識人の中で三族同居が道徳的規範とされたことや、唐律に三族制の維持が規定されたことなどを根拠に、三族制家族論の再評価を提唱している。こうした近年の研究動向の背景に、新たな出土資料の出現があることも注意しておくべきだろう。睡虎地秦簡を手がかりに「家」や「同居」を論じた堀[1989]は、その典型である。

漢代の豪族研究に関しても、主たる関心の一半は歴史的生成過程に置かれている。鶴間和幸[1978]は、漢帝国の領域を六つの地域に区分した上で、地域ごとの豪族分布状況を精査し、豪族経営が邑共同体に系譜をもつ旧県で顕著に成長して来ることを論証した。鶴間の研究は、木村正雄[1965]が膨大な資料によって跡付けた、専制国家の基盤としての「新県」と自立性の高い「旧県」という区分を継承するものである。木村[1979]の理解によれば、両漢交替期の隗囂・公孫述らの叛乱は、旧県に基盤を置いた豪族勢力の自立として性格づけられるという。

五井直弘[1960][1961][1970]の諸篇は、豪族研究の標準とも言うべき論考であるが、都城や聚落遺跡の発掘成果も取り入れながら後漢豪族の実態を具体的に描き出すと同時に、在地における勢力伸張の過程を国家権力との関係で追究している点に特徴がある。『漢書』列伝に現れる官僚の出身を分析して、前漢後半期における豪族の官僚化傾向を実証するなど、五井の研究もまた力点の一半は生成過程の解明に置かれていると言えよう。稲葉一郎[1987]は、稲葉[1984]で論じた生活防衛に豪族出現の契機を見出すとともに、郷里社会との結びつきを強固にした要因として、水利や治安維持などの保全事業と任侠的精神・儒教的素養の体現とを挙げる。こうした見方は、稲葉自身も述べている通り、前漢後半期から魏晋南北朝時代までを連続的に捉えることを意味しよう。六朝史研究との対話が望まれる分野でもある。

大土地経営の実態については、次項の「自営小農民と大土地経営」で述べる。豪族・豪族を含めた社会階層全体については、概観と史料集から成るCh'ü[1972]がある。(初山 明)

〈4〉 経 済

◆財政制度

秦漢時代の租税制度の全般を、文献史料から考証した基本的研究として、吉田虎雄[1942]がある。漢代の租税には、田租のように農産物を納めるもの、算賦のように銅銭で納める人頭税、労働力を徴収される徭役・兵役、市場での物品の売買に賦課される市租などがある。宮崎市定[1933]はこれらを、軍賦を起源とする「賦」と宗廟への供物を起源とする「税」に大別している。この説を継承した楠山修作[1976]は、漢代の「賦」をさらに制度史的に考察している。

これらの租税のうち、田租は両漢時代を通じて基本的に収穫の30分の1という低率であったが、王莽時代には「王田制」と呼ばれる特殊な土地制度が施行されている。

堀敏一[1975]はこのような変化を、後世の均田制への流れの中に位置づけている。一方、算賦のように農民からも銭納税が徴収されていたことは、この時代の税制の最大の特徴の一つである。平中荅次[1967]は、算賦や算緡銭、財産税のように「算」を計算基準とする銭納税制に関する最も基本的な研究である。また漢代の労役制度は、徭役と兵役が未分化だった点に特色があり、重近啓樹[1999]がこれを体系的に論じている。なお、1973年に出土した江陵鳳凰山漢墓の簡牘には、里における田租や銭納税の徴収記録が含まれており、その解釈と位置づけによっては、漢代の税制理解に大きな変更が加えられる可能性もある(永田英正[1977]、佐原康夫[2002b])。また居延漢簡の中に、田租の査定に関連すると考えられる冊書が含まれることにも注意しておきたい(Loewe[1967])。

こうした租税収入を管理する財政機構は、前漢時代と後漢時代とで大きな違いがある。加藤繁[1919]は、前漢の財政機構が、大司農を中心とする国家財政と、少府を中心とする帝室財政に截然と区別され、後漢時代にはその区別が消滅することに注目した。この変化は、官僚機構と同様、財政機構も君主の家政機関から次第に分化していったこと、また君主の家産として帝室財政の基盤とされた山林藪沢が、重要な財源であったことを物語る。後者の歴史的意義を強調するのが、増淵龍夫[1957]の古典的研究である。山田勝芳の一連の研究[1974][1975][1977][1977-78][1993]は、そこから帝室財政の消長を貨幣経済の盛衰と関連づけて論じている。

このような漢代財政史研究は、テーマと文献史料の性格から、中央の財政機構と収入論に偏りがちである。佐原康夫[2002a]は地方郡県の財政機構について、簡牘など出土文字資料を多用して検討しているほか、居延漢簡から官吏の月俸の支出について整理している。また渡辺信一郎[1989]は、中央財政と地方財政を国家的物流という観点から総合し、均輸制度の理解について、新たな提言を行っている。財政的物資輸送については、黄河の漕運を扱った藤田勝久[1983a]、辺郡での物資輸送を検討した佐原[1991]を参照。均輸と密接に係る塩鉄専売制度については、「貨幣経済と商工業」で紹介する。なお、漢代の財政史全般に及ぶ研究として、馬大英[1983]がある。

◆自営小農民と大土地経営

如上の租税収取の対象となるのが、「編戸の良民」として人口のほとんどを占めた農民である。彼らは、戦国時代に「耕戦の民」として新たな国家の人的・物的基盤となり、漢代には「五口百畝」と呼ばれた、小規模自営農民層を形成する。その農業経営は、農業技術と土地利用、労働力、生産力といった要素から分析される。これらを総合した研究の代表が渡辺信一郎[1986]である。また米田賢次郎[1989]は、華北乾地農法の形成という観点から、牛耕の普及と関連した240歩1畝制の成立、代田法や区田法など漢代の農業技術革新、さらに漢代南方の農法として知られる「火耕水耨」を詳細に研究している。ただし240歩1畝制や阡陌制など土地制度の理解は、雲夢秦簡や青川県田律木牘、江陵張家山漢簡など新出土資料によって流動化している部

分もある。

一方、戦国時代から漢代にかけては、大規模な水利事業など国家的農地開発が盛んに行われた。秦漢時代の水利事業を郡県制との関係から論じた藤田勝久 [1983b] [1984] [1995] の研究、鶴間和幸 [1989] による現地調査を踏まえた研究などがある。また原宗子 [1994] [1998] [2005] は、開発と環境の関わりに着目し、土壌の観点から農業と農民を論ずるなど、制度史離れした研究として注目される。

前漢半ばから、豪族による大土地経営が顕在化してくる。先駆的な研究として、宇都宮清吉による「僮約」の研究、光武帝劉秀の出身地である南陽地方の豪族に関する研究(宇都宮 [1953] [1954])がある。豪族の経営形態の変遷、特に小農民に対する兼併の在り方については、多田狷介 [1966] が参考になる。大土地経営者は、一族を率いて自給自足的な家産経営を行う一方、生産物の価格変動にも敏感に反応することができた。特に『四民月令』には、豪族のこのような家産経営が詳細に記されており、渡部武 [1987] に多くの研究成果が簡潔にまとめられている。さらに渡辺信一郎 [1986] は、六朝期までの農業技術の発展史の中に漢代の大土地経営を位置づけ、畜力利用の進んだ大農法が、手労働による小農経営に生産力で優越していったことを説く。

◆貨幣経済と商工業

秦漢時代の商工業者は身分制の統制の対象であり、七科謫のような差別的動員(堀敏一 [1982] 参照)や算緡のような懲罰的徴税の対象となった。その制度的基礎をなすのが、「市籍」と呼ばれる商工業者の戸籍である。「市籍」の解釈については、1970年代に緩やかな論争があったが、重近啓樹 [1990] が諸説をまとめて妥当な解釈を導いている。このような商工業者に対する国家的統制の背景には、『史記』貨殖列伝に描写されるような、商工業の発展があった。宇都宮清吉 [1952a] は、貨殖列伝に見られる商人の活動を高く評価するのに対して、影山剛 [1984] は彼らを専制国家に寄生する存在であるとしている。

とはいえ、この時代に商品生産を行う手工業が発展したことは紛れもない事実である。佐藤武敏 [1962] は、考古学的出土資料も用いながら、古代の手工業の全体像を描こうとした。現在もこれを越える総合的研究はない。中でも塩と鉄は当時を代表する商品と考えられ、塩鉄専売制度も含めて活発な研究が行われてきた反面、いささか不毛な論争もあった。影山剛 [1984] に、その経過と成果が集約されている。なお製鉄史と鉄専売制度については、佐原康夫 [2002a] が現段階での到達点を示している。

商工業が展開する場としての都市については、宇都宮清吉の長安を中心とする研究が古典と言ってよい(宇都宮 [1951] [1952b])。特に国家の管理する市の制度をめぐるのは、佐藤武敏 [1965]、渡部武 [1983]、佐原康夫 [2002a]、堀敏一 [1988] のように、都市遺構や画像資料、簡牘資料などを総合した研究が行われている。ただし漢長安城のような首都については、皇帝の首都の制度を扱う都城論として、別の視点が必要である。秦の咸陽と漢長安城の歴史的関係について、池田雄一 [1975]、古賀登

[1980]、鶴間和幸 [1991]、また佐原康夫 [2002a] を参照。

秦漢時代における貨幣経済の発展は、半両銭と始皇帝の貨幣統一、五銖銭の登場に代表される、銅銭を中心とした貨幣制度から論じられることが多い。貨幣制度の沿革については、近年の考古学資料を踏まえた業績として、稲葉一郎 [1978]、山田勝芳 [1988]、佐原康夫 [2002a] を参照。また貨幣制度の沿革と貨幣経済の盛衰を結びつけて論じた古典的研究として、牧野巽 [1950] [1953] がある。特に多田狷介 [1965] は、貨幣経済の衰退局面を、豪族の商業経営と結び付けて論じている。このように、急速な発展を遂げた貨幣経済が、前漢武帝時代の五銖銭発行を境に衰退していく。この図式はほとんど定説となった感があったが、近年、佐原 [2002c] が疑義を呈し、貨幣経済そのものの再検討を提案している。

(佐原康夫)

<5> 思想・習俗

◆儒教の国教化

漢の武帝が董仲舒の対策を採用し、五経博士を設置した結果、儒教が唯一の正統思想としての地位を確立するに至った。この通説的「儒教の国教化」理解に対しては、関口順 [2000] が指摘する通り、二つの方向から異論が提出されている。すなわち、①武帝期に董仲舒の献策により国教化されたという理解への疑問、②「国教化」の条件=認定指標に関する議論である。

①に属する論考としては、董仲舒の対策年次に疑義を呈した平井正士 [1941] を嚆矢とする。しかし、より鮮明に問題の所在を突いたのは、五経博士の設置に関する『漢書』の記載が後代に付加された伝承に過ぎないと断じた福井重雅 [1967] であった。福井はその後も、武帝期における「五経」概念の未成立を論証し(福井 [1994])、『漢書』に見える董の対策中に作為の跡を指摘するなど(福井 [1997])、自説の強化をはかっている。また、平井 [1982] は武帝期を通じて儒家官僚の公卿層への進出がほとんど閉ざされていたことを実証し、福井 [1996] もまた塩鉄会議にうかがえる法家的思想傾向から、武帝期における儒教一尊の可能性を否定した。ただし、こうした否定論に対しては、武帝期において進化したのは儒学の官学化、すなわち儒学にもとづく教育体制と官吏養成体制の整備であって、儒家と異なる思想の持主の官界進出を否定しないとす西川利文 [1999] の批判がある。儒教の国教化(国家宗教としての儒教の成立)と儒学の官学化とを峻別する富谷至 [1979] にもとづく議論と言えよう。

他方、②の側面の議論としては、板野長八 [1995] が代表である。板野は儒教を国教としての孔子教と規定し、それが君主をも含む人間界全体を教導するに至った段階をもって「儒教の国教化」と認定すべきだと説く。この指標をもとに板野は、いまだ皇帝が儒教の体系内に拘束されていない武帝期ではなく、図識に依拠する政治を行った光武帝の時代こそが国教化の完成期だと理解する。西嶋定生 [1970b] [1974] もま

た、儒教がその教義体系内に皇帝を取り込むことを「国教化」の重要な指標とするが、その時期は緯書の皇帝観が確立される王莽時代であるという。これに対して渡邊義浩 [1995] は、儒教の具体的な思想内容よりも国家支配との関わり方を重視すべきだとの視点から、在地勢力に儒教が受容される後漢期をもって儒教の国教化が完成したと主張する。

◆皇帝祭祀・即位儀礼

漢代に皇帝が主宰した各種祭祀については、金子修一 [1982] に要を得た記述がある。金子によれば、郊祀、宗廟、明堂、封禪などの皇帝祭祀は、前漢後期以降、それまでの方術的な性格を脱し、儒家の礼説に沿った形へと修正されていったという。儒教の国教化をめぐる板野長八や西嶋定生の主張と相呼応する見解と言えよう。保科季子 [1998] もまた、前漢後半期における宗廟制・郊祀制などの改革に着目し、それが劉氏の長としての「私的」な支配から、世界の中心としての「公的」な皇帝支配へとこの枠組みの転換をもたらすものであったと論じる。この保科の理解は、前漢後半期における皇帝独裁体制の強化という点で、外戚政治をめぐる富田健之や藤田高夫の立場と通ずるものがある。

即位儀礼に関しては、王朝内の帝位継承を分析した西嶋定生 [1975] が先駆的な研究である。西嶋によれば、漢の即位儀礼は本来、宗廟で行われる宗廟即位であったが、前漢中期以後、先帝の柩前で柩前即位を行ったのち宗廟に親詣する謁廟の礼を行う形式へと移行した。このうち謁廟の礼は宗廟即位の伝統を引くもので皇帝としての即位を示し、先立つ柩前即位は天子としての即位を示す。すなわち、漢代の即位儀礼は天子即位と皇帝即位の二段階から成るといえるのが、西嶋の見解の特徴である。ただし、この見解に対しては、漢代の即位儀礼は皇帝即位があるのみで、先立つ天子即位はなかったという松浦千春 [1993] の批判があり、金子修一 [1998] もこれに賛同している。

◆民間信仰・習俗

民間信仰・習俗に関する社会史的研究としては、工藤元男 [1998] を筆頭に挙げるべきであろう。同書の主たる対象は雲夢睡虎地秦簡の「日書」であり、厳密に言えば戦国時代の研究であるが、禹歩や行神など、後の時代に継承される習俗の先蹤を発掘した意義は大きい。後漢末農民反乱の核となった初期道教については、代表的な文献として大淵忍爾 [1991] の第二章「民族的宗教の成立」と、スタン [1967] とを挙げておきたい。前者は、張角と『太平経』、五斗米道の教団と教法、仏教との関係などの問題を、出土資料にも配慮しつつ論じる。また後者は、五斗米道教団の目指した共同体的社会の分析に鋭い洞察がみられる。考古学からの研究としては、林巳奈夫 [1989] が特筆される。画像石や壁画、銅鏡の図柄などを駆使して、漢人を取り巻く神々を蘇らせた林の論考は、図像資料を扱う際の手本とも言えよう。後漢時代の画像石や漢鏡の図柄に頻出する西王母に関しては、小南一郎 [1991] に委曲を尽くした分析があり、宇宙の秩序を体現する絶対者としての「原西王母」像が分裂し、様々な

神々が生み出されてくる過程を、豊富な文献と画像資料から跡付けている。

漢人の死生観については、墓券を用いて民間の死生観を考察した原田正己 [1963] が先駆的研究と言えよう。後漢時代の祖霊観念を扱った小南一郎 [1994] は、墓券や墓中に納められた解注瓶（鎮墓瓶）の読解を通して、死霊が生者に祟りをなすことを論証するとともに、こうした現象の背景に個我の意識の伸張があったと指摘する。また、蒲慕州 [1993] は、墓室構造や副葬品と死生観との関連について考察した著作で、横穴磚室墓の出現と生活用具の副葬が、編戸の齊民を基盤とした社会の形成と関連すると述べている。

婚礼と葬儀に関しては、両『漢書』から関連史料を網羅した楊樹達 [1933] が、現在もなお有用である。臘祭をはじめとする民間の季節祭については、Bodde [1975] が唯一の専著であろう。習俗・信仰研究の資料となる地券と鎮墓瓶については池田温 [1982] や劉昭瑞 [2001] に集成されている。
(初山 明)

3 史資料の解説

『史記』『漢書』をはじめ、秦漢時代の文献史料は、どれをとっても古典中の古典である。現存するテキストの成り立ちは複雑で、多くは後世の再編集を経ており、さらに清朝考証学者の校勘と注釈によって、ようやく読解可能となっているものも多い。現在我々が接する文献は、それ自体が中国学術史の精華である。一字一句を注釈まで（十三経注疏の場合は疏まで）、十分に吟味することが、古典の世界に敬意を払うこととなる。

一方、20世紀の考古学的発見は、簡牘など大量の出土文字資料をもたらし、未知の書籍や文書資料が次々に紹介されている。古代史の研究は、これらの新出資料を抜きにしてはもはや成り立たないと言っても過言ではない。しかし出土文字資料の研究は、まだ緒についたばかりであり、基礎資料ではなく応用研究の対象として、慎重に扱いたい。

ここでは代表的な文献史料について簡略に紹介し、近年刊行された活字本を中心とする参考書目を掲げて、書誌的な詳細は専門書に譲る。出土文字資料については、図版が単行本として出版されているものを中心に紹介し、『考古』『文物』など考古学関係の雑誌に発表されたものは省略する。

<1> 文献史料

◆歴史書

・『史記』

司馬遷撰。上古から前漢武帝時代までの通史。130巻。司馬遷が父司馬談の遺志

を継いで完成した。もと『太史公書』と通称されたが、『隋書』経籍志から『史記』という名称が定着した。帝王の事績を「本紀」、封建諸侯の家系を「世家」にまとめ、各時代に活躍した個人の伝記を「列伝」とする。また各時代の典礼や制度、水利・財政などの施策をテーマ別に論じた「書」、各種年表を「表」として添える。編纂の途中、司馬遷は李陵の禍にあい、武帝によって宮刑に処せられた。列伝の末尾に附せられた「太史公自序」に、その過酷な経験と苦衷がにじみ出ている。『史記』のうち10巻は、司馬遷の死後早くに失われ、褚少孫らによって後補されている。注釈として劉宋・裴駟の「集解」、唐・司馬貞の「索隱」、唐・張守節の「正義」が代表的で、「三家注」として合刻されている。また滝川亀太郎『史記会注考証』が最良の注釈書として知られる。

【テキスト・注釈】『史記』全10冊（中華書局標点本，1959年），滝川亀太郎『史記会注考証』（東方文化学院，1932～34年）。

【工具書】鍾華『史記人名索引』（中華書局，1977年），段書安『史記三家注引書索引』（中華書局，1982年），嵇超・鄭宝恒・祝培坤・錢林書『史記地名索引』（中華書局，1990年）。

【和訳書】小竹武夫・小竹武夫『史記』全8冊（ちくま学芸文庫，1995年），小川環樹他『史記列伝』全5冊（岩波文庫，1975年），小川環樹他『史記世家』上・中・下（岩波文庫，1980，84，91年），加藤繁『史記準準書・漢書食貨志訳注』（岩波文庫，1942年，1977年復刊）。英訳として，William H. Nienhauser Jr. (ed.) *The Grand Scribe's Records*, Indiana University Press が刊行中である。

・『漢書』

班固撰。前漢王朝の成立から王莽政権の滅亡までの歴史を記す。100巻（後世の版本では分割されて120巻）。王朝で歴史を区切った断代史であること、紀・表・志・伝の構成は、後世の正史の模範となった。著述は班固の父班彪によって計画され、班固が後漢の明帝・章帝の下で編纂、彼の死後、妹の班昭によって完成された。詔勅など原史料を活かした正確な記述と、儒教思想に裏付けられた端正な文章により、『史記』と並ぶ史書の名著とされる。武帝時代までの記述は基本的に『史記』を踏襲するが、細部に違いがあり、『漢書』を主として両者を常に見比べる必要がある。注釈としては、唐・顔師古注が、後漢から南北朝に至る諸注を精選し、さらに精密な解釈を記す。清・王先謙『漢書補注』が、清朝考証学を踏まえて師古注を補っている。

【テキスト・注釈】『漢書』全12冊（中華書局標点本，1962年），王先謙『漢書補注』（中華書局影印，1983年），岑仲勉『漢書西域伝地里校釈』（中華書局，1981年），楊樹達『漢書窺管』（上海古籍出版社，1984年），陳直『漢書新証』（天津人民出版社，1979年），金少英『漢書食貨志集釈』（二十四史研究資料叢刊，中華書局，1986年），陳國慶『漢書芸文志注釈彙編』（二十四史研究資料叢刊，中華書局，1983年），王利器・王貞珉『漢書古今人表疏証』（齊魯書社，1988年）。

【工具書】魏連科『漢書人名索引』（中華書局，1979年），陳家麟・王仁康『漢書地名索引』（中華書局，1990年）。

【和訳書】小竹武夫『漢書』全8冊（ちくま学芸文庫，1997～98年），加藤繁『史記準準書・漢書食貨志訳注』（岩波文庫，1942年，1977年復刊），内田智雄『漢書刑法志』（ハーバード燕京同志社東方文化講座委員会，1958年），川勝義雄・橋本敬造『漢書律曆志』（『世界の名著12 中国の科学』所収，中公バックス，1979年），富谷至・吉川忠夫『漢書五行志』（平凡社東洋文庫，1986年），狩野直禎・西脇常記『漢書郊祀志』（平凡社東洋文庫，1987年），永田英正・梅原郁『漢書食貨・地理・溝洫志』（平凡社東洋文庫，1988年）。

・『後漢書』

范曄撰。後漢王朝の歴史を記す。120巻。三国から南北朝にかけて、多くの著述家が著した後漢王朝の歴史書を、南朝宋の范曄が編集しなおした。読みやすく書かれ、各巻末の論議に鋭い史評が見られるが、必ずしも原史料に忠実ではない。唐代以後、范曄の後漢書だけが普及し、他の各種後漢書は散逸した。唐の章懐太子李賢の注釈に、各種の後漢書をはじめ、散逸した書物が多く引用されている。范曄の後漢書は本紀と列伝だけだったが、北宋時代に司馬彪『統漢書』から「志」（劉昭注）を補って、現行の120巻本となった。後漢書はテキストの成り立ちが複雑であり、『後漢紀』など他の史書、注釈に引かれる他の後漢書の引用、また後漢末期については『三国志』にも目を配る必要がある。王先謙『後漢書集解』が、章懐太子注を含め、後世の注釈を総合している。

【テキスト・注釈】『後漢書』（全12冊，中華書局標点本，1965年），王先謙『後漢書集解』（中華書局影印，1984年）

【工具書】藤田至善編『後漢書語彙集成』（京都大学人文科学研究所，1960～62年），李裕民『後漢書人名索引』（中華書局，1979年），王天良『後漢書地名索引』（中華書局，1988年）。

【和訳書】吉川忠夫『後漢書』全11冊（岩波書店，2001年～），渡邊義浩『全訳後漢書』全18冊（汲古書院，2001年～）

以上の正史については、『二十五史補編』（中華書局，1955年），梁玉繩『史記志疑』（二十四史研究資料叢刊，中華書局，1981年），梁玉繩等『史記漢書諸表訂補十種』（二十四史研究資料叢刊，中華書局，1982年），熊方等『後漢書三国志補表三十種』（二十四史研究資料叢刊，中華書局，1984年）なども、併せ見る必要がある。また顧炎武『日知録』，王鳴盛『十七史商榷』，趙翼『廿二史劄記』，錢大昕『二十二史考異』，王念孫『讀書雜誌』など、清代の学者の考証も極めて有益である。

なお、徐復『秦会要訂補』（中華書局，1959年），徐天麟『西漢会要』（上海人民出版社，1977年），同『東漢会要』（上海人民出版社，1978年）は、『唐会要』にならってまとめられている。調べ物の最初に見るのに便利だが、史料を網羅しているわけではない点に十分留意したい。

- ・『漢紀』

または前漢紀。荀悦撰。30巻。後漢末に編纂された、前漢王朝の編年体の歴史書。『漢書』の本紀と列伝を材料としており、史料的价值は少ないが、時代を反映した荀悦の史論が注目される。張烈点校『兩漢紀』(中華書局, 2002年)参照。

- ・『後漢紀』

袁宏撰。30巻。『漢紀』にならって後漢王朝の歴史を編年体で記す。范曄の『後漢書』よりも成立が早く、史料的にも豊富である。版本は『兩漢紀』として、荀悦の『漢紀』と合刻されたものが多い。近年の活字本として張烈点校『兩漢紀』(中華書局, 2002年), 周天游『後漢紀校注』(天津古籍出版社, 1987年)がある。後者については誤植に注意する必要がある。

- ・『東觀漢記』

班固等撰。後漢時代から官廷で断続的に編纂された後漢王朝の歴史書。唐代まで権威ある歴史書として盛んに読まれたが散逸した。輯本として、吳樹平『東觀漢記校注』(中州古籍出版社, 1987年)参照。

- ・『七家後漢書』

范曄の後漢書以後散逸した各種の後漢書について、諸書に残された引用文を集めた書(清・汪文台輯)。吳・謝承の後漢書, 西晋・薛瑩の後漢書, 西晋・華嶠の後漢書, 東晋・司馬彪の統漢書(「志」以外), 東晋・謝沈の後漢書, 東晋・袁山松の後漢書, 佚名氏の後漢書, 東晋・張璠の漢紀を集める。周天游『八家後漢書輯注』(上海古籍出版社, 1986年)参照。

- ◆官制・律令関係

- ・『独断』

蔡邕撰。漢代の諸制度や、詔勅をはじめとする書類の書き方など、有職故実を詳細に記す。有用だが版本によってテキストの異同も少なくない。和訳として福井重雅編『訳注 西京雜記・独断』(東方書店, 2000年)がある。

- ・『漢官七種』

漢代の制度に関する佚書を、清・孫星衍が集めたもの。叔孫通『漢礼器制度』, 闕名『漢官』, 王隆『漢官解詁』(胡広注), 衛宏『漢旧儀』, 応劭『漢官儀』, 蔡質『漢官典職儀式選用』, 丁孚『漢儀』を集める。断片的だが、官制などの詳細を知るのに欠かせない記事が多い。孫星衍『漢官六種』(中華書局, 1990年), パリ大学漢学研究所編『漢官七種通檢』(パリ, 1962年)参照。

- ・『漢制攷』

王応麟撰。鄭玄ら漢代の学者による『周礼』など経書の注釈は、漢代の制度を踏まえて書かれることが少なくない。この書物は、経籍の古注から漢代の制度に関する記述を集成しており、漢官七種と並んで利用価値が高い。ただし十三経注疏など引用元の文献で、注釈としての文脈を押さえて解釈する必要がある。同様の書物として劉善沃『三礼注漢制疏証』(岳麓書社, 1997年)も有用だが、標点の誤りに注

意する必要がある。

- ・『漢律考』

程樹徳による漢律の研究。『九朝律考』(中華書局, 1963年)所収。

- ・『漢律摭遺』

沈家本著。漢律の逸文を集成した研究。程樹徳の漢律考とならぶ基本文献である。『歴代刑法考』(中華書局, 1985年)所収。

- ◆地誌・農書関係

- ・『三輔黄図』

撰者不明。前漢長安の都城・苑囿・官署など、漢長安城に関する基本的文献史料。南北朝時代に著され、唐代に増補されたと思われる。陳直『三輔黄図校証』(陝西人民出版社, 1980年)が有用。

- ・『華陽国志』

常璩撰。三国から晋代の四川・雲南地方の歴史・地理を記す。戦国秦に遡る貴重な記述も見られる。任乃強『華陽国志校補図注』(上海古籍出版社, 1987年), 劉琳『華陽国志校注』(巴蜀書社, 1984年)参照。

このほか地誌的文献として、『水経注』や『元和郡県図志』のような後世の地理書の記述も、有用な情報源である。

- ・『西京雜記』

劉歆撰とされるが散逸し、晋・葛洪が逸文を集めた。前漢時代の逸事や宮殿などの制度を記す。和訳として福井重雅編『訳注 西京雜記・独断』(東方書店, 2000年)がある。

- ・『四民月令』

崔寔撰。後漢後期の豪族の農業経営と年中行事を月ごとに記す。原本は散逸し、輯本がある。繆啓愉『四民月令輯釈』(中国農書叢刊, 農業出版社, 1981年), 渡部武『四民月令——漢代の歳時と農事』(平凡社東洋文庫, 1987年)。

- ・『汜勝之書』

区田法など前漢時代の農業技術を記した農書。佚文の輯本がある。万国鼎『汜勝之書輯釈』(農業出版社, 1963年)。

- ◆子部書

- ・『塩鉄論』

桓寬撰。前漢昭帝の時に、塩鉄専売の存廃をめぐる、郡国の賢良文学と御史大夫桑弘羊との間で繰り広げられた論争を記す。実際の議論を忠実に記録しているとは限らないが、内容は政治から広く社会経済、思想にまで及ぶ。王利器『塩鉄論校注』(新編諸子集成第一輯, 中華書局, 1992年), 曾我部静雄『塩鉄論』(岩波文庫, 1934年, 1982年復刊), 佐藤武敏『塩鉄論——漢代の経済論争』(平凡社東洋文庫, 1970年)参照。

- ・『九章算術』

撰者不明。漢代の算学書。耕地の面積や穀物の体積、均輸に関する計算など、行政実務に関わる例題が貴重。白尚恕『九章算術注釈』（科学出版社、1983年）、大矢真一「九章算術」（『世界の名著12 中国の科学』所収、中公バックス、1979年）参照。

・『白虎通』

または白虎通義、白虎通徳論。班固撰。後漢章帝の時に白虎觀で行われた、五經の解釈をめぐる議論をまとめる。後漢王朝公認の学説を知るのに適する。陳立『白虎通疏証』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1994年）参照。

・『論衡』

王充撰。後漢時代の祥瑞や讖緯をはじめとする迷信などを、合理主義的に批判する。当時の俗信や習俗に関する記録として貴重である。黄暉『論衡校釈』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1990年）参照。

・『潜夫論』

王符撰。後漢末の豪族の横暴や官僚の腐敗を批判した政治論を記す。仲長統『昌言』や崔寔の『政論』（いずれも佚亡。輯本あり）など、同時代の他の政治論とも比較したい。汪継培『潜夫論箋』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1985年）参照。

・『風俗通義』

または風俗通。応劭撰。事物のいわれや人物などについて評論する。志怪小説のような要素も見られる。王利器『風俗通義校注』（中華書局、1981年）参照。このほか、漢代の著述として下記の書物がある。

・『新語』

陸賈撰。王利器『新語校注』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1986年）。

・『新書』

賈誼撰。閻振益・鍾夏『新書校注』（新編諸子集成第一輯、中華書局、2000年）。

・『淮南子』

淮南王劉安撰。劉文典『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1989年）、何寧『淮南子集釈』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1998年）。

・『春秋繁露』

董仲舒撰。蘇輿『春秋繁露義証』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1992年）。

・『法言』

揚雄撰。汪栄宝『法言義疏』（新編諸子集成第一輯、中華書局、1987年）。

・『新序』

劉向撰。趙善詒『新序疏証』（華東師範大学出版社、1989年）。

・『説苑』

劉向撰。向宗魯『説苑校証』（中国古典文学基本叢書、中華書局、1987年）。

・『申鑒』

荀悦撰。黄省曾注『申鑒』（新編諸子集成第2冊、世界書局、1974年）。

さらに、梁・昭明太子『文選』には、漢代の賦や散文作品が数多く見られる。費振剛・胡双宝・宗明華『全漢賦』（北京大学出版社、1993年）が現存するすべての賦を集める。散文については、嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』が、作者別にすべての作品を収録している。また『玉函山房輯佚書』など、佚書を集めた叢書も便利である。

なお、欧陽詢『芸文類聚』（上海古籍出版社、1965年）、徐堅等『初学記』（中華書局、1962年）、虞世南『北堂書鈔』、李昉等『太平御覽』（中華書局影印、1960年）のような類書は、大量の佚文資料を含むだけでなく、事項別に分類された史料集としても活用でき、利用価値が高い。ただし字句の異同や誤脱が多く、扱いには注意が必要。それぞれ完備した索引がある。

◆辞書

最古の字書として『爾雅』（郝懿行『爾雅義疏』上海古籍出版社、1983年）、識字書として史游『急就篇』が知られる。特に後者の顔師古注は、『漢書』の解釈にも役立つ。揚雄『方言』（錢繹『方言箋疏』訓詁学叢書、中華書局、1991年）は、前漢時代の方言について記す貴重な文献。『爾雅』にならって作られた劉熙『釈名』については、王先謙『釈名疏証補』（上海古籍出版社影印、1984年）が有用である。許慎『説文解字』は、部首の分類を最初に行った字書として有名。段玉裁『説文解字注』（上海古籍出版社影印、1981年。和訳：尾崎雄二郎編『訓詁 説文解字注』東海大学出版会、1981年～）は、王念孫『広雅疏証』（上海古籍出版社影印、1983年）と並んで、清朝考証学の最高峰とされる。テキストにはじまりテキストに帰るのが文献考証学の醍醐味だが、歴史学における実証もこれと無縁ではない。なお、阮元『経籍纂詁』（中華書局、1982年）は、経籍や史書の古注から、一字の訓詁を抜き出した訓詁辞典として極めて有用。近年の同様な辞典としては、宗福邦・陳世鏡・蕭海波『故訓匯纂』（商務印書館、2003年）がある。熟語を調べる『佩文韻府』とともに、大いに活用したい。

<2> 出土文字資料

出土文字資料は、第一義的には考古学的遺物である。文字だけを読むのでは不十分で、絶えず考古学的な背景から解釈を検討する必要がある。文献史料の読みが、いつ誰によって書かれたかを離れてはあり得ないのと同様、出土文字資料の解釈も、それがどこからどのように出土したのか、どこにどのように書かれているかといった基本的要素を捨象しては成り立たない。また、信頼できる釈文があるとしても、必ず自分の目で図版を確かめることが肝要である。

まず考古学関係の事典として、平凡社『世界考古学事典』（1979年）、中国大百科全書出版社『中国大百科全書 考古学』（1986年）がある。いずれも最新の成果とは言いがたいが、依然として有用。また林巳奈夫『漢代の文物』（京都大学人文科学研究

所, 1976年。朋友書店, 1996年再版)は, 王先謙『釈名疏証補』に準拠して, 漢代の文物を詳細に考証した名著。以下, 代表的な出土文字資料を紹介する。

◆居延・敦煌漢簡

20世紀の初頭, いわゆるシルクロードから中国の西北辺境地域には, ヨーロッパ各国の探検隊が調査に訪れた。その最大の成果が, 敦煌・居延の漢代木簡資料の発見である。多くは辺境の軍事基地で作成された公文書であり, 軍事や行政, 兵士の生活など, 内容は多岐にわたる。

1930年に発見された居延漢簡約1万点は, 日中戦争や国共内戦のさなか, 労艱によって整理と釈読が行われ, 1950年代になってようやく図版が刊行された。近年台北の中央研究院歴史語言研究所で, 中台の研究成果を踏まえた再整理が行われている。労艱『居延漢簡 図版之部』(1)~(3)(中央研究院歴史語言研究所専刊21, 1957年), 簡牘整理小組『居延漢簡補編』(中央研究院歴史語言研究所専刊99, 1998年), 中国科学院考古研究所『居延漢簡甲編』(科学出版社, 1959年), 中国社会科学院考古研究所『居延漢簡甲乙編』(中華書局, 1980年)は, 中台で刊行された旧居延漢簡の図版。各書を見比べる必要がある。釈文としては, 馬先醒ほか『居延漢簡新編』簡牘学会(簡牘学報第九期, 台北, 1981年), 謝桂華・李均明・朱国昭『居延漢簡釈文合校』(秦漢魏晉出土文獻, 文物出版社, 1987年)がある。特に後者は研究の成果を背景に, 踏み込んだ釈読がなされている。

1973年には居延周辺の再発掘調査が行われ, 数万点にのぼる新たな木簡資料が出土した。これを居延新簡と呼ぶ。旧簡では不明瞭だった遺跡の状態が明らかになるとともに, 甲渠候官を中心に出土の確かな資料が大量に提供され, 木簡学は新たな段階を迎えた。図版は甘肅省文物考古研究所他『居延新簡 甲渠候官』(中華書局, 1994年), 釈文は甘肅省文物考古研究所他『居延新簡』(秦漢魏晉出土文獻, 文物出版社, 1990年)参照。

旧敦煌漢簡は, 大英博物館に収蔵され, 居延漢簡と比べて研究が遅れていたが, 近年行われた発掘調査によって大量の新資料が発見されたことから, 研究が活況を呈している。特に敦煌懸泉では近年数万点の簡牘が出土しており, 整理と公表が待たれる。大庭脩『大英博物館蔵 敦煌漢簡』(同朋舎出版, 1990年)は旧敦煌漢簡の図版と釈読, 林梅村・李均明『疏勒河流域出土漢簡』(秦漢魏晉出土文獻, 文物出版社, 1984年)が釈文として有用である。最近の出土例の図版として甘肅省文物考古研究所『敦煌漢簡』(中華書局, 1991年), 中国文物研究所他『敦煌懸泉月令詔條』(中華書局, 2001年), 釈文として吳昶驥・李永良・馬建華『敦煌漢簡釈文』(甘肅人民出版社, 1991年)がある。

◆副葬簡牘

辺境の軍事基地の跡から廃棄された状態で出土する簡牘と異なり, 墓葬から出土する簡牘は, 意図的に埋蔵された副葬品である。このような副葬簡牘には, 遣策(副葬品リスト)や葬送文書のような, 葬送儀礼に密着したものばかりでなく, 墓主の生前

の生活を物語る書籍や文書が含まれることも稀ではない。

代表的な例の一つが, 1975年に湖北省雲夢縣睡虎地11号秦墓から出土した竹簡である。1100枚余りの竹簡には, 「編年記」(秦国の大事記に墓主の年譜を合わせたもの), 「日書」(日の吉凶を占う占卜書)のほか, 「秦律十八種」「効律」「秦律雜抄」(律の抜き書き)「法律答問」(律の語句解釈Q&A)「封診式」(公文書の書式集)「語書」(南郡守の訓辞)「為吏之道」(官吏の心得)といった書籍が含まれる。これらは秦の全国統一前後の時期に, 県の司法関係の役人であった墓主の職務に関係すると考えられる。これによって秦の律令の全貌が明らかになるわけではないが, 始皇帝時代の法律の実物が大量に出現した意義は大きい。雲夢睡虎地秦墓編写組『雲夢睡虎地秦墓』(文物出版社, 1981年), 睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社, 1990年), 劉信芳・梁柱『雲夢龍崗秦簡』(科学出版社, 1997年), 中国文物研究所他『龍崗秦簡』(中華書局, 2001年)参照。「法律答問」の訳書として松崎つね子『睡虎地秦簡』(明德出版社, 2000年)がある。また英訳と研究として, A. F. P. Hul-sewé, *Remnants of Ch'in Law* (Leiden: E. J. Brill, 1985)がある。

なお, 雲夢秦簡と内容的につながる副葬簡牘として, 1983年に発掘された江陵張家山漢墓の竹簡がある。漢初, 呂后時代の律や裁判関係の文書が見られ, 極めて重要な発見であるが, 研究はまだこれからという段階。張家山二四七号漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓竹簡 [二四七号墓]』(文物出版社, 2001年)参照。

また, 1993年に発掘された江蘇省連雲港市の尹湾6号漢墓出土の簡牘は, 前漢末年の東海郡の行政文書の控えとして注目される。墓主は郡の功曹に勤めた人物と見られ, 簡牘も人事に関係する内容が多い。従来ほとんど資料がなかった郡の行政の詳細を物語る点で, 貴重な資料である。連雲港市博物館他『尹湾漢墓簡牘』(中華書局, 1997年), 連雲港市博物館他『尹湾漢墓簡牘綜論』(科学出版社, 1999年)参照。

副葬簡牘に含まれる書籍には, このような法律行政関係の書籍だけでなく, 思想・文学関係の書籍も多い。最も有名な事例は, 甘肅省武威磨咀子6号墓で出土した『儀礼』写本, 長沙馬王堆1号漢墓で出土した帛書『老子』『周易』, 銀雀山漢墓出土の孫臏兵法であろう。特に馬王堆帛書の「戦国縦横家書」や銀雀山漢簡の「守令」各篇など, 古佚書の写本は, 文獻史料の欠を補う重要な発見である。湖南省博物館他『長沙馬王堆一号漢墓』(文物出版社, 1973年。和訳: 関野雄監修, 平凡社, 1976年), 馬王堆漢墓帛書整理小組『馬王堆漢墓帛書(壹)(參)(肆)』(文物出版社, 1980, 83, 85年), 銀雀山漢墓竹簡整理小組『銀雀山漢墓竹簡(壹)』(文物出版社, 1985年), 吳九龍『銀雀山漢簡釈文』(秦漢魏晉出土文獻, 文物出版社, 1985年), 甘肅省博物館他『武威漢簡』(文物出版社, 1964年), 甘肅省博物館他『武威漢代医簡』(文物出版社, 1975年)参照。

このほか, 湖北省荊州市関沮の秦漢墓からは曆や日書が出土している。湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館『関沮秦漢墓簡牘』(中華書局, 2001年)参照。また李均明・何双全『散見簡牘合輯』(秦漢魏晉出土文獻, 文物出版社, 1990年)は, 各地の秦漢

墓の副葬簡牘をまとめて釈読しており、便利である。

◆石刻

後漢代は墓碑をはじめ、石碑を立てて個人を顕彰することが流行した最初の時代であり、その文章は文献史料に見られない貴重な同時代資料となっている。長文の碑はほとんどが2世紀後半に属する。しばしば碑陰に立碑のために醸金した官吏のリストが刻されており、官制や地域政界の様相を物語る。永田英正編『漢代石刻集成』（同朋舎出版、1994年）は、現在原石あるいは拓本が伝えられている漢代の石刻を集めて釈読、注釈を加えたもの。最初に繙くべきである。洪适『隸釈・隸統』（中華書局影印、1985年）には、宋代に見られた漢代石刻が集められて貴重だが、その多くは残念ながら現存しない。清朝金石学の白眉として、王昶『金石萃編』、陸增祥『八瓊室金石補正』の釈読と考証は常に参照したい。工具書として、楊殿珣『石刻題跋索引』（商務印書館、1940年、1957年増訂）がある。

◆画像石・壁画

現代の歴史学において、画像資料の分析は新たな可能性を持っている。中国では武氏祠をはじめ、後漢代に流行した画像石の研究は宋代に遡り、近年では各地の墓葬から発掘された壁画もある。画像鏡など、同時代の他の画像資料と重なる点もあり、興味深い。石刻文字資料とともに活用したいが、資料の性格や、その研究の方法論には未開拓の部分が多い。特に文献史料との照合は極めて困難で、実証的な研究スタイルの確立が望まれる。

画像石の全体については、中国画像石全集編集委員会編『中国画像石全集』全8巻（河南美術出版社・山東美術出版社、2000年）がある。画像石は大まかな地域区分で山東、徐州、南陽、四川、陝西北部にわかれ、それぞれ一目でわかる技法的特徴がある。下記の書物が各地の事例を代表している。

山東省博物館他『山東漢画像石選集』（齊魯書社、1982年）

曾昭燏・蔣宝庚・黎忠義『沂南古画像石墓発掘報告』（文化部文物管理局、1956年）

江蘇美術出版社編『徐州漢画像石』（江蘇美術出版社、1985年）

南陽漢代画像石編輯委員会『南陽漢代画像石』（文物出版社、1985年）

聞宥『四川漢代画像選集』（中国古典芸術出版社、1956年）

陝西省博物館他『陝北東漢画像石刻選集』（文物出版社、1959年）

壁画は、洛陽周辺、河北北部、内モンゴ、遼寧から発掘され、画像石の分布とはずれがあることに注意が必要である。それぞれ下記を参照。

洛陽市第二文物工作隊他『洛陽漢墓壁画』（文物出版社、1996年）

河北省文物研究所『安平東漢壁画墓』（文物出版社、1990年）

内モンゴ自治区博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁画』（文物出版社、1978年）

北京歴史博物館等『望都漢墓壁画』（中国古典芸術出版社、1955年）

◆金文・印章・封泥など

漢代の青銅器銘文には、殷周時代のように長文のものはないが、器物の収蔵場所や整理番号のような要素に加えて、製造した工房や工人名を刻したものもあり、官営工房や器物管理の組織を分析する資料となる。容庚『秦漢金文録』（北京、1931年）が代表的な著録。

印章は官印を主体とし、文献史料に見えない官名など、官制の実物資料となる。羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』（文物出版社、1987年）がよくまとまっている。印章独特の字体を整理した、羅福頤『漢印文字徵』（文物出版社、1978年）もある。

封泥は、文書を封印した印影のみられる粘土塊で、印章の実物よりも数多く見つかる。呉式芬・陳介祺『封泥考略』（中国書店影印、1990年）、周明泰『統封泥攷略』『再統封泥攷略』（京華書局、1928年）、呉熊『封泥彙編』（上海古籍出版社影印、1984年）が有名。東京国立博物館編『中国の封泥』（二玄社、1998年）に、陳介祺旧蔵の封泥の拓本と写真が見える。また近年出土した秦代の封泥について周曉陸・路東之編著『秦封泥集』（三秦出版社、2000年）がある。

このほか、秦から前漢にかけて、陶器を製造する際に工房で印記された陶文がしばしばみつかると。袁仲一『秦代陶文』（三秦出版社、1987年）が、始皇陵周辺の膨大な陶文資料をまとめている。

（佐原康夫）

第3章

三国五胡・南北朝

渡辺信一郎・關尾史郎・川合 安

1 研究の視点

本章の対象は、3世紀初頭から6世紀末にいたる分裂時代である。20世紀初頭に京都大学の内藤湖南が提起した時代区分論によれば、この時期は、漢末三国から唐末五代にいたる中世貴族政治の時代の前半期にあたる。第二次世界大戦後まもなく、歴史学研究会が中心になって提起した「世界史の基本法則」にあつては、唐末五代までが古代奴隸制社会と規定された。このため戦後になって、全く異なる二つの時代認識が提示されることとなった。中世社会論を主張する論者は、分裂期である魏晋南北朝時代を中世封建制論の枠組みでとらえることにより、歴史学研究会の古代奴隸制社会論を批判し、この時期の大土地所有制や小作制の歴史的性格をおおむね農奴制概念によって認識した。この対立は、基本的には1980年代半ば頃までつづいた。

ソヴィエトマルクス主義を基礎にする「世界史の基本法則」に対し、1960年代にはすでに史的唯物論の立場からも、その西欧中心主義と単線発展段階論に対して批判が提出され、各民族・国家に固有の発展段階とそれらを基礎とする構造的な世界史認識の構築がめざされた。谷川道雄[1976]は、中世社会論の立場から「世界史の基本法則」を批判し、中世社会の本質的規定から封建制・農奴制を切り離し、民衆の輿論を基礎にする共同体論によって貴族制社会をとらえなおした。60年代から80年代半ば頃までは、「世界史の基本法則」が史的唯物論と中世貴族制社会論との両者から批判的に検証され、個別実証研究の拡大をともなって、新しい展開が見られた時期である。

1970年代半ばに文化大革命を収束させた中国は、70年代末から改革開放政策に転身し、89年の天安門事件による中断をへて、社会主義市場経済に邁進するなかで巨大な変容を示し、今日では世界第6位の国内総生産を誇り、憲法に私有財産の保障をうたうまでになった。国際的には、80年代末90年代初頭の東欧・ソ連の崩壊と冷戦

構造の解体を契機にマルクス主義・史的唯物論の影響力が後退した。60年代から始まった「世界史の基本法則」批判を中核とする戦後歴史学の再検討は、70年代半ば頃からの社会史研究の隆盛とともに、80年代を通過点として90年代には質的に転換した。今日、現代歴史学と呼ばれるものである。

1990年代以降、戦後歴史学の理論的背景をなした史的唯物論が退潮するとともに、文化人類学、民族学、生態学、アメリカ社会学など、新しい社会諸科学の理論が導入されるようになり、また理論自体への忌避も増大傾向にある。いまや戦後歴史学の主流をなした社会経済史は下火になり、均田制、大土地所有制研究にかわって五胡・蛮をはじめとする民族・種族からの接近が、とりわけ若い世代の研究者に顕著である。さらに言えば、貴族制研究にかわって官僚制・専制国家研究が、階級支配・身分制研究にかわって秩序構造・礼制祭祀研究・ネットワーク論が、農業・農村研究にかわって都城・都市研究が、総じて発展よりも構造が、対立よりも秩序が研究の主流を形成しつつある。理論の多様化は問題関心の多元・多様化を反映しており、トゥルファン文書・長沙呉簡・新出石刻などの出土文字資料の増加、さらには電子媒体によるテキスト処理能力の向上は、研究の細密化と分散化をおしすすめている。必要なことは、研究者が置かれている政治的社会的状況と互いの問題関心を理解することであり、多様な成果をとり入れて総合化をめざす知的貪欲であろう。(渡辺信一郎)

2 研究の展開

<1> 三国五胡

三国から五胡十六国に至る時代は、西晋による短期間の統一をはさんではいるものの、始皇帝の時代から長期にわたって持続した中国世界の統一が崩壊した後に出現した、中国史上初めての分裂の時代である。この時代に関しては、後続する南北朝時代とあわせて、川勝義雄[1974]という優れた概説がある。また三国から隋唐時代までをあつかった谷川道雄[1977]もハンディながら、有益であろう。さらに最新の成果としては、後漢から三国時代を扱った金文京[2005]、晋から南北朝時代を扱った川本芳昭[2005]もある。

◆三国・西晋時代

長期に及ぶ分裂の幕開けとなった三国時代の歴史的な位置づけは、戦後の中国史研究にとって大きなテーマの一つであった。川勝義雄[1954]は、曹操軍団に任侠的な結合関係を見てとり、そこに新たな時代性を指摘した。いっぽうこれに対して五井直弘[1956]は、曹操政権の中枢を占める人士たちが、家父長的かつ隷屬的な関係に媒介されており、その意味では秦漢時代と同質と考えた。また好並隆司[1970]は、「小農民」の普遍化を曹操政権の登場に重ね合わせている。これら三説には大きな隔

絶があるが、前二者について言えば、特定の集団の分析から、当該時代の歴史的な本質に迫るのには限界もあるだろう。その後この問題に迫った研究は多いが、ごく最近では、渡邊義浩が[2004]などで、「名士」をキーワードにして、政権とそのもとにあった人士を多角的に論じている。またこれと前後して、曹操の伝記が相次いで出版された。石井仁[2000]と堀敏一[2001]だが、あわせ読むことによって、政治史や社会史の到達点が確認できよう。

蜀漢については、その注目度のわりには成果に乏しく、古くは狩野直禎が[1959]などで蜀漢政権を支えた人士の出身や動向を検討し、新しくは渡邊義浩が[1988]などでより精密な分析を試みている程度である。

また呉については、まず宮川尚志[1955]がその全過程を概述した。これをうけ、大川富士夫が[1967]などで、呉政権下における江南社会について、士大夫層の成長を見るのに対し、川勝義雄は[1970]で、華北社会に比して江南の後進性を強調し、在地豪族を開発領主になぞらえている。この両説が呉政権の支配体制の不備を説く点では共通していることを看破した石井仁[1995]は、軍制を丁寧に分析しながら、それが弱体とはいえないことを主張している。

魏は統一を果たさず西晋に替わられた。その契機となった正始の政変については、葭森健介[1986]と伊藤敏雄[1986]があるが、司馬氏に打倒された曹爽政権の性格について対照的な理解を示している。こうして成立した西晋だが、呉を滅ぼして統一を再現させたものの、八王の乱によって自壊するまで時間はかからなかった。西晋の成立から八王の乱の時期の政治過程については、ごく最近になって安田二郎の一連の仕事が、安田[2003a]としてまとめられたが、さらに八王の乱から永嘉の乱に至る混乱に満ちた政治過程についても、宮川尚志[1956]に整理されている。また福原啓郎[1995]は、西晋の初代皇帝武帝の数少ない伝記である。

制度については、最初に九品官人法についてふれるべきであろう。魏で創設された官吏登用制度にして官制の運営方法である九品官人法については、郷品と官品の並存ならびに連関のメカニズムを解明した古典的な名著ともいべき宮崎市定[1956]がなお輝きを放っている。それは同書が単なる制度史にとどまることなく、三国から南北朝に及ぶ時代を中国史上の貴族制期として把握せんとしたその構想の大きさによっていえるべきだろう。その後の貴族制や九品官人法に関する膨大な研究の蓄積は、戦後に限定すれば、この宮崎による成果を基底において展開してきたといっても過言ではない。魏晋時代についても、貴族の官僚的側面を強調した矢野主税[1976]や越智重明[1982]などと、社会的な存在を本質とする川勝義雄[1982]のあいだで議論が繰り広げられたが、これを止揚する試みのうちで最大の成果は、出土史料をも素材にしながらかつ身分制をも視野に入れて多角的な分析を展開させた中村圭爾[1987]であろう。これ以後、魏晋時代に限っては、九品官人法をはじめとする貴族制に関して目ぼしい成果を共有できないのは、理由のないことではないのである。

むしろ近年、注目を浴びているのは、軍制であろうか。後漢末期以降、政治的な混

乱が持続する状況のなかで、軍制が整備・強化され、対立する政治勢力間の勝敗の帰趨を左右することになるとともに、それが国家権力に新たな性格を賦与することにもなろう。主に地方支配との関わりで都督制度を詳細に分析した小尾孟夫[2001]は、そのもっともまとまった成果であり、先の石井仁[1995]も、石井の三国時代の軍制研究の一環というべき意味をもっている。ただ貴族制研究の膨大な成果にどのようにして架橋するのか、も含めてまだまだ研究は緒についたところであろうか。なお軍制と密接に関連する兵制については、浜口重国[1957]のごとき成果を共有している。

土地制度や租税制度に関して、最初に掲げるべきは西嶋定生[1956]であろう。魏の屯田には民屯(典農部屯田)と軍屯の両種があり、前者が魏末・晋初に廃止され、旧屯田民は課田の対象となり、兵役も賦課されたとする。西嶋も言うように、魏では田租が定率から定額に移行するとともに、戸を単位とする戸調が新設されたが、これについては、渡辺信一郎[2001]が、漢代の賦斂に制度的な淵源を求めている。また西晋の占田・課田制も、魏の屯田制に勝るとも劣らない研究に恵まれているが、個別的人的支配の展開のなかで位置づけようとした堀敏一[1974]がもっとも包括的な成果であろう。これに対して渡辺[1995]は、藤家禮之助[1989]をふまえながら、南朝へと連なる国家的土地所有の成立形態としてこの土地制度を位置づけている。

これらの制度を規定する法体系だが、西晋の泰始律令は中国史上初めての律令である。堀敏一[1980]はこれをあつかった専論だが、栗原益男[1986]は、先行する魏の法体系に、そこに至る過渡的な性格を見出している。近年では、冨谷至[2000][2001a]が、広い視野からこの問題を論じている。甘肅省の五胡十六国時代の墓葬から出土した泰始律の公開が俟たれるところである。

制度を生み出し、またそれに規制された社会に眼を転じる。地域社会やそれと深く関わっていた名族のあり方については、大川富士夫[1987]や多田猶介[1999]などに描かれているが、堀敏一[1968]が説くように、九品官人法の郷品さえ、地域社会における人物評価を前提としているならば、貴族制の成立それ自体が、地域社会の歴史性に大きく規定されていたことになる。その意味では、中村圭爾[1995a]による地域社会に関する論点の整理は示唆に富んでいる。

一方この時期は、新たな集落として城外に「村」が成立した時代でもあった。豊かな事例を集めた宮川尚志[1956]や、中世的な特質を見た宮崎市定[1960]に対して、堀敏一[1996]は村の体制的な未熟さを強調する。社会的な混乱に端を発する移動や開発が村の広汎な出現の背景にあることは否定できないであろうが、華北では防御のための壁をともなった塙と呼ばれる集落も後漢末期から現れていた。堀は村と、那波利貞[1943]が論じた塙とを貫く歴史性に着目したわけだが、村にせよ塙にせよ、城内の区画に淵源する里を相対化しつつあったことは明らかで、三国から五胡十六国時代の民戸が、里に附籍されつつも、城外の空間で生活を営んでいたらしいことは出土史料からもうかがい知ることができる。

社会に関しては、礼の規範を通じて家族を論じた神矢法子[1994]もある。文化史

にも関わる成果だが、三国時代の文化そのものをあつかった成果は、前後の時代に比して、歴史学からはみるべきものが少なく、ここでは省略したがいたい。

対外関係については、倭国との関係に関心が集中する傾向があるが、西嶋定生 [1999] は、西嶋晩年の実証的成果を網羅しており、大庭脩 [1971] は、制度史の視点を織り込みながら問題に迫る。このほか、中国世界に包摂された江南の非漢族を扱った谷口房男 [1997] や川本芳昭 [1998]、またこうした非漢族が三国の政治的な分裂にひきずりこまれていくさまを跡づけた關尾史郎 [2000] などが最近の成果である。

中国における成果はそれぞれ枚挙にいとまがないが、貴族制もその契機ともいえるべき九品中正法について正面から論じた成果は多くはない。社会・経済については、唐長孺 [1955] や周一良 [1963]、さらには田余慶 [1993] などに収録された諸論考が、個別の問題については、なお示唆に富んでいる。

◆五胡十六国時代

130年間あまりにわたり、華北だけで16以上の政権が興亡した五胡十六国時代は、長いあいだ、政治的かつ社会的な混乱だけが喧伝されてきた。わが国では、わずかに五胡の一つに数えられている南匈奴の動向を追った内田吟風や、この時代を民族移動の時代としてとらえた田村實造などの成果があるにすぎなかった。それぞれ内田 [1975a] と田村 [1985] にまとめられているが、それとて、内田が「五胡乱」と呼んでいるように、この時代が混乱の時代であったという認識から脱却できていたわけではなかった。

この時代をはじめ積極的に中国史上に位置づけたのは、谷川道雄 [1971] である。隋唐帝国の根源を五胡十六国時代に求めた谷川は、先行研究の上に、前趙・後趙、前燕、および前秦など諸政権の構造分析を行った。これらの政権では、いずれも宗室の諸王たちが強力な軍事力を保有して皇帝権を掣肘しており（宗室的軍事封建制）、かかる遊牧時代の部族社会に淵源をもつ不安定な体制が政権を瓦解に追い込んだという。一時的ながら華北の統一を実現し、民族差別を解消したかにみえる前秦でさえ、狭隘な部族制の原理を克服できなかったのである。谷川によれば、北魏が華北の統一と政権の長期化を達成できたのは、早期に部族の解散を断行して、皇帝権力の確立をなしとげたからということになる。

谷川道雄の研究は斬新であると同時に説得的でもあったが、宗室的軍事封建制なる概念は必ずしも実体化されているとはいいがたく、遊牧時代の部族社会に対する理解も理論的な要請をあまり超えてはいない。

その後の代表的な成果に、護軍制度の検討から支配の末端に位置する部族社会に及んだ町田隆吉 [1982] や、この時代頻繁に行われた徙民措置の分析から政権の構造をさぐるようとした關尾史郎 [1981] があり、近年では、藤井秀樹 [2001] が前秦の政治過程の分析を通じて、谷川道雄の宗室的軍事封建制論の再検討を試みている。

また漢族と胡族双方の相互意識の変遷からこの時代をあとづけた川本芳昭 [1984] や、官職の配置状況から諸政権の方向性を論じた三崎良章 [1991] も、重要な成果で

ある。

なお谷川道雄が言及しなかった弱小政権や、これらも含めた諸政権間の国際関係も今後検討が必要だが、三崎良章 [2002] は、「十六国」に算入されない政権も含めて、この時代を概述する。關尾史郎は [1982] などで一次史料の元号表記を分析しながら、諸涼政権の対外政策を論じている。また、五胡十六国成立の前提となった諸民族の移動と、結果としての漢族の移住・拡散を統一的に論じた關尾 [1999] もある。

五胡十六国時代は、仏教の普及という点からも重要な時代であった。それは諸政権がこぞって高僧やその集団を招聘・保護したところが大きいのが、歴史学からのアプローチは多くなく、この時代全般に論及しているのは小田義久 [1972] くらいである。

なおこの時代に関する中国の研究について附言しておく、早くに唐長孺 [1955] がこの時代の歴史過程に対して包括的な分析を行っており、谷川道雄の宗室的軍事封建制論にもその影響が及んでいるようだが、その後は民族問題に関心が偏向して、前秦が東晋を攻撃した淝水の戦いが論議のまよになったりしたが、見るべき成果は多くはない。

(關尾史郎)

<2> 南 朝

◆概説書

とくに南朝だけをあつかった概説書はなく、魏晋南北朝全体についての概説書を参照すべきである。古典的著作である岡崎文夫 [1932] の内編は政治史、外編は社会・経済・制度を含む広義の文化史を中心に叙述しており、概説としてはやや難解であるが、今もなお参照の価値がある。内編のみ、平凡社より再刊されている（岡崎 [1989]）。その後に出た概説では、一般向けではあるが、川勝義雄 [1974] が平易で示唆に富み、松丸道雄他編 [1996] が詳細である。最近刊行のものに、川本芳昭 [2005] がある。

◆政治

南朝の諸王朝はいずれも不安定で170年の間に、宋・齊・梁・陳の四王朝が交代した。王朝交代の際の禪讓革命について考察するためには、古典的な研究として宮川尚志 [1956] の「禪讓による王朝革命の研究」が必読文献である。即位儀礼や祭祀などの面から皇帝制度の特質に迫った研究としては、尾形勇 [1979]、金子修一 [2001] [2002]、松浦千春 [1993] [2003] などがある。中村圭爾 [1999a] は、中原を離れて江南の地に存在しつつ、王朝の正統性や文化伝統の優越性を保持することに努めた南朝国家の特異な性格を論じている。この南朝国家の支配領域は、長江下流デルタ地帯、いわゆる三吳地方を除けば、長江中流域の江陵をはじめ、いくつかの拠点都市と、それらを結ぶ水陸の主要な交通線を確保していたに過ぎなかった。その外側には、「蛮」と称される非漢族が居住し、それらの蛮民を率いる首領が、王朝から左郡・左県と称する特殊な郡・県の長官に任ぜられていた。彼らは独立政権を樹立するには至

らなかつたが、ふつう歴史地図などで南朝の領域として図示される領域にも、王朝の直接的支配の及ばない広大な領域が広がっていたことに注意しなければならない。これら「蛮」については、谷口房男 [1996][1997][2003] や川本芳昭 [1998] が有益である。

東晋から南朝にかけての江南政治史を通観する業績としては、まず、川勝義雄 [1982] 所収の諸論文があげられ、北来の貴族層が江南の地で興隆し、やがて実権を喪失していく過程を軍事・経済・文化各方面と関連させながら鮮明に叙述する。その後の研究では、外戚のあり方や新興勢力たる寒門・寒人勢力の台頭、旧来の門閥貴族層の自己革新などの問題に焦点をあわせた安田二郎 [2003a] 所収の諸論文が重要である。

東晋政治史については、「皇権政治」が長期間持続した中国史において唯一「門閥政治」の行われた特徴ある時代として東晋時代を位置づける田余慶 [1989] がある。田著書刊行の前後に東晋政治史研究を推進した金民壽による [1989][1992] は、東晋初代皇帝となる司馬睿（元帝）と東晋中期の実力者桓温と、それぞれの府僚の分析を中心に、北来貴族が政治・軍事の権力を掌握する過程を跡付けた。

劉裕の革命に至る東晋末期政治史に関しては、越智重明 [1957] が、劉裕政権によって流亡無籍者を戸籍に付ける土断政策が断行された点に、江南土着の豪族層に対する強硬姿勢を読み取り、北来貴族層に支えられた貴族政権的性格を見出す。ただし、貴族政権とはいっても、皇帝権力が一段と強化されたのに対して、北来貴族が寄生官僚的性格を強めた点を重視して、その点を東晋貴族政権との質的相違ととらえたのである。この越智説を批判して、葭森健介 [1980] は、土断政策を郷村社会安定策ととらえ、江南土着の豪族層が劉裕政権を支持していたことを論じ、これら豪族層を支える郷村社会こそ南朝的皇帝権力を生み出した原動力であったと主張した。劉裕の革命が、皇帝権力の強化としてとらえられることは、とくに越智によって力説され、通説的理解となっているが、川合安 [2003] はこの通説に疑問を呈し、官僚層の支持をかりうじてつなぎとめた不安定なものでしかなかった点を強調する。劉裕の伝記としては、吉川忠夫 [1989] が一般向けだが、有益である。

劉裕は北府軍団の軍事力を背景として台頭したが、中村圭爾 [1999b] は、その北府の拠点である南徐州社会と南朝政権との関係を取り上げ、中村 [2001a] は、荊州とともに西府軍団の拠点として知られる豫州・南豫州の沿革と兩州が政治史上に果たした役割を論じている。

南朝、劉宋時代については、小尾孝夫 [2003] が劉宋前期における皇帝家の婚姻関係の分析から当時の政治構造の特質に迫っている。劉宋王朝の皇帝のなかで、専制的傾向を前面に打ち出した皇帝として知られるのが孝武帝である。この孝武帝については、越智重明 [1985a] がある。孝武帝の次の前廢帝期の政治史を手がかりに、『宋書』の描く劉宋政治史の特徴——皇帝・恩倖寒人対貴族という図式に基づく叙述——を浮かび上がらせつつ、そのような『宋書』の立場を相対化したうえで劉宋政

治史全体の流れを見通そうとした試みが川合安 [2002] である。また、宋齊革命に際しての貴族層の国家観や社会観に鋭い分析を加えた安田二郎 [1985] や、同時期の貴族層が「読書」の必要を自覚していた証左となる王僧虔「誡子書」に精査を加えた安田 [1981] は、当時の政治史の理解を深化させるために有益である。

南齊・武帝の永明年間は、南朝のなかでは比較的安定した時期の一つであるが、この時期の政治構造を唐寓之の乱を取り上げて解明したのが川合安 [1995a] である。恩倖寒人がかかわる武帝政権の推進する戸籍検査政策に対する反発が唐寓之の乱であったが、とくに『南齊書』の記述には武帝政権の政策に批判的な皇族内良識派や貴族層の立場が反映されていることを論じる。梁代政治史関係では、簡文帝や元帝の政権集団の形成過程を究明し、累層的な君臣関係の実態を浮かび上がらせた石井仁 [1985][1986] があり、梁代に限らず、南朝の政治構造全般を考察する上でも重要な視点を提起している。南朝最後の王朝、陳朝の成立過程については、陳霸先軍団やその他の諸集団に分析を加えた榎本あゆち [1982] などがある。

◆制度

東晋南朝時代は門閥貴族社会の発達した貴族制の時代といわれ、そのような貴族を生み出した機構制度に関心が注がれた。この方面の研究を飛躍的に進展させるきっかけとなったのが、宮崎市定 [1956] であり、門地二品といわれる貴族階層が形成される契機となった九品官人法の仕組みや、そのもとで発達した官制の構造的特質をはじめて明らかにした。すなわち、九品のランク付けには、任官候補者を才徳によってランク付けした郷品と、官職をランク付けした官品との二種類があり、郷品二品ならば、官品六品の官職から起家（はじめて任官）するという郷品と官品との対応原則がはじめて明らかにされたのである。その画期的成果をふまえて、越智重明 [1982]、中村圭爾 [1987] が刊行されるに至った。

越智重明 [1982] の第五章「制度的身分＝族門制をめぐって」は、東晋南朝における家格の層序を「全国民を対象とする制度」として把握する族門制論の体系を明らかにしたものである。この族門制とは、西晋末に形成された甲族（上級士人層）、次門（下級士人層）、後門（上級庶民層）、三五門（下級庶民層）から成る身分制のことである。なお、族門とは、甲族、次門、後門、三五門という家格を指す用語であると同時に、そのような家格と判定された「家」そのものを指す用語でもある。この甲族は郷品一、二品をえて、20～24歳で、それぞれ官品五、六品から起家し、第一品を極官とする。次門は郷品三～五品をえて、25～29歳で、それぞれ官品七～九品から起家し、第五品官を極官とする。後門は郷品六～九品をえて、30歳以上で、それぞれ流外一～四品から起家し、第七品中の二品黜位を極官とする。三五門は兵役に徴発される一般の庶民層である。要するに、自分の属する族門によって郷品、起家の年齢、起家の官品、極官が自動的に決定されるという、きわめて整然とした身分制が施行されていたと、越智は想定したのである。

この族門制論を受容しつつ、修正や批判も加えて研究を推進した成果が、野田俊昭

[1994][1997][2002]などである。一方、族門制論に対して疑問を提示し独自の学説を展開したのが、中村圭爾 [1987] の第二篇「九品官制の貴族制的構造」であり、家格というよりはむしろ父の官職が子の起家官に影響する任子制原理を重視した。また、安田二郎 [1981] も、族門制論批判の論点を含む。最近では、川合安 [2004] が族門制の論拠となっている史料を取り上げて批判している。なお、貴族層の形成とかかわる身分的内婚制については、中村圭爾 [1980] などによって深められている。

わが国の学界で貴族制と称する体制が、中国においては士族制や門閥制という用語で表現されるが、それはあくまで封建地主制を前提としたものであって、わが国の貴族制研究と懸隔のあることは、中村圭爾 [1987] の序章において指摘されている。その後、中国においては、祝総斌 [1995] が、高門、次門、役門という三つの階層から成る「門閥制度」を論じている。この高門は族門制論でいう甲族に、次門は同じく次門と後門に、役門は三五門にほぼ相当するなど、族門制論と共通点や相違点があるが、今後、両国学界の交流の進展によって、史料解釈の相違点について具体的生産的論議の行われることが期待されよう。

東晋南朝時代には、唐代における中書・門下・尚書の三省制度の原型が形成された。それまで「制詔」ということばではじまっていた「詔」が、東晋になると「門下」ということばではじまるようになったことは、早く内藤乾吉 [1930] によって指摘されている。その後、尚書の案奏の作成と処理の過程を研究した野田俊昭 [1977] や金子修一 [1980] が公表されたのを受けて、中村圭爾 [1989] が国家意志決定の手続きとしての議を取り上げ、その後も、中村 [2000] に至る多数の論文において、文書行政に関する研究を推し進めている。議については、渡辺信一郎 [1996] が、漢代より唐代に及ぶ広い視野から取り上げ、窪添慶文 [1997] も、北朝の議と比較しつつ南朝の議を検討している。榎本あゆみ [1985] は、梁代における中書舎人の就任者の変容を通して、文筆や礼学の才による官吏登用の理念が貫徹しえなかったことを明らかにし、その要因を考察している。

三省以外では、奏弾をつかさどる御史台について、川合安 [1988] などがあり、中村圭爾 [2002] は、御史中丞の風聞による奏弾を取り上げ、その追究を通じて南朝の士人社会内部の規制力を見出している。

この時代の官人の身分表示の制度についての研究が近年進展をみせ、岡部毅史 [1998][2002] などが公表されている。また、小林聡 [1996][1998] などは、印綬・冠履などの服飾面を通じて、官爵体系の構造を解明している。石井仁 [2001] は、虎賁・班劍の賜与を通じて、輔政の任にあたる宰相と皇帝権力との関係を解明している。

東晋南朝における官僚機構の中枢部というべき建康の都城や宮城に関する研究は、近年活況を呈しており、中村圭爾 [1984a][1988][1992a][2004]、外村中 [1998]、渡辺信一郎 [2003a]、内田昌功 [2004]、劉淑芬 [1992]、盧海鳴 [2002]、賀雲朝 [2005] などがある。とくに渡辺 [2003a] に図示された建康宮城の空間構成は、南朝の正史等に記述される諸事件の圧倒的多数が、この場所で生じたことであるだけに、

きわめて有用である。

官僚の俸禄については、中村圭爾 [1978-79] が詳しく、制度の具体的究明をふまえて、当時の官僚における俸禄の意味にまで迫り、貴族がなぜ皇帝の官僚として、官僚体制のなかにくみこまれていったのか、という課題を提起した。この課題に答えたのが中村 [1997] であり、貴族が官僚となったのは、「皇帝の官僚として自らを支配者層に位置付け、あるいはその権力を分与されるためではなかった。そうすることは、かれらにとってむしろ自己否定に直結するものであった」と考え、「皇帝を頂点にあたかも近代官僚制のごとくに編成された九品官制は、実は唯一の正当性と普遍性をもつ身分表示の組織であり、その中に位置付けられることが社会的な存在としての貴族の公的な存在の証明だったのである」と六朝貴族の官僚としてのあり方の特徴を論じた。当時の官僚制度はもとより、広く貴族制社会の特徴を研究する上での必読文献といえよう。

地方行政制度全般に関しては、巖耕望 [1963] が必読文献である。この時代を特徴づける地方軍政機構である都督制度については、小尾孟夫の専著 [2001] を参照すべきである。地方軍政長官である都督は、民政長官である州刺史を兼任して州鎮機構に君臨することとなるが、この州鎮に関しては、越智重明 [1953] などがある。これもまたこの時代の特徴を示す地方長官の本籍地任用の研究には、窪添慶文 [1974] などがある。南朝の郡太守の序列を示す班位については野田俊昭 [1990] が、地方長官の任期をめぐる沈約の地方行政制度改革論については川合安 [1995b] が、それぞれ取り上げている。

南朝の法制については、滋賀秀三 [2003] の第一章「法典編纂の歴史」により概要を知ることができる。官人の処罰としての除名等については、中村圭爾 [1974] [1986] や越智重明 [1993] がある。また、同伍（五人組）の犯罪に関する法律論議を取り上げたものに、増村宏 [1955]、川合安 [1992] などがあり、同伍制（符伍制）一般を論じた増村 [1956] も参照すべきである。この論議には、五人組の連坐に士人をくわえるかいなかといういわゆる同伍犯の論議と、窃盗罪に対する罪科軽減の論議との二つの論点が含まれ、その結論は、士人の五人組における連帯責任を事実上免除するものであったが、他方、窃盗罪については士人たるものの責任を強調して士人を減刑措置の適用外とすることでバランスをとったものとなっており、南朝における士庶区別、貴族制問題を考えるうえで重要な素材を提供する。そのほか、律令にみえる身分構成を追究した中村 [1995b] や、劫罪（強盗罪）の処罰としての肉刑と治士を取り上げた石岡浩 [2002] がある。

田制や税役制に関しては、藤家禮之助 [1989]、渡辺信一郎 [1995]、草野靖 [2001-02] などがあり、戸籍については、池田温 [1979]、中村圭爾 [1992b] などが有益である。財政機構に関する研究には、南朝特有の財務行政機構である台伝を取り上げた中村 [1984b] がある。台伝は、山沢の物資を利用した営利活動、民間との物資の交易など、王朝の財政業務に携わっており、朝廷はこの台伝を通じて、割拠的

傾向を示す地方に対して、財政の面から統制をはかったという。そのほか、南朝の財庫である上庫（軍国の費用に供する）や齋庫（天子個人の費用に供する）を取り上げた川合安 [1986] などがある。

◆社会・経済

永嘉の乱にともなう華北から江南への人口移動については、譚其驥 [1987] が有名であるが、葛劍雄 [1997] も刊行されている。譚 [1987] によれば、劉宋時代までに江南へ移動した人口はほぼ90万、南朝政権が把捉する人口540万の6分の1に相当するという。江南に移住した住民を把捉する僑州郡県制度については、中村圭爾 [1983] や安田二郎 [2003a] 第三編「南朝の政治史と僑民」所収の諸論文があり、とくに土断、白籍・黄籍をめぐる学説史整理をふまえて提起された安田の新解釈は重要である。榎本あゆち [1992] は北魏から南朝に帰降した人々を考察し、流通経済の作用を重視する見解を提示している。

この時期の江南の水稲栽培については、北田英人 [1999] などがあり、水利・灌漑については、佐久間吉也 [1980]、中村圭爾 [1981] などがある。当時の大土地所有の諸相は、渡辺信一郎 [1986] 「二世紀から七世紀に至る大土地所有と経営」によって概観できる。また、劉宋時代の山沢占有規定の分析を通じて共同体の変質過程を追究した關尾史郎 [1983] がある。

貨幣経済については、宮澤知之 [2000] のほか、一般向けではあるが、山田勝芳 [2000] も参考になる。南朝では北朝に比べて格段に経済が発展し、貨幣流通が盛んであったと考えるのが一般的であり、山田 [2000] もその見解を採るが、宮澤 [2000] は、官銭の発行に関する記述についていえば南朝の方が多という印象は否めないが、そのことを以て一概に南朝社会における錢貨流通量の相対的な多さを推し量り、さらに市場経済の比較的高度な展開を想定することもできない、と言う。上記のほか、南朝における商業活動にササン朝ペルシアの影響を見出した佐藤圭四郎 [1998] が興味深い。

郷村や家族に関する研究を概観するには、堀敏一 [1996] が有益である。東晋南朝の豪族に関する専著には大川富士夫 [1987] があり、家産の分割に関しては、勝村哲也 [1974] や越智重明 [1997] などがある。吉川忠夫 [1995] は梁の貴族、徐勉が家長の地位を長子に譲るに際して与えた「誠子書」を分析していて、貴族の家の継承を考える場合に有益である。

◆文化

この時代の思想・宗教・学問に関しては、吉川忠夫 [1984]、中嶋隆蔵 [1985]、森三樹三郎 [1986] などが有益である。儒教・仏教・道教三思想の活発な交流がこの時代を特徴づけているが、三教の中でもとくに道教研究が近年活況を呈しており、都築晶子 [1997]、神塚淑子 [1999] などによりその概略を把握できよう。南朝の文学関係の研究は夥しく、省略せざるを得ないが、詩人の伝記の訳注を集めた興膳宏編 [2000] が有用である。陶淵明のような著名な詩人のほか、梁の武帝などの皇帝、『宋

書』の撰者沈約、『南齊書』の撰者蕭子顯など、詩文以外に政治や歴史書の編纂等の分野でも活躍した人物も多く取り上げられ、参考文献の紹介も充実している。

書聖王羲之の伝記に、吉川忠夫 [1972] があり、六朝貴族の生活史を活写する。王羲之の書簡は、『法書要録』等に残されているが、それらを集めて邦訳した森野繁夫・佐藤利行 [1996] があり、六朝貴族の日常生活を研究する上で貴重な業績となっている。
(川合 安)

<3> 北 朝

北朝は、五胡十六国分立のあと華北に成立した統一政権で、北魏（鮮卑拓跋部、386～534年）、ならびに北魏分裂後の東魏（534～50年）・北齊（高氏、550～77年）と西魏（535～57年）・北周（宇文氏、557～81年）との五王朝を指し、北周を継いだ隋（楊氏、581～618年）の天下再統一（589年）までをふくむ。

◆概説書

概説書については、南朝史であげられた岡崎文夫 [1932]、川勝義雄 [1974]、川本芳昭 [2005] がやはり参考になる。概説書ではないが、宮崎市定 [1956] の緒論・余論は、九品官人法にかかわる漢唐間の社会と国家についてすぐれた概括をおこなっており、田村實造 [1985] 北魏篇も、開国伝説から孝文帝期にいたるまでの北魏の政治過程を、中国征服王朝論の立場から平易に概観している。また妹尾達彦 [1999] も、その中で近年の研究成果をふまえたこの時期の概観をこころみている。

北朝史の研究史整理については、東方学術協会編 [1947]、山根幸夫編 [1983] [1991]、高明士編 [1990]、島田虔次他編 [1983] があり、また中村圭爾 [1999c] も1980年代までの魏晋南北朝史研究の動向を整理している。以下本項では、紙幅の関係もあり、80年代までの研究動向の紹介は主要なものにとどめ、詳細は上記諸書にゆだねて割愛し、日本国内の80年代以降の研究を中心に概観する。

政治史に限らず、今日の北朝史研究を領導しているのは、それぞれの年代を代表する三人の研究である。それらは、1940年代にものされた陳寅恪 [1943] [1944]、主として60年代・70年代の共同体論を機軸とする谷川道雄 [1971] [1998]、および80年代以降の、民族を一方の主題とする川本芳昭 [1998] である。

陳寅恪 [1943] は、漢魏の古典文化が南北朝をつうじてどのように隋唐期の典章・制度・文物に結実していったかを系譜的に明らかにしたものであり、陳 [1944] 上編は、隋唐初期の支配集団であった胡漢融合の關隴武人貴族集団とその関中本位政策のあり様を解明し、その源流を北朝期にさかのぼって明らかにしたもので、両篇あいまって南北朝・隋唐史の総体的認識をしめしており、今日の研究の出発点をなしている。

谷川道雄 [1971] は、自由を冀求することをつうじて歴史の主体となる人間存在の普遍的なあり方を、北魏末の六鎮の反乱にかかわって登場する城民の存在に焦点をあてて解明したものであり、それを五胡諸国家から隋初に至るまでの政治過程のな

かで総体的に考察し、北方遊牧諸族（以下胡族と呼ぶ）の部族共同体と漢人豪族の指導する郷党共同体との相克のなかから止揚されて生み出される新貴族主義の国家共同体を展望する。また谷川 [1976][1987] は、貴族制と封建制、士大夫倫理、均田制の理想的背景や豪族共同体論など、政治過程と相互規定的な関係にある諸問題を取りあげて解明したもので、谷川の中世共同体論の理論的背景や課題意識を理解するために必須の論文集である。

川本芳昭 [1998] は、民族問題を主題に設定し、北朝史の主旋律をなす胡族と漢族との抗争と融合の過程を、胡族の主体性を重視しつつ探求する。部落解散および内朝・監察・封爵をはじめとする前期北魏の諸制度、ならびに孝文帝期の諸改革等を考察することをつうじて、川本は、太武帝期から孝文帝期にかけて変化がおこり、民族差をこえた正統王朝観念が生成することを指摘し、新しい中華の誕生を展望する。これらの主題は、川本 [1999][2001][2002a][2002b] でも、学説史的展望に立ったより広い視野から、新たな素材の考察を加えることによって、補強されている。

1980年代以後の北朝史研究は、この三人が提起した諸問題をめぐって展開しているといつてよい。以下、分野ごとにその諸相を紹介しよう。

◆政治

北朝史の根幹をなす今日的主題は、鮮卑拓跋部をはじめとする胡族が中国内部に侵入し、華北の漢人社会を支配するようになってのち、漢族との間にいかなる関係を構築しながら、どのようにしてみずからと漢族社会とを交容・融合させ、新たな社会をつくりあげていったのかを探求するところにある。

北魏成立期に道武帝によって施行された部落解散は、胡族社会の変容の第一の画期をなすものであり、古くから言及する論者が多く、部族制の解体すなわち漢化とみる議論が大勢をしめた。近年の傾向は、北魏前期の三都大官制（裁判）・内朝制・西郊祭天儀礼・領民酋長制など部族制的秩序にもとづく諸制度の存在に注目し、川本芳昭 [1998]、古賀昭岑 [1980]、勝畑冬実 [1994a]、松下憲一 [2000a][2002]、太田稔 [2003] 等が、部落解散の実施時期、解散の内容・対象・範囲を検討し、単純な漢化論とは異なる、新たな見解を提起しつつある。部落解散とも関わる問題として、勝畑冬実 [1994b][1995] はまた、第二代明文帝・第三代太武帝期の二度にわたる長城建造にかかわって、封畿と郊甸からなる二重の首都圏の存在を指摘し、初期北魏の国家構造の胡族の性格を強調している。もとより領民酋長制と北魏社会の検討をふまえて旧来の漢化説を支持する直江直子 [1983][1998] もあり、現在は論争状態にあるといつてよい。

高祖孝文帝期の諸改革は、教科書などでは漢化政策と呼ばれ、胡族社会の変容の第二の画期をなし、研究者の言及も多い。諸改革による胡族集団の変質解体という川本芳昭 [1998] の提起にかかわって、鈴木真 [1997] が礼制改革による君主権強化と部族制の残滓の払拭を、松岡弘 [1996] が孝文帝末年の皇太子恂の反乱が漢化への反対運動であったことを、松下憲一 [1999] が洛陽遷都の原因と歴史的意義について考察

している。また川合安 [1989] は、孝文帝官制改革におよぼした南朝官制の影響と、逆にこの改革が南朝官制におよぼした反響とについて興味深い議論を展開している。

長部悦弘 [1990a][1990b][1993a] は、胡族と漢族との通婚関係、胡族武人官僚を対象にとりあげ、[1990b] ではとくに漢族士大夫的教養の修得過程に注目し、孝文帝の漢化政策が短時日に成果をあげたのではなく、唐代までの長期的課題であったことを指摘する。また漢化政策に対する反動であるとされる西魏・北周期の胡姓賜与に関しても、宇和川哲也 [1984]、山下将司 [2000][2001]、小林安斗 [2002]、佐川英治 [2002] が再検討をおこなっている。漢化政策についていえば、その中核とも言うべき姓族分定に関する本格的な専論が宮崎市定 [1992] 以外にないのは、不可思議と云うほかない。

◆制度

1980年代以降の研究動向のなかで、「民族」・部族制の評価問題について顕著な特色は、官制・官僚制にかかわる諸研究の輩出である。それらは北朝期の国家における胡族の性格および部族制の評価問題と密接にかかわって進められている。

窪添慶文 [2003] は、太子監国制度をはじめ中央官制・地方官制について独自の実証研究をおこなうとともに、内朝制度など北魏前期国制の胡族の性格を重視する川本芳昭 [1998] に対し、その批判的な検証をもこころみている。また、議（会議）をめぐる北魏の政治的意思決定過程の独自性とその政治過程との相互関係についても興味深い考察をくわえている。佐藤賢 [2002] は、内朝を胡族の牙城として理解する川本説を批判的に検証し、北魏前期の内朝・外朝の構成員を胡族と漢族とに二分することに疑義を呈している。榎本あゆみ [1994][1995][2001] は北魏後期から北齊にいたる中書舍人、西魏末・北周の御正について考察し、門閥主義に対する賢才主義による任用が根幹にあることを指摘し、隋唐期の内史・中書省への展開を見通している。

北魏官制の運用とその周辺に関する研究としては、古くは福島繁次郎 [1979] が考課制度と停年格について論じ、近年にあっては岡部毅史 [2000a][2000b] が「階」と官の清濁問題について、長堀武 [1982][1984] が俸禄制施行・考課制度について、大知聖子 [2001] が爵制について考察している。また、官僚制を支える文書制度については、中村圭爾 [2001b] が自己の研究を総括しており、これからの公文書研究に礎をあたえている。

皇帝権力・中国の王権の歴史的特質を明らかにするために、近年礼制研究が盛んになってきている。金子修一 [2001] は、宗廟・郊祀・即位儀礼をはじめ古代中国の皇帝祭祀・儀礼を包括的に論じて基礎研究を推進し、渡辺信一郎 [1996] は元旦の元会儀礼を、西岡市祐 [2002] は籍田礼を、田沼真弓 [2003] は北魏皇帝の喪礼の変遷をとりあげている。即位儀礼については、西嶋定生 [1983]、尾形勇 [1979][1982]、金子 [2001] は、天子即位・皇帝即位の二段階説を主張し、松浦千春 [1993] は根拠史料の訓みを正して皇帝即位一段階説を対置する。北魏太平真君四年拓跋燾「石刻祝文」にあらわれる「可寒」の称号に関する町田隆吉 [1984] の検討をふまえるならば、

北朝期の王権は、可汗・天子・皇帝の三つの称号とその内実の検討をふまえて紡ぎだすべき時期に来ている。

軍制・徭役制度に移ろう。府兵制・兵役については、浜口重国 [1966a] が研究の出発点となる。氣質澤保規 [1999] は、浜口以後の内外の府兵制研究を概括し、丁兵制の性格や北朝隋の「軍人」の検討などをつうじて、唐代の府兵が兵民分離原則に立つ軍制であったと理解する。谷川道雄 [1998] は、非門閥的豪族層の政治的進出の基盤となった府兵制を主題とし、隋唐期の国家共同体を府兵制国家として位置づけている。菊地英夫 [1986][1987] は、西魏二十四軍の基礎単位である「団」の研究史整理と存在形態の実証をこころみており、前島佳孝 [1999] は、西魏二十四軍を統括したといわれる八柱国の序列について再検討し、山下将司 [2002] は八柱国家の成立を唐初貞観期の政治的要請によるものと指摘し、陳寅恪の閩隴貴族集團論の成立根拠の一角を揺るがしている。

兵士については、かつては兵戸的存在である胡族系の世襲軍人や城民に焦点があてられてきた。窪添慶文 [2003] は、北魏の地方軍・州軍の存在およびその実態を明らかにし、松永雅生 [1987] は、太武帝以後、漢人に対する兵役・正役（力役）二系統の徴発がはじまり、隋唐期の府兵・正役へ展開すると主張する。佐川英治 [1999a] [1999b] は、均田・三長制理解の前提として編戸制と徴兵制度の重要性を指摘し、渡辺信一郎 [2000][2003b] は、北魏三長制に徴兵制軍役・力役が組み込まれていたこと、それが府兵制とは異なる系統の防人制として隋唐期にまでうけつがれたと理解する。

◆社会・経済

西嶋定生 [1981] は、この分野の概説書であり、1980年代までの研究動向を理解することができる。支配階層をめぐる研究には、古くから門閥貴族制との関連で貴族・豪族の系譜に関する研究がある。その典型的研究として太原王氏をあつかった守屋美都雄 [1951] があり、北朝史にかかわって言えば、長部悦弘 [1993b][1995] [2003] が元氏・劉（独孤）氏・宇文氏、直江直子 [2001] が侯莫陳氏をとりあげている。谷川道雄 [1993] は、敬史君碑を手がかりに河東地域をとりあげ、著姓一郷豪（豪右）一郷人からなる豪族社会を復原している。矢野主税 [1980] は、郡望と呼ばれる山東貴族の家系を総体として考察し、北朝にあつては漢族・胡族ともに郡望・門閥否定の傾向が強いことを指摘する。吉岡真 [1999] は統計的手法により、北朝・隋唐期の支配層の人的・地域的構成を大量観察し、北魏期における非漢族の圧倒的優位を指摘する。この見解は、北朝期権力構造の解明にあたって胡族・部族制を重視する80年代以降の北朝史研究の動向を強力に支持するものとなっている。

社会の下層を構成する人びとについては身分論からの研究が主流をなす。その実証的基礎は浜口重国 [1966b] が定礎し、その諸論考のなかに基本史料が整理されている。奴婢制については、西嶋定生 [1963] の問題提起をうけて議論が展開し、北朝期にかかわっては、唐代良賤制への展開のなかでの良奴制の成立時期とその歴史的意義

をめぐる論争が、堀敏一 [1987][1988]、尾形勇 [1979]、川本芳昭 [1998] のあいだにあった。奴婢については、別に佐久間吉也 [1984][1985a][1987] が実態に即した区分を提起し、竹浪隆良 [1984] は人身売買と身分形成との関係について論じている。また浜口 [1966b] の検証の一環として、堀 [1987]、越智重明 [1980] は雑戸制について考察している。

北朝村落・都市については、松本善海 [1977] が中国村落制度の通史的研究のなかで北朝期三長制の変遷を明らかにし、福島繁次郎 [1979] は北齊期の三長制、北周期の二長制を実証的に論じ、近年では佐々木栄一 [1999] が税役徴収、佐川英治 [1999b] が兵役との関連において北魏三長制について議論している。また谷川道雄 [1992] は、農村居住の名族・中小貴族が結節点となって形成される村落ネットワークの存在と都市との対立について分析し、堀敏一 [1996] は古代集落史の展開の一環として、北朝の行政村と自然村との関係を論じている。

都城研究について、古くは村田治郎 [1981] が北齊鄴城の復原を試み、前田正名 [1979] が北魏前期の都城平城の住民構造、景観、物産・交易・交通路などの歴史地理学的研究をおこない、また服部克彦 [1965][1968] は、北魏後期の都城洛陽について仏教文化を中心に都市社会と経済の概観をおこない、朴漢濟 [1991] は洛陽住民の居住形態の特質を論じている。

経済史研究に移ろう。かつて隆盛を誇った均田制研究は、堀敏一 [1975]、鈴木俊 [1980] の公刊を頂点に、現在下火になっている。1980年代末までの研究動向は、氣質澤保規 [1993] が詳細に記述しているので割愛する。近年では、兵役との関連を重視して均田・三長制を理解する佐川英治 [2000][2001a][2001b] の研究が眼を引き、佐々木栄一 [1977][1978][1992][1996] が北魏均田法の実証研究を進め、また [1982][1985][1987][1989][1994] においては、スタイン漢文書 613号（いわゆる計帳様文書）を利用した西魏均田制・税役制度をめぐる研究を展開している。均田制の基礎をなす農業技術・農業経営については、渡辺信一郎 [1986]、米田賢次郎 [1989] の刊行以降、研究は途絶えている。

その他、貨幣経済については内田吟風 [1975b]、宮澤知之 [2000] があり、鑄貨鑄造とその使用法の特質を探求しており、北朝期の水運・水利・災害・倉庫研究には佐久間吉也 [1980][1985b] がある。また佐藤佑治 [1998] は、北朝の市場について考察している。

北朝期の財政史研究は、近年緒についたばかりであり、草野靖 [2001-02] は、魏晉南北朝時代の課調制の展開のなかで財政の変遷を論じ、渡辺信一郎 [2002] は経費研究から北朝後期の財政構造を論じている。

◆文化・その他

北朝宗教史については、塚本善隆 [1974a][1974b][1975] が必読書である。近年の研究では、佐藤智水 [1998] が北魏皇帝権力の強化過程と廃仏問題、復仏後の北魏仏教とその皇帝権力に対する強い従属性、ならびに大乘の反乱を素材として災害と終

末観を論じている。廃仏は北朝仏教史研究の中核的テーマであり、北魏太武帝の廃仏については直海玄哲 [1984]、羽仁真智 [1987]、川本芳昭 [1998] がとりあげている。仏教・道教関係の研究には、思想史研究のほか、雲崗石窟・響堂山石窟などの石窟研究、道教造像・仏教造像銘研究、および美術史関係などにわたって広範な研究蓄積があるが割愛する。(渡辺信一郎)

3 史資料の解説

<1> 三国五胡

ここでは三国～五胡時代に関する基本史料について解説する。最初に典籍史料から。当該時期の研究にあっても、「正史」をはじめとする典籍が重要であることはいうまでもなく、三国時代については『三国志』が、西晋・五胡十六国時代については『晋書』がそれぞれもっともまとまった史料で、ともに中華書局から標点本が出ているほか(標点本に依拠した人名索引や地名索引もある)、日本の汲古書院から和刻本も影印されている。

陳寿撰『三国志』は、魏書 30 卷、蜀書 15 卷、および吳書 20 卷の計 65 卷からなる。三国のうちで魏を正統とする立場にたっているため、紀は魏書のみであり、またとくに蜀と呉に関する記述は簡単である。これを補う役目をはたしているのが、裴松之によって附された注で、王沈『魏書』、魚豢『魏略』、および韋昭『吳書』など散逸してしまった史書の記述が多く引かれており、参考価値が高い。また清・趙一清の『三国志注補』や民国・盧弼の『三国志集解』といった注釈書、今鷹真・小南一郎・井波律子訳 [1977-89] をはじめとする翻訳書などもあわせて参照する必要がある。なお裴松之の注に引かれた史書は、早くから逸文の収集とともに研究がなされてきたが、最新の成果に津田資久 [1998] や満田剛 [1999] などがある。

房玄齡らが唐太宗の命によって編纂した『晋書』は、紀 10 卷、志 20 卷、伝 70 卷、および載記 30 卷の計 130 卷からなる。これは、臧榮緒『晋書』をはじめとする先行の史書を参照して編纂・執筆されたものだが、先行史書が散逸してしまった現在、これに頼らざるをえない。代表的な注釈書としては、民国の呉仕鑑・劉承幹『晋書輯注』が、翻訳(抄訳)としては、越智重明 [1970] があげられる。また先行史書の逸文を収集したものとしては、清・湯球の『九家旧晋書輯本』『衆家編年体晋史』などがあり、それぞれテキストとして楊朝明校補 [1991]、喬治忠校注 [1989] がある。

なお五胡十六国時代については、『晋書』のとくに載記部分を中心として、『魏書』や『宋書』、さらには『資治通鑑』の関連部分が基本史料ということになるが、十分ではない。この時代に関しては、各国ごとに作られた史書を参照して北魏の崔鴻が『十六国春秋』を著した。しかしこれらはいずれも早くに散逸してしまい、わずかに

類書などに引かれて残っているにすぎない(そのなかでは、『太平御覽』偏霸部所引の『十六国春秋』は比較的まとまっている)。明の屠喬孫と項琳が復元した『十六国春秋』、清・湯球の『十六国春秋輯補』『十六国春秋纂録校本』、および『三十国春秋輯本』などがあるが、町田隆吉 [2000] や、岩本篤志 [2004] などのような新しい成果も生まれつつある。

以下、これ以外の主な典籍を列記しておく。

・『華陽国志』

東晋・常璩撰。全 12 卷。古の聖王の時代から常璩自身が仕えた成漢に至るまでの巴蜀地域の歴史と地理についてまとめた地方志。この地域に関する研究には必須の基礎史料であると同時に、地方志研究にも欠かすことができないものである。版本により異同があるので注意が必要だが、テキストとしては、任乃強 [1987] や劉琳 [1984] がある。また翻訳に船木勝馬・谷口房男他訳 [1975-99] が、抄訳に中林史朗訳 [1995] がある。そのほか索引として谷口房男編 [1981] もある。

・『世説新語』

宋・劉義慶撰。全 3 卷。後漢末から東晋にかけての士人たちにまつわる逸話を集めたもので、現行本には、梁・劉孝標の注が附されている。成立期の貴族社会の雰囲気や価値観を伝えており、広く流布した。テキストとしては、余嘉錫 [1983] や徐震堦 [1984] などが、また翻訳としては、森三樹三郎訳 [1969] がある。

これ以外にも、多くの典籍史料があるが、省略にしたがう。

次は一次史料である。当該時代に関する一次史料は、ほとんどの場合、発掘調査などの結果出土したもので、出土史料とほぼ同義であるが、典籍が出土する場合もあるので、出土史料即一次史料とは限らない。また一次史料には、簡牘や紙に書写された文書以外にも、墓誌銘や鎮墓文をはじめ金石に刻された銘文などがある。ここでは、文書、金石の順に解説する。

三国から五胡十六国にかけての時代は、ちょうど書写材料が簡牘から紙に切り替わる時期でもあるが、この時代最古のまとまった一次史料は長沙呉簡であろう。

前世紀の末に湖南省・長沙市の中心で発見された長沙呉簡は、総数 10 万点に上るといわれ、その点数の多さ、三国という時代と長沙という地域、そして形態と内容の豊富さなどから多くの研究者の関心を引きつけてきた。とくに吏民田家荊と呼ばれる大型木簡の史料集、走馬楼簡牘整理組編 [1999] の刊行を契機にして日本でも報告集、長沙呉簡研究会編 [2001] が発刊された。吏民田家荊の性格や機能自体なお今後の課題であるが、ここでは多岐にわたる問題が論じられている。上の史料集に再録されている発掘報告も必見だが、このほか長沙呉簡全般については、王素 [2003] などにも眼を通しておく必要がある。また名籍や納税に関わる竹簡を収録した史料集、走馬楼簡牘整理組編 [2003] も続けて刊行された。両史料集を合わせても、公表されたのは長沙呉簡全体のごく一部にすぎないが、呉の支配制度とそのもとにあった江南の地域社会の一端が、その分析を通じて解明されることが期待される。長沙呉簡研究会編

[2004]をはじめ、北京呉簡研討班編 [2004] や于振波 [2004] など研究成果が続出しているほか、阿部幸信・伊藤敏雄編 [2005] のような工具書も刊行された。

時代的に長沙呉簡に続くのが、新疆維吾爾自治区の著名な都市遺跡楼蘭から出土した簡牘と紙の文書であろう。3世紀後半にかかるところが大半を占めており、700点に上るその多くは、前世紀の初頭に将来されたものだが、1980年代にも調査の結果、60点余りが新たに見つかった。全貌については、それぞれの報告書を適宜参照する必要があるが、釈文だけならば、林梅村編 [1985] や邱陵編 [1991] などがあるし、注釈を加えたものに孟凡人 [1995] が、総合的な図録に侯燦・楊代欣編 [1999] がある。また近年、富谷至 [2001b] がストックホルム所蔵の若干点を写真とともに紹介している。楼蘭からは簡牘と紙の文書双方が出土しており、3世紀後半の魏末・西晋初期には、簡牘と紙が併用されていたことがわかるが、帳簿形式の文書には多く簡牘が用いられており、書簡などには紙を用いるのが一般的だったことがわかる。研究の到達点は、伊藤敏雄 [1995] など、現地を踏査した伊藤の一連の論稿に示されている。なお大谷探検隊が将来したいわゆる李柏文書については、詳細な出土地が不明になっていたが、片山章雄 [1988] がこの難問に挑んでいる。なお富谷 [2003] は、簡牘研究と社会史・制度史をつなぐすぐれた成果であり、必読と言えよう。

阿斯塔那（アスターナ）、哈拉和卓（カラホージャ）両古墓群をはじめとする新疆維吾爾自治区のトゥルファン市一帯の遺跡から出土したトゥルファン文書には、五胡十六国時代の漢文文書が200点近く含まれている。この一帯からは前世紀初頭以来、日本の大谷探検隊を含む各国の探検隊や調査隊によって多くの文書が将来されたが、前世紀後半から現地の研究機関によって両古墓群に対する本格的な考古調査が始められ、新たに当該時期の文書が大量に出土した。調査と成果の概要は、唐長孺 [1989] や馬雍 [1990] などにあるが、そのうち主なものの釈文を収録したのが平装本の『吐魯番出土文書』で、図録本である唐長孺主編 [1992] には、1970年代までに出土したすべての文書の写真が掲載されている。このうち写真だけで釈文が附されていない断片については、王素 [1998] が釈読や定名をこころみている。また1980年代に出土したものについては、柳洪亮 [1997] が写真を附して釈読を行っている。

これらと、前世紀初頭以来出土したものとを合わせて、年代順に配列して解題を附した王素 [1997] は、索引である李方・王編 [1996] とともに、トゥルファン文書の研究には必携といえよう。ただその後も世界各地に散在しているトゥルファン文書のコレクションのなかに五胡十六国時代のものが含まれていることが明らかにされつつあるので、それらについても把握しておく必要がある。とくに西脇常記 [2002] や關尾史郎 [1998] が取り上げたベルリン所蔵の北涼時代の戸籍は、敦煌出土の西涼戸籍（これについては、池田温 [1979] がある）とならんで紙に書かれた戸籍としては最古のものである。また關尾 [2004] が紹介した五胡十六国時代の契約文書も紙に書かれた契約文書としては最古に属するものである。なお西北出土文献を読む会 [1999] は、五胡十六国時代のトゥルファン文書に逐一古文書学的な検討を加えており、現在

も作業は継続中である。そのほか、五胡十六国時代特有の俗字を集めた關尾・岩本篤志編 [2005] も、釈読には至便であろう。

トゥルファン文書の大半は、死者を墓内に葬納する際、尸体が着用した靴や帯、さらには冠の素材に転用された廃紙として出土したもので、多くは断片でかつ損傷が激しく、その釈読は困難をきわめるが、高昌郡などの行政システム、あるいは私的な契約や葬納習俗など多くの問題の解明に貢献しつつある。

これら以外にも当該時代の文書は各地から出土しており、とくに簡牘については、李均明・何双全編 [1990] に集められているが、最新の情報は、中国で公開されている考古学関係の学術雑誌にあたらなければならない。また紙の文書については、周知のように敦煌からも出土しているが、当該時期に属するものは多くはなく、写経を除くと狭義の文書はきわめて限られるが、詳細を把握するためには、王素・李方 [1997] が便利である。またその写経類の題記については、池田温 [1990] に網羅されている。

金石については、拓本や移録された釈文に依存することになるが、当該時代のものを中心に扱った文献だけを挙げておく。なお石刻については、趙超 [1997] のような入門書もある。

筆頭に上げるべきは、趙万里編 [1956] で、当該時代の墓誌拓本と釈文を収録する。また趙超 [1992] は、これに収録されていないものについて釈文をあつめたものである。墓誌の解題集としては王壮弘・馬成名編 [1985] があり、三国時代の碑文について同じ作業を行ったものに、袁維春 [1993] がある。

なお墓中に埋納される墓誌が造られるようになったのはまさに魏晋時代のことで、この問題に関しては、日比野丈夫 [1977] や福原啓郎 [1993] などが論じている。

墓誌については近年、所蔵機関や出土した省区ごとに、大部な図録本が陸続と公開されており、学術雑誌上に掲載される発掘報告ともども参考にしなければならない。最新の羅新・葉焯 [2005] も有益だが、なおこれにさえ採録されなかった新出墓誌も少なくない。

また同じく埋納文物である墓券類については、池田温 [1982] に集められており、鎮墓文については、先の王素・李方 [1997] に解題が網羅されている。鎮墓文の出土数が最多をほこる敦煌の祁家湾古墓群の発掘報告、甘肅省文物考古研究所編 [1994] もあわせて参照されるべきだろう。關尾史郎編 [2005] は、甘肅省や青海省などから出土した魏晋・五胡十六国時代の鎮墓文を可能なかぎり収集した史料集である。

これ以外の金石としては、印文については羅福頤主編 [1987] が多くの印影を釈文と紐形の情報とともに集録し、磚文については王鏞・李淼編 [1990] が拓本と釈文を掲げる。鏡の銘文については紀年を有するものだけだが、劉永明編 [1999] が写真や拓本に釈文を附している。さらに五胡十六国時代の仏塔の銘文については、広く情報を収集した殷光明 [2000] がある。

以上は文字資料だが、これ以外にも多様な考古資料あるいは非文字資料がある。例

えば当該時代では西北辺境地域で築造された磚室墓に用いられた画像磚については、張宝璽編 [2001] をはじめとする写真集があり、うち嘉峪関の新城古墓群の磚室墓については甘肅省文物隊他編 [1985] の、また敦煌の仏爺廟湾古墓群 (旧新店台古墓群) の磚室墓については甘肅省文物考古研究所編 [1998] の併照が求められる。

また明器として墓中に埋納される水田模型については、渡部武 [1993] に解題と模式図が掲載されており、江南特有の神亭壺に関しては、長谷川道隆 [1986] などがあつる。これらが出土した墓葬自体やその他の出土品も貴重な考古資料だが、それを有効に活用した中村圭爾 [1993] のごとき成果も出ている。

このほか当該時代に関しては、石窟寺院の彫像や壁画も重要な考古資料であるが、詳細は省略する。
(關尾史郎)

〈2〉南 朝

◆正史その他

南朝史研究の最も基本的な史料は正史である。東晋時代については、『晋書』の関連部分を参照しなければならないが、『晋書』の東晋に関する記述は、西晋に比べて粗略であるため、劉義慶撰『世説新語』所載の貴族社交界にかかわる逸話や、その『世説新語』の劉孝標注や『太平御覧』等の類書に引用される佚書なども参照する必要がある。南朝については、『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』と『南史』があり、『宋書』『南齊書』は記事が豊富で、史料価値が高い。『南史』は『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』に主として依拠しているが、独自の記述も見られ、とくに後半の梁の部分ではその割合が高いといわれる。以上のほか北朝の正史である『魏書』にも僭晋司馬叡伝・島夷桓玄伝・島夷劉裕伝・島夷蕭道成伝・島夷蕭衍伝など、東晋・宋・齊・梁に関する記述があり、『隋書』の志はもともと梁・陳・北齊・北周・隋の五代の志であつて、梁・陳を中心に、時にはさらにさかのぼつて東晋南朝全般に関する記述を含む。

また、編年体の六朝史、『建康実録』は8世紀半ばの成立であるが、『宋略』などを引用して正史の欠を補う。『建康実録』については、安田二郎 [2003b] がある。宋・司馬光撰の『資治通鑑』は、大体正史に依拠しているが、時には独自の記述もみられ、『宋略』などの佚書に拠つたと考えられる。さらに、編年体に書き改められている点や胡三省の注が付されている点が有用である。清の朱銘盤が編纂した『南朝宋会要』『南朝齊会要』『南朝梁会要』『南朝陳会要』は、諸制度に関する記事の索引として使える。制度に関しては、唐代に編纂された『大唐六典』に、佚書の『齊職儀』を引用しており、南朝の官職を調べる際にも有用である。同じく唐代編纂の『通典』も、正史にはみえない東晋南朝の礼制に関する議論などを多く引用して参照価値がある。

正史を読む上で、王鳴盛『十七史商榷』や趙翼『二十二史劄記』等は必読であるが、

周一良 [1998 (1985)] も、それらと同様の性格の文献といえよう。以下、個別の正史について解説を加える。

・『宋書』

100巻 (本紀10巻、志30巻、列伝60巻)、梁・沈約撰。沈約が南齊の永明5年 (487)、編纂に着手し、翌年、本紀と列伝を完成、志は遅れて梁代初期の完成といわれ、先行する徐愛の『宋書』に拠る所が多いという。同書は、詔勅・奏議を始め同時代史料が忠実に採録されていて、繁雑ではあるが、史料的价值が高い。ただし、北宋時代までに散佚し、『南史』などで補つた部分がある (巻4, 46, 76など) ので、注意を要する。また、同書の志は、前代にまで遡つて諸制度の沿革を詳細に記述していて、有益である。『宋書』編纂の事情については、同書巻100自序に述べられており、その訳注に、川合安 [1997-98] がある。また、同書の各巻に付せられた「史臣曰」の条や類伝の序文の訳注に、川合 [1992-95] がある。沈約や『宋書』に関する研究には、吉川忠夫 [1984] 第三部「沈約研究」のほか、安田二郎 [1985]、越智重明 [1985b]、稀代麻也子 [2004] などがある。『宋書』の詳細な校訂として、丁福林 [2002] が刊行された。

・『南齊書』

59巻 (本紀8巻、志11巻、列伝40巻)、梁・蕭子顯撰。梁代初期の成立。『宋書』と同様、同時代史料を忠実に採録していて、史料的价值が高い。同書の詳細な校訂として、朱季海 [1984] がある。同書には、蕭子顯の父、蕭嶷の列伝が立てられているが、その訳注に川合安 [1996] がある。

・『梁書』

56巻 (本紀6巻、列伝50巻)、唐・姚思廉撰。

・『陳書』

36巻 (本紀6巻、列伝30巻)、唐・姚思廉撰。姚思廉の父で梁・陳・隋に仕えた姚察と姚思廉と二代にわたる編纂で、唐の貞観10年 (636) に完成。『宋書』や『南齊書』に比べると、叙述は簡略。『梁書』の編纂については、榎本あゆち [1987] を参照。

・『南史』

80巻 (本紀10巻、列伝70巻)、唐・李延寿撰。李延寿の父李大師と父子二代にわたる編纂で、唐の頭慶4年 (659) に完成。叙述はおおむね簡略であるが、独自の記述を増補した部分もあり、とくに梁代に多いという。また、列伝が名族の家伝のような体裁を採っていることは、門閥社会を反映する特徴といわれる。同書に関する研究には、藤家禮之助 [1984]、榎本あゆち [1989] などがあり、詳細な考証の成果としては、高敏 [2003] がある。

◆石刻史料

東晋南朝の石刻史料の大部分は墓誌である。東晋の墓誌は字数も少なく、誌石も小さいものが多い。この字数の少なさと関連して、その記述内容も、墓主の姓名・官

歴・本籍地・死亡と埋葬の年月日や場所・親族の姓名官職などに限られ、南朝とくに梁以後にみられる墓主の生涯の記録や韻文で書かれた銘文などは見られない。

趙超 [1992] には、それ以前に知られていた墓誌のほとんどの録文が収められていて便利である。ただし利用に際しては、できるだけとの発掘報告等を参照しなければならぬ。また、趙 [1992] 以後にも、東晋の墓誌の発見が相次いでおり、羅新・葉焯 [2005] も刊行されたが、やはり『文物』等の雑誌に掲載される報告には常に目を通すことが必要である。

(川合 安)

〈3〉北 朝

◆史料

基本史料である正史には、魏収撰『魏書』130巻、令狐德棻等撰『周書』50巻、李百薬撰『北齊書』50巻、魏徵等撰『隋書』85巻の断代史、および李延寿撰『北史』100巻の通史がある。『北史』がよく読まれたため、断代史はすでに唐代に残欠ははじめ、北宋期に『北史』その他の史料を用いて復元された。『北齊書』の大半は『北史』からの復元であり、『魏書』『周書』にも復元部分が多量にあり、完本ではない。内田吟風 [1975b] は、『魏書』刑罰志残欠一葉を『冊府元龜』などを利用して復元している。残欠部分はなお存在するので、新たな復元・補亡もありうる。『隋書』の10志30巻は、元来「五代史志」と呼ばれた別行の編纂物で、梁・陳・北齊・北周・隋の制度・文物を記述する基礎史料である。

北魏は、鮮卑拓跋部が立てた王朝であり、拓跋氏一族が支配氏族として隠然たる勢力をもっていた。羅振玉『魏書宗室伝注』12巻・表1巻は、『魏書』中の宗室にかかわる伝記を抜き出し、出土墓誌などをもちいて校訂・注釈を施したもので、北魏史の中核部分をあぶりだす著述にもなっている。墓誌など出土資料によって北朝諸正史を校訂する際の見本をも提供する。北朝の諸制度・文化を総合的に研究するには、正史の志を読まなければならない。『魏書』『隋書』の志には、個別に校訂・訳注を施したものがあつて、参照することができる。『魏書』については、積老志に塚本善隆 [1974a] の訳注と研究があり、刑罰志に内田智雄編 [2005a (1964)] の訳注、地形志に張僊生 [1980] の校釈、食貨志に陳連慶 [1999] の校注、渡辺信一郎 [2002] の訳注がある。『隋書』については、経籍志に興膳宏・川合康三 [1995] の訳注と研究、刑法志に内田智雄編 [2005b (1971)] の訳注、Balazs [1954] の仏語訳、食貨志にBalazs [1953] の仏語訳、渡辺信一郎 [2002] の訳注がある。また『魏書』については、魏書研究会編 [1999] もあり、用語検索に有益である。

正史の通行本としては中華書局標点本があり、校勘もゆきとどいていて通読には便利である。ただ、時に句読の誤りや校訂の不備があり、あたりまえのことであるが全面的に信頼してはいけぬ。とりわけ残欠・復元部分の多い北朝関係正史を読む場合には注意が必要である。百衲本二十四史その他の正史善本、正史復元・校訂に利用さ

れた『通典』『文献通考』『冊府元龜』『玉海』『藝文類聚』『初学記』『北堂書鈔』『太平御覽』などの政書・類書の関連部分と対校しながら読み進める必要がある。また『資治通鑑』の北朝史にかかわる部分には胡三省の注があり、『資治通鑑考異』とともに、正史読解に不可欠の資料である。

上記のほか北朝史にかかわる基本史料として、まず歴史地理に関する古典的著述である酈道元撰『水経注』40巻がある。『水経注』を読むには、楊守敬・熊会貞 [1989] と王国維 [1984] の注疏・校訂を参照する。王国維校本は、編集者の施した標点があつたもののデタラメであり、原書の価値を半減させている。テキストとして利用するには注意を要する。原稿の影印本か、厳密な整理と正確な標点を施した改訂版の出版を望む。楊・熊合撰注疏は定評のある著述である。ただ楊・熊 [1989] には排印の際に生じたと思われる字句の誤りが時にあり、原稿を影印した楊・熊 [1957] [1971] の参照が必要である。洛陽の都城・歴史地理・仏教文化に関する著述として、楊銜之撰『洛陽伽藍記』5巻がある。伽藍記を読むには、混交していた本文と注記とを区分し、校訂を施した徐高阮 [1960]、校訂・注釈を施した范祥雍 [1958]、周祖謨 [2000] を利用する。邦訳には入矢義高 [1974] がある。農家経営・生活誌を記述する古典的文献として賈思勰撰『齊民要術』10巻がある。要術を読むには、石声漢 [1957-58]、繆啓愉 [1982]、および西山武一・熊代幸雄 [1959] の邦訳・注釈を利用し、米田賢次郎 [1989] を参照する。門閥・家系が重視されたこの時代には、戒子書や家訓が数多く作られた。その代表的著作が顔之推撰『顔氏家訓』2巻である。『顔氏家訓』を読むには、周法高 [1960]、王利器 [1980] を利用する。邦訳には宇都宮清吉訳 [1969] がある。その他、北齊劉昼撰『劉子』10巻や大蔵経・道蔵などにふくまれる仏教・道教関係史料がある。正史以下、これらの史料については、東方学術協会編 [1947]、神田信夫・山根幸夫 [1989]、山根編 [1983] [1991]、高明士編 [1990]、島田虔次他編 [1983] にすぐれた解説が複数あり、その記述を参照すれば足りるので、ここでは贅言しない。

◆石刻・出土文字資料

北朝には石刻史料が墓誌銘を中心に数多く残存しており、また新たな出土も加わつて、伝来の史料を補い得るものも多い。北朝期の墓誌を整理したものとしては、趙万里編 [1956]、趙超 [1992]、北京図書館金石組編 [1989]「北朝」があり、北朝石刻の著録・真偽の概要を知るには王壯弘・馬成名編 [1985]、郭玉堂原著、氣賀澤保規編 [2002] などが便利である。

近年出土のものに北魏太平真君四年拓跋燾「石刻祝文」があり、町田隆吉 [1984] が紹介と分析をおこなっている。また北魏文成帝「皇帝南巡之頌」碑があり、池田温 [1998] が紹介し、川本芳昭 [2000]、松下憲一 [2000b] が碑陰の随行官員名簿によって、北魏官制の研究をおこなっている。これらは、正史の叙述を補訂するとともに、北魏前期の政治社会のあり様を考えるのに重要な手がかりをあたえるものである。

(渡辺信一郎)

第4章

隋・唐

妹尾達彦・石見清裕

1 研究の視点

◆そもそも「隋唐」史とは何か

隋唐史とは、いうまでもなく隋王朝（581～618）と唐王朝（618～907）の歴史のことだが、6世紀末から10世紀初にかけての中国大陸を中心とする東アジア地域の歴史を、隋唐史と呼ぶこと自体に、隋や唐という王朝を自明の存在としてしまう罣がかけられている。

易姓革命による王朝交替をしめす隋（楊隋）や唐（李唐）の名称を用いることによって、中国華北の黄土地帯に拠点をおく政権が、中国大陸全体を支配する揺るぎのない政権である印象が生まれ、内外の政治情勢の中で、絶えず政権の正統性の構築をめざしてめがき続けた、可変的で流動性に富んだ側面が見えにくくなるのである。

軍閥内の権力闘争を勝ち抜いて、楊堅とその一派が隋王朝を建国した際に、政権の正統化作業に多大の労力を割かなくてはならなかったことは、ライト [1982 (原書1978)] が明らかにしている。宮崎市定 [1992a (1965)][1993a (1968)] も、隋王朝が、権力基盤が不安定な中で政治の運営に苦心する状況を叙述した。また、唐の建国が、隋末に勃発した各地の軍閥同士の大規模な戦闘と、突厥や南匈奴等が中原に強い影響力を及ぼす複雑な内外情勢の中で挙行され、隋末の政治状況が唐の建国後にも強い影響を与えたことが、氣賀澤保規 [1973] や石見清裕 [1998] の研究で明らかにされている。

唐王朝は、建国後も政権内で激しい権力闘争が続き、武則天が皇帝となり周王朝（690～705）を建国した時点で一旦断絶し、唐という統一王朝が10世紀初まで継続して存続した訳ではない。後の歴史家が、女性の皇帝である武則天による周王朝の建国を認めなかったに過ぎない。また、安祿山政権の燕王朝（756～57）や、朱泚政権の秦王朝・漢王朝（783～84）、黄巢政権の齊王朝（880～83）等が長安を都に建国したことによって、唐王朝は、繰り返し正統性を否定されている。

つまり、隋唐という名称こそが、自らの存在を固定し正統化しようとする隋唐の政権担当者たちが、同時代と後代の歴史家を抱き込もうとした文化的仕掛けなのである。それでは、隋や唐の王朝名を使わない歴史叙述の方法は可能なのだろうか。中国の伝統的正統史観を相対化するための戦略として、普遍的な時代区分の名称を用いて、隋唐期を「中国中世後期」と称したり、また、杉山正明 [1997] のように、北魏の前身の代国から隋唐王朝までの国家を、政権の統治者層が一貫して鮮卑拓跋部の出身である点に注目して、「拓跋国家」と名づける考えもある。とりあえず、現時点では、すべての歴史叙述が異なる価値観のせめぎあう場であることを認め、6世紀末から10世紀初にかけての中国大陸を中心とする東アジア地域の歴史を、隋唐史と呼ぶこと政治性を自覚することが必要であろう。

隋唐政権の成り立ちを考える時、隋唐制度の淵源を系統的に明らかにした陳寅恪 [1944] や、隋唐王朝の形成過程を政治・軍事史を軸に分析する、布目潮瀧 [1968]、谷川道雄 [1998 (1971)] が、古典的な研究である。今後の研究は、冒頭で問題提起したように、隋唐王朝の存在を自明の前提として、そこから遡る歴史叙述とは別に、何もなかったところから隋や唐という王朝名を自称する政権が強引に構築されてゆく、政治権力の生成過程をダイナミックに分析する方法を模索してゆくべきだろう。この視角からの研究は始まったばかりといつてよい。

唐代や宋代に編纂された正史等各種の官撰史料のもつ政治思想の批判的分析は、そのための必須作業である。近年、唐太宗の勅撰した『晋書』の思想性を分析する磯波護・武田幸男 [1997] や安田二郎 [2003]、『周書』を分析する前島佳孝 [1999]、『貞観氏族志』を分析する山下将司 [2002] の研究によって、唐太宗の政権が、歴史書の編纂事業を用いて、支配の正統化の獲得にもがき生々しい動きが、明らかになってきている。太宗時に編纂が始まり高宗時に完成した『隋書』経籍志の序文と目録部分に、精緻な考証を施した興膳宏・川合康三 [1995] も、唐初の政治文化を把握するために大きな示唆を与えてくれる。

◆なぜ、隋唐史を学ぶ必要があるのか

隋唐史研究の意義は、現在の東アジア世界の複雑な枠組みが隋唐史の時期に生まれているために、今日の世界を理解するためには、この時期の知識が不可欠となることにある。4世紀から6、7世紀にかけてのユーラシア大陸をおおう遊牧民の大移動を受けて、ユーラシア大陸の東部に隋唐王朝が成立すると、隋唐に対抗する必要から、現在の東アジアの各地域で部族連合が進んで複数の国家がつくられ、8、9世紀には、今日まで継承される東アジアの国際関係が形成されることになった。

その結果、現在の東アジア各地域の制度文物や衣食住等の生活習慣の源流が、この時期から発することになった。中国大陸では、異なる種族文化の対立と融合を経て、現代中国の漢族文化の直接の源が生まれる。このことについては、西嶋定生、李成市編 [2000] の古典的研究から、李成市 [2000]、村川行弘監修 [2000]、鈴木靖民編 [2001] の研究に至る研究の蓄積があり、妹尾達彦 [1999] も問題を整理している。

東アジア共同体 (EAC) の形成が一定の現実性をもちつつある今日、東アジアの外部からきた仏教を媒体に、東アジアが史上初めて緩やかな文化圏を形成した隋唐期の歴史的経験は、今後の世界の動きに様々な影響を与え続けるに違いない、この時期を研究する意義が一層高まることは疑いない。

◆これからの隋唐史研究はどのようなのか

20世紀後半の隋唐史研究の大きな枠組みは、隋唐政権の統治社会層の変遷を初めて体系的に分析した陳寅恪 [1943] と、時代区分という方法によって、隋唐史を中国の中世の中に整合的に位置づけた内藤虎次郎 (湖南) [1922] によってつくられた。21世紀に入り、傑出したこの二人の学者の説の再評価と再検討が、世界各地で盛んに進められている理由は、陳・内藤説を生みだした近代国家形成期の時代状況とは異なる世界情勢が今日生じており、新しい世界情勢が従来とは異なる世界史理解を求め、今、隋唐史の新しい解釈が模索されているからであろう。

近年の隋唐史の研究動向を見ると、他の時期や地域の研究と同様に、^{エスニシティー}民族性や^{ジェンダー}民族問題、性差、生態環境、都市化、現在の国境線にとらわれない移動・交流・情報伝達の実態、^{グローバルゼーション}非識字層の文化などが重視されてきている。これらの問題は、^{グローバリゼーション}全^{ローカリズム}球化と^{エスニシティー}地域主義、^{エスニシティー}民族主義が互いにせめぎ合い、都市化と環境破壊が一挙に進む中、人権や環境等の問題が人類の普遍的課題として共有されるようになってきた現況をふまえた問題設定となっている。

確かに、過去の時代には固有の時代相があり、過去は、現代社会とは別個に存在していた。しかし、歴史学の宿命が、過去を事例に、歴史家の生きる現在を解釈することにある点を顧みると、今後の政治・経済の変化そのものが、新しい歴史解釈や仮説をくりかえし要求することは疑い無い。そして、新しい見方は、陳寅恪や内藤虎次郎自身がそうであったように、既存の枠組みからはずれた場所や人物、時代から生まれやすい。その意味において、学問の創造に際し、若い世代ほど有利である鉄則は不変である。

◆研究動向を知るには

日本語圏での隋唐史研究動向を知るのに最も便利な学術誌が、日本の唐代史研究会編『唐代史研究』(1998年創刊)である。同誌には、専門の論文が掲載されるとともに、巻末に充実した文献目録があり、日本語で書かれた論著が網羅されている。これに、『史学雑誌』毎年第5号の「回顧と展望」に掲載の「隋唐」「内陸アジア」等の項目の情報を加えれば、日本語で書かれた最新の情報を知ることができる。

本章の叙述は、日本語の研究論著を主とするが、現在、隋唐史に関する優れた論著の大半は、中国語で書かれている事実を忘れてはならない。中国語圏を代表する隋唐史研究の指南書として、高明士主編 [1990]、張国剛主編 [1996]、胡戟他主編 [2002]、黄永年 [2002] があり、専門の年刊学術誌として榮新江主編『唐研究』(北京大学出版社、1995年創刊)がある。上記の胡他主編 [2002] は、周到な準備のもとで完成された、20世紀の唐代史研究を集大成する記念碑的成果であり、研究者を

目指すものには必携といえる。『唐研究』は、世界の唐代研究の中核をなす学術誌であり、世界各地における唐代研究の動向を系統的に知るのに最適である。初学者も、日本語論文とともに、できるだけ多くの中国語論文に目を通して、従来の研究成果と新しい研究動向をあわせて吸収するよう心がけて欲しい。
(妹尾達彦)

2 研究の展開

<1> 概説

隋唐時代の概説は、魏晋南北朝時代とあわせて一書とされることが多く、宋代とともに描かれることは少ない。魏晋以来のさまざまな問題を継承して隋唐両王朝が形成され、ここで一つの時代が完成され、宋代はまた別個の時代と見る視点が学界の主流だからである。そのような描き方をした代表的な概説書として、宮崎市定 [1993a (1968)] があげられるであろう。隋唐時代は、華北の漢文化・五胡文化、および江南の南朝文化、さらには北方のテュルク文化までも取り込んで形成された多文化複合社会の時代であり、同書はそうした隋唐の時代相がよく叙述されている。近年のものでは、池田温編 [1996] が政治・社会経済・文化の三分野を柱としたオーソドックスな概説である。内容は詳細であり、各分野の問題点もつかみやすい。ただ、国際関係の分野がやや弱い印象をうける。礪波護・武田幸男 [1997] は、隋唐と朝鮮古代史を組み合わせた構成であり、特に政治・社会文化における宗教 (特に仏教) の役割を重視して隋唐時代を描いたものとして他書と一線を画している。中国書では、呂思勉 [1959] は今や古典ではあるが、そうはいっても同書は社会・経済・文化を概観するだけでなく、関連史料が豊富に引用されており、当該問題の基本史料をつかめるという点は、今なお便利である。近年のものでは、唐長孺 [1992] が、人口・土地制度・税制・商業などを論じて、国家の体制が華北中心から江南中心へと推移し、やがてそれが宋代社会形成へとつながるとい見通しを示している。

なお、当該時代の政治・制度等諸分野の仕組みを理解し、問題点をつかむために、岩波講座 (旧版) [1970] と同 (新版) [1999] は、必ず参照すべきである。どちらも当時の最高水準を示し、旧版の諸論考はいまだに通用するものが多い。社会経済史を重視する旧版と、地域・文化史を重視する新版との方法論の差異は、冷戦体制の終焉と世界構造の変貌とによって、歴史学界に要求されるものが変化したことを反映しているのである。

歴史叙述においては、ある特定の人物を取り上げることによって、その時代相を描く手法もよくとられる。そうした人物伝記の主なものをあげれば、まず隋煬帝と唐太宗の暴君像・名君像を比較した布目潮瀧 [1975] がある。則天武后を取り上げた概説は多いが、氣賀澤保規 [1995] が詳細で、問題を掘り下げている。安史の乱前後の玄

宗・安禄山・楊貴妃を取り上げたものも多く、藤善眞澄 [2000 (1966)] が格好の概説といえよう。

テーマ別の概説書としては、唐代の華やかな貴族文化がいかにイラン系文化の影響を受けているかを論じ、王都長安の風景を描いた石田幹之助 [1979 (1941)] は古典的名著であり、長安の都市プランや住民の生活ぶりばかりでなく、長安をユーラシア史に位置づけた妹尾達彦 [2001] は、都市史研究を志す者には必読である。

隋唐時代を研究しようとする者は、視野をモンゴリア・中央アジアにまで広げてほしい。そうしないと、時代感覚を誤る。この時代、モンゴリアには突厥・ウイグル等の、西方に移動する以前のテュルク民族が勢力をふるっていた。護雅夫 [1976] は、そのテュルク史を突厥碑文を駆使して高度でしかもわかりやすく解説し、必読の名著である。唐代史研究の不可欠の史料である敦煌・トゥルファン文書については、關尾史郎 [1998] によって文書発見経緯やアプローチ方法がつかめる。

隋唐と東方との関係を述べたものは多いが、近年の入門書としては李成市 [2000] が好著である。また、かつては「謎の」という冠詞が付された渤海国は、研究が進化した今ではそのような書物は出版されなくなった。通史としてまとめたものに、濱田耕策 [2000] がある。遣唐使研究の分野も、従来のような日本史側からの描き方では今や不十分となった。新しい視点に立つ概説として、遣唐使が出席した唐の外交儀礼を解説した古瀬奈津子 [2003] をあげておきたい。

概説書はあくまでも入門のために読むものであり、すべてを読破する必要はない。当該分野の研究がいかに行われてきて、現在何が問題なのかを、なるべく早くつかむよう心掛けてほしい。そのためには、谷川道雄他編 [1997] が一助となろう。

〈2〉政治

◆唐初の支配者階層

隋唐時代を貴族政治の時代とする見方は、内藤虎次郎 [1922] によって枠組みが示された。ただし、唐代の貴族は魏晉南北朝貴族の末裔に限定されない。むしろ、北魏末の六鎮の乱によって中国北辺から内地に移住してきた北族が、政権の中核を形成したと考えられる。その意味で、この時代の支配層を「新貴族」ととらえた谷川道雄 [1970] は妥当なのである。一方、こうした新支配層を「閩隴集團」ととらえる陳寅恪 [1943] がある。渭水地方を基盤として西魏・宇文泰の政権をささえた八柱国・十二大將軍の家柄によって、隋唐両政権は形成されたとする見解である。唐初の閩隴系官僚は、則天武后朝の科挙官僚進出によって勢力を弱体化させ、両者の均衡の上に玄宗朝の繁栄を迎えるという枠組みは、陳説によってできあがった。

新貴族制説が、支配者階層の母体である郷村構造のあり方を問題とするのに対し、閩隴集團説は中国史上におけるこの時代の支配者層の特殊性を説くものであった。したがって、閩隴集團説に傾倒した布目潮瀧 [1968] は、隋・唐初の高官層の出自・官

歴を逐一分析して陳説の妥当性を主張したが、その結果、唐の建国も玄武門の変もいづれも閩隴集團内部の権力闘争に過ぎないとの結論に到達せざるを得なかった。

そもそも、西魏以来の八柱国・十二大將軍家によって隋も唐も形成されたとすると、隋王朝を瓦解させた隋末の乱に低い評価を与えざるを得ない。氣賀澤保規 [1973] は、隋末の諸群雄の性格を分析し、特に山東勢力の土着性の強さを指摘した。閩隴地方だけでなく、唐がいかに各地の勢力を支配下に入れて安定政権を樹立したのかという視点は、やはり重要である。唐の建国の背後には、東アジアの大きな動きが存在したと思われるからである。石見清裕 [1998] は、突厥も視野に入れて、それを北族の動向から理解しようとした。近年では山下将司 [2002] が、八柱国・十二大將軍の家系そのものが唐王室李氏の正当性を主張するために唐建国後に捏造された可能性が高いと指摘し、注目される。

則天武后後に科挙官僚が政界に進出することは、学界で大方の認めるところである。谷川道雄 [1956] は、科挙官僚が支持する皇帝親政路線が外戚・皇親勢力を退けた結果として、玄宗朝の現出に至るとする。ただし、政策面から武后朝の意味を問い直す研究はいまだ少ないといわざるを得ず、詔勅類の分析等が急務である。

◆安史の乱と藩鎮体制

唐は、安史の乱を境に前・後半期に分けてとらえられる。安史の乱は、これまで主として安禄山・史思明・玄宗・楊貴妃・楊国忠などの人間関係から説明されがちであり、この反乱の本質についてはなお未解明の点が多い。そうしたなかにあつて、Pulleyblank [1955] は安禄山の出自やこの乱の政治・軍事・経済的背景を述べた先駆的研究である。近年では、安史の乱を中国内の事件としてだけでなく、広くアジア諸民族との関連を重視する研究が発表されつつある。森部豊 [2002] は、安史軍における非漢族の存在の重要性を指摘し、また森安孝夫 [2002] は、中国側からは反乱に見えるこの事件が、当時のウイグルの動向と連動したものであることをウイグル文書によって明らかにした。

唐後半期は、一般に「藩鎮体制」と称される。各地域の節度使（藩鎮）が民政・軍政を掌握した地方分権的な社会体制を指し、この構造は日野開三郎 [1980 (1942)] によって枠組みが示された。その後、研究は唐王朝政権と藩鎮との関係、藩鎮内部の権力構造等に向けられた。たとえば堀敏一 [1960] は、藩鎮親衛軍は官健軍と私兵からなり、これらと節度使との関係から藩鎮構造を分析し、谷川道雄 [1978] は、個人的関係よりも節度使の公的立場を重視して藩鎮体制の全国的普遍構造を理解した。また、大澤正昭 [1973] は全国の藩鎮を、権力志向型・分立志向型・統一権力支持型の三つに分類した。渡邊孝 [1995] は、分立志向型の典型とみなされる河朔三鎮とはいえ、在地の伝統に根ざした兵士集團を基盤とする魏博藩鎮と、諸將層を主体勢力とする成徳藩鎮とでは、構造に基本的な差異が存在することを明らかにした。藩鎮研究は、個々の藩鎮の実証的分析が重視されつつあるといえよう。また、藩鎮と中央政界との関係では、礪波護 [1962] が、節度使等の使職が幕下に有能の人材を招聘する辟召制

を論じ、それが牛李の党争の背景となったとする重要な指摘をしている。

黄巢の乱に代表される唐末の反乱については、日野開三郎 [1996] が先鞭をつけ、堀敏一 [1957] が反乱活動における私商の役割を論じた。

◆政治諸制度

唐代の政治制度を支えた根幹は、律令制である。律は刑法、令は行政法であり、格は長期有効の詔勅を簡条書きにした律令の補足（あるいは変更）規定、式は末端行政の施行細則である。官制・兵制等の諸制度は、これらによって運営された。

まず律については、現行『唐律疏議』が開元25年律疏であると考証した仁井田陞・牧野巽 [1978] は必読。ただし、永徽律疏とする見解も存在する。律文の改正をめぐるのは、皇帝権によって随時個々の条文の改正が可能とする岡野誠 [1980] と、律の全面的改正まで条文は修正されないとする滋賀秀三 [1981] とがあるので、注意を要する。刑罰に関して、古くは奥村郁三 [1961] があり、近年では辻正博 [1993] 等が刑罰の思想を掘り下げている。なお唐代法制史の分野には、中田薫 [1926-64]、仁井田陞 [1958-64] 等の専著があるので、常に参考にしなければならない。

唐令は散逸してしまい、早くから復原の努力がなされ、仁井田陞 [1933] および仁井田、池田温編 [1997] によって集大成された。令は、個々の条文の解釈如何が諸制度の運営、ひいては国家・社会像に直結するので、条文の扱いと先行研究に細心の注意を要する。唐の格・式もまとまった形では伝わっていないが、開元戸部格残簡を取り上げた仁井田 [1957]、開元水部式残簡を分析した岡野誠 [1987] 等によって一部を窺い知ることができる。これらの研究には西域出土文書が用いられ、それら文書断片類は池田温・岡野誠 [1977] によって一覧表と解説が示され、写真・録文は Yamamoto et al.(eds.) [1978-2001] I によって見ることができる。1998年、寧波の天一閣で戴建国氏によって宋代「天聖令」の明抄本が発見され、その中に唐・開元25年令が含まれることが明らかにされるにおよんで、唐令研究は俄然新段階を迎えた。現在のところ、天一閣本の田令部分のテキストは、宋家钰 [2002] に拠るべきである。新史料に基づき、これまでに池田温 [2000a] が天聖田令・捕亡令と養老田令・捕亡令との対照作業を行い、大津透 [2001] が開元25年賦役令の復原を、また山崎覚士 [2003] が開元25年田令の復原を、それぞれ試みている。全貌の公表が待たれる。

唐の三省・六部・九寺・五監などの中央官制機構については、池田温 [1970] が概観するのに便利である。このうち、三省（中書・門下・尚書）と六部（吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部）は国家の意志決定機関、中央人民政府であり、特に重要である。これらの機能と、唐後半期にはかわって使職と称される令外の官が実際の財政・軍事等を運営するようになり（節度使もその一種）、その構造は礪波護 [1998] が分析している。百官表が付されており、官職のランクが一望できる。

国家権力の一方の支柱である兵制に関しては、府兵制に研究の重点がおかれてきた。府兵とは、折衝府（隋では鷹揚府）に徴兵された民丁が京師警備や辺境防備の任につ

く兵役制度のことで、これが維持困難となって玄宗期に募兵制にとつかわれたとするのが従来の一般的な理解である。この枠組みは浜口重国 [1930] によってなされ、谷霽光 [1962] とともに今なお拠るべき古典的研究である。また、府兵制の全体的構造については、菊池英夫 [1970] が最もわかりやすい。同氏は、一連の唐代兵制研究を公にしているのので、この分野を勉強するには必ず参照しなければならない。これに対し、近年では氣賀澤保規 [1999] が、府兵は租調役が課される戸からではなく、それとは別のいわば「兵戸」から徴兵されるとして、両者の区別を主張した。すなわち、府兵制は兵民一致か兵民分離かを問うたのである。換言すれば、問題は、唐代の兵役は力役に含まれるのかどうか、という一点にあり、この点は今後つねに注意しなければならない。また最近では平田陽一郎 [2002] が、雑多の兵種のうち唐後半～宋代にあたかも府兵が根幹制度であるかのごとくに位置づけられたとして、府兵制を大前提とした従来の兵制研究に警告を発し、注目される。

儀礼制は、法制とならぶ国家の支柱であるにもかかわらず、研究が立ち遅れている分野である。祭祀から皇帝制度のあり方を分析した金子修一 [2001a]、儀礼から帝国システムを論じた渡辺信一郎 [1996]、賓礼（外交儀礼）の式次第を分析した石見清裕 [1998] などがある。

〈3〉国際関係

◆国際関係秩序

隋唐時代は国際交流が活発化したため、この分野の研究は早くから行われてきた。隋唐時代の国際関係の基本的秩序理念は、一般的に「冊封体制」として理解されることが多い。冊封体制とは、中国王朝が周辺諸国君主に王爵等を与え、それにともなって両国間に相応の義務が生じ、それによって国際秩序が形成されたとする見解で、西嶋定生によって体系化された。西嶋の基本的論文は、西嶋 [1983][2002]、西嶋、李成市編 [2000] によって見ることができる。西嶋冊封体制論は、主として唐・朝鮮半島・渤海・日本によって形成される「東アジア世界」を想定して立てられた理論であり、日本史側からの研究ではこの枠組みを想定することが多いが、中国から見れば国際関係は東方に限定される訳ではない。むしろ力関係では、北方や西方がより重要である。そこで、隋唐の対外関係は冊封体制に限られず、実際には多様な関係から成り立っていたとする指摘も、早くからなされてきた。その代表的な一人である堀敏一は、唐との関係の強弱から「内地化—羈縻—冊封」という構造を設定している。堀の国際関係論は [1993] に最もよくまとめられている。

これらの論を踏まえ、あるいは乗り越えようとして、隋唐時代の多様な国際交流の側面を分析した専著に唐代史研究会編 [1979] があり、当時の水準を伝える。特に菊池英夫「総説」は必読。前近代の国家間の意思伝達は国書（国家元首間の外交文書）によって行われた。唐朝発給国書に関しては、金子修一 [1983] が、冒頭文言「皇帝

敬問」文書は敵対関係国を、「皇帝問」「勅」文書は君臣関係国を対象とするという図式を想定した。これに対して、中村裕一 [1986] は、これらは慰勞制書・論事勅書の書式であり、あくまでも君臣関係を前提とした文書として反論している。

当時の貿易は国家使節が派遣されて行われる朝貢貿易を基本とする。今では、朝貢貿易においても使節が相手国で個人的に交換を行うケースが指摘されており、敦煌文書からウイグルと唐の例を分析した土肥義和 [1988]、正倉院文書から新羅と日本の例を分析した李成市 [1997] は必読である。唐代の国際交易は、9世紀に民間商業が活発化して転機を迎えると理解するのが近年の傾向であるが、日本を含めた東方貿易の分野については、鈴木靖民編 [2001] によって現在の問題意識がつかめるであろう。

◆隋唐と個々の諸国との関係

まず、遊牧勢力との関係については、護雅夫 [1967] が隋唐と突厥間の冊立・被冊立関係、父子関係等から両国の関係の推移をまとめている。ウイグルとの関係では、羽田亨 [1953] が現在でも拠るべき基本文献である。山田信夫 [1989] も突厥・ウイグル史の基礎的問題を取り扱っており、林俊雄 [1992] はウイグル側から見た対唐外交の推移を分析する。

天山山脈の北を遊牧草原地帯、南を乾燥オアシス地帯ととらえ、両者の関係とさらに東西との交渉からユーラシア史を体系づけたのは松田壽男 [1970] である。その天山北方の西突厥については、その国家体制と隋唐との関係を分析した内藤みどり [1988] の専著がある。唐とアッパース朝との有名なタラス河畔の戦いについては、前嶋信次 [1958-59] が西突厥の一部の突騎施と唐、タシュケント（石国）との関係破綻が原因であることを明らかにした。チベット関係では、吐蕃王国史とその唐との関係を時代を追って7章にまとめた佐藤長 [1958-59] は基礎的研究である。さらに山口瑞鳳 [1983] は、チベット語文書を駆使して吐蕃史研究を一層深化させた。そこには、文成公主の降嫁相手がソンツェン・ガンボではなくクンソン・クンツェンであることを考証するなど、重要な新見解が随所に示される。また、吐蕃と隋唐との関係のみならず、突厥・ウイグルをも視野に入れた森安孝夫 [1984] も必読の力作である。

西方オアシス世界との関係については、サマルカンド=康姓、プハラ=安姓、タシュケント=石姓などの中国移住ソグド姓を体系づけた桑原隲蔵 [1924] は必ず読んでおかねばならない。そのソグド人が敦煌に形成した集落の実態を、敦煌文書を使って踏み込んだ分析を示した池田温 [1965] は記念碑的論文である。近年では、朱印から河西帰義軍節度使文書の年代を総括的に整理した森安孝夫 [2000] が方法論として参考になろう。

この分野は、伝統的に東西交渉史または西域経営史として研究されてきたが、現在では敦煌文書・トゥルファン文書の研究が進み、現地の歴史としての立場が当然となった。一例ではあるが、荒川正晴 [1997] は、元来外国人であるソグド人は内地移住ソグド人を保証人として通行手形を取得し、唐の律令では羈縻州民として私的取引が許され、それによって西方の物資・文化が中国に移入されるあり方を明らかにした。

トゥルファン文書研究では、唐の西州支配によって旧高昌国の名族が没落し、新興庶民層の台頭する構造変化を分析して、トゥルファン社会を浮き上がらせた白須淨眞 [1997]、納税証明証から高昌国の税制形態を田租・丁税・遠行馬銭・刺薪の4種に分類し、それによって高昌国の住民と国家体制を分析した關尾史郎 [1988-99] などの力作がある。

東方との関係に目を転ずれば、近年では渤海史研究の進歩がめざましい。この分野は、わが国に日渤交渉を伝える史料が比較的豊富に存在するため、主として日本史家によって研究がなされてきた。近年におけるその二大集大成ともいべき酒寄雅志 [2001]、石井正敏 [2001] は必見。さらに国際関係から渤海史を浮かび上がらせようとする試みは、佐藤信編 [2003] によって最新の問題意識が提示されている。なお渤海史は、渤海を中国史の一部とみる中国の学界と、朝鮮史の一部をとらえる韓国・北朝鮮の学界とで史観が対立しており、深刻な現代史的問題をはらんでいる。当然、わが国の学界もそうした歴史枠組理解と無関係ではおられず、それについては古畑徹 [2003] を参照されたい。

国際関係を研究するには、①前近代の国境は一線で画されるのではなく、両国・両文化圏の間に中間地帯が横たわっており、その動向が両国間の関係を左右する場合が多いこと、②漢文史料に引きずられて必要以上に中華思想に陥らないこと、の2点につねに留意すること。中国北辺の中間地帯が示した歴史的意義を述べたものに、石見清裕 [1999] がある。

(石見清裕)

〈4〉経済・財政・環境

◆隋唐の経済・財政・環境のとりえ方

隋唐は、大運河の開削・運営や交通制度の改革、国際関係の好転の結果、中国大陸の経済がユーラシア大陸の経済圏に組み込まれる時期である。中国の国家財政が、徭役労働から土地課税の重視へと変化し、直接税から塩専売・商税等による間接税に依存する体制に転換してゆく重要期にあたる。同時に、4、5世紀から7世紀にかけての遊牧民の大移動の波及を受け、8、9世紀以後、ユーラシア大陸の人間活動が海域にまで拡大するようになり、東西貿易の交通手段の主体が動物から船に比重を移してゆき、同じ生態環境の圏内を東西に陸路移動せざるをえなかった従来の制約を、脱することができるようになった。その結果、隋唐は、人間界と自然界が不可分とする認識の中から、人間主体の観念が醸成されてゆく、世界認識の転換期にもあたる。経済・財政・環境の相互関係は、隋唐史の特徴を考える鍵となるが、未解明の部分は依然として多い。

隋唐の経済問題全般については、現在でも、加藤繁 [1926][1952] の研究が出発点をなしている。加藤は、土地経営、商業組織、商慣行、貨幣や金銀の流通、都市化の進展等を事例に、生産・分配・消費の経済の全過程を詳論し、中国の経済史が唐宋間

に画期を迎えることを明らかにした。その徹底的な史料収集と系統的な分析の密度には、今も学ぶべき点が極めて多い。

加藤繁は、中国経済史を説明する論理として、田口宏二郎 [1999] が分析するように、近代国家の国民経済の形成を目指す20世紀初頭の国際情勢をふまえ、ドイツ歴史学派の内在的な経済発展段階説に依拠した。21世紀に入った今日では、国境の枠を越えた地球規模の市場・情報圏の形成が急速に進展しており、隋唐経済史は、加藤に代表される近代歴史学が依拠した内的発展論の成果を踏まえながらも、新しい別の解釈が求められている。中国社会経済史における隋唐経済史の位置づけを考える際には、経済史の理論的な検討を行った足立啓二 [1990] や青木敦 [1995]、唐から宋にかけての社会・政治構造の変化を包括的に論じた丸橋充拓 [2001] や山根直生 [2004] を精読して、問題点の把握に努める必要がある。

◆交通と情報伝達

隋唐の経済・財政史を、空間・時間的に広い視野のもとで考察しようとする時、やはり、ユーラシア大陸全体の経済史の中に隋唐を位置づけた、宮崎市定 [1993b (1973)] [1993c (1977-78)] の大局的な分析が、今後の指針となる。宮崎の説によると、3、4世紀から6世紀にかけての戦乱と不景気の中で、一旦は中国大陸の経済は収縮したが、隋唐王朝による中国再統一後、安史の乱後の8世紀末から11、12世紀にかけて、中国大陸内部の経済活況がユーラシア大陸の経済活動と連結して、中国史上初めて、財政国家とよぶべき国家体制が確立した。行政の集権化と財政の効率的・集約的運営が進み、国家の常備軍を徭役ではなく税で雇うことが可能となった、財政国家の具体的な機構については、日野開三郎 [1981] [1982] が克明に分析している。

隋唐の中国統一が、交通・通信手段の発達を促し、情報伝達が格段に進展することになったことは、青山定雄 [1969 (1963)] が系統的に論じた。唐代交通の全面的な復原を厳耕望編 [1985-2003] が試みている。浜口重国 [1934] と全漢昇 [1944] は、大運河の開削・運営が唐朝財政全体に果たした役割の大きさを浮き彫りにした。

隋唐史は、上記のように、ユーラシア大陸の交通が、陸から海へ徐々に比重を移し始める時期にあたる。この変化は、東西を繋ぐ商業と情報伝達の担い手が、隋唐前期における中央アジアのソグド人から、唐後半期におけるペルシア湾のイスラーム商人へ転換することに象徴される。8、9世紀以後における、中国大陸とペルシア湾地域を海路往来するイスラーム商人の活躍は、桑原隲蔵 [1989 (1923)] によって研究の基礎が築かれ、家島彦一 [1991] [1993] が、さらに幅広い視野から一段と研究を深化させた。アプー=ルゴド [2001 (原書 1989)] は、8、9世紀から13世紀にかけての海路による貿易圏の拡大を軸に、中国大陸から地中海に及ぶ大きな世界システムの形成を主張している。

隋唐と中央アジアを結ぶ陸上交通に大きな役割を果たしたソグド人については、ソグド人墓が、黄土地帯で相次いで発掘されていることで具体的な活動状況が判明してきた。隋唐と西域諸国との交通・貿易の内容を知るには、文書史料を駆使して実像を

浮かび上がらせた荒川正晴 [2003] が優れており、柴新江 [2001a] も名著の誉れが高い。NHK編 [2003] は、シルクロードの貿易と交流に関する近年の研究成果を、わかりやすくまとめている。

◆産業と技術——農業・牧畜業・漁業・商業・手工業

隋唐における中国大陸の政治的再統一と交通・運輸体制の改革は、都市網の拡大と生産力の回復を促して生産・流通・消費活動の分業化を進め、中国各地に各種の産業を勃興させた。まず、中国の基幹産業である農業については、中国農業史における隋唐農業の特質を探る研究が、天野元之助 [1979 (1962)] によって開拓された。また、西嶋定生 [1947] は、製粉用の碾磑ひしうぎの普及を示す史料を手がかりに、都市民の消費と需要の増加を背景に冬小麦の栽培が定着し、9世紀の華北に二年三毛作が成立したことを論証し、農業史研究に新地平を切り開いた。ただ、李令福 [1999] は、二年三毛作制度の確立は明中期以後とする。大澤正昭 [1996] は、唐代の農器具、農業技術、農業経営の実態を系統的に明らかにし、現在の日本における農業史研究の水準を示す。隋唐期の江南の農地開拓が、現在に至る長江下流域の経済発展の起点となったことは、北田英人 [1989] と李伯重 [1990] が論証した。隋唐期の農業・牧畜業の全体像は、張沢咸 [1999] によって把握できる。

唐代の手工業・商業は、張沢咸 [1995] が概観している。牧畜業については、中国での研究が進んでいるのに対して、日本では、齋藤勝 [1999] と坂尻彰宏 [2003] 以外ほとんど研究がない。これは、日本が遊牧・牧畜を生業とする社会でないことと関係していようが、牧畜は、隋唐の経済を考える際に不可欠の研究課題である。水産業に関しては、中村治兵衛 [1995] が、唐代の漁法・漁具、漁業政策全般を初めて明らかにした。鮎業については、楊遠 [1982] がある。

商業に関しては、卸売業の発展を軸に、唐代商業の全体像を描く日野開三郎 [1992 (1968)] が、代表的な論著である。手工業に関しては、唐代の絹織物業の実態を、佐藤武敏 [1978] が詳細に復原しており、陶磁産業は、愛宕松男 [1987] が一連の論文で明らかにしている。金属工芸については、金銀器についての齊東方 [1999] と松本伸之 [2000] の優れた研究がある。百橋明穂・中野徹編 [1997]、尚剛 [1998] は、隋唐美術史の専著だが、隋唐の工芸品・建築・絵画等の製作・流通・消費についても、全般的な知識を得ることができる。藪内清編 [1998 (1963)] が、魏晋南北朝から隋唐期にかけての自然観・数学・天文学・化学・医学・調理法・醸造業・博物学を論じ、当時の科学技術について大きな見通しを与えてくれる。隋唐の曆作成に関しては、藪内 [1989 (1944)] の専著がある。

◆土地と税財政

隋唐の土地制度・税財政は、8、9世紀以後、均田制から荘園制へ、租調庸制から兩税法へ、徭役労働重視から土地課税重視へと転換し、他の諸制度と同じく中国史の分水嶺をなす。ただ、不明点はなお少なくない。唐代財政史については、李錦繡 [1995, 2001] の全5冊におよぶ精密かつ包括的な研究によって、一挙に解明が進ん

できた。清木場東 [1996][1997] は、唐代の財務体制と支出構造、税物の運輸の問題を、広い視野から体系的に明らかにした。大津透 [1986][1990] は、大谷文書とトゥルファンのアスターナ出土文書を接合させて、7世紀末の国家予算を示す文書（「儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符」と命名）の復元に成功し、財政史研究を活性化させた。唐後半期の財政史研究に関しては、渡辺信一郎 [1990] と丸橋充拓 [1996] によって、新しい展開がもたらされた。

均田制（均田法）は、国家が耕作者の土地の大きさを均分に規定する制度である。その均田制の実施の程度、系譜、歴史の変遷については、鈴木俊 [1936] と仁井田陞 [1983 (1937)] の論争を皮切りに、古賀登 [1956]、西嶋定生 [1959]、西村元佑 [1959]、池田温 [1964]、堀敏一 [1975]、山本達郎 [1977-78]、土肥義和 [1979] 等によって、見解の異なる精緻な研究が蓄積されてきた。均田制の研究は、隋唐史の研究史上、最高の英知が傾注され続けてきた分野と言って過言で無く、隋唐史文献の論証の技術や方法を学ぶために、均田制研究ほど適切なものは無い。日本における均田制研究の複雑な経過を知るには、堀 [1975] と氣賀澤保規 [1993] が最もわかりやすい。均田制と密接に関連する賦役制・租調庸制については、未完成となった日野開三郎 [1974-75, 77] の大著がある。日野 [1986] は、唐代先進地帯の荘園制の普及の実態を精細に分析し、荘園制研究を新しい段階へ押し上げた。寧波の天一閣に所蔵されていた明抄本の北宋・天聖令の発見により、唐田令・賦役令などの復原が可能となり、唐代の均田制・賦役制の研究は、再び活気づいている。

8世紀末に始まった両税制（両税法）は、唐後半期の国家財政の基幹をなし、16世紀の明の一条鞭法の創設まで施行されたので、唐代の税制に限定されない研究の広がりとも重みをもつ。1990年代前半までの唐代両税制の研究は、船越泰次 [1996] によって集大成された。両税法と並び唐後半期の国家財政の基幹をなす塩専売制は、高橋継男 [1972] の系統的な研究が今も継続して進んでおり、河東池塩の専売については妹尾達彦 [1982] がある。

◆環境

隋唐期の経済・財政構造は、当時の気候や年平均気温、動植物の生態と密接に関連している。中国大陸の生態史の大きな見取り図と隋唐期の生態の位置づけは、上田信 [1999][2002] の明晰で魅力に充ちた分析から知ることができる。隋唐期の都が置かれた関中平野の生態環境については、史念海 [2000] がわかりやすく、史念海主編 [1998][1999] が、多様な視角からの専論を収録する。唐代の江南の自然環境については、北田英人 [1989] による見事な分析がある。研究の一層の進展が望まれる分野である。

<5> 社会・文化

隋唐文化の概観を得るには、政治・社会・経済全体の中に、学術・思想・宗教・文

学・美術等の文化活動を的確に位置づける池田温編 [1996] が優れている。唐代文化の諸相を多角的に分析した那波利貞 [1974] は、本格的な唐代社会史研究の嚆矢をなすと言ってよく、論点の新鮮さは今も衰えない。また、大室幹雄 [1992][1994] [1996] は、中国大陸の都市文化の展開を、その誕生から唐末まで描く、雄大な6部作の後半部分をなす。この魅惑的な連作で大室は、隋唐文化の変貌を、王都の支配層の嗜好の変転を主軸に、緻密で個性的な文体を駆使し映像的に活写した。中砂明德 [1994] は、唐宋の思想文化史の研究史を簡潔にまとめた。隋唐都市の生活と文化の特色とその変遷については、妹尾達彦 [1997] も問題点を整理している。

◆衣食住

衣食住の変化には、政治経済・生態環境・社会文化の変化が集約されている。唐代は、ズボンと上着・冬小麦と稲米・椅子とテーブルという、現在の漢族の衣食住の生活様式の原型が形成される重要期である。隋唐期の衣食住の全体像を把握するには、最初に、李斌城他編 [1998] と黄正建 [1998] を通読するのがよい。飲食については、篠田統 [1974][1978] の隋唐の項が現在も基本となる。服飾・化粧・装身具については、原田淑人 [1920][1987 (1963)] が古典的研究である。建築については、隋唐の建築家や建築様式を初めて詳細に明らかにした田中淡 [1989] が基本文献である。現在は、豊富な考古発見が中国各地で相次ぎ、研究資料は飛躍的に増加しており、隋唐期の衣食住の総合的分析への道が見えてきた。

◆都市・農村・地域社会

隋唐の都市と農村の関係、すなわち都鄙関係に関しては、唐代史研究会編 [1992] が手引きとなるが、唐代の兩京周辺地域を主対象に、網羅的な史料収集にもとづき、実証的かつ精緻な分析を行った愛宕元 [1997] が最も優れている。唐代の集落と家をめぐると問題の枠組みを知るには、堀敏一 [1996] が役立つ。佐竹靖彦 [1990] は、唐宋間の地域社会の変貌を体系化しており、今後の研究の指針をなす。近年では、在地権力と国家の関係を論じた穴沢彰子 [1999] が注目される。土地神である社を囲む人間集団のあり方については、土肥義和 [1995] が研究を一段と前進させた。また、隋唐の都鄙関係を、中国史の中で大局的に把握するためには、斯波義信 [2002] を読む必要がある。

都城の長安と洛陽の都市文化を知るには、平岡武夫編 [1954-64] を活用することで、膨大な情報を効率的に得ることができる。妹尾達彦 [1997][2001] は、唐代兩京の都市構造の変遷をまとめている。長安の都市文化の具体像は、唐詩から年中行事や都市景観を丹念に復原する植木久行 [1995 (1980)][1999 (1983)] の魅力的な研究や、長安の情景を滋味溢れた文章で抉り出す川合康三 [1999] からも得ることができる。長安城の宮殿構造にもとづき政治過程を分析する松本保宣 [2001][2002] は、都城史と政治史の密接な関連を明らかにした。小野勝年 [1989] は、隋唐長安城の仏教寺院関係の史料を集大成し、土屋昌明 [2002] は、道教の目から見た唐長安城の光景を描いて、新しい長安像を提起した。

◆家族・性差・身分制

隋唐の家族と身分制、国家権力との関係については、尾形勇 [1979] と堀敏一 [1987][1996] の研究が出発点となる。唐代の女性が直面した問題全般を知るには、高世瑜 [1999]、斎藤茂 [2000]、大澤正昭 [2005] が優れており、翁育瑄 [2003] は、唐宋の女性の社会活動を解明する一連の研究の端緒をなす。女性史や性差史の研究の進展は、従来とは異なる視角からの分析を可能にし、隋唐史全体をより多面的に把握する道を新たに開いた。現在の唐宋女性史・性差史の水準を知るには、鄧小南主編 [2003] が最適であり、今後さらに追究すべき論点と分析の方法が、ほぼ網羅されている。

唐代の身分制の専著としては、賤人制を論じた浜口重国 [1966a] が古典といえ、その後の研究の展開は、山根清志 [1982] を始めとする山根の一連の研究を参照する必要がある。8世紀末から9世紀にかけて、科挙制度の定着により、統治階層の構成原理が従来の出身身分から科挙合格という業績に転換し、従前の身分制の一角が崩れ出すことが、渡邊孝 [1993] の統計的研究で明らかになった。9世紀以後、20世紀初まで統治階層の主体となった科挙官僚の最初期の事例となるのが、白居易や韓愈、柳宗元といった中唐期の文人である。白居易を知るには、平岡武夫 [1998]、太田次男他編 [1993-98]、静永健 [2000] が最良であり、韓愈については大木康 [1996] がわかりやすく面白い。柳宗元については、松本肇 [2000] と戸崎哲彦 [1996] が筆頭にあがる。小野四平 [1995] も、韓愈と柳宗元を軸に、漢代以前の文体（古文）が8、9世紀に新たに発見され創造されてゆく意味を論じる。彼らの人生の中に、中国史の転換が凝縮されている。

◆宗教・信仰・思想

隋唐期は、中国史上最も華やかな多文化社会の一つであるため、宗教は、儒教・仏教・道教の三教の他に、ゾロアスター教（祆教）・マニ教（摩尼教）・ネストリウス派キリスト教（景教）等が併存し、広く信仰の対象となった。このうち、中国外部からきた仏教と内部の道教が織りなす、対立と相互影響の複雑な関係系を知るには、吉川忠夫編 [2000] が最良の手引きとなる。隋唐初期に国家と社会に深い影響を与えた宗教が、仏教である。仏教の研究は枚挙にいとまが無いが、仏教の役割を、政治社会の変遷の中で深く広く究明した点で、礪波護 [1999] に優る専著は無い。また、藤善眞澄 [2004] は、隋唐仏教史を分かりやすく明快に叙述する必読書である。藤善 [2002] は、南山律宗の開祖・道宣の研究に新地平を開いた。唐後半期には、道教と儒教が台頭して仏教の中国化が進む。9世紀以後における新儒教の形成に関しては、小島毅 [1996][1999] の研究が新鮮で示唆に富む。隋唐道教に関しては、砂山稔 [1990]、山田俊 [1999]、小林正美 [2003] が多彩な論陣をはり、研究は活況を呈している。丸山宏 [1999] は、広い視野のもとで隋唐期の道教を位置づけた。福永光司 [1987] は、隋唐期を含む中国道教史研究の珠玉の名編を収録する。マニ教については、ウイグル史研究と兼ねて分析した森安孝夫 [1991] の研究が、マニ教史研究の金

字塔をなしている。

唐代の人々の死生観については、西脇常記 [2000] が新史料をもとに論じ、唐代の墓葬と墓誌の変遷については、中砂明德 [1993] が系統的な見通しを述べている。唐代皇帝陵については、実地調査に基づく来村多加史 [2001] の労作がある。隋唐の王権思想は、渡辺信一郎 [2003] と大原良通 [2003] が、それぞれ比較史の方法を用いて分析した。

◆敦煌・トゥルファン文献研究

甘粛省敦煌の莫高窟第17窟において蔵経洞が発見され、4世紀後半から10世紀末にかけての数万点に及ぶ多彩な敦煌文献の存在が知られてから、100年を経た。敦煌文献は、多言語で書かれていることを特色とするが、漢文の仏教文献を主とし、法令・地理・籍帳・契約・官方文書・詩文等にわたる。ほぼ同じ時期に発見された中国新疆のトゥルファン盆地のトゥルファン文献とともに、明清の檔案や日本史の地方文書に匹敵する第一次史料であり、隋唐史研究に文字通り革命的な影響を及ぼした。敦煌・トゥルファン文献の整理は、現在、飛躍的に進展しており、文献のもつ重要性が、今後一層高まることは必至である。

研究の蓄積と最新情報を知るには、池田温 [2000b][2003] が最適であり、敦煌研究の歴史と現段階の全体像を知るには、北京大学での講義にもとづく栄新江 [2001b] が決定版といえる。百橋明穂 [2003] は、美術史を軸に敦煌の研究史を簡潔にまとめている。高田時雄編 [2002] は、羅振玉・王国維の来日を契機に草創された日本の敦煌学と、その後の研究の軌跡と現段階を、日中両国の代表的研究者の多彩な論考によって提示した。

日本における敦煌・トゥルファン文献研究を代表するのが、西域文化研究会編 [1958-63] 全6冊・別冊1と、『講座敦煌』 [1980-92] 全9巻である。前者は、龍谷大学所蔵の大谷文書の読解・分析を軸に、仏教・美術・社会経済・語学等の分野を広くかつ実証的に論じ、後者は、敦煌の自然・歴史・社会・漢文文献・非漢文文献・仏教・道教等を詳論して、今日に至るまで大きな影響を与え続けている。専著でいえば、籍帳関係文献を精密に復原した池田温 [1979] と、同じく写本の識語を集録した池田 [1990] が画期的成果である。また、敦煌史料によって中国語の歴史を解明した高田時雄 [1988]、大谷文書を系統的に分析した小田義久 [1996]、敦煌の仏教の独自性を解明した上山大峻 [1990]、東トルキスタン史を究明した嶋崎昌 [1983 (1977)] と關尾史郎 [1998] も代表的研究である。西脇常記 [2002] は、従来未紹介だったドイツ将来のトゥルファン漢語文書を分析した。

1990年代に入り、中国大陸・台湾から陸続と敦煌文献を活用した研究論集が刊行されだした。台湾の新文豊出版公司から1991年刊行開始の『敦煌学導論叢刊』、1993年刊行開始の『敦煌叢刊二集』、甘粛教育出版社から2002年刊行開始の『敦煌学研究叢書』である。1995年には、北京大学中国中古史研究中心編 [1982-90] を引き継ぎ、北京大学出版社から年刊の専門学術誌『敦煌吐魯番研究』 (1995年～) が創刊された。

層が厚く若い優秀な中国語圏の研究者たちが、世界の敦煌・トゥルファン文献研究を主導し始めており、研究は新段階に入った。世界各地における敦煌・トゥルファン文献研究の最新動向は、*Newsletter of The International Dunhuang Project (IDP)* (1993年～)と、『敦煌学国際連絡委員会通訳』(2003年～)から知ることができる。

(妹尾達彦)

3 史料の解説 (各項末尾の〔 〕内は標点本情報)

◆正史・編年・実録等

・『隋書』

85巻、唐・長孫無忌、魏徵等撰。唐・太宗朝に帝紀・列伝ができ、ついで南朝の梁・陳、北朝の周・齊・隋の五史に志がなかったため、それらは『五代志』として編纂された。現行の『隋書』は、この紀・伝と『五代志』とが合わさって伝えられたもの。したがって、紀・伝は隋代のことを記すが、志には隋以前のことも述べられる。工具書には鄧経元編『隋書人名索引』(中華書局、1979年)がある。正史は百衲本・武英殿本で字句を確認すること。〔中華書局、1973年、6冊〕

・『旧唐書』

200巻、五代後晋・劉昫『旧唐書』等撰。唐代研究の基本史料であるが、唐代の史料は安史の乱や唐末の内乱によって散逸し、編纂に十分な成果をあげられなかった。たとえば、食貨志は『唐会要』の前身『会要』『続会要』に基づいたとされる(鈴木俊[1950])。清・岑建功輯、羅士琳・儀徵・劉文淇同訂『旧唐書校勘記——附旧唐書逸文』上・下(台湾：正中書局、1971年)、張万起編『新旧唐書人名索引』全3冊(上海古籍出版社、1986年)がある。また、食貨志の訳注に加藤繁訳注[1948]、倭国伝等の訳注に石原道博編訳[1985(1951)]、地理志の工具書として呉松弟[2002]がある。〔中華書局、1975年、16冊〕

・『新唐書』

225巻、宋・歐陽脩等撰。『旧唐書』を補正するために、宋代にあらためて編纂された『唐書』改訂版。『旧唐書』を改修した部分が多く、その意味では二級史料であるが、それでも『旧唐書』には見られない記事も少なくない。特に志は全く新しく撰述され、宋人の唐史観を伝えるので、必ず新旧両唐書を照らし合わせねばならない。食貨志の典拠史料を収集整理したものに、未完ではあるが高橋継男[1987-96]があり、また古賀登[1971]が楊貴妃伝・李白伝・杜甫伝・安祿山伝・黄巢伝を訳出している。『新唐書』は『旧唐書』にない世系表・年表を載せる点に特徴があり、宰相世系表の補訂には趙超[1998]が、方鎮表には呉廷燮[1980]がある。『新唐書』は小説史料も取り入れているので注意を要するが、章群[1999]はそれらを抽出して原典と照合しており、便利である。〔中華書局、1975年、20冊〕

・『資治通鑑』

294巻、宋・司馬光撰、元・胡三省注。戦国時代から五代末期までを編年体でまとめた通史。ある出来事を調べようとする際、正史では本紀・志・列伝の関連部分を開かねばならないが、それらが一所に見られるのが編年体の利点であり、唐代史研究では必ず参照される。著者自身が、編集にあたって異なった材料を取捨選択した理由を記した『資治通鑑考異』30巻も伝わり、貴重である。索引に、佐伯富編『資治通鑑索引』(東洋史研究会、1961年)と荒木敏一・米田賢次郎編『資治通鑑胡注地名索引』(人文学会、1967年)がある。また、岑仲勉[1977]は、『通鑑』の各記事を他史料と照合して疑問点を列記したもので、同[1979(1960)]とともに研究の役に立つ。〔中華書局、1956年、20冊〕

・『大唐創業起居注』

3巻、唐・温大雅撰。唐の高祖李淵が太原に挙兵してから長安入りして即位するまでの1年余を、日をおって撰述したもの。現存する唯一の唐起居注であり、著者自身が高祖に従軍して見聞した記述であるだけに、非常に貴重な史料。清・繆荃孫『藕香零拾』に校訂本が収められる。〔上海古籍出版社、1983年、1冊〕

・『貞観政要』

10巻、唐・吳兢撰。太宗と群臣との議論を、内容ごとに分類して書き留めたもの。太宗朝の政治方針や名臣とされる魏徵・房玄齡等の言行を知ることができる。テキストは原田種成『貞観政要定本』(財団法人無窮会東洋文化研究所、1962年)がよい。索引には原田種成『貞観政要語彙索引』(汲古書院、1975年)があり、訳注に原田種成[1978-79]がある。〔上海古籍出版社、1978年、1冊〕

・『順宗実録』

5巻、唐・韓愈撰。順宗は在位1年にも満たないが、現存する唯一の唐の実録として貴重である。韓愈『韓昌黎集』外集に収められる。『資治通鑑考異』によれば『順宗実録』には詳本・略本の両種があり、『通鑑』順宗紀(標点本、7606~19頁)の本文・胡注所引『考異』と『韓昌黎集』の記事とを比較すれば、現行『順宗実録』は略本であろう。なお、依拠史料や撰者韓愈の政治的立場を分析した稲葉一郎[1968]がある。〔後掲『韓昌黎文集校注』参照〕

・『史通』

20巻、唐・劉知幾撰。歴史書編纂にたずさわった著者が、歴史叙述理論をまとめた書物。8世紀初め頃の作で、歴史叙述に対する中国人の理念を知る格好の史料。訳注に西脇常記訳註[1989][2002]が、邦訳に増井経夫訳[1966]がある。〔浦起龍『史通通釈』上海古籍出版社、1978年、2冊〕

◆制度・法律書

・『大唐六典』

30巻、玄宗勅撰・李林甫等注。玄宗朝の官制を、諸官の職掌・沿革などを記してまとめたもの。職務ごとに律・令・格・式が分類整理され、とりわけ行政法の宝

庫である。令は開元7年令によつたとされるが、一部に開元25年の令改定の跡も見うけられる。わが国の享保年間に、近衛家熙が明・正徳本をもとに諸書を校訂した作成した近衛本の影印（広池学園事業部，1973年）がある。〔中華書局，1991年，1冊〕

・『唐会要』

100巻，宋・王溥撰。唐の諸制度を部門ごとに分類して記述した書。他書に見えない記事を多く含む。もと，蘇冕『会要』40巻と楊紹復等『統会要』40巻があり，王溥はこれらを増補して同書を著したとされる。張忱石編『唐会要人名索引』（中華書局，1991年）があり，テキスト諸本の系譜を整理した古畑徹〔1998〕がある。〔上海古籍出版社，1991年，2冊〕

・『通典』

200巻，唐・杜佑撰。玄宗・天宝年間に至るまでの歴代諸制度を，食貨・選舉・職官・礼・樂・兵・刑・州郡・辺防の9部門に分類して収録したもの。唐代に関する記事には，開元25年令がしばしば引用される。十通本の縮印（台湾：新興書局，1963年）や標点本のほか，宮内庁書陵部蔵『北宋版通典』影印8冊（汲古書院，1980～81年）がある。杜佑の『通典』編纂過程と朝廷献上までに時間を要した背景については，北川俊昭〔1998〕参照。〔中華書局，1988年，5冊〕

・『冊府元龜』

1000巻，宋・王欽若等撰。帝王政治の参考に供するため，古今の事績を集めた政治学の類書（百科全書）。正史や『唐会要』などに見えない詔勅・上奏・記事を多く収録し，隋唐史研究に必須の書。標点本はなく，通常は明版影印本（中華書局，1960年，12冊）が用いられ，また全体の約3分の1であるが宋版影印本（中華書局，1989年，4冊）も刊行されている。工具書には，宇都宮清吉・内藤茂申編『冊府元龜奉使部・外臣部索引』（東方文化研究所，1938年），山内正博『冊府元龜所載唐代伝記索引——一般人名之部』（『宮崎大学教育学部紀要（社会科学）』24，1967年）がある。

・『唐律疏議』

30巻，唐・李林甫等撰。唐律（刑法）の原文に疏（解釈文）が付された唐代法制研究の一級史料。名例律・衛禁律・職制律・戸婚律など，12篇約500条からなる。版本には元・泰定本と元・至正本の二系統があり，活字本の国学基本叢書4冊本（台湾商務印書館）は前者に属し，それを底本にした荘為斯編『唐律疏議引得』（文海出版社，1965年）の一字索引がある。なお，律文は難解であるが，訳注に律令研究会編〔1979-96〕，曹漫之〔1989〕，劉俊文〔1996〕がある。〔台湾商務印書館，1965年，1冊（国学基本叢書の合冊本），中華書局，1983年，1冊〕

・『唐令拾遺』

仁井田陞編。東方文化学院，1933年，東京大学出版会，1964年復刻。散逸した唐令を，各史書から引用文を収集して復元したもの。法制史のみならず，制度史の

研究でも必ず参照される。唐令を模したとされる日本令には養老令の注釈書『令義解』『令集解』が伝わっており，『唐令拾遺』と照合しなければならない。両書一般には新訂増補国史大系本（吉川弘文館）が使用されるが，養老令の訳注には日本思想大系『律令』（岩波書店，1976年）があつて名著とされ，『日本思想大系本『律令』頭注・補注索引』（明治大学法学部・法史学研究室，1980年）もあつて便利である。

・『唐令拾遺補』

仁井田陞，池田温編集代表。東京大学出版会，1997年。仁井田の遺志をうけつぎ，池田温を中心に6名の編者によって完成された『唐令拾遺』の補訂版。内容は，第1部「唐令にかかわる仁井田陞論文」（12篇），第2部「唐令拾遺補訂」，第3部「唐日両令対照一覧」からなる。現在では，唐令を見る場合は必ず同書を開かねばならない。

・『白氏六帖事類集』

30巻，唐・白居易撰。詩文作成の参考書として，経書・史書から語彙と出典を収集したもの。律・令・格・式の条文を引用している箇所がある。宋版の影印本（台湾：新興書局，1969年）があり，宋・孔伝の続編と合冊した『白孔六帖』もある。

・『元和姓纂』

10巻，唐・林宝撰。氏族の系統を明らかにするために編纂されたもの。唐代は貴族制の時代といわれるだけに，しばしば同様の氏族志が編纂されたが，現存するのは同書だけである。ただし同書は一度散逸し，現行書は清代に『永樂大典』等から復元されたもの。校勘に岑仲勉『元和姓纂四校記』上・下（台湾：台聯風出版社，1975年）がある。

・『大唐開元礼』

150巻，唐・蕭嵩等撰。王朝儀礼の式次第を記したもので，吉礼・賓礼・軍礼・嘉礼・凶礼の5礼からなる。唐礼には，これ以前に『貞觀礼』『顯慶礼』が存在したが失われ，現存するのは同書のみ。『大唐開元礼附大唐郊祀録』（汲古書院，1972年）として影印されている。

◆文集

・『唐大詔令集』

130巻，宋・宋敏求編。唐代の詔勅類を収集，分類したもの。長く写本で伝えられたため，現存本は一部を欠く。清末に刊行され，『適園叢書』に収録された。なお，唐の詔勅題名を皇帝順に一覧できる『唐代詔勅目錄』（東洋文庫，1981年）が出版されており，詔勅の専門研究書に中村裕一〔1991〕〔2003〕がある。〔商務印書館，1959年，1冊。台湾：鼎文書局重印，1978年，1冊〕

・『文苑英華』

1000巻，宋・李昉等撰。同書は，梁代の『文選』を承けて梁末以後の詩文を取

録したものであるが、大部分は唐代の作品である。賦・詩などの文学作品だけでなく、中書制誥・翰林制誥・策問・策・表・状・露布・哀冊文などが、ほぼ全文に近い形で収録されている。唐代史研究に必須の史料である。通行の中華書局影印6冊本は宋版残本を明版で補ったもので、台湾：大化書局3冊本も同様。いずれも作者索引が付され、収録作品を検索できる。

・『文館詞林』

もと1000巻、唐・許敬宗撰。唐初の編纂なので、収録作品のほとんどは漢・六朝の詩文であるが、一部に唐初の貴重な史料を含む。中国では散逸し、日本に写本23巻余が伝わり、古典研究会による影印本（汲古書院、1969年）が刊行されている。

・『全唐文』

1000巻、清・董誥等撰。清朝嘉慶帝の勅により、『全唐詩』の後をうけて唐・五代の散文作品を集大成したもの。著者別に配列されている点が、『文苑英華』等と比較して使いやすい。『唐文拾遺』『唐文統拾』と併せて中華書局より11冊本が影印（1983年）され、『全唐文篇名目録及作者索引』が付されている。他に、馮秉文主編『全唐文篇目分類索引』（中華書局、2001年）も刊行されている。『全唐文』は『冊府元龜』『詔令集』あるいは個人の文集などから編集したものなので、史料として使う場合には必ず原典にあたらねばならない。その際には、平岡武夫編『唐代研究のしおり』3「唐代の散文作家」（同朋舎出版、1985年再版）で作者番号を調べ、同10「唐代の散文作品」（同、1985年）で作品の収録箇所を探す。また、新出墓誌史料等を加えた『全唐文新編』（吉林文史出版社、2000年、22冊）、『全唐文補遺』（三秦出版社、1994～2000年、7冊）も刊行されており、標点が付されて便利ではあるが、誤録も多いので、必ず原典にあたること。〔山西教育出版社、2002年、7冊〕

その他、個人の文集には、陳子昂『陳伯玉文集』、張説『張燕公集』、張九齡『曲江集』、独孤及『昆陵集』、韓愈『韓昌黎集』、柳宗元『柳河東集』、白居易『白氏長慶集』、李德裕『会昌一品集』等があり、多くは四部叢刊に収められる。上掲『唐代研究のしおり』10「唐代の散文作品」を参照されたい。〔『韓昌黎文集校注』上海古籍出版社、1986年、1冊、『李德裕文集校箋』河北教育出版社、2000年、1冊〕

◆地理書類

・『元和郡県図志』

40巻、唐・李吉甫撰。憲宗・元和年間の状況を記した地理書。全国を10道に分け、州・県ごとに戸口・沿革・貢賦・古跡などを記す。唐代の地理を調べる際には、両唐書地理志、『通典』州郡典などとともに必ず参照しなければならない。〔中華書局、1983年、2冊〕

・『太平寰宇記』

200巻、宋・樂史撰。宋代の地理書であるが、唐代の戸数が載せられ、また土産

などは唐代研究でも有益である。台湾：文海出版社より影印本（2冊、附補闕1冊、1963年）が刊行され、同社より王恢編『太平寰宇記索引』（1975年）が出版されている。また、全体の一部であるが『宋本太平寰宇記』（影印、中華書局、2000年）がある。

・『括地志』

唐・李泰撰。唐初に編纂された地理書であるが、後に散逸し、現行書は清代に『史記』三家注などから引用文を収集して編纂したもの。唐初の県治所が前代の何処にあたるかなどを確認するのに有効。〔賀次君『括地志輯校』中華書局、1980年、1冊〕

・『唐兩京城坊考』

5巻、清・徐松撰。多くの書物から関連史料を集めて、唐代の長安・洛陽の姿を描いたもの。愛宕元〔1994〕の訳注があり、繆荃孫『藕香零拾』に程鴻詔の「補」1巻が収められる。長安研究には同書のほか、唐・韋述『兩京新記』、宋・宋敏求『長安志』、宋・程大昌『雍錄』等の史料が伝わる。平岡武夫編『唐代研究のしおり』5～7「長安と洛陽」索引・資料・地図篇（同朋舎出版、1985年）を参照。〔中華書局、1985年、1冊〕

・『蛮書』

10巻、唐・樊綽撰。唐末の南詔（雲南）の事情を、諸民族・山川・道里・風俗等の項に分け、実地見聞に基づいて記した貴重な地方志。竹内剛・林謙一郎編『『蛮書』索引』（『南方文化』15、1988年）がある。〔向達『蛮書校注』中華書局、1962年、台湾：鼎文書局影印、1972年、1冊〕

◆伝奇・雑史類

・『太平広記』

500巻、宋・李昉等撰。伝奇小説を集成したもの。同書によってのみ伝わる作品が多い。内容はもちろんフィクションであるが、そこに描かれた景観・風俗等は実情を反映していると思われる、歴史史料として利用できる。標点本を底本にした『太平広記索引』（中華書局、1996年）、同名の引書・篇目索引（中華書局、1982年）がある。〔中華書局、1961年、10冊〕

・『酉陽雜俎』

20巻、続集10巻、唐・段成式撰。唐代伝奇小説集で、やはり社会状況の一端をうかがうことができる。今村与志雄訳注〔1980-81〕がある。〔中華書局、1981年、1冊〕

・『安祿山事迹』

3巻、唐・姚汝能撰。安祿山の生涯を記すが、エピソード記事は史実を伝えるかどうかは疑わしい箇所が多いときれ、正史等の史書と対照すること。版本は繆荃孫『藕香零拾』所収の校訂本がよい。〔上海古籍出版社、1983年、1冊〕

・『唐国史補』

3巻, 唐・李肇撰。開元～長慶年間の著名人の言行や逸聞, 各地の特産品などを記し, 社会風俗を知るには好史料。〔台湾: 世界書局, 1978年, 1冊〕

・『因話録』

6巻, 唐・趙璘撰。皇帝・百官・庶士等の雑事・典故を記す。〔上掲, 世界書局本所収〕

・『封氏聞見記』

10巻, 唐・封演撰。唐代小説の典拠や学問・書物・道教等に関する雑事を記す。〔趙貞信『封氏聞見記校注』中華書局, 1958年, 1冊〕

・『唐摭言』

15巻, 五代・王定保撰。主に科挙にまつわる逸聞を記す。〔上海古籍出版社, 1978年, 1冊〕

・『唐宋史料筆記叢刊』〔中華書局〕

『隋唐嘉話・朝野僉載』(1997年), 『明皇雜録・東觀奏記』(1997年), 『大唐新語』(1997年), 『唐語林校証』上・下(1997年), 『南部新書』(2002年), 『北夢瑣言』(2002年)等が収録されている。

◆旅行記

・『大唐西域記』

12巻, 唐・玄奘撰。有名な三蔵法師のインド旅行記。7世紀前半の中央アジアの状況を知る上でも貴重な史料。訳注としては足立喜六〔1942-43〕が詳細で, 他に水谷真成〔1999(1983-84)〕などがある。〔中外交通史籍叢刊『大唐西域記校注』中華書局, 2000年, 2冊〕

その他, 仏教僧の求法旅行記には, 玄奘の伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』, 義浄『南海寄帰内法伝』, 同『大唐西域求法高僧伝』, 慧超『往五天竺国伝』(桑山正進〔1998(1992)〕)等がある。これらは「国訳一切経」史伝部に訓読文が収められ, 西域行記索引叢刊に『大唐西域記』『大慈恩寺三蔵法師伝』の一字索引がある。〔いずれも中外交通史籍叢刊, 中華書局所収〕

・『経行記』

唐・杜環撰。著者はタラス河畔の戦いに従軍してイスラム軍の捕虜となり, 西方各地を転々としたのち海路で帰国。その旅行見聞録。残念ながら散逸し, 『通典』等の引用によって逸文が知られるにすぎないが, それでも西域12カ国の記事が復原でき, 8世紀の天山・西トルキスタン方面の貴重な情報を含む。〔中外交通史籍叢刊『経行記箋注』中華書局, 2000年, 1冊〕

・『入唐求法巡礼行記』

4巻, 日本・円仁撰。遣唐使に随行し, その後約10年間にわたり中国各地を歩いた天台・慈覚大師の旅行記。9世紀の唐国内の状況や, 新羅商人の実態を知る格好の史料。訳注としては小野勝年〔1964-69〕が最も詳細で, 他に足立喜六・塩入良道〔1970, 85〕があり, 全文口語訳に深谷憲一訳〔1990〕が, また英訳に Reis-

chauer〔1955〕が, 研究書にはライシャワー〔1999(原書1978)〕がある。〔上海古籍出版社, 1986年, 1冊〕

・『シナ・インド物語』

9世紀末～10世紀初の, イスラム商人による南海貿易見聞記。広州貿易の様子や黄巢の乱の記事などが見える。M. Re naudのアラビア語テキストに基づいた藤本勝次『シナ・インド物語』(関西大学東西学術研究所, 1976年)の訳注がある。

◆史料集

・『隋末農民戦争史料彙編』

王永興編(中華書局, 1980年)。隋末の群雄15人につき, 各史書の記事を整理し編纂。15人の群雄のみならず, 彼らの拠った地域の動向や関係者の記事も網羅され, 便利。

・『唐五代農民戦争史料彙編』

上・下, 張沢咸編(中華書局, 1979年)。唐の皇帝順と, 五代時期・十国時期に分け, 史料を編年・整理したもの。

・『登科記考』

30巻, 清・徐松撰。唐代科挙進士に及第した者を諸史料より収集し, 編年・整理したもの。孟二冬による補正版が刊行され, 人名索引が付された。〔孟二冬編『登科記考補正』北京燕山出版社, 2003年, 3冊〕

・『唐代史料稿』

平岡武夫・市原亨吉・今井清・礪波護編。武徳元年(618), 長慶元年～4年(821～824), 太和元年～3年(827～829)の史料を, 各史書より収集して月日順に整理したもの。扱う期間は短い, 充実しており, この年代の史料にあたるには必見。〔『東方学報』(京都), 25～27, 37～40, 42, 44(1954～57年, 1966～69年, 1971, 73年)〕

・『突厥集史』

上・下, 岑仲勉撰(中華書局, 1958年)。突厥史研究の必携書。上冊が編年, 下冊が突厥伝や石刻史料等の校勘。在来の突厥関係史料は同書によってほぼ全てがおさえられるといわれるほど充実しており, 特に上冊は今なお一級の史料集である。

・『渤海史料全編』

孫玉良編(吉林文史出版社, 1992年)。第1編「中国古籍中的渤海史料」, 第2編「日本古籍中的渤海史料」, 第3編「朝鮮古籍中的渤海史料」, 第4編「渤海文物与考古資料」に分類して, 渤海関係の史料を網羅・整理したもの。(石見清裕)

◆敦煌・トゥルファン文献

世界各地に分散して収蔵されている敦煌文献数万点の総合的な目録は, まだ存在しない。ロンドンのスタイン将来文献については, Giles(ed.)〔1957〕と榮新江編〔1994〕, パリのペリオ将来文献は Soymié et al.(eds.)〔1970-2001〕がある。より総合的な目録としては, 黄永武主編〔1986〕と敦煌研究院編〔1983-2000〕がある。

Yamamoto et al. (eds.) [1978-2001] は、法制・戸籍・契約・社文書と補遺からなる5函の社会経済関係の敦煌・トゥルフアン文献を集成し、原文書の写真と信頼できる録文を掲載している。池田温 [1979][1990] も基本文献である。

特筆すべきは、1992年から、上海古籍出版社によって、世界各地の敦煌文献を写真で収録する『敦煌吐魯番文献集成』(全150冊予定)が、刊行され始めたことである。これによって、いよいよ、敦煌文献の全貌が明らかになりつつある。すでに、孟列夫・錢伯城主編『俄藏敦煌文献』全17冊(1992~2001年)、上海古籍出版社・法国国家図書館編『法藏敦煌西域文献』全34冊(1994~2004年)、上海博物館編『上海博物館藏敦煌吐魯番文献』全2冊(1993年)、北京大学図書館・上海古籍出版社編『北京大学図書館藏敦煌文献』全2冊(1995年)、上海古籍出版社・天津芸術博物館編『天津市芸術博物館藏敦煌文献』全7冊(1996~98年)、上海古籍出版社・上海図書館編『上海図書館藏敦煌吐魯番文献』全4冊(1999年)が刊行された。なお、ロンドンの大英博物館蔵の敦煌文献は、中国社会科学院歴史研究所・中国敦煌吐魯番学会敦煌古文献編輯委員会・英国国家図書館・倫敦大学亜非学院編『英藏敦煌文献(漢文仏教以外部分)』全15冊、第15冊のみ未完(四川人民出版社、1990~95年)に収録されている。

他に、中国国家図書館編『中国国家図書館藏敦煌遺書』全10冊(江蘇古籍出版社、1998~2001年)、浙藏敦煌文献編輯委員会編『浙藏敦煌文献』全1冊(浙江教育出版社、2000年)、段文傑主編『甘肅藏敦煌文献』全6冊(甘肅人民出版社、1999年)も出版された。

分野別の敦煌文献の校訂本として、1996年から、江蘇古籍出版社より『敦煌文献分類録校叢刊』全10冊(1996~98年)が刊行された。内容は、経典(論語)・文学(賦・変文)・仏教(禅・仏教関係一般)・暦法・書信・契約・社邑・医薬の分野である。社会経済関係の基本文献は、唐耕耦・陸宏基編『敦煌社会経済文献真蹟積録』全5冊(書目文庫出版社、1986~90年)である。

トゥルフアン文献に関する基本書には、中国文物研究所・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系編・唐長孺主編『吐魯番出土文書』全4冊(文物出版社、1992~96年)がある。同書は、国家文物局古文獻研究室他編『吐魯番出土文書』簡装本、全10冊(文物出版社、1981~91年)の録文を改訂した上で、各文書の写真と録文を収載する。大谷探検隊の将来したトゥルフアン文献を主とする資料集に、小田義久編『大谷文書集成』1・2・3(龍谷大学善本叢書5・10・23、法藏館、1984、90、2003年)がある。以上のように、近年になって、敦煌・トゥルフアン文献を縦横に駆使し得る研究の基盤が整ってきた意味は、限りなく大きい。

◆石刻

1950年代頃までに刊行された基本的な石刻関係史料を集成したものが、台湾の新生文豊出版公司から刊行された『石刻史料新編第一輯』全30冊(1977年)、『同第二輯』全20冊(1979年)、『同第三輯』全40冊(1986年)である。楊殿珣編『石刻題

跋索引(増訂本)』(上海:商務印書館、1957年)が存在するが、同史料集を利用するに際して、書名・著者索引の高橋継男 [1993] は必携である。国家図書館善本金石組編『隋唐五代石刻文献全編』全4冊(北京図書館出版社、2003年)は、上記の石刻史料集に主に依拠して、1930年代以前に刊行された、隋唐時期の石刻史料約3000点を収録する。岑仲勉『金石論叢』(同著作集8、中華書局、2004年、初版1981年)は、各種の石刻史料を分析する多彩な論考を収録する。中田勇次郎編 [1975] は、北朝・隋唐期の墓誌積文の手引きとして、現在も高い価値をもつ。

近年における石刻史料の増加は著しい。ここでは、主要な墓誌資料集に限定して掲載する。詳しくは、氣賀澤保規編 [2004]、吉岡眞 [1998][2004]、高橋継男 [2001] を参照。新刊の隋唐墓誌資料集の墓誌は、解放後に新出の墓誌と、解放前出土の拓本が新たに公開されたものに分類できる。吉岡 [1998] は、近刊の唐墓誌の中に、既に羅振玉・岑仲勉等が1920年代、30年代の研究で組織的に活用した墓誌が多数含まれていることを明らかにしている。なお、墓誌の使用に際しては、当然ながら、移録されたもののみに依拠するのではなく、拓本写真が掲載された墓誌集と見比べる必要がある。

主な新しい石刻史料集を、刊行順に列挙すれば以下の通りである。①饒宗頤編『唐宋墓誌 遠東学院藏拓片図録』香港中文大学出版社、1981年(唐墓誌370点の拓本写真。フランス遠東学院所蔵)、②河南省文物研究所・河南省洛陽地区文物管理所編『千唐誌齋藏誌』上・下、文物出版社、1983年(隋墓誌2・唐墓誌1209の拓本写真。河南省新安県出身の張昉の収集になる、清末以後に洛陽邙山地区出土の墓誌)、③毛漢光編『唐代墓誌銘彙編附考』全18冊、中央研究院歴史語言研究所、1984~94年(唐墓誌1800の拓本写真と積文。台湾所蔵の唐誌拓本を核に他の石刻史料集や新出墓誌を集成。未完成のまま出版終了)。④北京図書館金石組編『北京図書館藏中国歴代石刻拓本匯編』隋・唐、第9~35冊、中州古籍出版社、1989年(隋石刻347・唐石刻4193の拓本写真。北京図書館所蔵の解放前出土の唐墓誌のほぼ全点を収録)、⑤洛陽市文物工作隊編『洛陽出土歴代墓誌輯編』中国社会科学出版社、1991年(隋墓誌14、唐墓誌646の拓本写真。解放前後の洛陽出土墓誌)、⑥『隋唐五代墓誌匯編』総編集委員会編『隋唐五代墓誌匯編』全30冊(索引1冊を含む)、天津古籍出版社、1991~92年(隋墓誌337・唐墓誌4550余〔墓誌数は高橋継男 [2001] に依る〕の拓本写真。地域ごとに1949~91年の間に出土の隋唐五代墓誌を主に収録。利用に際しては、張忱石『隋唐五代墓誌匯編』修正』『出土文献研究』3、1998年を参照)。⑦周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編』上・下、上海古籍出版社、1992年(唐墓誌3607の積文を集成。北京図書館等の所蔵拓本や周紹良私蔵の拓本等をもとに唐墓誌を移録し編年化して収録。周到な人名索引を付す)、⑧昭陵博物館・張沛編『昭陵碑石』三秦出版社、1993年(唐墓誌46・唐墓碑43の拓本写真と積文。昭陵に陪葬された官人の墓誌・墓碑を主に収録)、⑨中国文物研究所・河南省文物研究所編『新中国出土墓誌河南(卷)』上・下、文物出版社、1994年(隋墓誌4・唐墓誌84の拓本写真と積文。解

放後に河南省の北部と中部から出土した晋～中華民国の墓誌のうち460点を収録)、⑩陝西省古籍整理弁公室・吳鋼主編『全唐文補遺』全8冊(第8冊は2005年刊行予定)、三秦出版社、1994～2005年(唐墓誌の録文。『全唐文』未収録の唐代の文章を、主に新出墓誌によって補う)、⑪李猷奇・郭引強編『洛陽新獲墓誌』文物出版社、1996年(隋墓誌2・唐墓誌113(隋碑1・唐碑3を含む)の拓本写真と釈文。洛陽地区で新出の墓誌183を収録)、⑫周紹良総主編『全唐文新編』全22冊、吉林文史出版社、1999～2000年(『全唐文』を修訂・補充し、計3万4742篇の作品を収録。唐墓誌6000余の釈文を含む)、⑬中国文物研究所・陝西省古籍整理弁公室編『新中国出土墓誌 陝西(卷)』上・下、文物出版社、2000年(隋墓誌6・唐墓誌120の拓本写真と釈文。陝西省から出土の墓誌)、⑭周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編統集』上海古籍出版社、2001年(⑦の続編で、唐墓誌1576の釈文を収録)、⑮中国文物研究所・河南省文物研究所編『新中国出土墓誌河南(貳)』上・下、文物出版社、2002年(⑨の続編で、隋1・唐52の拓本写真と釈文を収録)、⑯中国文物研究所・北京石刻芸術博物館編『新中国出土墓誌・北京(卷)』上・下、文物出版社、2003年(隋墓誌2、唐墓誌43の拓本写真と釈文を収録)、⑰中国文物研究所・陝西省古籍整理弁公室編『新中国出土墓誌・陝西(貳)』上・下、文物出版社、2003年(⑬の続編で、隋墓誌銘11、唐墓誌342の拓本写真と釈文を収録)、⑱中国文物研究所・河北省文物研究所編『新中国出土墓誌・河北(卷)』上・下、文物出版社、2004年(隋墓誌13、唐墓誌104の拓本写真と釈文を収録)。上記の墓誌集は重複が多いので、利用に当たっては、氣賀澤保規編[2004]等による確認が必要である。上記の石刻史料集の中で最初に手許に備えるべきは、収録数と録文の精度を勘案すると、⑦『唐代墓誌彙編』と⑭『唐代墓誌彙編統集』である。(妹尾達彦)

第5章

五代・宋

木田知生・宮澤知之

1 研究の視点

日本の宋代史研究の歩みを辿ってみると、大まかに何世代かの研究者の階層が認められる。まず、明治初期に日本の東洋史学界を創設し、指導した人々の世代では、内藤湖南・桑原隲蔵・藤田豊八等や、やや後の加藤繁等が挙げられる。これらの人々の時代は、日本の中国史研究が東洋史学という大きな枠組み設定の中から、次第に、かなり特定された時代や研究対象に研究の重点を移していく時期に相当しており、日本における中国宋代史研究の第一世代と呼んで差し支えないと思う。宋代史研究の専門家や唐宋時代史研究の専門家は、この時期、まだ生まれていない。

次の第二世代は、第一世代の内藤湖南・桑原隲蔵・藤田豊八・加藤繁等の直接の受業生か、もしくは間接に教えや影響を受けた世代であり、明治の晩期、すなわち、いずれも今世紀の初頭に誕生した人々である。宮崎市定・曾我部静雄・日野開三郎・仁井田陞・周藤吉之・佐伯富等、いずれも宋代や唐宋時代の多様な史実究明に研究の重点を置くか、また、同時代のかかなり特定した分野を深く専攻する等の特色があった。この第二世代の特徴のひとつとして挙げることができるのは、いずれも数冊から二十数冊に及ぶ学術著作を公刊していることであり、さらに概論書の類の出版物をも数え合わせると、実に多くの著述を発表してきたことである。第二世代の壮年時期が不幸な戦争時期に相当していたことを思えば、その研究活動の辛苦が並大抵のものでなかったことも容易に想像される。かつて、第一世代によって開拓され始めた研究分野の多くが、研究未了のままに置かれていたため、第二世代の研究活動時期に、彼らの活躍によって、宋代史研究の研究領域は次第に拡充され、一段と深化されるとともに細分化されていくことにもなった。

第一世代・第二世代に共通して言えることは、この両世代には、日本と中国の交流が不自由ながらも、まだ可能であり、第一世代の中には、清朝の遺老であった羅振玉

や王国維等と直接に交遊していた人も含まれていたことである。第二世代にとっても、言語や交通等の様々な不便がやはり介在していたものの、第一世代と同様に、ともかくも中国本土に滞在して、実地に中国の文物・遺跡を観察し、典籍を閲読し、さらに中国の学者に教えを受けることができた。第一世代・第二世代の著述の多くが、いまもなお、学術的な生命力を保っている理由のひとつは、この点に存していると筆者は確信している。

第二世代の人々に教えを受けたり学問的影響を被った、次の第三世代の人々は、概ね大正末期から昭和初年頃、多くは1930年過ぎに生まれている。現在の日本の宋代史研究を代表する人々がこの世代に含まれていると言えよう。それらの世代を代表する柳田節子・斯波義信・笠沙雅章・草野靖・梅原郁・寺地遵・佐竹靖彦・衣川強等の勉学研鑽時期は、中国との直接交流は不可能ではなかったが極めて困難であり、必然的にその研究の主対象は古典的な史料文献に頼らざるを得なかった。そのことが、この世代の特徴のひとつに挙げられると思う。

続く第四世代は、第二次大戦終結前後から1950年初めにかけて生まれ、第二世代もしくは第三世代の受業生か、その影響を受けた世代である。1976年には、この世代の研究者が主な構成員となった「宋代史研究会」が結成され、定期的に研究会が催され、すでに研究報告論文集として宋代史研究会編 [1983][1985][1988][1993][1995][1998][2001] 7冊が刊行されている。世代的に言えば、この第四世代と次の第五世代が現在の日本の宋代史研究を担う世代ということになる。

さて、この第四世代の勉学時期の中頃、日中間の国交が再開され、実質的には1980年前後から、中国本土への留学研鑽が再び可能となり、以後、基本的に途絶することなく現在に至っている。中国においてもほぼ同時期に「中国宋史研究会」が成立し、鄧広銘・漆俠・王曾瑜・朱瑞熙等の歴代会長を中心として、研究水準は飛躍的に高まり、実に多くの研究書や史料文献が公刊され、その趨勢はいま現在も大きなうねりとなって中国各地で展開されている。いまや、中国国内の研究状況に留意することなく中国研究に従事することなど、全くの絵空事である。こうした状況は、実は以下のことを意味している。

この第四世代とこれに続く第五世代は、日本の宋代史研究の従来の特徴のひとつであった優秀な文献研究成果の継承発展と、中国での実地の研究研修と新たな史料調査収集という二つの可能性を有する。つまり、二つの可能性を宋代史研究の方法手段として用いることができ、同時に、そのことが強く要請されてもいるのである。とくに第五世代においては、現地の研究者と対等に意見交換が可能な語学力が、今後ますます期待される。ただ、現状では、この「継往開来」の四字に集約できる二つの可能性は、いまだ十全に運用されてはいないように見受けられる。今後、旧来の漢文文献学習だけに止まらぬ漢語学習の徹底こそが急務である。

以下、論述に当たっては、2005年春季までの日本の五代・宋代史研究関連資料情報を基準とし、これに中国語圏の主要工具書文献を加えた。なお、近10年ほどの研

究論著の検索は、昨今の急速な資料デジタル化によって比較的簡便となった。

(木田知生)

2 研究の展開

<1> 概論・概説

まず、唐と宋の歴史的意義について高度に概括した内藤湖南 [1922] から論じる。この論文は、後に「内藤史学」の名で呼ばれる内藤の史学研究の中心となる宋代以後近世説を主張したものである。宋という時代を、唐から元へと続く広い視野の中で大局的に理解しようとした内容であり、その画期的な学術的意義は、没後に整理刊行された内藤 [1947] とともに極めて大きい。ただ、この宋代以後を近世とする内藤の時代区分観は、実は多くの文化史上の問題を取り上げる中で論じられており、その意味では、唐宋時代や前後の時代の文化を論じた内藤の他の諸論考、例えば史学史や絵画史を論じた内藤 [1938][1949] の宋元部分の論考も参照すべきである。

さて、この内藤湖南の宋代以後近世説に対して、宋代以後を中国史の中世とする説を唱えたのは、前田直典 [1948] である。この論考は主に唐代までの土地所有問題を考察対象とし、その考察の結果として唐代までを古代と考えるもので、積極的に宋代以後を中世であると認めるものではなかった。しかし、のちに周藤吉之等によって史料面が補強され、主に東京大学出身の学者等によって強い支持を得て、大きな影響力を持った。一時、第二次大戦後の日本の中国史学界を席捲した観のある時代区分論争は、概ねこの内藤・前田の論考を各々の出発点としている。その論争過程については、鈴木俊・西嶋定生編 [1957] や寺地遵 [1991] の他、谷川道雄 [1976] が参考になる。

次に内藤湖南とほぼ同時代に活躍し、中国古代の南北問題を論じた桑原隲蔵 [1925] を紹介しよう。歴史地理学上の視野から中国史を通観したもので、豊富な史料を駆使して淮水南北の盛衰を概観し宋代の歴史的意義を論じており、逸することのできない重要な論考である。

宋代の概説書を幾つか挙げておきたい。羽田亨監修 [1938] は当該部分の執筆に那波利貞・宮崎市定・曾我部静雄等があたり、その記述はいままでに貴重である。同時期のものに日野開三郎編 [1939] がある。戦後では、周藤吉之他 [1957] の後に出た宮崎編 [1959] が優れている。同書の叙述対象も宋と元の両時代であり、豊富な図版とその内容に即応した説明とが質の高い概説を可能にしている。その後、宮崎・佐伯富編著 [1961] や唐から宋への転換期に標準を合わせて編集された堀敏一他 [1961] が続き、さらに佐伯編 [1967] は宋代の近世社会文化を平易に概説したものであり、それにやや遅れて、元朝の叙述に力点を置いた愛宕松男 [1969] が出ている。周藤・中嶋敏編著 [1974] は、史実の解説が詳しい。その他、日比野丈夫他 [1974] や梅原郁

[1977], 笠沙雅章編 [1994], 伊原弘・梅村坦 [1997] があり, 文献や研究動向についても詳しく記述した斯波義信他編 [1997] もある。

上記以外には, 1960年代末年までの宋代史研究を概観する教材として佐伯富他 [1970] があり, その後の研究状況に関しては佐竹靖彦他編 [1996] で詳しく論じられている。

◆人物伝記

五代・宋代の人物伝記について見てみよう。古くは岳飛と秦桧を論じた外山軍治 [1939] や王安石の新法を論じた佐伯富 [1941] があり, その後, 1966年から翌年にかけて『中国人物叢書』第1期第2期全24冊(人物往来社)が刊行され, 五代と宋代には, 礪波護 [1966], 梅原郁 [1966], 笠沙雅章 [1967], 小野寺郁夫 [1967] の諸作がある。また, 1994年から96年にかけて『中国歴史人物選』全12冊(白帝社)が刊行された。同選集には范仲淹・司馬光・朱熹の人物伝記として笠沙雅章 [1995], 木田知生 [1994], 衣川強 [1994] があり, いずれも参考文献を挙げている。また, 五代後周の柴榮を対象とした栗原益男 [1968] もある。

<2> 論文文献

五代史や宋代史に関する著作や論文はおびただしい数に上り, その全容把握には工夫がいる。中国の五代史研究をまとめたものに中国社会科学院歴史研究所魏晉隋唐史研究室 [1985], 張国剛主編 [1996], 胡戟主編 [1997] がある。また宋代史研究論著目録には法蘭西学院漢学研究所編 [1978] や宋晞編 [1983][2003] がある。近刊のものについては, 学術雑誌『東洋史研究』(東洋史研究会編, 年4回刊行)に毎月掲載される「近刊叢欄」や, 毎年5月頃に刊行される『史学雑誌 回顧と展望』(史学会編)が便利。京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター編集『東洋学文献類目』は網羅的な文献検索に適しているが, 類目の整理刊行が論文発表より数年遅れるのが難点。1998年度版(2001年)からは, 人文科学研究所附属漢字情報研究センターの編集に改まり, 2005年現在, 2002年度版まで刊行されており, インターネットでの検索も可能となった。

日本における歴史学の発達と現状を概評した国際歴史学会議日本国内委員会編 [1959-85] は6回にわたってI~VIが刊行され, 「五代・宋」もしくは「五代・宋・元」の論文解説を, 佐伯富・柳田節子・菊池英夫・梅原郁・吉田寅・笠沙雅章の6氏が各々執筆している。1989年に刊行された国際歴史学会議日本国内委員会編 [1989] は, 同書のVIIであるが, 『歴史研究の新しい波』なる書名を附し, 旧来の体例を改めて「五代・宋」等の枠組みも廃した。1957年までの日本の宋代史研究の論文・論著を網羅し, その全てに簡潔な提要を添えた宋史提要編纂協力委員会編 [1961] は, 宋朝以外にも五代・遼・金・元の論文も収録している。なお, 『提要』と平行して宋史提要編纂協力委員会編 [1957, 59, 70] の目録が刊行されている。

五代と宋元時代の研究概説と史料解説については笠沙雅章 [1983] や柳田節子 [1983] があり, いずれも論文紹介がなされている。とりわけ, 後者の解説は詳細で, 論文文献リストには日本の宋代史研究文献以外にも中国や欧米の研究成果も取り込んでいる。同書には1991年に増補改訂版が出ており, 資料文献がさらに増補され, 一層便利なものとなった。

論文文献名も採録掲載したものとしては, 東一夫・吉田寅編 [1971] や鳥谷弘昭・吉田編 [1990] がある。宋代やそれに関連する時代だけに焦点を絞ったものではないが, 東洋史研究論文目録編集委員会編 [1967] も論文資料文献の検索に便であり, また, 入手しにくい論文資料に関しては論説資料保存会編 [1964-] が毎年刊行されており, 主要学術雑誌以外に掲載された論文文献を集め再録している。

また, 旧来から用いられている東洋史学関連の辞典・事典以外に, 現在刊行中の尾形勇・岸本美緒他編 [1994-] は, 大項目主義の長所を活かした読む事典として参考になる。

<3> 研究資料文献

宋代史研究のための研究資料や参考文献, つまり「工具書」は, 従来からかなり多く作製され, 重要な位置を占めている。補助資料集としてまとめられた東京教育大学東洋史学研究室編 [1953-59] は, 「基礎資料解題」「主要論文目録」「主要法制史料目録」「国朝諸臣奏議目録他」「群書考索目録」「玉海目録(上)(下)」「宋人文集目録」の合計8冊からなる。なお, 同研究室では『宋代編年体史料目録』(油印本)も出している。「宋人文集目録」改訂版の吉田寅・棚田直彦編 [1972] も役立つ。現存する宋人の著述を総覧する資料目録に劉琳・沈治宏編著 [1995] がある。宋人文集の詳しい解題としては祝尚書 [1999] が有用。宋人文集を集成する曾棗莊・劉琳主編 [1988-] は, 種々の理由から全巻刊行がおくれているが, 全360冊の予定で2005年中に刊行の運びである。文集の配列順は, 作者の生年によっているが, 既刊本の最終巻である第50冊(1994年刊行)には, 1044年生まれ陳次升までが収められている。その編纂過程で編集された「全宋文研究資料叢刊」中の工具書に四川大学古籍整理研究所編 [1990] と呉洪沢編 [1995] がある。

『統資治通鑑長編』『三朝北盟会編』『建炎以来繫年要録』の目次等を整理した佐伯富 [1943] はいまだに有用である。佐伯編纂の工具書には, さらに范仲淹・歐陽脩・司馬光・朱熹等宋人の文集の語彙を採録対象とした索引 [1970], 蘇軾『蘇東坡全集』を対象とする索引 [1958] があり, また, 京都大学東洋史研究会編 [1954] の姉妹版に相当し, 宋代以後の筆記隨筆類を対象にした索引 [1960], 並びに王益之撰『職源撮要』に対応する索引 [1956] や元豊官制の概略理解に役立つ『元豊官志』の索引 [1991], さらに近藤元隆撰『宋名臣言行録輯釈』の語彙索引 [1959] もある。なお, 職官に関するものとしては, 孫逢吉『職官分紀』の目次を整理した東洋史研究室編

[1950] も出ている。

五代と宋代の人物伝記資料や年譜についてまとめよう。五代に関しては傅璇琮・張忱石・許逸民編撰 [1982] と方積六・吳冬秀編撰 [1992] が役立つ。宋人の伝記には遼・金治下の漢人と合わせ約 8000 人の伝記資料を検索することのできる宋史提要編纂協力委員会編 [1968] の他、衣川強編 [1974] もある。さらに網羅的なものに昌彼得・王徳毅・程元敏・侯俊徳編 [1974-76] や、その続編に相当する李国玲編纂 [1994] がある。宋代の国家中枢にあった幸輔の編年表には梁天錫編著 [1996] があり、中央と地方の主要官職に就いた諸官僚の詳細な在任記録を詳細に整理したものに李之亮撰 [2001][2003a][2003b] の三部作があり、いずれも人名索引を附す。また、僧人伝記資料には李国玲編著 [2001] がある。

宋人の年譜には吳洪沢・尹波主編 [2003] がある。約 160 種の年譜を網羅しているが、すべての年譜が最新かつ最良のものとは必ずしも断定できない。宋代の詳細な年表には宋史提要編纂協力委員会編 [1967][1974] があり、重要事項とその典拠を示す。

さて、宋代以後の中国社会では、地方州県で実際に政務を担当する胥吏の存在が重要な意味を持ったが、それはこの胥吏が官衙内の事情や慣習に通じ、地方州県の官吏も彼らを見捨てては実務の執行が容易でない状況が生まれたためである。そこで、宋代以後、地方政治のこれらの諸弊害に対処するための官吏心得とでもいふべき官箴書なる書物が多く編纂されるようになった。この官箴書の存在にいち早く着目し、宋代以後の官箴書 55 種の目次を整理した荒木敏一・佐伯富編 [1950] は、いまなお高い価値がある。赤城隆治・佐竹靖彦編 [1987] は、『作邑自箴』『州県提綱』『三事忠告』等の宋元時代の官箴書 12 種に対する語彙索引である。なお、官箴書については仁井田陞 [1957] に解説がある他、近年、中国国内でも重要視され、陳生璽輯 [1996] や劉俊文主編 [1997] および張希清・王秀梅主編 [1998] の影印・点校本が各々出版された。

(木田知生)

〈4〉社会経済史

日本における宋代社会経済史研究の展開をごく大づかみに概観すると、テーマの分布が時期によってかなりの偏りがあり、三つの時期に分けることができる。研究が本格化した 1910 年代から 40 年代にかけては、貿易・貨幣制度の論文がかなりの部分を占めるとともに都市商業に関する研究が始まり、1950 年代から 70 年代にかけては、農村経済史に関わる研究とくに生産関係論争が活発に展開する一方、各種物産の生産・流通が取り上げられ、1980 年代以降は、農村の生産関係に関する論争が影をひそめた反面、都市・地域開発・貨幣研究が盛んになった。とはいえ以前と比較すると社会経済史研究は現在低調と言わざるを得ない状況である。概説書として各種産業別に概観した加藤繁 [1944]、経済生活を多方面から記述した河上光一 [1966] がある。

◆貿易

宋代経済史は、1910 年代に海外貿易の研究の分野から本格化した。海港、市舶貿易、日宋貿易の研究には藤田豊八 [1932]、提挙市舶使蒲寿庚を主人公とした海外貿易研究に桑原隲蔵 [1935]、さらに森克己 [1948a][1948b][1949c][1950] をはじめとする日宋関係を中心とした膨大な貿易研究がある。近年また日宋間の経済文化交流を観点とした山内晋次 [2003] があり、新たな貿易研究がおこってきた。

◆貨幣・金融

戦前ももっとも研究が集中したのは、貨幣史及び紙幣の前身である手形の研究である。日野開三郎 [1983] は北宋期銅鉄銭の鑄造額をはじめ基本的問題を論じ、曾我部静雄 [1949] は日宋金三国間の貨幣関係の専著であり、宮崎市定 [1943] は五代から宋初にかけての貨幣問題を多角的に論じた。また加藤繁が東京帝国大学でおこなった講義録 [1991] も出版されている。交子については加藤 [1953] が研究の先鞭をつけ、日野 [1983] は各種手形の紙幣への転化を論じ、手形制度自体の発達も研究した。曾我部 [1951] は紙幣発達の通史である。金銀に関してはその貨幣機能を逐一検討した加藤 [1925-26] の研究が特筆される。戦後、貨幣研究はやや低調であったなかで中嶋敏 [1988] は北宋銭の諸問題や南宋貨幣史を研究した。また淮南の鉄銭交子・行在会子に関する草野靖 [1962][1966] も重要である。80 年代以降、貨幣史研究が再び盛んとなった。著書には短陌・私鑄銭・価格を扱った宮澤知之 [1998]、元朝紙幣の前提となった南宋貨幣を論じた高橋弘臣 [2000] がある。また有価証券の研究として河原由郎 [1980] がある。

◆市糶・専売・倉

市糶法では、便糶・博糶・結糶をあつかった日野開三郎 [1988] が代表的なものであり、専売では茶法については佐伯富が詳細な資料集 [1941] を編纂し数編の論文を書いたほか、数多くの研究がある。塩法の研究も幸徹が [1967] をはじめ多くの研究をおこなったほか、かなりの研究の蓄積がある。著書としては中国史を通じた塩政史に佐伯富 [1987] がある。政府の財政・社会政策として重要な倉の研究には今堀誠二 [1995] がある。

◆流通経済

加藤繁が開拓した定期市・商業集落(鎮市)・都市・都市の各種生業・行・商人の研究は 2 冊の大著 [1952][1953] にまとめられ、現在なお参照されるべき成果となっている。この分野の研究は戦後、活発さという点では農村経済史研究のかげにややかくれたが、研究は着実に蓄積され、明確な方法論にもとづいた全面的体系的な商業史研究として斯波義信 [1968] が現れた。斯波による研究史の概括はそれまでの商品経済研究の格好の手引きとなっている。著書としてはこのほか流通経済が財政に規定される面を論じた宮澤知之 [1998] がある。また流通経済史の基礎となる交通・通鋪・漕運の研究に青山定雄 [1963]、仁井田陞の経済活動を保証する法制度の研究 [1960] や経済活動に用いられる法律文書の研究 [1937] も重要である。

◆地主佃戸関係・郷村制

戦後、宋代社会経済史は大きく転換し、研究の主要な対象は農村における生産関係、とくに地主佃戸関係の実態究明と評価に移った。そして、この関係が中世農奴制に相当するのか、農奴制を廃棄した自由な小作制であるのか、あるいは奴隸制から農奴制への移行期の関係であるのかといった論争が1970年代後半まで続いた。論点は多岐にわたったが、一円の大土地所有・佃戸の土地緊縛・佃戸の地主に対する身分的隷属等を実証的に主張する周藤吉之 [1954][1962][1965][1969]、地主佃戸関係をフェューダリズムに比定する仁井田陞 [1962] に対して、分散の大土地所有・自由な移転・経済的契約等を主張する宮崎市定 [1950][1952][1971a] の論争は有名である。また柳田節子 [1986][1995] は佃戸制の研究に地域差の観点を導入したほか自作農にも注意を払って郷村制とくに戸等制を追究し、独自の観点から地主経営・土地制度を体系的に論じた草野靖 [1985][1989] もあり、佐竹靖彦 [1990] は宋朝のほぼ全域にわたる唐宋変革期の郷村の変貌過程を論じた。こうして周藤・仁井田と宮崎の佃戸論争をのりこえる努力がはられるとともに、社会関係が展開する場、すなわち郷村が研究の対象となった。佃戸論争は高橋芳郎が法制的観点から佃戸に二類型があること、また先駆的研究である加藤繁 [1953] 以後、とくに地主佃戸関係と混同されてきた主戸客戸制を明らかにして以後は、急速に研究者の関心から遠のき（高橋芳郎 [2001][2002]）、また中国史研究会が当時の主要な生産関係は地主佃戸関係でなく、自作小作をとわない小経営農民と国家の関係にあるとしてパラダイムの転換をはかった（中国史研究会 [1983]）。なお農村社会の詳細な研究史については谷川道雄編 [1993] を参照されたい。

◆税 役

宋代農村の負担である役法の研究は、村落自治研究の一環（和田清編 [1939]）、または財政研究の一部門として行われたが（曾我部静雄 [1941]）、戦後は前者の観点が希薄となり、財政・農村統治、あるいは義役を題材とした社会的結合の観点から論じられ、多くの研究が現れた。両税については税額・手続き等について論じた周藤吉之の一連の研究 [1954][1962] があり、島居一康 [1993] が土地税であることを論じた。

◆農業・水利

宋代農業は研究史的には大規模な水利田（畝田・圩田）開発がまず注目され、そこを舞台に江南水稲作の発展が構想され、周藤吉之の一連の研究 [1962] ほか多くの成果を生み出し、天野元之助の技術史に主眼をおいた研究 [1962]、長瀬守の水利研究 [1983] や吉岡義信の黄河治水の研究 [1978] も現れた。ところが1979年に東洋史のほか生態学・農学・自然地理学等の研究者が集まった「江南デルタ・シンポジウム」が開かれ、従来、集約農法が自明とされてきた江東圩田・浙西畝田農業について、むしろ粗放な段階にあることが自然科学の立場から指摘された（渡部忠世・桜井由躬雄編 [1984]）。こうして宋代農業史の見直しがはじまり、大澤正昭 [1993] が陳旉農書を分析し、唐宋変革期の農業経営を検討（[1996]）したのをはじめ、宋代の集約農法

は長江デルタでなく、むしろ浙江・福建の河谷平野・扇状地に見られることが議論されるようになった。農業史は農村社会の研究にも大きな影響を及ぼすものである。

◆諸産業

工業では、愛宕松男の陶磁器業研究 [1987]、古林森廣の酒造業・茶市場・食肉業・金銀細工業・銅器工業・製鉄業等各種産業の研究 [1987][1995]、河上光一の塩業 [1992] をはじめとして、生産と流通の二つの側面から取り組んだ研究が数多くある。比較的新たな分野として成立した漁業史では、古林 [1987] が漁獲物の流通・漁法・養魚等を論じ、中村治兵衛 [1995] が魚税・漁場・漁法等を取り上げた。また宋代の生産技術の論考を含む論文集に藪内清編 [1968] もある。

◆開発史

1970年代以降、経済史研究で新しい分野として成立したのは、長い時間をとって社会経済の動向を捉える開発史である。移住・定住、農田・水利開発、都市化の過程等が考察される。この分野の開拓の中心となったのは斯波義信であり、経済地理学の理論ほか社会科学の成果を総合的に応用した斯波 [1988] がある。この分野は斯波以後有力となった。

（宮澤知之）

<5> 政治・制度史

◆政治史

中国古代史全般について言えることだが、宋代史の政治・制度史分野にも、他分野と截然と分類しかねる部分が含まれることはほぼ自明の理である。それを体現するかのように、政治・制度史分野にとどまらず、社会経済史・文化史等の幅広い研究分野で論陣を張り、さらに他の時代分野にも画期的な業績を挙げた宮崎市定の主要研究対象は、ほぼ宋代に置かれていた。現在、その主業績は全24巻（冊）からなる宮崎 [1991-94] にまとめられている。そのうち、五代と宋代史に直接に関連している巻は第9巻『五代宋初』、第10巻『宋』、第11巻『宋元』、第12巻『水滸伝』の4冊ある。毎巻に宮崎自身が新たに執筆した「自跋」があり、自作の解説になっている。この『全集』に先立つ論文集には『アジア史研究』（第1～第5）と『アジア史論考』（上・中・下巻）の二種 [1957-78][1976] がある。以下、宮崎の五代・宋代史関連の主要業績をやや詳しくまとめておく。

先に論じたように内藤湖南の宋代以後近世説は、第二次大戦前の学界で大きな影響力を持ったが、宮崎市定には内藤の宋代以後近世説を補強した論文 [1940-41] や論著 [1950] があり、さらにそれを補完する幾多の論文が執筆された。北宋史と南宋史の概説には各々 [1935][1941a]、さらに大きな枠組みから宋代史の意味に論及しているものに [1948a] や [1977-78] があり、これらは宮崎の洪翰な著作全容を理解する上でも役立つ。

さて、五代から宋初にかけては、五代宋初の通貨問題を取り扱った [1943] の他に、

五代の軍閥を題材にした [1948b] と宋太祖を取り上げた [1945a] がある。政治史分野では、下級官吏層に研究的を絞った [1930a][1945b][1953a] 等の諸篇は、いずれも、この分野の研究の先駆けになった重要論考である。また『宋史職官志』の内容を厳密に分析解明した [1963a] は、煩雑な宋代官制理解のための必読文献。さらに南宋末年の政治史を論じた [1930b][1941b] 2篇の他、宋代士大夫の実相を考察した [1931][1948c][1953b][1989] の4作もいずれも重要な作品である。中国史上の政治論十数篇に対する訳注と解説からなる [1971b] には、宋代からは王安石・司馬光・葉適が選ばれており、その解説からも宮崎の宋代近世説が読み取れる。また、宮崎の科挙関連論著 [1946][1963b] は、宋代の科挙を専門に論じた作ではないが、宋代士大夫階層を理解する上での多くの示唆的な材料を提示している。他に、宮崎には法制と土地所有に関連した [1954][1952][1971a] 等の力作があり、とくに後者兩篇は、宮崎自身の言葉によれば「東京方面で行われる宋代以後中世封建説、及び佃戸農奴説に対する反論」（『宮崎市定全集』第11巻「自跋」）であり、大きな反響を呼んだ。さらにまた宮崎には、『水滸伝』と宋江について論じた一連の論文論著 [1953c][1967][1972][1981] がある。それら諸篇は、単に『水滸伝』と宋江に関する論文にとどまらず、宋元時代の社会や制度、とりわけ、下級軍人や胥吏問題に対する宮崎の分析結果であり、その意味でも大変に興味深い。なお『水滸伝』に関わるものとしては、宮崎以外に、高島俊男 [1987] の他、佐竹靖彦 [1992] と伊原弘 [1994] 等がある。

政治史の分野では、五代から宋初にかけての軍閥に関して、日野開三郎 [1942] や栗原益男 [1988] が役立ち、宋初の政權安定過程を概説した笠沙雅章 [1975] も参考になる。また、内藤湖南・宮崎市定の宋代以後近世説を継承した佐伯富が、特に宋朝政權成立時期に焦点を絞って集権官僚制と独裁君主制を考察した論考は [1971] に、その君主独裁制の一翼を担っていた皇城司や走馬承受に関する論文は [1969] に収録されている。また、北宋中期の政治史に焦点を合わせた吉田清治 [1941] は、いまなお一読の価値がある。皇帝権力に着目したものに王瑞来 [2001] がある。一方、こうした北宋政治史の研究に対して、南宋政治史の研究は、史料数が限定されていることもあって、あまり進捗しておらず、南宋通史としても宮崎の前掲概説や山内正博 [1970] 等があるばかりである。他には、南宋政權の形勢にも論じた外山軍治 [1964] や、南宋政權の確立過程や構成を詳論した寺地遵 [1988] が重要である。南宋中期後期については、千葉実 [1967] や衣川強 [1977][1989] 等があるが、専論は少なく、研究者の布陣も宋代の他の時代領域と比較すると、北宋晩期とともにかなり手薄である。

◆対外関係

宋朝に隣接して外交・貿易等の国際関係を持った国家には、遼・西夏・金・元や高麗・日本等がある。以下、それぞれの国家(地域)と宋朝との関係について論じた論考の主なものだけを紹介する。遼(契丹)と宋との交通・国際関係に関しては、田村實造

[1964] に基本的な論文を収める。宋・金関係については、すでに挙げた外山・寺地の論著の他、唐宋時代の東北地域情勢と交流に関して論じた諸篇をまとめた日野開三郎 [1984] や、同 [1990] には、宋初の女真情勢に論じた論文を収録する。西夏と宋朝との関連では、西夏興起の原因を宋朝の青白塩輸入禁止措置に求めた宮崎市定 [1934] や藤枝晃 [1950] の他、岡崎精郎 [1972] はタングート古代史の専著で、宋朝との関連についても論じている。また、前掲の中嶋敏 [1988] には宋夏間の抗争に関する論文、中嶋 [2002] にも宋金抗争関連の諸論文が収録されている。

日宋間の交流に関しては、まず木宮泰彦 [1955] が挙げられる。加えて森克己 [1948a][1948b][1948c][1950] の一連の論文論著が必読文献である。これらは、戦後間もない時期に刊行された専著で、日宋関連論文以外にも高麗関連の論文も収録している。また、入宋僧を考察対象にした伊井春樹 [1996] や王麗萍 [2002] もある。

対外貿易に関しては、1930年代にまとめられた前掲の藤田豊八 [1932] に、杭州と市舶司関連の論文を収め、ほぼ同時期に出版された前掲の桑原隲蔵 [1935] も、市舶司を中心に南海貿易をめぐる諸問題を詳述したもので、いずれもこの研究分野での指標となる古典的文献である。佐藤圭四郎 [1981] には、イスラーム圏の実情を勘案し上記の両論著を再吟味した論考を収録する。また、概論に相当するものには、内奥アジアと東南アジアの歴史を概観した松田壽男 [1942]、『嶺外代答』『諸蕃志』『島夷誌略』等の宋元時代の南海関連史料を解説した石田幹之助 [1945] がある。なお、この両者には、松田 [1986-87] と石田 [1985-86] の各著作集も刊行されている。三仏斉国や大食に関する論文を収めた桑田六郎 [1993] もあり、藤善真澄 [1991] は『諸蕃志』の詳細な訳注である。

◆軍事軍政

宋初の禁軍については堀敏一 [1953] があり、弓箭手については小笠原正治 [1954-55] 等がある。軍隊の実態に関しては曾我部静雄 [1943] や、曾我部 [1974] 所収の諸作があり、さらに宋代兵制史に関する一連の論文を収録した小岩井弘光 [1998] もある。

農民起義等の反政府活動について、中国国内での研究論争を紹介したものに柳田節子 [1982] 等の諸篇があるが、主な研究対象は北宋時代のいくつかの問題点にほぼ集中している。かなり前の論文としては、均産一揆を取り上げた重松俊章 [1931a] や、王則の乱等を考察対象とした重松 [1931b] が挙げられよう。王小波・李順の乱の性格・意義については、池田誠 [1951]、中村健寿 [1968]、島居一康 [1970]、丹喬二 [1980] 等、ややまとまった数量の論文がある。もうひとつの主要研究対象となっているのは、北宋末期の方臘の乱である。方臘の階級身分とマニ教との関係、喫菜事魔の宗教性格と『容齋逸史』の史料価値をめぐっては、笠沙雅章 [1974a][1974b]、丹 [1975] 等の諸論文が出ている。

◆制度史

宮崎市定とほぼ同世代で、東京大学を主な活躍の場所とした周藤吉之の業績は、お

よそ朝鮮史・清初中期史・唐五代宋元史の三部門にわけることができる。ただ、その学術活動の中心は、やはり、あくまで宋代の制度史や社会経済史分野に置かれていた。周藤 [1950] は、宋代の支配者層の実態を科挙・官僚制、及び官僚の大土地所有を通じて解明した著作で、その後の宋代史研究の必読書のひとつとなった。その他の地主佃戸関係の諸作については、すでに別に示したとおりであるが、宋代制度史に関する論著も貴重である。三司の制度や王安石新法、また、宋代史の基本史料である『続資治通鑑長編』『国史』『宋史食貨志』関連の諸篇を集めた周藤 [1969] や、高麗朝の中央政府官僚機構を宋朝のそれとの関連で考証した同 [1980]、そして、「高麗官僚制度研究」を後編とし、著者晩年の主要研究分野であった王安石青苗法関係の諸論考を前編とする同 [1992] がある。この分野での周藤の研究対象を概括すると、官僚制度・王安石新法・史学の三対象になると思う。以下に、関連する諸研究を見ておこう。

宋代の複雑な官僚制度とその改革変遷については、和田清編 [1942] の中嶋敏執筆にかかる宋代官制の概説が役立ち、山本隆義 [1968] の第十章「宋代」では、翰林学士院について論じる。その後の研究では、宮崎市定・佐伯富等の研究を継承発展させた梅原郁 [1985] の他、科挙との繋がりから簡明に論じた平田茂樹 [1997] もある。

官僚制度と密接な関係にある科挙制度については、宮崎市定の科挙研究を承けた荒木敏一 [1969] が代表的な研究成果であり、解試・省試・殿試や科目・制科・科挙改革案等について詳述している。また、教育制度を論じた専著には寺田剛 [1965] がある。

地方州県での行政機構については、前掲したように大戦前に和田清編 [1939] があり、宋代の地方行政組織について概説されていたが、地方官吏の行政実態については、その指針である官箴書の解明が不可欠である。この官箴書の研究工具書についてはすでに述べたが、ここでは、官箴書研究の一例として、佐竹靖彦 [1973-74, 77] [1993] を挙げておく。

王安石研究では、前掲の佐伯富 [1941] がいまだに生命力を持っており、再版には「王安石研究参考文献」を附す。その他、王安石の伝記概説書には、詩作を解説した清水茂 [1962] をはじめ、前掲した小野寺郁夫 [1967] や東一夫 [1975] [1980a]、さらに思想面に焦点を合わせた三浦国雄 [1985] がある。王安石新法の研究については、すでに宮崎市定・周藤吉之の諸作を中心に随時紹介してきたが、新法を手際よく概観したものとして梅原郁 [1970] を挙げたい。また、個別적으로는、熊本崇 [1987] 等の研究もある。他に総合的なものとして東 [1970] が新法の大部分の問題について考察しており、さらに王安石研究の関連事項を収集して解説した東 [1980b] や、主に日本の儒学者と禅僧の王安石評価・研究史に着目して論述した東 [1987] があり、最新の研究には李華瑞 [2004] がある。この他、近藤一成 [1979a] も参考になる。

次に、史料に関する研究について述べよう。日本の宋代史研究においては個別的な史料に関する論文はかなり生産されているのだが、宋代史の基本史料自体に関する研究はあまり重視されていない。その意味でも、『続資治通鑑長編』等に関する周藤の

前掲論文 [1969] の価値は高い。いまのところ宋代史の史料文献に解題を施したものに、各種の集成・事典、および研究入門類があるが、神田信夫・山根幸夫編 [1989] には、柳田節子・板橋源一執筆の「宋代」史籍解題がある。また、船越泰次 [1985] は、宋白等撰『続通典』200巻の佚文を輯録して8巻にまとめたもの。

◆法制史

法制史の分野での仁井田陞の諸業績について、すでに3著を挙げた。それ以外に、材料の多くを宋代史料に求めた仁井田 [1942] がある。戦後になると、仁井田 [1951] [1952a] [1952b] が続き、さらに「宋代以後における刑法上の基本問題——法の類推解釈と遡及処罰」を含む仁井田 [1959] をはじめとし、前掲の『中国法制史研究』2著に仁井田 [1964] を加え、『中国法制史研究』4巨冊が陸續と刊行された。慣習・道徳を取り上げた仁井田 [1964] では、法律典籍について論じた論考が多く、同書の第五部では「宋代の出版法」を取り上げ、『慶元条法事類』と『宋会要』を対象としている。さらに法と中国社会をめぐる論考集、仁井田 [1954] [1967] [1968] や幼方直吉・福島正夫編 [1974] もある。なお、仁井田の学説を宮崎市定のそれと対比させて論評した滋賀秀三 [1966] は、時代区分論争の動向を理解する上でも興味深い読み物である。

特定の時代について限定して論じている訳ではないが、滋賀秀三 [1967] は『清明集』等の宋代史料に多くの材料を取っていて重要である。宋代の主要法制文献等を解説した滋賀編 [1993] も参考価値が高い。書判集成であるこの『清明集』については、日本の静嘉堂文庫所蔵の宋本『清明集』に基づく梅原郁訳注 [1986] が出て反響を呼んだ。ほぼ同時期に同書の明版が日本に将来され、中国でも1987年に明版の標点本『名公書判清明集』（中華書局）が刊行されたことも手伝って、同書に対する研究が活発化した。『名公書判清明集』の「懲悪門」「人品門」「人倫門」の訳注稿である大澤正昭編訳 [1991-95, 2000, 02, 05] や石川重雄編 [1995] や大澤編著 [1996] はその成果である。その他、宋代の女性の法身分等に着眼した柳田節子 [2003] や、法制史の論稿を集めた論文集に梅原郁編 [1993] [1996]、また、特定の題材に絞った論考も川村康 [1993] 等、その数量も増しつつある。

<6> 社会・文化史、その他

◆官僚士大夫

宋代以後の中国社会を考えると、科挙制度によって輩出した新興官僚層や士大夫階層が目される。以下、関連諸分野の研究について概観する。

周藤吉之や宮崎市定によって先鞭をつけられた官僚・士大夫研究は、その後、官僚の系譜に対する研究を盛んにした。その過程で多くの論文を残したのは青山定雄で、江西の新興官僚に的を絞った青山 [1951] や、華南・華北の官僚の系譜を考えた青山 [1974, 77] [1963, 65, 67] がある。その他、個別地域の官僚や士大夫階層を考察し

たものには、愛宕元 [1974] や伊原弘 [1981] があり、河南の呂氏を論じた衣川強 [1973] 等の諸作も注目される。

宋代士大夫の研究には、宮崎市定に一連の論文があることは既述の通りであり、それを踏まえて、唐から宋にかけての士大夫の成立過程を論じたものとして礪波護 [1968] がある。また、士大夫の倫理観等を考察した青山定雄 [1976] や、士大夫の徙居・寄居の問題を分析した笠沙雅章 [1971][1982a] と、士大夫官僚の生活実態を俸給の面から考察した衣川強 [1970][1971] は、士大夫の宋代社会での位置づけを考える上で重要な論文である。個別の士大夫研究に関して、范仲淹・司馬光・王安石・蘇軾・朱熹・文天祥等についてはすでに述べた。その他は、官僚士大夫が単独で考察対象となることは概して少ないが、歐陽脩を取り上げた小林義廣 [2000] がある。

南宋の士大夫に関しては、儒学の視点からの考察が多いが、その中で近藤一成 [1979b] が注目される。士大夫と都市・社会との関わりについてまとめた伊原弘 [1985] や士大夫研究を整理概括した小島毅 [1986] の他に、小島編 [1999] や伊原・小島編 [2001] も参考になる。また、梅原郁訳 [1986] は北宋官僚を対象とする『宋名臣言行録』を訳出したもの。

唐宋時代の家族や婚姻問題を取り上げた大澤正昭 [2005] も注目される。

◆都市、その他

宋代都市の研究では、すでに大戦前に加藤繁に一連の論考があり、戦後、前掲した加藤 [1952] に収録された。『東京夢華録』『夢梁録』等の都市繁盛記を多用した曾我部静雄 [1940] も有用。その後の研究動向を知るためには、斯波義信 [1974] が参考になり、伊原弘 [1987] もある。中村治兵衛編 [1990] は、都市と農村に関する総合的な文献目録である。

まず、宋代の都市を研究する上で参考になる先駆的な論文として、宮崎市定 [1962] と曾我部静雄 [1963] 所収の「都市区画制の成立」を挙げておきたい。さらに、建築史の分野から中国の国都を概観し、宋代の開封や洛陽等に言及した村田治郎 [1981] もある。また、宋元時代の都市問題に関する共同研究の成果をまとめた梅原郁編 [1984] があり、都市と水利問題に着目した西岡弘晃 [2004] もある。

中国都市を通観する斯波義信 [2002] や、城郭都市の変遷を辿った愛宕元 [1991]、また、宋代の蘇州・南京・寧波を主な対象とした伊原弘 [1988][1993a][1993b]、及び開封の歳時風俗を考察した同 [1991] や南宋末年の杭州に焦点を絞ったジェルネ [1990] 等の専著が連なる。加えて、宋代の交通事情等を探った伊原 [1995] や張振端「清明上河図」を題材として宋代社会を考察する同編 [2003] もユニーク。都市研究の全体の傾向として、研究関心は国都や江南等の大都市の研究から地方の中規模都市へ、さらに都市の生活習俗に向かっている。なお、都城関連の文献については「史料の解説」でも取り上げる。

一方、郷村については、すでに周藤吉之・柳田節子の論著を挙げたが、五代・宋代の郷村を概観するには、前掲の曾我部静雄 [1963] や、同 [1976] 所収の諸論考が重

要である。

社会救济制度に関しては吉田寅 [1974] と梅原郁 [1983]、さらにもう一篇、南宋の福建の事情を考察した渡辺紘良 [1981] を挙げる。

◆宗教・仏教

宋代の風俗と宗教・民間信仰等の研究について概観する。まず、巫の活動実態等を明らかにした中村治兵衛 [1992]、郷村内の信仰を分析した金井徳幸 [1976][1979][1980] がある。

仏教信仰を宋代社会史の中で位置づけた笠沙雅章 [1982b] は、前編を「宋代仏教社会史研究」とし、売牒・賜額・墳寺・喫菜事魔・方臘の乱・浙西の道民、及び福建地域の寺院と社会について詳論している。笠沙 [2000] は、文化史の側面を探った論考集で、宋代社会の実態理解に役立つ。

つぎに五代・宋代社会の仏教事情に論及している重要な論著を幾冊か挙げておく。

主に宋代の仏教諸制度や浄土教について論じた高雄義堅 [1952] の他、度牒制・僧官制度や天台宗・禅宗と浄土教典籍等についても論じた高雄 [1975] がある。塚本善隆 [1975] には、仏教と財政との関わりを論じた論考の他、得度制度や空名度牒政策を論じた論文を収録する。小笠原宣秀 [1963] は、宋代における浄土教結社と庶民教団としての白蓮宗について考察した専著。後周世宗の仏教政策や贊寧・契嵩を取り上げた牧田諦亮 [1957] や、年表篇・論攷篇とに分ち、年表篇には五代各代と宋初の編年史料を載せ、論攷篇では五代の宗教政策を概観した同 [1971] も貴重である。小川貫弌 [1973] は、その第三部を「宋元仏教文化の影響」とし、宋元仏教、特に浄土教と日本仏教との関連について論じている。宋版藏経に言及した同 [1964] もある。

禅宗関係では、主に宋代禅宗の政治史と社会史の側面に考察を加えた阿部肇一 [1986] や、思想的側面を考察した論著に鈴木哲雄 [1985]、石井修道 [1987]、久須本文雄 [1980] 等、比較的豊富な研究成果がある。

なお、成尋の入宋記録『參天台五台山記』については、専著として島津草子 [1959] や平林文雄 [1978] がある他、とくに成尋の天台山行を取り上げた塚本善隆 [1974] もある。

◆交通漕運・地誌地図、その他の分野

唐宋時代の交通史研究では、宋代の陸路や汴河について概述し、宋代の方志と地図についても分析する前掲の青山定雄 [1963] が重要である。さらに同 [1958] は、現存する方志と、かつて伝存した方志名を列記して解説を加えた資料集。漕運については、斯波義信 [1968] に主に運船業の基礎構造と経営構造を論じた一章「宋元時代における交通運輸の発達」がある他、橋本紘治 [1974] や畑地正憲 [1987] 等がある。歴史地理分野では、唐宋時代の福建や北宋時代の京東路、さらには『元豊九域志』についての論考を含む日比野丈夫 [1977] がある。また、宋代の旅游記には小川環樹訳 [2001] がある。

宋代地図には松田壽男・森鹿三編 [1966] 所収の「宋の境域」図等や荒木敏一・米

田賢次郎編 [1967] 附載の「宋代疆域図」があるが、現在では譚其驥主編 [1982] が最も便利。

その他の分野では、宋代の食文化に取り組んだ中村喬 [2000]、宋代華南地域の民族問題を取り上げた岡田宏二 [1993]、宋代の礼学礼説に分析を加えた山根三芳 [1996] や小島毅 [1996]、さらに宋代の法医学書『洗冤集録』を訳出した徳田隆訳 [1999] 等の著作が目される。陶磁史研究では、前掲の愛宕松男 [1987] 以外に、三上次男 [1989] があり、宋代陶磁に論及する。アジア全域に及んだ陶磁貿易経路等については、同 [1987-88] に詳しい。(木田知生)

3 史資料の解説

以下に挙げる史料は、あくまで基本的な重要史料が中心で、重要なものほどやや詳しく説明し、紙幅の関係から、その他は簡略にまとめた。テキスト・版本に関しても、主要なものにほぼ限定した。その他の史料については、周藤吉之 [1956] や陳智超他 [1983]、何忠礼 [2004] 等の史料解題を参照されたい。説明すべき事項が2点ある。まず、近10年ほどの間に、史籍の再版や刊本の影印(新印)が相次ぎ、この傾向は今後も継続すると思われること。つまり、ここに挙げる刊行年次以外にも、その前後に同種の印刷物がかなり存在する可能性があること。次に、近年、漢籍文献のデジタル化が急速に進捗し、その勢いがますます著しいこと。おそらく、今後10年ほどの間に、大多数の漢籍がデジタル化されるはずである。現に、ここに挙げる史料のかなり多くが、すでにデジタル化されている。だが、そうしたデジタル化の動きと質の良否に関しては、即座には首肯し難い状況にある。

〈1〉五代史史料

・『資治通鑑』

北宋・司馬光等撰。294巻。主な内容については前章「隋・唐」を参照。五代史部分は同書の巻266から最終巻の巻294まで計29巻。同書の編集時期は五代からさほど時を経たおらず、原始史料が数多く残されていた。そのため、貴重な材料がすくぶる多い。中華書局の標点本は何回か修訂されており、できるだけ新しい版を利用することが望ましい。和刻本も数種類が通行している。胡三省の注に留意して語彙を採録した佐伯富編 [1961] がある。

・『旧五代史』

北宋・薛居正編。原名『五代史』150巻。紀伝体の正史。北宋中期、内容に不満を持った欧陽脩が新たに『五代史記』を世に出すと、薛氏の『五代史』はしだいに史書としての価値を下げ、欧陽脩の『五代史記』に取って代わられた。そのため、

書名も、薛氏の『五代史』を『旧五代史』と称し、一方、欧陽脩『五代史記』の方は、ふつう『新五代史』と呼ばれる。現行本『旧五代史』は、乾隆末年の大型古典叢書『四庫全書』編集時、邵晋涵によって再編集されたもの。明初の大型類書『永楽大典』や宋初の類書『冊府元龜』等を材料とし、原書の約4分の3が復元されたとされる。宋初に編集された『旧五代史』は、『新五代史』にくらべて前朝史料の引用が多く、史料価値は相対的に高い。テキストは中華書局本が良い(全6冊、中華書局、1976年)。

・『新五代史』

北宋・欧陽脩撰。原名『五代史記』74巻。紀伝体の正史。文章は簡潔だが『旧五代史』とくらべると史料記載が少なく、かわりに論評が多い。義児伝・伶官伝・雑伝等、新たに立てられた伝目がある他、ままた『旧五代史』に無い史料もあり、互いに参照すべき書である。テキストはやはり中華書局本が良い(全3冊、中華書局、1974年)。新旧『五代史』の索引・辞典には、張万起編 [1980]、郭声波・王蓉貴編 [2000] や宋衍申主編 [1998] がある。

・『五代会要』

北宋・王溥撰。30巻。王溥は後周の宰相をつとめ、五代の典章制度や故事掌故に精通した人物で、五代の実録や旧史によって同書を編集した。財政関連資料等、新旧『五代史』を補う貴重な材料も多い。1886年江蘇書局刊本を底本とした点校本(上海古籍出版社、1978年)がある。

・『冊府元龜』

北宋の王欽若・楊億等の編になる大型類書。1000巻。帝王部以下、31部に分かれて1104門の資料記事を整理したもの。帝王の治世に資するために歴代の君臣事跡をまとめたもので、とくに唐と五代部分の記事に貴重な材料が多い。明版の影印本(全12冊、中華書局、1960年)以外に、残存した宋本の影印(『宋本冊府元龜』全4冊、中華書局、1989年)もある。部分的な索引として宇都宮清吉・内藤戊申共編 [1938] がある。

・『九国志』

北宋初の路振撰。12巻。紀伝体の国別史。五代十国史研究の重要史料であるが、現行本は邵晋涵が『永楽大典』から輯録したものを再整理したもの。除かれていた荆南(南平)の記述も加えられ、実質的に十国に関する略伝資料集となっている。『宛委別蔵』本の他、かなり多くの版本があるが、閲読には点校本(商務印書館『万有文庫』本、1935年。または、中華書局『叢書集成初編』本、1985年)が便利である。

・『十国春秋』

清・呉任臣撰。1669年成書。114巻。十国各国の紀伝体の国別史。後世の編纂物とはいえ、取材範囲が広く、五代と宋の旧史・筆記・文集等から多くの資料を渉猟しており、十国関連の資料集成としての価値は高い。人名索引を付した標点本(全

4冊、中華書局、1983年)がある。

・『南唐書』

南唐の歴史を記した紀伝体の史書。現存するものは2種。

馬令撰『南唐書』は30巻。北宋末期の1105年に完成。南唐の三主(李昇・李璟・李煜)の伝記を書5巻に記し、伝24巻、譜1巻を配する。南唐の旧事に精通した先祖の資料を受け継ぎ、詳しい記述に特色があるが、やや蕪雑との評もある。

陸游撰『南唐書』は18巻。1180年代初めの作。本紀3巻、列伝14巻、浮屠・契丹・高麗列伝1巻からなる。馬令の書によって補訂したもので、より考証が加えられ叙述も簡潔になったが、資料の総量は馬令の書に及ばない。

主なテキストは『四部叢刊統編』本(商務印書館、1934年初版)、もしくは『叢書集成初編』本(中華書局、1985年)である。

・『南漢書』

清・梁廷楠撰。1829年成書。18巻。五代十国時代の嶺南の独立王国・南漢の歴史を記した史書。本紀6巻、類伝12巻からなる。本紀には5主、類伝には計179名の伝を記載する。五代十国に関する旧史以外に、広東地区の地方志を多用するなど、取材範囲が広いのが特色。点校本(林梓宗校点、広東人民出版社「広東地方文献叢書」1981年)が便利。同一撰者の『南漢書考異』18巻も附載する。

・『吳越備史』

吳越の歴史を記した史書。4巻。北宋の范垫・林禹の撰と題しているが、実際の撰者は錢儼。補遺1巻は馬蓋臣の作とされる。前半にやや欠落部分があり、宋代にすでに不全本となっていたらしい。『学津討原』本の影印本(中華書局『叢書集成初編』1985年)や『四部叢刊統編』本(商務印書館、1934年)以外に、杭州関連文献を多数収録した『武林掌故叢編』全12冊(清丁丙輯、清光緒中錢塘丁氏嘉惠堂刊本影印、台聯國風出版社・華文書局聯合印行、京華書局出版、1967年)にも影印本を収める。

・『北夢瑣言』20巻

五代宋初の孫光憲撰。20巻。孫光憲が江陵で執筆した晩唐と五代十国の史事に関する筆記。415箇条からなる。典章制度から文学史の諸事にいたる広範な内容を、かなり綿密な考証を経て記載した信頼性の高い史料雑著。引用文献の多くが失われた現在、その史料価値はたいへん高い。入手しやすいものとして、校点本が2種(上海古籍出版社「宋元筆記叢書」1981年。中華書局「唐宋史料筆記叢刊」2002年)出ているが、より新しい成果を取り入れた中華書局本がすぐれている。『北夢瑣言逸文』4巻と『北夢瑣言逸文補遺』1巻に加え、さらに伝記資料と各種序跋を附録とする。

上記の『五代会要』以下、『冊府元龜』『北夢瑣言』をのぞく6種の史料については、傅璇琮・徐海榮・徐吉軍主編『五代史書彙編』全10冊(杭州出版社、2004年)に点校本を収める。

五代史関連の重要史料は、以上の諸書にほぼ尽きよう。文学関係に関しては陶敏・李一飛[2001]、さらに五代時代の書籍と金石の総目をまとめた張興武[2003]が参考となろう。

<2> 宋代史史料

◆基本史料

・『宋史』

宋代史の最重要史料として、『宋史』を最初に挙げたい。元代後期に丞相の脱脱を都総裁として完成した紀伝体の正史。全496巻。編纂期間が2年半ほどしかなく、古来、編輯が蕪雑との評があるが、宋代史全体におよぶ記載は同書の大きな特色である。

元の至正刊本をはじめとして明清各代の版本が揃っているが、一般には上海商務印書館の百衲本によった標点本『宋史』(中華書局、1977年)が利用されるべきであろう。俞如雲編[1992]は、この版に依拠した人名索引である。

『宋史』には、礼志以下、計15の志があるが、主な志には個別に索引や訳注が作られている。まず佐伯富編の職官志・刑法志・兵志・河渠志・選挙志の索引諸作[1963][1977][1978][1979][1982]がある。また、加藤繁他が初めて手掛けた『宋史食貨志』の訳稿[1925-26]は貴重な業績であった。ただ、これは訳文のみで注釈を伴っていなかったが、これによって先鞭をつけられた『宋史食貨志』訳注の仕事は、その後、加藤の受業生である周藤吉之・中嶋敏等が中心となって引き継がれ、和田清編[1960]として出版された。同書は、『宋史食貨志』の「序」「農田」「方田」「賦税」「布帛」「和糴」「漕運」部分の詳細な訳注である。同書に続く部分も、40年近い時を経て中嶋敏の編集で整理刊行され([1999a][1999b][2002a][2004])、訳注の作業は巻184・食貨下六・茶下に及び、語彙索引も作られた[2002b]。一方、『宋史選挙志』の訳注作業は、すでに中嶋敏の編集によって全3巻として完結した([1992][1996][2000])。『宋史刑法志』には梅原郁編の訳注[2002]があり、『宋史地理志』についても、近年、譚其驥主編「正史地理志匯釈叢刊」の1冊として郭黎安編著[2003]が出版された。

この『宋史』を材料に、明末に陳邦瞻が「紀事本末体」に仕上げたものに『宋史紀事本末』109巻があり、標点本(全3冊、中華書局、1977年)が便利である。

・『続資治通鑑長編』

南宋・李燾(1115-84)編。原本は980巻で、北宋の太祖から欽宗までの九朝の歴史を編年体で記していた。別に「挙要」68巻、「修換事総目」10巻、「総目」5巻を配したが、大部分はすでに散逸した。現行本は清乾隆年間に再編輯された520巻本。宋史研究の最重要史料である。体裁は司馬光編『資治通鑑』に依拠し、記載の年代も『資治通鑑』を継いだものであり、加えて史料長編の体例を取ったので

『統資治通鑑長編』と名づけられた。史料の来源は国史・実録・政書や野史・筆記類等、多方面におよび、李燾自身が史実表記に疑念が残ると判断した個所では、異なる史料を併記するなど綿密な考証で定評がある。現行本の史料記載欠落部分については、清の黄以周等が他の南宋史書を利用して『統資治通鑑長編拾補』全60巻を編纂した。

現行本(520巻本)には四庫全書本と浙江書局本があり、とくに後者の版本は、中華書局標点本や索引本の底本となっており、影印本も2種出ている(浙江書局・永楽大典本影印、世界書局「中国學術名著」全15冊、1961年初版。浙江書局本影印、上海古籍出版社「宋史要籍彙編」全5冊、1986年。いずれも『統資治通鑑長編拾補』を附載)。これら以外に、原著を節略した宋版五朝本(108巻、子巻数では175巻)の影印本(宋刻五朝本影印『宋板統資治通鑑長編』中華全國圖書館文獻縮微複製中心「中国公共圖書館古籍文獻珍本匯刊」全7冊、1995年)もある。利用に便なのは、中華書局の標点本(全34冊、1979~95年。全20冊、2004年再版。『統資治通鑑長編拾補』全4冊、2004年)。また、同書中の宋と遼に関連する史料を取り出した陶晋生・王民信編[1974]もある。索引には梅原郁編による人名索引と語彙索引[1978][1989]がある。李燾に関しては周藤吉之[1969]に専論を収載する。

・『宋会要輯稿』

財政・法令等の宋朝の典章制度をまとめた史料集成。『宋史』等にも見えない貴重な史料を数多く記載した宋代史研究の最重要史料。ただし、現行本『宋会要輯稿』は、清の徐松等によって『永楽大典』中から輯録されたもので、1936年になって陳垣等の尽力でまとめられ、影印刊行された。その経緯は北平図書館編[1936]に見える。その後、中国国内では1957年と1987年に影印出版されている(全8冊、中華書局)。

現行本は、帝系・后妃・楽・礼・輿服・儀制・瑞異・運曆・崇儒・職官・選挙・食貨・刑法・兵・方域・蕃夷・道釈の計17類からなる。各類の下にはさらに細目が標記され、おおむね簡潔な概括がつけられ、以下、史料はおおよそ年代順に記載されている。上記の影印対象から漏れていた部分も、『宋会要輯稿補編』の書名で影印刊行(陳智超整理[1988])された。また、『宋会要輯稿』の整理状況について詳論した陳智超[1995]もある。

『宋会要輯稿』に関する目録・索引には、東洋文庫・宋代史研究委員会編[1970][1982][1985][1995]がある他、編年索引に京都大学人文科学研究所・附属東洋学文獻センター編[1995]がある。中国台湾における研究成果には、まず王德毅編著の人名索引[1978]があり、王雲海[1986]附載の「篇目索引」は『宋会要輯稿』全編の目録として利用できる。苗書梅等点校、王雲海審訂[2001]は、「崇儒」門の校訂本である。

・『建炎以来繫年要録』

南宋・李心伝撰。200巻。南宋高宗の建炎・紹興時期の36年間の編年体史書。日暦や会要等の官撰史書を主材料に、広く民間の史書や伝記史料等にまで取材し、細かな校訂を施した。疑問個所には分析を加え、その典拠を示すなど、李燾『統資治通鑑長編』と同様、信頼性の高い基本史料である。

現行本200巻は、『四庫全書』編纂時に『永楽大典』中から輯録されたもので、版本には『四庫全書』本(全4冊、文淵閣本影印、附索引、上海古籍出版社、1992年)、広雅書局本(全10冊、広雅書局本影印、文海出版社、1968年)、点校本(商務印書館『国学基本叢書』全12冊、1937年。また、その影印本、全4冊、中華書局、1988年。ほかに中華書局『叢書集成初編』本、全18冊、1985年)がある。『四庫全書』本と「広雅書局本」影印本には、それぞれ人名・作者・篇名索引(裴汝誠主編[1992])と人名索引(梅原郁編[1983])がある。

・『三朝北盟会編』

南宋・徐夢莘撰。250巻。北宋の徽宗・欽宗年間、および南宋の高宗年間の「三朝」の史実、とくに宋と金との関係について詳細に記録した編年体の歴史書。取材範囲が極めて広く、原文をそのまま採録するなども、同書の大きな特色である。また、記述内容に関する考証も詳しい。とくに北宋政権滅亡前後を記録した靖康年間の記述は詳密を極め、この部分だけで実に75巻を占めている。

同書は長く抄本で伝わったが、通行本には光緒年間の木活字排印本と刊本があり、いずれも影印本として出版されている(1878年木活字排印本影印、全4冊、1977年、文海出版社。1908年刊本影印、上海古籍出版社「宋史要籍彙編」全2冊、1987年)が、テキストとしては刊本が勝る。

・『東都事略』

南宋・王稱撰。130巻。北宋時代の史実を記録した紀伝体の歴史書。その完成は『宋史』よりも早く、記述は簡潔だが『宋史』に見えない記載もある。北宋史を研究するには参照すべき史籍である。宋刊本の影印本(全4冊、国立中央図書館善本叢刊、1991年)以下、清刊本の影印2種(全4冊、文海出版社、1979年。線装14冊、江蘇広陵古籍刻印社、1990年)と四朝別史本を底本とした和刻本の影印(汲古書院、1973年)、さらに点校本(齊魯書社『二十五別史』所収本、2000年)もある。

・『建炎以来朝野雜記』

『建炎以来繫年要録』と同じく李心伝の撰。甲乙各集20巻、計40巻。甲集13門、乙集12門に分ち、南宋の兵事と財政の源流、礼楽制度の沿革等、朝野の諸事を記録した史料集成。会要と似た体例を取っている。

版本には適園叢書(第3集)の版下によって木版印刷した2種(線装12冊、江蘇広陵古籍刻印社、1981年。線装10冊、文物出版社、1992年)以外に、点校本(『国学基本叢書』全3冊、1937年。また『叢書集成初編』本、全6冊、1985年)等もあるが、徐規の校訂による標点本(中華書局「唐宋史料筆記叢刊」全2冊、

2000年)が良い。

・『文献通考』

宋末元初の馬端臨撰。348巻。上古から南宋の寧宗時期までの典章制度に関する一種の通史。田賦・錢幣・戸口・職役等の24門の記載の中で、宋代に関する記述が最も詳しく、同書より後になって完成した『宋史』の内容を補足・訂正できる。

乾隆年間の武英殿聚珍版の影印(いわゆる「十通本」。商務印書館、1936年)が閲読に便利。関連工具書としては商務印書館編[1937]や東洋史研究会編[1954]が有用。華東師範大学古籍研究所編[1985]は「経籍考」の校訂本である。

・『宋大詔令集』

北宋の詔令集成。『唐大詔令集』を編纂した宋敏求の家系に連なる者が、南宋紹興年間に編纂したものとされる。もと240巻あったとされるが、現存するのは196巻と目録下巻のみ。帝統等の17門に分ち、太祖から徽宗時代まで、約3800篇の詔令を保存しており、中でも典礼・政事の二門の詔令数は群を抜く。点校本(中華書局、1962年。1997年再版)がある。

・『慶元条法事類』

南宋寧宗年間の法令集成。もと80巻であったが、現存しているのは職制・選舉・賦役・公吏・刑獄等の16門36巻のみ。宋初に『唐律』に準拠して作られた竇儀等撰『重詳定刑統(宋刑統)』(吳翊如点校、中華書局、1984年)と照らし合わせると、当時の社会実相に密着した法令集として重視すべき書である。燕京大学(現北京大学)図書館蔵版によった刊本(線装12冊、1948年初印、北京中国書店重印、1980年)の他、静嘉堂文庫蔵本を影印したもの(古典研究会影印、1968年)、さらに点校本(黒龍江人民出版社『中国珍稀法律典籍統編』所収本、2002年)がある。燕京大学本には『唐明律合編』『宋刑統』と合刊した影印本(中国書店「海王邨古籍叢刊」1990年)もある。参考文献に『慶元条法事類』の語彙を輯録した梅原郁編[1990]や吉田寅編[1992]がある。

・『通志』

南宋・鄭樵撰。人物伝記を主体とした紀伝体の通史。200巻。杜佑『通典』、馬端臨『文献通考』とともに政書「三通」の一つ。総序と「氏族略」「郡邑略」「昆虫草木略」や「芸文略」「金石略」等の「二十略」の部分が重要である。「十通本」(商務印書館、1935年)のほか、王樹民の校訂になる『通志二十略』(全2冊、中華書局、1995年)が推奨される。

・『(皇宋)通鑑長編紀事本末』

北宋の史実を紀事本末体で記した史書。南宋・楊仲良編撰。150巻。李燾『統資治通鑑長編』の原文を利用し、大事項目に分類して年月順に記述したもの。史実の記載はより首尾一貫し、起承転結も理解し易くなったが、原文はかなり節略された。王安石新法実施時期の一部等、現行『統資治通鑑長編』の記載欠落部分を補うことができるため、『統資治通鑑長編拾補』編集時の主材料となった。1893年広雅書

局刊本の影印本(全6冊、文海出版社「宋史資料萃編」第2輯、1967年)のほか、清・阮元輯『宛委別藏』本の影印本(全8冊、北京図書館出版社、2003年。全10冊、江蘇古籍出版社、1988年。また、台湾商務印書館影印本、1981年)がある。

・『玉海』

宋末元初の王应麟撰。204巻からなる一種の類書。もともと王自身の博学宏詞科受験に際して準備された文献資料集。歴代の典章制度を21門241類に分けて手際良く概説しているのに加え、宋代史関連の資料も数多く保存している。すでに散逸した宋代史籍の引用も多く、資料価値は高い。1883年刻本の影印本(全5冊、広陵書社、2002年)もあるが、最良のテキストは元刊本等に拠った『合璧本玉海』全8冊(中文出版社、1977年。第8冊には、王应麟『通鑑地理通釈』『小学紺珠』等13種の著作を附載)である。

・『(宋朝)諸臣奏議』

南宋・趙汝愚編。150巻。北宋一代の奏議選集。「君道門」「帝系門」等の12門の下、さらに112門に分ち、総計241名1630篇の奏議を収載している。宋代の他の史籍とともに彼此参照すべき重要文献である。宋刻元明遞修本の影印(全10冊、文海出版社「宋史資料萃編」第2輯、1970年)もあるが、宋刻元印本等に拠って校訂された標点本(全2冊、北京大学中国中古史研究中心校点整理本、上海古籍出版社、1999年、附：作者索引)が良く、巻頭に鄧広銘の弁言、陳智超の序があり、同書の特色を詳述している。

・『中興小紀』

南宋・熊克撰。一名『中興小曆』。40巻。乾隆年間、『永樂大典』から編輯された。李心伝『建炎以来繫年要録』よりも前に完成していた南宋高宗の建炎・紹興年間の編年体史書。内容は李著の詳密さに及ばないが、一定の参考価値を有する。1891年広雅書局刊本の影印本(全2冊、文海出版社「宋史資料萃編」第2輯、1968年)以外に、点校本(福建人民出版社、1985年)がある。

・『宋文鑑』

南宋・呂祖謙編。150巻。『皇朝文鑑』ともいう。孝宗の命の下に呂祖謙が編集した宋人の文学作品と文献の集成。賦・詩・詔・勅・制・誥・奏疏・表・記・序・論・題跋・墓誌・祭文等の文体ごとに分類した総集で、宋代の文史研究に役立つ。『四部叢刊』に影宋本があるが、齊治平の点校本(全3冊、中華書局、1992年、附：篇目索引・作者索引)が良い。

・『太平治蹟統類』

南宋・彭百川撰。もと40巻であったが、現行本は30巻。北宋時代の諸政・典章等について、『統資治通鑑長編』等を材料に「仁宗平王則」(巻10)「神宗任安石」(巻13)等の88項目に分ちてまとめた資料集。李心伝『建炎以来朝野雜記』に類似した内容だが、史料価値は及ばない。適園叢書(第14集)本の影印(全3冊、成文出版社、1966年)と2種の新印本(線装20冊、江蘇広陵古籍刻印社、1981年。

線装12冊、文物出版社、1992年）がある。

・『皇朝編年綱目備要』

南宋・陳均撰。30巻。『(宋)九朝編年(綱目)備要』『皇宋編年綱目備要』ともいう。北宋太祖建隆元年から欽宗靖康2年までの史実を簡潔に記した編年体の史書。巻26以後の徽宗・欽宗時代の記事がやや詳しい。静嘉堂文庫所蔵の宋本の影印複製(線装12冊、静嘉堂文庫、1936年)と、その影印(全2冊、成文出版社、1966年)がある。

・『中興兩朝聖政』

南宋の高宗・孝宗二朝について記載した編年体の史書。編著者不詳。『皇宋中興兩朝聖政』ともいう。存48巻。もと64巻だが、所々に欠落や錯誤がある他、巻30から巻45までの計16巻がすでに失われ、紹興14年(1144)から乾道2年(1166)までの記述を欠いているが、南宋初期の史料として一定の参考価値を有する。『宛委別蔵』本の影印本(全3冊、文海出版社「宋史資料萃編」第1輯、1967年)がある。

・『統編兩朝綱目備要』

16巻。編著者不詳。南宋初期の高宗・孝宗兩朝(中興兩朝)に続く、光宗・寧宗兩朝35年間の史事を記述した編年体の史書。陳均『皇朝編年綱目備要』と佚名撰『中興兩朝編年綱目』と記述年代を接し、宋代に合刊されていた可能性も指摘される。『四庫全書』本(『四庫全書珍本初集』)を単独で影印したもの(全2冊、文海出版社「宋史資料萃編」第1輯、1967年)以外に、標点本(中華書局、1995年)がある。

・『宋史全文』

36巻(子巻を含めば58巻)。編著者不詳。元初に編集されたと推察される。『宋史全文統資治通鑑』ともいう。編年体で構成された北宋南宋の史書だが、南宋度宗以後の記載は無い。北宋部分は李燾『統資治通鑑長編』、南宋の高宗・孝宗期は『中興兩朝聖政』から材料を取っており、とくに南宋の光宗・寧宗・理宗三代の記述に史料価値がある。元刻本の影印本(全5冊、文海出版社「宋史資料萃編」第2輯、1969年)がある他、『四庫全書』本による校点本(李之亮校点、全3冊、黒龍江人民出版社、2005年)もある。

・『宋季三朝政要』

南宋の理宗・度宗・恭帝三朝、及び帝昀・帝昺について記述した編年体の史書。6巻(5巻・附録1巻)。元初の作とされるが編著者不詳。南宋滅亡の過程を主に伝聞に基づいて記載したもので、誤りを含むが南宋末期史料として一定の史料価値がある。元皇慶刊本の影印本(線装2冊、『宸翰樓叢書』所収本、1914年)の他、『学津討原』『守山閣叢書』『粵雅堂叢書』にも収載されている。その他、『叢書集成初編』(中華書局、1985年)や『筆記小説大観統編』(新興書局、1962年)所収本、さらに清抄本の影印本(文海出版社「宋史資料萃編」第3輯、1981年)もある。

・『皇宋十朝綱要』

南宋後期、李燾の第七子・李璣の撰。25巻。同書の記述範囲は北宋の太祖から南宋の高宗に及び、その十朝間の朝政の大要と制度沿革・礼楽兵刑の変遷を編年体で記録した史書。流伝は少なく、清朝時代においても、抄本の存在が確認できるだけである。1927年に上海の東方学会が活字排印本(線装6冊)を刊行した。州府の廃置や進士及第の資料等、貴重な資料が少なくない。東方学会排印本の影印(文海出版社「宋史資料萃編」第1輯、1967年)がある。

・『太宗実録』

宋・銭若水等撰。宋代に編集された実録で唯一残存する実録。もと80巻であったが、いまは20巻のみ。宋代の実録の形式を知る上でも貴重な史料である。『四部叢刊』本が便利だが、旧鈔本によった刻本『宋太宗実録残本』線装2冊(中国書店、1994年)もある。

以上、すべて宋代史研究の基本史料である。なお、これら基本史籍の多くは、文海出版社から趙鉄寒主編『宋史資料萃編』全4輯(1967~81年、全94冊)として影印出版されている。

◆書籍目録

宋代の主な書籍目録には以下の6種があげられる。

王堯臣等撰『崇文総目』は、北宋官修の蔵書総目録。1041年成書。宋の蔵書施設である三館(昭文館・史館・集賢院)と秘閣を総称して崇文院という。現在の通行本は、散逸後にまとめられた2種の輯本である。その他の南宋の官撰蔵書目録には、陳騭等撰『中興館閣録』『中興館閣統録』(張富祥点校『南宋館閣録 統録』中華書局、1998年)がある。

個人蔵書目録は、晁公武撰『郡齋讀書志』(孫猛校證本、上海古籍出版社、1990年、附:書名索引・著者索引)と陳振孫撰『直齋書録解題』(上海古籍出版社、1987年、附:書名索引・著者索引)の2種がきわめて重要。これに次ぐものに尤袤撰『遂初堂書目』がある。

以上の5種の蔵書目録は、許逸民・常振国編[1987]に各々影印収録されている。また、同様に重要な書目として『文献通考経籍考』と『宋史芸文志』がある。前者の校点本についてはすでに説明した。後者には、考証を施した陳樂素[2002]がある。

◆歴史地理関連史料

つぎに、宋代の歴史地理関連史料について解説する。地理総志・地方志・都城史料・中外交通貿易史料に大別し、まず、主要な地理総志5種から紹介しよう。

【地理総志】

樂史撰の『太平寰宇記』(200巻、文海出版社「宋代地理書四種」1963年)は、北宋初年の州県の沿革等をまとめたもので、唐五代の地理資料として役立つ他、主客戸の数値記載も貴重である。宮内庁書陵部所蔵の宋本を影印した『宋本太平寰宇記』(中華書局、2000年)があるが、残欠が甚だしい。

王存等撰の『元豊九域志』（中華書局「中国古代地理総志叢刊」1984年、附：地名索引）は、北宋元豊年間の行政区を4京23路を中心に編集したもの。

歐陽忞撰の『輿地広記』全38巻（文海出版社「宋代地理書四種」1962年頃）は、北宋末年に編集され、行政沿革に関する記述が詳しい。点校本には『叢書集成初編』本と『国学基本叢書』本がある。

南宋の王象之撰『輿地紀勝』は、もと200巻だが、現行本にはかなりの残欠が見られる。行政沿革に加えて各地の山川景物や碑刻詩詠等の記載に特色がある。中華書局（全8冊、附：地名索引、「中国古代地理総志叢刊」1992年）と文海出版社（「宋代地理書四種」全2冊、1962年）から、2種の清刊本の影印が出版されている。

南宋末期の1239年に完成した祝穆等撰『方輿勝覽』70巻は、建置沿革の記述よりも、むしろ「事要」として記載される風俗・形勝や題詠・四六等項目内容の詳述に特色がある。南宋咸淳年間の刻本を影印した『（宋本）方輿勝覽』（上海古籍出版社、1991年、附：人名・引書・地名三種索引）等の諸本が出ている。

なお、近年、宋元時代の地理総志に各々校訂を施した『宋元地理志叢刊』（四川大学出版社）が刊行され始め、すでに『輿地広記』（2冊、2003年）と元代の地理総志『大元混一方輿勝覽』（2冊、2003年）が出版されている。以下、『太平寰宇記』『元豊九域志』『輿地紀勝』『方輿勝覽』と元『大元大一統志』が刊行予定である。

【地方志】

宋代には数百種以上の地方志が編纂されたとされるが、現存するものは数十種に止まり、東南地域（とくに現在の江蘇・浙江二省）の地方志が大半を占める。利用する際には、その地域性に十分留意しなくてはならない。現存する宋元時代の地方志の大半は『宋元地方志叢書』全12冊、『宋元地方志叢書統編』全2冊（大化書局、1978年。統編、1990年）や『宋元方志叢刊』全8冊（中華書局、1990年）として影印刊行された。これら地方志所載の人物伝記資料には朱士嘉編〔1963〕や沈治宏・王蓉貴編撰〔1997〕〔2002〕がある。

また、地方志の大半は、従来、刊本もしくは鈔本の影印という形で刊行されていたが、『吳郡志』（「江蘇地方文獻叢書」江蘇古籍出版社、1986年）や福州市地方志編纂委員会整理『淳熙三山志』（海風出版社、2000年）等のように、今後、しだいに点校本として刊行されるか、さらにデジタル化されることが見込まれ、その作業もすでに始まっている。

【都城史史料】

北宋の国都であった東京開封府（河南省開封市）と南宋の行在として知られる臨安府（浙江省杭州市）については、ややまとまった史料が残る。

南宋初の1147年、孟元老は古都開封を回顧した『東京夢華録』10巻を完成させた。この書は北宋末年の東京開封府のありさまと行事習慣を事細かに描写した回想録で、後の都城史関連文献、とくに都市繁盛記の類に多大の影響を及ぼした。同書の最良のテキストは静嘉堂文庫所蔵の元刊本で、1941年に影印され、入矢義高・梅原郁訳注

〔1983〕にもその写真版が附載されている。中国国内でも早くから注目され、上海古典文学出版社編輯部編〔1956〕等、たびたび各種の点校本が刊行されているが、同書に本格的に取り組んだものとしては鄧之誠注〔1959〕が最初である。宋都開封に関する後世の史料文献には、明・李濂撰『汴京遺蹟志』（周宝珠・程民生点校「中国古代都城資料選刊」中華書局、1999年、附：地名索引）と清・周城撰『宋東京考』（単遠慕点校「中国古代都城資料選刊」中華書局、1988年、附：地名索引）がある。

南宋臨安府に関しては4著が残る。すなわち灌圃耐得翁撰『都城紀勝』1巻（1235年成書）、西湖老人撰『西湖老人繁勝録』1巻（1253年前後成書）、吳自牧撰『夢梁録』20巻（1275年前後成書）、周密撰『武林旧事』10巻（1280年前後成書）である。いずれも前掲の上海古典文学出版社編輯部編〔1956〕本に校点をほどこしたものが収録されている。『夢梁録』については梅原郁訳注〔2000〕がある。また、この5著全体の語彙索引には梅原郁編〔1979〕がある。

【中外交通貿易史料】

『嶺外代答』『諸蕃志』等の代表的な宋代南海関連史料は、中華書局「中外交通史籍叢刊」（1961年～）に収録されている。零細な史料文献も、その大部分は張星烺編注〔2003（1930）〕をはじめ、北京大学南亞研究所編〔1994〕や劉佩等編〔1995〕等の史料集成の類にまとめられている。五代・宋代両時期の日中関係史料は、汪向榮・夏応元編〔1984〕が利用できる。

宋と高麗間の交通交流史の基本史料に、北宋末年に書かれた徐兢撰『宣和奉使高麗図経』40巻があり、記述は28門に分かれるが、海道門が最も詳しい。南宋乾道3年（1167）刻本の影印本（線装3冊、「善本叢書」台湾故宫博物院、1974年）がある他、『国学基本叢書』『叢書集成初編』等所収の点校本があり、朴尚得訳〔1995〕もある。関連資料集に金渭頭編著〔1983〕、張東翼編著〔2000〕、楊渭生等編著〔1999-2002〕がある。

・『嶺外代答』

南宋・周去非撰。10巻。広南各地の物産や風俗を記した范成大『桂海虞衡志』等を参考に、嶺南での見聞を中心に整理編集した嶺南・南海に関する資料集。地理・辺帥・外国（上・下）・風土・法制・財計・器用・服用・食用・香・楽器・宝貨・金石・花木・禽獣・虫魚・古蹟・蛮俗・志異の計20門に分け、総計294条の記事をまとめたもの。嶺南地域の情報が多いが、とくに外国門に記載された南海・西アジア関連記事は貴重である。ただし、伝聞記事が多い点に留意する必要がある。屠友祥校注〔1996〕の他に、楊武泉校注〔1999〕もある。

・『諸蕃志』

南宋・趙汝适撰。2巻。巻上は「志国」で、五十余国の南海・西アジア諸国の記載がある。巻下の「志物」には、乳香・吉貝等、南海等諸国の珍奇な物産について列記されている。馮承鈞校注〔1940〕の他に、楊博文校訳〔1996〕と韓振華注補〔2000〕がある。前掲の藤善真澄〔1991〕を参照すべきである。

◆筆記史料

筆記は、古今もしくは当代の文史の事柄を、自由な形式で綴った随筆雑録で、正史実録の類には見えない記載も多く、さまざまな観点から見て、社会史や文化史の格好の資料来源である。かつては『宋元人説部叢書』精裝2冊(中文出版社、1980年影印出版。原名『宋元人説部書』、1919~20年、上海商務印書館排印本)や『筆記小説大観』(6冊、新興書局、1960年。35冊、江蘇広陵古籍刻印社、1983~84年)等が用いられることが多かった。だが、近年、単刊本や新編の筆記叢書が整理校訂を経て何種類も出版され、以前にくらべて格段に利用し易くなった。中華書局『唐宋史料筆記叢刊』はその代表例で、1979年以後、陸游『老学庵筆記』や司馬光『涑水記聞』等、すでに数十種類の筆記が刊行され、1998年にも40種31冊が復刊された。その前身は「宋代史料筆記叢刊」で、王明清『揮塵録』等が出版されていた。一方の上海古籍出版社『宋元筆記叢書』は、1981年以後、曾敏行『独醒雜志』や龔明之『中吳紀聞』等、20種近くの筆記が校訂出版されている。『全宋筆記』第一編、全10冊(大象出版社、2003年)もそうした新編の筆記叢書の一つである。五代史史料の孫光憲『北夢瑣言』張齊賢『洛陽搢紳旧聞記』や錢易『南部新書』をはじめ、五代・宋代の筆記49種について、点校を施したものである。同叢書の全体構想では、近5、6年の間に全10編を刊行し、約500種類の宋人筆記を整理出版するという。

以下、若干の宋人筆記と、宋代や後世に分類編纂された数種の筆記集成および新編の筆記叢書についてごく簡単に述べておく。

まず、上記の筆記関連の叢書叢刊には収録されていないが、史料価値の高い筆記として以下の数点を挙げる。洪邁撰『夷堅志』全4冊(何卓点校、中華書局、1981年、附:人名索引)は志怪小説の代表格で社会史の重要資料集。吳曾撰『能改齋漫録』(上・下冊、点校者不詳、上海古籍出版社、1960年、79年重印)は名物制度や文学関係資料が豊富。洪邁撰『容齋隨筆』上・下冊(徐德麟点校、上海古籍出版社、1978年)には宋代の典章制度や故事掌故の記事が満載されている。沈括撰『夢溪筆談校證』上・下冊(胡道静校注、上海出版公司、1956年。中華書局上海編輯所、1962年。上海古籍出版社、1987年再版)は、正確な記述と自然科学資料で名高い沈括『夢溪筆談』に胡道静が校証を加えたもの。

江少虞撰『宋朝事實類苑』(『皇朝類苑』)は、南宋初にまとめられた筆記史料集成。足本は78巻本で、全体を24門に分かつ。すでに佚亡した書籍を含む50種以上の材料から採録した記事で構成され、北宋史理解に役立つ。日本元和7年(1621)の木活字本の影印本2種(『皇朝類苑』中文出版社、1911年董康誦芬室叢刊影印本、1977年。4冊、文海出版社、1981年)の他、点校本(『宋朝事實類苑』上海古籍出版社、1981年)もある。

清・潘永因編『宋稗類鈔』は、清初に宋人の伝聞逸事を搜集し整理編輯した筆記集。康熙8年(1669)刊本の影印本(全8冊、広文書局、1967年)の他、点校本(2冊、劉卓英点校、書目文献出版社、1985年)もある。類似したものに丁儀靖輯『宋人軼

事彙編』20巻があり、宋人600余人の材料が集められている。商務印書館本(1935年初版、1958年重版)と、それを継承した中華書局本(3冊本、1981年。2冊本、2003年)があり、ともに簡単な人名索引を附す。なお、上記の集成本には往々にして不用意な節略が見られ、極力、原本原文にあたって字句を点検する必要がある。

五代・宋代関連の新編筆記叢書には、周光培編『宋代筆記小説』全24冊(『歴代筆記小説集成』河北教育出版社、1995年、影印本)、李時人編校・何満子審定『全唐五代小説』全5冊(陝西人民出版社、1998年、点校本、附:作者・篇目索引)、上海古籍出版社編『唐五代筆記小説大観』全2冊(『歴代筆記小説大観』上海古籍出版社、2000年、点校本)、上海古籍出版社編『宋元筆記小説大観』全6冊(『歴代筆記小説大観』上海古籍出版社、2001年、点校本)等があるが、各々の詳目は各叢書で確かめられたい。

◆類書

類書とは、天文から官制・物産・文史・歳時・風俗等々、社会の諸方面の事象を分類集録した資料集成のことで、一種の百科全書である。通常、瑣末で断片的な記載が多いが、礼制・官制・軍制等を系統立てて論じたものもあり、重要な史料来源となり得る場合も少なくない。宋人の作とされる類書だけで30種類近い。ここでは『四庫全書』本(『四庫類書叢刊』、上海古籍出版社)を除外し、利用価値がやや高い宋人類書十数種類を列記するに止める。なお『冊府元龜』『玉海』についてはすでに述べた。

- ・陳元靚撰『事林廣記』(『和刻本類書集成』第1輯、汲古書院、1976年。中華書局、元刻本・和刻本影印、1999年)
- ・高承撰、明・李果訂『事物紀原』(『和刻本類書集成』第2輯、汲古書院、1976年。金円・許沛藻点校、中華書局、点校本、1989年)
- ・葉庭珪撰『海録碎事』(上海辭書出版社、明刻本影印、附:詞目索引、1989年。李之亮校点、上・下冊、中華書局、点校本、2002年)
- ・吳淑撰注『事類賦注』(冀勤・王秀梅・馬蓉校点、中華書局、点校本、附:引書索引、1989年。北京図書館出版社「北京図書館古籍珍本叢刊」宋刻本影印、1987~98年)
- ・孫逢吉撰『職官分紀』(中華書局「四庫全書」本影印、1988年。「四庫全書」本のみ)
- ・不著撰人『錦繡萬花谷』全4冊(新興書局、明刻本影印、附:索引、1974年。上海辭書出版社、明刻本影印、附:引書索引、1992年。北京図書館出版社「北京図書館古籍珍本叢刊」、宋刻本影印1987~98年)
- ・祝穆撰『古今事文類聚』附:元・富大用撰『古今事文類聚』新集・外集、元・祝淵撰『古今事文類聚』遺集(中文出版社、明刻本影印、全4冊、1982年。書目文献出版社、全3冊、1991年)
- ・潘自牧撰『記纂淵海』(新興書局、明刻本影印、全10冊、附:索引、1972年。中華書局、宋刻本影印、全4冊、1988年。北京図書館出版社「北京図書館古籍珍

本叢刊」, 宋刻本影印, 1987~98年)

- ・章如愚撰『群書(山堂)考索』(新興書局, 明刻本影印, 全8冊, 附:索引, 1969年。上海古籍出版社, 「四庫全書」本影印, 全3冊, 1992年。その他, 影印本2種)
- ・謝維新編『古今合璧事類備要』全4冊(新興書局, 明刻本影印, 附:索引, 1969年)
- ・林駟撰『(新箋決科)古今源流至論』附:宋・黃履翁撰『古今源流至論』別集(新興書局, 明刻本影印, 全2冊, 附:索引, 1970年)
- ・王応麟撰『小学紺珠』(汲古書院「和刻本類書集成」第2輯, 1976年。中華書局, 明刻本影印, 附:目録, 1987年)
- ・陳元靚撰『歲時広記』(新興書局, 清刻本影印, 上・下冊, 1977年)

◆史料集・史料集成

宋代の「農民起義」に関しては、蘇金源・李春圃編 [1963] と何竹淇編 [1976] の基本史料集がある他、訳注を施したものに谷川道雄・森正夫編 [1979] がある。

史学史・民族(蔵族)関連の史料集には、それぞれ楊翼驥編 [1994] と陳乃文・陳燮章輯 [1989-90] がある。

拓本・石刻史料集成の代表として、北京図書館金石組編 [1990] と国家図書館善本金石組編 [2003a] の2作を挙げておこう。前者は、拓碑図版を集成したもの。後者は、地方志を含む各種の金石文献を著録した文献集成から、宋代の石刻文献資料3000余篇を集成した労作。巻頭に詳細な目録、巻後に石刻文献資料の筆画索引を附載している。なお、北京図書館は、1998年に中国国家図書館と改称している。

◆宋人文集文献、その他

まず、本章の第2節<3>で紹介した吉田寅・棚田直彦編 [1972] や劉琳・沈治宏編著 [1995] の諸編を参照することを勧めたい。曾棗莊・劉琳主編 [1988-] 『全宋文』の刊行が、現時点では北宋後期で停頓していることは既述した通り。次に、目録・索引類が備わった『四庫全書』『四庫全書存目叢書』『統修四庫全書』『四部叢刊』『叢書集成初編』『叢書集成統編』『叢書集成三編』等の大型叢書で、宋人の文集の有無と書名・所在を確認することも必要な作業である。加えて、上海図書館編 [1982]、陽海清編撰 [1999]、施廷鏞編撰 [2003] 等の叢書子目調査の工具書も必要となる。

宋人文集の個別の整理出版状況を知ることもちろん重要だが、その実情理解は極めて難しい。近20年程の間に出版された新編新刊の点校本・標点本に限定しても、整理出版されたことが確認できる宋人文集は60数種に上る。ここにその全資料を挙げ得ないことは残念だが、概して、関連する資料や年譜等が平行して同時期に出版されており、また、文学・思想(とくに理学)領域の重要人物については、校訂整理されたテキストや資料集が出版されていることが多い。今後とも整理出版状況に留意するほかない。

上記以外、五代・宋代の文学作品や通俗文学分野の総集・集成は、今後、社会史・

文化史分野を中心に一層幅広い活用が望まれるが、限りある紙幅の中では割愛せざるを得ない。宋代史研究に資すべき史料や参考図書は、他にもまだ数多く存在する。まず、上記の諸書を通覧し、徐々に見聞を拡充していくことが肝要である。中国内外で史料図書の新たな整理校勘と出版が相次いでいるので、その動向にも十分留意すべきである。
(木田知生)

第6章

遼・西夏

森安孝夫

1 研究の視点

中国とは漢人世界であり、中国史はあくまで漢人を中心として展開してきたとする立場（これを本章では中華主義と呼ぶ）の人々にとって、南の宋朝を正嫡、北の遼・金二朝を継子扱いする南北正閏論は、かつてまことに居心地のよいものであった。その状況は、ウィットフォーゲルが伝統的中国王朝に対し、遼・金・元・清四朝を「征服王朝」なる概念でまとめて捉える見方（Wittfogel and Feng [1949]）を発表して以来半世紀以上が経過した今もなお、本質的に変わっていない。現今の高校世界史教科書における遼・金の扱いはそれを如実に反映している。このような中華主義の人々（そこには大多数の一般知識人も含まれる）には、遼・金はしょせん中国の一部を支配した周辺国家にすぎないし、中国全土を覆った元・清朝でさえその支配者であったモンゴル人や満洲人は結局は「文化水準の高い漢人に同化」したと、かたくなに信じられている。ましてや西夏史が正史に入っていないことなど、気付いてさえいないのである。しかし、漢文以外にも史料の豊富な元朝・清朝の歴史がますます明らかになりつつある現在、もはや「同化」とか「漢化」という中華主義者に便利な術語で元・清の実態を糊塗することはできない。それゆえ同じ征服王朝の範疇に入る遼・金・西夏についても、状況は同様であったろうと思われる。

藤枝晃 [1951] はウィットフォーゲル説が出てまもない頃に、早くも、「中国の歴史の大きな流れが五代の戦乱の間に南北の二派に分かれ、それが再び合流して元朝の流れとなった」といい、さらに西夏存在にも注目して、「だから、南北対立の時代というより、三国鼎立の時代といった方が、むしろ当を得ている」と述べていた。しかも「南では五代各朝・宋朝の下で中国の歴史が近世化したのと同時に、北では遼金の治下において近世化した」とも述べた。21世紀に入った今もなお漢人による「正統」な中国史が成り立つと考えている人の多い現状に鑑みる時、その洞察は際だって

いる。しかしながら、遼・金・元の特徴として藤枝が「その国家を構成する民族が単一でなかったこと」を挙げるのは納得できない。なぜなら、その言い方の背景には、先行する隋・唐や五代諸王朝が単一民族、即ち漢人の王朝であるという前提があるからである。五代のうちの三代が沙陀突厥の王朝であったことは、今や否定しようがない。またウィットフォーゲルが典型的な漢民族王朝の範疇に入れた隋・唐も、杉山正明らの言葉を借りれば胡族の拓跋（鮮卑系）王朝である。

ウィットフォーゲルの征服王朝論はあくまで中国史の観点に立つもので当初から相当に欠陥があったが、文化変容理論に立脚するそのアイデアの斬新さと用語の見事さゆえに、日本では独自の発展を遂げた。特に田村實造は中国史と北アジア史を合体させる立場から、征服王朝を漢人と北方遊牧民族との交界地帯から出現したものとみなし、北アジア歴史世界に形成された国家を、①遊牧国家型と②征服王朝型とに大別した。また護雅夫は、草原における都市の出現に着目し、ウイグルを遼の先駆者とみなした。それらを受けた森安孝夫 [1982] は遼の先駆者としてウイグルのみならず渤海も考慮すべきこと、そして同時に征服王朝の概念をさらに西方にまで拡大すべきことを指摘した。この段階ではまだ概説に過ぎなかったが、森安 [2002] では、田村・護らによって北アジア史の観点から再構成されてきた「征服王朝」の概念をさらに拡大し、かつこのような北アジア史的征服王朝論では中国史の流れを断絶してしまうという島田正郎らの批判も乗り越え、ユーラシア史全体の長期波動の中に征服王朝を位置付けた。即ちユーラシアの「北」に当たる中央ユーラシアで活躍した遊牧騎馬民族が、有史以来ユーラシアの「南」で発展してきた四大農耕文明圏を支配するに至るシステムの完成を征服王朝の成立と捉え、ユーラシア史上の一大画期を10世紀前後と見なし、そこに遼・西夏を組み込む一方、ユーラシア東部に生じた安史の乱を「早すぎた征服王朝」とみる見方を合わせて発表したのである。別の言い方をすれば、中国を一国史の枠からはずし、ユーラシア史の文脈で考え直そうという提案であり、当然ながら、中国史上のいわゆる唐宋変革期もこの一大画期と合致するのである。学界には唐宋変革以降を中世とするか近世とするかで果てしない議論があるが、その問題もユーラシア史全体の中で考えるべきである。また藤枝説では五代を中国史の本流に置いているが、我々の立場からは、「中国の歴史の大きな流れが唐で中央ユーラシア史の流れと合流し、安史の乱から黄巢の乱の戦乱を経て五代・遼と五代・十国の南北二派に分れ、それがそれぞれ西夏・金と北宋・南宋に受け継がれ、再び合流して元朝の流れとなった」と見るのである。つまり五代史の扱いがまったく違うのである。

これまでの中国史の叙述は、唐・五代十国から北宋・南宋に続く南方の文化の流れに比して、北方の流れが軽視されてきた。しかし、次に続く元が中央ユーラシア起源の征服王朝であることに鑑みれば、唐→五代・遼→金→元と続く北方の流れが重要であることが理解できよう。北方遊牧民の系譜につながる遼独自のものについては、以前からも明らかにされてきているが、近年は、唐・五代で変容してきたものの遼への継受と遼での変容、遼宋交流を通じた相互の文化・制度の交流が解明されてきている。

そのことも、本章では紹介したい。初学者にとっては遼が契丹人の王朝かそれとも漢人王朝かという基本的なことが分かりにくいのが、答えは両方なのである。

これから中国史を志す学徒には、中国とは漢字・漢語を媒介に形成された歴史世界ではあっても、決して漢人中心の世界ではなかったことに思いを致してもらいたい。安史の乱の担い手であったトルコ人・ソグド人・契丹人、あるいは突厥系ソグド人などを「よそ者」とみなしている限り、唐代史研究の大幅な発展は期待できない。同様に、西夏を「よそ者」扱いし、遼・金を漢人正統王朝からはずれた異端者とみなす中華主義の立場に固執する限り、同時代史の研究にも光明は見えてこないであろう。契丹史・西夏史はまぎれもなく中国史の重要な一部であり、それ抜きに中国史などありえないのである。我が国には明治以来の北～中央アジア史（かつての満蒙史・塞外史・西域史）の学問的伝統が厳然とあるために、必ずしも中華主義の立場から遼・金・元史や西夏史を捉えてきたわけではない。いな、むしろ征服者側の動向ばかりに注目し、被支配者で人口も多い農耕漢人の方の研究をないがしろにしてきたために、結果的に中国史概説では記述される量が他の時代に比べて少なくなったともいえよう。こうした中、古松崇志 [2003] は新時代の到来を予感させる注目すべき論考である。

さて、あらかじめお断りしておくが、本章は遼については森安孝夫と遠藤和男・宅見有子、西夏については森安と佐藤貴保との共著である。まず初めに先行する『東洋史料集成』（平凡社）、『中国史学入門』（平安文庫）、『アジア歴史事典』（平凡社）、『アジア歴史研究入門』（同朋舎出版）、『中国史研究入門（増補版）』（山川出版社）の遼・西夏に関する個所の再検討と、遠藤和男編 [2000] の目録、並びに荒川慎太郎・佐藤貴保編 [2003] の目録とに著録された全文のチェックを行い、その後、討議を重ねて本章で取り上げるべきものを選び出した。当初の原稿は各論著の特徴などを記述していたため本章の約3倍あったが、紙数制限により大幅に削除せざるをえなかった。その結果、遼朝については研究・文献史料・考古資料いずれも近25年の新動向を中心に、しかも代表的なものを短いコメントで紹介するにとどまることとなった。それゆえ、上述した先行の文献解題や網羅的文献目録をチェックすることは決して無駄ではない。さらに新出の劉浦江編 [2003] も役に立とう。一方、西夏についてはそもそも本章が初めての本格的なものになるので、かなり古い論著も含めて取り上げている。

耶律阿保機によって10世紀初頭に創設された国家は契丹語では一貫してカラキタイ（漢字音写で哈喇契丹）と呼ばれ、漢語では大契丹・大遼を交互に国号としたが、本章では慣例に従い遼といし遼朝と表記する。契丹族はモンゴル系である。阿保機の契丹君主としての即位は907年であるが、中国史では神冊と建元した916年をもって遼の建国とみなす。第9代天祚帝の1125年に女真族の金朝に滅ぼされたが、王族の耶律大石が西方に逃れて西遼を建国し、それがチンギス汗の勃興まで存続したことを忘れてはならない。遼は926年には渤海を滅ぼしてこれを併合し、続く936年には燕雲十六州を領有した。後者は五代後唐の叛将・石敬瑭を助けて後晋を建国させた見返

りとして獲得したものであるが、この時から遼は中原王朝の風上に立つことになった。さらに1004年には宋との間に有名な澶淵の盟を締結し、よりいっそう「征服王朝」としての安定度を増すことになる。一方、西夏は10世紀後半から13世紀前半にかけて、チベット系遊牧民族タングートによって現在の中国寧夏回族自治区や甘肅省西部・内蒙古自治区西部にまたがる地域に建てられた政権である。西夏の始まりをいつにするかは諸説あるが、ここではタングート平夏部の李繼遷が陝西北部で北宋王朝に反旗を翻して独立した982年を起点とする。西夏は繼遷の子徳明と孫の元昊の代に勢力を西のかた寧夏・甘肅地方へ広げ、元昊は1038年に大夏皇帝を自称して、その後1227年にモンゴルによって滅ぼされるまで独立を保ち続けた。従って正式の自称は大夏であるが、本章では西夏という通称を使用する。

2 研究の展開

<1> 遼 朝

戦前は植民地政策との関係で現地調査等もふまえた研究が行われ、歴史地理や史料の校勘等の分野で大きな成果があった。戦後も島田正郎や田村實造等が広範な分野で活躍したが、その後の研究は史料的制約もあり、細々としたものである。ところが1980年代になると考古学的調査が盛んに行われるようになり、その成果を含む史料集成・発掘報告書が数多く公刊されるようになった。したがって今や遼代史研究はそうした史資料をもとに先学の業績を補訂する時期にきているといえよう。そこで本章ではそうした史資料をなるべく多く紹介する。なお、いわゆるカラキタイ（西遼）については近年日本国内に研究がないので、言及しない。また、契丹文字史料については、一部の意味・音韻がわかってきている程度であり、その範囲でしか使えない。契丹文字解読に挑むなら、モンゴル語・トルコ語・女真文字・満洲語と言語学の知識もいる。史資料を読むには中国語が、カラキタイについてはペルシア語も必要である。論文を読むには中国語・英語・ロシア語・ドイツ語・フランス語などが必要であるが、学部段階ではまず中国語を習得すべきである。

本章の初校正も終わった後に、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」班編『遠文化・慶陵一帯調査報告書2005』（2005年3月）が出版された。その中の杉山正明の文章は旅行記の体裁を取りながら今後の遼研究全体の方向について示唆に富むものであり、ほかにも考古・美術に関する数点の興味深い論文を含んでいる。入手は難しだろうが、是非とも参照されたい。

◆概説・専著

初学者がまず読むべきものに島田正郎 [1993] がある。しかし全分野を網羅するも

のではなく、そこに遼代史研究のたち遅れがある。専著には以下のものがある。島田 [1952] は社会体制、家族法、経済等、島田 [1979] は法制と礼制、経済と文化をとりあげる。田村實造 [1964] は建国の前後、国際関係、経済、都市、社会生活を、田村 [1985] は文化、仏教、陶磁、慶陵の壁画などを述べており、いずれも基本書である。楊若薇 [1991] は幹魯朶制度、官制、行政制度、軍事制度、科挙等を分析し、随所で『遼史』百官志の訂正を行う。幹魯朶（オールドまたはオルグ）とは遊牧国家の君長の居所・宮殿の意味で、遼では皇帝の私領・私民をも指す。

◆国家・社会体制、経済

初学者にとって分かりにくいのは、契丹族に耶律氏と蕭氏の2姓しかないことと、この両姓による支配者集団の構造、また南北二面官の相互関係であろう。これには愛宕松男 [1959]、島田正郎 [1952][1978][1979]、田村實造 [1964] などの先駆的で大部な研究があったが、まだまだ実体は不明であった。しかし近年、その実体に迫る研究が出てきはじめた。とりわけ、耶律・蕭の2姓が遼朝において人為的・制度的な集団として形成されたことを武田和哉 [1994][2005] が明らかにし、それによって愛宕のフラトリー・トーテミズム説は過去のものとなった。

遼の二重官制（契丹族固有の制度による北面官制と中華王朝の制度による南面官制）については島田正郎 [1978] が基本書であるが、専ら『遼史』に拠っているので、新出石刻史料などによる深化が期待される。武田和哉 [2001] は枢密院の時代的变化を追い、島田 [1978] の修正をせまるものである。また他の官職についても時代的变化を見る必要を説いている。

遼の地方統治のあり方を藩鎮・幹魯朶を中心に検討している高井康典の事は注目に値する。幹魯朶には研究の蓄積が少なかったが、高井 [1999] は各幹魯朶の成立過程とその所在地について検討し、その後、高井 [2002a] では島田正郎 [1952]、田村實造 [1964]、楊若薇 [1991] 等の先行研究に対し、幹魯朶所属州県は幹魯朶・国家・藩鎮の三者から制御を受ける存在であるとした。藩鎮研究において遼を宋以外のもう一つの帰着点とし、遊牧的要素と農耕的要素を総合して遼代史を見る必要を説く。また高井 [2002b] は石刻史料を使って官制のうち武階を考究する。徳永洋介 [2003] は遼が五代でどのように変容した中国法を取り入れたかをさぐる。僧官については藤原崇人 [2003] が出た。

経済関係では史料が少ないために研究蓄積が少なく、松田光次 [1975][1976]、今井秀周 [1992] の論考があるくらいであるが、いずれも重要である。また松田 [1979] は遼の科挙についても論及している。

ところで遼での漢人の位置づけはどのようであったのか。初めは農耕・手工業のための俘虜であったが、後に他地域への進攻や内政のための参謀となり、また農業生産力を向上させたことで、政治・経済上に重要な位置を占めるものとなっていった。松田光次 [1982] はその過程を追い、さらに寺地遼 [1988] は今後の研究の進むべき方向をも示している。

◆文化・宗教

まとまった先行研究として、遼固有の宗教に関しては島田正郎 [1979] が、仏教に関しては野上俊静 [1953] がある。研究の手薄な分野であったが、その後、遠藤和男 [1990]、今井秀周 [2000] が祭祀の分析を通して遼朝の性格を探った。また近年、房山石経の発掘と整理が進み、加えて応県木塔等から契丹蔵の零巻を含む多数の仏典が発見されるに至って、仏典研究が盛んに行われるようになってきている。笠沙雅章 [2000][2003] は『仏祖統記』や『仏祖歴代通載』などの書に見られない遼代の仏教学を明らかにした。唐代の長安仏教を最もよく継承し、東アジア諸国に伝えたものとして遼代仏教を位置づけ、宋元文化を捉える際には遼一（北宋一）金一元という北の流れを考慮する必要を説く。また、氣賀澤保規編 [1996] に収める3編の論考では、谷井俊仁が政治史の視点から遼代仏教を捉え、中純夫と藤本幸夫は「契丹蔵経」と房山石経遼金刻経との親近性が強いことをいう。

◆考古・美術

かつては慶陵及びその壁画の研究と陶磁器の研究、いくつかの城郭の研究くらいしかなかったが、近年の発掘の進展によって墓葬・城郭・絵画・器物といった資料がふえ、考古・美術は一つの重要な研究分野に発展した。

高橋学而 [1987] は州県城・中京・上京のプランを分析し、聖宗朝に州県制の整備が行われたと指摘する。高橋 [1997] は遼では城坊制が維持されたとし、また漢城のない南京（現在の北京）を遼における都市建設の転換点と位置づける。モンゴル時代史研究に考古学的アプローチを行っている白石典之は、遼代史への貢献も大きい。白石 [1994][2001] 5~37頁（[2002] 15~55頁で増補）では、遼のモンゴル高原進出の様子、モンゴル諸部族の動静、チンギスカン（嶺北）長城が実は遼の長城であること等を明らかにした。白石 [2002] 142~52頁では唐から金（前半）の建築尺1尺が29.6cm、1里=1800尺であったとする。

『文物』1996-1~2の「耶律羽之特集」は、旧渤海領に置かれた属国である東丹国の最高実力者であった耶律羽之の墓の発掘について扱う。遼代初期に相当するこの墓の方形の墓室、絵画、豊富な副葬品（金銀銅鉄器・陶磁器・織物など）が唐・五代の影響を受けていることが確認された。また、墓誌銘により羽之の家系は太祖勃興以前からの名族であったこと、東丹国の官制が『遼史』百官志に見るようなものでなく、渤海国のものを沿用して左右相と左右平章事の四相であったことがわかった。武田和哉 [2003] は二つの哀冊から政争の状況を検討し、道宗朝に血縁・血族をこえた「党」が発生したとする。松木民雄 [2001][2003] は仏寺・仏塔の沿革と現状を述べる。また今野春樹 [2003] は契丹墓の時代区分をし、総合的研究をめざす。

美術史の分野では小川裕充・弓場紀知編 [1998] が総まとめをしている。遼の絵画は独自に盛行し、一方、遼の陶磁は宋の模倣の上に立つという。小川は遼代絵画を3期に時期区分した。彫刻、陶磁器、金工、ガラス器、仏寺・仏塔、陵墓、陳国公主墓（未盗掘であり科学的調査が行われたことで価値が高い）については、長岡龍作、弓

場紀知, 中野徹, 真道洋子, 田中淡, N. S. スタインハルトがそれぞれ論及する。幅広い分野をカバーしており, 必読の書である。

◆対外関係

『日野開三郎東洋史学論集』には遼関係の論文が含まれるが, 特に次の2巻を取りあげる。日野開三郎 [1984] は貿易や経済に関する論文を集め, 五代・北宋史の中で遼にふれ, 遼の財政と歳幣や銀の需給, 絹の需給との関わりを述べる。また歳贈の銀は貿易によって大半が宋に回収されたことを指摘する。日野 [1990] は渤海国滅亡後の満洲の主人公として, 渤海人・兀惹部と女真人の複雑な交代過程を扱う。その他にも, 畑地正憲 [1974] は榷場貿易が北宋と遼との永続的和平の紐帯となったとし, Shiba (斯波義信) [1983] は8~13世紀を中世の商業革命の時代と捉え, 遼は初めから貿易に依存した国家だったとする。代田貴文 [1992] は零細な西方・東方史料を駆使して『遼史』記載の西方の地名を比定した。

遼では北宋銭が流通していた。宋との榷場貿易で遼は恒常的に赤字であったが, 赤字は歳贈銀により補填され, 密貿易で遼に流入した銅銭の北宋への還流が弱まったのである。また井上正夫 [1996] は遼銭が市場の信用を得られず, 遼が北宋の太平通宝を国家的に偽造して流通に紛れ込ませたという。

これら対外交渉の拠点である遼の五京の機能・性格はそれぞれどのようなものであったか, 河上洋 [1993] は田村實造 [1964] より詳しく考察した。そして遼の五京は, 契丹族の権力基盤である北方の上京を確保しつつ, 南方に勢力を広げるといった地理的・政治的環境から設けられたことを指摘する。渤海のものとは外見は異なっても, 機能は似ているとする。松田光次 [1986] は婦明(婦服)という遼宋間の特殊事例について述べた。また契丹側の立場から遼宋国境問題に切り込んだ研究に毛利英介 [2004] があり, 遼末の金との関係を扱ったものに外山軍治 [1964] がある。

〈2〉西 夏

西夏は, 隣国の北宋や遼・金に比べて200年以上という比較的長期にわたり存続し, 北宋には多額の貢ぎ物(歳幣)を送らせるほどの強勢をみせたが, 他の中華王朝のような正史が編纂されなかったこともあって, かなり不当な扱いを受けてきた。20世紀初頭, ロシアのコズロフ探検隊, イギリスのスタイン探検隊によって内蒙古のカラホト遺跡から西夏時代の文献が大量に発見され, 注目を浴びたとはいえ, 当初は西夏語が未解読であったため, 宋・遼・金の漢語史料に残る断片的な記述に拠った対外関係史, 東西交通史, 西夏成立期の研究が先行して行われた。20世紀後半に西夏語の解読が進展すると, 西夏側の文献を用いた仏教史研究, 文書・法典研究が行われるようになる。さらに近年, 出土文献の写真版が出版され, 研究環境は大きく変わりつつある。

未解読の西夏語文献は膨大に残され, 新たな考古資料も続々と発見されており, 今

後の西夏学が従来の敦煌トゥルファン学に劣らぬ隆盛をみる可能性は小さくない。現在の西夏史研究の主流は中国とロシアにあるため, これから西夏史をめざす学生は中国語・ロシア語を習得する必要がある。

◆概 説

日本語では西田龍雄 [1997] の第3部第1章が必読である。西田は西夏語研究で大きな業績を挙げた言語学者である。西夏・タングート族の興亡を簡潔にまとめ, 西夏文字や主要な西夏語文献をも概説する。中嶋敏 [1936] は歴代皇帝の事績と文化政策の変遷を考察。前半期には政権担当者によって, タングート在来の仏教文化か中国の儒教文化かいずれかを重視する政策が選択され, 後半期には両文化を共に重視する政策を推進したと説く。各皇帝の事績をまとめており, 政治史の概説としても読むことができる。より詳細な通史を叙述したものとしては, Кычанов [1968] と呉天墀 [1983] が重要。共に宋・遼・金の史料を基本史料に据え, タングート族の勃興から西夏滅亡までの政治・経済・官制・社会・文化史をまとめる。清朝考証学者の文献をあたかも原史料のごとく無批判に引用して論を進める難点もあるが, Кычанов [1968] は西夏語文献を若干用いて漢籍史料の欠を補い, 呉 [1983] では注釈を多く付して史料の考証を加えている。

◆対外関係史・東西交通史

対外関係史では, 特に対北宋関係史の研究が盛んである。宮崎市定 [1934] は, 李継遷が自国産青白塩の北宋への輸出で経済基盤を固め, 対する北宋側は継遷の勢力拡大抑制と塩専売制確立のため青白塩の輸入を禁じたが, 禁令に不満を持った多くのタングート部族が北宋から離反したと論ずる。宮崎 [1935] は10~11世紀の両国関係を概説し, 北宋と西夏との関係が北宋・遼関係と違い, 戦争と和平を繰り返していた理由を, 西夏が北宋に対して十分な実力が無かったためとする。中嶋敏 [1934] は, 北宋が青海地方の吐蕃族(青唐族)に西夏を南から牽制させる一方, 西夏側も吐蕃族の弱体化を図るなどして対抗, 最終的には北宋が青海地方を直轄支配したと説く。金成奎 [2000] 第1~4章は, 国境画定交渉史を中心に考察する。宋人の文集などから記事を博捜し, 対外関係史研究に新たな可能性をもたらしている。

対金関係史では, 朝鮮語の閔丙勲 [1996] が, 金は西夏に西遼との緩衝地帯として, また南宋を牽制する役割を期待していたと説くほか, 遣金朝貢使節が迎賓施設で行った貿易活動を詳述する。星斌夫 [1941][1944] は, 13世紀の西夏がモンゴルと結んだ軍事同盟を受け, モンゴル軍の動向に応じて断続的に金と交戦し, 南宋との連携も図っていたことを明らかにする。なお, 西夏と南宋とは12世紀後半にも密使のやり取りを断続的に行っていた。佐藤貴保 [2004] は, その背景に金朝を牽制するねらいがあったと論じる。

西夏が靈州や河西回廊といった中国と西域とを結ぶ東西交通路(シルクロード)の幹線路を支配したこと, この時代の東西交通史を扱う研究が日本を中心に進んだ。藤枝晃 [1950] は, 李継遷時代に西域諸国の多くが北宋または遼のいずれか一國のみ

に朝貢する傾向に着目、李繼遷と北宋・遼との関係の推移に応じて、西域諸国は朝貢先を選択し、遼へ向かう使節は河西回廊を北に迂回したとする。一方、長澤和俊 [1963] は、西夏による河西回廊占拠後、西夏国内を通過して遼へ向かうウイグル商人が活躍していたこと、岡崎精郎 [1972] の第3篇第1章は、西夏から北宋や金への輸出品に西域の産物が含まれていることに注目し、西夏時代にもシルクロード貿易が盛行したことを明らかにする。宋代には海上貿易が発展し、陸上貿易は影が薄くなったと見られがちだが、現存する様々な文物を見るかぎり、西夏が諸外国と盛んな交流を行っていたことは明らかである。西夏側の貿易政策に新しい光を当てたものとして佐藤貴保 [2003] がある。

◆西夏成り立期（李繼遷～元昊時代）の研究

山本澄子 [1951] は、五代～李繼遷時代のタングート諸部族の分布・動向を部族別に追跡し、タングート族に統一性がなく、立地条件や北宋・西夏・遼の招致策などにより、それぞれが帰属先を決めていたと説く。岡崎精郎 [1972] の本編部分は隋唐時代～李徳明時代のタングート族の動向を詳述する。李徳明時代の西夏は北宋と講和を結び貿易を盛んに行うことで経済的基盤を固めたと論じる。岩崎力 [1990] は西夏側に付いたタングート諸部族の動向を精査。各部族と西夏の王族との関わり合いや、西夏の勢力拡大により従来北宋や吐蕃側に付いていた部族が西夏側へ帰順する例を指摘する。岡崎 [1959] は、李元昊が人民に強制した「禿髮」と呼ばれる髪型が、タングート旧来の習俗ではなく、全く新しいものであったことを、壁画資料を参考に指摘し、強制的背景に国粋主義政策があるとする。西夏にはタングートのほか、漢族やウイグル・チベットなど様々な民族が居住していた。建国から滅亡までの約200年間、各部族・民族が政権にどう関わっていったのかは、よくわかっていない。政権構造を考えるうえで重要な官制・軍制の研究もあまり進んでいない。

◆仏教史

西田龍雄 [1997] 第4篇第1章は、仏典の翻訳地や刊行年代・翻訳形式の分析から、建国当初の西夏語仏典には、寧夏地方を中心に中国語仏典から翻訳されたものと、河西地方を中心にチベット語仏典から翻訳されたものの二系統が存在していたが、12世紀後半の仁宗（李仁孝）期には、大蔵経作成を目指して、漢語を基準とする訳語の統一が行われたとする。一方、松澤（野村）博 [1986] は、河西地方で発見された仁宗期の西夏語仏典断片がチベット語から西夏語と漢語へ同時に翻訳されたものであることを明らかにする。史金波 [1988] は西夏仏教史の概説書。西夏の僧官の最上位にあたる「帝師」が元朝の帝師に類似していると指摘し、西夏仏教がチベット仏教の影響を強く受けていたと論じる。巻末の仏典・石窟題記の録文、各国所蔵仏典リストは有用。笠沙雅章 [2003] は刊本の特徴から、コズロフ将来カラホト出土漢文仏典に遼刊本・契丹藏断簡が存在することを述べ、西夏文化への遼文化の影響や西夏における避諱の実例も指摘する。西夏での仏教盛行の要因や、中国・チベット・敦煌・ウイグル・元朝仏教との関連性など、検討すべき課題は数多い。Кычанов, Нисид, Аракава

[1999] は、ロシア所蔵西夏語仏典の目録であるが、その点数たるや膨大である。また Samosyuk [2001] や謝繼勝 [2002] が、西夏の仏教絵画の多くにチベットや西域の影響が及んでいることを明らかにするように、非文字資料を生かした研究も期待される。

◆文書研究

松澤（野村）博 [1979] は、西夏語の土地売買文書の書式に中国やウイグルの文書と共通点があることを明らかにする。松澤はその後も穀物貸借文書・裁判文書などの研究を『東洋史苑』『龍谷史壇』などに次々と発表している。文書で使われる西夏文字は難解な草書体で書かれ、ほとんどが数行程度の断片であり、高度な読解力が要求される。従来写真版による研究にとどまらず、現物を実見し、紙質などの古文書学的データを収集したうえでの研究が求められよう。

◆法典研究

1980年代後半以降、西夏の法典『天盛旧改新定律令』の研究が急速に進んだ。Кычанов [1987-89] はこの法典の研究ならびに原典のロシア語訳。唐・宋の法律の影響を受けつつ、遊牧民支配のための独自の規定を有していたと論じる。島田正郎 [2003] は中国語訳（史金波・聶鴻音・白濱 [2000]）をもとに刑法相当条文の逐条研究を行い、本法典が金律の影響を受けた可能性を指摘し、中国の法典に倣った非漢族法典と位置づける。本法典の訳本に依拠した家族法や行政制度、社会経済史の研究が出されているが、本法典の実効性を立証する研究は皆無に等しい。強引な訳出や、中国語訳とロシア語訳とで解釈の異なる箇所があり、原典から訳しなおす余地がある。佐藤貴保 [2003] は、原典の実見調査に基づいた法典の条文研究でもある。

3 史料の解説

<1> 遼 朝

◆史籍

楊家駱主編『遼史彙編』全10冊、1973年、『遼史彙編補』1974年、ともに鼎文書局。史料集成として便利であり、主に以下のものを含む。『遼史』：志の部分には本紀や列伝からの引用によって再構成したところが多くあり、元代編纂者の誤解が含まれているので、注意が必要である。版本については百衲本後跋、馮家昇 [1959 (1933)] など参照。中華書局点校本、1974年が閲読に便利である。若城久治郎編『遼史索引』（東方文化学院京都研究所、1937年）は南監本による。劉竟による同書の校訂本（遼瀋書社、1987年）は中華書局点校本の頁を引けるようにした。羅繼祖撰『遼史校勘記』（願学齋叢刊、1938年、のち上海人民出版社、1958年）が校勘記としては最も優れる。『契丹国志』：来歴・著作意図については李錫厚 [1981] 参照。通行本の掃葉山

房本に対し、元刊本を底本とした賈敬顔・林榮貴点校本（上海古籍出版社、1985年）がよい。その校勘記により『契丹国志』が抄出したもとの史料に戻ることができる。中法漢学研究所編『契丹国志通検』（1949年）が網羅的である。『宋大詔令集』巻228～232（宋から遼への国書）。『焚椒録』（道宗宣懿皇后の誣告事件）。『契丹官儀』『武溪集』巻18（官制・兵制）。『契丹交通資料七種』国学文庫47編（文殿閣書荘、1937年）。田村實造〔1947〕はその部分訳注である。王民信〔1976〕は地理資料の総合研究と史料を収める。張亮采編『補遼史交聘表』（中華書局、1958年）。杜撰で分量が少ない『遼史』を補うために、史籍・金石等を網羅的に収集したものに『遼史拾遺』、『遼史拾遺補』がある。『遼史』の記事に関連する他書の記事を探す索引のように使うことができる。

以下には『遼史彙編』に含まれないものをあげる。『資治通鑑』。『冊府元龜』（特に奉使部・外臣部）。『旧五代史』。『新五代史』。『五代会要』（巻29契丹が関係部分）。陸游『南唐書』（巻15契丹伝が重要）。『宋史』。『金史』。『統資治通鑑長編』。陶晋生・王民信編〔1974〕はその遼関係部分の輯録である。索引にいくらか誤りがあり、本文にも文字の違うところがある。『宋会要輯稿』（蕃夷・遼、兵・帰明、兵・討叛2契丹大遼附が重要）。『三朝北盟会編』（上巻25までが重要。遼末については最も詳しい）。趙永春編注『奉使遼金行程録』（吉林文史出版社、1995年）。賈敬顔『五代宋金元人辺疆行記十三種疏証稿』（中華書局、2004年）。傅朗云編注『金史輯佚』（吉林文史出版社、1990年）は遼末については役立つ。『高麗史』。金渭顕編著〔1983〕は『高麗史』の世家全てと別姓の王の列伝により、五代～元と関係する記事を収集したものの。

陳述輯校『全遼文』（中華書局、1982年）。書籍・石刻などから契丹文のものも含めておよそ文といえるものを収める。問題点もあるので、劉鳳翥〔1983〕を参照されたい。向南撰『遼代石刻文編』（河北教育出版社、1995年）。契丹文は入れないが、『全遼文』に収められなかった、またはその刊行以後発掘された史料が多い。閻鳳梧主編『全遼金文』全3冊（山西古籍出版社、2002年）。上冊が遼代にあてられ、およそ文といえるものを収めるが、契丹文は入れない。『全遼文』と『遼代石刻文編』とにないものを探し、5人分6篇の史料を新たに見いだした。中・下冊は対金関係を含む。蓋之庸編著『内蒙古遼代石刻文研究』（内蒙古大学出版社、2002年）は『全遼文』・『遼代石刻文編』にない文が7割をしめ、拓本と突き合わせて検討できる。北京市文物局編『北京遼金史迹図志』上・下（北京燕山出版社、2003～04年）の上冊は塔・寺院等の遺址の図版、石刻史料の図版と拓本、下冊は図版・解題・拓本・録文。『遼代石刻文編』刊行以後発掘された史料も含み、拓本と録文が比較できる。北京図書館金石組・中国仏教図書館石経組編『房山石経題記匯編』（書目文献出版社、1987年）は官制・社会史の史料となる。清格爾泰他著『契丹小字研究』（中国社会科学出版社、1985年）。曾貽芬・崔文印編『遼史人名索引』（中華書局、1982年）は中華書局点校本による。伝記索引として哈仏燕京学社編『遼金元伝記三十種綜合引得』

（燕京大学図書館、1940年）、梅原郁・衣川強編『遼金元人伝記索引』（京都大学人文科学研究所、1972年）がある。

なお清代の四庫全書以後の著作・編纂物を読むときは、非漢族語彙の漢語音訳に清代の訳し直しが含まれている恐れがあるので、中華文化復興運動推進委員会四庫全書索引編纂小組主編『欽定遼金元三史国語解索引』（台湾商務印書館、1986年）を参照する必要がある。

◆考古資料

遼寧省博物館編『中国陶瓷全集17 遼代陶瓷』（上海人民美術出版社/美乃美、1986年）。北京市文物研究所編『北京龍泉務窯発掘報告』（文物出版社、2002年）（遼金の器物分期図）。田村實造『慶陵の壁画——絵画・彫飾・陶磁』（同朋舎、1977年）は、田村實造・小林行雄著『慶陵』全2冊（京都大学文学部、1952～53年）の要約に新たな考察を加えたもの。論考の多くは田村〔1985〕にも取り入れられている。松田光次〔1978〕は同書の解題である。楊仁愷、杉本達夫訳『葉茂台第七号遼墓出土の古画に関する考察』『国華』1080（1985年）。烏盟文物工作站・内蒙古文物工作队編『契丹女屍——豪欠營遼墓清理与研究』（内蒙古人民出版社、1985年）。王建群・陳相偉『庫倫遼代壁画墓』（文物出版社、1989年）は蕭孝忠一族墓の報告書である。内蒙古自治区文物考古研究所・哲里木盟博物館編『遼陳国公主墓』（文物出版社、1993年）。曹峰・神谷正弘〔2001〕はその部分訳とコメント。江上波夫・李逸友監修『北方騎馬民族の黄金マスク展』（旭通信社、1996年）。河北省文物研究所編『宣化遼墓——1974～1993年考古発掘報告』上・下（文物出版社、2001年）は張氏一族と韓師訓の壁画墓についての発掘報告書（論考冊と図版冊）である。河北省文物研究所編『宣化遼墓壁画』（文物出版社、2001年）は図版をカラーのみとした上の発掘報告書の補足。中国歴史博物館・内蒙古自治区文化庁編『契丹王朝——内蒙古遼代文物精華』（中国蔵学出版社、2002年）は北京で開催された同名の展覧会の図録である。これだけの図版を一堂に会したものは他にない。朱天舒『遼代金銀器』（文物出版社、1998年）（金銀器の分類と分期）。劉淑娟『遼代銅鏡研究』（瀋陽出版社、1998年）（分類と分期）。許曉東『遼代玉器研究』（紫禁城出版社、2003年）（分類と分期）。山西省文物局・中国歴史博物館主編『応県木塔遼代秘蔵』（文物出版社、1991年）。国家文物局主編『中国文物地図集・内蒙古自治区分冊』上・下（西安地圖出版社、2003年）の上冊は文物の分布図と図版・解題、下冊は行政区ごとの各文物の解題。郭黛姮主編『中国古代建築史 第三卷 宋遼金西夏建築』（中国建築工業出版社、2003年）は建築物の沿革、図、考察。中国歴史博物館遥感与航空摄影考古中心・内蒙古自治区文物考古研究所編著『内蒙古東南部航空摄影考古報告』（科学出版社、2002年）（遼の都城の航空写真を含む）。『文物』『考古』『内蒙古文物考古』『考古与文物』『北方文物』には発掘成果がよく掲載される。

〈2〉西 夏

◆宋・遼・金・元側史料

対外関係史研究などでは、隣国の宋・遼・金・元側の記述は今なお重要である。韓蔭晟 [2000] の『匯編』は、タングート族及び西夏に関する漢籍史料の記事を収集する。同書の登場で、清朝・民国期の考証学者が集成した『西夏書事』『西夏紀』『西夏紀事本末』は利用価値が無くなった。しかし、年代を確定できない記事は載録されていないため、同書ですべての宋・遼・金・元側史料をカバーできるわけではない。また誤植や質の悪い版本を底本としている箇所もあるので、原典にあたって記事の内容を確認する必要がある。以下、『匯編』が収録していない史料を中心に代表的なものを紹介する。各文献の詳細な解題は宋・遼・金・元の項を参照されたい。

『宋史』：『匯編』は本紀や夏国伝などを載録しているが、ほかにも食貨志に西夏との貿易に関する記述がいくつかある。

『金史』：『匯編』が拾っている西夏伝・交聘表のほかにも、食貨志の榷場の条に西夏との貿易に関する記述がある。また礼志には、西夏滅亡直前に西夏の朝貢使節が行う儀礼を定めた「新定夏使儀注」が収められている。

『統資治通鑑長編』：編年体で書かれているため、『匯編』は関連記事をすべて収録している。しかし『匯編』が底本としているのは四庫全書であるため、タングート人の名前や西夏語の漢語表記が清朝時代に改変されたままの状態となっている。よりよい版本を底本としている中華書局標点本で表記を確認する必要がある。

『宋会要輯稿』：西夏に関する記述は、蕃夷部だけでなく、方域・食貨・兵部などにも現れる。年代が確定できないものを含め、『匯編』が収録していない記事もかなりある。

このほか、宋人の筆記や文集には、『匯編』が収録していない対西夏政策や貿易に関する記述や、対西夏戦争で活躍した人物の伝記などが載録されている場合がある。新たに発見される石刻史料の記述にも注意を払いたい。また元人の伝記史料は、元朝で活躍した本人の伝記だけでなく、西夏時代に活躍した祖先の事績を書き連ねる場合がある。漢籍史料の収集は史料のジャンルだけでなく、時代の範囲をも広げていく必要があるだろう。

◆西夏側史資料

ロシア・イギリス所蔵のカラホト文献は、代表的なものの写真版が上海古籍出版社から『俄藏黒水城文献』シリーズ（第11巻まで刊行中。第6巻までは漢語文献、第7巻以降は西夏語文献）や『英藏黒水城文献』シリーズとして公刊され、簡便に閲覧できるようになっている。敦煌からも近年、大量の西夏語文献が発見され、写真版が公刊されている（『敦煌莫高窟北区石窟』全3巻、文物出版社、2000～04年）。文献の多くは仏典であるが、漢籍の西夏語訳や法典、西夏語の字典・韻書、医学書、曆、詩集、契約文書など多種多様であり、西夏時代のもののほか元代のものも確認される。

一方、漢文のものには西夏時代のみならず宋・遼・金・元代のものも多く混じっている。これからの西夏史研究は西夏側の文献を歴史学的に活用していくことが期待されるが、西夏語文献を扱うには、難解な西夏語の習得が要求されることは言うまでもない。

また銀川や武威など各地で考古学調査が進んでいる。史金波・白濱・呉峰雲 [1988] は代表的な出土文物を集成する。写真はやや不鮮明だが、解説が付されている。中国国家博物館・寧夏回族自治区文化庁編 [2004] は、寧夏地方で新たに発見された文物の写真集である。史資料の少ない西夏史研究にあつては、こうした考古学調査で得られた文物や測量データもまた重要な研究材料の一つとなりうる。最新情報を雑誌『考古』『文物』等で把握せねばならないことはいうまでもない。

第7章

金・元

森田憲司

1 研究の視点

金・元二つの王朝は、金が女真、元がモンゴルと、非漢民族が漢民族を支配した政権である。したがって、これらの王朝の歴史を考えるには、それぞれの民族の歴史の一部としての側面と、中国史の歴代王朝の一つとしての側面を持っていることに注意する必要がある。とくに、元朝の場合には、三つの視点が存在する。第1には、モンゴル民族の歴史の中での13、14世紀という視点、第2には、ユーラシア大陸のほとんどもを支配したモンゴル帝国という視点、第3には、金と南宋を受け継ぎ、明へと継承される中国王朝としての元王朝という視点である。本章においては、中国史上の一つの王朝としての元を対象とする。

さて、これらの王朝の漢民族支配については、従来、金が中華文明に取り込まれたのに対して、モンゴルは中華文明を相対視して、冷淡な態度をとったし、支配体制においてももっぱらモンゴル人や色目人によって支配中枢は構成されるという、いわゆる「蒙古至上主義」の支配であったとされてきた。しかし、最近の研究においては、時代に対する見方が変化しつつある。モンゴルの中国支配にはたしかに異民族王朝による支配ゆえの特異性は見出されるにしても、中華文明に対する姿勢が他の王朝より冷淡とは必ずしも言えないこと、華北社会では金から元への、江南社会では南宋、元、明の継続性を考えるべきであること、などの認識が広まりつつあり、新しい研究の流れが成立しつつある。

歴史研究の基本は史料を読むことにある。したがって、史料をめぐる状況が、対象とする時代の研究の枠組みを決定する。こうした研究の展開の背景には、正史を代表とする国家レベルの史料だけでなく、現地での史料調査に基づく石刻史料などの個別具体的な事例の発掘と研究の積み重ねがある。我が国における元朝史研究が、この10年をこえる期間にわたってホットな状況であることの一理由はここにある。また、近年では金朝史についてもこうした傾向が見られることは後述する。元朝史に

関しては、モンゴル帝国についての研究が、中国の改革開放、ソ連の崩壊などを背景とする現地調査の活発化など、内陸アジアの諸地域にわたって、より網羅的にかつその深度を深めておこなわれるようになってきていることも、発展の大きな要因である。ただし、後者については本章の対象外なので、以下では触れない。

一方で、異民族政権であるゆえの史料状況の特殊性があるのも、研究の上で心得ておかねばならないことであろう。金の場合、女真語、女真文字文献は絶対量が多くはなく、主として伝統的な漢語文言によって書かれた史料なので、言語的な問題は少ないが、元の場合、漢語文献の中にも多様性が存在するのに加えて、ウイグル語、ペルシア語、チベット語をはじめとする諸言語の文献が、世界各地に所蔵されている状況があり、それらをいかに総合的に組み合わせるかが大きな課題となることは、本文の中で触れる。

なお、以下で紹介する史料については、校点本が刊行されているものについては、可能な限り注記したが、影印本、デジタルテキストについては、必ずしも注記していない。また、研究書や論文については、原則として邦文のもののみとしたが、この分野においても中国における研究の進展はめざましく、いまや日常化している日中間の交流による刺激が双方のいずれにおいても研究を推し進める状況になっている。中国における研究に関しては、金については、劉浦江編 [2003] がある。元については目録はないが、専門誌『元史論叢』などに、多くの論文が発表されているし、韓儒林、陳高華、陳得芝、李治安、蕭啓慶といった代表的な研究者には、それぞれに論文集がある。

2 研究の展開と史資料の解説

〈1〉金 朝

◆金史と基本史料

史料の残存の多い少ないだけが、研究の方向を決めるとは思わないが、主たる史料が『金史』のみで、それを補完する史料に恵まれているとはいいたい金朝史の研究には、やはりそれなりの困難がともなう。中国東北地方に起源を發する女真族が完顔阿骨打によって統一され、遼・北宋を滅ぼして中国の北半分を支配下に置いてから、モンゴルの侵入によって最後の皇帝哀宗が死ぬまで、100年あまり続いた王朝にしては、史料の数も範囲も限られている。

まず正史の『金史』だが、宋、遼、金三朝の正史は、元朝の末期1343年に同時に編纂の命が下った。その経緯については、藤枝晃 [1948] や愛宕松男 [1951] があり、また最近では古松崇志 [2003] が論じている。金史の成立の背景には、元好問などの修史への努力の蓄積があり (藤枝 [1948] 参照)、正史としての体裁がよく整ってい

るとされる。しかし、平行する史料が少なく、南宋の宇文懋昭が編んだとされる紀伝体の金朝史である『大金国志』（中華書局校点本あり）や、金朝の朝廷儀礼を記録し、『金史』礼志の材料とされる『大金集礼』くらいしかなく、科挙がさかんにおこなわれ（三上次男 [1967]、森田憲司 [1999a]）、漢族の士大夫が活躍したわりには、文集類も現存する数は少ない。その中で、元好問が詩を以って金の歴史を編んだとされる『中州集』（四部叢刊所収）は、金一代の詩を集め、その作者の小伝を附したもので、金史の編纂にも使用されていて、利用価値が高い。また、彼の文集『遺山先生文集』（四部叢刊所収）は、金末からモンゴル支配下の華北情勢の記録を多く残す。この時期については、劉祁の見聞録『帰潜志』（元明史料筆記叢刊所収）もある。なお、金人の文を集めたものとして清・張金吾の『金文最』（中華書局校点本あり）、詩を集成した薛瑞兆・郭明志編『全金詩』（南開大学出版社、1995年）がある。それ以外の史料に、南宋の使節として金を訪れた記録である洪皓の『松漠紀聞』や、宋金関係の記録として、金で編まれた『大金弔伐録』（中華書局校点本あり）、南宋の徐夢莘の編んだ『三朝北盟会編』がある。

まず概説書を見てみよう。各種の歴史シリーズでは、金についての記述は、宋と元の間埋没して簡略化されがちである。そのうちで金朝時代について比較的まとまって述べられているものとして、愛宕松男の『アジアの征服王朝』（河出文庫、1989年）、村上正二『遊牧民族国家・元』（図説中国の歴史6、講談社、1977年）をあげることができる。また、基本的な工具書としては、文集所収の伝記史料を集めた梅原郁・衣川強編『遼金元人伝記索引』（京都大学人文科学研究所、1972年）や、『遼金元伝記三十種総合引得』（哈仏燕京学社引得35、1940年）がある。文集の現存状況については、山根幸夫・小川尚編『日本現存元人文集目録』（1970年）が、金人文集も対象とする。我が国では金を主題とした文献目録の類は知らないが、宋、契丹や元の文献目録には金にかかわるものも収録されていることが多いので、チェックしておく必要がある。

さて、戦前以来の遼金元史研究の大きな流れについては、杉山正明 [1997] にまとめられているので、それを参照していただくとして、視野を近年までに拡げて我が国における金朝史研究の傾向を大きく分けるとすれば、金朝の政治史・制度史（対南宋関係を含む）と社会文化史、そして華北の地域社会史としてのアプローチの三つに分けられると筆者は考える。まず国制については、三上次男が、建国期からはじまってその基本的な問題のほとんどを論じており、3冊の大著にまとめられている（三上 [1970] [1972] [1973]）。また、対南宋関係史、文化史をも視野に入れた外山軍治の研究も、外山 [1964] に集成されている。この二人の先学による蓄積と、田村實造 [1964-85] の一連の征服王朝研究を除けば、以後、この分野での研究としては、高橋弘臣の財政史を中心とする研究（高橋 [2000] に集成）、井黒忍 [2001] 以外にはあまり見かけない。なお、対南宋関係については、むしろ、南宋側からの研究として、衣川強 [1977]、寺地遵 [1988] などの宋代史研究者の仕事を見る必要がある。かつ

て『征服王朝の時代』（講談社現代新書、1977年）と題してこの時代の概説を書いた笠沙雅章が、仏教史、とくに大蔵経出版史に関する論文でしばしば述べるように、遼による支配以降、中国史の流れは南北朝というべき状況にあるにもかかわらず、華北側についての研究は乏しい。ただし、新しい流れが生まれつつあることについては後述する。

一方、文化の側面では、元好問などについての文学史的研究をのぞくと、宗教関係に注目すべきものが多い。仏教では、野上俊静の研究（野上 [1953] に集成）以降では、桂華淳祥 [1988] [1989] [2000] などをあげることができる。また、道教における全真教、太一教、真大道教などのいわゆる新道教の出現は、金朝における大きな文化的事件であり、これを取りあげた陳垣の『南宋初河北新道教考』（輔仁大学、1941年）は、日本軍が北京を占領していた1941年のものであり、それへの想いが書名にも現れている。同書はもはや古典の部類であるが、そのために収集された史料を増補した『道家金石略』（文物出版社、1988年、森田憲司 [1989] 参照）とともに、かならず参照すべき文献である。この問題については、元の項でも述べているのでそちらを参照されたい。

なお、金朝史に関しては、考古学的成果も忘れてはならない。王朝の故地が、かつての満洲国の領域にあったため戦前には日本人による調査がおこなわれているほか、太祖完顔阿骨打の墓の発見の報道や歴代皇帝の陵墓（北京市房山区）の整備をはじめ、最近では、河北や山西を中心に金墓の発掘報告が多く、この時代の社会文化を具体的に見せてくれるものとして期待できる。とくに、戯劇関係の文物については、赤松紀彦 [1986] ほか、中国の雑誌などに報告がある。

◆金から元へ——華北の地域社会

一方、華北の地域社会研究が、最近さかんになりつつあり、飯山知保 [2003a] [2003b]、井黒忍 [2004] などのほか、桂華淳祥の前掲の研究も地域社会にかかわる。最近の研究傾向としては、金元を一連の歴史的展開としてとらえる視点が主流となりつつあるが、これらの展開の背景には、石刻史料の活用がある。清代の学者が編んだ通史的な石刻史料集成である、『金石萃編』『八瓊室金石補正』（いずれも『石刻史料新編』に影印）などが金代までを対象としているほか、各地域単位の石刻書や地方志所収の金代石刻は少なくない（石刻書については、元の項も参照）。さらに、最近では現地調査も可能になり、その成果も出現しつつある（飯山他 [2002]、井黒 [2004]）。こうした流れについては、飯山 [2001] が整理しているので参照していただきたい。金から元への継続性に関しては、元朝とくに初期の元朝の支配体制の中に金の諸制がどのように取り込まれたのかという問題もある。法制の面では、金では律が施行されたが、それが元朝初期にどのように継承されたかについて、植松正 [1981] が論じている。また、元朝の制度でもある行省についても、金のそれとのかかわりから考える必要がある。最近では高橋弘臣 [1991] が取りあげている。さらに、思想史の分野では、南宋で成立した朱子学の北伝の問題もある。これは、金朝の学術

にかかわる問題であると同時に、元朝の科挙における朱子学の採用、すなわち朱子学の官学化に繋がる。このことについては、安部健夫 [1959]、吉川幸次郎 [1974] のほか、最近では高橋文治 [1986]、三浦秀一 [1995a][1995b] などの研究があって、思想上だけでなく、社会文化の側面からもアプローチされている。

さて、1210年代からモンゴル軍の侵攻と黄河の氾濫で金朝社会は混乱し、さまざまな勢力が出現する。たとえば、金朝に抵抗する紅襖軍（大島立子 [1974]）、金を援護する義軍（池内功 [1978]）などの活動があり、そこから新しい勢力が出現するのであるが、それ以後については、元の項で述べている。

〈2〉元 朝

◆対象とする範囲と元朝史の基本文献

元朝、あるいはモンゴル帝国の時代の歴史を考えるには、三つの視点が存在するが、中国史研究の入門という本書の性格上、中国史上の元王朝を対象を限定すること、多様な言語史料の存在が課題であることは、すでに「研究の視点」で述べた。以下、元朝史研究にかかわる史料の紹介と、それをベースにしての最近の研究動向、主要論文の紹介をおこなう。元朝史研究の歴史と現況については、過去に、『中国史研究入門』『アジア歴史研究入門』があって、その時点での研究史の紹介がおこなわれていることは他の時代と同じであるが、その後のものとして、最近の研究状況の変化の担い手の一人である杉山正明による一連の研究史整理（杉山 [1991a][1996a][1997]）や飯山知保 [2001]、櫻井智美 [2002] などが存在するので、網羅的、詳細な紹介はそちらを参照していただきたい。また、一線の研究者がそれぞれの視点から問題を整理した『宋元時代史の基本問題』（汲古書院、1996年）、史料状況の変化に関わる視点が多く見出される『史滴』24号の特集「元代史研究における多角的アプローチの試み」（2002年）、一般読者を対象として最近の研究傾向を紹介した、『月刊しにか』2001年11月号の特集「モンゴルの衝撃」などもある。

さて、上に紹介した研究史の整理の類を見てもわかるように、元朝史の研究は、中国史の他の時代以上にこの20年ほどの間に大きく展開し、時代への見方が変化した分野である。かつては元朝の中国支配に対しては、羽田亨が「元朝の漢文明に対する態度」（羽田 [1928]）や「宋元時代総説」（羽田 [1935]）で提示した「蒙古至上主義」という言葉に代表される、伝統的な文化を評価しない異民族の圧政下での漢民族の不遇と、その結果としての価値の混乱という位置づけが、いわば常識として広く受け入れられてきた。しかし、そのような考え方がはたして社会の実態に即しているのか、という疑問を提示する見解が、今日では広まりつつある。さらに、箭内互 [1916] や蒙思明 [1938] などからはじまる、蒙古・色目・漢人・南人の「四身分制度」という考え方についても、固定観念からの脱却が求められているが、その流れを述べたものとして、船田善之 [1999a][2000] がある。以下で紹介する研究には、こ

のような視点の変化の中で書かれたものが多い。

そして、現在進行しつつある中国・台湾での各種の大型叢書の刊行と、文献のデジタル化による史料をめぐる状況の変化は、元朝史研究にも大きな影響を与えている。より多くの文献の利用が可能になったことは言うまでもないが、これまでとは異なる版本が身近になる例も多い。元朝史料に関しては、清朝乾隆年間における文字の改編の問題があるため、このことは切実である。デジタル化に関しては、『四庫全書』が文字の改変の対象そのものであるように、史料ごとに異なった事情があり、その性格を十分に知らないプラスにもマイナスにも働きうる面がある。史料状況と研究をめぐっての元朝史関係者の発言として、杉山正明 [2003]、森田憲司 [2004a] などがあ

る。さて、元朝史を特徴づけるもう一つの要素は、史料における言語の多様性にある。モンゴルやウイグル、チベット、ペルシアなどの非漢語史料はさておくとしても、漢語文献の中においても言語の多様性が存在する。すなわち、文言のほかに、『元典章』に代表される法制史料などに頻出する吏文、この時代独特の口語語彙を混じえてモンゴル語の語順に忠実に翻訳した硬訳体（直訳体）、さらに雑劇などに見られる白話などの史料が存在する。したがって、この時代を研究する者は、他の時代の研究者以上に、中国語学の分野での研究成果に関心をおかねばならない。文献のデジタル化は、辞書の編纂が充分ではないこれらの言葉について、用例からの帰納の対象の拡大、効率化という点で、利便性が大きい。

以下、元朝史の個々の分野とその史料、研究について述べる前に、元朝史全体にかかわる各種の工具書を紹介しておく。基本的なものに留めたので、船田善之 [1999b] が各種の工具書を紹介しているのを参照していただきたい。

まず、論文目録には、山根幸夫・大島立子編『元代史研究文献目録』（汲古書院、1971年）と、それ以後を対象とした野沢佳美編『元代史研究文献目録』（立正大学東洋史研究室、1991年）、さらにモンゴル地域全体を対象とした、日本モンゴル学会編『モンゴル研究文献目録 1900～1972』（日本モンゴル学会、1973年）がある。また、船田善之がウェブ上で元朝史関係の文献目録をたえず更新している。次に、基本的な人名索引として、王徳毅他編『元人伝記資料索引』（新文豊出版公司、1979～82年）と、梅原郁・衣川強編『遼金元人伝記索引』（京都大学人文科学研究所、1972年）があり、前者が網羅的であり、かつ小伝を附しているのに対して、後者は伝記史料中の親族名を採録するなど緻密で、一長一短がある。さらに『遼金元伝記三十種総合引得』（哈仏燕京学社引得 35、1940年）もある。中国史研究においては、文集所収の史料が大きな比重を占めるが、元人の文集については、山根幸夫・小川尚編『日本現存元人文集目録』（1970年）があり（近刊の叢書類は反映されていない）、陸峻嶺編『元人文集篇目分類索引』（中華書局、1979年）があるほか、安部健夫の『元人文集史料索引』が、彼の『元代史研究』（創文社、1972年）に付録として載せられている。もちろん、今日では四庫全書や四部叢刊のデータベース検索が利用できる。

◆『元史』と政治史の流れ

元の正史『元史』は、明の洪武帝が元を「滅ぼした」翌年の洪武2年(1369)に最初の命令が出され、6カ月で完成したが、翌年に再編がおこなわれて完成した。合せて331日という、きわめて短期の事業であった。ただし、『元史』のかなりの部分は『経世大典』に拠ってなされており、その限りでは決して草卒とばかりは言えない。しかし、後述するように、『経世大典』は1329年に編まれたもので、それ以後の時期については、各種の文献を利用して編まれているため、木に竹を接いだ感じになっている箇所は少なくない。このような問題を有するものの、元朝史研究の基本史料としての『元史』の地位はゆるがず、研究にあたっては、まず参照せねばならない。

『元史』については、早くも明代に改編の試みがはじまり、民国までくり返し試みられるが、そのうちで最も注目しなければならないのは、清朝の碩儒である銭大昕の仕事である。彼は各種の文献を駆使して元朝史の研究をおこない、その史料利用の幅広さと史料批判の姿勢は、今日における元朝史研究の出発点と言える。『元史氏族表』『元進士考』のように直接元を主題としたもの以外にも、『潜研堂文集』や、『潜研堂金石文跋尾』『十駕齋養心録』などには、少なからざる元朝関係の記事が見出され、今日の研究者にとっても常に参照すべき先行研究である。『嘉定銭大昕全集』(江蘇古籍出版社、1997年)がある。

また、19世紀後半に西欧世界との交流がはじまると、西方における元朝関係史料の存在を中国人は知る。そして、これらの文献をも参照しての、元史の書き直しがおこなわれた。それが屠奇の『蒙兀児史記』であり、民国年間に清朝時代の研究成果を集めて編まれたものが、柯劭忞の『新元史』である。とくに前者は、今日でも利用価値は高い。

なお、元朝政治史の基本史料として、『国朝名臣事略』(蘇天爵編)を挙げておきたい。国初から延祐年間までの高官の伝記史料、主として碑伝行状の類、を集めたもので、史料価値の高い記事が少なくない。元刊本の影印本とそれに基づく校点本(中華書局)がある。また、『全元文』が刊行され(江蘇古籍出版社)、文集中のものだけでなく、石刻、明清地方志などの各種の文献に所収の元人の文章が、人物単位で集成されており、利用価値が高い。

概説書についてまず紹介する。各種の「世界の歴史」「中国の歴史」シリーズには元朝を取り上げた巻があるが、近刊のものとしては、『世界歴史大系 中国3』(山川出版社、1997年)と『世界の歴史9 大モンゴルの時代』(中央公論社、1997年)を挙げておきたい。前者は、歴史事実の詳細な記述に重点が置かれ、政治は杉山正明、経済は斯波義信、文化社会は森田憲司、思想は溝口雄三が執筆している。後者の元朝関係部分は杉山正明の執筆で、従来の視点とは異なる角度からの指摘が多い。一世代前の研究者では、愛宕松男がいくつかのシリーズで執筆しているが、そのうち、『中国の歴史 元明』(講談社、1974年。講談社学術文庫、1998年)が、詳細である。愛宕の元朝時代についての見解を知るには、愛宕[1970]を見るのがよく、『愛宕松男

東洋史学論集』(三一書房、1988年)に、その仕事が集成されている。

モンゴル帝国の歴史は、チンギスカンのモンゴル高原統一と周辺地域への勢力の拡大を前史とするが、まだみずからの文字を持たなかったモンゴルの人々は、我が国における『古事記』のごとく、その歴史を口伝で残した。『元朝秘史』は、そうした伝承を後代になって整理したもので、その成立については諸説ある。内容は、モンゴルの始祖伝承からはじまり、チンギスカン、さらにその次の世代にまで及ぶ。我が国での『秘史』の研究は、明治時代的那珂通世[1907]による最初の翻訳『成吉思汗実録』からはじまって、近年の小沢重男(岩波文庫)、村上正二(平凡社東洋文庫)の二つの訳注にいたるまで、長い伝統がある。『元朝秘史』に関する研究については、原山煌編の『元朝秘史関係文献目録』(日本モンゴル学会、1978年)、『元朝秘史関係文献目録補編』(編者刊、2004年)があり、内外の文献を網羅している。

モンゴルの中国への侵入は1210年代にはじまるが、金朝の衰退と黄河の氾濫で混乱していた当時の華北には、各種の武装自衛集団が存在し、モンゴル政権と結びつき、その地位を安堵された者たちがこの時期の華北の実質的な支配者であった。最初に彼らに注目した愛宕松男は、彼らを「漢人土侯」と名付けた(愛宕[1941][1943])。近年にも、各集団について、池内功[1980a][1980b][1980c][1981a][1981b][2002a]、野沢佳美[1986][1988]、堤一昭[1995]などの研究がある。また、愛宕[1941]が元朝の中国支配の枠組みを変えたと論じた山東の軍閥李璫の反乱については、李全・李璫集団のそれ以前その後を含めて、いくつかの研究がある(池内[1977]、森田憲司[1988][1989])。

中国王朝としての元朝を考えると、クビライの時代に諸制度が確立されていったこと、南宋征服によって中国の統一がなされたことなどから、クビライ期についての研究が多くなる傾向がある。クビライ時代、あるいはそれ以後のモンゴルの中国支配について、従来の研究とは異なった見方を提示し、視点の転換を求め続けているのが杉山正明であり、クビライ政権成立の経緯とそれが後代の歴史に及ぼした影響を論じた同[1982]などをはじめとする研究論文の集成として、同[2004]があるほか、同[1995a][1996b][1997]などの概説書、あるいは一般読者向けの書物があり、それらの近年の元朝史研究への影響は大きい。

元朝の中国支配初期から中国統一にかけての時期における諸制度の確立では、とくに中央官制、税制とその基礎となる戸籍の問題、軍制などが研究課題として取りあげられてきた。この分野は、従来からの研究史において、いわば元朝史研究の中心をなしてきた分野であり、元朝史研究の開拓者である箭内互以来、多くの研究の蓄積があるが(箭内の研究は箭内[1930]にまとめられている)、近年の業績を中心に整理してみよう。

おそらくもっとも多くの研究がなされているテーマは、モンゴル帝国の構造、軍事体制、支配体制がどのように構成されていたか、という問題である。以前の研究が、『元史』や同時代のフREGウルス(イル=カン国)の史官ラシッドウッドィーン

『集史』などの史料や、文集などに見出される官僚たちの議論を用いて全体像を見ようとしているものが多いのに対して、最近の研究は個別の事例から組み立てていこうという傾向が強くなっている。これもまた、利用可能な史料の広がり、とくに個別事例にかかわる石刻などの利用への関心からきているのであろう。

モンゴルが拡張していく中で新たに支配下に置かれた地域のチンギスカン一族への分与については、杉山正明 [1978] があり、それが以後のモンゴル帝国の原型であると論じている。カン一族や功臣に分配された所領（投下）の分布、投下での地方官と領主、民衆と領主の関係などの問題は、モンゴルの中国支配について明らかにするための一つの鍵である。こうした投下領支配の具体像を描こうとしているのが、杉山 [1993] である（投下に関する文献については飯山知保 [2001] 参照）。投下の問題は、華北だけでなく江南においても存在し、植松正 [1997] 所収の論文で論じられている。

次に軍事体制であるが、モンゴルの軍団が中国の各地にどのように駐屯していたかの具体的な研究が、池内功 [2002b]、堤一昭 [1992]、松田孝一 [1992a][1992b] [1993]、村岡倫 [2001][2002] などによってなされており、この分野の研究は最近盛んである。中央の制度では、カンの身边に仕えるケシュク（怯薛）の存在が目目され、片山共夫 [1977][1980a][1980b] や森平雅彦 [2001] で論じられており、宮紀子 [2003] も言及する。

一方、支配される漢民族の側にかかわる問題としては、戸籍や税役の負担の問題があげられる。元朝の漢人把握については、税制については安部健夫 [1954]、愛宕松男 [1965]、戸等では柳田節子 [1977]、戸口統計では愛宕 [1950] とそれを批判した松田 [1985] などを、基本的な研究としてあげることができよう。また、最近の元朝史研究で対象としてしばしば取り上げられているものに、元朝による南宋征服後の江南の支配体制と、江南社会の状況がある。この問題を長く追跡してきたのが植松正で、植松 [1997] にそれまでの研究が集成されており、植松 [1996] にはその見解が述べられている。また、堤一昭は、南宋征服過程およびその後の軍事体制、支配構造について、モンゴル側からの解析による一連の研究を発表している（堤 [1996][1998] [2000a][2000b]）。

このように多くの研究の蓄積があるクビライ期に比して、それ以後の元朝政治史の研究には、いささかさびしいものがある。杉山正明には各種の概説中での言及のほか、杉山 [1995b] があり、この時期の政治状況について叙述している。元朝末期には、周知のように、順帝期になると、気象の異常に農村の疲弊、元朝の財政的困難から、各地で反乱が発生することとなる。楊訥・陳高華編『元代農民戦争資料集編』（中華書局、1985年）に多くの史料が集められているほか、谷川道雄・森正夫編『中国民衆反乱史』2（平凡社東洋文庫）には、『明史』と『明史紀事本末』の関連記事が訳注されている。元末に活動した諸集団について取り上げた最近の論文としては、方国珍の寺地遵 [1999]、方国珍・張士誠の檀上寛 [2001][2003] がある。そして、最終的な勝者となる朱元璋とその集団の性格については、明代の部分と重なるので、ここで

は省略するが、忘れてはいけないのが、元明のつながりという角度からの研究視点である。宮崎市定 [1969] による提起があるが、最近では檀上がこの問題に触れる（たとえば、檀上 [1994]）。

◆いわゆる「元朝の中華文明への態度」について

視点の転換を求められている元朝史研究の中でも、いちばん大きな変化が生じているものの一つが、元朝の中華文明とのかかわりであろう。元朝が漢族の伝統的な文明や価値について、否定的な、あるいは冷淡なスタンスを取っていたという見解は、これまでいわば常識に属していたことはすでに書いた。しかし、個別の事実への研究の積み重ねが、それに変化を与えつつあり、最近では、元朝は他の王朝以上に中華の伝統文化に熱心であったと論じる研究が増えてきている。その代表が宮紀子の元代の出版物をめぐる一連の研究で、新紹介の文献を含む多くの史料を駆使して、元朝での出版は、記念すべき出来事に際しての国家的な事業や、個人の著作であってもしばしば地方機関の援助を得ておこなわれたものであるという指摘をおこなっている（宮の一連の研究については、文献一覧を参照）。この指摘は、史料そのものの性格にかかわり、注目すべきものであり、さらには知識人の冷遇とそのエネルギーの行き先としての庶民文化への参与という、これもまた常識とされてきた見解にもかかわる。

元朝支配下の漢族知識人をめぐる問題については、森田憲司 [1990] がその時点での課題を提示して研究の必要を述べ、櫻井智美 [2002] が、その後の10年を中心に、「文化政策」をキーワードに整理、紹介している。個別の問題では、まず元朝初期、すなわち金を滅ぼして華北を支配下においた時期の知識人政策の成立について、安部健夫 [1959]、杉山正明 [1991b]、森田憲司 [1994] がある。また、元朝の科挙は合格者数も少なく、実質的な意味をもたなかったとされ、元朝の中華文明への軽視という従来からの議論では、その代表的な事例とされてきたが、蕭啓慶などが毎次の科挙の合格者についてのデータの集成を次々と発表しており、官界、あるいは社会における科挙の機能についての研究の基礎ができつつある。さらに、『新編歴挙三場文選』や『大科文選』などの答案集をはじめとする科挙史料については、森田 [2001a]、陳高華 [2001] が検討を加えている。受験の準備過程で用いられる書物をはじめとして、科挙と出版という問題には興味深いものがあるが、宮紀子 [2003] が広くこの問題を取りあげているほか、櫻井 [2004] がある。また、元朝の儒教に対する姿勢をめぐることは、宮 [1999a] が、大徳11年の孔子への加封が元朝の儒教政策の節目で、官民一体の出版活動、立碑といったセットの出発点となったと論じている。元朝においては、学校（当時の用語で「廟学」）は、漢族知識人支配への管理、支配の場として機能していた。法制史料の項で紹介する『廟学典禮』は、当時の廟学の状況を知る史料として貴重であり、牧野修二にそれを利用した論考がある（[1979a][1979b][1980]）。また、江南の知識人と元朝との関係については、南宋の旧臣が元朝への出仕と関係なく交流していたことを指摘した村上哲見 [1994a]、旧南宋知識人を対象として、宋元交替期の彼らについて論じた、櫻井 [1998]（趙孟頫）、森田 [1999b]（王応麟他）な

どがある。その他、伝統的な価値への元朝の姿勢のあらわれというべき岳瀆の祭祀について、森田 [2001b] がある。

◆法制史料 (付経済史料)

元朝史研究を特徴付けるものに、『元典章』(大元聖政国朝典章)をはじめとする法制史料の存在がある。その名前を列挙すると、元典章、通制條格、憲台通紀、南台備要、廟学典禮などであり、さらに韓国において『至正新格』の元刊本が発見されたとの報道もあった。また、『経世大典』は、1329年に編まれた元朝一代の百科全書とも言うべき書であるが、残念ながら『永楽大典』に站赤などの項目が残されるだけであり、あとは『国朝文類』所収の各項の序録で内容をうかがうことができるのみである。これらの法制史料については、植松正 [1993] が懇切な解説をしているので、ここでは最小限度に留めるが、元朝史研究の主要な材料のひとつであり、研究を大きく方向付けた。

『元典章』は、皇帝の詔勅や皇后皇太子などの命令、各級官庁からの通達、判例などを集めたもので、法典が編纂されなかった元朝においては、行政はこれらに基づいて執行された。個別具体的事例が多いだけに、制度史だけでなく社会史的にも魅力的な史料である。従前に通行していた沈刻本には文字に問題が多く、1972年に台湾の故宮博物院所蔵元刊本が影印され、かなり信頼できる本文が利用可能となったが、まだ校訂の必要が少なくなく、刑部(岩村忍・田中謙二校定 [1964][1972])、兵部(寺田隆信・熊本崇他校定 [1986][1988][1990])については校点テキストが公開されている。中国においても刑部(祖生利・李崇興校点 [2004])、戸部の一部(陳高華他 [2004])などが発表され、全巻にわたる校点本や訳注の完成が期待される。なお、宮紀子 [1999a] は異版の存在の可能性を指摘する。

『元典章』について内容的に多岐にわたるのは、『通制條格』である。1323年に成立した「大元通制」の部分であるが、現存する部分は、やはり命令文、通達、判例などであり、『元典章』と重なる条文も多く、相互に参照する必要がある。岡本敬二他編の『通制條格の研究訳注』3冊(国書刊行会、1964~76年)が刊行されているほか、方齡貴他の校注本(『通制條格校注』中華書局、2001年)が役に立つ。『憲台通紀』は御史台についての、『南台備要』は江南御史台についての書物で、いずれも『永楽大典』に残されたものであり、他の監察官庁関係の史料も含めて校点した洪金富の『元代台憲文書匯編』(中央研究院歴史語言研究所、2003年)がある。これらの監察官庁については、丹羽友三郎に『憲台通紀』の訳注(丹羽 [1968-69])や研究(丹羽 [1994])がある。次に、『廟学典禮』は、元朝の学校・知識人政策についての法令集であり(収録されているのは大徳年間まで)、後に述べる元朝の知識人政策の問題とかわりが多いが、その成立については、森田憲司 [1992]、宮紀子 [2002] がある。異なった見解が示されている。

以上の法制史料の多くは、校点本が浙江古籍出版社の「元代史料叢刊」に収められている。また、植松正編『元典章年代索引』(同朋舎出版、1980年)は、法制史料に

含まれる文書の年代を整理配列したもので、これらの史料を元朝史の流れの中に組み込むのに役立つ。

なお、『元史』には刑法志があるが、他の正史とは異なり、条文を逐条的に記述する形をとる。小竹文夫他編の『元史刑法志の研究・訳注』(教育書籍、1962年)と、梅原郁編『訳注中国近世刑法志下』(創文社、2003年)所収のものと、二つの訳注がある。

さて、こうした法制史料には、官庁の文書用語である吏文、さらにはモンゴル語を語順のままに漢語に訳した硬訳体(直訳体)など、一般的な文言によるもの以外の漢語で書かれたものが含まれており、文書構成の複雑さともども、読み解くためには独自の方法が必要となる。言語としての関心ともあいまって、古くからそのための努力がなされてきたが、第一人者であった田中謙二の著作集が刊行され(汲古書院、2000~01年)、その蓄積の利用が便利になった。また、植松正は『元典章』読解における難問である文章構成の解析方法について、独自の方法による文書解析の方式を試案として提示している(植松 [2004a])。さらに、中国における第一人者の亦隣真の文体論と読解例が訳出されており(亦隣真 [2001a][2001b])、参考になる。元典章中の語彙については、京都大学人文科学研究所元典章研究班による索引が油印されているが、現在では複数の電子テキスト化への作業がほぼ完成しており、その公開が語義の確定に役立つことが期待される。また、元代の胥吏用語辞典というべき『吏学指南』があり、『居家必用事類全集』辛集に拠る翻刻(東洋史研究会、大華印書館、浙江古籍出版社などあり)だけではなく、朝鮮刊本も最近影印された。朝鮮刊本については末松保和 [1942] が解題している。また、吏文については、朝鮮王朝時代に編まれた『吏文』に前聞恭作が訓読をほどこし、吏文用語辞典とも言うべき『吏文輯覽』を併せて刊行した末松保和編『訓読吏文 吏文輯覽附』(1942年、国書刊行会復印あり)があり、その『吏文輯覽』の部分50音順に並べ替えた『吏文正統輯覽』(京都大学東洋史研究室、1952年)は便利である。

次に経済史関係だが、『元史』食貨志の訳注はまだ刊行されていない。また、上記の法制史料の中に経済史にかかわる史料が少なくないことは言うまでもない。元朝経済史におけるトピックとしては、紙幣である交鈔の使用、モンゴル帝国の成立による東西交易の拡大、財政の基礎としての塩専売、大運河の開通などを挙げることができる。交鈔については、前田直典の研究が代表的なものであり、前田 [1973] にまとめられ、通貨全体については、高橋弘臣 [2000]、宮澤知之 [2001] がある。塩政では、通史的に論じている佐伯富 [1985]、現場の史料である解州塩池廟の石刻を材料にした古松崇志 [2000] がある。流通では、海運を担った豪民についての植松正 [1968] [2003] [2004b]、食貨志の海運、大運河関係の項目を訳注した星城夫 [1982] などがおり、この時代の流通の問題を簡便にまとめたものとして松田孝一 [2000] をあげておきたい。

◆地方志と石刻——地域社会の問題

中国においては、古くから地方志の編纂がおこなわれてきた。それは、地域の歴史をたどるというよりは、地域の現状を記すものであり、行政上の参考資料ともなる一面を持っていた。地方志が現存するのは宋代以降であるが、『宋元地方志叢書』『宋元地方志叢書続編』には、現存する宋元地方志のほとんどすべてが収められていて、利用することができるので、ここでは個々の書名を挙げることは省略する。一方、『永楽大典』残巻所収の地方志については、『永楽大典本地方志彙刊』（中文出版社、1981年）、『永楽大典方志輯佚』（中華書局、2004年）がある。また、元朝時代には全国地志として、『大元一統志』が編まれたが、現在では散逸し、趙万里による輯本がある（中華書局、1966年）。なお、明代以降の地方志にも、元朝にかかわる記事や、元代の遺文が見出されるので注意が必要である。遺文については、『全文元』（江蘇古籍出版社、1997～2005年）がかなり採集するほか、石刻関係記事については、『石刻史料三編』にまとまって収録されている。

地方志と並んで地域における歴史像を考えるのに有益な史料が石刻であるが、とくに元朝については、史料価値の高い石刻が多数残され、一次史料として利用されることが多い。我が国における昨今の元朝史研究の展開の背景の一つには、元朝史料としての石刻の価値の認識とその活用があり、すでに1989年に楊志玖他編『元史学概説』（天津教育出版社）が、日本の若手研究者には「石刻熱」が存在していると評したほどである。石刻への関心は戦前から既に存在し、多くの史料が招来されたことについては、杉山正明 [1997] が紹介する。

さて、元朝時代の石刻については、金代以前のように全国を網羅した清代の金石学者の著作が存在していないので、『山右石刻叢編』（山西）、『山左金石志』（山東）のような、個別の地域にかかわるものを利用することが多い。また、年代順の石刻目録としては、清の呉式芬の『攷古録』や楊殿珣編『石刻題跋索引（増訂本）』（商務印書館、1957年）がある。これらの伝統的な石刻書のほとんどは、『石刻史料新編』、同二編、三編に影印されているが、『歴代石刻史料彙編』第4編（北京図書館出版社、2000年）が各種の石刻書の遼・金・元の部分を集成しており、便利である。また、近年石刻拓本の図録が多く刊行され、オリジナルに近い形で石刻の利用が可能となっている。その代表的なものは『北京図書館蔵石刻拓本匯編』（中州古籍出版社、1989年）で、48～50巻が元朝の石刻を対象としている。地域単位での拓本図録も多いが、ここでは省略する。その他、道教関係の石刻を集めた『道家金石略』（後述）、元朝特有の形式である硬訳体の石刻を集成した蔡美彪の『元代白話碑集録』（科学出版社、1955年）があり、それを評した入矢義高 [1956] は同書のみならず、元朝硬訳体史料を読む上で有益である。中国の改革開放の進展で可能となった碑石そのものの現地調査の報告の例としては、飯山知保・井黒忍・船田善之 [2002]、池内功 [2002b] などがある。また、中村淳・松川節 [1993] のように、中国でも知られていなかった新史料を学界に報告した例もある。特定の石刻、もしくはその内容を主題

とした論文は省略する。

また、石刻史料以上に一次史料として重視されるのは文書史料であるが、周知のごとく中国における文書史料の現存は限られており、元朝時代についても、従来は若干の残存例が報告されるにすぎず（竺沙雅章 [1973]）、それゆえにこそ、法制史料や類書に見られる文書形式の残存と、個別具体的な記事内容を研究者は重視してきた。しかし、近年では徽州文書の中に元朝のものが含まれるほか（宮紀子 [2005]）、河北省隆興県鴿子洞発見文書（『文物』2004-5参照）なども知られるようになった。さらに、カラホトから元朝時代の文書典籍が発見され、それを利用した研究がはじまりつつある。カラホト文書については李逸友編『黒城出土文書』（科学出版社、1991年）が紹介しており、その一部が古松崇志によって訳注されている（古松 [2001, 05]）。それを利用した成果としては、池内功 [1994]、松井太 [1997]、市丸智子 [2002]などを挙げる事ができる。一方、石刻史料に残された、モンゴル語・漢語併記（蒙漢合璧）の命令文については、杉山正明 [1990] [1991c] が集成し、歴史、言語の両面から詳細に注している。また、同 [1993] もある。なお、モンゴル帝国期の各地域における文書についての研究も最近多く発表されており、松川節 [1995]、小野浩 [1997] は、帝国各地にそれぞれの形式を持って存在する文書についての整理研究であり、また、中村淳 [2002] はチベット文による命令文の集成と解題で、やはり石刻を含む実物文書の研究である。さらにウイグル文書についての松井太の研究など（例えば [2002]）、モンゴル帝国各地域の文書研究はさかんであり、元朝文書史料研究にも反映されていくことになるだろう。なお、モンゴルの命令文には、発給の日付、場所やケシクの名が記されている場合があり、政治制度の史料としても利用できることについては、中村 [1993]、宮紀子 [2003] が指摘している。

さて、元朝時代の地域社会についての制度面を中心とした基礎的な研究としては、松本善海のものがあり、松本 [1977] にまとめられている。元朝が郷村に設けた「社」の制度についての研究は多く、最近では社の時代による性格の変遷を整理した中島榮章 [2001] がある（社の研究史については中島 [2001]、飯山知保 [2001] 参照）。また、個別の地域社会の状況を取り上げた研究として、華北の在地有力者の家系を追跡した飯山 [2003a]、州県レベルでの廟の祭祀と地方官のかかわりを取りあげた飯山 [2003b] などを、石刻の持つ個別具体性を地域社会研究に用いた例としてあげることができよう。また、植松正 [1997] 所収の論文の中に、江南における「豪民」と呼ばれた存在について論じたものがある。これは、江南社会の南宋・元・明というつながりの問題を考える上で重要な問題である。

元朝について考えるときに、その国都大都が占める意味は大きい。元朝時代の北京の地志には、元の熊夢祥編の『析津志』の逸文を集めた『析津志輯逸』（北京古籍出版社、1983年）がある。大都の都市空間、および宮城については、すでに戦前に中国の营造学社グループが文献による復原研究をおこない、多くの蓄積があるが、最近の再開発にともなって遺蹟遺物が多数出土したこともあって、研究が新たな局面を

迎えており、渡辺健哉 [2005] がそれらの成果を整理紹介している。また、NHK取材班編 [1992] が、ビジュアルな形で都市空間を再現し、陳高華 [1984] が都市文化を扱い、大都の建設とその管理については渡辺に [1999] などの一連の研究がある。大都は大運河によって江南、そこからさらには海を通じて世界に結ばれていた。このことを指摘するのは、杉山正明 [1995a] であり、一方で、陸上交通路でモンゴル高原とつながり、より大きな都市圏を構成していたことについては、杉山 [1984] [1999] が論じている。

◆文化と社会の問題

まず、個別の文化事象についての史料と研究について述べる。なお、文化史の主要な分野の一つである美術史（建築を含む）には、紙数を割く余裕がないので省略する。海老根聰郎・西岡康宏編『世界美術大全集 東洋編7』（小学館、1999年）の各分野に附された解説と、中国文を含めた詳細な文献目録を参照していただきたい。

まず、科学技術では、東西の交流、宋代以来の社会における実学の進展など、科学技術の進歩がこの時代で顕著であることが指摘されてきている。イスラム天文学の知識が入った暦学天文学の分野では、郭守敬による授時暦の編纂や、回回天文台の設置などが知られているが、『秘書監志』（浙江古籍出版社校点本あり）は、宮中の文化部門である秘書監についての記事を集めた書物で、関連部門の人事の記録とともに、所蔵されていた儀器類についての記事もあり、当時宮中にイスラム天文学の観測器具が揃っていたことがわかる。この方面については、山田慶児 [1980] 参照。また、医学も発達したが、これは、医業が志を得ない知識人の選ぶ道の一つとなっていたことも関係するのではないか。おなじく志を得ない知識人の行き先と考えられている元雑劇作者と医学との関係については、金文京 [1996] が論じている。農業技術については、『王禎農書』、『農桑輯要』などの農書が編まれていて、校点本がある（農業出版社）。なお、この時代の科学技術全体に触れた書物としては、『宋元時代の科学技術史』（京都大学人文科学研究所、1967年）がある。

次に文学であるが、伝統的な文言の詩文については、吉川幸次郎の『元明詩概説』（中国詩人選集第二集、岩波書店、1963年、全集第15巻所収）以降、全体的な状況を概述したものを知らない。元人の文集をまとめて影印したものとしては、四部叢刊の他に、『元代文集珍本叢刊』（10種、国立中央図書館、1970年）、『元人文集珍本叢刊』（26種、新文豊出版、1985年）があるが、さらに、『全文』の刊行や、テキストとしての問題はあるとしても四庫全書が影印、デジタル化されたことで、材料の面からは環境が整いつつある。また、『国朝文類』（蘇天爵輯）は、延祐年間までの文を集めたもので史料価値の高い文章を多く含む。四部叢刊に元刊本が影印されている他、校点本もある。清の顧嗣立編の『元詩選』は元代の詩を詩人ごとに集成したものだが、席世臣が補した『元詩選癸集』は、各種の文献中の詩を搜羅しており、史料集としても役に立つ（いずれも中華書局校点本あり）。個別の文学者とその作品については省略する。

元雑劇（元曲）については、最近では中国各地から、戯台（舞台）遺構、墓室内の壁画や彫刻、副葬された俑などの戯曲資料の存在が多数報告され、文字に残されたものとは異なった演劇世界が存在していたことが知られつつある（戯曲文物を紹介した邦文の文献としては、赤松紀彦 [1986]）。戯曲作品としての雑劇は、独自の言語で書かれているため、その読解そのものが難しいが、代表的な注釈としては、京都大学の研究グループによる『元曲選釈』（1951～77年）があり、また最近では、『元曲選』に代表される明代のテキストではなく、後代の改変を経ていない元刊本雑劇による、訳と校注の作業も出現している。（赤松他 [2004]、元刊本の雑劇については金文京 [1983] 参照）。また、吉川幸次郎の『元雑劇研究』（全集第14巻所収）をはじめとして、多くの研究がある。一方、「全相」の語が附された上図下文式の出版物がこの時代には多数存在するが、宮紀子 [1998a] [1998b] は、『孝経直解』を取りあげて、従来大衆文化の産物とされてきたこれらの出版物について、国家の関与した出版物であることを論じ、その性格の再検討をおこなっている。

元朝の社会文化を考える上で有用な文献はそれ以外にもある。『山居新話（語）』『至正直記』『輟耕録』『草木子』などの随筆類は、公的な文献には見えない事実を教えてくれる。『至正直記』は『宋元筆記叢書』に、後の二つは『元明史料筆記叢刊』に、校点本がある。そして、忘れてならないものは類書である。『事林広記』や『居家必用事類全集』などは日用類書と呼ばれるように、それまでの文章作成のための語彙、用例集としての類書とは性格を異にしている。『事林広記』は南宋の陳元靓の撰で、各種の版本があり（森田憲司 [1993] 参照）、中華書局から台湾故宮所蔵本、北京大学所蔵本の、汲古書院から泰定の刊記を有する和刻本の、影印本がそれぞれ出版され、部分的には訳注も公表されつつある（金文京 [2002]、「元代の社会と文化」研究班 [2003] [2004] [2005]）。同書の成立した南宋、あるいはそれ以前の文献に拠る部分もあるが、多岐にわたる内容は、元朝史、とくに社会文化史の史料として役に立ち、言語、科学史、法制史、風俗史など、幅広い分野の研究者が利用している。また、『居家必用事類全集』も内容の多くは日常生活に密着したものである。和刻本は中文出版社の、明刊本は『北京図書館古籍珍本叢刊』の影印本がある。一方、文章作成にかかわる類書としては、『新編事文類要啓筭青錢』（汲古書院影印あり）、『事文類聚翰墨大全』（『北京図書館古籍珍本叢刊』で明刊本が影印）などがある。これらに所収の契約文書のひな形、手紙の書式、各種の規定などが社会史、法制史の研究に役立つことは、仁井田陞 [1956] 以来よく知られており、『中国土地契約文書集』（東洋文庫、1975年）や張伝鏗編『中国歴代契約会編考釈』（北京大学出版社、1995年）の主たる史料源となっている。

◆宗教

宗教の分野では、前の時代から引き続いての新道教の活動をまず挙げねばならない。どの宗派も元朝政権と強いつながりを持った。新道教について詳述して、もはや古典と言える『南宋初河北新道教考』を書くにあたって、陳垣が調査、収集した道教関係

石刻を増補して編まれたのが、『道家金石略』（文物出版社、1988年）であり、この時代の道教を研究するための基本史料集となっている（森田憲司 [1989] 参照）。また、『元代白話碑集録』（既出）にも道教関係のものが多い。新道教の代表的教団は全真教であり、天師道が改称した江南の正一教と並んで、今日に至るまで中国道教の世界を二分する。全真教の歴代についての記事を集めて教団側で作られた文献に、『甘水仙源録』『宮觀碑誌』などがあり、『道蔵』に収録されている。この教団については、戦前からの窪徳忠の研究があり、一般書として窪徳忠 [1967]、論文集に窪 [1992] がある。思想面からの研究としては、蜂屋邦夫の一連の研究があり、蜂屋邦夫 [1998] にまとめられている。横手裕 [1990] は、南宋の内丹道と全真教が一体化して変容をとげ、それが明以降の全真教につながるとする。また、高橋文治に石刻などを材料とした一群の研究があり、モンゴル政権と教団とのかわりや文書行政の担い手としての全真道士を論じており（高橋 [1995][1997a][1997b][1997c][1997d][1997e][1999a][1999b][1999c]）、宮紀子には [2004] がある。元朝時代における最大の宗教事件は、いわゆる道仏論争であろう。この問題については、窪 [1992] 所収の論文や、高橋の上引の論文で取りあげられているほか、最近では中村淳 [1994] が文書行政の担い手の問題とのかかわりから論じている。この事件についての仏教側の文献に元・祥撰撰『至元弁偽録』がある（『大正大蔵経』『北京図書館古籍珍本叢刊』所収）。

仏教については、『元史』に釈老伝があり、野上俊静に『元史釈老伝の研究』（朋友書店、1978年）がある。一方、この時代を扱う仏教側の史書として『仏祖歴代通載』があり、『大正大蔵経』のほか、『北京図書館古籍珍本叢刊』が元刊本を影印する。最近では仏教史の枠組みを離れて、元朝史あるいはモンゴル帝国史の流れの中に仏教を位置づけようとする動きがあり、歴史研究においても漢文以外の仏典の利用が盛んである。元朝ではチベット仏教への信仰が盛んであり、大都にはチベット仏教の寺院が立ち並んでいた（杉山正明 [1984]）。大都のチベット仏教寺院とそこでの儀礼については、石濱裕美子 [1994] や中村淳 [1999] がある。チベット仏教は政治とのかかわりも深く、かつカアンが任命するチベット仏教の最高権力者国師は、チベットの行政のトップでもあった。最初の国師であるパクパの動静、カアンとの関係について、中村 [1993] が論じている。仏教と社会とのかかわりでは、竺沙雅章に、伝統諸宗派の活動や、江南における民間仏教者の白雲宗、大蔵経の出版についての研究などがあり、竺沙 [1982][2000] にまとめられている。

◆周辺地域、とくに高麗日本との関係

元朝がユーラシア大陸の過半を支配したモンゴル帝国の一部分であるがゆえに、周辺の諸地域との関係も中国史の他の時代とは異なるところが多い。日元の関係については、古くから、池内宏、森克己、木宮泰彦などの研究があるが、近年は、元寇をめぐる杉山の発言を除けば、あまり目立った物がなかった。ところが、最近日本史の側から、榎本渉が中国文献を活用しての研究を発表しており（[2001a][2001b][2001c]

[2002])、中国史の側からの積極的な反応が期待される。一方、当時の朝鮮は高麗王朝の時代であるが、高麗は早い段階からモンゴルとの接触があり、紆余曲折はあったものの1259年にモンゴル政権の支配下に入り、高麗王家はカアンの駙馬（娘婿）としての地位をもち続ける（森平雅彦 [1998a][1998b][2001] 参照）。高麗史の基本史料には、朝鮮王朝時代の鄭麟趾編の紀伝体の『高麗史』（1451年編）と、編年体の『高麗史節要』（1452年編）との二つがあり、元朝にかかわる記事を多く含む。また、高麗時代の文集の中にも、元朝時代の中国についての記事が少なくない。たとえば、李承休の『賓王録』（『動安居士集』所収）は1273年（至元10年）の高麗王からカアンへの使者の旅の記録で、貴重な記事を含んでおり（森平 [2004]）、李齊賢の『益齋乱稿』中の中国紀行については、金文京 [2003] で取り上げられている。この時代の文集については、『高麗名賢集』などの形で影印本が韓国で出版されているほか、元朝関連部分を抜き出した『韓国文集中的蒙元史料』（広西師範大学出版社、2004年）もある。

高麗文献で見逃すことのできないものが、『老乞大』と『朴通事』である。いずれも高麗で編纂された漢語会話教科書であるが、当時の漢語資料として重要であるとともに、元朝の中国の社会文化についての情報を少なからず含む。通行本は残念なことに明代における改修を経たものであったが、近年になって、韓国の大邱で『老乞大』の元刊本が発見され、学界で大きな話題となった。影印本（『元代漢語本老乞大』慶北大学校出版、2000年）があるほか、平凡社の「東洋文庫」に訳注が収められて、利用が容易になった（金文京他訳注 [2002]）。船田善之 [2001] が歴史史料としての同書を紹介している。『朴通事』については、田村祐之が部分ながら訳注稿を発表している（田村 [1996-98][1996-2002]）。近世漢語資料としての両書についての研究は多く、そこに見られる漢語の位置づけについても議論があるが、ここではふれない。また、両書には語彙索引がある。

なお、元日麗の交流の実際を見せてくれたのが、韓国新安沖の沈没船で、引き上げられた遺物については、大韓民国文化公報部文化財管理局編『新安海底遺物』（日本語版、同和出版公社、1983年）がある。

第8章

明代

岸本美緒・檀上 寛

1 研究の視点

戦後日本の中国史学界においては、時代区分の問題が大きな論争点となってきたが、明という時代はそのなかで、必ずしも「一つの時代」と見なされてはこなかったといえよう。その理由は、明代後期の16世紀ころから起こった急激な社会経済の変動——商品経済の発展や郷紳勢力の伸長など——が注目され、時代を画する変化がそこに見いだされてきたことによる。従って、この変動に関心をもつ研究者は、明代全般よりもむしろ、そのような変動が持続した16世紀から17世紀（ないし18世紀）即ち「明末清初」を研究の対象として設定する傾向があった。一方で、それ以前を扱う研究者はもっぱら明代前半を研究対象とし、その結果、明代前半の研究者と後半の研究者とが分離し、しかも後者に比重が偏るといった傾向があったのである。

1980年代以降、日本の明代史研究は、方法論や視座の設定において、大きく転換した。西洋的な近代化をモデルとした発展段階論が退潮するとともに、従来集中的になされていた明末研究も相対化され、明初・明中期にも一定の目配りがなされるようになった。政治動向をおおむねにしてきた従来の社会経済史への反省からか、政治史研究や軍事史研究が盛んになったのも特徴である。一國史的理解を越えた東アジア史の観点から、明と周辺諸国との連関性を明らかにしようという動きも、従来以上に活発になってきた。

明代初期についていえば、元を継承した多民族的世界国家としての側面に注目して明初の政治・軍事・経済をとらえようとする研究が盛んになっている（檀上寛 [1997a] など）。英語圏でも、従来、唐末から宋初の時期と明末清初期という二つの変革期の間で明確な歴史的意義を付与されることの少なかった南宋から明初の時期に改めて注目し、「宋一元一明変革 (Song-Yuan-Ming Transition)」の意味を問おうとする動きがある (Smith and von Glahn (eds.) [2003])。一方、明末についてみれば、

この時期の社会経済変動をグローバルな銀の動向や国際商業の活発化との関連で理解しようとする動向は、1980年前後の歴史学界全体における世界システム論の影響力の強まりとともに顕在化してきた。社会経済の変動のみならず政治・軍事・文化の動向をも含めて、16世紀後半以降の東アジア・東南アジアの変動を総合的にとらえようとする試みも行われている（岸本美緒 [1998] など）。

明一代についての概説書としては、南炳文他 [1985, 91] があり、中国におけるスタンダードな見解をバランスよくまとめている。日本における近年の明清史概説としては、岸本美緒・宮嶋博史 [1998] や神田信夫編 [1999] があり、いずれも新見解を盛り込んだ叙述がなされている。研究史・資料・工具書・論文索引を含んだ明代史研究の手引きとして、李小林他編 [1988] があり、中国大陸を中心とした研究動向を知ることができる。そのほか、中国での研究状況を知るためには、南 [2001] 及び趙毅他編 [2002] がいずれも20世紀の明代史研究を詳細に回顧しており、有用である。

日本の明代史研究論文の目録としては、山根幸夫編『新編明代史研究文献目録』（汲古書院、1993年）があり、韓国の明代史研究文献目録も付載されている。山根によって毎年一冊刊行されている『明代史研究』には、前年の日本及び韓国の明代史関係論文目録が載せられているほか、新刊の主な著書が山根による解題つきで挙げられており、最新動向を知るのに有用である。中国の明代史研究論文目録としては、中国社会科学院歴史研究所明史研究室編『中国近八十年明史論著目録』（江蘇人民出版社、1981年）があり、台湾・香港で出版されたものも含めて中国語の論著を網羅している。しかし刊行後かなり時間もたっているため、新しい論文については、上記の南炳文・趙毅らの研究回顧を参照すべきであろう。このような目録で明代史の研究状況を把握するのみならず、前後の時代や隣接地域、また文学や農学・人類学など他分野の研究にも広く目を配ることによって、独自の新たな視点を獲得することができるだろう。

以下、本章は、16世紀初を境として、明代初期・中期と後期に分けて述べることにする。
(岸本美緒)

2 研究の展開

〈1〉明代初期・中期

◆初期明帝國論

明前半期の研究に関わる重要課題の一つは、初期明朝国家をどのように位置づけるかということである。宰相府である中書省の廃止や朱元璋の恐怖政治によって、中国の専制体制が明初に極端に強化されたことは従前から指摘されてきた。その意義を政治・社会的動向と絡ませ、有機的に跡づけたのが檀上寛 [1978] であり、のちに思想

関連の論考とあわせて檀上 [1995] が著された。永楽の北京遷都を政権確立のメルクマールと見るのは定説だが、檀上の場合、洪武帝での北方への遷都計画に注目し、洪武・永楽朝を連続面から捉えた点に特徴があった。これに対して新宮 (佐藤) 学は洪武と永楽との断絶面に着目し (新宮 [1997])、洪武期の南京京師体制と永楽期の北京京師体制の異質性を強調するとともに、新宮 [2004] で北京遷都の明代史上での意義を体系的に論じた。このほか松本隆晴 [1984] は洪武朝の中都 (鳳陽) への遷都計画と挫折の状況を明らかにし、大田由紀夫 [2001a] は新宮・松本の説を踏まえて、中都放棄が南京中心の洪武体制を生み出したと説き、大田 [2003] でその説を補強した。また藤高裕久 [2001] は檀上 [1995] の思想面からの分析を受け、永楽政権が篡奪性を払拭して社会に内在化するために、北京遷都とモンゴル親征を行ったとする。なお明代を特徴づける両京 (北京・南京) 制度については、Farmer [1976] が軍事・経済面からその確立の意味を問い、明の中都の変遷については王剣英 [1992] が詳しい。

洪武・永楽朝に挟まれた建文朝の性格と、その間に展開された靖難の変 (役) の位置づけは、連続性・断絶性の問題と関わって重要である。もともと燕王 (永楽帝) と建文帝との内戦である靖難の変は、洪武朝が南京京師体制を採用したため、北辺に諸王を分封したことに起因する。この諸王分封体制を明初国家論の中に位置づけたのが佐藤文俊 [1993] であり、その後明一代の諸王問題を跡づけ佐藤 [1999] を著した。分封体制の破綻とみなせる靖難の変、および建文朝の政策については阪倉篤秀 [1978] の先駆的な研究があり、さらに内外の研究を整理した上で、建文朝の特異性を指摘したものとしては檀上寛 [1992] がある。しかし建文朝を真正面から取り上げたのは川越泰博の一連の研究で、燕王勢力と建文政権とを多角的に分析して川越 [1997a] をまとめあげた。そこに掲載された靖難の変や建文朝関連の論文目録も有用である。浙東学派の思想を通して明初の政治をたどる Dardess [1982] も、建文朝に関してユニークな論を展開する。

明初の国家体制を理解する上で、元朝と明朝との関係をどう捉えるかも重要な要素である。早くは宮崎市定 [1969] が元・明の連続性を指摘して以来、最近では連続性の観点から明初体制を把握することが一般的である。明初の官制や王府制度・鄉村組織など、確かに元朝の影響なくしては考えられない。かつて三田村泰助 [1976] は、元・明・清を多民族の「世界国家」とみなして三王朝の連続性を強調したが、明初の多民族性に注目する檀上寛 [1997a][1997b] も、世界国家の視点で北京遷都を捉えなおしている。清朝を多民族国家の完成期とすれば、三王朝の連続性から見た新たな明初国家論の構築も可能であろう。

なお、明代の皇帝については中国から種々の伝記が出版されており、「明代帝王系列伝記」(遼寧教育出版社)、「明帝列伝」(吉林文史出版社)、「中国歴代帝王伝記」(人民出版社)などのシリーズ本の他、朱元璋についての陳梧桐 [1993] や、永楽帝に関する朱鴻 [1988]、毛佩琦・李焯然 [1994] など史料を博搜して重要。

◆明初体制と官僚制

明初の専制主義の高まりは、政治が社会を圧服する「固い体制」(岸本美緒 [1995]) いわゆる明初体制を生み出した。この体制は基本的には洪武・永楽期に確立されたが、なかでも洪武期の疑獄事件と行中書省・中書省の廃止など、政治・官制改革との関連性を統一的に理解したのが檀上寛 [1978] である。このうち最後の疑獄である「藍玉の獄」については、『逆臣録』をもとに川越泰博 [2002a] が仔細に分析し、洪武期の軍制改革との関連を指摘した。また中書省廃止後の中央官僚機構に関しては、内閣と吏部との複眼的視点で明中期までたどった阪倉篤秀 [2000] がある。櫻井俊郎 [1992] は、官僚制を支える文書行政の中核ともいえるべき上奏文の処理制度を論じる。

官僚制をになう官僚は主に科挙を通じて輩出した。明代科挙制度の特徴は受験生を学校の学生 (監生・生員) に限定したことで、これに伴い官僚を頂点に科挙体系に基づく身分序列が生じたとされる。呉金成 [1990] はこれら紳士層の形成を徭役免除 (優免) と絡ませ検討し、渡昌弘 [1999] も同様の問題を扱う。こうした社会経済史方面からのアプローチとは別に、政治制度の中で科挙 (学校) を論じたものに五十嵐正一 [1979]¹ がある。同書は民衆教育のための社会学や学校の儒学教官にも言及するなど、日本ではほとんど唯一の明代教育史の専著といえる。また和田正広 [2002] は科挙の制度的側面と身分制の問題を多面的に論じて、その政治的社会的機能を考察する。この他、松本隆晴 [1979] は洪武期の富民と学校との関係を、渡 [1983] は洪武期の科挙の再開問題を、檀上寛 [1986] は地域別取士制度である南北卷の由来を、鶴成久章 [2002] は会試の実態を分析する。渡にはまた監生に関する一連の研究もある (渡 [1986][1990][2003])。

科挙合格者の官僚への任用については、大野晃嗣 [1999] が初任官ポストを「同年齒録」に基づき統計学的に分析し、明中期での科道官 (給事中・御史) への上昇コースの成立を明らかにした。また科道官の任用・昇進に関しては、城井隆志 [1987] [1993a][1993b] がある。阪倉篤秀 [1987][1989a] は科挙合格者の人材留保制度=庶吉士制度の意味を問い、和田正広 [1985] は明中期以降の地方官ポストで、進士偏重が顕著になった経緯を論証する。

国家による官僚・軍人に対する統制は、監察・考課制度を通して達成された。中央の監察機構である都察院に関しては、小川尚 [2001] が明代監察制度の変遷を南京都察院も含めて考察し、小川 [2003] は都察院の成立期に視点を当てて、その特色を論じる。地方については、小川が監察御史と按察司官との地方監察制度の成立過程を跡づけ、日本で最初の専著を著した (小川 [1999])。明代監察制度全般を知るには、張治安 [2000] が役に立つ。地方監察官を統率する巡撫制度をめぐっては奥山憲夫 [1986] があり、張哲郎 [1995] はその沿革を明一代にわたって論述する。なお科道官については、曹永祿 [2003] が渡昌弘によって翻訳された。また官僚の勤務評定である考課を検討したものに、車恵媛 [1997]、和田正広 [2002] などがある。

明代専制政治の特徴の一つは、宦官に特務や監察の権限を付与したことで、この分

野の先駆的研究である丁易 [1983 (1949)] は今なお有用である。野田徹 [1993] は明代宦官制度を内官職と特務職に分け、宦官が特務職を帯びたことが外臣と並ぶ政治集団に成長した理由だとする。これを受けて進藤尊信 [2002][2004] は宦官組織のトップに立つ司礼監の職制を分析し、野田は地方の監軍をになう鎮守太監の制度的変遷を明らかにした(野田 [1996][2000])。これらに共通するのは、宦官を皇帝に対する単なる寄生的存在と見ず、「内朝官僚」としての官僚制的側面から捉えなおそうとする試みである。なお、中国では最近宦官関連の史料・伝記類の出版が目立つが、宦官個人を取り上げた日本での研究は、正統朝の喜寧を掘り出した川越泰博 [2002b] や、正徳朝の劉瑾に関する間野潜龍 [1980]、阪倉篤秀 [1983] があるくらいである。

国家機能の中核をなす法律制度には、清代から遡及する形で関心が高まりつつあるが、論文数は清代に比べて依然として少ない。例えば罪囚の審録をめぐる谷井陽子 [1996][1999] が裁判機構の制度的な側面を論じ、陶安あんど [2001] は審録で適用される罪名のカテゴリーを、罪名例の変遷と関連づけて検討する。また雑犯死罪以下に対する贖法(財産刑と労役刑)については、宮澤知之 [1996] や陶安 [1999a][1999b] の分析があり、明代贖法の刑罰史上での意義を問う。その他、法運用面での律と例との関係を論じる加藤雄三 [1997-98] や、「威逼人致死」条の淵源を考察する高橋芳郎 [1999] も挙げておきたい。明代裁判機構の全体像については、楊雪峯 [1978] や那思陸 [2002] が役に立つ。

最近の日本の明代史研究の特徴に政治史への関心の高まりがあるが、従来ほとんど顧みられなかった明中期にもそれはいえる。岩瀬慎 [2003a] は永楽朝と洪熙朝との違いを人事面から論じ、新宮学 [1993a][1993b] は北京遷都後の南京遷都問題をあつかい、荷見守義 [2000a] は宣徳帝の皇后孫氏の評価を通して、宣徳・正統・天順時代の政治を見る。また川越泰博 [2001] は土木の変で捕囚された正統帝の行動を跡づけ、荷見 [2000b] は土木の変と景泰朝の混乱した政局を描く。川越 [2003a] は日本で唯一の正統帝に関する伝記である。対象が政治上のトピックに限定されるとはいえ、着実に中期史研究の蓄積がなされているといえよう。

◆軍事制度と戦役

専制国家を根底で支えるのが強大な軍事力であることはいままでもない。1970年代初頭に海防研究から出発した川越泰博は、その後、明代軍事制度の根幹をなす衛所制度の研究をリードし、その編制や組織、さらには管理・維持に関わる借職制・優養制の実態を明らかにした(川越 [2001])。国初期の衛所を扱う徐仁範 [1999]、奥山憲夫 [1999] の他、首都防衛軍の京営については青山治郎 [1996] がその成立から崩壊までの過程を跡づけ、奥山 [1980] も中期以降の京営内部に権力構成の変化があった点を指摘する。また奥山は衛所を構成する軍官・軍士の人事や給与に関して一連の考察を行い、社会経済史的要素を加味した軍政史の専著を初めて著した(奥山 [2003])。顧誠 [1998] および顧誠の研究を紹介した新宮学 [1998] は、衛所を州県の行政系統と並ぶ地方統治の単位とみなすなど示唆に富む。軍士を供給する軍戸の社

会的地位については、于志嘉 [1990a][1990b] を参照。松本隆晴 [2003] は、出動した軍隊を指揮する総兵官を考察したもの。川越の研究を除き、日本ではほとんど未着手の海防・江防問題については、黄中青 [2001]、呂進貴 [2002]、林為楷 [2003] などが最近相次いで出版された。

軍事史のジャンルの一つとして、靖難の変や土木の変など戦役に関わる研究がある。前者については川越泰博 [1997a] に詳しいが、特に川越 [1990a][1990b][1990c][2005] は衛選簿(武職選簿)をもとに、建文帝や燕王麾下の衛所官・衛所軍の動向を描き出す。ちなみに衛選簿を使った研究としては、別に鄭和の遠征軍を分析した松浦章 [1998] や鄧茂七の乱に関する松浦 [1997] がある。土木の変については、同じく衛選簿を用いて川越 [1993] が親征軍の構成を分析し、親征が決して通説にいう突発的なものではなかったことを論証した。また捕囚中の英宗に近侍した袁彬の『題本』の史料価値を論じる川越 [1997b][1998]、変後の情勢を伝える『李実題本』に関する川越 [1994]、さらには『李実題本』に基づき勤皇軍の編制を論じる徐仁範 [2000] も見逃せない。土木の変後の募兵制の問題や衛所制度の変質については徐 [1995][1997] を参照。

土木の変は単に明朝とオイラトとの間だけでなく、周辺諸国とりわけ朝鮮に大きな影響を及ぼした。荷見守義 [1995][1999] は冊封体制下の朝鮮に焦点をあて、変後の混乱下での朝鮮の対応を多角的に論じるとともに、北京と漢城(ソウル)とを仲介する遼東都司の主体的動きに注意を喚起する。荷見には永楽期の中朝関係を論じた荷見 [2002] もある。なお、北辺地帯でのスパイ活動や異国情報に関わる論考を集めた川越泰博 [1999][2003b] もユニークな研究である。このほか明代北辺防衛体制に関する最近の成果としては、松本隆晴 [2001] を挙げておきたい。

◆貨幣・財政・流通

1980年代以前と以後とで、アプローチの方法・視座の設定が最も変化したのは、社会経済史の分野である。かつて明代史は土地制度と国家の農民支配をつなぐものとして賦役制度が注目され、活発な論争とともに膨大な研究が蓄積された。80年代以降に続々と刊行された川勝守 [1980]、濱島敦俊 [1982]、岩見宏 [1986]、森正夫 [1988]、小山正明 [1992]、谷口規矩雄 [1998] などが代表的な成果である。その一方で、80年代になると新たに貨幣・市場構造・商品流通・財政政策などに関心が向かい、これらを通して中国社会を構造的に把握しようという動きが急浮上してくる。ただし、そこでの対象は主に明末から清代に偏り、明前半期の研究が依然として少ないことは、田口宏二郎 [1999] の手堅い整理からも窺える。

明前半期に関わり最も関心を集めているのは、貨幣に関する問題である。まず足立啓二 [1989] は明代中期の京師の銭法を取り上げ、「国家的支払い手段」が銭から銀へと移行する過程での銅銭の機能的意義について考証した。これを踏まえた足立 [1990a][1990b] は、明清時代を銭経済から銀経済への移行期とみる通説に対し、銭機能の転換と銭経済の発展という図式で捉えるべきことを主張する。中国の貨幣につ

いて通史的把握を試みる宮澤知之は、初期明朝政権が錢鈔体制の形成を目指しながらも、二種の貨幣が国家的信用を喪失したことで、銀が中国の内部貨幣となる経緯を明らかにする(宮澤 [1993])。また足立が錢流通の混乱を「国家的支払い手段」「国家的信任」の喪失に求めた点については、銅錢が本来的に持つ非還流的性質によるものだとの大田由紀夫 [1997] の反論がある。

明代の鈔法については、政治史的観点から考察した檀上寛 [1980] や、財政史的観点から錢・銀との関係を捉えなおす宮澤知之 [2002a] などがある。また大田由紀夫 [1993] は徽州文書の分析を通じて、明初の鈔法の崩壊・銀流通の一般化の原因を、北京遷都以降の行・財政システムの転換に求める。大田 [2001b] は元・明代を「鈔の時代」と規定し、洪武体制という特異な財政・統治システムのもとで通行した鈔が、永楽朝以降の北京京師体制への移行により、その歴史的使命を終えたと結論する。

最近の貨幣史の特徴は、中国国内にとどまらず東アジア規模に拡大して理解する点にある。足立啓二 [1991][1992] は、「国家的支払い手段」である銅錢が中世日本で流通した事実を、日本が中国の内部貨幣システムに組み込まれた結果だと見る。この点についても大田由紀夫 [1995] の反論があり、大田は12~15世紀の渡来錢の日本での流布の時期を検討し、むしろ「国家的支払い手段」をやめた時にこそ、日本での主要な通貨となったという。大田はのちに16世紀まで視野を広げて自説を補強している(大田 [1998])。また黒田明伸 [2003] は、13世紀段階の中国周辺に「環シナ海錢貨共同体」の形成を認め、やがて16・17世紀にその共同性が解消し出す経緯を論証する。

貨幣と不即不離の関係にある財政システムについては、財政的物流と市場的流通の違いを強調する中国史研究会の足立啓二や宮澤知之の研究がある。両者の説は先述の貨幣論と密接に関連しており、財政を専制国家による社会統合の手段と位置づけ、そのありようを分析する(足立 [1990a], 宮澤 [1999][2002b])。一方、岩井茂樹 [1994] は宋以後兩税法体制下の財政と徭役との関係を問い、専制国家の財政システムを貫通する「原額主義」と、財政需要との乖離が徭役問題を生み出したとして明中期の均徭法に新解釈を加える。岩井は中央の法定的な統一財政とは別に、地方の請け負的構造のもとでの分散的な財政に着目しており、国家による集権的社会統合を説く足立や宮澤ら中国史研究会の考えと対蹠的な立場に立つ。

永楽帝の北京遷都以降、北京を中心とした物流システムが形成されるが、これについては新宮学の一連の研究を挙げねばならない。遷都に伴う人口移動を論じた新宮 [1991] をはじめ、北京の倉庫業(官店・塌坊)の実態と変遷を描いた新宮 [1990a], また都市商工業者への「鋪戸の役」や「牙税」を分析した新宮 [1984][1990b] などがある。北京・通州間の陸運・水運に関連して、在地社会の動向を考察した新宮 [2000] も重要。なお江南からの漕糧については、京倉と通倉での備蓄・配分の実態を考察した田口宏二郎 [2000] が詳しい。この他、新宮 [1985] は南京の「鋪戸の役」を論じている。

◆在地社会の諸相

1980年代以来のいわゆる「地域社会論」に関しては、多くの論者によって整理がなされているが(例えば山本進 [1998], 三木聰 [1998], 山田賢 [1998], 伊藤正彦 [1998]), 国家と社会との関係如何については、依然として意見の一致を見ていない。ここでは明前半期の国家と在地社会に関わる論考にしぼって紹介したい。里甲制をはじめ明朝の郷村統治システムが、明朝成立に貢献した浙東地主の理念の具現化したものであることは、つとに濱島敦俊 [1982] によって主張されてきた。伊藤 [1997] は元末寧波の思想家趙偕のプランを、明初の地方政治改革の先駆と位置づけ、元・明の連続性を強調する。また里甲制については、井上徹 [1990] が先行研究を整理した上で里甲制に込めた国家の意図を説き、岩井茂樹 [1997] は里甲を公課負担団体と規定するとともに、それが機能不全に陥った要因を検討する。

在地社会の秩序と国家の郷村支配に関わり、特に関心を集めているのが里老人の問題である。先の井上徹 [1990] は国家が「里」を基盤にいかなる秩序を形成しようとしていたかと問題提起し、里老人制と地主の政治思想との比較検討に注意を喚起する。一方、三木聰 [1992] は『教民榜文』に見える国家の理念と郷村社会の現実との相違から、里老人制の原則は明初からなし崩し的に空文化していたことを指摘する。これに対して中島楽章 [1994][2000] は、その原則が明中期まで保持されていたことを主張し、徽州文書を駆使して里老人による紛争処理システムの変遷を跡づけた(中島 [2002])。この他、伊藤正彦 [1996] は里老人制を国家が郷村社会の紛争処理慣行を利用した賦役制度であったとみる。なお里老人の前身である耆宿については前迫勝明 [1990] がある。里老人制を実施した国家の意図が那辺にあるかは、今後も検討すべき課題であろう。

在地社会の実態を解く鍵に宗族の問題がある。井上徹 [1992][1993] は浙東・浙西の地主・士大夫が朱元璋の弾圧を受ける以前、宗族形成の志向性を強めていた点を諸種の文集に基づき明らかにする。こうした「宗法主義」の復活に対する初期明朝の対応については、井上 [1995] を参照。井上 [2000] は自身の研究をまとめ、明初の国家弾圧による宗族形成の中断、中期以降の再開と普及、そして清代の在地社会での定着の経緯を論じたもの。宋以後、明清に至る宗族の研究については、井上 [1987][1998a][1998b], 遠藤隆俊 [1994] などの整理が役に立つ。

井上徹が宗族結合の契機を名門の家系の存続=科挙合格者の確保に求めるのに対し、移住・開発の視点から宗族を捉える上田信は、同じ浙東地域を例に水利の維持・管理が宗族の求心力を活性化させたとする。上田によれば、宋元時代には地域間の移住が盛んであったのが、明前半期には県内の範囲にとどまるとし、地域構造の不変性をもって里甲制存続の一つの根拠と見る(上田 [1983][1984])。また上田 [1995] は明清時代の浙東の諸壟盆地に焦点を当て、宗族を中心とした地域秩序と国家との関係を描き出す。この他、金華の義門鄭氏を論じた檀上寛 [1982][1983] や、徽州の宗族を対象とした鈴木博之 [1994][1997], 中島楽章 [1996] などがある。

中国の在地社会での村落共同体の存否については意見が分かれるが、そこに何らかの社会的共同性が成立していたことは否定できない。城隍神を通じて明初の国家祭祀政策を分析した濱島敦俊は(濱島 [1988])、その後、現地調査も交えて江南デルタの総管信仰を考察し、明中期までの小農民の生活空間が、土地廟を中心とした「社」の範囲に限定されていたことを指摘する(濱島 [2001])。元の社制や明の里甲制は、「社」での共同性・活動を基礎にしていたとし、祭祀・信仰という従来の共同体論にはない視点を初めて提示した。なお明初の国家祭祀政策に関連して、その基調に朱子学的発想を認める小島毅 [1990][1991]がある。

◆海禁と東アジア国際関係

明を中心とした14・15世紀の東アジアに関しては、倭寇問題にせよ日明貿易にせよ、かつては日本史方面からの研究が主流であった。最近の日本の研究の特徴に、国を越えた地平から歴史を照射しなおす試みがあり、倭寇や海民、あるいは海禁、貿易問題が、日本史・東洋史を問わず新たに注目されている。東アジア海域を生活の場とする海民・海賊・倭寇については、藤田明良 [1997]が元末明初期の舟山群島の海民を通して、中国と朝鮮半島との交流を描き、奥崎裕司 [1990]は海賊方国珍と倭寇とのつながりを指摘する。寺地遵 [1999]は浙江沿岸部に誕生した方国珍政権の性格を論じ、檀上寛 [2003]は方国珍勢力の水軍の実態と、明朝成立後の海賊・海民への国家の対応を跡づける。有井智徳 [1985]は倭寇をめぐる明と高麗との交渉を検討したものの。

明朝の対外政策を特徴づける海禁に関しては、鄭樑生 [1985]や佐久間重男 [1992]に詳しいが、大隅晶子 [1990]は海禁の目的を違禁物資の流出防止にあるとし、檀上寛 [1997c]は沿岸部の治安維持(海防)をめざした海禁が、やがて朝貢制度とドッキングして海禁=朝貢システムを形成したとする。南海諸国との関係から見る桃木至朗 [1999]は、明朝は元朝のような海上商業帝国への途を閉ざし、小農を基礎とする政治帝国を選択して海禁を断行したといい、檀上 [2004]は海禁を明清時代ならではの海洋統制策とみなして、海禁概念の形成過程を跡づける。なお中国では1980年代以降、改革開放政策と関連して海洋史研究が活発化し、李金明 [1990]、陳尚勝 [1993]、万明 [2000]などの成果を次々と生み出している。現在、継続して刊行中の楊国楨主編『海洋与中国叢書』(江西高校出版社)にも、明代海洋史に関する貴重な研究が多く含まれる。このほか最近の中国学界での海禁・倭寇研究を整理した熊遠報 [1997]も参考になる。

明を中心とした東アジアの国際秩序については、洪武・永楽期の朝貢制度全般を論じる大隅晶子 [1982][1984]や、朝鮮の冊封を考察する北島万次 [1995][1996]の他、明初の東南アジア諸国との関係を論じた藤原利一郎 [1986]がある。海禁体制下の琉球関連の研究は数多いが、近年の研究としては、さしあたり明初の琉球優遇策を論じた岡本弘道 [1999]と「閩人三十六姓」を扱う真栄平房昭 [1993]、また啓蒙書ではあるが豊見山和行 [2002]を挙げておきたい。Levathes [1994]と宮崎正勝 [1997]

は、国際秩序確立の一環としての鄭和の南海遠征を概観する。前者については注を割愛した邦訳のリヴァシーズ [1996]がある。また明清期の冊封体制を通観したものに佐久間重男 [1990]や川勝守 [2000]があり、岸本美緒 [1998]は「伝統社会の形成」をキーワードに、14世紀以降の東アジア・東南アジアの国際関係を俯瞰する。

日明関係については豊富な蓄積があり、すべてを紹介することは不可能である。代表的な成果に、田中健夫 [1975]、鄭樑生 [1985]、村井章介 [1988]、佐久間重男 [1992]などがある。最近では橋本雄 [2002]が遣明船の派遣の契機を実施年ごとに検討し、伍躍 [2001]は宋元時代の「公憑」「公驗」や清代勘合をもとに、明代勘合の形状論争に新説を提示する。鹿毛敏夫 [2003]は、大友氏と東アジア海域世界との関わりを考察したもの。元末内乱期の日中間の往来を論じた榎本渉 [2002]や、明初期の日本への渡来人をリスト化した榎本 [2003]も重要。他に蔭木原洋 [1996] [1997]が洪武期の日明関係の諸問題を整理し、檀上寛 [2000]は日本を巻き込む林賢事件の信憑性に疑問を呈する。また中島楽章 [2003]は、従来未解明であった永楽期の日明貿易の実態を、『敬止録』に基づき明らかにする。東アジアの国際関係については、今後は日本史・東洋史の相互交流を深めることで、より緻密な研究成果が期待できるであろう。(檀上 寛)

〈2〉明代後期

◆政治と官制

明代後期の中国では、中央のみならず地方社会をもまきこんだ全国的な争いが展開してゆく。その基本形をなしたのは張居正と東林派の対立であり、明末政治史研究の焦点もやはりここに存在するといえよう。張居正に先立つ内閣首輔として明朝政治のあり方を大きく転換させた徐階については、川勝守 [1990]、中純夫 [1991]があり、その政治手法や思想の分析が行われている。張居正の中央集権的な官僚統制を典型的に示す考成法については、小野和子 [1996]の第一章「東林党と張居正」が東林党との関係で論じている。東林党と張居正との対立を「進歩と反動」の対抗ととらえた上でいずれが進歩的かを論ずる議論も、過去にはしばしばなされた。しかし小野によれば、商品経済の発展による王朝の矛盾の激化のなかで新しい政治体制を模索したという点で張居正と東林派は共通であり、ただ中央から地方をコントロールしようとする張居正と地方から中央をコントロールしようとする東林派とでは、その発想が根本的に異なっていたのだ、という。そのほか考成法に関しては、「治法主義」という観点から張居正の官吏統制の意義を分析した岩井茂樹 [1993a]、その実効性についても論じた谷井陽子 [2002]がある。岩井 [1989]は、財政の側面から張居正政治の特質を論ずる。山西商人との関係で張居正の対外和平政策を論じたものとして、小野和子 [1996]第二章「万曆前期の対外問題」がある。章慶遠 [1999]は、張居正の政策の全体像を詳細に描き、その功罪を是々非々に評価する。英語圏・漢語圏を通じ広く

話題を呼んだ黄仁宇 [1989] は、万暦 15 年 (1587) 前後の政界・思想界の人物たちの動静を通じて明末政治の性格を描きつつ、「道徳」を第一義とする政治文化が中国を衰退させた、と論ずる。

東林党から復社に至る政治潮流については、小野和子の著書 [1996] に収録された一連の論文が詳しく、対象への共感に裏打ちされた克明な叙述がなされている。溝口雄三 [1978] は、東林派といわれる人々の郷村での活動に焦点をあてて、彼らの「郷村ヘゲモニー」による改革構想をとらえる。復社に関しては、井上進 [1993] が綿密な考証により復社同人のリストを作成しており、これを基礎として、京都大学人文科学研究所「明末清初の社会と文化」研究班編『復社姓氏索引』(1995 年) が作られている。明末の政争を引き継ぎ複雑な展開を示した南明政権については、Struve [1984]、顧誠 [1997] が全体像を提供する。復社の関係者が清に対しておこなったレジスタンスについては、小野 [1996] 第九章「復社の人々とレジスタンス」のほか、嘉定の侯氏の抵抗運動を地域社会全体のなかに位置づけてとらえたデナラインの研究がある (Dennerline [1981])。谷口規矩雄 [1986] は、明朝倒壊期の浙江東陽県で起こった民変の鎮圧過程を南明政権との関わりで論ずる。

明代後期政治史のなかで従来否定的な評価を受け、ほとんど扱われてこなかった人物に、新たに注目する動きもある。「反東林派」とされる沈一貫や顧天峻を扱った城井隆志の研究 [1985a] [1990] はその例である。大木康 [1997] は、「奸臣」嚴嵩のイメージが彼と敵対していた文人王世貞らによって作られ、明末に広く流布するに至ったことを指摘する。中国でも、張頌清 [1992] をはじめとして嚴嵩を扱った伝記が数種出され、再評価の可能性をも含んだ実証的研究が目指されている。

明代後期の官制改革は、政治の動きと深く関わっている。阪倉篤秀 [1989b] は、万暦年間に外官人事をめぐる内閣と吏部との対立が激化してゆくなかで、その対立を回避するために掣籤法 (くじ引き) という方法が採用されざるを得なかったことを論ずる。和田正広 [2002] 第三篇「官僚考課制と腐敗」所収の諸論文は、明代後半以後、官僚相互の結託によって地方官の考課 (成績評価) 制度が機能しなくなり、代わって衙役や窮民を通じて地方官評価のための情報提供が行われるようになった過程を分析している。考課制度については、櫻井俊郎 [1996] が張居正に先立つ高拱時代の政策を論じ、車恵媛 [1996] が地方世論との関係で考察している。和田にはまた、明末東北の軍閥李成梁の勢力拡大を「官僚制の腐敗構造」という視角から分析した一連の論文があり、それらは和田 [1995] にまとめられている。谷井俊仁 [1993] は、明末の南京車駕司の執務参考書を通じて文書行政のメカニズムを解明している。そのほか、16 世紀前半の翰林院改革については、城井隆志 [1985b] がある。以上、明代官制の研究動向については、大野晃嗣の整理 [2003] が参考になる。

科挙制度の動向に関しては、エルマンの浩瀚な著書 (Elman [2000]) のなかで、明代についても相当の紙幅が割かれている。エルマンの科挙研究の一部は、日本語でも読むことができる (『再生産装置としての明清期の科挙』『思想』810, 1991 年；

『明代後期の科挙における「自然学」』『中国——社会と文化』11, 1996 年)。和田正広 [2002] 第一篇収録の諸論文は、科挙の出題科目など、明代科挙の諸問題を扱う。

◆経済と財政

戦後の中国や日本における明末経済史研究を特徴づけていたのは、資本主義的発展の可能性に焦点を結ぶ問題関心であった。西嶋定生 [1966] や田中正俊 [1973] に収録された農村工業関係の諸論文は、今日でもまず参照すべき古典的な業績である。戦後日本の明清商品生産研究の動向については、岩井茂樹 [1993b] が整理している。中国で 1950 年代に活発におこなわれた「資本主義萌芽」論争に関しては、中国人民大学歴史教研室や南京大学歴史系中国古代史教研室によって数種の論文集がまとめられた。文化大革命終了後も、その問題関心は引き継がれており、許滌新他編 [1985] は中国の学界の力を結集したその集大成といってもよいだろう。資本主義萌芽論争の一翼を担った傅衣凌の論文集 [1982] は、明清経済の諸側面に対する傅の多面的関心を伝えている。農業における雇用労働の問題を論じた李文治・魏金玉・経君健の論文集 (李文治他 [1983]) や、統計的な資料を多く含んだ李文治 [1993] も、ぜひ参照すべき充実した業績である。

「資本主義萌芽」論が西欧の歴史経験モデルとして中国の歴史を裁断する偏りをもっていったことは、現在の中国では広く認識され批判されているといつてよいであろう。そのような批判の上にたち、旧来の議論の克服をめざすものとして、李伯重の一連の研究 [2000] [2002] がある。李伯重の研究は、江南を中心とした手工業の発展 (『早期工業化』) を扱ったもので、紡織業に集中していた従来の研究と異なって食品業や日用百貨製造など広範な領域に目を配り、また、その発展条件として生産関係のみならず資源・環境や市場などの具体的問題に注目する。明清時代の江南においてエネルギー・資源節約型の軽工業が同時代の西欧に劣らぬ高度の発展を見せたことを強調しながら、それを資本主義発展の必然性といった文脈ではとらえない李伯重の見解は、ポメラッツ (K. Pomeranz) や王国斌 (R. BinWong) など、西欧中心ではない中西比較を通じて新たなグローバルヒストリーをめざす新潮流にさおさすものといえる。

明代後期の経済をめぐる近年の研究の特色の一つは、農業にせよ手工業にせよ、環境や技術への関心が増大したことである。川勝守 [1992] に収録された諸論文は、稲の品種や「春花」(裏作) 栽培など、江南における農業技術の問題に重点を置いている。濱島敦俊 [1986] は、従来から著者が注目していた明末江南デルタにおける「分圩」現象を、開発の進展に伴う土地の高度利用のための工学的適応として分析している。湖南の沼沢地帯を扱ったパーデュー (Perdue [1987]) や嶺南を扱ったマークス (Marks [1998]) などは、いずれも特定の地域の自然・人文環境に注目しつつ、開発に伴う社会経済の変容を考察している。呉金成 [1990] 第二篇に収録された諸論文も、長江中流の三省 (江西・湖北・湖南) の水利開発における紳士の役割を論ずる。田口宏二郎 [1997] は、農業・水利技術と行政を関連づけつつ、北京周辺の水利開発の問題を考察する。谷光隆 [1991] は、明代の河工に関する谷の論文の集成。クリスチャ

ン・ダニエルズの一連の論文 [1988][1992][1995] はそれぞれ、明末清初の製糖技術、甘蔗栽培技術、竹紙製造技術を扱ったものである。

近年の明清経済史研究のもう一つの主な発展方向として、広義の流通（国家的物流を含む）を媒介に結びついた経済システムの解明を挙げることができる。徽州商人を扱った藤井宏 [1953-54] や山西商人を扱った寺田隆信 [1972] のような商人研究が必読の文献であることはいうまでもないが、近年の傾向は商人の活動それ自体よりも、それによって統合される市場の構造に重点を移しているといえよう。三木聰 [1987] と黒田明伸 [1999] はともに明末清初の福建の市場構造を分析するが、前者は米穀や商品作物の流通を分析しつつ抗租・阻米運動の背景としての市場構造を論じ、後者は私鑄銭流通を例として、当時の環シナ海経済の構造——それぞれの銭貨を独自に流通させつつ互いに影響を与え合う地域経済の併存——を考察する。農村の生産関係から流通へと関心の重点が移行したことに伴い、商業中心地としての市鎮研究が盛んになった。川勝守の一連の市鎮研究は川勝 [1999] にまとめられている。森正夫 [1996] は影印版で新たに出版された郷鎮志のシリーズを用いて、明末江南の郷鎮志に見られる社会像を分析する。明末都市については多くの研究が扱っているが、ここでは明代都市の諸側面を総合的にまとめた韓大成 [1991] を挙げておく。福建都市の防火行政を扱った堀地明 [1995] もある。

岸本美緒 [1997] 第六章「明末の田土市場に関する一考察」は、国家財政を媒介とする南から北への銀の動きが明末の内地農村に不況をもたらしたことを論じた。全漢昇 [1996] に収録された明代中期以後の太倉銀庫の歳入・歳出および京運年例銀額の表は、当時の財政における銀の流れをかなり具体的に窺わせてくれる。鄭克晟 [1988] は、明一代の政争を「南北対立」としてとらえるが、それも「北」が「南」からの財政的収奪に依存するというこのようなマクロな構造と無縁ではないだろう。搶米のようなローカルな問題にせよ、中央と地方の対立といった全国的な問題にせよ、市場・物流の発展が単に広域的な統合をもたらすのみではなく、むしろシステムの諸レベル間の相剋をもたらし得ることが注目されているといえよう。万暦年間の「鉞・税」問題を華北に焦点をあてて再検討したものとして田口宏二郎 [2004] がある。

明代後期の財政の全体像を知るためには、黄仁宇の研究 (Huang [1974]) が今日でも有用である。岩見宏 [1989] は、万暦会計録などを使用して、万暦初期財政における銀の位置を論ずる。岩井茂樹 [1994] は、1970年代前後の明代賦役制度研究と同様、里甲制、均徭法、一条鞭法など一連の賦役改革を扱うが、農村の階級関係に焦点を当てる従来の研究においては負担がどの階層に課せられるかという科派対象の問題が重視される傾向があったのに対し、岩井はむしろ、賦役制度を財政構造と結び付け、伝統中国の政治支配秩序の分析へと向かっている。岩井は、中央政府による制度上の集権支配の外側に公私曖昧で非制度的な実質的財政が成長してくるといふ明清時代の重層的財政構造を、現代にも連続するものとして描く。

岩井茂樹の描く構図は、科挙官僚と胥吏・衙役との重層構造をもつ伝統中国の官僚

制度のあり方とも符合するものがある。伍躍 [2000] は、里長・保長や胥吏・衙役など行政システムの末端部に焦点を当てて地方行政制度の特質を考察した研究である。このような末端部の実態の研究が可能になった背景の一つは、徽州文書をはじめとする地方文書の公開・出版であるといつてよいであろう。早くから魚鱗冊などの明清地方文書に着目していた鶴見尚弘の諸論文は、中国語に訳され鶴見 [1989] に収録されたが、中国でも欒成頭の黄冊研究 [1998] など、地方文書を活用して地方行政制度の実態を解明する研究が進んでいる。

◆郷紳・文人と庶民文化

1950年代末以来、地主的土地所有や商品生産といった在地の経済関係に関わる問題と国家論とを結び付ける要として、郷紳の存在が注目され、小山正明 [1992]、重田徳 [1975] らによって、明末清初封建制成立説との関わりで郷紳支配の問題が論じられてきた。その間の郷紳論の動向は、檀上寛 [1993] によって整理されている。岸本美緒 [1999] 第二章「明清時代の郷紳」は、郷紳自身のもつ地位や経済力よりも、「郷紳に依附する人々」の行動に注目して、郷紳勢力の伸長を説明しようと試みた。英語圏でも「紳士」研究は盛んに行われてきたが、その近年の状況は、エシェリックとランキンによって編集された論文集 (Esherick and Rankin (eds.) [1990]) によって窺うことができるだろう。ここでは、必ずしも科挙資格をもつ紳士のみならず、軍事や商業も含めて勢力を得た「地方エリート」たちが、経済的・軍事的・文化的・人脈的な資源を活用しつつ地方支配をめぐる競争する様相が、それぞれの地域の特性に留意しつつ描かれている。科挙合格者の家系の統計的分析によって官僚身分の流動性を分析した何炳棣の定評ある著作 (何 [1993]) は、60年代に行われた研究だが、現在でも必読文献といえよう。

従来「地主」ないし「官僚」としての属性を軸にやや抽象的に論じられる傾向のあった士大夫層に関し、濱島敦俊の事例研究 [1989] は明末江南の一郷紳の書簡や家訓からその具体像を描く。庶民文化をも含めた広い文化的状況のなかで郷紳をとらえようとする動きは、つとに酒井忠夫 [1960] や奥崎裕司 [1978] によって推進されてきたが、近年の明末士大夫研究では、土地所有や科挙資格に還元しきれない紳士の文化的な側面——文人趣味と庶民文化の双方を含めて——が改めて注目されているといえよう。寺田隆信 [1995] や井上充幸 [2000]、中砂明德 [2002] は、趣味の世界をも含めた官僚文人の日常生活を再構成する。文人家庭の女性の文化生活については、Ko [1994] が詳細に論ずる。Clunas [1991] は、衣食住や書画骨董といった「物」を媒介に明代人の社会意識に接近する。クルーナス著書の題名である *Superfluous Things* とは、そうした「物」のカタログともいふべき文震亨『長物志』の「長物」の訳語であるが、この『長物志』の訳注が平凡社東洋文庫で出版されている (荒井健他訳注『長物志』1~3, 1999~2000年)。陳智超 [2001] はハーバード・イェンチン研究所に所蔵されていた明末徽州の一儒商宛の700余通の手紙を詳細に解説したものの400余人の差出人のなかには、王世貞ら著名文人も多く含まれており、当時の人々が

こうした交際にかけた情熱が窺われる。

文筆を売り物に有力者に取り入る文化的サービス業者ともいべき「山人」については金文京 [2002] があり、山人中の大立者陳繼儒に関しては大木康 [1990] が論ずる。明末都市で急激に発展した出版業については、井上進 [1990][1994] のほか、大木康 [1995][2004] があり、国外でも研究がさかんである (Chia [2002] など)。大木 [2004] はこのような出版を通じてのニュースの伝達に触れるが、明代の情報伝達については尹韻公の専論 [1990] もある。

従来から注目されてはいたが一部を除いて利用されることの少なかった日用類書については、遊戯や占い、医療など多様な面からの研究が進められた (小川陽一 [1995]、坂出祥伸 [1998])。田中健夫 [1988] は、日用類書に収録された倭寇図から当時の中国人の日本イメージを論ずる。明末の人の移動の活発化を反映する路程書に関しては、山根幸夫 [1994]、谷井俊仁 [1996] があり、中国でも楊正泰 [1994]、陳学文 [1997] などの研究がある。Brook [2002] は、路程書及び山志・書院志の詳細な所蔵リストである。また大澤頭浩は、同時期の地理書の出版と普及について、一連の論文を発表している ([1992][1994][1996])。善書に関しては、酒井忠夫 [1960] が大幅な増補の上、著作集の一部として再刊された。プロコウの著書 (Brokaw [1991]) は、功過格に関する専論である。

人々の感性や認識に注目する以上のような動向と表裏して、小説や戯曲などの文学資料を用いて明末社会を分析しようとする試みも盛んである。小説類を多用した明代商人研究としては陳大康 [1996] などがある。森紀子 [1989] は、明末の白話小説などを活用して、明末社会の動向を背景に烈婦譚の形成を分析する。岸本美緒 [1999] 第四章「五人」像の成立は、蘇州の開読の変が小説や戯曲を含む各種文献でどのように語られていったかを論じたもの。なお、明末社会と戯曲の関係を論じたものとして、徹底的な文献調査と現地調査によって、都市と農村、さらに異なる社会階層における演劇の変遷を追究した田仲一成の浩瀚な研究 [1973-87][1981] がある。

明末の思想を社会との関係で分析することは、島田虔次の『中国における近代思维の挫折』(1949年)以来、日本の明代史研究の一つの特色ある潮流をなしてきた。同書は近年、井上進の解説つきで再刊され (島田 [2003])、明末思想に関わる島田の他の論文を集めた論文集 [2001] も出版されている。島田や溝口雄三 [1980] の陽明学研究に取り組むことは、思想史以外の研究者にとっても、明末社会の雰囲気に対する感受性をみがく上で必須のことと思われる。ただし、明末における陽明学の流行を過度に一般化することを批判し、地域による相違を強調する小島毅 [1993] の提言に留意することが必要であろう。ブルックは、明末の士大夫の仏教信仰が彼らの社会的勢力に与えた影響を論ずる (Brook [1993])。

明末の多様な思想潮流が清代において禁書の対象となったことに着目した岡本さえの著書 [1996] は、明末学術界の自由さと異民族の清王朝のもとの抑圧とを対比する。井上進 [1992][1994] は、復社に結集した士人たちが清朝統治のもと、新支配者

に迎合していった状況を描く。明末清初の封建論については、増淵龍夫 [1983] 所収「歴史認識における尚古主義と現実批判」が、広い視野と思想史的深みを感じさせる。遺民論としては、何冠彪 [1997] などの研究があるほか、趙園 [1999] が彼らの言葉遣いに密着した内面的な分析を試みている。

◆地域社会と秩序問題

上述のように「地域社会論」という語は、この20年来の日本の明清史研究のなかで、一つの方法視角を示すものとしてしばしば用いられてきた。「地域社会論」が何を指すのか、という点については必ずしも決まった定義があるわけではないが、森正夫 [1982] は「地域社会の視点」と題するシンポジウムの基調報告において、地域社会を「ただ与えられたものとして存在している客体ではなく、指導者による共通の指導・働きかけの下に、この場を構成し、そこで相交わる人々によって、自覚的に創出され、維持されている場」と説明している。はじめから「封建支配」といった枠組みを設定するのではなく、そこに生きる人々が何ゆえに、どのように、まとまった社会を形成してゆくのか、という秩序の生成と変動への関心がそこにあったといえよう (森 [1995])。

明末が様々な社会集団の形成において一つの画期をなした時代であることは、広く認められており、そのなかでも活発な研究が行われてきたのは宗族 (同じ祖先をもつと観念される男系血縁集団) であった。上田信 [1984] は、浙江山間部を対象として、明末の同族統合の動きが、水利や紛争といった社会問題に直面した人々の戦略的対応であったことを論じた。宗族形成の目的として官僚身分の維持継承を重視する (井上徹 [2000]) か否かといった議論を伴いつつ活発に行われてきた明代宗族研究の動向と新しい課題は、井上徹他編 [2005] 所収の井上の総論で論じられている。

商品生産の発展や人の移動の活発化、紛争の激化といった明末の変化に対応して形成・強化されたのは、宗族集団のみではない。都市においても、商人や手工業者、遊民の間で、相互扶助的団体が盛んに作られた。新宮学 [1987] は明末清初の江南都市における同業組織について、また上田信 [1981] は同時期の江南の無頼結社について分析する。郷村の紛争を防止する手段として明代後期に普及した「郷約」については、井上徹 [1986a][1986b] などの研究がある。寺田浩明 [1994] は、伝統中国の社会秩序の性格に深く関わるキーワードとして「約」の観念を分析し、客観的な規範を共有する団体が制度として存在しない中国においては、平等な契約であれ上位者の宣示であれ、人々の心が一つになる状態 (「約」された状態) を絶えず運動的に作ってゆくことが必要であった、とする。岸本美緒 [1999] は、明末の集団形成の背後に直接的共同性の感覚への希求があったと論じ、陽明学の「万物一体」論をそうした時流のなかに位置づける。

明末社会を特色づける一現象として、郷紳を中心とした自発的な慈善事業の展開がある。夫馬進 [1997] は、明末に各地で組織された「同善会」を起点として近代に至る善会・善堂の歴史を、大量の史料を駆使して詳細に描く。同じく明清時代の慈善活

動を扱った研究に梁其姿 [1997] があり、秩序化・教化の観点からこの運動をとらえている。このような善挙を一翼とする伝統中国地方社会の「自治的」活動をどのように歴史的に位置づけるかという点に関し、アメリカの中国史学界では、ウィリアム・ロウ (William Rowe) らを中心に、近世西欧の「公共圏 (public sphere)」にこれをなぞらせる見方もあった。こうした議論を契機に、英語の public とやや異なる中国の「公」概念の独自の意味 (溝口雄三 [1995] 参照) が注目されている。「公議」「公憤」等の語は、明末に頻発した士変や民変などの抗議行動においても盛んに用いられるものであり (夫馬進 [1980][1981], 岸本美緒 [1999]), 社会史と思想史とを結ぶ一つの結節点をなしているといえる。

法と裁判の問題は、明末の地方社会と国家との関係に関わる重要なテーマである。明末の地方裁判に関しては、新しい史料が発掘されている。一つは従来知られていなかった地方官の判語であり、濱島敦俊による概観 [1993] のほか、個別の紹介としては、濱島 [1981][1983] などがある。もう一つは、夫馬進の一連の訟師研究 (夫馬 [1993][1994][1996]) によって紹介された訟師秘本である。訟師に関しては従来から川勝守 [1981] などの研究があったが、訟師秘本によって、より踏み込んだ分析が可能になった。夫馬は、多くの訟師秘本を分析して、「悪辣な三百代言」という常套的な訟師像に再検討を迫る。そのほか、高橋芳郎 [2002] 第十二章が明末徽州の祠観をめぐる争いを詳細に記録した新出史料を紹介し、中島榮章 [2002] は、徽州文書を史料として明末の紛争処理を扱った論文を収録する。濱島敦俊 [1984] は、抗租のような民間紛争に国家が介入するようになった明末の動向に着目し、これと関連させて明末の監獄の変化を扱う。抗租に対し官がどのような処理を行ったかに関しては、三木聡 [1988] が明末の事例を含めた詳細な検討を行い、雍正5年 (1727) の抗租禁止条例以前から抗租に対する処罰が行われていたことを論証する。高橋 [1982] は、明代から清代中期にかけての奴婢・雇工人関連の規定の変遷を分析する。

最後に、民衆宗教・農民反乱や民衆暴動に触れておこう。明代の異端的民間宗教に関しては、白蓮教に関する研究を集成した野口鐵郎 [1986]、羅教・聞香教を中心とする浅井紀 [1990] がある。李自成などの明末の農民反乱に関する佐藤文俊の一連の研究は、佐藤 [1985] にまとめられており、研究動向論文も収録されている。吉尾寛 [2001] は、李自成や張献忠の反乱を扱いつつ、それらを郷紳による地域防衛など地域社会との関わりで分析したところに特色がある。それぞれの地域に根ざした地方的反乱・暴動の研究としては、華南の省界地域の山寇を扱った甘利弘樹 [1998]、明清交替期の福建寧化県反乱を扱った森正夫 [1991] などがあり、これらもいずれも地域社会の具体相に着目した研究といえる。抗租・搶米については、三木聡 [2002] 所収の諸論文のほか、堀地明 [1992][1999] が、救荒政策との関係で搶米運動を扱う。

馬淵昌也 [1996] は、最近の日本における明清社会史研究の特徴として、「主観的世界の重視」「情報への注目」「地域社会への注目」「競技場としての社会観の提出」

「実地調査・文化人類学との交流」といった諸点を挙げている。ここで詳しく論ずることはできないが、上に挙げてきた諸論文の多くのなかには、確かにそのような特徴を見てとることができよう。中国における明清社会史研究の動向については、常建華 [1991] があり、近年の中国における社会史の隆盛を示す多くの論文が紹介されている。

◆辺境社会と国際関係

明代後期以降の海外銀の中国流入の重要性は、百瀬弘 [1980]、全漢昇 [1996] らによってつとに論じられてきたが、その後、1980年前後のアトウェル (W. S. Atwell) やウエイクマン (Wakeman [1985]) の議論を通じて、明清交替の背景にグローバルな国際経済の変動を見ようとする見解は、かなり広く認められてきたといえよう。最近では、フランク [2000] が、中国を銀の集中する世界システムの中心と位置づけて話題を呼んだ。フォン・グラーンの研究 (von Glahn [1996]) は、銀と銅銭との双方の動向に注目した充実した研究である。このような貨幣の動きと明末清初の社会変動との関連については、いまだ初歩的な検討がなされているに過ぎないが (岸本美緒 [1997]), 明末の北辺から東南沿岸に至る中国の辺境軍事地帯に大量の銀が集積され、交易ブームを巻き起こすとともに、新興軍事勢力が成長する揺籃となっていたことは確かであろう。

岩井茂樹 [1996] は、明末辺境の商業ブームのなかで成長した満洲勢力の多民族的・商業的性格を指摘し、そのような性格ゆえに清朝は、辺境の抗争を解決するとともに、流動的社会を安定に導くことができた、とする。北方・西方辺境社会とそこにおける軍事集団については、李成梁を扱った前述の和田正広 [1995] のほか、岡野昌子 [1989][1996]、谷口規矩雄 [1996] などがある。北方辺境と並ぶ東南沿岸の海上勢力については、Spence and Wills (eds.) [1979] 所収のウィルズ論文「王直から施琅へ」が、「辺境史」の視点から明清交替をとらえることの有効性を説いている。倭寇に関しては、近年では太田弘毅の著書 [2002] や鄭樑生の一連の研究があるほか、村井章介 [1993] など、日本史研究者の議論から大きな啓発を受けることができる。李旦や鄭芝龍など17世紀前半の海上勢力については、オランダ語史料を活用した永積洋子 [1990] が新しい知見を提供する。明末の民間海上貿易については多くの研究があるが、林仁川 [1987] を挙げておく。岩井茂樹 [2004a] は16世紀の官僚が海禁・朝貢制度の枠の中で互市を実現しようとした試みを描く。曹永和 [1979, 2000] は「東アジアの転運站」であった17世紀の台湾に関する諸論文を収録する。

東アジア諸地域との関係では、松浦章編 [2002] に明末の朝鮮使節に関する論文が収められている。朝鮮使節の中国観を論じたものとして、ほかに夫馬進 [1990] などがある。三木聡 [1996] は、薩摩と組んで秀吉に対抗するという福建巡撫許孚遠の構想を分析するが、国家の枠が未だ固まっていなかったこの時期の東アジア情勢を示すものといえよう。この時期の東アジア諸勢力の動向に大きな影響を与えた火器の伝播については、久芳崇 [2002] などがある。

ヨーロッパ諸国との関係では、明末から清初の西学について、岡本さえ [2000] がある。張鎧 [1997] はスペイン語史料を用いて、宣教師パントーハの事跡を考察する。そのほか欧文史料を用いた研究としては、張猷忠の四川支配に関するイエズス会宣教師の報告を分析した浅見雅一 [1990] や、マカオに関する榎一雄 [1984]、高瀬弘一郎 [1996]、岡美穂子 [2002] などがある。マカオに関してはそのほか、「澳門学」を提唱する湯開建 [1999] があり、漢文史料を用いて明末のマカオを分析する。

(岸本美緒)

3 史資料の解説

<1> 明代初期・中期

明初・明中期に関わる史料は、明末のものに比べればはるかに限定されている。もっとも、明初・明中期の史料とはいっても、実録や文集などの同時代史料もあれば、明末および清代から時代を遡及して言及したものもある。ここでは基本的には同時代史料を中心に、明末・清代のものを交えながら代表的な史料をいくつか紹介する。また近年刊行された明代史関連の史料集についても、併せて触れておきたい。

◆明前半期の国政史料

明代史の研究で、正史の『明史』と並ぶ根本史料が『明実録』であることはいうまでもない。実録は皇帝の死後、その言行を記した起居注や官僚の奏議などをもとに編纂された編年史であり、各朝の事実を知り得る最も基本的な文献である。ただし『太祖実録』が二度改編されたように、多分に編纂時の政治情勢や皇帝の方針に影響されるため、記述の信憑性については十分吟味せねばならない。各朝実録の編纂の経緯については、間野潜龍 [1979] を参照。現在一般に通行しているのは台湾の中央研究院本だが、別に『明実録』中のテーマごとの記事を集めた史料集が、中国から各種出版されている。なお起居注は明末三朝（万暦・泰昌・天啓）のものが現存するだけだが、『明代遼東檔案匯編』（遼瀋書社、1985年）所収の『明実録』稿本が、実は『洪武起居注』の残本だと川越泰博 [1991] の指摘もある。

明初には法令・制度に関わる様々な勅撰書が公刊されたが、それらを取めているのが『皇明制書』である。種々の刊本があるが、国書刊行会編『皇明制書』が山根幸夫の解説もついて便利。『皇明祖訓』『諸司職掌』『洪武礼制』『資世通訓』など21種の諸書を取める。なかでも『御製大誥』等の訓戒書には具体的な懲罰事例が記されており、太祖の恐怖政治を知る上で恰好の書。楊一凡 [1988] は『御製大誥』に詳しい注釈を付す。恐怖政治に関連して、別に藍玉の獄の罪犯の供述を集めた『逆臣録』があり、長らく存在しないものと思われてきたが、近年北京図書館所蔵の抄本が北京大学出版社から排印刊行された。川越泰博 [1995] は同書と『藍玉党供状』（北京図書館

古籍珍本叢刊）との関係を説く。

◆法制史料と檔案

明初の法制を考察する上で欠かせぬ史料に『明律』『明令』がある。前者は数度の改訂を経て洪武30年（1398）に完成し、以後明一代の基本法典となった。『明令』『御製大誥』と併せて佐藤邦憲 [1993] の解説が参考になる。『明律』に関する注釈書としては、荻生徂徠、内田智雄等校訂『明律国字解』（創文社、1966年）が索引も付いて最もポピュラー。同書には律の本文以外に万暦間刑条例も取める。その他、天順・成化・弘治年間の条例集として『皇明条法事類纂』があり、明中期の法制や社会経済を知る上で欠かせない。古典研究会から影印本が出版されている。

明初・明中期には明律と並行して盛んに榜文が公布されたが、現存するものは決して多くはない。現在目にできるのは『皇明制書』所収の『教民榜文』41榜の他、『南京刑部志』祥刑編の69榜および朝鮮王朝編『吏文』所収の41榜だけである。『吏文』に訓読を施した『訓読吏文 附吏文輯覽』（国書刊行会、1975年）は、当時の法律・官庁用語の理解にも有効。ちなみに明代の法制を概括する『明史』刑法志の訳注としては、野口鐵郎編訳 [2001]、梅原郁編 [2003] が詳しい。また『明令』は国初の一時期を除けば通行せず、中期以後は会典という国制総覧が編纂された。明代には正徳と万暦の両『大明会典』があり、政治制度や社会経済を研究する上での必携の書。正徳会典は汲古書院から影印本が出版されており、山根幸夫の詳細な解説を付す。山根 [1993] は会典についての解説。

膨大な数量の清代の檔案（公文書）が現存するのに対し、明代のそれは絶対量も少なく、しかも一部が利用されるだけであった。最近、中国第一歴史檔案館と遼寧省檔案館所蔵の明代檔案が影印され、『中国明朝檔案総匯』（広西師範大学出版社、2001年）として出版されたことは、明代史研究者にとって大きな朗報である。これによって日本に居ながらにして、明代檔案の閲覧が可能となった。ことに同書に取める衛所官の記録である「衛選簿」は、従来、川越泰博 [1990a][1990b][1990c]、松浦章 [1995][1997][1998] など一部の研究者には注目されていたが、全貌を把握することは困難であった。今後は明代軍事史研究の必須の書として、大いに活用されるに違いない。松浦 [1995] は102件にのぼる衛選簿の目録を付す。『中国明朝檔案総匯』の解説としては、甘利弘樹 [2002a][2002b] を参照。岩淵慎 [2003b] は『中国明朝檔案総匯』の総目録である。

◆文集と奏議

上記のものが主に官撰ないし官側の史料であるのに対し、明代では私人の手に成る史料も多く、むしろ大半がそうだとはいえよう。なかでも官僚・士大夫が残した文集は、同時代史料の中でも重要で、官撰史料の欠を補って余りある。明代の文集は『四庫全書』や『四部叢刊』など大部の叢書にも多数収められており、特に両叢書が相次いで電子化されたことで利用が容易になった。最近刊行された『四庫全書存目叢書』（齊魯書社）や『統修四庫全書』（上海古籍出版社）を合わせれば、明代文集のかなりの

部分をカバーすることができる。日本現存の明人文集については、山根幸夫編『増訂日本現存明人文集目録』（汲古書院、1978年）が所蔵機関を記して便利だが、所蔵状況に変化があるので注意が必要。また各種の文集から政治に資する奏議等を集めたものに『皇明経世文編』や『皇明経済文録』など数種があり、重要人物の経世文を収める。これらの奏議を項目ごとに分類した目録として、東洋文庫編『明代経世文分類目録』（1986年）が参考になる。ただし正確を期するために、文集が現存すればやはり原典に当たるべきであろう。

◆政治・制度関係史料

明末以降、実録の閲覧が可能になると、実録や会典などを利用した史籍が各種出版されるようになった。明代の諸制度を項目別に整理した『続文献通考』『皇明世法録』『国朝典彙』『皇明泳化類編』などの政書の他、紀伝体の史籍である『明書』や『罪惟録』も有用な記事を含む。また編年体では、『明実録』のダイジェストともいえる『国権』が役に立つ。同書は明初と明末崇禎年間に特異な記述があり、なかでも実録を欠く建文時代を知るには必携の書。明中期の史籍の中では、『大学衍義補』に貴重な記述が多く、明中期の政治・社会経済の情報を伝えて重要。和刻本が流布しており、中文出版社から影印本が出版されている。政治史・制度史については、『吾学編』『弁山堂別集』『春明夢余録』なども忘れてはならない。明代の史籍を集めた代表的な叢書としては、民国期に編纂された『紀錄彙編』や『玄覽堂叢書』に加え、『元明筆記叢書』（中華書局）が標点本の形で出版されている。

◆徽州文書と地方志

明代史料の多くが、士大夫層によって他者を意識しつつ書かれているのに対し、訴訟や契約など実生活に即した民間の文書類がある。近年在地社会の諸問題をめぐり脚光を浴びているのが、いわゆる「徽州文書」である。南宋から民国に至る徽州地域で作成・保存されてきた史料群で、その内容は土地・賦役・商業・宗族・行政・訴訟など多岐にわたる。単なる徽州のみの地域研究ではなく、中国社会全体の理解に供するもので、「徽学」という新たなジャンルを生み出しつつある。徽州文書の史料集としては、『明清徽州社会経済資料叢編』第1・2集（中国社会科学出版社、1988、90年）、『徽州千年契約文書』（花山文芸出版社、1991年）などがあり、『徽州歴史檔案総目提要』（黄山書社、1996年）や『徽州文書類目』（黄山書社、2000年）などの目録も出版されている。劉重日 [1989]、周紹泉 [1993]、臼井佐知子 [1997]、中島楽章 [2002] などが詳細に解説する。なお在地社会研究に関連して、明代の地方志だけを蒐集した『天一閣蔵明代方志選刊』正・続編（上海古籍書店、上海書店）の他、『中国方志叢書』（成文出版社）、『稀見中国地方志彙刊』（中国書店）、『日本蔵中国罕見地方志叢刊』（書目文獻出版社）、及び前掲『四庫全書存目叢書』などにも、多くの明代地方志が収められていることを指摘しておきたい。

◆渉外関係史料

明前半期に関わる部分は必ずしも多くはないが、渉外関係史料の整理・出版も最近

盛んである。琉球の外交史料である『歴代宝案』の校訂と訳注の作成が、沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室で継続してなされている。冊封使の記録である『使琉球録』に関しては原田禹雄の一連の訳注があり、夫馬進編 [1999] はその史料的价值を解説する。朝鮮については、北京への使節＝燕行使の記録を集めた『燕行録全集』（東国大学校出版部、2001年）、『燕行録全集日本所蔵編』（東国大学校韓国文学研究所、2001年）が、最近韓国から相次いで出版された。夫馬 [2003] は、後者に関する編者ならではの詳細な解題。倭寇関係のものでは、鄭樑生編『明代倭寇史料』1～7（台湾：文史哲出版社）がある。

かつて明代の史籍は数量が多い反面、基本的な文献以外は特定の図書館・研究機関に行かねば、閲覧することがなかなか困難であった。しかし最近は大部の叢書や史料集の出版・電子化により、以前の不便さはかなり解消されつつある。今後この趨勢はますます強まりこそすれ、弱まることはまずあり得ない。要は研究者自身がこれらの膨大な史料群を、いかに駆使して新たな明代史像を構築するかということだろう。歴史学の基本が史料の博搜と精読にある以上、研究者に求められるものは今も昔も変わりはないはずである。

（檀上 寛）

<2> 明代後期

16世紀以降の中国では書物の出版点数が飛躍的に増大した（井上進 [1990]）ことにより、明末の史料は明代中期以前に比べると格段の豊富さを見せている。地方志や文集の点数増加は当然として、そのほかに特色ある史料群を以下に挙げよう。

◆明末の国政史料

明朝の国政史料として最も重要なものは『実録』であるが、各代の実録は次の皇帝の治世になって編纂されるため、崇禎実録は編纂されなかった。その欠を補うものとして利用されるのが、談遷の『国権』や著者不明の『崇禎長編』である。前者は明一代の編年体通史だが、特に崇禎年間について詳しい。いずれも崇禎年間について、邸報や私家著述を用いて詳細に記しており、記述は信頼できる。そのほか、崇禎年間から南明時期にかけての政治動向を詳細に記録した文献として、呉偉業『綏寇紀略』、計六奇『明季北略』『明季南略』、李清『南渡録』などがある。なお、錢一本編纂の『万曆邸抄』（小野和子 [1996] 第三章第一節参照）も邸報を抄録整理したもので、万曆頃から邸報を用いて私家版の国政記録を作ることが行われていたのである。

◆野史・隨筆など

明末清初（万曆から清初反清勢力の滅亡まで）の史料に関して現在でも最もよい手引きとなるのは、謝国楨『晚明史籍考』（初版は1931年、増訂版は上海古籍出版社、1981年）であり、特に野史の類に関する記載が豊富である。これら野史の内容は信用できないものも多いが（例えば李自成政権の重要人物とされてきた李巖が実は野史のなかで作られてきた架空の人物であるとする説について、佐藤文俊 [2001] 参照）、

このようなフィクション性自体が興味深い研究対象であるともいえる。

明代後期の随筆は数多いが、例えば沈德符『万曆野獲編』、朱国禎『湧幢小品』、謝肇淛『五雜俎』、何良俊『四友齋叢說』などは、出身地域に限らず広い範囲の多方面の問題に触れていて、しばしば利用される。より地域に密着した随筆としては、南京の顧起元『客座贅語』、松江の范濂『雲間輿目抄』、上海の葉夢珠『閩世編』などがある。

小説や戯曲も明代史の史料としてしばしば用いられるようになった。小説については、江蘇省社会科学院明清小説研究中心他編『中国通俗小説総目提要』（中国文聯出版公司、1990年）、戯曲については董康『曲海総目提要』（人民文学出版社、1959年）などで梗概を知ることができる。

◆実学書・実用書

生活技術に関わる図入りの書物が明末には多く出版された。産業技術に関する宋応星『天工開物』（平凡社東洋文庫に日本語訳あり）、農業技術に関する徐光啓『農政全書』、薬物を解説する李自珍『本草綱目』などはその代表的なものである。そのほか、絵入りの百科事典である王圻『三才図会』も有用である。商人や下層知識人向けの、より通俗的な日用類書については、酒井忠夫の解題がある（酒井 [1958]）。これらの日用類書の一部は、『中国日用類書集成』（汲古書院）として影印版で刊行されており、路程書についても若干点が中国で出版されている。

◆外国史料

『朝鮮王朝実録』の豊富な記事は明代史研究において大きな価値をもつ。呉晗の編集した『朝鮮李朝実録中の中国史料』全12冊（中華書局、1980年）は、記事の所在を調べるのに便利だが、引用に当たっては原文に当たるべきである。徳川幕府のもとで対外文書を扱っていた林家が長崎来航中国船からの報告を編集した『華夷変態』全3冊（東洋文庫、1958～59年）は、明清交替期の中国について貴重な情報を含む。明代の中国を訪れたヨーロッパの宣教師や商人によって書かれた記録の日本語訳としては、マッテオ・リッチの『中国キリスト教布教史』やセメードの『チナ帝国誌』（大航海時代叢書18・19、岩波書店、1983年）及びクルスの『十六世紀華南事物誌』（明石書店、1987年。講談社学術文庫、2002年）などがある。オランダ東インド会社の台湾を中心とした活動に関しては、従来『バタヴィア城日誌』の抄訳（平凡社東洋文庫）が利用されてきたが、台湾の『ゼーランディア城日誌』のオランダ語活字版の出版が1986年に始まり、ついで台湾で中国語に翻訳されつつある（江樹生訳注『熱蘭遮城日誌』台南市政府）。鄭芝龍らの動向を生き生きと伝える極めて興味深い史料である。

◆人物の調べ方

『明史』の列伝や『国朝献徴録』をはじめとする主な伝記集については『八十九種明代伝記綜合引得』で網羅できる。『明人伝記資料索引』は、各人の簡単な事跡とともに、その人物についての墓誌銘や行状がどのような文献に載っているかを示す。

『明遺民伝記資料索引』もある。字・号などから本名を知るには、王徳毅編『明人別名字号索引』上・下がある。『明清進士題名碑録索引』で出身地を探し、その地方志の人物伝を探すという方法もある。『天一閣藏明代方志選刊』正・続に収録された地方志については、連合の人名目録がある。L. C. Goodrich and C. Y. Fang, *Diction-ary of Ming Biography*, 2 vols. (Columbia University Press) は、明代の人物に関する小伝集ともいべき人名事典である。
(岸本美緒)

第9章 清代

岩井茂樹・加藤直人・谷井俊仁

1. 研究の視点

清代史研究は、20世紀の初頭に同時代史として始まった。清朝は最後の中国王朝であると同時に、シベリア東南部のツングース系諸族、モンゴル、青海、東トルキスタン、チベットを包む大帝国を形成したため、清代の研究は中国史の枠を越えざるをえない。『清朝衰亡論』（1912年）などを著して眼前の政治と社会の動向に深い関心を示した内藤湖南が、奉天（瀋陽）の故宮から『滿文老檔』・『五体清文鑑』などの写真版をもたらし、満洲語文献による研究の途をひらいたのは象徴的である。戦前期には、「入関」（1644年）までの満洲国家形成期の研究、八旗制度、多民族支配体制などの問題が研究の中心をなした。こうした研究の蓄積のうえに、1970年代から台北で、80年代から北京で、それぞれ資料の公開が進んだことにより、満洲語・漢文檔案を中心とした文献学的な研究がさらに深められた。近年では八旗を核とした社会制度の特質についての研究や、モンゴル語の文書史料を利用した政治・法制についての研究が開拓されつつある。清朝とジュンガルの覇権争奪は、現代の内陸アジアの政治的配置にも関わる問題であり、今後も研究の深化が期待される。トルキスタンについては、ウイグル語（トルコ語）資料を用いた政治史や宗教文化史の研究が、資料の発掘によってあらたな展開をみせつつある。本章第2節の「〈1〉清入関前」、「〈2〉清朝と外藩」は、清代史研究の非中国史分野を扱ったものであるが、1990年代以降、檔案資料を用いた堅実な研究の進展には目をみはるものがある。

一方、中国社会の発展のうえに清朝時代を位置づけようとする研究は、戦後になって進展した。田中正俊、小山正明、重田徳ら発展段階論を援用する研究者によって、租佃関係および商品生産をめぐる地主支配の展開や、賦・役制度のなかに国家支配の特質を見ようとする視点が提起された。明末清初期に支配体制の転換を認めようとする説は、こうした潮流のなかで生みだされた。郷紳支配という論点についてもさまざま

まな方向から接近が試みられたが、租税徴収をめぐる「包攬」などの慣行を分析することをつうじて、官府の支配執行能力の限界と、郷紳や胥吏・衙役層、同族組織が形成する在地支配のあり方を探ろうとする研究は、今日なお中国社会の特質の理解に貢献するであろう。

制度史および政治文化史の方面では、1949年に宮崎市定、安部健夫らがはじめた『雍正硃批論旨』の共同研究が優れた成果をうみだした（『雍正時代の研究』同朋舎出版、1986年）。また、滋賀秀三は、清代の判牘や地方檔案にふくまれる裁判文書などを利用して、司法制度の実態解明にとどまらず清代法文化についての認識を深めた。檔案やそれを編纂した典籍を素材とする研究は有望な分野であるが、こうした先学の成果から解明すべき問題の設定や方法について学ぶべき事は多々ある。夫馬進の訟師研究、寺田浩明の法社会学的観点からする一連の業績、岸本美緒の土地売買文書の分析などは、そのすぐれた見本である。

1980年代以降、日本の学界では清代の社会史・経済史について研究の視座と方法論の双方において大きな転換があらわれた。それまでの研究が生産関係や市場の支配といった問題に関心を寄せてきたのに対し、岸本の研究があらわれてから、多くの研究者が市場の性質、地域の経済構造、貨幣流通の実態と特質などに着目して研究を行うようになった。それと同時に、社会史の方法と視点をいかした研究が、大きな成果をあげるようになった。本章第2節の「〈4〉社会史・経済史」ではこうした最近の研究動向を紹介するが、近年、中国の研究者も社会史に関心を寄せるようになり、活潑な研究がおこなわれている。

「徽州文書」をはじめとする民間文書を用いた研究は、1980年代から中国で本格的におこなわれるようになり、今後もその発掘がすすむであろう。清代史の研究をめざすばあい、文書・檔案の様式と草書の解読について訓練を受けることの必要性を強調しておきたい。

日本における清代史の研究動向について知るには『明清時代史の基本問題』（汲古書院、1997年）が有用である。中国では、『清史研究概説』（天津教育出版社、1991年）があるが、やや古くなってしまった。最新の情報を得るには『清史研究』（季刊、1991年～）などの学術雑誌に掲載される研究動向の紹介や論文目録に頼らざるをえない。

以下、本章は入関前および清代の属領（藩部）についての部分と、中国史の延長上に位置づけられる部分とに分けて述べる。史料の解説については、後者にかかわるものを中心とした。前者については文献学的な研究が大きな比重をしめるので、研究の紹介のなかで史料の解説をおこなっている。（岩井茂樹）

2 研究の展開

<1> 清入関前

中国の東北、瀋陽の東に撫順という地がある。現在は露天掘りの炭礦として著名なこの地は、明代には「撫順関」という辺境の関門と馬市（交易場）が設けられ、明の商人と関門外に居住する「建州左衛」という女真人の部族集団（河内良弘 [1992]）との間で交易が行われていた。明代の馬市は、馬だけでなくさまざまな商品が取り引きされた（江嶋寿雄 [1999]）が、女真人たちにとってとくに重要な商品は、毛皮と朝鮮人参であった。毛皮、とくに黒貂皮や人参は明で高価に取り引きされた。地球的な規模でみれば、16世紀の東アジア、東北アジアでは、片方にそのような高級品の需要があり、一方では、その需要に応えるための交易システムができあがっていたということである。そして、その交易システムのもたらす利潤を背景として、建州左衛のリーダー、のちの清太祖ヌルハチ（Nurhaci）は勢力を拡大していった。

1587年、ヌルハチはフェ・アラ（Fe Ala、「旧い丘」の意）城を築いた。ヌルハチにとって最初の本格的な築城であった。フェ・アラ城は、戦前建国大学により実地調査が行われ、その報告書が出されている（稲葉岩吉他 [1939]）。フェ・アラ時代のヌルハチ政権の構造であるが、当時、朝鮮より当地に偵察に来た申忠一の報告「申忠一書啓及図録（『建州紀程図記』）」（稲葉他 [1939]）によると、弟のシュルガチ（Šurgaci）が、ヌルハチと比肩する力を有していたと考えられる（松村潤 [1983]）。ヌルハチは、やがてイエヘ（Yehe）以外の海西女真各部を滅ぼし、1603年に、近くのヘトゥ・アラ（Hetu Ala、「横に伸びる丘」の意）にその居城を移した。ヘトゥ・アラは、蘇子河本流に面した河岸段丘であり、立地の関係で平地のほとんどないフェ・アラに比べて、その氾濫原の外城部分を含め、かなり広大な平地面積を得ることになった。1616年、そのヘトゥ・アラでヌルハチは、金国（Aisin Gurun、後金）を建てた（神田信夫 [1972] [1989]）。

1619年、サルフ（Sarhū）の戦いで明に勝利し、イエヘを統合したヌルハチは、1621年から22年にかけて、国の中枢を担うホシヨイ・ベイレ（hošoi beile、八旗の各旗王）に、基本的に自らの諸子をあてて政権の安定をはかり、明の遼東地域へと進出した。そしてまず東京城（遼陽付近）に、そしてすぐに瀋陽へと遷都した。この遼東進出直後ヌルハチは漢人に対してまず懐柔政策をとったが、土地問題を含めて漢人を統治することについては大きな困難をともなった。この問題については石橋秀雄の諸研究 [1989] に詳しい。

1626年、ヌルハチの死にともない、第8子で第4王^{『ホイチ・ベイレ』}のホンタイジ（Hongtaiji）が、旗王たちの互選によってハン（han）となった。ただ、その即位後も、ハンである彼と旗王との間に、厳然とした階層的秩序は形成されなかった。彼の兄アンバ・ベ

イレ（Amba Beile）、アミン・ベイレ（Amin Beile）、マングルタイ・ベイレ（Mang-gūltai Beile）の3名は「三大王（ilan amba beile）」と呼ばれ、特別な待遇を受けていた。その後、ホンタイジはいろいろな理由をつけてこのベイレたちを追い落とし、1635年、征討したチャハル部よりモンゴル人に対する支配権の象徴、「大元伝国の璽」を入手した（松村潤 [1992]）ことにより、自らの属する集団の選別をおこなって、それを「マンジュ（Manju、満洲）」と専ら呼称することに決めた。翌年、中国式に天壇にて皇帝となる告天の儀式を行い、国号を「大清（Daicing）」、年号を「崇徳（wesihun erdemungge）」と定めた（石橋崇雄 [1994]）。「崇徳」という年号、「大清」という国号、また中国式の祭天儀礼、この大清建国は、漢人及び明朝をきわめて意識して行われたものであることは間違いない（松村 [1969]）。このことについて石橋 [2000a] は、「ホンタイジは、中国的な皇帝と王という関係を導入し、ハンと宗室諸ベイレとの間を明確に区別しようとした」と述べ、対内的な意義を主張する。

ヌルハチの伝記については、若松寛 [1967] や松浦茂 [1995] がある。いずれも手堅い伝記であるが、最近になってヌルハチに関するまったく新しい史料が登場した。『nenehe genggiyen han i sain yabuha kooli, uheri juwan nadan debtelin（先の Genggiyen Han のすばらしい事績史）』全17巻（北京：中国第一歴史檔案館所蔵）である。この史料については、すでに石橋崇雄 [2000b] と松村潤 [2001] が、各々若干の翻語の相違は見られるものの、日本語訳を示している。松村の研究によれば、この事績史は「太祖紀」とでもいうべき存在で、具体的にはヌルハチの事績は、崇徳元年に告成した清朝最初の「実録」である『太祖太后実録（dergi taidzu, dergi taiheo i yabuha yargiyan kooli bithe）』（現在散佚）の稿本のひとつではないかという。

『太祖太后実録』編纂ののち、ヌルハチの「実録」は、順治年間（『太祖武皇帝実録』、漢文本は台湾・国立故宫博物院、満文本の完本は、中国第一歴史檔案館に所蔵）、そして康熙年間と乾隆年間（ともに『太祖高皇帝実録』）にそれぞれ作成された（神田信夫 [1964]）。また、乾隆年間には、ホンタイジ時代の『太祖太后実録』と「太祖実録戦図」なる絵図（現在散佚）を併せて『満洲実録』が編纂されている。すなわち、ヌルハチの「実録」は、併せて5種類存在するわけである。ただ、史料的な価値からいえば『先の Genggiyen Han のすばらしい事績史』と順治重修本がまざる（松村潤 [2001]）。

また、ヌルハチ時代を含めて、入関前清朝の歴史を考える際のもっとも基本となる資料が『満文老檔』（満洲語で書かれた古い記録）である。この書は、太祖ヌルハチの時代から太宗ホンタイジの「大清」の建国（崇徳元年、1636年）までの記録を編年体でまとめている。残念ながら、そのもととなった資料（『満文原檔』）に欠落があったため、天聡七年、同八年、同九年の3カ年がまとめて抜けている。この『満文老檔』の翻訳としては、我が国の満文老檔研究会のもの（『満文老檔』I～VII、東洋文庫、1955～63年）がもっともよい。清初史の研究を志すものは、まずこの翻訳を参照する必要がある。

上に述べた『満文老檔』の原典は、1931年に北京の故宮博物院旧内閣大庫のなかで発見された。この資料を「満文原檔」と呼んでいる。「満文原檔」は17世紀前半に満洲語（一部モンゴル語）で書写された記録で、18世紀、乾隆帝の時代に、この記録をもとに『満文老檔』が作成された。したがって、史料の厳密さを期すのであれば、この「満文原檔」を対照する必要がある。この資料は、現在台湾の国立故宮博物院に所蔵されており、同院から1969年に『旧満洲檔』と表題されて影印（写真版）で出版されている（神田信夫 [1979]）。また、『清太宗実録』編纂と深く関係のある年代記「内国史院檔」も、有用な史料といえよう（神田他 [2003]）。なお、清初期の諸史料については、加藤直人 [1993] の解説を参照のこと。

さて、ヌルハチ時代、そのうち清朝の根幹となる社会・軍事制度が創始された。八旗制度である。八旗制度はその形態を変化させながら民国まで存続した。清代の八旗制度およびそれに付随する諸問題については、さまざまな研究が出されているが、全体をみるには細谷良夫の研究 [1968] がよい。最近、学界では一種「八旗制度研究熱」なるものがあり、清朝の国家構造を八旗制度から解明しようとする動きがある。中国では杜家驥 [1998] や劉小萌 [1995] がその代表であり、我が国では、細谷に加えて柳澤明 [2001]、楠木賢道 [1999a][2001]、杉山清彦 [1998][2001a][2001b]、鈴木真 [2001]、綿貫哲郎 [2002][2003] らの研究が目される。杉山 [2001c] は、清朝の八旗制度について「八旗制下の基本的な支配関係は、分封された帝室諸王（旗王）が、各旗人が領有ないし管轄するニルを分与されて主従制的に支配する側面、すなわち分封制とニル制の結合という側面に在った（旗王制）。そしてかかる支配関係の下に構成された各旗・各旗王家は、旗を単位として権利・義務を均分するとともに（八分体制）、左右各四旗に分かれて、儀礼・出征時の配置が定められていた（左右翼制）。このような旗王制という垂直構造と八分体制、左右翼制という水平構造が、八旗制を貫く基本構造である」と論じる。八旗の構造を考える上での基本的な定義として評価したい。ただ、最近谷井陽子は、これらの研究傾向を批判し、「八旗の組織も人員も、むしろハンの下で集中管理される傾向のものであった（谷井 [2005]）」と述べる。八旗の構造について、康熙・雍正時代の改革期を中心に検討したのが細谷 [1983] と鈴木 [2001] である。とくに細谷は、雍正帝の八旗改革に着目し、ニルの名称変更問題を中心に検討を加え、鈴木は、康熙・雍正時代の旗王権力について原史料をもとに詳細な考察をおこなった。

1644年、清朝が入関すると、それにともない数多くの旗人が北京およびその周辺地に移住した。東北に残った旗人と京畿に移住した旗人の選別がどのようになされたのかについては専論はないが、京畿地方の旗人に供せられた「旗地」および「營」については、周藤吉之 [1944]、石橋秀雄 [1956]、細谷良夫 [1972] 等の研究がある。また、清朝の勢力拡大にともない、西安、広州、杭州、福州等、各重要地点に置かれた「駐防八旗」は、清朝の支配にとって重要な役割を果たしたが、当該地域における漢人との交流をとおして、特殊なエスニシティ社会を形成した。この問題については、

クロスリー (Crossley [1990][1997]) やエリオット (Elliott [2001]) 等アメリカの研究者による研究がめだつ。また細谷らによる現地調査にもとづく研究成果 (細谷 [2003]) もこの「駐防八旗」問題を考えるうえで重要である。また、蒙古旗人の研究は、あまり盛んではないが、最近乾隆期の蒙古旗人「官僚」について、村上信明 [2002][2003] が検討を加えている。

明末から清初にかけて、女真社会はどのような構造であったのか、社会人類学的手法などをもちいて手堅い研究を発表しているのが増井寛也である。増井の研究 [1993][1999a][1999b][2001] は一見地味であるが、清初社会の解明に欠くことのできない成果を着々とあげており、最近きわめて注目されている。

近年の清初八旗研究の中心は「ハン」「旗王」「婚姻関係」をキーワードとして清朝の権力構造を考えようとする方向にあると考えてよいであろう。代表的なものとして、楠木賢道 [1999b]、杜家驥 [1998]、杉山清彦 [1998][2001a][2001b] があげられる。また、雍正帝の八旗改革以後の制度の変化、旗人の変容等についても研究がすすめられている。細谷、鈴木、綿貫がその代表である。これらあたらしい八旗研究が、今後の清朝社会研究の主流となっていくであろう。

〈2〉清朝と「外藩」

モンゴルは、東トルキスタンのコムル（ハミ）とトゥルファンの二王家、チベットとともに「外藩」と呼称されるが、この「外藩」という概念は一体どのようなものか、現在まで明確な答えは出されていない。清朝はその勢力拡大のなかで、まずはチャハルを、そして17世紀後半にはハルハをその影響下におさめ、やがてモンゴル全体を取り込んでいくことになるが、その支配原理となったものは何であったのだろうか。中見立夫 [2000] は、「儒教文化を共有する「朝貢」諸国とのあいだでは、中華世界の「皇帝」と「国王」との関係で、秩序は示されたが、チベット仏教圏であるモンゴル、チベットにたいしては、皇帝の存在は文殊菩薩の化身として説かれた。さらにチベットと清朝皇帝との関係は、仏教教団と施主との関係になぞらえられ、またモンゴルとの関係は、モンゴル王公とチンギス・ハンに由来する皇帝権を継承した満洲皇帝との主従関係で結ばれているとされた」と述べる。中見の考えは明快である。この中見の見解に加えて、たとえば東トルキスタンはこの原理のなかでどこに位置づけられるのか、またこれはあくまでも清朝皇帝側の論理であるが、この論理は果たして対象となる一般大衆のどのレベルまで貫徹したのか等々の問題をも解明していかなくてはならないであろう。岸本美緒 [2000] は、「その視点の置きかたによって、描かれる清朝国家像はかなり異なるであろうことも予想される」と述べ、暗にその視点の違いは近現代の国家のありかたに影響を及ぼすことにもなるかと指摘する。最近の清朝の構造および支配原理に関する研究状況については、片岡一忠 [1998] と杉山清彦 [2001c] が参考となる。

◆モンゴル

清朝と内モンゴルの諸部族との関係については数多くの研究蓄積がある。とくに最近では森川哲雄の研究成果 [1976][1983a][1983b] によるところが大きい。また、先に述べたように、最近では内モンゴル諸部、とくに清初における清皇室とホルチン首長層との婚姻関係について楠木賢道 [1999b] が研究を発表している。オイラット・ジュンガル史について代表的なものをあげると、岡田英弘 [1974]、若松寛 [1983]、そして宮脇淳子の一連の研究 [1981][1983][1995] などがある。若松と宮脇は、ジュンガル「国」の性格をめぐる論争し、その結果、ジュンガル研究はかなり深化した。岡田は、台北・故宫博物院所蔵の満文檔案のなかから、ジュンガル征討のため親征中の康熙帝が皇太子に送った手紙を発見し、その内容を分析した。その研究成果は、おそらくはじめて清朝の満文檔案をモンゴル史研究に利用した書として評価されよう (岡田 [1979])。ハルハ研究では、岡洋樹 [1988][1992]、と萩原守 [1990] が群を抜いている。とくに、萩原は、清代モンゴルの「法」に着目し、清朝の支配の特質、また逆にそれを受け入れる側のモンゴル王公の「法」の利用の問題について詳細に検討を加えている。また岡 [1994] は、清朝の構造を知るうえでも有用な論考である。今後の研究が期待される。

◆東北

清朝史研究に「フィールド」という概念をもちこんだのが細谷良夫である。それは社会人類学的な作業ではなく、史書等に記された場所を現地に行って「確認」という一般的な意味でのフィールドである。細谷は、東北各地の史跡および八旗駐防地等を精力的にまわり、たとえば八旗駐防地などでは旗人の末裔等にききとり調査を行うなど、文字記録に表れない口碑史料を収集した (細谷 [1991])。周知のように、中国の経済発展は急速で、ここ数年の間に数多くの史跡がその姿を消している。また中華人民共和国成立以前の旗人社会の様子を知る人も次第に少なくなってしまった。その意味で、細谷の「フィールド調査」は価値をもつものといえよう。東北史とくに清朝の支配に組み込まれた「辺民」について検討を加えているのが松浦茂 [1987] である。また、松浦 [1991][1996][1997][1998] は、遼寧省檔案館に所蔵される「三姓副都統衙門檔案」等を利用して、アムール川中下流域に暮らす人々について検討を加えている。

柳澤明 [1994][1997] は、東北に暮らす人々が八旗に編入されていく背景と目的について考察を加え、その理由として、①軍事力としての利用、②離反防止、統制強化、③俸餉支給による生活支援等をその理由としてあげている (柳澤 [2001])。また、楠木賢道 [1994] も、ダグール駐防佐領の設立について考察している。さらに、嫩江流域ブトハに暮らす人々、およびオロチョン人が、19世紀後半、ロシアとのあらたな近代的国際関係のなかでどのような対応をとったかということについて、加藤直人 [1997] が検討を加えている。

◆露清関係

清代の対ロシア関係研究は、長い間吉田金一によって担われてきた。吉田が台湾で発見した、ネルチンスク条約の清朝側の代表の一人ランタン (Langtan) が描いてもらった地図 (「吉林九河図」) は、現在のロシアの主張するネルチンスク条約の国境線に重大な疑義を提示することになった (吉田 [1984])。吉田 [1992] は、ネルチンスク条約の国境ゴルビツァ川の位置についてソビエトの学者と論争し、その成果をまとめている。最近、吉田の学統を受け継ぎながら、中国、台湾、そしてロシアに保管されるさまざまな文書史料を中心に、キャプタ条約をはじめとする両国関係について研究をすすめる研究者が登場した。柳澤明と澁谷浩一である。条約問題はとくに政治的にながれやすいが、柳澤 [1988][1989] と澁谷 [1991][1994] は、いずれも史料に準拠した実証的方法で両国関係を論じている。

◆東トルキスタン (新疆)

17世紀以降の東トルキスタン研究は、羽田明と佐口透によってリードされてきた。羽田は漢語史料ばかりでなくチャガタイ語をはじめとする現地語による研究 [1963][1982] を実践し多くの成果をえた。一方、佐口は、徹底した漢語、ロシア語史料等の収集と分析をもとに、18、19世紀の同地域の問題、とくにベク (beg) 制をはじめとする社会構造について画期的な研究 [1963][1986][1995] をおこなった。羽田の学統を受けるかたちで現地語史料を中心に研究をすすめているのが濱田正美 [1973][1983] である。また、佐口を継承するかたちで漢語史料を中心に東トルキスタン西部 (回疆) の社会を考察したのが、堀直 [1979]、真田安 [1977][1983] である。また、片岡一忠 [1991] は、清朝の「新疆」支配という視点から、その統治の特質について論じた。1980年代になると、中国の文書史料が次第に公開されるようになった。それらの動きの中で、加藤直人 [1983a] は、佐口の研究の流れを受け継ぎながら、とくに満洲語文書史料の有用性を説いた。現在、満洲語を含む清朝の公文書を利用した研究が次第に盛んとなり、堀 [2001] も次第にその方向に向かっている。また小沼孝博も、近年これら清朝公文書を渉猟し、清朝がジュンガル征討後にオーロトに対して実施した「旗制」に関する史料を発見した。そして最近それをもとに、旗制編立の意味と、アムルサナの叛乱以後の変化を論じている (小沼 [2004])。

◆青海、チベット

清代の青海、チベット方面については、すでに和田清 [1959] をはじめとする基礎的研究があったが、チベット語史料にもとづいて本格的な研究を行ったのは山口瑞鳳 [1963] が最初であろう。この論文は、1630年代、ホシュートのグシ・ハンが青海、チベットをその勢力下におさめる過程を、『青海年代記』等のチベット語史料をもとに検討したもので、以後の当該地方研究の出発点のひとつとなった。佐藤長は、チベット語史料だけでなく、当時利用できる最大限の漢語史料を駆使して、17、18世紀の青海、チベットの歴史を検討した。その成果が佐藤 [1972][1973] である。ペテック (Petech [1972]) の概括的な研究しかなかったこの当時のチベット、青海、モン

ゴル、ジュンガル、そして清朝との関係史を、はじめて深化させた研究として評価されよう。

1970年代末から80年代初めより、当該地域の研究は次第に文書研究へとシフトされはじめていた。清朝の満洲語文書を利用して検討を行ったのが加藤直人である。加藤は、台湾・国立故宮博物院で刊行された文書集『年羹堯奏摺』所収の史料を用い、1723年に青海で起こったロブサン・ダンジンの反乱について考察した。それが加藤[1983b][1986]等の一連の研究である。加藤の研究をより深化させ、かつ青海、チベット、そして清朝自体とチベット仏教との関わりを、漢語、チベット語、満洲語、モンゴル語史料等を縦横に駆使して、詳細に研究したのが石濱裕美子である。その研究のひとつの集大成、石濱[2001]は、「チベットからの視座」にこだわる。清朝という枠組みのなかで、大清皇帝を中心とした同心円上に位置づけられてきた従前の史観を根底から覆す示唆に富む著書といえよう。(加藤直人)

〈3〉国制史・政治史

清朝は、一般に中国王朝と目されているが、むしろ東アジア王朝という方がふさわしい。清朝は、パミール高原以東の空間をゆるやかな形で統合していたので、それを研究する際には、他の中国王朝の場合より視野をひろくもっている必要がある。その点では元朝も同じであるが、元朝が100年ももたない短命王朝であったのに対し、清朝は300年近い命脈を保った。勢力の広大さと長期にわたる支配の持続、ここに清朝国制史・政治史の面白さがあると同時に、難しさもあるわけである。

従来清朝の体制は、明朝のそれをひきついでものと理解されていた。しかし昨今は、明朝との断絶を主張する研究が現れている。たとえば刑事裁判において事実報告の仕方が、明と清とで違っていることが、谷井陽子[2000]によって示された。現在は、近代国民国家の自明性が揺らいでいるのであるから、漢族中心的な視点を相対化する方が、研究の新たな展開を期待できよう。まずは宮崎市定[1993a]にのせる「御製朋党論」を読み、雍正帝に対する違和感を身につけておいてほしい。これが、議論の端緒となるはずである。

アヘン戦争以前の清朝の体制を、総体的に考える際の視角としては、以下のものがある。東アジアの歴史を、素朴と文明の相克からえがきだした宮崎市定[1992a][1992b]は、再評価される必要がある。石橋崇雄[1997][2000a]は、清朝をマンジュ、漢、モンゴル、チベット、ウイグルなどからなる多民族国家としてとらえ、現代中国の原型をそこにみる。

清朝の体制についての定説は、中国近世王朝的な君主独裁制の系列に位置づけるものであり、宮崎市定[1991a]が代表である。一方、満洲史との連続性から考えるのが細谷良夫[1968]であるが、いずれも雍正帝の時に、体制の完成をみるとする点では主張を同じくする。岸本美緒[2002]は、統一的理解をめざす試みである。

比較史の視点によるものとしては、足立啓二[1998]がある。中国専制国家を、自律的中間団体の欠如した巨大な統合体としてとらえ、日本幕藩制社会と対比する。谷井俊仁[2002]は、マックス・ヴェーバーとは異なった家産官僚制理解を提示する。

清朝における法の基本性格については、滋賀秀三の理解から入っていくのがよい。清朝法制史ということでは、滋賀[2003a]を読まなくてはならないが、中国における法の性格について簡潔に示した滋賀[1987][2003b]は、さらに味読すべき内容をもつ。

時代の雰囲気をよくあらわしている一般書から、これらの問題に親しんでいくのもよい方法である。清朝考証学の祖である顧炎武の評伝である井上進[1994]では、明から清への時代の転換、清朝が明末的な風紀を徹底的に弾圧する様子がえがかれる。雍正帝については宮崎市定[1991b]があり、専制についてのイメージをあたえてくれるだろう。乾隆年間、清朝専制体制が迷走していく様子は、キューン[1996]に活写される。

最後に、清朝の国制については、満洲史研究者が、満洲史の関心から論じている。入関前と後ではかなり性格を異にするが、一定の連続性があるのも間違いないので、入関前の国制についても基本はおさえておく必要がある。三田村泰助[1965]のムクン・タタン制研究は、満洲社会史総論として読まれるべき名篇である。阿南惟敬[1980]は八旗の組織原理に詳しく、神田信夫[2005]は、議政大臣、文館など政治制度について論ずる。谷井陽子[2005]は、満洲史の通説たる連旗制論を批判する。これらの研究からは、満洲人の社会が漢人の社会とかなり違うことが納得される。園田一亀[1991]を読めば、むしろ日本の社会に近いとの印象さえ受けよう。それが入関後にどう貫徹し、挫折し、変容したのか。それらを読み解くことこそ、清朝国制史・政治史研究の醍醐味である。

◆官制

清朝の官制を総体的に論じているものとして、20世紀初頭の台湾総督府編[1972]をこえるものはいまだにない。しかし同書は、近代行政法の理論にのっっているため、どうしてもネガティブな評価がでてしまう。同書が詳しいわりに、腑に落ちないのはそこに理由がある。同時代人の論述としてほかに服部宇之吉[1966]、狩野直喜[1984]があり、むしろこちらの方が明確なイメージをあたえてくれる。戦後のものでは、坂野正高[1973]がある。

官僚を束ねるのは、皇帝であるので、皇帝についての理解は必須となる。しかし皇帝論は、意外なほど欠落している。石橋崇雄[1988]は、入関後の清朝皇帝を、満洲的なエジェン(主)―アハ(奴)関係の延長でとらえる。清朝皇帝のこのような側面は、従来の君主独裁制論に欠落していた論点であり、それをふまえてこそ皇帝が、官僚を私信(「奏摺」)によってコントロールしていたことが理解される。

官制全般の研究としては、史料の豊かさを利用した数量分析がある。檜木野宣[1975]は、満漢併用制をあつかい、石橋秀雄[1989]は、進士の動向を出身地別に

分析する。しかしこのような現象が如何なる論理のもと成立したのかを明らかにする人事政策については、ほとんど手つかずの状態である。清朝は、治人をもって統治の要諦とするのであるから、人事政策こそは清朝国制史を理解するための最優先課題のはずである。これについては、近藤秀樹 [1958] が先駆的研究であり、雍正期に人事権の一部が外省に委譲されたことをのべる。最近出たモノグラフに、大野晃嗣 [2001] がある。

中央の統治機構については、内閣・軍機処を翻訳機関として性格づけた宮崎市定 [1991c] が屈指の名篇である。また、北京の警察機構である歩軍統領衙門をあつかった渡辺修 [1981] も、清初から清末まで通観した力作である。

地方の統治機構については、州県衙門については蓄積があるものの、それより上の衙門がどうなっていたのかはよくわからない。州県の実務は、州県官だけでは行うことはできず、幕友（行政顧問）、胥吏（事務員）、衙役（雑役夫）、家人（州県官の使用人）の力を借りねばならなかった。このうち幕友と胥吏については、宮崎市定 [1991d] が、衙役と家人については、谷井俊仁 [1988] があつかう。胥吏の交替については、近年、加藤雄三 [2000-01] がでた。緑営の果たした警察機能と犯罪の動向については、太田出 [2000] があつかう。

官僚登用制度である科举については、宮崎市定 [1993b] の古典的著作がある。狩野直喜 [1984] と併読するのが望ましい。この問題は、欧米で好まれるテーマであり、何炳棣 [1993] による社会の階層移動に関する研究が有名である。最新の動向については、チェイフィー [2002] が紹介する。科举試験とは何を勉強し、どのような問題が出るのかについては、佐野公治 [1988] が教えてくれる。清人の発想法の一端がここに由来することをうかがわせる。一方、官僚登用の裏道である捐納（買官）については、近藤秀樹 [1963] が数量分析をおこない、官僚となることの利殖性を論ずる。制度の全体像を知るには、伍躍 [2000a][2004] がよい。

◆政治

政治の分野は、清朝史研究の弱点である。明代や清末にはそれなりの蓄積があるのであるから、入関から中期におよぶ清朝史は、政治史の魅力に乏しいのだとも考えられる。

この分野に自覚的に関わってきたのは、大谷敏夫だけである。その業績は、大谷 [1991] [2002] としてまとめられた。そこで大谷が、清代政治史の基本課題を、君主権と官僚機構の問題に求めているのは、清朝における政治の質を考える上で示唆的である。清朝専制体制において、皇帝の意志形成は、限りなく独断に近く、むしろ実施の方が問題となる。されば官僚機構が重要な位置を占める。ところが明朝は、官僚間に甲論乙駁があった上で皇帝の意志が形成されるが、実施はざさんである。明と清は、同じ専制体制でも政治風土に大きな違いがある。この違いをどう説明するかが、清朝政治史を性格づけるのに有効である。

井上進 [1992] は、知識人政策を介して明と清を比較し、順治から乾隆までの政治

史を通観する。井上は、乾隆帝が知識人に対して、「内面の如何はともかく、外面においては絶対的に服従すること」を求めたことを指摘する。支配の正当性に関する近代的な観念からすれば異様であるが、これが清朝専制政治の行き着いた姿である。

満洲史からのアプローチは、姻戚関係の分析から、入関前と後を連続的にとらえる研究が精力的に進められている。ここでは、代表作として杉山清彦 [1998]、鈴木真 [2001] をあげる。ヌルハチから雍正帝まで歴代ハンのいづく政治的正当性の論理については、谷井俊仁 [2005] がある。華夷思想・中華思想については、安部健夫 [1971] が古典であり、平野聡 [2004] が政治学の立場から論ずる。対外交渉に当たった清末の官僚の行動様式を分析した坂野正高 [1970] も、政治学的な分析方法による意欲作である。

つぎに時代別の各論にうつる。順治年間、対南明戦、満漢の党争、ドルゴン専権から順治親政へなど、政治史的テーマにあふれているにもかかわらず、研究は低調である。順治年間全体の概観は、谷井俊仁 [1994] がおこなう。明から清に仕えた貳臣については、岡本さえ [1976] が、鄭氏政権については、林田芳雄 [1996] がある。

入関後清朝最大の危機が三藩の乱であるが、これも細谷良夫 [1984] が論じて以来あまり研究がなく、問題のわりに手薄である。康熙50年の科場案については、井波陵一 [1996] があり、漢人官僚の動向については、滝野邦雄に [2004] にまとめられた一連の業績がある。

雍正帝については、古来その即位に疑惑がもたれてきた。即位に至るまでの兄弟間の闘争、即位後の弾圧については、宮崎市定 [1991b]、楊啓樵 [1987] に詳しい。香坂昌紀 [1986] は、付け届けを通じて満洲人諸王と官僚との癒着ぶりを描きだしている。

乾隆期は、対内的には専制体制が迷走していく時代であるが、対外的には東アジアの統合を果たした時代である。迷走ぶりを示すのは、乾隆33年の辮髮切り事件をあつかったキューン [1996] である。井上進に従えば、この時期の禁書政策も思想弾圧などといった大仰なものではなくなるが、これについては、岡本さえ [1996] の専著がある。

この時期の対外関係については、簡単に記すにとどめる。ジューンガル部については、宮脇淳子 [1995]、濱田正美 [1998] があり、ロシアについては、菊池俊彦 [1998] がある。対英関係は、マカートニー [1975] が、基本史料である。

アヘン戦争以前の嘉慶・道光政治史は、ほとんど空白であるが、白蓮教の反乱については、鈴木中正の研究がある。政治過程については、鈴木 [1971] が詳しい。これ以外には、人物研究に見るべきものがある。片岡一忠 [1992-94, 96] は、乾隆初年から嘉慶半ばまで生きた洪亮吉の生涯を追う。谷井陽子 [1989] は、地方の財務官僚を務めた張集馨の年譜から、地方の財務、官界のあり方を示す。ここからは、閉塞した時代相を垣間見ることが出来る。なお人物研究は、清代を通じてもっと行われてよいテーマであるが少ない。井上進 [1989] は、顧炎武の年譜の補正であり、人物研究の

あるべき手法を示してくれる。

◆法制

法制の分野が、最近注目を集めているのは、清代的な秩序のあり方に関心が向けられているからである。しかし秩序の諸相を知るだけならば、どの分野でもかまわない。法制史が有利なのは、秩序のあり方を清人自ら理論化してくれているところにある。我々は、秩序の実相と理論の二つを同時に入手できることになる。

この分野が注目されたのは、滋賀秀三によるところが大きい。清代法に関する滋賀の業績は、滋賀 [1984] が個別問題をあつかい、滋賀 [2003c] がそれを中国法制通史の中で位置づける。各論と通論とを備えた滋賀清朝法制史学は、この分野のスタンダードたるに相応しい。

滋賀の研究の特徴は、法を広いコンテキストの中でとらえるところにある。そこであつかわれるのは、刑事裁判の行政的性格、宗族による私的制裁、民事裁判における判決の確定観念の不在、民事法源としての情・理・法などである。特に民事案件について先駆的な業績を発表してきたところに、滋賀の本領がある。それに対して、オーソドックスに刑事案件に即して解釈学的研究を進めてきたのが中村茂夫で、主著は中村 [1973] となる。

清朝の法制史料についての解説は、滋賀秀三 [2003a] があるが、古くなったところもあるので、滋賀編 [1993] に拠らねばならない。内容的に詳しく、入関前の法制史料(加藤直人)、清律(谷井俊仁)、蒙古例(萩原守)、省例(寺田浩明)、刑案(中村茂夫)、判語(森田成満)、契約文書(岸本美緒)について記す。しかし、コンパクトにまとめられた前者も捨てがたく、全体像を得るためには、むしろこちらの方がよい。

清律は、清朝における法的思惟の骨格を成すものであるから十分理解しておかねばならず、その際には、律注を参照する必要がある。谷井俊仁 [1999-2004] は、『大清律輯註』人命篇・鬪毆篇の注釈の研究である。個々の法理を解明した研究は多いが、ここでは、中国法雛形説を論じた中村茂夫 [1979]、成案の法源性を検討した小口彦太 [1986]、誤殺概念をあつかった中村正人 [1993] をあげるにとどめる。

民事案件については、律の規定が充実していないため、裁判においても、事情の勘案を主とした調停的な解決が図られる。そのためこの分野の研究は、法社会学的なアプローチをとるのが有効となる。滋賀秀三の民事裁判理解を批判するのが、ホアン [1998] で、それに対する反論が滋賀 [1998] である。両者の論点は、民事裁判は法に基づいて判断されるのか否かにある。この分野において活躍しているのは寺田浩明で、民事秩序を満員電車のモデルで説明する。業績は多いが、代表作は寺田 [1997] であろう。寺田 [2003] は、民事裁判における法の性格について論じたものである。

司法行政・裁判については、滋賀秀三 [1984] が基本文献となる。死刑人犯の再審制度である秋審については、高遠拓児 [1999] があり、杖刑に事借りて死に至らしめる杖斃については、鈴木秀光 [2002] が論ずる。最近のユニークな研究としては、民

間の訴訟請負人についての研究がある。ここでは、夫馬進 [1996]、唐澤靖彦 [1998] をあげておく。

則例・省例は、律例のような強固な規範性をもたず、実務の便宜のために編纂された資料集としての性格が強い。清代中期以降、この種の書が続々と出現するが、これについては、谷井陽子 [1990][1995] が網羅的な研究である。(谷井俊仁)

〈4〉社会史・経済史

人は生活や生業の周期、そして「養生送死」と表現される人生の周期を刻む。その周期は孤立しているのではなく、他の周期とのあいだに複雑な相互作用をもちながら推転し、さまざまな関係やモノを生みだしては消滅させる。相互作用や関係を横断的に切り取れば「場」や「構造」が浮かびあがるし、その構造がフィードバックしながら遷移する過程を考察すれば、循環や変化、また一定の方向を想定した「発展」を見いだすことが可能となる。社会史や経済史は、相互作用や関係の束として捉えられる社会や市場の構造を歴史的視角のなかで認識することを目指す。その出発点は、生活する人びとの行動を相互作用や関係の位相において理解することであろう。1759年、乾隆帝に上呈された『姑蘇繁華図』は、江南の中心都市蘇州と近郊の日常生活を描いた風俗絵巻の代表作である。蘇州城内の西部、工匠の集まる専諸巷に生まれた作者徐揚は、40歳で宮廷絵師になって北京にのぼるまでそこで生きた。城内はもとより周辺の農村と市鎮、運河など交通路、虎丘という別墅地区で繰り広げられた生活風景を巨細に描く。その複製本、遼寧省博物館等編 [1986] に附された解説は有用、しかし范金民 [2003] が文献史家の力量を発揮したこの絵巻の解説と考証のまへではやや色あせるかもしれない。清代の社会史・経済史に関心があるならば、蘇州の詳しい地図を手に入れて、范の文章とあわせ参照しながら『姑蘇繁華図』を観察することをまずお勧めする。

◆都市の諸相

清代については、この絵図の主題である都市をめぐる多くの研究対象を見いだすことができる。斯波義信 [2002] は、地域の開発や商業の発展、都鄙関係について長年にわたる研究をふまえた中国都市史の通論。中国、欧米の研究者による最新の知見を動員して書かれており、人間の活動の集中という現象を地理的配置と環境の視点から分析する都市生態論、活動の組織のされかたや機能を解明する組織論など、普遍的な分析視角と概念を用いることが、他地域の事象との比較を可能にし、ひいては中国社会とその歴史的な発展の個性を認識する道を拓くことを強調する。社会史、経済史を研究しようとする者はここから多くの導きの糸を得るだろう。城郭の管理、訟師や打行など不法行為、宗教施設などを幅広く論じる川勝守 [2004]、江南の都市について水路と建築物に焦点をあてた都市空間論を試みる高村雅彦 [2000]、都市の起源と発展を城郭の構造に重点をおきながら概述する愛宕元 [1991] などから、主題の多様

さを知るとともに、資料の幅を学ぶことができる。都市の無頼を論じた上田信 [1981] はその視点と歴史叙述の双方において成功を収めた論文である。Skinner (ed.) [1977] に含まれる個別の都市についての論文をよめば、欧米における研究の方向や方法論を知ることができるし、Rowe [1984] は中国の中央に位置する商業都市漢口の発展を描いた好著である。17世紀以前の漢口については谷口規矩雄 [2002] がこれを補う。清代になると史料の量は格段に増えるが、人口、住民の構成や移動などを示す戸口統計類はほとんどなく、また個人による記述や絵図から知り得ることには限界がある。都市史に限らず社会史、経済史の分野では、調査資料や統計が得られる民国期および現代へのつながりを意識する必要がある。濱島敦俊他編 [1994] は文献史家による現地調査の記録として示唆に富む。

都市と周辺の農村における「善挙」（慈善活動）をめぐる社会的結合やそれを支えた思想の動向、組織の連合と巨大化、官府による統治とのかかわりなどを論じた夫馬進 [1997] は、丹念な史料の発掘によって組織と活動実態についての多くの知見を獲得したばかりか、慈善事業が徭役化したこと、清末にいたって「善堂」が都市の自治機構として発展したこと、活動内容や経費の公開による公信性など新たな視点を提起した。都市には同郷人や同業者の活動の拠点として会館や公所という施設が多く作られており、ひろく関心を集めてきた。これらについては全漢昇 [1934]、仁井田陞 [1951] の研究と戦前の北京における収集資料を整理した佐伯有一他編註 [1975] がある。江南における商業活動の展開を幅広く論じた范金民 [1998] は、会館・公所の展開についても詳しい。清代の会館・公所の運営方法や機能を、碑刻や地方志などから窺うことには隔靴搔痒の憾がのこる。今後の史料の発掘が俟たれる。

江南では、府城、県城のほか、城郭をもたず、運河などの交通路ぞいに発展した中小都市の発展がめざましかった。それを市鎮と呼ぶ。1980年代中期以降、市鎮の歴史に関心があつまったのは、「市場経済」や「郷鎮企業」に代表される産業構造の転換が郷村地域の経済発展を実現する方策として脚光をあびたことと関連している。これ以前、副業を抑制して主穀生産に傾斜する農業政策や、商品流通を強く統制する生産と流通の集団化が農村を立ち後れのなかに閉じこめてきたこととの対比において、明清時代から近代にかけての市鎮の隆盛に関心を集めたのである。寺田隆信 [1958] は蘇州・松江地方の棉業商人の活動を大都市とその周辺の市鎮との経済的関係を視野に入れながら分析した先駆的研究。林和生 [1984] は烏青鎮を対象として商業活動の発展を長期的に観察する。森正夫編 [1992] は地理学研究者と共同でおこなった現地調査の成果に基づいて、江南デルタの市鎮の立地や内部構造などの問題を論じる。稲田清一 [1992] は鎮董とよばれる市鎮の指導層の活動を明らかにした。行政と社会の関係をさぐるという視点が鮮明である。川勝守 [1999] は史料の博搜によって経済のみならず、交通、風俗、義塚、治安、文化などの方向から市鎮社会を多面的に照射する。森 [1999] は、江南デルタで多く作られた郷鎮志を素材にして、その対象である鎮の広がりや構造を編纂者がどのように記述したかという視角から、地域を社会と

してなり立たせていた主体的契機に迫る。流通や手工業の発展と市鎮の盛衰を論じた劉石吉 [1987]、樊樹志 [1987a][1987b][1988][1990]、陳学文 [1993][2000] はこの分野における研究を大きく進展させた基本文献。劉の研究は、数量化や他の地域との比較を試みるという特徴をもつ。広東の珠江デルタに出現した巨大な市鎮、仏山鎮についても研究がすすんだ。羅一星 [1994] はその代表作である。林和生 [1980] は広東の集市の多くが紳士層によって設立されたことを論じ、片山剛 [2001] は珠江デルタの大岡墟という集市の形成と運営を詳細に分析し、紳士や有力者の関与をみとめながら、日常的な管理運営は里長戸身分を得た有力同族がおこなっていたとする。三木聰 [2002] には、福建省内陸部の沙県について、その集市や商品流通の実態を明らかにし、地域社会の動向を多面的に論じた研究が含まれている。都市管理や集市をめぐる社会関係を明らかにすることは、清代社会の特質を論じるさいの鍵となろう。中国の都市と郷村では定期市の慣行がひろくみられた。加藤繁 [1953] はその広がりを見事に明らかにした先駆的研究である。石原潤 [1973][1980] は経済地理学の方法による問題接近を試みている。華北地域については百瀬弘 [1980]、山根幸夫 [1995] が地方志を中心とした史料の収集にもとづいて、その実態を明らかにする。なお、市鎮の発達した江南デルタについては定期市の存在を示す史料は知られておらず、船による行商などが農村における日常的な交易を支えていたと考えられるが、こうした基底レベルの商業活動の実体についての知見は存外乏しい。

◆社会史

社会史には大きく分けて二つの方向がある。一つは、家族・宗族など血縁団体、村などの地縁団体、組合・結社など社会団体、祭祀や市場、水利などをめぐる共同体といった組織を対象とするものである。

『姑蘇繁華図』は木瀆鎮の東にたなびく雲煙によって廟宇の香火盛行のさまを象徴させているが（廟宇のなかには意図的に人間を描いていない）、濱島敦俊 [2001] は江南農村部の庶民によって信奉された民間信仰と祭祀の変遷を文献の博搜と現地調査の成果をもとにして明らかにし、さらに城隍という都市神をまつる廟の配置を考察することを通じて、都鄙関係の反映を見いだした。文化人類学や民俗調査の成果を歴史資料と結びつける手際は鮮かである。靈異説話と社＝土地廟における祭祀を共有することが基層組織の共同関係を支えていたという認識のもとに、説話の内容や祭られる神の変遷のなかに基層の支配層のありかたや農業経営の商業化が反映しているとの仮説を豊富な史料の裏づけとともに提出する。中国でも趙世瑜 [2002]、鄭振滿・陳春聲編 [2003] など、廟会（市をともなった祭日）や祭祀を中心として民衆の社会生活に眼をそそぐ研究が隆盛しつつある。この分野では現地調査が威力を発揮するだろう。清代の民間宗教は「宝巻」と呼ばれる文献を少なからず遺している。浅井紀 [1990] [1993]、相田洋 [1994] は羅教をはじめとする各宗派の活動とその世界観を明らかにする。18～19世紀交替期に四川から湖北、湖南にかけて反乱を起こした白蓮教とその運動については、鈴木中正 [1971][1974]、鈴木編 [1982]、小林一美 [1983]、佐

藤公彦 [1999], 山田賢 [1998a][2001] が詳しい。また安野省三 [1985], 山田 [1998b] は、宗教的色彩の薄い「会党」をふくめて秘密結社の広がりや20世紀まで射程にいられて概説する。中国民衆の精神世界を理解することに情熱を傾けた酒井忠夫の著作集 [1997-2002] には、19世紀以降に中国本土のみならず海外華人のあいだにも拡大した青帮・紅帮という秘密結社についての重厚な研究が含まれている。

基層の社会組織のありかたは、国家による支配の手段という視点、および慣習や文化の構造に眼を注ぐ文化人類学の視点から関心を集めてきた。浙江省でおこなわれた順荘編里については伊原弘介 [1988][1990] が詳しい。三木聰 [2002] は福建省を対象とする多角的な研究を進めるなかで、上から組織された保甲制や下から形成される民間の組織の機能に着目している。片山剛 [1982a][1982b][1984a][1984b] は珠江デルタの図甲制について検討を加え、宗族結合と官による税・役收取のための編成との重合関係や総戸を通じての一括納税などがおこなわれていたことを明らかにした。徴税という国家支配を体現する業務と社会の組織との関係を考えるうえで示唆をあたえる。片山 [2002] は同地域の里甲（図甲）内部における公共的な経費獲得の手段として市場を設立するなど事例を紹介し、伍躍 [2000b], 洪性鳩 [2003] は徽州の宗族の内における徭役負担の分配問題を論じている。村落における人間関係や行政の作用を現代にまでおよぶ長期的視野のもとに分析した上田信 [1986] は鋭くかつ刺激的である。熊遠報 [2003] は、徽州の村落図から村落の景観や環境、宗族と村落の関係などを窺う。また宗族組織の形成を生活と経済活動を支える自生的秩序体制として捉える試みをおこなっている。先祖の祭祀をおこなう祠堂、族譜、共有財産などをもつ血縁組織である宗族については、浙江省の一地域における社会を長期的な視野から描いた上田 [1995] を読んでその概要を知るのがよい。開発や移住の過程のなかで宗族が果たした機能については、山田賢 [1995] を参照すべきである。また、先祖祭祀共同体としての原理たる宗法については、井上徹 [2000] が宋代から清代におよぶ長期的な視野から検討を加えている。清代の宗族についての個別研究は多くあるが、田仲一成 [1989] が紹介した祠産簿や、渋谷裕子 [1990][1997] が利用した「祝聖会簿」など、宗族の活動や組織を長期的に示す文書にもとづく議論は貴重である。宗族による土地所有や社会的な勢力形成をどのように理解するかという問題について、経済史の大家傅衣凌が晩年に構想したのは「郷族」という概念であった。これについては森正夫 [1985] が手引きとなる。

社会史のもう一つの方向は、不定形で多様な社会関係を、組織として見るよりは、動的な過程として捉えようとする。岸本美緒 [1999] は、明清交代期の江南に舞台をもとめ、政治情報や輿論をめぐる人びとの行動、社会的な結集や権力の生滅などに着目し、そこから当時の社会の特質と動向を論じる。有力者に「投」じて全人格的に隷属し、あるいは「盟」を通じて人格的に結合する、といった無限定な一体感を、当時の社会的な結合や権力・権威の承認をつらぬく性質として読みとる。老爺などの呼称を通じて地方社会の階層感覚の変化をさぐる岸本 [2000] と同書を併せ読めば、その一

貫した「下からの」視角による方法を理解できるであろう。小田則子 [2000] は地方檔案を利用して郷鎮社会における「公議」を捉えようとし、渋谷裕子 [1995] は徽州文書を用いて生員層の社会活動の様相を明らかにする。

◆市場と経済

16世紀以降の中国では、地方の小市場から全国規模の物流まで、さまざまな広がりをもった市場の重層というモデルを用いることが有効である。各層の市場のなかでおこなわれる交換に支えられて、都市の経済と文化の繁栄、さらには農民の生活が維持されていた。広域的な物資の流通を生み出す要因として、地域ごとの経済構造の差異やその時間的な変化を明らかにすることは、市場の構造を研究するための基礎作業である。そのうえで物流を実現する経済活動や制度の特質、その発展傾向、商品の生産をめぐる条件、経済政策を支えた認識や政策評価などが研究の課題となる。

商品の流通・消費や価格構造に即して市場の性格に接近するのは有力な研究方法である。湖南の主穀商品生産地帯、広東の商業的農業地帯の生産と流通の動向を分析し、華中・華南の商品の流れを通観したものが北村敬直 [1953]。中小の農民は家計の不足を補うために副業の商品生産を営むことによって米の消費者として現れるようになり、湖南米が乾隆期（1736～95）に及んで省境を越えなくなったのは省内需要の高まりによるが、米の商品化は地主制の発達によって深まったという仮説を提起した。安部健夫 [1957] は清代における米穀の広域流通や備蓄の実態とその趨勢を明らかにした雄編。清代市場論を大きく切り拓いたのは岸本美緒 [1997a] に結実した切れ味鋭い労作の数々である。物価研究から出発した岸本は、景気・市況の変動や市場の不安定という現象に着目し、動態的な市場構造についての議論を展開する。市場に参加する多様な人びとの行動や言説を丹念に読みとり、その原因・意図と整合するような市場の構造を浮かび上がらせるという方法には、別の課題に取り組むものにも学ぶべき点が多々ある。則松彰文 [1985][1989][1990][1992] は米穀流通と政策についての研究を深め、同 [1993][1998] は、奢侈や流行という消費者の行動に着目する。山本進 [2002a][2002b][2002c] は、地域経済圏という枠組みを措定し、それら相互の商品の交換を全中国規模で追跡するというねばり強い仕事の成果である。棉布という主要商品をもつ江南が中軸となっていた明代以来の全国市場から、自由な市場のなかで均衡をもたらす地域間分業が進むとともに、地域経済圏の自立の傾向がみられるという図式を描く。需給の不均衡によって経済問題や市場の機能不全があらわれていたことに着目し、開放性や非完結性を強調する岸本の清代市場論とは違った市場構造とその発展の見通しを提出するのが山本の構想である。

農民や地主、手工業者、商人など経済主体の分析をつうじて、市場の構造や経済発展の趨勢を探る方法もある。重田徳 [1956] は、湖南米作地帯における佃戸による商品生産普及の検討をつうじて、清代初期には地主にたいする佃戸の隷属が廃棄されたという見解を提出した。佃戸の自立化のなかに中国封建制の成立を見ようとする小山正明 [1957-58] の説と相呼応するとともに、重田は、清代の市場に地主市場という

規定をあたえた。足立啓二 [1978a] は『沈氏農書』を分析することによって、明末清初期の江南で利潤をめざす経営体=富農経営の存在を想定し、さらに足立 [1978b] で、18世紀にこの地域での中心的商品の一つとなっていた肥料用の大豆搾りかすの流通を丹念に追跡し、集約・多肥農法が江南デルタに広範囲に成立していたことを論証して、商業的農業を牽引車とする全国的な市場圏の形成、農業のブルジョアの発展の可能性を主張した。足立 [1982][1983] は蘇州の魚鱗冊を利用して、所有や経営の規模を計量的に分析する。魚鱗冊など台帳類を利用するさいには、高嶋航 [2000a] などを参照してその性格を押さえておく必要がある。田尻利 [1999] は、太湖流域の桑葉、江西の藍、タバコの生産と流通の問題から農業の商業化を論じる。川勝守 [1992] は水稻、「春花」と総称された裏作物、棉作などの検討をつうじて江南農業の多面性を論じるとともに、文書史料の分析をつうじて蘇州の地主経営の実体を明らかにする作業を試みている。片岡芝子 [1959] は、商品生産の性格から華北の地主経営を分析し、麦、煙草、棉花の商品生産をつうじて中小土地所有者に富農の発展の方向がみられたことに加え、清代では東北地方やモンゴリアでの消費市場拡大に促されて織布業が発展したが、華北など棉花を生産する地方では原料供給において客商の支配を受けることが少なく、農業より分離して専門化するものが出現したことなど、農村手工業の発展を展望する点に特色がある。羅崙・景甦 [1984] も清代の山東省では市場の発展に促されて雇傭労働を用いる地主経営がみられたことを明らかにしている。足立 [1981] は華北地方の農書を分析対象とし、畜力を利用した深耕耕作と養畜によって肥料を得ることによる地力維持を特長とする経営が、清代の商業的農業の優勢のなかで解体しつつあったとの見通しをたてた。農業と農村経済については、天野元之助 [1978][1979]、柏祐賢 [1944] など戦前・戦中期の仕事から基礎的な知識を得ることができる。また、水利や農学などの専門家と歴史研究者が江南の稲作技術の展開を主題としておこなったシンポジウムの記録、渡部忠世他編 [1984] も必読文献である。Perkins [1969] は明代以降の中国農業の通史として貴重。Huang [1985] [1990] や李伯重 [2002] が農業経営の労働生産性や限界生産力（労働や資本の追加とそれが増大させた収益の比率によって計測される）がどのような動向を示していたか計測することを試みている。普遍的な尺度による他地域との比較をおこなうには数量化の方法が有効であるが、19世紀以前については資料上の困難が大きく立ちがかる。

手工業については、奈良修一 [1993] が生糸生産と海外市場との関係を論じている。寺田隆信 [1958][1968][1971]、横山英 [1961][1962] は蘇州の踞布業（つやだし加工）にみられた包頭という請負業者の機能についての研究を深めた。田中正俊 [1984] は問屋制前貸しの経営形態を示す資料についてひろく検討を加え、レーニンや大塚久雄の説を援用しながら、それが近代的な資本主義への道を切りひらくものではなかったことを主張した。華北の棉業については北村敬直 [1983] がある。製糖や製紙の技術を論じたダニエルズ [1992][1995] は研究水準を大きくひきあげた作であ

り、技術の比較や波及効果を重視する点など、これからの経済史が目指すべき方向を示している。森紀子 [1983] が論じた四川における井戸水くみ上げによる製塩業については比較的多くの文書資料や調査資料が得られる。宮寄洋一 [1991] は数少ない石炭採掘業をめぐる政策論争を取りあげ、1739年に民間による採掘が公認されたことを明らかにした。さまざまな経済主体の営みを掘り起こし、それが市場のなかでどのような選択をしたか、いかなる問題を抱えていたかという問題を考えることを通じて、時代と地域の特質を明らかにすることは重要な課題である。

以上のような経済的な分析により経営の性格を規定することをめざす方法とは異なるとして、社会関係の文脈のなかで地主や農民の経営を論じようとするのが岸本美緒である。岸本 [1997a] に含まれるモラルエコノミー論や浙江の地主家庭の家産経営、清末の地主の経営心得たる『租穀』についての論考はこうした研究の方向性を示している。また、読み手にとって無味乾燥に感じられる売買契約文書を材料として、取り引き慣行の変遷を明らかにするのみならず、農民の生活の基盤たる田土の所有やその買売という事態について清代の人びとがどのような意味を付与していたかという問題を論じた岸本 [1997b] の議論はあざやかである。

地主や商人の経営については、徽州文書を利用した事例研究がすすんでいる。鈴木博之 [1990] は祠堂の文書を通じて同族組織による土地所有の実態に迫り、臼井佐知子 [2005] は塩専売の変化や宗族のネットワークに着目して徽州商人の勢力拡大を論じる。

市場における交換を媒介し、また資産ともなる貨幣の動向に注目して市場の構造に迫る方法もある。岸本美緒の市場研究は、銀の動向や銅銭使用のさいの計数方法（短陌）について鋭い指摘をしている。黨武彦 [1990][2003]、足立啓二 [1991] は、銀両・銅銭という二種の貨幣の動向を市場と政策との関連性において説明しようとする。黒田明伸 [1994] は18世紀中葉までの銀不足、その後の銅銭鑄造の増大や米穀備蓄制度の完備に眼をそそぎながら、銀と銭の機能の差異や銭の滞留などの現象を掘り起こし、銀と銭の機能の分離は、地域内での流動性を確保することにつながったが、その一方で、他地域との収支均衡を必ずしも求めなくさせたという結論を導く。貨幣という普遍的な体系に着目することによって、近代の中国経済へ連続する視点を得るとともに、その研究は世界規模での貨幣の動向と経済の連関を論じる方向へ発展することになる。黒田 [2003] はその成果である。岸本美緒 [1998] は東アジアにおける銀の動向について平易に書かれており、一読をお勧めする

◆交通、人口、資源

商品流通の拡大は交通手段の発達をともなっていた。星斌夫 [1971a][1971b] は清代の漕運を論じたが、松浦章の一連の研究 [1983][1985][1988a][1988b][1988c] [1989] は市場経済の発展を支えた内河と沿岸の航運についての知見を大きく広げた。長江の水運については川勝守編 [1993] に川勝の論文がある。松浦 [2002][2003] [2004] は海外貿易についての専著、目配りのひろさと資料の発掘には光るものがあ

る。国内関税(常関)に着目して物流の動向や財政との関係を追究してきたのが、香坂昌紀 [1972, 75, 83-84][1985][1990][1991][1992] や滝野正二郎 [1985][1986, 94][1988][1993]。海関を主題とした岡本隆司 [1999] は近代に重点をおくが、アヘン戦争以前の粤海関について調べるには同書がもっともよい。

清代の人口は1800年で3億人を超え(当時の世界人口は約10億人)、1842年の開港の時点では4億に達していたと見積もられている。清代18世紀の人口増大をどう解釈するか、史料上の隘路のなかで、族譜に見える死亡月のデータを統計することなどを通じてこの問題を論じたものに上田信 [1988] がある。人口増とかかわる山間地区や低湿地の開発や移住がどのように進展し、社会・経済にいかなる影響を与えたかという問いも関心を集めてきた。山田賢 [1995] は四川省を対象とした移住と開発、それにとまなう社会関係や行政の変化を包括的に論じる。読者に多くの方法上の示唆をあたえるすぐれた著作である。森紀子 [1987] は四川の山区経済の具体像を描きだすことに成功している。渋谷裕子 [2000][2002] は棚民とよばれた山間地の移住民について、移住開発の形態、棚民と地元民とあいだの紛糾、移住先における経済的上昇と移動・定着などの問題を、徽州府の文書資料と実地調査にもとづいて分析する。乱開発の問題や山林を所有する宗族の収益分配などにも説き及ぶ。行政主導で移民招致がおこなわれた秦嶺地域事例については安野省三 [2002] が詳しい。18世紀以降、漢人移民による開発が進んだ東北地方については、荒武達朗 [1998][1999] の議論を出発点とすることができるだろう。明代以降長期にわたって農地開発が進んだ広東省の珠江デルタについては、西川喜久子 [1981][1983-84][1988][1994, 96]、片山剛 [1993][1996] などすぐれた研究がなされている。松田吉郎 [2002] も広東、台湾を中心として開発や水利の問題を追究している。

農業にとって水利開発やその維持は重要な通時的問題であるとともに、そこに農民の共同性などの社会関係、公権力の役割、費用分担、技術の発展などの課題を設定することができる。清代についても多くの成果があげられているが、森田明 [1974][2002] を手がかりとして研究の広がりを知ることができる。農業生産の不安定を克服するための努力は水利開発に限らない。清代には救荒作物としてのサツマイモや山間地開発の手段となったトウモロコシなどの栽培が普及し、社会の安定や人口の増大の一因となったと考えられるが、それでも乾燥地農業の比重が高い北中国では大規模な飢饉が発生することが避けられなかった。食料備蓄や救荒の活動のなかに、社会組織や権力関係の特質をうかがうことも研究課題の一つである。夫馬進 [1997]、稻田清一 [1993] は、こうした方向を示している。土地開発や農業・牧畜のような生産活動、都市人口の増大や外縁部にむかう社会の拡大などは、かならず環境を変化させる。生態系のなかに人間集団という特異な能力を備えた要素が組みこまれることによって発生するのが環境問題であり、それが将来にむけての地球規模の課題となっていることは言うまでもない。衣食住にわたる生活資源、水利や燃料、原料、肥料などの生産資源の獲得と環境との相互関係をどう維持するかという問題は、時代を下る、つまり

社会の拡大が累積するにつれて大きくなった。こうした歴史的観点から環境問題を論じる試みも始まっている。宮峯洋一 [1994][1997]、上田信 [1999][2002] は森林資源などから歴史を読み直そうとするすぐれた試みである。

◆財政と租税

財政や徴税に着目することは、集権的な行政組織と巨大で流動的な社会とがどのような関係を築きながら経済循環を実現していたかという問題について考察することにつながる。岩井茂樹 [2004] は、正規の財政の硬直性と附加税や差徭など正額外の徴収を原資とする正額外の財政との関係を軸にして財政構造の重層と分散という性質を論じ、山本進 [2002b][2002d] は19世紀後半に地方的な徴収の改革や商人や流通過程からの収入増大によって、省以下の地方財政の形成がみられたことを述べる。谷井陽子 [1989] は上級地方官をつとめた人物の自伝から19世紀中葉の外省の財政動向を論じる。省の財政構造についての個別研究としては高銘鈴 [2002] がある。銀両による徴税にさいして火耗という附加税が取られており、雍正年間にそれを定率で公認して養廉銀や公費の制度がつくられた経緯をめぐっては、安部健夫 [1971]、佐伯富 [1970-72]、岩見宏 [1957][1963] がある。これは政治史として読んでも興味深い。穀類を徴収する漕糧についても18世紀以降、銅銭などによる徴収がひろがり、それが地方の経費調達の手段になっていたことについては、佐々木正哉 [1963]、並木頼寿 [1983] が論じている。土地税や商税などの徴収をいかにして実現していたかという問題について、西村元照 [1976]、山本英史 [1977] は包攬、つまり請け負い徴税の研究を深化させた論文であり、郷紳層の支配や地主制などとの関わりを論じる。川勝守 [1980] は清初の奏銷案や均田均役などから清朝の賦・役制度の確立過程を検討し、胥吏・衙役および郷紳の支配という問題を指摘する。森田明 [1976] は「議図」とよばれる納税組合のごとき組織の実体と性質を論じる。山本英史 [1980][1981][1985][1989][1990][1992][1999] は、徴税にかかわる書役、自封投櫃、紳士の優免などを多角的に論じており、在地の支配構造にかかわる問題について多くの示唆を与える。山本 [2000][2004] は「在地勢力」という概念を用いて胥吏や衙役の機能を明らかにしている。高嶋航 [2000b] は蘇州の経造とよばれた徴税請け負い業者についての専論。西村 [1974] は清代においても課税土地の把握は困難であったことを示唆する。高嶋 [2000a] は賦役全書の数値が何によって根拠づけられていたかという問題を追究し、それらの整合性が徴税という業務の範囲の内部においてのみ完結する性質をもつと論じた。岩井 [2000a][2000b][2001] は江蘇省の版図法にもとづく課税対象の把握方式と徴税業務の請け負い制度が、村落編成の重要性を低下させていたことを主張する。清代の編籍については潘詰・康世儒 [1984] が必読文献。常関税については香坂昌紀 [1993] と滝野正二郎 [1988][2001] が、関税収入の財政上の重要性や請け負い制度に説き及んでいる。塩税については、佐伯富の大著 [1956][1987] が出発点であるが、最近、岡本隆司 [2001] が「票法」という改革は私塩業者による販売を公認する性質のものであったという見解を提起している。財政や徴税、経済政策

にかかわる問題は、王朝国家の支配の構造を考える糸口として重要である。

(岩井茂樹)

3 史料の解説

清朝時代の史料は膨大にある。失われたものは多いとはいえ、中国・台湾に現存する官庁文書だけでも1千万件・冊をはるかに超えている。これらは檔案とよばれる。その概要や出版された資料集について知るには、秦国経『中華明清珍檔指南』（人民出版社、1994年）がもっともよい。檔案のための専門誌『歴史檔案』もある。図版は『明清檔案存真選輯』初集～3集（中央研究院歴史語言研究所、1959～75年）や『明清檔案』全324冊（第11、12輯以降はCD-ROM、中央研究院歴史語言研究所、1986年から刊行中）に豊富である。入関（1644年）以前の史料や満洲語史料などは第2節〈1〉〈2〉で紹介されているので、ここではそれ以外のものを扱う。

清朝の国制や政治史の研究は、檔案から問題関心に即した史料を発見せねばならない。これは容易ではない。人口、貨幣、物価、経済政策、財政などのテーマの場合も同様である。地方の官府でもさらに膨大な行政文書群が形成されていたはずであるが、清朝時代の地方檔案で今日まで伝わっているものは、宝坻（順天府）、巴県（重慶）、淡新（台北）などわずかである（それでも計20万件に近い）。また、民間の家や商店、社会団体などの文書は、例えばおなじ性質の膨大な近世文書が利用されている日本の状況と比較すると、はるかに少ない。一方、著述する知識人の多さや出版の盛行によって、印刷された典籍の数は全容を把握することが困難なほどである。印刷された典籍の中の政治関係の文章は、元をたどれば檔案に帰着する。編纂をへていることに注意すべきであるけれども、原資料が失われるなど、探し出すことが容易でない場合には、これらの利用価値は高い。

清代の政治過程は文書による伝達や指示が基本であった。皇帝にあてられた上奏文（題本と奏摺）は、宮中や内閣、軍機処（いずれも紫禁城内）に蓄積されることになっていたが、上奏者が個人的に奏議集を編纂して出版したり、文集のなかに奏議を含めることが多く見られた。また地方志の芸文の部にも奏議が採録されている。題本、奏摺の影印出版が進んでいるものの、このような編纂された奏議にも注意する必要がある。皇帝の指示である上諭も、原資料は『上諭檔』まで遡る。しかし、『大清歴朝実録』や『十朝聖訓』、雍正帝の『上諭内閣』『上諭八旗』など編纂資料を利用することが可能である。地方の官府の官僚間を往来した公文書や、公布された文書は、「公牘」と総称される。こちらは原文書として残っているものはほとんどなく、個人の文集や公牘だけを集めた典籍に頼らねばならない。概して檔案資料は実務の反映ではあるが、基本的にルーティンワークの産物なので煩瑣に過ぎることもある。研究者は、それらを広い文脈の中におき、意味づけてやらねばならない。

地方の官府の重要な仕事の一つは裁判であった。現存する地方檔案の大部分は、裁判関係の文書なのである。裁判官たる官僚は事件処理についての所見や判断を「審語」や「看語」という形式で書いたが、文集や判牘集に採録されるのはこの部分だけである。裁判や取り調べの過程を考察の対象とするばあいには、地方檔案を利用せざるをえなくなる。さいわいに、部分的にマイクロフィルムが売りに出されている。淡新檔案は活字印刷による出版計画が進行中である他、国立台湾大学のWebサイトで一部が公開されている（http://www.lib.ntu/General/digital_program.htm）。巴県檔案については『清代乾嘉道巴県檔案選編』上・下（四川大学出版社、1989、96年）、『清代巴県檔案匯編（乾隆卷）』（檔案出版社、1991年）でその一端を窺うことができる。中央の刑部に上申された事件については、皇帝の決裁をおおぐための題本によって経緯を把握できる場合がある。『清代地租剝削形態』（中華書局、1982年）などは主として刑部関係の題本から抽出された資料集である。

財政と経済政策については『中国第一歴史檔案館館藏清代硃批奏摺財政類目録』全5冊（中国財政経済出版社、1990～92年）という分類目録があり、上奏者の索引も完備しており便利である。しかも、財政類の奏摺のマイクロフィルムは東京大学東洋文化研究所と筑波大学図書館で閲覧することができる。

法典である清律を解釈するさいに、江戸時代の大儒荻生徂徠が注をつけた『明律国字解』に従う場合もあるようだが、その弱点は知っておくべきである。徂徠の注は、日本人向けであって、語義、事物の解説が主で、法理については言及が少ない。むしろ熊本藩訓訳の『清律例彙纂』が、律註も訓読してくれているので役にたつ。ただし同書は、乾隆期の注釈『大清律例集註』を底本としており、この注の出来がよくない。律註でよいのは、沈之奇の『大清律輯註』なので、両者を読み比べながら研究するのも一法である。清律も実務書である以上、律文の改訂があり、条例の増補がある。この変遷については、『大清律例通考』『説例存疑』があとづけている。後者は、清末の刑部尚書薛允升による条例研究の書なので、律註では窺いしれない条例の法理について知ることができる。則例、省例については、注釈学は成立していないので、自力で読み解くしかない。『官箴書集成』第六冊に浙江省の『治浙成規』を収録する。

統治機構については、会典や『皇朝文献通考』『皇朝統文献通考』を見ることになる。会典とは、『周礼』にさかのぼる国制総攬といった性格の書物で、行政の実務で使われていたものではない。実際に使われていたのは、実務担当者が個人で作成した資料集（「秘本」）であり、出版物なら則例、省例である。それらを身近に見ることができなければ、次善の策として『大清会典』『大清会典事例』を使うことになる。清朝の会典は、途中で編纂方針を変えており、①康熙・雍正、②乾隆、③嘉慶・光緒の三つの種類がある。閲覧が容易であるのは、光緒版であり、機構の総体について簡明に記した会典と、具体的な事例を記した会典事例の二つからなる。会典でおおまかな理解を得た上で、会典事例に当たるのがよい。なお乾隆本は、四庫全書に入っているため、最近では簡単にみることができる。会典、会典事例で気をつけたいのは、そこに

記されているのは、あくまでも一回性の事例であって、その後それが先例となったかどうかは、別史料で確認をとらなければならない点である。会典、会典事例だけで制度史は描けないということは、心すべきである。

地方の行政実務については、官箴書とよばれる手引きが有用である。前掲の『官箴書集成』という叢書によって、利用が便利となった。和刻訓読本のある『福惠全書』は必見といってよい。影印本には、索引が附されているので便利である。ただし同書は、康熙年間、山東省のものなので、そのような限界は自覚しておかなければならない。なお『福惠全書』と並んで有名な書に、汪輝祖による『学治臆説』『佐治薬言』がある。

うまく編纂された二次史料を手引き・索引がわりに利用して、可能なものは原資料に遡るという方法も大切である。その意味で、政書類や『清史稿』の役割はなくなることはない。制度史や財政・経済政策史ということでは、職官志、刑法志、食貨志などが役にたつ。列伝の価値は言うまでもなからうが、本紀は、研究対象とする事件の前後にどのような別の事件があり、同時並行的に何が問題になっていたかを知る年代記として有用である。

地方志については、『中国地方志総目提要』（漢美図書、1996年）、『中国地方志聯合目録』（中華書局、1985年）で関係する地域のものを選びだすことになる。「中国地方志集成」（1995年から出版中）などによって清代の地方志の利用は便利になりつつある。地方ごとの百科全書を意図して作られているので、地方志からは多様な史料を拾うことができるが、芸文志などに見える碑文は貴重である。また、現地調査によって収集された碑文集録としては、『広東碑刻集』（広東高等教育出版社、2001年）、『明清以来蘇州社会史碑刻集』（蘇州大学出版社、1998年）、『明清仏山碑刻文献經濟資料』（広東人民出版社、1987年）、『广西少数民族地区石刻碑文集』（广西人民出版社、1983年）、『明清蘇州工商業碑刻集』（江蘇人民出版社、1981年）、『明清以来北京工商會館碑刻選編』（文物出版社、1980年）、『上海碑刻資料選輯』（上海上海人民出版社、1980年）、『台湾南部碑文集成』（台湾文献叢刊218、1966年）、『台湾中部碑文集成』（台湾文献叢刊151、1962年）、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』（三聯書店、1959年）などがある。

文集類は、研究の主題にかかわる時期や地域をくぎって閲覧することになるだろう。『清人別集総目』全3冊（安徽教育出版社、2000年）や『清人詩文集総目提要』全3冊（北京古籍出版社、2002年）が手引きになる。賀長齡輯『皇朝經世文編』以下の各種經世文編は、主題を分類して各種の文章を採録しており、清代の人びとが政治や社会についてどのような事ごらを問題にしていたか知るのには最適の資料集である。

徽州文書については、中国社会科学院歴史研究所所蔵文書の画像を収めた『徽州千年契約文書 清・民国編』20巻（花山文芸出版社、1991年）、安徽大学・祁門県博物館の文書を収録する『徽州文書 第一輯』全10冊（広西師範大学出版社、2005年）のほか、安徽省博物館輯『明清徽州社会經濟資料叢編』第一集（中国社会科学出版社、

1988年）、歴史研究所徽州文契整理組輯『明清徽州社会經濟資料叢編』第二集（中国社会科学出版社、1990年）、『明清徽商資料選編』（黄山書社、1985年）などの資料集が出版されている。福建省各地から収集された契約文書は、『明清福建經濟契約文書選輯』（人民出版社、1997年）にまとめられている。『徽州文書類目』（黄山書社、2000年）、『徽州歴史檔案総目提要』（黄山書社、1996年）は分類目録である。

明朝史ならば、私撰の野史が多くあり、それらで補うという方法がある。清朝史でも、雍正期に『永憲録』があるが、例外的である。時事的な言説を残すことは、政治的に危険だったので、基本的にそのような著作はない。代わりに使えるのは、年譜と筆記である。自分の研究している時代に該当する年譜があるかどうかは、『中国歴代人物年譜考録』（中華書局、1992年）によって調べることができる。『清代日記匯抄』（上海人民出版社、1982年）の他、日記類の発掘と利用も進みつつある。筆記は、雑文・エッセイの類であり、うまく使えば政治史の史料となる。有名なのは、『嘯亭雜録』であり、清人の筆記を集成した『清稗類鈔』が便利である。

『国朝者猷類微初編』『碑伝集』など個人の伝記を集成した史料は、当たりはずれが大きい。清朝の歴史編纂所である国史館の伝稿に拠るものは、官歴の羅列然としていて面白くない。その点個人の文集の中から採録したものは、政治的事情や背景がわかるものもある。

最後に『文淵閣四庫全書電子版』にふれておく。四庫全書の中には、清初から乾隆に及ぶ清朝の主要な官撰史料が収録されているので、清代史研究には有用である。たとえば雍正朝の宮中檔案を原資料とする『硃批諭旨』が入っているのも、そこで語句の検索をかけて、もとの宮中檔にあたるということができる。使い方次第では、研究の工具としてかなりの威力を発揮する。

（岩井茂樹）

第10章

近代

井上裕正・村上 衛

1 研究の視点

本書では、前章までが基本的に王朝ごとに区分して述べられているのに対し、本章と次章では「近代」と「現代」という形でまとめられている。このように、歴史を古代・中世・近世・近代・現代のように分けることは、時代区分と呼ばれている。ところで、時代を区分するに際しては、政治、経済、文化などの諸側面における何らかの基準に拠ることになるが、絶対的な基準はないという前提に立てば、絶対的な時代区分もないことになる。

こうした見方に従うならば、「近代」という時代についても、唯一絶対的な時代区分があるのではなく、いくつかの異なる基準に拠る複数の時代区分があってもおかしくない。本章では、中国と欧米諸国との関係、あるいは中国と近代史のグローバルな展開との関係を基準とする通説に従って、アヘン戦争を中国近代史の起点とする。下限の方は、おおそ辛亥革命で清朝が滅亡する時期である。つまり、本章の「近代」は、ほぼ清朝末期を指すのであるから、「近代」を理解するためには、少なくとも第9章で扱われる「清代」の理解が不可欠となる。

さて近年、歴史研究では冷戦構造の終焉に伴って歴史上の「革命」に対する見直しが行われることになり、久保田文次 [1992a]、並木頼寿 [1993]、藤谷浩悦 [2003] が研究史の整理のなかで指摘するように、中国近現代史研究においても「革命史観」への批判が強まり、中国近現代史を辛亥革命 (1911年) や中国革命 (1949年) によって「断絶」されたと観るよりも、「革命」を超えて「連続」する側面により注目するようになってきた。

こうした研究動向とも関連して、たとえばコーエン [1988] のように、中国近代史を「西洋の衝撃」(ウエスタン・インパクト) と中国の「反応」(レスポンス) として把握する見方 (インパクト・レスポンス論)、マルクス主義歴史観 (史的唯物論的発

展段階説)、近代化論、世界システム論など、いわゆる西洋中心史観に基づく見方が批判され、あくまでも中国における内在的な発展を重視する見方 (チャイナ・センター・アプローチ) が提唱されている。また、こうした見方からは、アヘン戦争を中国近代史の起点とする時代区分説も批判の対象となっている。

このように中国近代史に対する見方、延いては歴史そのものに対する考え方、つまり歴史観・歴史認識については、20世紀後半に唱えられていた諸説が力を失って、21世紀の初めの現在はある種の閉塞状況にあるといつてよい。そうした閉塞状況を打開しようとするかのように、歴史学界全体の傾向とも連動して、中国近代史研究にも新しい視点が提起されている。

そのひとつが「地域」重視の視点である。この視点にあつて「地域」の空間的な広がりは様々であり、国家領域の内部に設定される場合もあるし、国家を超えた広領域が設定される場合もある。そこに共通するのは、「国家」の相対化である。

このうち、国家を超えた広領域としての「地域」を設定し、従来の「インパクト・レスポンス」論に代表される西洋中心史観の修正を迫るのが、濱下武志らによる「朝貢貿易システム」論、ないし「アジア交易圏」論である。そこでは、たとえば濱下武志 [1990] のように、朝貢貿易システム、アジアにおける華人商人やその組織・ネットワークの持続性・強靭さが強調される一方、「西洋の衝撃」の影響力は従来言われてきたほどには強くなかったとされる。

こうした見方は、華僑・華人研究の進展を促すとともに、溝口雄三他編 [1993-94] のように、認識の枠組みとしての「アジア」に視座を置く研究シリーズの刊行などの成果をもたらしたが、杉原薫 [1996a]、本野英一 [2002] のように、華人商人・ネットワークの力量に対する過大評価、「西洋の衝撃」に対する過小評価、「地域」概念の曖昧性などを指摘する批判も提出されている。

他方、国家内の「地域」に注目する研究としては、世界的な社会史研究の活発化や明清史研究との連続性もあつて近代中国における地域社会に関する研究が盛んとなっている。特に近年では、天津地方史研究会編 [1999]、高橋孝助他編 [1995]、日本上海史研究会編 [2000] のように、天津や上海などの都市に関する多くの研究成果が発表されるとともに、地域社会や都市における中国独自の制度や政治文化などの解明を目指す研究が行われている。なお、「地域」の視点からの世界史研究シリーズとして濱下武志他編 [1997-2000] も刊行された。

以上、「研究の視点」を締めくくりにあたり強調しておきたいことは、視点、時代区分、歴史理論とかいうものは、それ自体が「目的」ではなく、あくまでも歴史を理解するための「手段」に過ぎないということである。現在、歴史観・歴史認識をめぐってある種の閉塞状況にあると先に述べたが、唯一絶対的な歴史観から硬直的に歴史を解釈することに比べれば、むしろ現在の方が健全な状況にあるとも言える。異なる視点からは異なる歴史像が見えてくるという柔軟な思考を持ち、それぞれの視点の有効性と限界性を冷徹にわきまえることが大事である。

(井上裕正)

2 研究の展開

〈1〉概説書

中国近代史に関して日本でどのような研究が行われてきたかを知るためには、坂野正高他編 [1974]、島田虔次他編 [1983]、辛亥革命研究会編 [1992]、小島晋治・並木頼寿編 [1993]、山根幸夫編 [1995] などで調べる。また、研究史を整理したものに、久保田文次 [1992a]、並木頼寿 [1993]、藤谷浩悦 [2003] のほか、濱下武志 [2000] もあり、入門書として田中比呂志・飯島渉編 [2005] がある。

概説書としてはまず、中国における「革命史観」に基づく胡繩 [1974]、復旦大学歴史系・上海師範大学歴史系編著 [1981] がある。次に、日本における概説書には、市古宙三 [1969]、小野信爾 [1977]、姫田光義他 [1982]、小島晋治・丸山松幸 [1986]、池田誠他 [1988]、堀川哲男編 [1995] などがあり、最近の研究動向を踏まえたものとしては、並木頼寿・井上裕正 [1997]、松丸道雄他編 [2002] がある。また、近代史全般に関する論文集として野沢豊・田中正俊編 [1978]、森時彦編 [2001] [2004] がある。なお、坂野正高 [1973] は、政治・外交面が主ではあるが、現在でも中国近代史全般に関する優れた概説書としての魅力を失っていない。

〈2〉政治・外交

政治・外交に関する概説書としては、坂野正高 [1973] のほか、外交については植田捷雄 [1969] がある。衛藤藩吉 [1968]、坂野 [1970] は主に19世紀前半・中葉における政治・外交に関する論文を収録している。また、川島真 [2004] は、主に中華民国期の外交を扱っているが、前提となる清末の外交とその研究史についても行き届いた整理がなされている。

◆中華帝国の動揺

国内的には皇帝を頂点とする統治体制、対外的には伝統的な朝貢体制を基盤とする清朝支配体制 (=中華帝国) は、すでに白蓮教徒の乱が勃発した18世紀末から動揺を始めていたが、対外的にはアヘン問題を原因とするイギリスとの戦争 (アヘン戦争)、国内的には満洲族が支配する清朝の打倒を呼号する太平天国運動を契機に大きく動揺する。

アヘン戦争・第二次アヘン戦争 アヘン戦争について、戦争の原因となったアヘン問題やそれに対する清朝の対策については、田中正美 [1978]、村尾進 [1985]、新村容子 [2000] などがあるが、18世紀末以来、アヘン戦争までの清朝のアヘン政策を「内禁」「外禁」という独自の視点から解明したのが井上裕正 [2004] である。アヘン戦争の経過については、佐々木正哉 [1979-82] [1983-84] [1991] が詳しく、欽差大臣

としてカントンに派遣された林則徐の伝記に堀川哲男 [1966]、井上裕正 [1994] がある。なお、アヘン戦争の歴史的意義を東アジア世界のなかで理解するためには、戦争の朝鮮や日本への影響を解明した三好千春 [1989]、原田環 [1997]、加藤祐三 [1985] を参照されたい。

アヘン戦争後の中外関係について、南京条約によって開港した五港の情勢や上海における外国人税務司制度の成立過程を明らかにした Fairbank [1953]、最惠国待遇問題や清朝の対外交渉過程などを解明した坂野正高 [1970] がある。また、アヘン戦争後における中国沿海の海賊問題を清朝とイギリス海軍の協力体制のなかで解明した村上衛 [2004] もある。第二次アヘン戦争後のアヘン貿易の合法化については、井上裕正 [1977] がある。

太平天国運動 太平天国運動については、「革命史観」の立場から革命運動の先駆として高い評価が与えられたが、その代表例として、小島晋治 [1978]、増井経夫 [1978]、西川喜久子 [1966-67] がある。そうした見方に批判的な研究として、宮崎市定 [1965]、市古宙三 [1977] があつた。その後、前述のように、「革命史観」への批判という研究動向のなかで、小島 [1993] はかつての「革命史観」的理解に疑念を提起した。また、菊池秀明 [1998] は広西移民社会の構造との関係で太平天国運動を解明したが、菊池には [1999] のほか、概説書として [2003] もある。

太平天国運動と西洋諸国との関係については林建朗 [1979]、この運動を鎮圧した李鴻章の淮軍については、小野信爾 [1957] がある。この淮軍のような「郷勇」をのちの軍閥の前身として捉えるのが波多野善大 [1973] である。なお、同時期、長江以北における捻軍については、並木頼寿 [1981] [1990] がある。

辺境の危機 アヘン戦争・第二次アヘン戦争の敗北によって清朝中国が欧米の外交体制に組み込まれ始め、東アジアの国際秩序が再編されていくことについては、茂木敏夫 [1987] [1993] などがあり、概説書に同 [1997] もある。清朝中国の条約体制への対応については、坂野正高 [1970] 所収論文のほか、中国における外務省の前身ともいべき総理衙門の設立については Banno [1964] がある。井上裕正 [1975] は、第二次アヘン戦争後におけるイギリスの新しい中国政策との関連のなかで総理衙門と総税務司の歴史的役割を照射している。

また、万国公法 (国際法) の導入に関する佐藤慎一 [1996]、金鳳珍 [1995]、川島真 [2000]、茂木敏夫 [2000]、清朝が派遣した公使たちの西洋観を分析した佐々木揚 [2000]、外交行政制度の変容過程を明らかにした川島 [2004]、領事や在外公使の派遣を取り上げた箱田恵子 [2002] [2003]、青山治世 [2005] がある。

ところで、佐藤慎一 [1996] が指摘するように、朝貢体制とその基盤である華夷思想は本来ゆるやかで柔軟な秩序・思想であるため、条約体制への組み込みを都合よく解釈してしまうたかさを発揮した。しかし、中国周辺の朝貢国や地域が欧米諸国や日本の侵略を受けるに従い、柔軟な朝貢体制も次第に解体を余儀なくされていく。

まず、19世紀前半から伝統的な南下政策を強化していたロシアとの関係について

は吉田金一 [1974], 新疆における清朝支配に対するヤークーブ・ベクの抵抗運動とロシアのイリ占領事件については新免康 [1994] があり, 19世紀末の露清関係については佐々木揚 [1979a][1979b] がある。中見立夫 [1994] は辛亥革命前後においてモンゴルがロシアの援助を受けながら清朝の支配から独立していく過程を明らかにしている。なお, 清朝の新疆支配については片岡一忠 [1991] が詳しい。

中英関係については, マーガリ事件に関する神戸輝夫 [1985], 清朝のチベット支配と中英関係に関する平野聡 [2004] がある。フランスとの関係について, 朝貢国ヴェトナムをめぐる清朝がフランスとの戦争(清仏戦争)に敗北し, ヴェトナムがフランスの植民地となっていくことについては, 山本達郎編 [1975], 坪井善明 [1991] があり, 清仏戦争と洋務官僚李鴻章については細見和弘 [1996] がある。

日中関係 徳川時代に中国を中心とする東アジアの朝貢体制のなかで比較的自立していた日本は明治時代に入ると, むしろ欧米流の条約体制の立場から中国や朝鮮と条約を結んで東アジア国際秩序の再編を積極的に目指していく。まず, 近代における日中関係に関する入門書・概説書・論文集としては, 竹内好・橋川文三編 [1974], 山根幸夫編 [1976], 山根 [1994], 王曉秋 [1991], 曾田三郎編 [2001] などがある。

1871年(明治4)に締結された日清修好条規については, 彭沢周 [1969], 藤村道生 [1995], 安岡昭男 [1995], 佐々木揚 [2000] があり, その後の両国関係については彭 [1976], 佐藤三郎 [1984] があり, 日本を訪れた中国人の活動・体験については, 熊達雲 [1998], 張偉雄 [1999], 佐藤 [2003], 陳捷 [2003] がある。明清王朝と日本(薩摩藩)に「両属」していた琉球が1879年(明治12)に沖縄県として日本の領土に組み込まれたこと(「琉球処分」)については, 金城正篤 [1978], 西里喜行 [1992], 真栄平房昭 [1994] があり, 西里 [2005] は中国・琉球・日本の関係からアヘン戦争以後における朝貢体制の動揺を解明している。なお, 西里には苦力貿易船の漂着による琉球王国の動揺を扱った [2001] もある。

前述のように, 西洋諸国の侵略によって中国周辺諸国が相次いで朝貢体制から離脱させられていくなかで, 清朝にとって最後の砦とも言うべき朝貢国朝鮮に日本の影響力が強まり, 結局1894年(明治27)に日中両国間に日清戦争が勃発する。それについては, 森山茂徳 [1987], 東アジア近代史学会編 [1997], 岡本隆司 [2004] がある。なお, 日清戦争については日本史の立場からの研究が当然ながら多いが, 中国史の立場からの日本人研究者による研究は必ずしも多くない。

◆改革運動

洋務運動 清末中国では, 動揺する中華帝国を再建するために, 改革的な思想が提唱され, 改革的な運動も展開された。まず, 優れた欧米の技術, 特に軍事技術を導入して自強を図る考えである「洋務論」が提唱されたが, アヘン戦争直後に洋務論を先駆的に表明した魏源の『海国図志』については, 小野川秀美 [1969], 大谷敏夫 [1995], 佐々木正哉 [1985] などがある。なお, 近代中国の西洋認識をカントンという地域に焦点を当てて研究したのが村尾進 [1992] である。

第二次アヘン戦争・太平天国運動の経験を経て, 洋務論は洋務運動として実践に移され, 主に軍事産業が興される。この洋務運動に関する研究史, 特に1980年代以降の中国における洋務運動・洋務官僚の再評価については, 鈴木智夫 [1992a], 中田吉信 [1986], 並木頼寿 [1989] があり, 運動の具体的な内容については後述の「近代化と工業化」の項を見られたい。なお, 溝口雄三 [1989] は, 中国近代を「中国的基体」が洋務によって自己改革を行った時期と主張する。洋務的政策論者である馬建忠に関する坂野正高 [1985] もある。

変法運動 洋務運動の集大成とも言うべき洋務官僚李鴻章による北洋海軍の建設については, 細見和弘 [1998] がある。その北洋海軍が撃破された日清戦争の敗北は, 洋務運動の失敗と認識され, 日清戦争後には, 明治日本を手本として制度面でも欧米化を提唱する「変法論」が台頭し, 康有為・梁啓超ら変法派は光緒帝の支持を得て変法運動を推進しようと努めた。変法運動に関する研究史の整理に, 藤谷浩悦 [1992] がある。康有為らの変法論については, 小野川秀美 [1969], 高田淳 [1970], 有田和夫 [1984], 竹内弘行 [1995], 佐藤慎一 [1996], 坂出祥伸 [2001] がある。梁啓超に関する研究が近年盛んとなり, 狭間直樹編 [1999] があり, 梁啓超の年譜の訳注である丁文江・趙豊田編 [2004] もある。また厳復については, シュウォルツ [1978] がある。

日清戦争中の主戦派や「清流派」との関係, 西太后の役割など, 光緒帝による戊戌変法が西太后のクーデタで挫折するまでの政治史的側面については, 市古宙三 [1977], 原田正己 [1983], 深澤秀男 [2000a] がある。戊戌変法時における史料上の問題(康有為の変法上奏)については, 孔祥吉 [1988] を参照する必要がある。また, 湖南省における変法運動については, 小野川秀美 [1969], 目黒克彦 [1985], 藤谷浩悦 [1987] がある。

◆王朝体制の崩壊

義和団事件 第二次アヘン戦争後の天津条約でキリスト教の内地布教権が認められた結果, 各地に教会が建てられキリスト教の信者が増えてくると, 各地で非信者との間に対立が生まれ, それが教会や信者への襲撃に激化して外交問題化する場合もあった。中国におけるキリスト教布教や反キリスト教運動については, 矢沢利彦 [1958] [1972], 山本澄子 [1972], 里井彦七郎 [1972], 鉄山博 [1991], 渡辺祐子 [1994], 深澤秀男 [2000b] があり, 研究史の整理に広瀬一恵 [1990] がある。

このような反キリスト教運動の代表的事例が, 山東省に起こり1900年に北京の公使館区域を包囲した義和団である。義和団については, 里井彦七郎 [1972] など「革命史観」に立つ研究が反帝国主義闘争として高く評価するのに対し, 市古宙三 [1977] は盲目的な排外運動と理解する。また, 村松祐次 [1976] は義和団の段階的発展を主張し, 堀川哲男 [1964] は義和団の多元性・多面性を指摘し, 佐々木正哉 [1977-78] は義和団の起源を白蓮教とは無縁の義和拳・大刀会にあるとする。小林一美 [1978] は義和団の迷信・宗教・呪術に民衆の主体性を指摘し, 義和団の民族的抵

抗を強調する小林 [1986] もある。三石善吉 [1991][1996] は義和団運動を列強の侵略に対する「拳国的千年王国運動」と理解する。佐藤公彦 [1999] は、義和団の起源が白蓮教の系譜のなかにあるとし、義和団運動を大衆的ナショナリズムの運動と理解する。その他、情報の問題との関係で義和団事件を扱った千葉正史 [1999]、天津都統衙門に関する森悦子 [1988] がある。

光緒新政 義和団事件に際して清朝は列強八カ国連合軍と戦争状態に入ったが、敗北して1901年に北京議定書(辛丑条約)が締結され、多額の賠償金支払いや北京公使館区域などにおける駐兵権を認めさせられた。こうして清朝はようやく「光緒新政」と呼ばれる立憲、地方自治、官制改革など、一連の改革に着手する。この新政については、横山英編 [1985]、横山・曾田三郎編 [1992]、曾田編 [1997] 所収の諸論文や川島真 [1994]、中村哲夫 [1998] があり、後述する「社会史」に挙げる諸研究も参照されたい。中村哲夫には科挙の廃止に関する [1984] もあり、科挙廃止後における帰国留学生の官僚登用制度については、宮川尚子 [2001] がある。また、アメリカにおける中国人移民の排斥に対する対米ボイコット運動や利権回収運動など、高揚するナショナリズムについては、菊池貴晴 [1974]、菅野正 [2002]、堀川哲男 [1962]、土屋洋 [2000] がある。また、司法改革に関する西川真子 [1994]、新政下における国家統合の再編と鉄道政策の関連を論じた千葉正史 [2005] もある。

辛亥革命 新政によって清朝は、崩壊に瀕した支配体制の再建を図ったが、威信の低下、地方分権化の進行、立憲派や民衆の離反を食い止めることはできず、結局、辛亥の年(1911年)10月に武昌で革命派の軍隊が蜂起すると、革命はまたたくまに中国各地に波及し、翌年初め清朝は滅亡し中華民国が誕生する。この辛亥革命に関する概説書・論文集には、菊池貴晴 [1970]、野沢豊 [1972]、北山康夫 [1972]、市古宙三 [1977]、横山英 [1977]、小野川秀美・島田虔次編 [1978]、中村義 [1979]、寺広映雄 [1979]、永井算巳 [1983]、孫文研究会編 [2003] などがある。特に民衆運動については、石田(山下)米子 [1965]、清水稔 [1972]、西川正夫 [1978] がある。また、思想史的側面に関する研究として、島田虔次 [1965]、島田・小野信爾編 [1968]、小野川秀美 [1969]、近藤邦康 [1972]、狭間直樹 [1976]、丸山松幸 [1982]、河田悌一 [1987] などがある。

辛亥革命の歴史評価については、「革命史観」による「ブルジョア革命」説(菊池貴晴 [1970]、野沢豊 [1972]、中村義 [1979])や「絶対主義的変革」説(横山英 [1977])、人民闘争を重視する見方(狭間直樹 [1963][1964])、郷紳の指導による「王朝革命」説(市古宙三 [1977])、第三世界に見られる軍部主導の変革説(湯本國穂 [1980])などの諸説がある。本章の冒頭ですでに述べたように、近年における「革命史観」への批判のなかで、辛亥革命の「革命性」についても否定的な見方が強まり、むしろ辛亥革命を越えて「連続」する側面により注目する傾向にある。なお、海外の学界を含む研究動向については、久保田文次 [1992b]、中村哲夫 [2002] に詳しい。

革命派の孫文や中国同盟会については、藤井昇三 [1966]、池田誠 [1983]、横山宏章 [1983]、中村哲夫 [1992]、「孫文とアジア」国際学術討論会日本語版編集委員会編 [1993]、日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会編 [1999] があり、孫文と日本との関係については、中村哲夫 [1990]、俞辛焯 [1989] があり、俞には辛亥革命期の日中関係を扱った [2002] もある。袁世凱については、チェン [1980]、ヤング [1994] があり、近年の人物評価における革命派の相対化傾向を踏まえた孫文・袁世凱理解として横山宏章 [1996] もある。

このほか、各地への革命の波及に関する小島淑男 [1960]、西村成雄 [1984]、寺広映雄 [1979]、宋教仁に関する松本英紀訳 [1989]、松本 [2001]、張謇に関する藤岡喜久男 [1985]、留日学生に関する小島 [1989] があり、野沢豊編 [2001] は「辛亥革命90周年記念特集」を組み、辛亥革命に関する多くの論文を収録している。

(井上裕正)

<3> 社会・経済

◆近代化と工業化

日本における中国近代経済史研究が本格化するのには第二次世界大戦後である。Fairbank [1953] に代表されるアメリカの中国近代史研究は西洋の衝撃に対する中国の反応を重視して始まったが、日本においても中国近代史経済史研究は、アヘン戦争以降、中国が欧米列強の衝撃を受けてそれに対応していく過程の解明が求められた。端緒となった研究としては、アヘン戦争前後の時期の対外貿易や商品流通に注目した衛藤藩吉 [1968]、田中正俊 [1973]、小山正明 [1992]、アヘン戦争後の近代産業の形成とその限界に着目した波多野善大 [1961] がある。しかしながら、日本の中国近代史研究が全体として政治運動史を重視し、洋務運動などの工業化に関連する問題についても歴史的評価に終始して実証研究を欠いたため、以後、1970年代末に至るまで、経済史関係の研究は概して低調であった。

1980年代になると、かかる経済史研究の状況は一変した。溝口雄三 [1983] による中国近代化研究の「偏向」批判を契機に、従来の研究に一定の評価を与える久保田文次 [1985] との間の洋務運動の評価をめぐる議論も刺激となり、工業化の問題については鈴木智夫 [1992b] のように洋務運動以降を対象として本格的な実証研究が始まった。

1980年代以降の研究では、特定の近代化政策に対する歴史的評価よりも、近代化としての工業化を探究する研究が、日本経済史の影響を受けつつ、民国期以降を視野に入れて進められた。中国の工業化が繊維産業を中心に展開したこともあって、敵中平 [1966] の綿紡績業の研究を刺激しつつ、張謇の大生紗廠を中心とする企業経営研究の中井英基 [1996] や、機械製綿糸と棉花の流通過程の定量分析を行った森時彦 [2001]、製糸業の通時的検討を行った曾田三郎 [1994] などの実証研究に大きな進展

がみられた。ただし、清末の工業化について新たにに取り組む研究者は減少する傾向にあり、今後は「近代化」以外の側面を含む工業史研究への新規参入が期待される。

上記のような工業化を中心とする政府の経済政策については、光緒新政期が注目され、設立時期の商会についての曾田三郎 [1975]、商部の実業振興に着目した倉橋正直 [1976] が先鞭をつけた。その後、実業振興については、実業新政を検討した林原文子 [1988]、商部の積極的政策を評価した曾田 [1992]、商部・農工商部の産業振興についての劉世龍 [2002] など、商会については江南の県・鎮レベルの商会を分析した陳来幸 [2001] などの研究が進み、次第に清朝の政策が評価される傾向にあるが、今後は後述する商業史の分野との議論が必要であろう。

◆アジア交易圏論をめぐる

1980年代における中国経済史研究の最大の転機は、1984年、社会経済史学会全国大会における共通論題「アジア交易圏の形成と構造」における濱下武志、川勝平太、杉原薫の報告を契機に、アジア交易圏論と呼ばれる潮流が誕生したことによる。この潮流は、西洋の衝撃を相対化してアジアの独自性を重視し、一國史観を超えることをめざしており、従来の西洋中心主義史観や発展段階論的な史観に大きな修正を迫るものであった。この時期にかかる議論が生まれ、その後発展した背景には、社会主義に対する幻滅と同時に、NIESを中心とする東アジアの急速な経済成長や、中国の改革開放政策の進展などがあるだろう。

アジア交易圏論の成果は、日本の工業化をアジア間競争の中に位置づけた川勝平太 [1985]、近代におけるアジア域内貿易の成長を強調した杉原薫 [1996b]、アジアの銀流通圏や朝貢貿易システムの観点をもとに前近代から近代への連続性を強調した濱下武志 [1990][1997] としてあらわれた。これらの議論をはじめとするアジア貿易圏論の主張は杉原 [1996a] が示すように、近代アジア経済の連続・断絶をめぐる認識の相違などもあって一様でないが、相互に影響して成果を生みだしている。論文集としては、19世紀後半のアジアの交易網・市場圏に注目した濱下・川勝平太編 [1991]、流通ネットワークについての杉山伸也・グローブ編 [1999]、日本経済史とアジア経済史の架橋を狙う川勝編 [2003] などがある。

アジア交易圏論の研究では、「中国」という国家を単位とした枠組みではなく、中国国内の開港場を中心とした地域的な経済構造が注目されており、営口についての小瀬一 [1989]、漢口についての佐々波智子 [1991] などのように、海関史料を用いつつ各開港場経済圏の解明が進んだ。さらに各開港場を起点とする国家を超えたネットワークの研究が進展しており、「モノ」の流れを扱ったものとしては綿布貿易を手がかりに上海を結節点とする流通ネットワークを明らかにした古田和子 [2000] がその代表である。その他に中国―東南アジアの米貿易を検討した菊池道樹 [1993]、中朝間の海産物貿易を扱った石川亮太 [2000]、廈門の交易構造の変動を取り上げた村上衛 [2000] などの研究があり、「ヒト」の移動については、華南から東南アジアへの移民を数量的に分析した藤村是清 [1995] がある。

なお、中国への外国人企業や商品の浸透という問題については、既に宮田道昭 [1981][1986] が中国人商人団体及び中国沿岸部の市場構造の面から検証を進め、中国人商人団体の限界や、1890年代の断絶を強調していたことは注目される。

外国商社や外国銀行については、ジャーディン・マセソン商会の経理帳簿を分析して商会の経営の全体像を描いた石井摩耶子 [1998] や香港における中小商社と外国銀行の関係を分析した金田真滋 [1998]、外国商人の上海における資金調達を検討した蕭文嫻 [1998] があり、中国人商人に対する分析とは異なる視点を提供している。

一方で、上記のようなアジア交易圏論の隆盛に対する反応として、その再検討を目指す研究が進展しつつある。一つは、アジア交易圏論が相対化してきた西洋の衝撃に対する再評価を目指すものであり、欧文史料の積極的利用をその特徴とする。19世紀末以降、不平等条約特権を利用する中国人の活動によって、太平天国期以降に再編された中国人商人団体が崩壊したとし、中国人商人の団結力による優位という見方に疑問を提示した Motono [2000]、本野英一 [2004] はその代表である。

もう一つの反応は、統計史料を中心としたアジア交易圏論が検討してこなかった明清時代から近代へ至る時期の経済秩序の解明である。この分野では朝貢貿易システムに対して、明末から民国期にいたる時期の海関を材料に中国の財政・貿易体制の構造的な理解に貢献した岡本隆司 [1999a] がもっとも大きな成果である。同様の方向性としては、アヘン戦争直前の中国人アヘン貿易を通じて清朝の貿易管理体制崩壊を検討した村上衛 [2003] がある。

以上のような、アジア交易圏論に関わる研究の大半は、清末に研究が集中しており、国家権力の役割に変化がみられる民国期以降についての検討は、今後に残されていると言えよう。

◆経済史研究の変容と多様化

1980年代以降の研究の転換は、その他の分野の研究にも大きな変化をもたらし、明清史を踏まえた通時代的な議論が行われるようになった。その中で足立啓二 [1998] は西欧や日本を明確に意識しつつ、中国の社会経済秩序の不安定性を主張した。

一方、貨幣史においては黒田明伸 [1994] が銀錢二貨制度を採用していた中華帝国では、19世紀末に省政府による広域貨幣圏が成立し、省経済圏として自立化したことを清末の政治変動の原因とみなした。さらに黒田 [2003] では世界的視野で貨幣システムを考察することによって中国の自由な市場経済を明らかにし、工業化の前提となる資本蓄積についても重要な論点を提示している。

商品流通においても明清史の側からの研究が進み、大豆粕流通を分析した足立啓二 [1978] や台湾の米貿易を分析した栗原純 [1984] などに加え、近年では山本進 [2002a] が多様な地域の検討から、地域経済圏の自立を描いている。アジア交易圏論といかに関連づけるのが今後の課題であろう。

農業関係では、旧来より江南を中心とする地主制の分析が盛んであったが、近年で

は租税関係簿冊の網羅的検討から太平天国期から1930年代に至る江南の地主一佃戸関係の実態と変容過程を明らかにした夏井春喜 [2001] がある。地主制をめぐる議論で鈴木智夫 [1977] などが高く評価した『租税』については、岸本美緒 [1997] が『租税』作者の土地所有論と市場論を再検討してその問題点を明らかにした。

1980年代以降は、これまでほとんど顧みられなかった領域に研究が進展したことも重要である。特に、技術史は最も遅れていた分野であるが、ダニエルズ [1984], Daniels and Menzies [1996] のように製糖業については際立った業績があげられている。

また、経済史における情報の重要性は近年着目され、中国近代史でも清末の郵便に関する飯島渉 [1995], 電信に関する千葉正史 [1998] などの情報・通信の研究が始まっており、古田和子 [2003] が指摘するように今後の社会経済史への展開が期待される。電信については長沙大搶米鎮圧から通信・情報体系の偏在を指摘した石川禎浩 [1993] もある。

運輸・保険・サービス業は、他地域の近代史においては研究の進展している分野である。しかし、中国近代史研究においては、鉄道国有化問題などの政治史に関連した研究はみられるが、経済史としては漕運制度から鉄道への物流システムの変化について検討した千葉正史 [2002] などを除けば研究は手薄で、手つかずの問題が多く残されている。

以上のように、多様化する中国経済史研究全体を把握するのは困難であるが、数量面を意識した概説としては狭間直樹他 [1996], 統計としては久保亨 [1995] が有用である。

◆財政史

財政史はとりわけ明清史の手法が有効な分野であり、1980年代以降の日本における明清社会経済史の転換を受けつつ、長期的な視野の下での研究が進んでいる。

当該期における財政史上の最大のテーマは、19世紀中葉の諸反乱を契機として生じた財政上の大きな転換である。そのうち、督撫権力との関係では、太平天国期の李鴻章の軍事費対策から督撫の財政面での権力強化を取り上げた白井佐知子 [1984] や、李鴻章の北洋艦隊建設における李と戸部の確執を検討した細見和弘 [1998] がある。

地方財政については、黒田明伸 [1994] が湖北省を取り上げて省財政の自立を論じた。また山本進 [2002b] は清末における各省の財政改革を検討して、省財政の確立には差異が見られたことを明らかにし、四川省を事例に公局設置の背景を督撫による財政力強化に求めた。一方、山田賢 [1995] は四川省合州を事例として公局＝紳糧体制は膨張する社会と王朝国家の硬直的な行・財政システムの空隙を埋めるべく創出されたとみなした。

財源としては、清末においては新たに釐金、海関税などが重要な項目になり、1980年代以降、従来は取奪として否定的にとらえられていたこれらの財源についての多面的な研究が進んだ。このうち、地方の財源として重要な釐金については羅玉東

[1936] の研究が史料としても貴重である。近年は経済史で釐金に関わる問題が扱われることが多いが、財政面では飯島渉 [1993] はマッケイ条約交渉における「裁釐加税」の試みから、中央政府の省政府統制の有効性を論じた。また金子肇 [2000] は清末民初期の江蘇省における認捐制度と同業団体の関係を検討した。

中央の財源として重要性を増していった海関税については、濱下武志 [1989] が海関を通じた清末の財政・経済像を提示して海関に対する見方を転換した。また高橋孝助 [1990] は国家による商人・商品統制を常関から釐金、海関という流れとしてとらえ、飯島渉 [1990] は営口常関の分析を通じて常関が洋関制度と釐金制度に解体、代替されたとした。近年の海関をめぐる研究の代表作が先述の岡本隆司 [1999a] であり、洋関の成立や財政と借款の関係の検討から清朝の経済構造を解明している。

従来から財源として重要であった塩税については佐伯富 [1956] の扱った陶澍の改革以降の研究は乏しいが、清末民初期については、塩税をめぐる中央と地方の対立と全国的な塩税徴収機構の成立を取り上げた岡本隆司 [1999b] がある。

上記の清末における財政の変動を含む財政史研究の集大成として岩井茂樹 [2004] がある。該書は明代から現代に至る視野をもちつつ、国家財政の中に内在した原額主義とそれによる正額外財政の自然成長から、清末の財政危機の中での財政の地方化、分散化、重層性を明らかにした。

以上のように、近代の財政史についての研究は進展をみせているが、今後は政治外交史や経済史と相互に関連した研究や、未開拓の分野の研究の進展が期待される。

◆社会史

地域社会史 社会史においても、1980年代は大きな画期となった。その背景には、経済史と同様の理由に加え、世界的な社会史研究の流行や、中国への長期滞在の機会が増大し、現地の社会を体験しつつ史料収集を行うことが可能になったことがあるだろう。さらに、1980年代以降の日本の明清史研究における地域社会史の流れが大きな影響を与え、地域内部における社会秩序の変容が注目されるようになった。

地域社会史研究によって、大きく変化したのが清末の反乱に関わる研究である。戦後歴史学において農民闘争が高く評価されたため、清末の反乱は研究の分厚い分野であったが、小島晋治 [1993], 小林一美 [1992] などが示すように、1980年代になると転換が始まり、19世紀中葉の反乱の影響を地域社会の再編として考察する研究が展開された。太平天国後の在地紳士層の地方行政への関与および彼らの地方政治における地位を分析した白井佐知子 [1986] [1989], 広東の団練から清朝中央と郷紳の権力の相互補完性を論じた西川喜久子 [1988], 太平天国期に地域権力の確立を試みた苗沛霖の団練に着目した並木頼寿 [1990], 江南や四川における反乱以降の地方行政の変化を論じて督撫権力の役割を強調した山本進 [2002b] がこれに相当する。

さらに、山田賢 [1995] のように反乱の原因について、18世紀末以降の地域社会の変容を求める研究が活発になってきた。広西の移民社会におけるエリート層と非エリート層の対立に太平天国発生の原因を求めた菊池秀明 [1998] に加え、太平天国期

の西南の諸反乱についても、チワン族反乱の背景として少数民族の漢化の問題に着目した稲田清一 [1988]、貴州の少数民族地域への漢族移民に農民蜂起の原因を求める武内房司 [1997] などの成果が生まれた。また、回民反乱については近年、雲南省西部における人々の激しい競争関係に雲南回民起義の背景を求めた安藤潤一郎 [2002]、漢・回差別化進行に陝西・甘粛回民蜂起の原因を求めた黒岩高 [2002] などがある。いずれも漢民族の周縁への拡大を背景に論じているのが特徴である。このほか、蜂起の背景にある民衆文化に注目した藤谷浩悦 [2004] もある。なお、義和団については、前述の「王朝体制の崩壊」の項を参照されたい。清末の諸反乱との関係の深い秘密結社・宗教結社については、佐々木正哉 [1970]、酒井忠夫 [1992][1997][1998][2002] が参考になる。

地域における国家と社会の関係については、光緒新政期以降の地方自治の問題からの検討が進んでいる。土地制度の改革をはじめとする清末の変動のなかでの奉天における在地勢力の台頭を検討した江夏由樹 [1994]、Enatsu [2004] や「北洋新政」期の天津における地方自治について地元有力者を中心に分析した貴志彦彦 [1992] に続き、史料豊富な江南についての研究が急速に進み、エリートの地方政治への参与のあり方を解明した田中比呂志 [1995]、中国の地方自治と日本の地方自治の関連性を考察した黄東蘭 [2005]、在地有力者による「郷土」を起点とする秩序構想を検討した佐藤仁史 [1999] などの実証研究が現れたほか、中央と地方の対抗における郷紳の役割を長沙米騒動から分析した藤谷浩悦 [1993] など、その他の地域の検討も進んでいる。

教会・宣教師と中国社会との関わりについては、宣教師の訴訟への干渉問題から個人・世俗的目的による偽教徒が生まれたことを解明した李若文 [1994] がある。また、地域社会を意識した研究には、治外法権を保持する教会の出現による二重権力状況を指摘して義和団の背景の解明に貢献した佐藤公彦 [1999]、潮州地域のキリスト教社会の分析からキリスト教徒と中国社会の矛盾を検討した蒲豊彦 [2003] などの研究がある。

都市社会史 近年、社会史の中でも急速に発展したのが都市社会史の分野である。この分野については戦前における中国現地での調査を背景として、戦争直後に都市の商人団体に注目した根岸信 [1953]、仁井田陞 [1951]、今堀誠二 [1953] などの成果が生まれていたが、その後の戦後歴史学においては、あまり注目を集めてこなかった。

しかし1980年代になると、先述の地域社会史の発展に加え、旧来の中国の都市ギルドが自立的な団体による自治を行わなかったというマックス・ウェーバー以来の見方に対して、清末の漢口を事例に商人による自治が拡大していたとする批判を加えたRowe [1984][1989] の刺激もあり、日本でも都市社会史の研究が進んだ。都市社会を管理する機能をもつ社会団体については、近代都市の善堂についての高橋孝助 [1984] が先駆的であるが、夫馬進 [1997] が明末から清末にいたる善会、善堂の分析を通じて、国家と社会の関係の具体的な解明を進めた。また都市住民の帰属意識に

ついては帆刈浩之 [1994] が上海の同郷ギルドの結合を検討して地縁原理への結集を明らかにした。公共性の問題に関しては小浜正子 [2000] は清末民国期の上海における社会団体の分析を通じて取り組んだ。また、衛生史においても、飯島渉 [2000] がペストを題材として近代中国における制度化の観点から都市を中心とする衛生行政について先駆的業績をあげ、飯島 [2005] はマラリアに着目して近代東アジア衛生行政における日本植民地医学の役割を明らかにした。

吉澤誠一郎 [2002] は、清末の天津を事例にしてこれら政治参加と公共性、社会管理、国民意識と帰属意識という問題に加え、啓蒙と民衆文化という問題に取り組んで新たな見方を提示した都市社会史の集大成である。

さらに都市史としては、Skinner (ed.) [1977] を意識しつつ、斯波義信 [2002] が長期的な視野をもちつつ中国都市史を描いた。都市空間については、珠江・澳門を含めた都市広州の検討から「カントン・システム」のデザインを示した村尾進 [1996]、成都の勸業場を取り上げて商業空間を捉えた小羽田誠治 [2003] がある。

◆華僑・華人史と人類学

華僑・華人史研究については、中国史研究の延長と、居住先の地域研究の一環と位置づけるものに分けられるが、本書の性質上、主として前者を意識した研究を取り上げる。

近代史に関しては香港保良局文書を用いて苦力と猪花の問題を解明した可児弘明 [1979] が戦後の歴史研究としては先駆的であり、東南アジア華人についてはシンガポール・マレーシアを中心にした酒井忠夫編 [1983] が大きな成果であったが、研究が盛んになったのは、アジア交易圏論の隆盛と軌を一にし、全体として籠谷直人 [2000] がその通商網に高い評価を与えている在日華僑の研究が盛んである。とりわけ、長崎華商泰益号の文書は、第二次世界大戦以前における華商の内部文書として世界的に希有の存在であり、これを利用した研究が進められた。成果としては、帳簿史料を用いて簿記の性格を解明した山岡由佳 [1995]、泰益号のネットワークを考察した朱徳蘭 [1997] や東アジア交易圏につながる議論を展開して華商の人的結合を解明した廖赤陽 [2000] がある。

また、香港東華醫院の医療活動を支える広東人ネットワークを明らかにした帆刈浩之 [1996] や、シンガポールにおける祭祀から清末以降の粵東天地会の影響をよみとった田仲一成 [1990]、朝鮮華商の貿易活動に注目した石川亮太 [2004] など、テーマや方法論、地域についても新たな展開がみられる。近年の研究成果については飯島渉編 [1999]、游仲勲先生古希記念論文集編集委員会編 [2003] が参考になり、また華僑の歴史の変遷を描いた斯波義信 [1995] や、日本で初めての華僑関係の専門事典となった可児弘明・斯波義信・游仲勲編 [2002] も有用である。

これら華僑・華人史研究と密接な関係をもつ文化人類学の方面の研究は、古くはフリードマン [1987][1991] の研究があるが、日本においても、中国本土でのフィールド調査が可能になったことから、歴史研究を意識しつつ漢族を対象にした人類学の進

展がみられ、華南の漢族を対象にしてエスニシティの展開やエスニックグループの動態を明らかにした瀬川昌久 [1993][1996] や、華僑・華人研究を含む多様な論文を収めた可児弘明他編 [1998] をはじめとする成果があり、台湾先住民については小林岳二 [1999] がある。今後は華南以外の地域への研究の拡大が期待される。文献解題としては末成道男 [1995] が至便である。

近年、清末期の社会経済史研究は、世界的に必ずしも活発ではない。日本においても、アジア交易圏論の一時期の隆盛が、その他の分野の発展に結びついておらず、また工業化の議論ともリンクしなかった。全体として、経済史から社会史へ関心が移り、20世紀初頭以降が目されるようになった結果、開港直後から洋務運動期にかけての再検討、経済史と社会史のリンクなど、研究すべき時期や課題は数多く残されている。(村上 衛)

〈4〉文化・その他

本章の冒頭でも述べたように、1980年代以降に顕著になった歴史研究の新しい動向のなかで、地域社会史や都市社会史と関連して関心が高まっているのが、広い意味での文化の領域である。そのうち、思想についてはすでに述べているので、まだ言及していない研究として、「アジア」という歴史空間のなかで清末の思想をも取り上げた山室信一 [2001]、アナキズムに関する嵯峨隆 [1994]、近代中国における国家と社会の変容を主に思想史的観点から鳥瞰した村田雄二郎 [1994][1995]、近代思想家群像の入門書である佐藤慎一編 [1998] を補足しておきたい。

教育 教育についても近年研究が盛んであり、19世紀初頭における教育の近代化を明治日本における教育制度の導入という視点から解明した阿部洋 [1990]、学堂教育に関する同 [1993] があり、学堂と科挙の関係については早川敦 [2003] がある。明治日本の教育制度の導入に際しての日本視察に関する汪婉 [1998]、近代教育の普及と改革に関する小林善文 [2002] がある。地方における教育改革については、江蘇省に関する蔭山雅博 [1992]、高田幸男 [1993][2001] や湖南省に関する宮原佳昭 [2003] がある。また、教育分野を始めとして「お雇い外国人」として中国に渡った日本人に関する汪向荣 [1991] がある。なお、教育に関連して中国人の日本留学についても近年研究が盛んであり、さねとうけいしゅう [1970]、黄尊三 [1986]、嚴安生 [1991]、小林共明 [1992]、周一川 [2000]、大里浩秋・孫安石編 [2002] がある。

女性史 女性史の分野も近年比較的研究が活発化している。この分野の入門書として中国女性史研究会編 [2004]、関西中国女性史研究会編 [2005] が有用であり、概説書としては小野和子 [1978] があり、女性解放の思想と行動に関する中山義弘 [1983] がある。また、柳田節子先生古稀記念論集編集委員会編 [1993] にはジェンダー関連の諸論文が収録されている。近代中国における女性の解放との関係でよく取り上げられる纏足については夏曉虹 [1998] があるが、中国近代の身体論という視点

から纏足を論じる坂元ひろ子 [2004]、中国／西洋の関係を考慮に入れて不纏足運動の本質に迫る高嶋航 [2003][2004] や東田雅博 [2004] がある。なお、高嶋には「水龍会」を中心に清代の消防を扱った [1997] もある。

近代性 女性の纏足に関する坂元ひろ子の研究にも通ずるが、纏足と並んで西洋人の眼に「奇習」と写った男性の辮髪を切る問題に関する吉澤誠一郎 [2003] も近代性、あるいは近代における身体性の観点から考察している。また、断髪について朝鮮や日本と比較的に検討した劉香織 [1990] もある。なお、吉澤 [2003] は、中国ナショナリズムの形成に関する諸論文も収めている。

その他、近代的な新聞の成立に関する卓南生 [1990]、中華文明と西洋近代文明の出会いによる文化変容の諸相に関する国際シンポジウムの記録として狭間直樹編 [2001] がある。著名な金石収集家で辛亥革命に際して殺害された満洲人官僚端方とその周辺に関する興味深い研究に浅原達郎 [1987-95] がある。

最後に、近年における歴史研究に共通した傾向として、絵画などヴィジュアル資料を活用した研究を紹介しておきたい。『点石斎画報』を駆使した武田雅哉 [1988]、中野美代子・武田 [1989]、アメリカ合衆国における中国人移民の状況を絵入り新聞に描かれた諷刺画をもとに研究した胡垣坤・曾露凌・譚雅倫編 [1997]、ヴィクトリア朝イギリスの絵入り新聞等に描かれた中国・日本を分析した東田雅博 [1998]、西洋人画家が描いた19世紀の広州・香港などの絵画資料を扱ったシャング [2001] がある。(井上裕正)

3 史料の解説

本章の冒頭で述べたように、本章における「近代」は「清朝末期」を指すのであるから、清代に関する基本的な史料、たとえば『実録』『起居注』『東華錄』『方略(紀略)』『清史稿』などのうち、道光朝以降のものは「近代」の重要史料でもある。また、特に制度史については、『大清會典事例(光緒朝)』のほか、『皇朝經世文編』や『文献通考』のシリーズがあり、個人の伝記に関する『清史列伝』『碑伝集』や特定の地域に関する『地方志』があることは言うまでもない。

次に、漢文・中国語史料についての当該期の特徴は、新聞・雑誌の利用が可能になることであり、19世紀末以降の研究には不可欠である。国内の収蔵状況についてはアジア経済研究所編『中国文雑誌・新聞総合目録』(アジア経済研究所、1986年)が参考になるが、近年、使用可能な新聞の量も拡大している。

当該期においては、利用可能な檔案も増大する。北京の中国第一歴史檔案館や台北の故宮博物院文献館はもとより、地方に残された商会文書などの利用が可能になり、徽州文書など、明清史で多用されている史料も、当該期の史料の比重は大きい。碑刻史料も近年多数出版されており、その多くが清末の碑文をおさめていて利用価値が高

い。これらの解説は他の時代に譲りたい。なお、清代の檔案の利用については、高田幸男「中国近現代文書へのアクセス」、またインターネットの利用については、飯島渉「インターネットと近代中国研究」（いずれも『歴史評論』638, 2003年所収）を参照されたい。

さらに、当該期がそれ以前の時代と史料的に決定的に違うのは、外国語史料の質・量の飛躍的増大である。とりわけ欧文史料は他の時代と比べて重要である。欧文史料としては、*North-China Herald* に代表される新聞・雑誌のほか、イギリス、アメリカの公文書などが有効である。編纂史料としては、イギリスについては議会文書である①、アメリカは②の利用が簡便であるが、一次史料であるイギリス外交史料（Great Britain Foreign Office Records）の利用については佐藤元英『日本・中国関係イギリス外務省文書目録』（クレス出版、1997年）が参考になる。なお、清末外交に関する諸外国側の史料については、坂野正高「政治外交史——清末の根本資料を中心として」（坂野他編『近代中国研究入門』東京大学出版会、1974年）、濱下武志『中国近代経済史研究』（汲古書院、1989年）を参照のこと。

① *Irish University Press Area Studies Series : British Parliamentary Papers, China*, 42 vols., Irish University Press, 1972.

② Davids, Jules (ed.), *American Diplomatic and Public Papers : the United States and China*, Scholarly Resources, 1973-1981.

◆全体にわたるもの

・《清代史料筆記叢刊》中華書局

清代の筆記史料を集めたこの叢刊には、次のような清末に関する筆記史料が収められている。梁廷枏『夷氛聞記』（1997年）、梁廷枏『海国四説』（1997年）、段光清『鏡湖自撰年譜』（1997年）、張集馨『道咸宦海見聞録』（1999年）等。

・《中国近代人物文集叢書》中華書局

近代中国に関する人物の文集などを集めたこの叢書には、次のような人物の文集などを収録している。『宋教仁集』（1981年）、『黄興集』（1981年）、『林則徐集』（1984～85年）、『蔡元培全集』（1984～89年）、『嚴復集』（1986年）、『伍廷芳集』（1993年）、『文廷式集』（1993年）、『譚嗣同全集』（1981年）。

・《中国近代人物日記叢書》中華書局

近代中国に関する人物の日記を集めたこの叢書には、次のような人物の日記を収録している。『王韜日記』（1987年）、『李星沅日記』（1987年）、『翁同龢日記』（1989年）、『王文韶日記』（1989年）。

・《中国近代史資料叢刊》

① 中国史学会主編『鴉片戦争』6冊、神州国光社、1954年

② 同主編『第二次鴉片戦争』6冊、上海人民出版社、1978～79年

③ 同主編『太平天国』8冊、神州国光社、1952年

④ 同主編『捻軍』6冊、神州国光社、1953年

⑤ 同主編『回民起義』4冊、神州国光社、1952年

⑥ 同主編『中法戦争』7冊、新知識出版社、1955年

⑦ 同主編『中日戦争』7冊、新知識出版社、1956年

⑧ 同主編『洋務運動』8冊、上海人民出版社、1961年

⑨ 同主編『戊戌変法』4冊、神州国光社、1953年

⑩ 同主編『義和団』4冊、神州国光社、1951年

⑪ 同主編『辛亥革命』8冊、上海人民出版社、1957年

中華人民共和国の建国後、中国史学会が総力を挙げて編纂した中国近代史に関する基本的な史料集（ただし、②の編纂・出版は他よりも遅い）。いずれの史料集も、『実録』などの清朝側史料とそれに対する、たとえば①ならアヘン戦争に関するイギリス側史料（中国語訳）をかなり網羅的に収録し、巻末に文献解説がつけられている。なお、2000年に②を除く各シリーズが上海人民出版社から再刊された。

・《中国近代史資料叢刊続編》

① 羅爾綱・王慶成主編『太平天国』10冊、広西師範大学出版社、2004年

② 張振鵬主編『中法戦争』4冊、中華書局、1995～2002年

③ 戚其章主編『中日戦争』12冊、中華書局、1989～96年

④ 中国第一歴史檔案館／福建師範大学歴史系合編『清末教案』5冊、中華書局、1996～2000年

《中国近代史資料叢刊》の続編であるが、反キリスト教事件の史料集である④『清末教案』以外は最初のシリーズの補編である。

・《中国近代史資料彙編》中央研究院近代史研究所編、中央研究院近代史研究所

①『海防檔』9冊（1957年）、②『礦務檔』8冊（1960年）、③『道光咸豐同朝籌辦夷務始末補遺』（1966年）、④『四国新檔』11冊（1962年）、⑤『中美関係史料』8冊（1968～90年）、⑥『中法越南交渉檔』7冊（1962年）、⑦『清季中日韓関係史料』11冊（1972年）、⑧『教務教案檔』7輯21冊（1974～80年）⑨『近代中国对西方及列強認識資料彙編』10冊（1972～90年）、⑩『清季華工出国史料 1863～1910』（1995年）

このシリーズは、台湾にある清末から中華民国にかけての公文書を収録している。

①②は洋務運動、③④は後述する『籌辦夷務始末』を補う史料集、⑤は中国・アメリカ合衆国関係、⑥は清仏戦争関係、⑦は朝鮮をめぐる日本・中国関係、⑩は海外出稼ぎ中国人（華僑）関係の史料集である。

・沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』（正編）100輯1281冊、文海出版社、1966～73年

清末から中華民国にかけての重要な史料や研究書を復刻した大部な史料集で、続編（100輯）、三編（33輯）もある。

・阿英編『鴉片戦争文学集』2冊、古籍出版社、1957年

・同編『中法戦争文学集』中華書局、1957年

・同編『甲午中日戦争文学集』中華書局、1958年

・同編『庚子事変文学集』2冊, 中華書局, 1959年

・同編『反美華工禁約文学集』中華書局, 1960年

以上は順に, アヘン戦争, 清仏戦争, 日清戦争, 義和団事件, 反米ボイコット運動に関する詩歌, 小説, 戯曲などを集めたものである。

・《国家図書館蔵歴史檔案文献叢刊》全国図書館文献縮微復制中心

この叢刊は, 国家図書館が所蔵する内閣六部檔案, 光緒年間の總理衙門檔案など, 清代乾隆朝から中華民国期に及ぶ各種檔案をテーマごとに整理して現在出版中であり, その中には近代史に関する次のような史料も収められている。『總署奏底彙訂』(2003年), 『光緒戊戌年収發抄電』(2004年), 『清末奏底匯訂』(2004年), 『北洋公牘類纂 正統編』(2004年)等。

◆中華帝国の動揺

〈アヘン戦争・第二次アヘン戦争〉

①『籌辦夷務始末』道光朝80巻・咸豊朝80巻・同治朝100巻

②蔣廷黻編『籌辦夷務始末補遺』9冊, 北京大学出版社, 1988年

③中国第一歴史檔案館編『鴉片戦争檔案史料』7冊, 天津古籍出版社, 1992年

アヘン戦争・第二次アヘン戦争に関する清朝側の基本史料は, 前掲《中国近代史資料叢刊》シリーズ所収のものを除けば, ①である。①はたとえば道光朝については次の咸豊朝のときに編纂されており, 道光・咸豊・光緒三朝における外交に関する皇帝の上諭と官僚の上奏文が主な内容である。国風出版社(台北)の影印版, 中華書局の鉛印版(道光・咸豊朝のみ)がある。②は清華大学教授蔣廷黻が軍機処にある檔案で①を補ったものである。③は北京の故宮にある中国第一歴史檔案館に所蔵されているアヘン戦争関係の檔案史料を編纂して鉛印出版したもので, アヘン戦争に関するかぎり, ①より③を利用すべきである。

なお, 欽差大臣に任命された林則徐に関する史料としては, 前掲《中国近代人物文集叢書》シリーズにある『林則徐集』(中山大学歴史系中国近现代史教研組編)があるが, その後に出版された史料などを追加した林則徐全集編輯委員会編『林則徐全集』(10冊, 海峡文芸出版社, 2002年)が現時点では最良の史料集である。

④佐々木正哉『鴉片戦争前中英交渉文書』巖南堂, 1967年

⑤同『鴉片戦争の研究・資料篇』近代中国研究委員会, 1964年

⑥同『鴉片戦争後の中英抗争・資料篇』近代中国研究委員会, 1964年

以上の④⑤⑥は, アヘン戦争前後における中英当局間の往復文書やイギリスの在中国当局が収集した排外運動のピラなどの中国語史料を佐々木正哉がイギリス外務省の保存記録のなかから編集したものである。

〈太平天国運動〉

①太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』6冊, 中華書局, 1961~63年

②中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案資料』26冊, 光明日報出版社・社会科学文献出版社, 1990~2001年

③広西省太平天国文史調査団編『太平天国起義調査報告』三聯書店, 1956年

④菊池秀明『广西移民社会と太平天国』(史料編)風響社, 2001年

⑤韓長耕等整理『曾国藩全集』30冊, 岳麓書社, 1985~94年

⑥莊吉發総編輯『先正曾国藩文献彙編』8冊, 故宫博物院, 1993年

⑦『左宗棠全集』15冊, 岳麓書社, 1986~96年(20冊, 上海書店, 1986年)

⑧吳汝綸編『李文忠公全集』7冊, 文海出版社, 1962年

⑨顧廷龍等編『李鴻章全集』3冊, 上海人民出版社, 1985~87年

太平天国についても前掲《中国近代史資料叢刊》《同統編》シリーズ所収のものほか, ①と中国第一歴史檔案館所蔵の檔案史料集として②がある。③は太平天国の現地調査資料, ④は日本人の編者が農村調査で発見収集した族譜・碑文等を収める。⑤⑥⑦⑧⑨は, 太平天国運動の鎮圧にあたり, その功績によりその後地方大官として洋務運動などに指導的役割を果たした官僚である曾国藩, 左宗棠, 李鴻章の上奏などを収める。なお, ⑨は現在, 「電稿」3冊のみが出版されている。

〈辺境の危機/日中関係〉

①王彦威輯・王亮編『清季外交史料』光緒朝218巻, 宣統朝24巻等, 1932~35年

②故宫博物院編『清光緒朝中日交渉史料』76巻, 1932年

③故宫博物院編『清宣統朝中日交渉史料』6巻, 1933年

①は内容として, 道光・咸豊・同治の三朝に関する前掲『籌辦夷務始末』の続きで, 光緒・宣統両朝の外交関係史料集。19世紀後半における朝鮮をめぐる日中関係については, 前掲《中国近代史資料叢刊》の『中日戦争』, 《同統編》の『中日戦争』, 《中国近代史資料彙編》の『清季中日韓関係史料』のほか, 軍機処檔案から編集した②③がある。①②③は文海出版社(台北)から出版されている。なお, 『清季中日韓関係史料』, 『籌辦夷務始末(同治朝)』, ②③など, 30種の史料集のなかから, 中国・日本・朝鮮関係史料を分類・編集したものに, 李毓樹編『清季中日韓関係資料三十種綜合分類目録』2冊(中文研究資料中心, 1977年)がある。

◆改革運動

〈洋務運動〉

①《中国近代兵器工業檔案史料》編委会編『中国近代兵器工業檔案史料』4冊, 兵器工業出版社, 1993年

②王樹楠編『張文襄公全集』6冊, 1963年(28冊, 文海出版社, 1980年)

洋務運動の基本的な史料集は, 《中国近代史資料叢刊》シリーズの『洋務運動』(前掲)であるが, ①は特に兵器生産に関する檔案史料を集めている。②は洋務運動の推進官僚であり, 20世紀初頭にかけて清末政治の中心に位置した張之洞の文集である。なお, 苑書義等主編『張之洞全集』12冊(河北人民出版社, 1998年)もある。

〈変法運動〉

①国家檔案局明清檔案館『戊戌変法檔案史料』中華書局, 1958年

②姜義華等編校『康有為全集』3集, 上海古籍出版社, 1987年

- ③林志鈞編『飲冰室合集』40冊，中華書局，1936年
 ④蔡尚思・方行編『譚嗣同全集（増訂本）』上・下，中華書局，1981年
 ⑤譚嗣同著，西順蔵・坂元ひろ子訳注『仁学—清末の社会変革論』岩波文庫，1989年
 ⑥夏東元編『鄭観応集』上・下，上海人民出版社，1982，88年

変法運動の基本史料も，《中国近代史資料叢刊》シリーズの『戊戌変法』であるが，①は明清檔案館（現，中国第一歴史檔案館）所蔵の關係檔案を集めた基本的な史料集である。②は変法論者の第一人者康有為の全集，③は梁啓超の全集，④は譚嗣同の全集で前掲の《中国近代人物文集叢書》に収められており，⑤は彼の名著『仁学』の邦訳・註である。⑥は鄭観応の全集である。

◆王朝体制の崩壊

〈義和団事件〉

- ①国家檔案局明清檔案館『義和団檔案史料』2冊，中華書局，1959年
 ②中国第一歴史檔案館編輯部編『義和団檔案史料統編』上・下，中華書局，1990年
 ③中国社会科学院近代史研究所《近代史資料》編輯組編『義和団史料』上・下（近代史資料専刊），中国社会科学出版社，1982年

反キリスト教運動・事件（教案）の基本史料は，《中国近代史資料叢刊統編》の『清末教案』と《中国近代史資料彙編》の『教務教案檔』（いずれも前掲）である。義和団事件の基本史料は，《中国近代史資料叢刊》の『義和団』（前掲）のほか，中国第一歴史檔案館所蔵檔案から集めた①とその統編②がある。③は義和団側の文献を収録している。

〈光緒新政〉

- ①故宮博物院明清檔案部編『清末籌備立憲檔案史料』上・下，中華書局，1979年
 ②中国第一歴史檔案館編『光緒朝硃批奏摺』120輯，中華書局，1995～96年
 ③中国第一歴史檔案館編『光緒宣統兩朝上諭檔』37冊，広西師範大学出版社，1996年
 ④朱寿朋編『光緒朝東華錄』5冊，中華書局，1958年
 ⑤故宮博物院編輯『宮中檔光緒朝奏摺』26輯，国立故宮博物院，1973～75年
 ⑥国立故宮博物院故宮文献編輯委員會編『袁世凱奏摺專輯』8冊，広文書局，1970年
 ⑦天津図書館・天津社会科学院歴史研究所編『袁世凱奏議』上・中・下，天津古籍出版社，1987年
 ⑧天津市檔案館編『袁世凱天津檔案史料選編』天津古籍出版社，1990年

光緒新政のうち，立憲運動に関する史料集が①である。光緒から宣統にかけての清朝側の基本史料が②③④⑤で，まず④で全体の流れを抑え，詳細については②⑤で調べる。特に②は内政，軍務，財政，農業，水利，工業，外交，民族などの項目に分類された膨大な史料集である。⑥⑦⑧は光緒新政期以降の政治舞台で活躍した袁世凱に関する史料集である。

〈辛亥革命〉

- ①張木丹・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』3巻5冊，三聯書店，1960～63，77年
 ②第一歴史檔案館・北京師範大学歴史系編『辛亥革命前十年間民変檔案史料』2冊，中華書局，1985年
 ③中国人民政治協商会會議全国委員会文史資料研究委員会編『辛亥革命回憶録』6集，中華書局，1961～63年
 ④広東省社会科学院歴史研究所等合編『孫中山全集』11巻，中華書局，1981～86年
 ⑤西順蔵・近藤邦康編訳『章炳麟集——清末の民族革命思想』岩波文庫，1990年
 ⑥武漢大学歴史系中国近代史教研室編『辛亥革命在湖北史料專輯』湖北人民出版社，1981年

辛亥革命の基本史料は，《中国近代史資料叢刊》の『辛亥革命』（前掲）である。①は辛亥革命以前10年間における主な新聞・雑誌の論説を集めたもの，②は同時期の民衆運動に関する史料集，③は革命関係者たちの回想・証言集である。④は革命運動の指導者孫文の全集，⑤は章炳麟の論説の邦訳である。辛亥革命の国内各地における進展状況については⑥のほかにも，上海社会科学院歴史研究所編『辛亥革命在上海史料選輯』（上海人民出版社，1966年），遼寧省檔案館編『辛亥革命在遼寧檔案史料』（遼寧省檔案館，1981年）など，多くある。

◆社会・経済

- ①李文治・章有義編『中国近代農業史資料』3冊，三聯書店，1957年
 ②彭沢益編『中国近代手工業史資料』4冊，三聯書店，1957年
 ③江敬虞・孫毓棠編『中国近代工業史資料』2輯4冊，科学出版社，1957年
 ④陳真・姚洛共編『中国近代工業史資料』4輯6冊，三聯書店，1957～61年
 ⑤聶宝璋編『中国近代航運史資料』第一輯上・下，上海人民出版社，1983年，聶宝璋・朱蔭貴編『中国近代航運史資料 1895～1927』第二輯上・下，中国社会科学出版社，2002年
 ⑥宓汝成編『中国近代鐵路史資料 1863～1911』3冊，中華書局，1963年
 ⑦中国人民銀行総行参事室金融史料組『中国近代貨幣史資料』1輯2冊，中華書局，1964年
 ⑧中国人民銀行総行参事室編『中国清代外債史資料 1853～1911』中国金融出版社，1991年
 ⑨章開沅等編『蘇州商会檔案叢編』第一輯（1905～11），第二輯（1912～19），華中師範大学出版社，1991，2004年
 ⑩天津市檔案館・天津社会科学院歴史研究所・天津市工商業聯合会編『天津商会檔案匯編 1903～1950』5輯，天津人民出版社，1989～98年
 ⑪中国人民銀行山西省分行・山西財経学院《山西票号史料》編写組・黄鑑暉『山西票号史料』山西經濟出版社，2002年

- ⑫張謇研究中心・南通市図書館編『張謇全集』7冊，江蘇古籍出版社，1994年
 ⑬陳翰生主編『華工出国史料匯編』8冊，中華書局，1980～85年
 ①は農業，②③④は工業，⑤は航運，⑥は鉄道，⑦は貨幣，⑧は外債に関する史料集。⑨⑩は商会，⑪は山西商人が経営した票号に関する史料集。⑫は民族資本家張謇の全集。⑬は華工（移民労働者）に関する史料集。
 ⑭H. B. Morse, *The Chronicles of the East India Company Trading to China, 1635-1834*, 5 vols., Oxford, 1926, 1929
 ⑮『中国旧海関史料』編纂委員会編『中国旧海関史料』京華出版社，2001年
 ⑯黄富三他編『清末台湾海関歴史資料』2冊，中央研究院台湾史研究所籌備処，1997年
 ⑰Hsiao Liang-Lin, *China's Foreign Trade Statistics 1864-1949*, Harvard University Press, 1974

開港前の中国とイギリスの貿易については、イギリス東インド会社の記録に基づく⑭が基本文献となる。近代中国における統計資料は豊富でないが、最も有用なのは中国海関の出版した海関統計及び海関報告であり、⑮の出版により入手が容易になった。なお、台湾関係は⑯にまとめられている。海関統計の処理については⑰があり、海関史料の全体像については濱下武志『中国近代経済史研究』（汲古書院，1989年）が参考になる。

清末以降においては、日本語文献の積極的利用が可能になる。経済関係の史料としては領事報告をもとに編纂された『通商彙纂』が有用であり、その利用には角山栄『日本領事報告の研究』（同文館，1986年）が参考になる。

◆文化・その他

〈思想〉

- ①西順蔵編『原典中国近代思想史』6冊，岩波書店，1976～77年
 ②西順蔵・島田虔次編『中国古典文学大系 58 清末民国初政治評論集』平凡社，1971年

思想や思想家に関する史料は、既出の洋務運動、変法運動、辛亥革命などの基本的な史料集に含まれている。①②は主な思想家の論説の邦訳である。

〈教育〉

- ①舒新城編『中国近代教育史資料』3冊，人民教育出版社，1961年
 ②『中国近代教育史資料匯編』上海教育出版社
 「鴉片戦争時期教育」（1990年），「学制演変」（1991年），「留学教育」（1991年），「洋務運動時期教育」（1992年），「戊戌時期教育」（1993年），「高等教育」（1993年），「教育行政機構及教育団体」（1993年），「実業教育 師範教育」（1994年），「普通教育」（1995年），「教育思想」（1997年）
 ③朱有瓛『中国近代学制史料』第一輯上・下，第二輯上・下，第三輯上・下，第四輯，華東師範大学出版社，1983～92年

- ④北京大学・中国第一歴史檔案館編『京師大学堂檔案選編』北京大学出版社，2001年
 ⑤呂順長編著『晚清中国人日本考察記集成——教育考察記』上・下，杭州大学出版社，1999年

これまで①が近代教育史に関する基本史料だったが、近年出版された②③が現在では基本的な史料集である。④は北京大学の前身である京師大学堂に関する檔案史料集，⑤は明治日本における教育状況の視察記である。

〈その他〉

女性史については、李又寧・張玉法編『近代中国女権運動史料 1842～1911』2冊（伝記文学社，1975年）がある。
 （井上裕正・村上衛）

第11章

現 代

久保 亨・江田憲治

1 研究の視点

戦後日本の中国近現代史研究は1980年頃を大きな分水嶺として二分される。それ以前、すなわち戦後直後から1970年代まで、日本の中国近現代史研究は両極に分かれて進められた。一方では、1949年革命に共感を寄せ、革命中心史観と呼ぶべき視点から中国革命史の研究を積極的に進めようとする動きが広がっていた。その背景には、封建制から資本主義へ、そして社会主義へというマルクス主義的な発展段階論を踏まえ、いわゆるソ連型社会主義への接近を発展と捉えるような認識が存在した。他方、アメリカの中国研究の手法を取り入れ、中国共産党の政治支配の特質を考察したり、人民共和国の経済実態を数量的に把握しようとする調査研究も試みられていた。こうした研究スタイルの基礎には、多くの場合、欧米の近代化過程を社会発展のモデルとみなすような意識が横たわっていた。

しかし冷戦構造に強く規定され両極化していた研究状況は、中国における「文化大革命」の混乱、アメリカによるベトナム侵略の失敗などを背景に、1970年代末頃から急速に変わり始めた。革命中心史観などととらわれず、新たな研究課題と研究方法が模索されるようになり、様々な観点を持つ研究者が様々な方法論を用いて客観的かつ実証的に進める歴史研究が主流になっていく。そうした70年代末における中国近現代史研究の転換点に位置したのが野沢豊・田中正俊編[1978]の『講座中国近現代史』であった。全7巻の講座に収録された50本を超える論文からは、革命中心史観の影響を引き継ぎながらも、そこからの脱却をめざす様々な思索の跡が伝わってくる。

1980年代を迎え日本の中国近現代史研究をめぐる状況は一変した。それを促した第1の条件は、現実の中国と世界に生じた変化である。「開放・改革」を掲げ「市場経済」化を推進した1980～90年代の共産党政権の政策は、一党独裁下の集権的な社会経済に対し巨大な変化をもたらした。旧ソ連・東欧圏の崩壊と東西冷戦の終結、国

民党の独裁政権に終止符を打った台湾の動向なども、中国近現代史研究を大きく転換させる契機になった。従来は1950～60年代の「中国社会主義」を近現代史の一つの到達点と見なすことが前提とされてきたのに対し、現在ではむしろそれを特殊な時代状況の産物として理解し、20世紀前半の中華民国時期（辛亥革命を経て共和制の中華民国が成立した1912年1月を起点とし、1949年革命によって人民共和国が成立する1949年10月までの約38年間を意味する時期区分）から21世紀の現在に至るまでの近現代中国を、全体として一つの過渡期として考察する立場が、多くの研究者の間で共有されるようになってきている。久保亨[2003]でも指摘したように、こうした新たな認識を生み出す上では、Wakeman and Edmonds (eds.) [2000] が提示している欧米の学界の場合と同様、民国史研究が大きな役割を果たしてきた。

研究の在り方を一変させた第2の条件は、台湾に所蔵されている文書類も含め膨大な量の中国側史料が公開されるようになったことである。各時代の新聞、雑誌、政府公報類がリプリント版、マイクロフィルム版などの形で容易に入手できるようになり、中国第二歴史檔案館編[1979-2000]、中華民国重要史料編輯委員會編[1981-88]に代表される基本的史料集の刊行が続いた。加えて中国の第一歴史檔案館（北京）・第二歴史檔案館（南京）、台湾の国史館にはじまり、上海市檔案館、北京市檔案館、重慶市檔案館、江蘇省檔案館、四川省檔案館などをはじめとする地方レベルの文書館までが研究者に開放され、中国近現代史研究のため文書館を利用することが1990年代には一般的になった。

第3に日中間の学術交流の活発化、とくに日本の中国史研究者が長期間中国で暮らす経験を持てるようになったことを指摘しておきたい。長期滞在型の研究が可能になった結果、たんに史料収集が容易になっただけでなく、中国社会の現実を実感しながら歴史認識の作業を進めていけるようになった。むしろ中国からも多くの研究者が来日し、自由な学術交流を通じ相互に刺激を与えあう関係が生まれている。

こうして1980年代初めの転換以降、日本の中国近現代史研究は、さまざまな領域において多くの新しい研究成果をあげてきた。その成果の一端は以下の紹介に示すとおりである。今後、さらに研究を深化し1949年革命の位置を相対化し、20世紀から21世紀にかけての中国近現代史を統一的に捉えていくためには、経過点としての1949年の位置を、常に明確に意識しておくことが求められる。従来は多くの研究において、到達点と見るか、出発点ないし転換点と見るかの相違こそあれ、1949年における非連続面が過度に強調される傾向があった。それに対し今後は、1949年における連続面と非連続面、そして両者の相互関係を常に意識し、歴史の流れの中で1949年革命を位置づけつつ、個々の歴史研究を進めていくことが大切になる。それでは、経過点としての1949年を意識した近現代史研究は、どのようにして進められるべきか。そのための自分としての問題提起が、①専制王朝の時代から歴史的に継承されてきた帝国としての中国、②19世紀末から始まり21世紀を迎えた現在も続く近代国民国家形成をめざす存在としての中国、③社会主義を掲げた中国という三つの視

角を踏まえながら、さらに帝国、国民国家、社会主義といった既存の枠組みを越える新たな視角も探求していかなければならない、というものであった(久保亨[2004])。こうした整理の妥当性如何は今後の議論に委ねるとしても、20~21世紀の中国史を統一的に捉える作業が、中国近現代史研究を志すものにとって避けて通るわけにいかない課題となっていることは確かである。(久保 亨)

2 研究の展開

〈1〉政治・思想史

◆中国現代政治史はどのように再構成されてきたか——「民国史観」の提起

前節でも述べられているように、1980年代半ば以降、日本における中国現代政治・思想史研究は、従来の「革命中心史観」——孫文や中国共産党の革命運動、これらに関連する民衆運動などを中心に、中共の勝利＝中華人民共和国の成立までを記述することを当然視した歴史観——の影響から次第に脱し、新たなパラダイムを模索しつつあった。プロレタリア文化大革命の実態が徐々に明らかにされ、1989年に天安門事件が起こったことは、革命運動、とりわけ中共中心の歴史観では説明できない「現代」の問題の所在を明らかにしたし、人民共和国の成立を中国現代政治史のゴールとする訳にはいかないという認識も、研究者の間で共通のものとなっていった。また中国で、中国社会科学院近代史研究所が70年代末から『民国人物伝』などの「中華民国史資料叢稿」シリーズの刊行を開始、80年代初めには『中華民国史』の第1巻を出版したことも、日本の研究者を刺激することになった。

こうして日本の研究者は、1980年代半ば以降、1912年から49年までの中国史を、その国家体制にそって「中華民国の歴史」として考察することを開始した。この研究動向は、天安門事件後に山田辰雄[1990]が「民国史観」を提唱し、ほぼ同じ時期、野沢豊の主宰する雑誌『近きに在りて』が中華民国史中心の編集方針を採用するようになったことから、一層有力なものとなっていった。多くの研究者が「民国史観」を支持し、あるいは多かれ少なかれ「中華民国史」を意識することになったからである。

もっとも、言うまでもないことであるが、この「民国史観」という研究動向は、ここで述べる政治史・思想史だけに限られない。むしろそれは、政治史・思想史以外の、経済史・社会史・教育史・文化史など広い分野に及ぶものであったが(その成果についてのサーベイ論文集としては、野沢豊編[1995]が参照されるべきである)、政治史・思想史に限って言えば、中華民国の政治過程・政治制度を追究し、中国国民党やその政権はもちろん、従来の歴史観からは「革命の傍流」、あるいは「反動」「反革命」と位置付けられてきた人物——主要な人物の名を挙げれば、宋教仁・袁世凱・康有為・梁啓超ら、また「革命史」の視点からは掬い上げられないが、しかし「民国

史」の舞台で決して見過ごせない役割を果たした人々の政治活動や思想的営為を明らかにし、さらには「革命」の敵対者である軍閥の興亡やその政権構造を明らかにしようとする研究成果が生まれたのであった。

◆民国の政治と人物(1)——政治家・革命家・政党

すなわち、田中比呂志[1991]は宋教仁を中心に民国初年の政治史に光をあて、同[1993]は辛亥革命の所産としての袁世凱権力を組み込んだ多層的な政治史を提案した。宋教仁の体系的な研究である松本英紀[2001]も、臨時約法制定時期の宋の政治構想を、中央集権国家の建設とこれを裏付ける政体としての議院内閣制の樹立と規定している。山田辰雄は同編[1996]の「袁世凱帝制論再考」で、袁世凱帝制を「強い中国」創出の試みとして「辛亥革命の延長線上」に位置づけ、金子肇[1997a]も袁政権が国家統一をめざしていたことを強調している。「反革命」政治家として唾棄されてきた袁世凱も、今日の民国史研究においては、重要な成員なのである。また、藤岡喜久男[1999]は立憲派の政治家張謇の民国初期の活動を追い、鏡屋一[2002]は、復古運動の提唱者でもあった章士釗の再評価をめざし、彼の政治思想を「反対の制度化」と「政治的寛容」を特徴とする自由主義思想と規定している。

このほか、「改良派」「保皇派」の政治的立場がレッテルとして機能してきた康有為については、辛亥革命期から五・四運動期までを説き及んだ竹内弘行[1987]、国民革命期の康の動向について述べる同[1992]がある。近年大きな注目を浴びている、民国期のすぐれた啓蒙思想家にして有力な政治家でもあった梁啓超に関しては、狭間直樹編[2000]が日本亡命時代における西洋文明摂取を中心に、彼の功績を明らかにし、楠瀬正明[1994]が第一国会期の彼の政治活動に注目するが、さらに島田慶次の編訳にかかる丁文江・趙豊田編[2004]は、主に梁啓超が受領・送付した書簡を中心に編纂された(したがって貴重な資料でありながら全面的な利用は容易ではなかった)梁啓超の年譜長編を完訳したものである。詳細をきわめるその訳注によって、はじめて明らかになった梁啓超の行動や政見も数多いのであって、1912年から28年にかけての、民国政治史研究に貴重で豊富な資料を提供するものとなっている。

また国民党左派についての山田辰雄[1980]から本格化した国民党研究も、民国史研究を切り拓き、その重要部分を構成している。この領域では、同党の形成と発展について述べた深町英夫[1999]、汪精衛の政治言論を30年代半ばまで追究した土屋光芳[2000]、蒋介石と南京国民政府を再評価した家近亮子[2002]などの著作のほか、個別論文としては、西山会議派の形成と存在の原因を分析した江崎隆哉[1995]、南京政府の成立後、「以党治国」の理念が形骸化して蒋介石独裁が確立し、彼の権威主義的支配が中央から地方に浸透する過程を展望する樹中毅[1996][2001]、蒋介石の新生活運動の組織構造や彼の権力浸透との関係を考察した段瑞聡[1997][1998]などがある。

国民党の指導者孫文に関する研究も、前掲山田辰雄[1980]が、孫文思想の未完性(それゆえに後継者による多様な解釈が可能となった)を指摘、藤井昇三[1981a]

[1981b] が、孫文の日本との間の満洲租借交渉（1912年）や、21カ条要求を上回るほどの「中日密約」への合意（1915年）という事実を明らかにし、狭間直樹 [1986] が孫文思想における「民主と独裁」の並存を説いたことは、孫文の「革命史」における役割を相対化することになったと言えるだろう。孫文は最後まで軍事優先だったとする横山宏章 [1983][1985] の議論や、孫文の対日観に対する久保田文次 [1985] の再検討、国民党一大大会後も国際協調路線は放棄されなかったとする高綱博文 [1996] の主張、彼の「大アジア主義」講演の解釈をめぐる論争（高綱 [1991]、安井三吉 [1991]、藤井 [1996]）も、同様の研究動向を示している。このほか、孫文に関しては、一連の国際シンポジウムの報告集である孫文研究会編 [1986][1993]、孫文研究会・神戸華僑華人研究会編 [1999] が、近年の多面的な孫文研究の水準を示している。

さらに、国民党と共産党（共産党については後述）という二大政党とは異なる、独自の道を模索した「第三勢力」「民主党派」への関心も、「革命中心史観」から脱却しようとした研究者の努力の成果であったと考えられる。この分野では、「第三勢力」総体を研究対象とし、その意義を強調した菊池貴晴 [1987]、中国民主同盟の歴史を明らかにした平野正 [1983] のほか、同 [1987]、鄧演達・譚平山らの第三党（のちの中国農工民主党）の歴史を通論する周偉嘉 [1998] などの著作があり、さらに個別論文としては、第三勢力が打ち立てた唯一の政権である福建人民政府についての橋本浩一 [1992]、施復亮・羅隆基・章乃器についての水羽信男 [1994][1995][1997] がある。水羽の主張するように、中国革命における中共指導下の大衆闘争の負の面が明らかになった今日、こうした第三勢力の政治的・思想的営為の「現実的可能性」が再検討されるべき時期となっていることは確かである。

◆民国の政治と人物(2)——資本家・軍閥・思想家

さらに、本来「革命」どころか、「政治」とも距離を置いていたはずの資本家層が、「政治史」で重要な役割を演じるようになったのも、民国期政治史の特徴であると考えられる。この点では、林原文子 [1983] が、天津の国貨提唱運動をリードした宋則久について考察し、陳来幸 [1983] は上海総商会の指導者であった虞洽卿の生涯をたどり、金子肇 [1987] が上海商総連会の指導者馮少山について述べ、同 [1989a] は上海商民協会と国民党政権の関係について分析している。

資本家層と異なる意味ではあるが、やはり「革命」とは対極的な位置にあった軍閥に関しては、松尾洋二 [1988] が曹錕・呉佩孚ら直隸派軍閥の興亡を克明に辿り、渋谷由里 [1997] は張作霖政権成立の背景を分析、同 [1993] は張作霖政権下の奉天省民政の進展を明らかにし、松重充浩 [1990] は張作霖の地域統合策を解明している。水野明 [1994] は、張作霖・張学良政権についての基本的知識を得られる図書である。なお、中華民国成立後の軍閥政権を、清朝期と逆転して軍人が紳士層を指導する立場となった「軍一紳政権」と規定するチェン [1984] は、今日でも北洋軍閥期の政治史・制度史あるいは社会史としての基本的な研究書の立場を失っていない。

以上は、主要には政治史、あるいは政治家の思想についての研究であるが、現代中国の思想・哲学に関する研究も、研究者の関心の拡大にともなって、さまざまな思想家・哲学者に焦点が当てられている。たとえば、胡適については、山口榮 [2000] が新文化運動以後の「胡適思想」の一貫性を主張して全面的な再評価を試み、河田悌一 [2002] は胡適の国故整理運動への寄与を論じている。森紀子 [1995] は、1920年代における思想の動向であった虚無主義について述べる。後藤延子 [1999, 2001-04] は、蔡元培の思想を宗教という新たな角度から分析し、新儒家に関しては、島田慶次 [1987] が熊十力の思想を儒教や仏教という伝統思想を総合再生させ、新しい哲学をクリエイトする試みであったとして考察、中尾友則 [2000] は梁漱溟の思想における、西洋近代の吸収と儒教的価値の保持という二要素の統一的把握を主張する。

またマルクス主義思想（哲学）の方面では、後藤延子 [1992] が李大釗のマルクス主義理解における近代産業資本主義への無理解を指摘、陳正醒 [1993-95] は瞿秋白のマルクス主義哲学がいわゆる「正統派」のものであったことを明らかにし、同 [1985] は新哲学論戦（1935～37年）でのソ連哲学界の動向の波及を重視し、「毛沢東哲学」もソ連哲学の権威性を認める趨勢の中で形成されたことを指摘する。近藤邦康 [2003] は、毛沢東の思想は外からの侵略への抵抗、国家独立と人民革命の結合という点では一貫していたとする立場から、一生涯にわたる「実践と思想」を追究している。

◆地域の政治過程の成立とその発展への注目

ところで中華民国の歴史を、「政治史」として概観すれば、この国家が軍閥政権期はもちろん、南京国民政府期を通じてすらも、完全な統一をなしてあげていなかったことに気づかされる。しかしこの認識は、逆に地域の政治過程を独立したものとして考察することを可能にし、「地域史研究」を進展させることになった。「近代」を起点とする「社会史」では、天津や上海など大都市が多くの研究者の関心を引いているが、「現代」の「政治史」の対象として注目されているのは、湖南省、広東省、東北三省、およびチベット・モンゴル・トルキスタンという少数民族居住地域である。こうした研究動向の背景には、①湖南省が、軍閥混戦から国民革命期にかけて南北両政権の争奪の対象となり、また連省自治運動の発祥の地であったこと、②広東省が、孫文らによって北京への対抗政権の所在地となり、反帝国主義運動と北伐の策源地であったこと、③東北三省が、奉天派軍閥の地盤であり、中国の中でも日本の植民地支配を最初に受けることになったこと、④チベットやモンゴル、トルキスタンは、辛亥革命以後、「中国」の領域から離脱しようとする独立運動が展開された（されている）こと、すなわちこれらの「地域政治」が中国現代政治史の軸線の一つとなり、また自律的な展開を見せたこと、を指摘できるであろう。

これらのうち①湖南省については、笹川裕史 [1985][1986] が1920年代の同省における省憲法制定過程や地方議会の動向など湖南省の政治変革の過程を分析し、清水稔 [1992] が湖南五・四運動を民衆運動と学生運動の角度から詳細な分析を加え、塚

本元 [1994] も 1919 年から 22 年までの湖南省の省エリートの活動や連省自治運動をたどった。②広東に関しては、塩出浩和 [1992][1999][2002] が、1920 年代の広州政権における自治運動や商団事件、国会の問題を扱い、蒲豊彦 [1992] は国民革命期の広東農民運動を地域史として分析、生田頼孝 [2001-02] は陳炯明政権の政権基盤を検討している。③東北三省については、大連華人社会や奉天総商会に関する松重充浩 [1994][1997]、東北易幟の政治過程を考察する土田哲夫 [1993] のほか、渋谷由里 [1995] が瀋陽の満洲事変後の政治状況を分析している。キムチョンミ [1992] は、朝鮮人・中国人民衆による吉会鉄道反対闘争、日本側の「集団部落」への抵抗闘争などを詳細に論じ、和田春樹 [1992] は、金日成らの満洲抗日闘争を考察する。④少数民族地域については、新疆ムスリム反乱と東トルキスタン共和国についての新免康 [1989][1994]、および王柯 [1995a] が、チベットについては平野聡 [2001a][2001b]、共産党と国民政府の内モンゴル統合政策を扱う吉田豊子 [2001a][2001b] がある。

もちろん、こうした地域のピッグアップは、それぞれの地域政治の展開の独自性ととも、地方新聞や公文書など史料の存在にも左右されるが、いかなる地域にも中央とは異なる政治過程（民族差異を基礎とする、中国からの独立運動を含め）が想定される以上、このほかの地域への関心の拡大が期待される。

◆新たなパラダイムの構築をめざして

以上のべてきたような政治過程や地域政権、人物の行動や思想に関わる著作や論文のほか、現代史の一部を、「民国前期」（中央大学人文科学研究所編 [1999]）、「1920 年代」（狭間直樹編 [1995]）、「中国国民政府史」（中国現代史研究会編 [1986]）「戦後国民政府期」（姫田光義編著 [2001]）として、多様な角度から分析を試みた論文集の存在も、貴重な成果であるが、こうした成果を背景に、全体としての「中華民国史」をどのように捉えるか、さらには次なる段階の「中華人民共和国史」との連続性（あるいは統一的把握）をどう考えるのか、という新たな問題も提起されている。そして、この二つの課題に対する解答も、多くの研究者によって試みられてきた。

たとえば西村成雄 [1991] は、中国ナショナリズムと民主主義の相互関連を軸とし、1930 年代に成立した訓政的政治体制とその変容の過程を主な内容とする中華民国政治史論を展開し、同 [2004] では国民国家としての段階性と政党国家体制の継承性を分析することで、20 世紀中国の連続性を強調する。山田辰雄は、20 世紀中国に政治的対立解決のための制度的枠組みが欠如していたこと、袁世凱独裁→国民党訓政→中国共産党一党独裁に「代行主義」が一貫していたことを指摘し、この視座からする論文集を編んだ（山田編 [1996]）。また横山宏章 [1996] は、民国期の政治史を「専制と民主の相剋」を軸に、多種多様な政治勢力がそれぞれの政治体制をめざした過程、と規定して中華民国の通史的理解の軸を提示し、野沢豊 [1999] は、中華民国と中華人民共和国の間の画期を強調する中国の研究者の歴史観に対し、この二つの国家の歴史を連続して把握する枠組みとして、「共和史」を提案している。

このほか、奥村哲 [1999] は、中国の社会主義体制の諸要素は日本の侵略戦争の時期に準備され、戦後の朝鮮戦争、アメリカとの対立の中で確立していったことに焦点をあてて、民国史から人民共和国史への鋭利な視座と叙述を提供したが、民国史と人民共和国史を中国の 20 世紀の歴史として通観しようとする試みは、概説書である姫田光義他 [1993] と、論文集である宇野重昭・天児慧編 [1994] が共有するところでもある。

なお、人民共和国期に関しては、1949 年から 85 年までを扱うすぐれた概説書である宇野重昭・小林弘二・矢吹晋 [1986] のほか、文化大革命についての加々美光行編 [1985]、丸山昇 [2001]、加々美 [2001]、国分良成編 [2003]、「現代中国論」に関する論文集として毛里和子編 [1990]、岡部達味・毛里編 [1991]、毛里編 [1995]、および毛里他編 [2000] が重要である。

◆中国現代の「運動史」はどのように追究されてきたか

ところで、一国の政治過程が、何らかの事件や政治運動、侵略への抗戦によって転機を迎えること、また政党政派が事件や運動をリードし、事態が展開されることは、政治史における条理と言ってよい。したがって、こうした政治運動や抗戦（抵抗運動）の歴史過程——ここでは「運動史」とよぶことにしたいが、その重要性も多くの研究者が共通して認識するものであった。

たとえば 1925 年から 27 年、第一次国共合作のもとに展開された国民革命については、野沢豊編 [1974]、狭間直樹編 [1992] の論文集のほか、栃木利夫・坂野良吉 [1997] がこの革命の国家統合と民主革命・階級闘争という二つの性格を統一的に捉えることを視点を提起して全般的な叙述を行い、坂野 [2004] は「国民の運動」を「国民党の運動」が吸収したとする新たな国民革命論を提起した。個別論文としては、狭間 [1987] が、今日多くの高校世界史教科書にも記載されている孫文の「三大政策」の由来と背景を（孫文自身がこれを唱えることはなかったことを含め）十全な資料的裏付けを以て解明し、三石善吉 [1985][1986][1988] も黄埔軍校の発展を軸に、国共合作成立前後の広州政権の動向を記述した。馬場毅 [2001] は、華北の紅槍会運動を通論している。

日中戦争に関しては、その前史としての国民政府の対日政策を 1931 年から 33 年について検討した鹿錫俊 [2001]、さらに柳条湖事件から盧溝橋事件までの日中関係を華北を舞台に考察した安井三吉 [2003]、盧溝橋事件の背景と具体的状況の解明をめざした同 [1993] がある。戦争期の諸問題については、池田誠編 [1987] が中国ナショナリズムと民主主義を軸に多方面から抗日戦争を分析し、井上清・衛藤藩吉編 [1988] は日中両国の研究者が一同に会した「盧溝橋事件 50 周年日中學術討論会」の論文集として、いまなお有用なものである。また今井駿 [1997] は、蔣介石の抗戦論を「持久戦」と見る再評価を提起した。共産党系の軍事史としては、穴戸寛他 [1989] が八路軍・新四軍史を、三好章 [2003] が新四軍史を扱うが、後者は皖南事変の原因に中共の根拠地拡大政策があったとする重要な指摘を行った。

このほか近年の成果として、日本の侵略を政治的軍事的侵略のみならず、経済的文化的侵略まで含めて考察することを提起する宇野重昭編 [2001]、日本の戦時捕虜についての詳細な研究である菊池一隆 [2003] があり、劉大年・白介夫編 [2002] は、中国の抗日戦争研究の水準を示す通史の翻訳である。なお、抗日戦争後の第二次国共内戦期については、中村元哉 [2004] が、憲政実施と言論の自由問題を分析している。

しかし、国民革命から第一次国共内戦、日中戦争に至る過程の歴史を概観すれば、中国国民党との対抗関係の中で、中国共産党を中心とする運動が「勝利」し、人民共和国を成立せしめたことも事実である。ならば、政治運動や抗戦（抵抗運動）の歴史とともに、共産党史や民衆運動史も、「運動史」を構成するはずであり、またこれらを全く捨象すれば、中国現代史の重要な要素が欠落させることになるのも明らかであろう。すなわち、前述の、「革命」が「中心」であるとの歴史観の克服は、ここまで述べてきたような研究動向——革命史以外の領域の拡大や新たなパラダイムの提示と同時に、革命史研究そのものを深化させ、これを内在的に相対化することによって、果たされねばならない課題である、とも言えるのではないか。

この点での問題性を示したのが、国民革命や抗日戦争の一段階前の、民衆運動——五・四運動についての論争である。すなわち京都大学人文科学研究所は、10年間にわたる共同研究の成果を、狭間直樹 [1982]、藤本博生 [1982]、片岡一忠 [1982] から公刊を始めたが、このうちとくに狭間の研究を、野沢豊が書評で批判、狭間がこれに反批判を加えたことが発端であった。さらに中央大学人文科学研究所編 [1986] が、研究成果の刊行により五・四運動の歴史像の「再検討」を主張し、京都大学側の成果を批判したことから、論争は京大と中央大の二つの研究グループが参加して、1987年7月、中央大学におけるシンポジウム（中央大学人文科学研究所・日本国際政治学会共催）の開催にまで展開したのである。

論争の主要な論点は、京大グループが五・四運動における上海三罷闘争が反帝国主義の性格を持ち、プロレタリアートのストライキがそこで決定的な役割を果たしたことを認めるのに対し、中央大グループは、五・四運動はブルジョア層を主体とする山東利権回収運動の一部とする新しい見解を提起し、その性格は「反日・反安徽派」に限定される、と主張したことであった。五・四運動は「新しい時代の出発点」（狭間）なのか、それともブルジョア民族運動の一部にとどまり、画期性を持たないのか、が論争の軸であった。

京大グループの見解は、必ずしも毛沢東の「新民主主義史観」に固執していたのではなかったが、そのように受けとめられがちであったし、中央大グループの見解は新たな論点の提起に力点がかかり、実証性に問題が数多く見られたことは否定できない。したがって、論争は総じてかみ合わなかった（なお、論争の記録としては、『季刊中国研究』13号と中央大学人文科学研究所編 [1988] が刊行されたが、これらの「記録」性に問題があることについては、狭間直樹 [1992] を参照されたい）。その後、中央大グループの笠原十九司 [1990]、斎藤道彦 [1992] が論点を補強し、京大グル

ープからも小野信爾 [1987]、清水稔 [1992]、江田憲治 [1992]（このほか日本における五・四運動を扱った小野 [2003] がある）などが公刊されたものの、民衆運動史の研究は、これ以後、むしろ後退の道を歩んだかの観がある。このこと背景には、五・四運動論争が明確な論点対立をともなって正面衝突のかたちで議論されたことのほかに、「革命史・民衆運動史を実証的に深め、相対化を試みることこそが、いわゆる「革命中心史観」の克服につながる」との問題意識が、論争の双方の側で共有されなかったことが指摘できるのではないか。

◆共産党史と左翼諸派はどう評価されているか

さらに、このおよそ20年間、「革命中心史観」の元凶のように見なされた中国共産党史の研究状況はどのような位置にあったか。ここで明確にされるべきは、ほぼ20年前から日本のほとんどの中共研究者は、もはや「革命中心」あるいは「中共中心」の立場をとっていないことである。研究者はむしろ、中共史を革命史・運動史の中の一要素と考え、毛沢東の勝利に帰結する歴史叙述を克服しながら、研究の深化をめざしている。同時に、共産党が中華民国の後期、国民党に対する有力な対抗政党であり、人民共和国期には執権政党となった以上、共産党の政治史的解明は、そのすべてが中華民国史における一政党史に還元されるわけでもないし、現代の中国政治の諸問題にまで射程を有するものはずである。ここ数年にあっても、一部の研究書がなおも「革命中心史観」の克服を課題としているのは、これらのことから実はあまり意味のあることではない。

上述の立場からの代表的な成果を挙げれば、党内部の「肅清」に注目して共産党抗争史を活写した福本勝清 [1992]、中国知識人のマルクス主義の受容とコミンテルンの働きかけを通じた、中国共産党の成立過程を第一次史料を通じて精緻なまでに明らかにした石川禎浩 [2001a]、20年代共産党史に独自の議論を立てた緒形康 [1995]、抗日民族統一戦線政策への転換をめぐる（中国共産党中心の）政治史を分析し、王明や張国燾について新たな角度から光をあてた田中仁 [2002] などの著作がある。このほか江田憲治 [1990] は、陳独秀の革命論について再評価を試み、同 [2001] は中共史の中で非難のレッテルとして機能した「都市中心論」がそもそも存在しなかったことを論じ、石川 [2001b] は、中国共産党の農民運動方針の転換に対するコミンテルンの影響を明らかにし、同 [2004] は20年代初めのコミンテルン大会への中国代表問題を考察した。また高橋伸夫 [1997][1998][2000] は、土地革命時期の河南省や湖北省など共産党の地方組織の態様を問題にしている。丸田孝志 [1993] は30年代末からの中共のスパイ摘発運動が、「行き過ぎた闘争」を容認しつつ、毛沢東の権威確立をもたらしたことを指摘する。

また内藤陽介 [1999]、丸田孝志 [1998][2004] は、共産党の支配者の肖像などに関わる「政治文化」をテーマとし、松本ますみ [1999]、王柯 [1995b]、吉田豊子 [1996] は共産党の少数民族政策を問題とした。小山三郎 [1993] は、「文学と政治」という毛沢東が知識人に突き付けたテーマから、共産党の文芸政策を分析し、民国期

から人民共和国期の「批判と粛清の文学史」を論じている。これらも共産党史を「相対化」し、新たな領域を拓いた研究である。

なお、中共中央文献室の編纂にかかる周恩来や毛沢東の伝記の翻訳（金沖及主編 [1992-93]、同主編 [2000]、同主編 [1999-2000]）は、豊富な第一次史料にもとづいた周恩来・毛沢東の伝記であり、これらは現在の共産党の立場からする政治的なバイアスや史実の隠蔽（たとえば、西安事変で当初毛が蒋介石を処分しようとしたこと）など、いくつかの問題があるにせよ、現代史研究に参照は不可欠である。

このほか日本の中国現代史研究者の間では、従来ほとんど顧みられず、左翼の中でも異端視されてきたトロツキストに対する研究も、スターリン＝コミンテルンの中国革命指導の誤謬が明らかにされ、前述のように「毛沢東中心」の中共史観の枠組みが再考される中で、登場してきている。菊池一隆 [1996] は、スターリン＝コミンテルンに反対し、民主主義を希求した中国トロツキー派の運動を辿り、共産主義運動全体から見れば、都市労働者を中心とした彼らの運動を、農村中心の中共と相互補完関係にあったと位置づけ、中国トロツキストの党派史を通論した。また佐々木力 [2002] は、中共除名後、中国トロツキストの指導者となった陳独秀の最晩年の思想を問題にし、鄭超麟 [2003] は、中共初期からの活動家であり、のちにトロツキスト運動に加わった鄭超麟の回想録を翻訳したものである。資料的な吟味は必要だとしても、当事者の貴重な証言を我々に伝えてくれる。

トロツキストと同様に、同じく少数派であったアナキストについては、辛亥革命期から劉師培・李石曾・呉稚暉・劉師復を通論する嵯峨隆 [1994] のほか、劉師培についての嵯峨 [1996]、惲代英のアナキズムがナショナリズムとよく感応するものであったことを指摘する砂山幸雄 [1989]、劉師復の論理と価値観を論じた石川洋 [1993] がある。

(江田憲治)

〈2〉社会経済史

◆中国経済における発展の論理の探求

近現代中国の経済史分野における一つの大きな課題は、どのようにして中国経済の発展の論理を見いだすかということにあった。近代化をリードしたヨーロッパに比べ、アジアには発展が見られなかったという「アジア社会停滞」論を、近現代中国の現実の中から克服していこうとする試みである。コミンテルンや中国共産党の「半植民地半封建社会」論が資本主義化の可能性を否定し革命的な変革による展望を指し示そうとするものだったのに対し、近現代中国にも資本主義的な発展の可能性を見いだそうとする議論は、すでに1930年代に矢内原忠雄 [1937] らによって試みられており、1980年代初めにも奥村哲 [1983]、吉田滋一 [1983] らがそうした方向性を意識し研究史を総括している。

その場合、問われるべきは資本主義的発展の展望である。1970年代までは、いわ

ゆるソ連型社会主義への過渡期として「国家資本主義」段階を想定する中島太一 [1970] のような理論的試みもあった。しかしソ連型社会主義の行き詰まりと解体は、そうした研究の意味をきわめて小さなものに変えてしまった。

一方、後述するような実証研究の成果を踏まえながら、革命前の中国は列強帝国主義と地主・軍閥などの封建的勢力や官僚資本の圧迫の下、「半植民地半封建」社会に陥り没落の過程を歩んでいた、とする従来の経済史理解に対し、久保亨 [1982] [1995]、奥村哲 [2004] 第9章（初出は1990年。また1980年代の氏の著作は同書35頁など参照）によって根本的な批判が提起された。封建制は中国に存在せず、「官僚資本（家）」の実体は国家の経済政策担当者や国営企業であって肯定的役割も果たしたこと、1949年革命後の経済発展の相当な部分は、国家主権を保持し経済的自立をめざした民国期中国の経済発展の成果に負っていること、などが注意されなければならない。

さらに民国期の経済発展に対する再評価は、中国を含む非ヨーロッパ地域における経済発展の論理の解明という新たな課題を浮上させた。A. スミス以来、マルクス主義を含め従来の一般的な経済発展論は近代ヨーロッパ経済史をモデルにしたものであり、そこには世界の大半を占める非ヨーロッパ地域における経済発展の現実が十分に反映されていない。その意味でNIEs（新興工業発展地域）などの形成を手がかりしながら「中進国資本主義」という概念を提起した中村哲 [1991] [2000] の理論化作業は注目に値する。また濱下武志 [1990] は近代アジア市場の形成とアジアの各地域・各国内部の経済活動に内在する歴史的特質に留意し、空間的にも時間的にもいっそう広い視野から考察することを提唱した。その後、商品流通に着目しネットワーク論への展開を試みた杉山伸也・グローブ編 [1999]、実態として存在したアジア間貿易とそれに基づく経済発展に対する考察を深めた杉原薫 [1996]、籠谷直人 [2000]、秋田茂・籠谷編 [2001] などが刊行されている。ただし、どれか一つの方法論だけによって、すべての問題が解決されるはずがない。たとえ東アジア地域史を重視するにしても、国民国家的ないし国民経済的な枠組みを意識した研究を無視することはできないであろう。こうした状況を念頭に置いた国際的な討論の試みとして、横山宏章・久保亨・川島真編 [2002] も注目に値する。いずれにせよ中国という地域も含め、一般に非ヨーロッパ社会における経済発展の論理を探求する作業は、模索の緒に就いた段階にある。

◆20世紀中国経済の発展過程の解明

20世紀中国における近代的国民経済の形成過程を中国経済自体の発展と中国をめぐる国際情勢の関連において照射する試みは、1935年の幣制改革に関する日本史・英米史研究者との共同研究として野沢豊編 [1981] が刊行された頃から本格化した。1983年に名古屋で開催された中国綿業史セミナー——その記録は「中国産業史研究への模索——『中国綿業史セミナー』の開催」（中国綿業史セミナー報告者他 [1984]）参照——以降、80年代から90年代にかけ中国近現代経済史シンポジウムが

開かれるようになり、集中的に討論する機会が設けられたことも研究の活性化を促した。

工業史に即して個別研究をまとめた著書を挙げれば、清末から民国前期までの蚕糸業を論じた曾田三郎 [1994]、同時期の綿紡績企業の命運を究明した中井英基 [1996]、日中経済関係を軸に鉄道と製鉄業をめぐる諸問題を検討した萩原充 [2000]、市場構造の特質という角度から近代中国綿業を分析した森時彦 [2001a]、1920～30年代の蚕糸業を考察した奥村哲 [2004] 第1部、同時期の綿紡績業経営に焦点を合わせた久保亨 [2005] などがあり、戦前の研究成果であるにもかかわらず今なお価値ある紡績労働論の復刻が岡部利良 [1992]。個別論文を若干挙げておくと、綿紡績業に関しては、在華紡が技術移植面で果たした役割を論じた清川雪彦 [1974] [1983]、銀行管理下における大生紡の再建過程を解明した富澤芳亜 [1994]、申新紡が直面した危機を検討した菊池敏夫 [2000] など多くの研究が発表されており、その後の成果に結実する様々な論点を提起した前述の綿業史セミナーの記録は今なお参照に値する。蚕糸業に関しても中国近現代経済史シンポジウム運営委員会編 [1986] が戦前来の研究史を総括し、新たな研究方向を提示するものになった。そのほか電力産業に関しては金丸裕一 [1993]、化学工業に関しては貴志俊彦 [1997]、製粉業に関しては中井英基 [2003] などが、それぞれ興味深い論点を提起している（商業団体に関する研究は後述）。

以上の諸研究は、主に両大戦間期と呼ばれる1920年代から30年代を対象に、中国内外のどのような歴史的条件下、近代産業と近代的な企業経営が成立・発展してきたのか、在来産業ないし伝統的な企業経営形態との間にはどのような関係が成立していたか、そこにどのような限界が存在し、それを克服するためにいかなる努力がなされたか、といった一連の問題をとりあげ、論じたものであった。そうした研究成果を踏まえると、それに続く時代、すなわち日中戦争の展開、1940年代における戦後国民政府の統治の崩壊と人民共和国の成立、1950年代の社会主義化強行という一連の歴史の変動期に、それぞれの産業と企業経営の何が変わり、何が変わらなかったのかという問題が、次の大きな検討課題として浮かび上がってくる。この点は経済政策史研究を整理した後、改めて触れたい。

農業に目を転じると、1930年代の中国農村社会性質論争以来の研究史を批判的に検討した小林弘二編 [1986] [1987] のような作業が進められるとともに、戦前の農村実態調査を新たな視点に基づいて改めて整理し、農業経済と農家経営の実態を考察した多くの研究が蓄積されてきた。とくに農業における資本主義的發展や共同体的作業慣行をめぐるのは、吉田滋一 [1975] [1986]、石田浩 [1986]、内山雅生 [1990] [2003]、奥村哲 [2004] らの間で興味深い論争が続いている。近年の研究として、冀東農村実態調査に基づき相続慣行の土地所有への影響を論じた柳澤和也 [2000]、華中農村における品種改良事業と土布業の発展過程を検討した弁納才一 [2004] の著書、華北農村の土地所有と農家経営に関する三品英憲 [2000] など一連の論文があり、後

述する農村社会に関する諸研究も参照されなければならない。

また通貨金融制度、信用構造などに関しては、前掲野沢豊編 [1981] に加え、国民政府の通貨と日本軍占領地域の通貨、共産党地方政権の通貨が熾烈な勢力争いを繰り広げる過程を描いた岩武照彦 [1990] の大著が刊行された。そのほか、銀行法制定過程の議論を手がかりに商業銀行主義と総合銀行主義の相克を描いた中田昭一 [1998]、国際経済との関連において中国の金融システム再編過程を位置づけた城山智子 [1999]、華北の棉花流通と棉花金融を事例に在来の金融構造が大きく変貌する過程を考察した岡崎清宣 [2001] などが近年発表されているとはいえ、多くの問題が今後の課題として残されている。

1980年代以降、国民政府再評価論とあいまって、中国近現代経済史シンポジウム事務局編 [1989] のような議論を経ながら、国家と経済の関係にかかわる研究が盛んになった。政策決定過程・実施過程を分析しながら経済財政政策が経済発展と財政確立に果たした役割を考察するものが多く、関税自主権の回復過程と関税通貨政策をとりあげた久保亨 [1999]、財政面に重点を置いて関税問題を考察した岡本隆司 [1999]、小瀬一 [1997]、日中両国紡績資本の利害を念頭に置きながら綿糸統税の決定過程を論じた富澤芳亜 [2000]、中央政府・地方政府のそれぞれのレベルにおける財政機構の実態に迫った金子肇 [1989b] [2000]、地方における旧来の徴税システムとそれを改革する試みを考察した姜珍亜 [2003]、国内通行税減免策の産業保護政策的な側面に着目した林原文子 [2000-01] などがある。ある一つの政策が産業振興政策的な意味と財政政策的な意味とを合わせ持っていることが多く、それぞれの兼ね合いをどのように評価するか、論者によって見解が異なっている場合もある。しかし戦間期に成立した国際秩序であるワシントン体制の下、中国政府がある程度の主体性をもって政策を決定していく過程とそれが持った意味を、中国、日本、イギリスなどの文書史料、政府公報類、新聞史料などにに基づき考察するという基本的な立脚点には、ほぼ共通するものがあつた。一方、農業生産の振興を図る政策に関しては、棉花・蚕種の改良普及や農業協同組合の組織化など民国期の農業政策の意義と農業経済の発展をある程度評価する飯塚靖 [1986]、同 [2001]、弁納才一 [2003] などがあり、広く農村社会全般に対する政策としては、土地政策・食糧調達政策などを軸に農村社会に対する国家の関わり方を考察した笹川裕史 [2002] [2004]、戦時の食糧徴発が直面した困難とそれが農村社会に及ぼした影響を論じた天野祐子 [2004]、戦後国民政府による全国的な土地改革の試みを明らかにした山本真 [2001] などの研究が注目される。また交通政策についても、汽船業政策を検討した泉谷陽子 [1997]、戦時の航空産業政策を検討した萩原充 [2004] などが発表された。

政策の策定実施の鍵を握った官僚層については、全国経済委員会、資源委員会などの経済行政機関と技術官僚（テクノクラート）の役割を解明した川井悟 [1982]、石川禎浩 [1991]、土地行政に関わった官僚層を整理した山本真 [1998] などの論稿があるとはいえ、研究成果はまだそれほど多くない。いずれにせよある一つの経済政策

が決定され、実施されるまでには、様々な政策意図が交錯しており、その背後には、当然異なった政策主体が存在し、様々に入り組んだ利害関係が作用していた。それらの対立、妥協、協調等々の関係の総合として一つの政策が確定し、実施されていく過程を明らかにする作業は、当該時期の政治・社会・経済構造を総合的に認識する作業にならざるを得ない。また同時に、ある一つの経済政策が実施されていくなれば、それが本来の社会経済構造に対して反作用し、多かれ少なかれ何らかの影響を与え、新たな経済政策を求める動きが惹起されていくという側面にも注意する必要がある。こうしたプロセスは単線的なものではありえず、常に幾つもの政策決定過程と実施過程とが錯綜しており、事態の展開は複雑な様相を呈すことになる。以上のような問題に関する総括的な議論の場になったワークショップ“1930～1940年代中国の政策過程”事務局編〔2004〕の報告と討論の記録が参照されるべきである。

日中戦争が始まる頃から第二次世界大戦期にかけ、経済政策の性格に大きな変化が生じた。重慶国民政府統治地域でも、東北を含む日本軍占領地域でも、戦時体制を支えるための統制計画経済が追求されるようになったからである。そして戦後になると、一方においては、戦時期に試みられた統制計画経済とその下で可能になった経済発展を戦後も継承していこうとした動きがあり、他方においては、戦後アメリカが主導した自由貿易主義的な国際経済秩序の下、それに適応的な開放経済政策を追求しようとする動きも見られた。この点をめぐっては、戦後国民政府期に旧日本資本在華紡を接収して成立した巨大な国営企業、中国紡織建設公司に関する川井伸一〔1987〕〔2001〕の研究、汽船業に関する泉谷陽子〔2000〕の研究などが新たな視角から戦後国民政府期から人民共和国成立期にかけての連続と非連続を論じており、姫田光義編著〔2001〕と石島紀之・久保亨編〔2004〕に収録されたその他の社会経済史関係の論稿とともに、問題を考える手がかりを提供している。

一方、対外経済関係については、列強との関係がしばしば帝国主義的抑圧を伴ったことから、1970年代まではそれを一律に否定的に評価する傾向が強く、世界史的条件や国際的要因を民族主義的見地から故意に軽視する傾向、あるいはまたそれらを「外在的要因」として、中国経済内部の「内在的要因」より副次的なものとなす傾向も存在していた。清川雪彦〔1974〕〔1983〕、中井英基〔1998-99〕、本野英一〔2004〕、久保亨〔2005〕のような研究が試みられてきたとはいえ、近現代中国経済の発展過程において対外貿易・外国資本・華僑資本などが果たした役割を客観的に考察する作業はまだ十分進んでいない。なお日本経済史の側から日中経済関係を探求した研究は、すでに1970年代から存在しており、浅田喬二編〔1981〕、高村直助〔1982〕、中村隆英〔1983〕、国家資本輸出研究会編〔1986〕、中村政則・高村直助・小林英夫編〔1994〕、大江志乃夫他編〔1992-93〕、山本有造編〔1993〕、柳沢遊〔1999〕など、貴重な実証作業が蓄積されてきた。ただしこうした研究は日本帝国主義史の一部に位置付けられる傾向が強く、中国経済史の一部でもあるという側面にはあまり注意が払われていない。その点、東北の経験をどこまで一般化できるかという懸念が残るとはい

え、日本の植民地時代の生産設備が人民共和国に継承されていく過程を検討した松本俊郎〔2000〕は貴重。戦時華北経済についても范力〔2002〕、内田知行〔2005〕などの研究が出されるようになった。また中国経済史の視線を意識した日本人商工会議所論として飯島渉〔1997〕、塚瀬進〔1997〕、日本による戦時中国経済調査の検討として本庄比佐子・内山雅生・久保亨編〔2002〕がある。

1950年代以降の中国経済に関しては同時代の現状分析的な研究が中心になっており、歴史研究という角度から見て今なお意味のある研究成果となると、必ずしもそれほど多くなかった。そうした中、資本蓄積メカニズムの分析を通じて重工業偏重の実態を解明した石川滋〔1960〕、独自に収集した統計的データをもとに工業発展の地域構造を論じた尾上悦三〔1970〕、アジア経済研究所を拠点とした共同研究の成果として中国資本蓄積研究会〔1976〕などが注目される。また中国社会主义自体に存在した問題を全面的に解明した上原一慶〔1978〕、小杉修二〔1988〕、総力戦態勢としての中国社会主义論を展開した奥村哲〔2004〕第3部などは、いずれも歴史的アプローチを採用した重要な成果。1950年代以降、人民共和国が採用した内陸地域の軍需工業化戦略である「三線建設」については、内陸地域経済の振興という観点からその意義をある程度評価しようとする呉曉林〔2002〕に対し、丸川知雄〔1993〕〔2002〕が、経済的非効率をはじめとする「三線建設」の問題点を厳しく批判している。一方、1980～90年代になると、日本経済研究者によっても、小宮隆太郎〔1989〕、南亮進〔1990〕などの意欲的な中国現代経済史論が書かれるようになった。

各分野における研究の到達点を知るためには、統計資料と文献を網羅的に整理した講義用テキスト久保亨〔1995〕や金丸裕一〔1995〕、弁納オー〔1995〕による研究史整理を参照することもできる。また経済統計の不備を克服すべく、民国期中国の長期経済統計を編纂する作業も一橋大学経済研究所〔2000〕のような形で進展している。

◆中国社会の構造的把握

経済発展の過程よりも社会の在り方を説明することに力を注いだ村松祐次〔1949〕の研究には、近代ヨーロッパ社会との対比によって他の地域社会の特質を明らかにしようとするウェーバー的な志向が色濃く反映されていた。このように近代ヨーロッパを基準に置く発想に対しては批判が強まっているとはいえ、中国社会の特質を構造的に把握しようとする試み自体は貴重なものであったし、そうした企図を受け継いだ研究として、近年勃興した社会史的な関心に基づく研究が注目される。一連の社会史的研究の基調には、吉澤誠一郎〔2003〕の研究史整理が示すとおり、政治・経済を含む長期的総合的な視野の中で中国における「近代（性）」そのものを問い直すという志向が存在する。代表的な研究として、衛生の政治化・「制度」化をキーワードに帝国主義的・民族主義的といった区別を相対化し、近代中国における衛生行政の成立過程を論じた飯島渉〔2000〕、慈善団体・防火組織など民間の活動と国家の関わりに着目しながら近代都市上海における公共空間の創出を指摘した小浜正子〔2000〕、天津の治安維持制度や社会福祉制度を例に中国近代の価値観・社会管理・社会統合を考察

した吉澤誠一郎 [2002], 上海における女性の誘拐と救済活動を例にその社会的地位を検討した岩間一弘 [2001], 国際連盟との関係で衛生を論じた福士由紀 [2004] などをあげることができる。また経済史研究とも関わりあいながら進展した商会, 同業団体の研究に金子肇 [1997b], 陳来幸 [2001], 川原勝彦 [2003] などがある。社会史に含まれる研究領域の幅は相当広く考えておく必要がある。歴史学者たちが進めた現代中国の農村調査は, 三谷孝編 [1993][1999-2000] などに示されるとおり農村社会の長期的な変遷を検討するための豊富な材料を提供した。また国民政府の農業政策という面からすでに言及した笹川裕史 [2002], 天野祐子 [2004] らの研究は, 一つの中国社会論としても注目される。

社会史の一部にとどまる内容ではないが, 政治思想史研究を扱った前項では触れられなかったため, ここで女性史研究に関する文献を挙げておくと, その最新の入門書として関西中国女性史研究会編 [2005], 近現代中国女性史の概説書として中国女性史研究会編 [2004], 中国女性史に関する研究論文集として中国女性史研究会編 [1999] が挙げられる。労働者の歴史については, かつて中国労働運動史研究会編 [1977-86] に掲載された諸論稿が手がかりを与えているとはいえ, 今後に残された課題が大きい。

教育史については阿部洋 [1990], 同編 [1983], 小林善文 [2002] などのような教育制度史, もしくは教育思想史にかかわる研究が進められてきており, そうした成果を手がかりに, 今後は, 高田幸男 [2001][2004] のように教育活動と教育内容の実態を解明する作業, あるいは岩間一弘 [2003] のように近代教育によって生み出された新たな社会層の特質を探る作業も重要な課題になるに違いない。文化史に関わる近年の研究成果としては, 近代における西洋音楽の普及過程を検討している榎本泰子 [1998], 映画界の動向を歴史学の立場から把握しようと試みている張新民 [1994], ラジオ放送の役割の総合的考察を進めている貴志俊彦 [2003] などの仕事が注目される。民国期の社会変動を視野にいたした文学史研究の一端は藤井省三・大木康 [1997] を, また民国期の上海映画の歴史については佐藤忠男・刈間文俊 [1985] 参照。

さらに地域史研究の存在を指摘しておかなければならない。横山英・曾田三郎編 [1992] など清末～民国期における地方自立化の歩みを丹念な史料探索によって追究した広島大学を中心とする研究グループの成果は, その筆頭に位置している。民国期に地方では地元の開明的郷紳層, 知識人, 新興商工業者らの支持のもと社会経済全般の近代化政策が推し進められた。清末の立憲運動や辛亥革命, 民国前期の省自治運動などはいずれも地方から起こされ, 中央-地方の関係を大きく変動させるとともに, 地方をいかに新たな国民国家に統合していくかという課題を提起した。前掲書はこうした問題に焦点をあて, 湖南・江蘇・浙江・上海・天津などにおける産業行政, 土地政策, 地方自治を考察している。

また上海, 天津など特定の都市もしくは地域を対象とする専門的な地域史研究会が誕生したことも, この20年ほどの間に見られた顕著な動きであって, 最近, 長年の

共同研究の成果をまとめた天津地域史研究会 [1999], 日本上海史研究会 [2000] などが刊行された。その他, 東北地域に関しては日本植民地史研究者や朝鮮近代史研究者と協力した東北アジア地域史研究会が活動を続けており, 華南や江南地域についても研究会が存在している。

◆おわりに

冒頭に「研究の視点」で述べた20～21世紀の中国史を統一的に捉えようとする問題関心は, 以上に紹介した様々な分野の研究成果の中に多かれ少なかれ見てとることができるし, それを鮮明に意識した大型の共同研究として「現代中国の構造変動」(1996～98年度科研費交付)が実施され, 全8冊のシリーズの中の1冊として西村成雄編 [2000] も刊行されている。日本国内だけではない。本章では国内で発表された研究しか触れられなかったが, 中国で開催された中国史学会・中国社会科学院近代史研究所主催「1949年の中国」シンポジウム(1999.12.30～2000.1.3, その記録は徐秀麗 [2000]), 台湾で開催された中国近代史学会主催「1949年:中国關鍵年代」シンポジウム(1999.12.9～12.10), アメリカで刊行されたCheek and Saich [1997]などは, いずれも各地における研究状況を踏まえ, 1949年における連続と非連続を問い直すものであった。こうした内外の研究成果に基づき, 冒頭で触れた四半世紀前の野沢豊・田中正俊編 [1978]とは自ずから異なった地平において, 新たな総合をめざすことが求められている。(久保 亨)

3 史料の解説

膨大な量の史料類が刊行されたり, あるいはインターネット上に公開されるようになり, 中国近現代史研究をめぐる史料状況は大きく転換した。卒業論文を書くため史料を集めようとするような時の便利な案内として, 飯島渉「卒業論文とインターネット」, 高田幸男「卒論で図書館・文書館を使いこなす」らの諸論稿(田中比呂志・飯島渉編『中国近現代史研究のスタンダード』研文出版, 2005年所収)が参考になる。

中国近現代史分野の場合, 日本語で読むことのできる史料集はあまり多くない。絶版の本とはいえ横山英が編集翻訳した史料集『中国近代史 ドキュメンタリー』(亜紀書房, 1973年), 憲政関係に限定された史料集とはいえ六四中国近現代史研究者声明有志連絡会編の『中国-民主と自由の軌跡』(青木書店, 1989年)などは, 今なお貴重な存在といえよう。日中関係史に限定すれば, 日本の外務省が編集している『日本外交年表並主要文書』(原書房, 初版1955年)と『日本外交文書』(1938年～)の膨大なシリーズの中に中国近現代史関係の史料が多数含まれており, みずず書房が刊行した『現代史資料』(1962～80年), 『続・現代史資料』(1982～96年)にも満洲事変, 日中戦争関係の巻などに中国近現代史に関する多くの史料を見いだすことができる。また日本語に訳された良質の文献史料集として日本国際問題研究所中国部会が翻

訳編集した『中国共産党史資料集』全12巻(勁草書房, 1970~75年)と『新中国資料集成』全5巻(日本国際問題研究所, 1963~71年)があり、人民共和国期の様々な分野にわたる史料類を簡潔にまとめ、日本語に翻訳して紹介しているのが毛里和子他編『原典 中国現代史』全9冊(岩波書店, 1994~96年)である。しかし以上に列挙したような日本語に翻訳された史料集だけに頼っているのは、量的にも質的にも限界があり、近現代史研究に取り組むためには、やはり中国語の原史料に当たらなければならぬ。

民国期の中国語文書史料を収録した代表的な史料集には、次のようなものがある。まず台湾においては、民国前期の最も有力な革命政党であって、民国後期には執権政党となった中国国民党自身が、党史館に所蔵されている政策文書、会議報告、党内指示などを適宜まとめ、1953年以来現在に至るまで、百数十冊に及ぶ大部の史料集『革命文獻』(中央文物供給社, 1953年~)の発行を継続してきた。民国史研究にとって最も基礎的な文書史料集の一つといえよう。また現在は国史館に所蔵されている南京国民政府の重要政策文書を主題別に整理した『中華民国重要史料初編: 対日抗戦時期』全26冊(ただし戦後も含まれる。中国国民党中央委員会党史委員会, 1981~88年)、並びに中央研究院近代史研究所が保管する清末~民国前期の日中関係・中ソ関係等にかかわる外交文書をやはり主題別に整理した『中国近代史資料彙編』(中央研究院近代史研究所, 1957年~)シリーズの2種類の史料集も、関連テーマを研究するには必見の史料集である。

それに対し大陸においては、後述するような、いわゆる「革命史」に関する事件別、ないし分野別の史料集は別として、民国期の政治と経済に関する系統的網羅的な史料集の公刊は遅れていた。正確に言えば、すでに1950年代からその準備作業自体は始まっており、暫定的な形の史料集もまとめられ、中国国内の一部の研究者に対しては提供されていた。しかしそうした文献整理作業の成果が、内外の研究者に広く公開されることはなかったのである。結局、第二歴史檔案館所蔵史料の本格的な整理公開作業は1970年代末から再開されることになり、その主な成果として、中華民国北京政府、南京国民政府など各時期の政府文書史料を、政治・外交・軍事・財政経済・教育・文化などの分野別に整理した『中華民国史檔案資料彙編』全5輯(江蘇古籍出版社, 1979~2000年)が公刊された。中華民国北京政府期を収録した第3輯, 1927~37年の南京国民政府期を収録した第5輯第1編, 戦時の重慶国民政府期を収録した第5輯第2編, 戦後国民政府期を収録した第5輯第3編などは、それぞれが20冊前後に達する膨大な史料集である。台湾で編集公刊された史料集類にすでに掲載されている史料も含まれるとはいえ、時期とテーマによっては、行政機関内部の会議記録や下級行政機関が作成した報告書類など、きわめて具体的な状況を記した史料が収録されており貴重。その半面、史料の系統性に対する配慮が不足していたり、政策決定過程における重要な文書が欠けているなど、使いにくい部分が多いことは否定できない。

辛亥革命, 五・四運動, 五・三〇運動, 労働運動, 抗日民族統一戦線, 抗日根拠地など、いわゆる「革命史」叙述のテーマに即した史料集は、とくに大陸において1980年代に数多く刊行された。同様のテーマを掲げた地域ごとの史料集も枚挙に暇がない。こうした史料集類は、それぞれの革命運動を顕彰するという特定の意図の下に編纂されたものだけに、その点に注意を払って利用していく必要がある。しかし慎重に用いるならば、独自の視角から歴史研究に生かすことが可能な史料も少なくない。

そのほか民国期の法令類や政府部内における会議の記録は、各政府機関別に発行された『政府公報』、『国民政府公報』、『行政院公報』、『立法院公報』、『財政公報』、『実業公報』などの公報類に掲載されている。当時公表されなかった部分もあるとはいえ、基本的にはかなりの部分まで政府各機関の活動を追うことができる。公報類の主要なものについては、マイクロフィルムやリプリント版が制作されたため、比較的容易に閲覧できるようになった。また孫文(中国社会科学院近代史研究所民国史研究室他編『孫中山全集』全11冊, 中華書局, 1981~86年)、蒋介石(『蔣總統集』全3冊, 国防研究院, 1965~68年, 第1, 2冊, 初版1960年)、汪精衛を始めとする重要な政治指導者たちの全集、著作集等が大きな意味を持つことは言うまでもない。

人民共和国期の文書史料集としては、結成以来の中国共産党の文書を中央檔案館がまとめた『中共中央文件選集』全18冊(中共中央党校出版社, 1989~92年)と、中共中央文献研究室が編集した共産党と人民共和国政府関係の文書をまとめた『建国以来重要文獻選編』全20冊(中央文献出版社, 1992~97年)が刊行されている。ただし民国期の史料情況に比べると、政府全体の活動規模が拡大したのに対し公表されている史料類はまだ格段に少ない。そのため毛沢東(『毛沢東選集』全5冊, 人民出版社, 1940年代~77年。『建国以来毛沢東文稿』全13冊, 中央文献出版社, 1987~98年)、周恩来(『周恩来選集』全2冊, 人民出版社, 1980~84年)、劉少奇(『劉少奇選集』全2冊, 人民出版社, 1981~85年)、陳雲(『陳雲文選』全3冊, 人民出版社, 1984~86年)ら政治指導者の著作集の分析が、民国期の場合よりも、いっそう重視されざるを得ない状況にある。

民国期になると中国では大量の新聞や雑誌が発行されるようになり、歴史研究のための史料として使用できる情報量も激増した。代表的な大新聞である『申報』(上海, 1872~1949年)、『新聞報』(上海, 1893~1949年)、『大公報』(天津他, 1902~49年)、国民党系の『中央日報』(南京他, 1928~49年)と『民国日報』(上海, 広州他, 1916~47年)、共産党系の『解放日報』(延安他, 1941~47年)、権威ある政治外交評論誌であった『東方雜誌』(上海, 1904~48年)と『国聞週報』(天津, 1924~38年)、新文化運動期に若者の心を捉えた『新青年』(上海, 1915~22年)、国民革命期の共産党機関誌『嚮導』(広州他, 1922~27年)、抗日戦争期から戦後にかけて共産党の見解を報じた『群衆』(上海, 漢口, 香港他, 1937~49年)、戦後の代表的な知識人向け政治評論誌『觀察』(上海他, 1946~50年)、最も普及した教育界の専門誌『教育雜誌』(上海, 1909~48年)、30年以上も発行が継続された経済誌『銀行週報』

(上海、1917～50年)などは、いずれも全部もしくはその重要な部分についてマイクロフィルムやプリント版が制作されており、中国関係の専門的な研究機関には備えられている。『東方雑誌』、『国聞週報』、『新青年』、『銀行週報』などについては記事目録が作成されており利用しやすい。以上に紹介した新聞雑誌類は全国、ないし上海のような大都市の動きを追う場合に重要な存在であるが、各地域の具体的な歴史過程を解明するためには、内陸の山西省の動きは『山西日報』で、同じ内陸でも四川省成都の動きは『新新新聞』で、四川省重慶の動きは『商務日報』で、といった具合に、それぞれの地域で発行されていた地方紙を見る必要も出てくる。こうした地方紙は日本国内の研究機関に所蔵されている場合が少ないので、中国からマイクロフィルムで購入し利用することになる。また問題によっては、上海で発行されていた英字紙 *North China Herald* (在華イギリス人経営)、*China Weekly Review* (在華アメリカ人経営)にも注意を払わなければならない。外国側の利害を反映した主張が表明されているだけではなく、時期によっては中国側の新聞雑誌には報じられていない情報を見つけることもできるからである。上記2紙は日本でも比較的利用しやすい。20世紀前半の中国では『上海日報』、『上海日日新聞』、『上海日本商工会議所週報』、『青島日本商業会議所月報』のような日本語の新聞雑誌類、年鑑類も数多く刊行されていた。残念ながら保存状況が悪く完全にそろった形で所蔵されているものは少ないとはいえ、情報量はきわめて豊富である。

以上に挙げたような新聞・雑誌に掲載された様々な情報が、近現代史研究を進めるための史料の宝庫であることは疑いない。ただし情報の質という点については、そもそも報道記事が事実に基づくものであるのか否か、評論記事がどのような立場を反映しているものなのか、などを含め、細心の注意を払う必要がある。

その他の重要な史料類として日記、書簡集、回想録等の類に触れておかなければならない。実は複雑な政治変動が継起したという事情も影響し、中国近現代史研究にとって意義のあるものとなると、それほどたくさんあるわけではない。とはいえ、やはり日記、書簡集、回想録類は、きわめて貴重な内部情報が得られるという点において、何ものにも代え難い意味を持つ場合がある。蒋介石の日記は、やや恣意的に選択された一部がサンケイ新聞社編『蒋介石秘録』全15冊(サンケイ新聞社出版局、第10巻以降、サンケイ出版、1975～77年)という形で日本でも翻訳されていたが、近年、台湾の国史館でかなりの部分を閲覧できるようになった。公刊された日記としては、周仏海(汪精衛対日協力政権の高官も務めた人物。蔡徳金編注『周仏海日記全編』中国文聯出版社、2003年)、王世杰(国民政府の外交部長などを歴任。『王世杰日記』全10冊、中央研究院近代史研究所、1990年)、邵元冲(国民党宣伝部、国民政府監察院などの要職を歴任。『邵元冲日記』上海人民出版社、1990年)、唐縦(蒋介石の側近の軍人。公安部檔案館編注『在蒋介石身边八年：侍從室高級幕僚唐縦日記』群衆出版社、1991年)、王子杜(国民党中央のベテラン党官僚。『王子杜日記』全10冊、中央研究院近代史研究所、2001年)、張公権(中国銀行経営者、政府要職も歴任。日

記からの引用が多い年譜として姚崧齡編著『張公権先生年譜初稿』全2冊、伝記文学出版社、1982年)、陳光甫(上海商業儲蓄銀行経営者。邢建榕、李培徳、上海市檔案館編『陳光甫日記』上海書店出版社、2002年)などが興味深い内容を伝えている。書簡集、回想録の類は枚挙に暇がない。ただし人民共和国期に入ると、公刊されている日記は少なく、薄一波の回想録(『若干重大決策与事件的回顧』修訂本、全2冊、人民出版社、1997年)などがしばしば参照されるにとどまる。なお中国の檔案館も実は日記や書簡などの個人史料を保有しているところが多い。しかし現在のところ、プライバシー保護を理由として、ほとんどが原則非公開になっている。その点、量はそれほど多くないとはいえ、アメリカのスタンフォード大学フーパー研究所が保管する宋子文文書、張公権文書等、同じくハーバード大学のイェンチン(燕京)研究所が保管する胡漢民文書、同じくコロンビア大学が保管する顧維鈞らの口述記録は、基本的に一般の研究者が自由に閲覧できるシステムになっており、きわめて貴重な存在だといえよう。中国に関わりを持った日本ないし欧米の外交官、軍人、実業家、学者などの回想録類の中にも、史料的価値が高いものが含まれている。

経済史関係に目を転じると、貿易統計はもちろん多方面におよぶ経済事情が記された各年の海關報告、中国並びに日本をはじめとする各国の調査機関が作成した経済実態調査報告、生産・物価・金融等々に関する統計史料、各種の経済関係雑誌記事、全国各地の地方志の叙述など、様々な材料が経済史研究のための史料に用いられてきた。また、そうした史料を総合的に編纂する試みとして、1950年代から60年代にかけて中国社会科学院経済研究所、上海社会科学院経済研究所などが中心になって進めた史料収集整理事業が大きな峰を形作っていた。基本的な統計史料を集めた戴中平らの『中国近代経済史統計資料選輯』(科学出版社、1955年)、工業関係の記述史料・統計史料を整理した陳真らの『中国近代工業史資料』全6冊(生活・読書・新知三聯書店、1957～61年)、書名は同じだが清末民国初期に重点を置いた孫毓棠編『中国近代工業史資料』全4冊(科学出版社、1957年)、農業関係の資料を集めた李文治・章有義編『中国近代農業史資料』全3冊(生活・読書・新知三聯書店、1957年)、手工業関係の資料を集めた彭沢益編『中国近代手工業史資料』全4冊(生活・読書・新知三聯書店、1957年)をはじめとして、鉄道関係・汽船業関係・貿易関係など産業分野別に大部の史料集が編集刊行されるとともに、申新紡績、啓新セメント、大中華マッチ、綿布販売業などの経営史料を企業別ないし業種別に整理する作業も進められた。こうした企業別・業種別の史料集編纂作業は、その一部が文革前に刊行され、編纂途中であった大部分の成果は、文革期中断を経た後、1970年代末から90年代にかけて出版されることになった。中国人民銀行総行参事室が編集した『中華民国貨幣史資料』全2冊(上海人民出版社、1986、91年)はその一つ。1980年代以降、台湾の国史館からも卓遵宏編『抗戰前十年貨幣史資料』全3冊(国史館、1985～88年)、侯坤宏編『糧政史料』全6冊(国史館、1988～92年)、薛月順編『資源委員会檔案資料彙編——電業部分』(国史館、1992年)などの史料集が相次いで出版されるようになった。

こうした史料集が経済史研究に多大の便宜をもたらしたことはいうまでもない。ただし文書館等に赴き一次史料を自ら確認する作業を怠り、史料集だけに依拠して研究を進めていった場合、史料集編纂者の意図や問題意識を相対化することが困難になる場合もあることに留意すべきであろう。なお『中外経済周刊』（経済行政機関の発行）、『経済半月刊』（同）、『工商半月刊』（同）、『国際貿易導報』（同）、『中行月刊』（中国銀行の経済調査部門発行）、『銀行週報』（上海銀行公会発行）など民国期の主な経済関係雑誌については、濱下武志・久保亨他編『中国経済関係雑誌記事総目録』（1）～（5）（東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター、1983～89年）の解題と記事目録を参照することができる。経済史関係の各種統計類、産業別・企業別史料集については久保亨『中国経済100年のあゆみ——統計資料で見る中国近現代経済史』第二版（創研出版、1995年）、『20世紀中国の企業経営に関する歴史的研究』（科研報告書、信州大学人文学部、1997年）の文献目録参照。

教育史関係では、清末～民国期の教育関係法令・制度等に関する史料をまとめた舒新城編の『中国近代教育史資料』全3冊（人民教育出版社、1961年）、近年の史料整理の成果として、普通教育、実業教育など分野別に史料をまとめた李桂林他『中国近代教育史資料彙編（普通教育）』（上海教育出版社、1995年）、琚鑫圭他『中国近代教育史資料彙編（実業教育、師範教育）』（上海教育出版社、1994年）、同様の中国語史料を人民共和国期までを対象に収集整理した多賀秋五郎編の『近代中国教育史資料』全5冊（日本学術振興会、1972～76年）などがあり、前述した『教育雑誌』掲載記事や文書館史料と照合せながら研究を進めることが可能になっている。

近年における中国近現代史研究の進展は、様々な文書史料の緻密な検討によって支えられてきた。今や日本人も含め内外の多くの研究者が、中国各地の文書館を訪れるようになってきている。大陸において中央政府が管轄する文書館として、主に明清期の文書史料を整理公開している第一歴史檔案館（北京）、それに続く中華民国期（1912～49年）の文書史料を整理公開している第二歴史檔案館（南京）、そして人民共和国期の政府党関係文書と中国共産党を中心とするいわゆる「革命史」にかかわる文書を所蔵する中央檔案館（北京、ただし2004年の時点では非公開）などがあり、そのほか外交部が近年独自に開設した文書館の存在も知られるようになった。ただし後述するように1949年に台湾へ移った国民政府自身が相当量の重要文書を携えていったので、とくに民国期の文書史料を精査するためには、南京と台北の両地を訪ねなければならない。

中国の地域的な広がりとその多様性から容易に推察されるとおり、各地の地方政府関係の文書にも価値あるものが多く含まれている。中国全土には2000を超える数の省・市・県レベルの文書館が設立されており、それぞれ関連する文書を保存し閲覧に供している。中でも上海市檔案館の公開性と閲覧者に対して提供されている便宜は特筆に値する。なお土地登記、都市計画等に関する膨大な文書群は、各地の城建（都市建設の略称）檔案館と称される独自の文書館に収蔵されるようになった。

台湾には国史館（新店）、党史館（台北）、中央研究院近代史研究所附設檔案館（同）、故宮博物院（同）などがあり、文書史料の探索にとってきわめて重要な場になっている。1949年、国民の支持を失い、共産党を主力とする反政府勢力の攻勢によって大陸を追われた国民政府は、自らの統治の正統性を保持する根拠としての意味も込め、相当量の伝統的文化財、歴史的な文書史料、大陸統治に欠かせない重要文書類などを自ら携えて台湾に移動してきた。むしろ台湾内外の政治変動にともない、それぞれが本来持っていた意味あいが大きく変わってきている。現在、中央政府関係の文書は、主に台北郊外の新店市にある国史館に所蔵されており、1990年代には蒋介石関係の機密文書も同館にまとめて移管された。また南京に首都が置かれた1928年以来、長期にわたり執権政党であった中国国民党の文書館が党史館であり、清末から民国期にかけての質の高い外交文書コレクションと経済部関係文書などは、様々な経緯を経て中央研究院近代史研究所附設檔案館に保管されている。なお台湾における清代の文書の保管場所は故宮博物院である。同院は、元来、北京にある同名の博物館が所蔵していた文化財を保管展示するための施設として設立された。

以上に紹介した各地の文書館に関する最新の専門的な紹介として中村元哉「国民党政権研究のための文書館・図書館案内」（中央大学人文科学研究所編『民国後期中国国民党政権の研究』中央大学出版部、2005年所収）がある。

これまで挙げてきたのは基本的に中国語で書かれた史料類であった。実は中国近現代史研究の場合、もう一つの重要な情報源は外国語、とくに日本語で書かれた調査報告書類である。戦前の日本にとって中国は最大の在外権益を有する地域だったため、満鉄（南満洲鉄道株式会社）調査部、台湾銀行総務部調査課、青島守備軍民政部、東亜研究所、興亜院などによって、きわめて多くの調査が実施されていた。戦前期から戦時期にかけ、日本の中国調査機関が作成した報告書類は、経済関係を中心に政治、社会、文化方面も含め膨大な量に達する。アジア経済研究所図書資料部の井村哲郎らが編集した刊行物目録（『旧植民地関係機関刊行物総合目録——台湾編』アジア経済研究所、1973年、『旧植民地関係機関刊行物総合目録——満洲国・関東州編』同、1975年、『旧植民地関係機関刊行物総合目録——南満洲鉄道株式会社編』同、1979年）はそうした調査報告を活用するための貴重な手引きになるはずであり、戦時下の中国に関しては本庄比佐子らによる興亜院の刊行物目録とその調査活動に関する検討（『興亜院と戦時中国調査』岩波書店、2002年）も参考になる。なお満鉄調査部は上海や天津にも事務所を設けており、調査対象地域も満洲（中国東北地域）に限定されていたわけではない。同様に台湾銀行総務部調査課の調査活動は台湾だけではなく、華南地方から東南アジア一帯を広くカバーしていた。日本側調査機関による中国実態調査は、多くの場合、たんなる学術的関心から発したものではなく、日本の利権の維持拡大や侵略戦争の遂行に役立つことを意識して実施されたものであって、調査内容にも様々な偏りが生じている。にもかかわらず多岐にわたるその調査報告書類はきわめて具体的な情報を含み、中国側史料にも見られぬ価値を持っている場合が少なくない。

い。したがって様々な偏りに十分注意しつつ、積極的に活用していく必要がある。

中国語、日本語以外の外国語史料の存在も当然意識しなければならない。近現代の中国は、貿易投資関係、教育文化関係を含む複雑な国際関係の中で発展してきたからである。中国をめぐる対外関係についてはもちろんのこと、中国国内の状況についても各国語の史料、とくに各国の文書史料を比較対照しながら検討する作業が求められるわけであり、日本の外交史料館、防衛庁防衛研究所図書館、国立公文書館、イギリスの Public Record Office、アメリカの National Archives、さらには欧米の会社やキリスト教布教団体などが所蔵する膨大な量の中国関係文書も、視野に入れなければならない。なお日本の中国関係文書史料の一部は、アジア歴史資料センターのウェブ・サイトで閲覧することも可能。

もう一つ補足しておかなければならないことがある。以上に述べてきたのは、編集刊行された史料集、報告書等である場合も、文書館に保管されている原文書の場合も、すべて文字になって残された史料であった。実際には、とくに近現代史研究の場合、文字に書かれた以外の資料、すなわち音声記録、絵画、写真、映画、ビデオ等の様々な資料の利用が可能である。まだ研究成果は少ないとはいえ、すでにマスコミ研究、広告研究など一部の分野において、そうした方向に向けた模索が始まっている。

以上に紹介してきた史料関係の情報を整理した日本語文献として、人物、地名等に関する調べ方を含め、今も価値ある内容を多く含んでいるのが市古宙三他編『近代中国研究入門』（東京大学出版会、1974年）、史料公開が大幅に進展した1970年代末～90年代初めの状況を反映した史料案内として小島晋治他編『近代中国研究案内』（岩波書店、1993年）と野村浩一他編『岩波講座現代中国 別巻2 現代中国研究案内』（岩波書店、1990年）、最新の手引きとして田中比呂志・飯島渉編『中国近現代史研究のスタンダード』（研文出版、2005年）を挙げておく。そのほか、野沢豊編『アジアの変革』上・下（校倉書房、1978、80年）、島田虔次他『アジア歴史研究入門』全5巻（同朋舎出版、1983～84年）、辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門』（汲古書院、1992年）、山根幸夫編『中国史研究入門』上・下（山川出版社、1983年）、『近代日中関係史研究入門』（研文出版、1992年）などにも、それぞれ史料に関して示唆に富んだ指摘がある。とはいえ、やはり最新の情報となると、飯島渉論文（田中比呂志・飯島渉編『中国近現代史研究のスタンダード』研文出版、2005年所収）で紹介されているウェブサイトから入手することになる。ただしその情報の質については、本章の叙述中で注意を喚起した諸点や既刊の史料案内書の指摘に留意しつつ——時にはウェブサイトの情報が最新のものではないこともある——、慎重かつていねいに吟味しなければならない。

中国近現代史研究のための史料は数限りなく存在する。個々の研究テーマに即して意味ある史料を探しだし、選び出す作業が求められるのであり、以上の紹介はそのための手がかりを示したものに過ぎない。文献データベース上におけるキーワード検索のような網羅的方法と、先行研究に挙げられている文献を当たる「芋づる」式の方法

とを組みあわせ、史料探索の努力を続けていくなれば、必ず有意義な史料を見いだせるに違いない。

（久保 亨）

第12章

世界のなかでの中国史

杉山正明・岡本隆司

1 中国史と世界史

〈1〉研究実践の現場から

科学・学問は日進月歩している。そんな進歩からもっとも縁遠い歴史学でさえ、どうやら例外ではない。印刷・情報技術の向上で、いままでわからなかったことが、容易につきとめられる時代になった。研究はそれにともない、加速度的な深化が進み、個別細分化の一途をたどっている。中国史にかぎっても、それは本書で容易にわかるだろう。

しかもそれは、一部の限られた場所だけの動きではない。もちろん文献史料は、空気のようにならざるに存在するものではないから、研究者が置かれた場所は、何物にも代え難い恩恵になるときもあれば、どうにも克服できない桎梏になるときもある。けれどもそんな地理的な研究条件の格差も、また急速に減少して、平準化しつつある。かくて論文は書くだけなら、いくらでも書ける時代となった。事実、研究と称する著述の数は、増えることはあっても減ったことはない。便利といえば、便利な時代になったものである。

しかしながら、便利さを本当に活用して有益なものを生み出すには、それに見合ったある程度以上の、表にあらわれない蓄積と制御が必要となる。真に研究題目をつかむためには、研究史上の膨大な学説を咀嚼消化したうえで、独自の課題をつきとめなくてはならない。その素材となる史料も、また同じ。利用の適否をみきわめ、取捨精選しなくてはならぬ。市古宙三〔1977（1971）〕が戒めたように、わかりきったことをもっともらしく言いかえるのは、随想評論ではあっても、学問研究とはいわない。子曰く「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知るなり」。今はそうした蓄積と制御のほうが、逆に問題となるはずだが、それを言う人は稀である。

どうやら批評する側も、能力と自覚に乏しいらしい。便利な時代はかくて、およそ素養と自制を欠いた粗放な議論と著述が量産され、横行する時世にもなった。最近の例でいえば、清朝の多民族統合を切れ味鋭く描出した、と世評の高い平野聡〔2004〕さえ、学説・史料・史実の扱いは杜撰に失っており、そうした面の指摘が置き去りのままである。

テーマが細密化し、史料が大量化すると、往々にしてある文献の数字、単語、字面を追い回すだけの、文章を読まない作業になってしまう。粗製濫造の多くは、そこに起因する。それが歴史学というのなら、いっそ何もかもコンピュータに任せてしまえばよい。そのほうがずっと正確な歴史学になるであろう。

物事は逆に考えることも重要である。個別細分化しつつあるからこそ、逆に総合的に考える必要がある。あるテーマの考察にあたっては、隣接する別テーマの存在を念頭におかなくてはならず、それが全体のなかでいかなる位置をしめるか、を考えなくてはならない。史料・文献を読むには、書いてあることはもちろん、行間・欄外の空白に沈みこんだ文意もくみとらねばならない。そうしてこそ、はじめてコンピュータの代替作業から脱却できる。「中国歴史」という大領域も、したがって世界史、人類史のなかで総合的に考えねばならない。いわゆるシナ学、東洋学とは共通する面がありながら、異なる立場、方法を当然にもちうることは、後述するとおりだが、テーマと史料を実地にあつかう局面からも、容易に諒解できる事情であろう。

そんな総合とってまず思い出されるのは、かつて「世界史の基本法則」という言葉があったことである。その「法則」というまでもなく、マルクスの発展段階論であって、乱暴にいつてしまえば、歴史のたどるコースは一種の「法則」で、どこにでも適用できるという考え方である。そうした法則的歴史過程の存否を、中国世界で確認していくことが、とりもなおさず中国史学だと見なす時代があった。谷川道雄編著〔1993〕のいわゆる「論争」の時代でもある。それが論争たりえたのは、一つには賛否双方ともに、西洋の歴史過程を東洋史構築の基準モデルとする共通の前提があったからである。

あまりにも陳腐な話題かもしれない。が、過ぎ去った問題ではない。現在のわれわれに無関係でもなければ、笑える話でもないからである。唯物史観、単線的発展段階論に帰依しなくなっただけで、グランド・セオリーとして、西洋人の思いつく西洋中心の理論を信奉することにはかわりはない。視点がかわったことにともなう表現の便宜、極言してしまえば、言葉をおきかえただけにすぎない。しかも今は、そうしたグランド・セオリーの借り物、代替という旧態依然の思考様式に気づかずに、あるいは気づいていても、そうではない、新しい視点だ、独自だ、と言い張る。そのほうが、「論争」の時代、意識して「世界史の基本法則」を標榜していたより、かえってタチが悪いともいえる。

神は細部に宿りたまう。多様な歴史事実を単純な概念や図式や数値に置き換えて、わかった、というのは、一種の知的怠慢、過去と歴史に対する冒瀆、増上慢であろう。

デジタル化は映像を鮮明にするが、それはアナログなら見えたはずの陰翳を切り捨て、はじめて獲られる。その意味で理論や図式や概念は、つきつめれば捨象であり、偏見である。

だから概念化は必要だが、それはあくまで、必要な映像を鮮明に得るための手段にすぎない。歴史のばあい、その切り捨てられた陰翳にこそ、本質がひそんでいるかもしれない。だから概念・理論は、あくまで立証の参考となすべき仮説、帰納によって到達した結論であるべきで、解釈・演繹が立脚、出発する公理ではありえない。学説はしよせん、史料でも史実でもないからである。

したがって、世界史のなかで中国史を考えることは、世界史を標榜する理論を基準に中国史を考えることと、決して同義ではない。そのことをもっとも理解でき、前者を實踐できるはずで、そうしてもらわねばならない人が、往々にして後者ととりちがえる。それが実情である。

理論を学ぶことを否定しているのではない。使い方には注意してほしいだけである。既存学問も既存概念も西洋に起原し、西洋の翻案なのは、どうしようもない現実である。歴史学も例外ではない。それを自覚せずして、理論と「西洋」の相対化は始まらないのである。

それならたとえば、田村實造 [1990] のように、たんなる空間的な区切りとして、アジアと中国を設定するのは意味がない。かつて桑原隲藏 [1898] が「東洋史」を創始したように、西洋中心史観、もっとひろくいえば、西洋的、近代的思考を相対化する、そして、我々にとって常識と化して、また西洋人が頑として譲ろうとしないその前提を疑う、という意味においてのみ、西洋史とは別にアジア史・中国史を設定する意義が存する。したがって、いかにアジア史をアジア史たらしめ、これを相対化し、客観視するかは、われわれの思考がいかに西洋史的偏見、近代的主観に貫かれているかの自覚に依存する。

それなら、具体的にどうすればよいのだろうか。まず史料に拠って、過去に起こった出来事を復原して考えるしかない。史料の読みこなしを一足飛びに西洋製概念に直結させるのではなく、それが持つ意味をいっそう幅広い史実のなかで考えることしかありえない。かくて実地に総合にとりくんでみると、それとは矛盾にみまがう実証が不可欠となる。

ただし史料の読みこなし、実証といったばあい、留意しなければならぬのは、史料が必ずバイアスをともなうものであり、中立無色ではないことである。少し考えればあたりまえの話で、史料は何も後世の歴史家のために書かれるものではない。そんな史料がもしあるなら、その史料的価値はゼロであろう。そうした事情は、程度の差こそあれ、どの世界でも大同小異といってよい。

けれどもここで問題となる中国史料は、語学的に難解であるばかりか、党派的な偏見・独善的な用語に満ち、文献・文章の体例そのものが事実から乖離していることが少なくない。これは現代中国にいたるまで、真理である。事実を「ありのままに」示

そうするとき、これほど悪質な史料も類をみない。われわれが目的とする事実の伝達・復原というところとは異なる次元で、書かれている、といって過言でない。

したがって史料を集め、証拠とおぼしきものの数をふやせば、客観的な事実が浮かび上がる、というのは、嗚うべき謬見である。博捜は当然、問題はむしろそれからなのである。

史料を扱う必要最小限の手順は、①テキストの語学的に正確な読みとり、②次にそれがあらず事実の範囲と内容の確定、③最後に歴史事実の復原、となるはずだが、言うは易く行うは難い。中国史料はまず①でつまづく。著名な専家でさえ誤りを免れない。①ができたとしても、中国史料は判じ物のようなことが多く、②を正確に定めることがなかなか容易でない。書き手がその表現で本当は何が言いたいのか、これを掴むのが難しい。

①②まではできたとする。だが①②がそろっても、書き手の主張を諒解したにすぎない。それだけでは、③へ到達できないことがある。一方的な同質の史料記述しかないとき、とくに然りとする。そこに別言語の史料があると、話はちがってくる。

異なる世界観・価値観、異なる理念・利害、論法・語彙、総じて別の方法で対象を切り取る史料があつて、つきあわすことができれば、①②の深化はもとより、③にかなりの程度まで近づくことができる。同じ事実、さらには同じはずの文言をちがう観点・言語で書くと、たいてい齟齬を生じる。一致する史料は記述が、事実がそうだった、と確認できるだけで、かえっておもしろくない。食い違いがあるほうが、その意味を考えなくてはならず、そうすることで、記述の指し示すところをいっそう深く広く考えざるをえない。それがとりもなおさず史料読解、史実確定の要諦となるのではないか。そうした意味で、もっとも史実に近づきうるのは対外関係史であり、狭義と広義とを問わず、外交文書を史料とできる分野である。いいかえれば、中国を世界のなかで考えることであろう。

現在はそれを實踐する、またとない好機でもある。便利な時代だから、というだけではない。現代中国の地位が急速に、いわば世界化しつつあるなか、その過去に対するみかたも、中国で中国を説明してきた旧套からの脱却を必要としているからである。戦後に大きく変化して再出発した中国史研究は、その意味で、半世紀あまり経た今また、まさにそれ以上の変革の時を迎えている、といって過言ではあるまい。それを好機として生かすためには、まずわれわれの思考の立場をかためておかななくてはならない。

(岡本隆司)

〈2〉他者としてのまなざし——日本人のスタンス

日本列島に暮らすものにとって、中華ないしは中国の名で呼ばれる地域・人々・文明は、おそらくは記録が残されているよりも随分と以前から、そしていわゆる歴史時代の長い歳月をへて現在に至るまで、特別な重みと意味合いを持つ存在でありつづけ

ている。そこでの歩みの全体をひっくるめて、ふつう中国史と呼びならわすものの、そのひろがりや中身となると、きわめて長久・広大・複雑・多様といわざるをえない。應地利明 [1999] がこれに関連して、中国世界を統一のなかの多元、それと比較してインド世界を多元のなかの統一と表現しているのは注目される。

このようにしばしば、統一と多元という極端なふたつの局面に特徴づけられがちでもある、この巨大な隣域・隣人について、日本は海をへだてつつ、長くさまざななかかわりと関心をもって眺め、かつは対峙してきた。礪波護 [1993] が指摘するように、とりわけ明治以降の日本の近代化のなかで、学術研究のひとつとして西欧に範をとった歴史学が導入されると、中国史に関連する分野は、「東洋史」という独特の名乗りのもとに他のアジア史諸分野と連携しつつ、江戸幕藩体制下における漢学のお厚い蓄積と伝統を生かすかたちで、それを大きな長所とも柱ともなして、独自の学的展開を遂げてきた。

ひるがえって、中国史研究の歩みと現状をコンパクトに紹介し、内外における今後の学習・研究に資そうとする本書は、基本的に日本における研究者たちによって執筆されていることに、実はひとつの特徴がある。この一見すると当たり前におもえる点が、意外に無視できない。結果として、本書から見えてくるものは、中国人史家の手になるもろもろとは、おのずから異なる様相・見解・部分・局面があるはずである。いや、あって当然であり、またそうでなければならぬだろう。

日本における中国史研究は、中国との深い歴史関係や日本も漢字文化圏の一員という文化伝統などから、中国および中華世界における中国史研究と、質量・内容ともに、よくもわるくも極めて近いところにある。すなわち、まずは古典的な素養もしくは教養といったものを、研究者の個々人の内側に沈潜させつつ、目には見えない基礎力として保持するものであった。ついで、直接的には、いわゆる清朝考証学などの成果や方法を当然の前提に踏まえたうえで、さらに近代歴史学としてのアプローチをさまざまに仕方はかかるものであった。そうした基本的な構えにおいて、日中双方の研究者たちは、いちじるしい共通・類似の面を帯びている。

くわえて、明治期から現在にいたるまで、日中間での研究の相互影響や学術交流は、そのときどきの政治の変動や風潮に翻弄されつつも、なお一方では滔々たるものがあった。たとえば、たがいにもっとも多難な戦中・戦間期や文革時期においてさえも、両者の研究上の糸は断絶してはなかった。大流として見れば、両国の研究は、ともどもに意識しあい、また刺激しあって今日まで歩んできたといつて過言ではないだろう。ことに近年は、研究者の相互往来はまことにめざましいものがある。その結果、時代史・分野・テーマなどによっては、日中の研究にほとんど差異が認めたい場合さえ決してめずらしくはないだろう。

たしかに、研究対象である中華とその関連地域の歴史現象の全般にわたって、格段のなじみや密着度をもって接近できることは、日本の中国史研究が有しているひとつの特徴・利点といつてもいいだろう。しかしその一方、やはり自国史ではないことか

らくる体質もある。弱さと強さといつたらよいか、ともかくプラスとマイナスの両方の局面をとりまぜて、自国史ではないがゆえに持たざるをえない、より積極的にいえば、持つことができる、研究上の立場・関心・動機・視座・認識・見解・問題意識・分析方法などが、おのずからそこに存する。要するに、それは他者の観点からする歴史研究といつていい。まことに当たり前のことだが、日本にとって中国史はあくまで外国史なのである。この点はいくら意識してもしすぎではないだろう。

〈3〉外国史としての中国史——西欧知をこえて

では、他者としてのまなざしを生かした中国史とは、はたしてどのようなものでありえるか。あるいは、さらに功利的に言えば、日本の中国史研究者はいったいどのような点において、中国人史家による自国史としてのそれと明確な相違をもった研究展開を独自にはかり、別箇の意義をもつ歴史像を再構築することができるのだろうか。

もっとも、こうした問いとは逆に、中国および中華世界における学術研究を無上のものと考え、いわば本国史たるその主張や枠組のなかに、みずからすすんで没入・同化することをもって、よしとする立場もあることだろう。そうした志向は中国史にかぎらず、いわゆる日本の中国学全般において、かつては脈々と認められたものであった。おそらくは現在でもなお、それなりに存在するであろう。だがかつてのような漢学の素養も伝統も急速に希薄になりつつある今、日本における中国史研究の存在意義を、今後に向けて率直に問い直そうとするならば、外国史研究であることを第一義とも出発点ともせざるをえないだろうし、現実的にもそうするほかはない面も否定しがたい。

ひるがえって、日本における外国史研究として、学ぶべき見事な典型をなしているのは、いわゆる西洋史の名でくくられている広やかな領域である。周知のように、明治期以来、中国史を主軸とする東洋史と好対照の性格・体質をもちつつ、学術・教育上で一対のかたちをとって歩んできた。

その西洋史学は、おそらく誰もが承認するように、日本近代化のモデルを提供するものとして、強い国家的・社会的な要請のもとに、まことに多彩・多様きわまりない研究を、内外にむけ華々しく展開・発信してきた。百年以上の長きにわたって、日本社会に与えてきた影響力は、はかりしれないものがある。社会貢献の点で、中国史を含む東洋史は、総体として西洋史に一籌を輸することは認めざるをえない。誤解をおそれずにいうならば、かずかずの欧米語の諸文献に通暁し、かつはそれらを自由に駆使しなければならない西洋史学こそ、日本の歴史研究はすぐれた才能の多くを投入してきたといつて過言でないだろう。現在でも、西洋史学に志す人たちに求められる能力は、総じて日本史学や東洋史学の場合におけるそれよりも、やはり依然としてかなり重たいといわざるをえない。その例として、前田徹他編 [2000] や佐藤彰一・池上俊一・高山博編 [2005 (2000)] に示される真摯さと充実ぶりは印象深い。

だが、いや、だからこそか、たとえば京都大学西洋史学研究室編 [2002] や谷川稔編 [2003] のように、西洋史学の研究現場から、21世紀におけるみずからのレーゾン・デートルを求めて苦悶が表明されている。いまや日本において、いわゆる国民国家の形成としての欧米化・近代化が純然たる過去の記憶となりはてる一方、政治・経済・文化のグローバル化と世界構造の激変が、従来の近代西欧モデルによる歴史研究・世界認識を根底からゆさぶっているわけである。さらに、研究そのものの国際化ともあわせ、「日本の」西洋史学、ひいては西洋学全般の意味づけが、かつてのように「あるからあるのだ」式に安住できなくなっている状況は、当事者ならずとも十分に理解できるものがある。

ところが、中国史を含む東洋史学や、さらに東洋学の諸分野においては、西洋史・西洋学のような切迫感・危機感は、率直に言ってあまりみられない。自分たちは大丈夫だとの、なんとはなしの安心感があるのである。おそらくは、その根拠となるものは、たとえば、根本原典を自前で自由に駆使できるという自信。もしくは、欧米の学問に依拠せずとも、自力で研究展開をはかれるという自負。さらには、本国（現地）での研究に拮抗ないしは優越するという自尊。——もしこれらの諸点が本当であり、それにもとづくうえでの安心感ならば幸いなのだが。しかし、事實は、はたしてどうか。

すくなくとも、いわゆる東洋史学においては、歴史学としての問いと悩みは、当りまえのことだが、西洋史学とあきらかに共通する面があるというよりほかはない。もし、日本の東洋史学、ないしは中国史研究が、およそ歴史研究というものの全体が抱えざるをえない、幾多の深刻かつ根本的な問題から目をそむけがちであるとするならば、実はその分だけ歴史学として“未発達”だからなのかもしれない。

では、中国史も含めて、現在の歴史学に求められるものはなにかといえば、それは人類知としての立場からするものではないか。世界史、もしくは人類史といってもいいものだろうが、従来の19世紀型の西欧知をこえて、根本的に全体史としての人類の歩みを総括する見地への挑戦である。そこにこそかわるものとして、前述の日本西洋史学の煩悶と苦しみは、東洋史学・中国史研究においても、当然わが身のことであるはずなのだ。

そうしたところに、今後の日本における中国史研究がめざすべきひとつの大きな目標があるのではないか。いわゆる西欧知をほぼ咀嚼したとあっていい日本にあって、中国史研究者は世界史ないし人類史への志向を十分にもちうる文化環境にある。要するに、中国史を中国史の枠組で把握するのみならず、中国史を世界史の見地において眺め、世界史における中国史の意味を考え、中国史を世界史のなかに位置づけることである。別の言い方をすれば、世界史に不可欠なものとしての中国史を描くことでもある。

こうした考えは、じつは以前からしばしば語られてきた。しかし、現実には日本の中国史研究は、総体としては世界史への視座をほぼ棚上げするかたちで推移してきた

ことも、客観の事実である。西洋史もしくは西洋学から、歴史研究上のモデルやヒントを得ることはあっても、中国史からする世界観や世界史像を中国史以外の歴史家や読者に提供することは、きわめて稀であったといっている。率直に、ここに大きな反省点があるといわなければならない。われわれは、やや臆病にすぎたのかもしれない。
(杉山正明)

2 ユーラシア世界史のなかで

〈1〉史料と研究の大変化

では、その世界史なるものだが、21世紀の初頭にあたる現在、大きな見直しの趨勢にあるのは既述のとおりである。とりわけ、アジア史という名の、多種多様な地域世界の並存する雑駁な大地平においては、近年つぎつぎと新たな史料が出現・公開され、歴史研究の基盤そのものが大きく変化している。10年、20年前まで、アジアの歴史研究を大きくおっていた「政治の壁」「国境の壁」「意識の壁」、そして「史料の壁」は、その多くが取り外されたといっている。政治・経済・文化におけるグローバル化と情報通信革命にほぼ歩調をあわせるかたちで、史料と研究の大変化が起きているのである。史学会編 [2004] はその状況把握の手がかりとなる。

そうした変貌は、まさに中国史とその近縁分野においてこそ、いちじるしい。その直接の原因は、いうまでもなく、文化大革命の終了後から急展開した中華人民共和国の改革・開放政策にある。ここ20年ほどの史料状況の激変とそれともなう歴史研究の新展開は、まことにすさまじいといえる。ありていにいって、本書が企画・刊行される理由と意義もまた、多くはその点にこそある、といってもさしつかえないだろう。

従来ともすれば、中国については、文献史料がふんだんにあるとの先入観がもたれがちであった。それはかならずしも間違いとはいえないものの、中国史の時間と空間の長さを考えると、文献史料はけっして豊富とはいえなかったのも事実である。普通のイメージとはことなり、王朝断代史風というならば、宋代以前については、質量ともに史料の「欠乏」が嘆かれる現実が久しくつづいていたのである。研究者は、“少ない史料”を争うようにして利用してきたといっても過言でない。

しかし、中国史上のほぼあらゆる時代・地域にわたって、状況は一変した。内容も漢語史料に限らず、満洲語・モンゴル語・チベット語・ウイグル語などの文献・文書も、さまざまに存在することが明らかになった。たとえば、おそるべき史料の宝庫をなす西藏自治区檔案館編 [1995] は、チベットに歴大な文書群が伝存したことを示している。日本人もふくめ、外国の研究者が北京や上海をはじめとする、そうした各地の収蔵機関・図書館・檔案館におもむいて閲覧・調査するのも、ごく普通の風景と変

じた。つい20年前までは、中国史に古文書があまり存在しないのはどうしてか、などと語られていたのは、ほとんど夢物語に近い。

くわえて、「世界の工場」「巨大市場」といわれるほどの中国経済の拡大にもなつて、建設工事や観光開発などが急進展した結果、次々と遺跡・文物・文献が出現した。こうした史料上の大変化は、19世紀から20世紀初頭における敦煌文献をはじめとする漢語・非漢語史料の大量出現を、おそらくははるかに上回るものだろう。中国史の研究は、欧米型の文明と歴史学が怒濤のように押しよせた20世紀はじめ、価値観・世界観が一変した戦後に次いで、第三の変革の時を迎えているとわいてい。

こうした新史料の波の一方、中国史における文献史料の支柱であった各種の典籍も、より良質の刊本の出現もふくめて、大きく様変わりした。しかも、それらがつぎつぎと影印出版されたうえ、CD化も急激にすすみ、大量検索の便が一気に開かれた。すくなくとも、用語・語彙・事項の検索については、かつてのいかなる研究者も、把握できなかった範囲で、簡単に引き出せることとなった。能力と条件に恵まれた、一握りの研究者の伎倆と特権、無上の価値のようにいわれがちであった「博引旁証」は、いまでは単なる当たり前の作業と化している。

研究上の変容は、中国史や中国文明についての基本イメージにも及んでいる。かつては日中を問わず、貝塚茂樹[1964]がいうように、中国史の舞台となる地域について、空間上の相対的な孤立性が強調されがちであった。くわえてともすれば、その反面における文明としての独自性、さらには「中華中心主義」といってもいい一元的な世界観が表明されがちであった。しかし、ことに近年の中華人民共和国においては、自国の「大国化」と運動しつつ、「世界の中国」の観点から多元の民族的統合体たる「中華」が標榜され、それが歴史学や考古学の研究に顕著に反映されるようになった。たとえば、蘇秉琦[2004]の中国文明論は、中国考古学を領導してきた蘇の思想を簡明にあらわすものである。すなわち、従来の漢族中心の王朝史観・中原史観にたいして、「生態学的な視線」による「多元的な文化区系の理論」によって歴史認識を大きく転換させようとする。そうした主張は、ハーバード大学で教鞭をとった考古学者の張光直[2000]の議論や、さらには「中華民族の多元一体の構成」を唱導した費孝通[2001]とも通じるものがある。こうした「多元の統合体」という考え方は、中国の国民統合、そのためのアイデンティティ形成という現実の要請もあって、近年の中国における自国史研究にほぼ共通して認められるものとなっている。

その一方、近年の中国においては、研究の量的な増加はもとより、質の面でも進化・変容・発展の傾向がいちじるしい。たまたま触れえたとく近々の事例をあえてひとつだけ挙げると、北京大学歴史系における重点研究の成果として刊行された榮新江・李孝聰主編[2004]は、「中外関係史」を主題とし「新史料と新問題」を副題とすることが端的に示すように、中国における中国史研究のパラダイム変化を見事に象徴しているかにみえる。これに限らず、中国の研究は、多元論・広域化・国際化・新領域をきわめて強く意識しているものが少なくない。むしろ、日本の研究のほうが旧

来型の王朝断代史や漢族中心史観にとらわれがちにみえるのは、おもしろい現象といつていいかもしれない。

〈2〉ユーラシア国家の枠組

中国史とその近縁の歴史をとらえる空間的な枠組として、これまで日本人研究者が好んできたのは、東アジア、もしくは東アジア世界という考えである。岸本美緒[2003]のこぼをそのまま借りるならば、日本・朝鮮・中国などの歴史をばらばらにとらえる「一国史」的な見方をこえて、相互の連関を重視しようとする方向は、この数十年來の日本の歴史研究のなかで大きな力をもってきた。その連関の範囲として、一気に世界全体やアジア全域を扱うのではなく、中国とその周辺をふくむ東アジアを単位に歴史的考察をおこなおうとする試みは、広範な承認をえてきた、という。

そうした視点からの日本と大陸のかかわりについては、多様な営みが蓄積されてきており、ここでその要点さえ述べるいとまはないが、木宮泰彦[1926-27]ならびにその改訂増補版の木宮[1955]は、依然としてきわめて有用である。また木田章義他編[2002]は、日本史でいう中世・近世における、日中韓の書物・学術・宗教・文化の大交流をあつかい、多面にわたる示唆に富む。この三国交流をめぐるのは、張東翼[1994][1997][2000][2004]の一連の基礎研究が有益であり、日本を中心とするなら、対外関係史総合年表編集委員会編[1999]が役に立つ。

もともと中国史のみならず、西嶋定生[2000]が主唱し、朝鮮史・日本史にも大きな影響を与えてきた「東アジア世界」論については、李成市[2000]がいうように、日本人の視点から漢字文化圏に偏るかたちで構想されていたことは否定できない。杉山正明[2002]が指摘するように、「東アジア」自体がなお検証を経なければならない概念であるともいえる。

かたや、現実の中国史の展開においては、誰の目にもあきらかなように、北アジア・中央アジア諸地域、すなわち広い意味での草原世界もしくは乾燥世界との密接不可分のかかわりがより際立っている。歴代の中国王朝のうち、遊牧民およびその軍勢力と無縁のものを数え上げるほうが手取り早いほど、遊牧権力と中華王朝の重複は顕著である。その一方、匈奴と秦漢、突厥と隋唐、キタイ・ジュシェンと両宋など、遊牧帝国と中華帝国の対抗・並存関係もいちじるしい。要するに、遊牧と農耕という両極の振り幅のなかに、秦から清にいたる国家興亡のほとんどが包摂される。しかも遊牧帝国は、しばしば中華の枠をはるかにこえてユーラシア・サイズで展開する。早くは大西走する匈奴、ついで東西にひろがる突厥、さらには西方大移動するテュルク、そして2次にわたる東西のキタイをへて、遂にはユーラシア帝国となるモンゴルに至る一連の大事象である。

こうした遊牧国家と中華王朝とのいちじるしい連動現象は、中国史研究にユーラシア国家型の権力システムへの視線・洞察・理解を不可欠のものとするとともに、そも

そも時代とともに伸縮する中国なる歴史空間が、ユーラシア世界全体の変動とも密接にかかわっていることを指し示している。杉山正明 [2003 (1997)] は、そうした大流を描く。中国をもって孤立性の際立つ「閉ざされた世界」とする従来型の通念は、もともとどこか無理がある。すなわち、中国史もユーラシア世界史の枠組のなかで考察すべき側面を濃密にもつことは疑いない。

とりわけ近年では、「中央ユーラシア」という超広域の歴史世界を設定し、そこでの歴史のダイナミズムとの連関のもとで、中国史をも理解しようとする動きもさかんである。そのほんの一例として、たとえばいわゆる安史の乱について、ウイグルとの関係のなかでとらえようとする森安孝夫 [2002] や、アラブからの軍兵がかかわった可能性を指摘する稲葉穂 [2001]、さらにはイラン・中東におけるアッバース朝の出現と関連づけて理解しようとする清水和裕 [1999] など目につく。またこの時期の海上による中国と中東方面とのつながりについては、黄巢の乱における広州などの様子を伝える藤本勝次訳注 [1976] が大いに参考になる。ともかくさまざまな点で、中国史研究にイスラームへのまなざしは必要であり、小杉泰・林佳世子・東長靖編 [近刊] はその有益なガイダンスとなるだろう。

〈3〉陸から海へ、「小さな中国」から「大きな中国」へ

ひろくユーラシア世界のなかで中国史をとらえようとする時、13・14世紀のモンゴル世界帝国とその時代を画期として、中国史と世界史に大きな変動が起こっていたことが注意される。

そうした歴史現象へのアプローチには、マルコ・ポーロのみならず、イブン・バットゥータの旅行記が必読の史料であり、家島彦一訳注 [1996-2002] が便宜を与えてくれる。研究史上の大業は何といっても、東方文献を細緻に利用した Pelliot [1959, 68, 73] と、イスラーム文献を駆使しつつ、中央アジア史と中東史を接合させ、ユーラシア史への地平を開こうとした Бартольд [1963-77] で、このふたりが突出した巨人であった。モンゴル帝国とその時代については、世界と日本のお厚い研究蓄積のもとに、東西文献史料を眺め渡した本田實信 [1991] が、際立った精華となっている。

爾来、じつは日本の中央ユーラシア史研究者こそが、いわゆる大航海時代以前の段階から、ユーラシア世界の各地が広やかにつながっていたことを指摘しつつきてきた。それを後追ひしたにすぎないアプー=ルゴド [2001] のやや粗放な議論をもって、あたかも画期的な見解のように述べ、かつことごとしく引用するむきが日本の東洋史・中国史にあるのは、まことに遺憾といわざるをえない。

さてこの時期の変動をややシンボリックに表現するならば、中国国家の枠組が「小さな中国」から「大きな中国」へ変身を遂げたことであり、それと同時に、互いに因果をなしつつ、陸と海がむすびついてくる、という世界史的な転回の胎動がはじまったことである。時代を超えた草原と海上のリンクというテーマについては、類書はい

ろいろあるが、劉迎勝 [1995] は中国におけるその代表的な著述とあってよいだろう。そしてその変動のなかで、中国世界の中心ないしは重心が、内陸から沿海へ、高地から低地へ、乾燥地から湿潤地へ移動し、さらに政権中心も「大きな中国」にふさわしいように、チャイナ・プロパーの東北隅たる現在の北京に固定化してゆく。さらに、これとあわせて、中国社会そのものも、生産優位から流通優位へとシフトしてゆくことも見逃せない。

「大きな中国」への変身、陸海のジョイントは、そのままユーラシア世界史をこえる歴史変動とも連関し、さらに近現代における「世界と中国」の問題に直結してゆく。これについては、たとえば Lombard et Aubin (eds.) [1988] が参照に値しようし、モンゴル時代以後の「王権」とその展開にからんでは、楊海英 [2004] が描出する世界の問いかけるものも重い。つまりは、そうしたところにおいて、中国史の研究はもはや誰の目にも鮮やかに、いわゆる中国史のみの研究ではおさまりきれないものとなる。中国史にとっての世界史、世界史にとっての中国史は、不可避ならざるをえない。

こうした広やかな枠組でのアプローチは、先行するユーラシア世界史の時代についても、もとより多元的世界への視野と多言語文献についての能力とを必須としていたが、ましてポスト・モンゴル時代、もしくはいわゆる大航海時代とそれ以後の世界史にあっては、個々の研究者に求められる才・学・識は、一層おのずから高く、かつ厳しいものならざるをえない。「世界史のなかの中国史」は、まことに茨の道ではあるだろう。

それをのりこえうるアプローチのひとつとして、文字史料と合わせて、人間の歩みの一面を多様に映し出した絵図・地図とそれが語る世界観の考察をあけておきたい。葛兆光 [1999] は中国古代の、そうした世界像を鮮やかに示しているし、應地利明 [1996] は中世日本を中心にした、その見事な総述とあってよい。そして金田章裕他編 [2001] や藤井讓治他編 [2004] は、次なるステップへの扉となろう。(杉山正明)

3 世界史の転回

農耕社会と遊牧世界を統合、南北の相剋を解消したモンゴル帝国を境に、世界史は二つの時代に大別できる。あえてその特徴を表現するなら、前者がアジア中心、後者はヨーロッパ中心の時代となる。後者を現代に続く近代と表現したなら、前者は前近代となろうが、そんな手垢のついた地域・時代区分よりも、歴史が包含する範囲の拡大とその主要舞台の変化のほうを重視したい。すなわち前者が旧世界だけで歴史を織りなし、草原世界を抜きにして考えられないのに対して、後者はアメリカを加えた新旧世界を包含し、海洋世界を抜きにして考えられない時代になる、ということである。

旧世界単一の時代、これが上述のユーラシア世界史である。その中軸は東西を通じて、遊牧世界と農耕社会との関係史にある、といって過言ではない。この通則に適合

しない、というその一点だけで、西洋史と日本史の展開は、すぐれて特殊な少数派だといってよい。アジア史の困難は、この少数特殊であるはずの西洋史・日本史が歴史学のスタンダードと化してしまった現実に存する。角山榮 [1980][1984] のように、西洋史と日本史を接続させれば「世界史」といえた一方で、アジア史は「シルク・ロード」の名が示すように、ロマンと憧憬の対象ではあっても、歴史研究の上に正当な位置を与えられてこなかった。松田壽男 [1992 (1971)] の苦悩と工夫をみれば、思い半ばにすぎることがあろう。

もちろんそれを克服する努力もなされてきた。中国史におけるその典型は、西嶋定生 [1983] のいう古代史の「冊封体制」論、濱下武志 [1997] のいう近世・近代史の「朝貢システム」論である。前者は日本を、後者は西洋を不動点に中国をみてきた、旧来の歴史観の転換をめざすものだった。それを見とめるにやぶさかではない。しかし所期の目的を達した今となっては、両者ともなお、漢文的修辞の呪縛を免れていない点をみなおさなくてはならない。以下、不必要とみえるくらいに、それ以前の研究にこだわるのは、まずそこが自由になる必要があるからであって、両者がいかに中国史のみかたを規定したかを逆説的に物語るものでもある。

〈1〉ポスト・モンゴル時代とユーラシア世界史

モンゴル帝国は天災・疫病・不況にみまわれた、いわば世界的な「14世紀の危機」のなか、解体・消滅してゆくけれども、草原世界はいましばらくその輝きを保ち続ける。アンチ・モンゴルとして中国に成立した明朝とは対蹠的に、モンゴル帝国再建者として中央アジアにティムール朝があらわれたからである。その位置づけはまず、Rossabi [1975]、間野英二 [1977] を参照すべきで、ティムール朝が健在なあいだは、なお草原世界はユーラシア世界史の中心、各地の紐帯でありつづけた。

短命にしてティムール朝が滅んだ事実は、Rossabi [1990]、久保一之 [1997] に説くように、モンゴル帝国以前の南北対立を再現したばかりではない。世界史に占めた往時の比重を、草原世界がとりもどすことはもはやなかった。やがて南北の対立は解消し、ティムール朝の後継者というべき政権が成立してゆく。しかしそれは、いずれもティムール朝の分化というべく、その辺境勢力がさらに外縁へ拡散したものである。血統につながるムガル朝は、アフガニスタンからインドウスタンへ向かった。間野英二 [2001] の豊かな叙述をぜひみておきたい。サファヴィー朝は Matthee [1999] が示すように、アゼルバイジャンからイラン・ザミアン、ペルシア湾へ向かい、オスマン朝はアナトリアから地中海、紅海ぞいに拡大していった。簡にして要をえた林佳世子 [1997] が示唆に富む。三者ともに内陸から沿海にひろがる方向は軌を一にしており、中央ユーラシアは各地の紐帯としての存在意義を失ってゆく。いわば、つなぐ草原からへだてる草原と化した。もちろんその過程は、一朝一夕に終わったのではなく、15世紀から長い時間をかけて進行する。そうした草原世界の沈下と反比例して

浮上し、ついにそれに取って代わったのが、海洋世界である。

もちろんそれまでに、まったく海洋の意義がなかったわけではない。桑原隲蔵 [1935]、家島彦一 [1991] が活写したとおり、ムスリムの手になるインド洋の通商は重要である。そうはいっても、その役割はなお副次的で、陸上に附随する比重しかなかったといってよい。旧世界単一のユーラシア世界史は、陸上世界史ともいうべく、それに対応して、インド洋がその唯一の海岸、大西洋と東シナ海が世界の果て、へだてる海洋だったわけである。杉山正明 [1995] のいうように、なお分散的だったインド洋のムスリム通商の統合をめざしたのがモンゴル帝国の海上遠征事業だったとすれば、宮崎正勝 [1997] から読みとれるように、その一つの集大成がムスリム宦官・鄭和の遠征だったというべきか。

インドはユーラシア世界史全体からみれば、中央アジアと絶えざる交渉をもちながらも、中国と同じく、いなそれ以上に「孤立的」存在だったといってよい。ところが草原の沈下にとともなうインド洋の浮上は、中央ユーラシアに代えてインドを、とりわけ経済的に、世界の動向を左右する存在、アジアの中心たらしめるようになる。

魅力的な産物を次々に生みだしたインド亜大陸内部の産業発展は、もとより重要である。だがピアスン [1984] が描くように、それにもまして重視すべきは、そのインド産物を国際商品たらしめた商業発展であって、そのルートが西はペルシア湾、紅海を通じて地中海に、東に東南アジアを通じてシナ海につながりひろがりをもった、という事実である。インド洋はかくして、ユーラシアの附随的海岸から、世界の大道へと化してゆく。その世界のひろがりには、近藤治 [2003] に取める入門の文献からもうかがえる。

〈2〉インドの勃興とグローバル世界史の形成

インドの勃興がすでに世界史の革命的な局面である。それは煎じ詰めれば、交通・流通の大道が、草原から海洋に置き換わった、というごく単純な歴史事実なのだが、もちろんそうした質的な転換だけにとどまらない。それは飛躍的な量的拡大をともなって、旧世界単一の陸上世界史から、新旧世界をあわせた地球規模の海洋世界史への転回を導いてゆく。前者のユーラシア世界史に対比して、後者をグローバル世界史と呼ぼう。したがってそれは、アジア単独で進行した歴史過程では決してない。不可分離、同時進行的におこっていた、いわゆる大航海時代が成り立たせたものだといえる。

大航海時代は西洋史でいえば、とりもなおさず「環大西洋革命」の幕開けであって、西欧がアメリカ大陸と一体となって興起し、「世界経済」の中核を形成し、インド洋の交通・流通の担い手、支配者がムスリムからヨーロッパ人、なかんづくアングロ・サクソンに代わってゆく契機をなす。その交代によって、世界史の比重もアジアから西欧へ移行する。「環大西洋革命」はその意味で、やはり世界史の革命というべきだが、もっともそうした交代が、たとえば大航海時代からすぐ、目に見える形で現れた

わけではない。それが決定的、不可逆的な趨勢になるのは、やはり産業革命とナポレオン戦争以降、世界経済が確立し、西欧の軍事力が世界に冠絶するのをまたねばならなかった。ジョーンズ [2000] のいうとおり、西欧が勃興した結果、創成した近代は、西欧にしか起こらなかった、という結果的な意味でやはり「奇跡」であるし、そのことに異論をさしはさむつもりはない。だからといって、その「奇跡」の誕生過程を不動点として、各地との関係を考えるのは、およそ歴史的な思考法とはいえない。それはマルクスからウォーラステインをへてフランク [2000] にいたるまで、旧態依然である。少なくともこの段階では、それはあてはまらない。アジアに視点をすえた、いわゆる「地域システム」「市場圏」の仮説のほうが、まだしも説得力がある。

「地域システム」「市場圏」の考え方は一様ではないけれども、松井透 [1999] によってあえて図式化すれば、地勢・風土によってまとまりをみせながらも、しかも外部と断絶しない地域圏、交易圏が、インド洋を大道として数珠繋ぎにつらなる構図となるのか。その構図がはっきりした姿をとりはじめる16世紀が、とりまなおさずグローバル世界史の始まりであって、大西洋と東シナ海ももはや、世界の果てではなくなくなった。その沿岸、ユーラシアの両端に位置する西欧と日本の興隆がその表象である。その意味でいわゆる「環大西洋」圏も「アジア交易圏」も、数ある「地域システム」の一つにほかならない。西欧は新大陸とむすびついて、アメリカ銀を中東からインド洋に注入し、小葉田淳 [1969 (1941)] にあるとおり、足利時代の日本も、官民間わらずシナ海に乗り出して、やはり銀を中国にもちこんだ。

新しい局面には、それを律する秩序がおいつかない。それぞれの「市場圏」の舞台をなす沿海地域において、グローバル世界史の開幕は、荒々しい海賊とともにあった。シナ海の倭寇もその一つである。そうしたなか、秩序模索の動きも並行する。そうした動きがひとまずの完成を迎え、一定の秩序ができあがったのは、西洋史でいわゆる「17世紀の危機」をはさんだ、17世紀から18世紀前半の時代であった。

すなわち三大陸に跨るオスマン朝、インド亜大陸にひろがったムガル朝、そして中国とその周辺を統合した清朝。いずれも遊牧民出自の、いわゆる「征服王朝」政権という点で共通しており、ユーラシア世界史の伝統を継承する。それにもかかわらず、海洋世界の存在を前提とする各「市場圏」をまるごと覆い、その動向が盛衰を左右した広大な「帝国」であった点、まぎれもなくグローバル世界史の所産なのであって、ユーラシア世界史を統一し、しめくくったモンゴル帝国とは、異なる歴史的段階にあった。梅棹忠夫 [2002 (1967)]、そして川勝平太 [1997] の示す図式が説得力を帯びてくるのは、いずれもこの段階になってからのことである。

〈3〉中国をめぐるグローバル世界史

このように素描できる構図は、説明のしかた、力点の置きどころは異なっても、すでに多かれ少なかれ、ほぼ共通の認識になっているであろう。したがって今後の課題

は、同じデッサンを忠実になぞることではないし、構図を素描の段階で放置したまま、彩色を施すことでもない。構図そのものの実在を確かめ、修正を求めようような細部の検討である。なかんづく、グローバル世界史の革新とユーラシア世界史の伝統とが切り結ぶ局面をいかに描き出すか、が問われる。

もっとも先進的な西洋史では、この構図を、ポルトガル・オランダ・イギリスが隆替した「海上帝国」「商人帝国」と称する。西洋からみたその研究は、すでに Boxer [1965][1969]、生田滋 [1971] から、Tracy [1991]、Chaudhury and Morineau (eds.) [1999] にいたるまで、長い伝統と膨大な蓄積がある。これらに共通するのは、いうまでもなく西洋の側の史料と観点に拠る点であり、いいかえれば、グローバル世界史の革新の側面を強調するにある。これにあきたらず、対応してアジア側から出されたのが、「地域システム」概念である。それならやはり、この「地域システム」が置くべき重心は、各地のユーラシア世界史の伝統を分析する作業にあり、当該地域の根本史料の地道な検討なしには、その糸口すら掴めない。しかもその全体的な構造は、「商人帝国」との関係を実証的に探究することなしに、明らかにならないだろうし、ヨーロッパ中心史観に対するみなおしも完結しない。中国史ではるか以前、矢野仁一 [1928] が実践したような、ポルトガル・オランダをはじめとする外国史料と現地の史料をつきあわせることが、あらためて求められる。

その点、やはり日本史はすすんでいる。時期を同じくする中世・近世初頭の通商に関しては、小葉田淳 [1969 (1930)][1976]、岩生成一 [1985 (1958)][1966][1987] がその範例であろう。日本史の当該分野は、すでにここでシナ海にひろがっていたのであって、中国史はもちろん、リード [1997, 2002] のいわゆる「交易の時代」の東南アジア史にもつながるし、林玉茹・李毓中 [2004] も紹介する近年の「台湾史」にもつながる可能性を秘めていた。

近世でも事情はかわらない。日本人にとって魅力尽きせぬテーマたる、いわゆる「鎖国」の内実追求が動機となって、一般向けにかぎっても、速水融・宮本二郎編 [1988]、川勝平太 [1991] で明らかのように、「鎖国」はすでにイメージを一新した。これも、岩生成一 [1953] に始まって、永積洋子編 [1987] などが受け継いだ周到な史料整備と、山脇佛二郎 [1964] 以下の膨大な蓄積のうえに立った成果である。

さらに日本史の場合にみのがしてはならないのは、それが貿易史・経済史にとどまらず、それをもふくみこんだ外交史・政治史、そして思想史にも及ぶ点である。前二者については、朝尾直弘 [1994] とトビ [1990] が包括的な見とおしを与え、個別研究でも朝鮮との関係では、中村栄孝 [1969]、田代和生 [1981]、琉球では、小葉田淳 [1968 (1939)]、オランダとの関係では、永積洋子 [1990] がある。さらに荒野泰典 [1988]、渡辺浩 [1997] は、世界観の上からも「鎖国」をいっそう相対化、一般化しようとしている。「アジアのなかの日本史」という命題は、だしぬけに生まれたものではなく、そんなフレーズがもてはやされるずっと以前から、十分な伝統と蓄積もっていた。学界の主流でなかった、というだけのことであって、学界の動向と学問

の成果は必ずしも同じではない。

〈4〉世界史と明清時代

このようにみえてくると、中国史はなおたちおけている。同じ時期はすなわち明清時代であって、日本におけるその研究は、中国史のなかでも世界屈指のレベルにあるとって過言ではない。しかしそれでも一歩、大陸の外、シナ海の世界に出るや、にわかには日本史の成果とは接続できない格差を露呈する。たとえば、濱下武志・川勝平太編 [2001 (1991)] がいう日本史の「アジア交易圏」と中国史の「アジア交易圏」を読み比べてみれば、それは歴然としている。その「ネットワーク」論のア・プリオリ性は、さしあたり問わないにしても、つながりあう原動力、結節点の内部構造こそが重大な問題であって、実証研究はそれを追わなくてはなるまい。にもかかわらず中国史の側は、濱下武志 [1997]、松浦章 [2002] などが示すように、事象と史料の羅列以上を出ないし、問題関心も通商・貿易史の文脈にとどまる。中国内部においては、藤井宏 [1943]、佐伯富 [1987]、これと深い関わりにある藤井 [1953-54]、寺田隆信 [1972]、沿海では、片山誠二郎 [1953]、佐久間重男 [1992] など、すでに商業と政治・社会との関連構造を解き明かした古典的成果があつて、商業というものは、中国史の文脈ではそうとしか描けないはずなのだが、それは必ずしも、世界史を構想するにあたって、生かされてこなかった。たとえば上田信 [1995]、足立啓二 [1998] のように、中国内部の対象から世界史を構想するにさいしても、対外関係の史実を抜きに、理論枠組に直結させる傾向をなおまぬかれていない。

その理由はごく簡単で、西洋史・日本史は経済・通商と政治・外交とを密接に連関させ、総じて実証的に体制を追求するのに対し、中国史の場合はそれぞれが個別研究にとどまり、しかも史料に立脚したひろがりを持ちえず、相互の水準も不均等であるからにはほかならない。もちろんそれは日本史とは、史料のありようが異なっていて、前者の視点と方法がそのままでは中国史に接続、適用できない、という事情をも物語っている。日本史と中国史のあいだのそうした格差と断絶は、この時期にかぎらない通則だが、そうであればこそ、なおさらいっそう、後者の側において、その政治と経済をむすびつける対外関係、そしてそれを律した体制の実証研究が待たれる。「アジアのなかの日本史」とはいえども、アジア史のなかに日本史を位置づけるには、まだ時日を要する。

それでも近年の研究は、先進的な日本史の成果と中国史とをなるべく統合的にとらえようとする、好ましい方向にすすんでいる。岸本美緒 [1998a][1998b] が提唱する「近世」は、その代表的な業績であつて、宮嶋博史 [1994][1995] のいう「伝統社会」とあいまって、「東アジア」全体のいわゆる「共時性」とそのゆえんを描こうとする。

以上の動向は社会経済史を中心とするもので、まだ十分とはいえない。これをいか

に統治組織、文化構造からする社会構成の解明とむすびつけるかが、今後の課題となるであろう。もっとも日本の明清史研究は、「地域」や「秩序」を主要なテーマにしてきたから、その方面への展開はさまで難事ではあるまい。岸本美緒 [1995]、中砂明德 [2002] はその一成果に数えてよいであろう。後者でも触れるように、手薄なるがゆえに好個の題材となりうるのは、たとえばカトリック布教事業とその周辺である。これも日本史との格差・断絶が顕著な分野で、組織的な研究はいまだしの観がある。矢沢利彦 [1971][1972]、平川祐弘 [1969, 97]、Alden [1996] に導かれることで、端緒を掴むことができよう。これを中国内外における陽明学の発展と講学、結社の普及いかん、そして漢学の成立などの事象と関連づける必要がある。それも思想学術の比較史・交流史ではなく、社会構成の視点からあらためてとりくむべきであつて、ともかく中国の「思想史」だけにとどめておいてよい題材ではない。余英時 [1991] はウェーバー云々よりも、むしろその意味からあらためて批判的に継承すべき業績である。さらに以上を、山本澄子 [1972] があえて対象としなかった、19世紀のプロテスタント宣教や教案発生も視野に入れて考えることができれば、いよいよ世界史との関連につながってくる。

そしてそうした作業を西洋史の成果とむすびつけ、総合するには、やはりインド洋に回帰し、アジア史全体に位置づけられるかどうかを問わなくてはならぬ。それには、シナ海世界「近世」の「地域システム」の内実を解き明かすのは当然として、そのうえでもう一歩すすめて、別の「帝国」の構造との比較史という大テーマにとりくまざるをえない。百瀬弘 [1980] から、足立啓二 [1992]、黒田明伸 [2003] にいたる貨幣金融史研究の展開は、その一つの典型といえよう。そうした意味でたとえば、永田雄三 [1986][1997] がアナトリア・バルカンから示唆する、オスマン朝の「アーヤーン」と明清の郷紳との比較、Adshead [1970][1992] が提示した、中国・インド・トルコの塩政の比較などは、魅力あるテーマとなろう。しかし比較するには、前提となる同質を指定する必要があるから、いまはそれを各分野でいかにつきとめるかを問題にしなくてはならない。そうした事情はたとえば、坂本勉 [1999] の着手している通商にしても同じだし、軍事組織や財政制度にもひろがりうる。杉山伸也・グローブ編 [1999]、山本有造編 [2003] で確認できる「ネットワーク」論、およびそれと深くかわる「帝国」概念のア・プリオリ性は、そのときあらためて問いなさなくてはならなくなろう。

(岡本隆司)

4 近代アジアと西洋

〈1〉「西洋の衝撃」

「14世紀の危機」をもってはじまったグローバル世界史の形成は、かくて「17世紀

の危機」をへて、ほぼひとまずの完成を迎える。つづく17世紀から18世紀前半は、アジア世界にとってまことに安定した、盛世というべき時期だった。ところがひとり欧米のみ、この「17世紀の危機」を新たな出発点として、競争と戦乱そして進歩に明け暮れはじめた、といって過言ではないだろう。そこから、「商人帝国」から脱皮した、「国民国家」と資本主義と帝国主義が生まれてくる。本当の「奇跡」と「世界経済」の誕生はむしろ、18世紀から19世紀にかけての過程である。そして19世紀の終わりには世界は一変していた。

その過程を西欧からとらえるものは、「世界システム」論をはじめ歴大かつ多様だが、周知のことがらでもあるから、すべてをくりかえすにはおよぶまい。重要なのはそうしたとらえ方がアジアにおいて、どこまで妥当性をもちうるかであって、そこに近代アジア史研究の存在する意義がある。その前提となる構図と仮説は、やはりそれ以前とかわらない。

この時期の歴史は、ある面からいえば、「世界経済」の世界化、別の面からいえば、イギリスの「帝国」化である。要するにイギリスが、インド洋世界を制した過程にほかならない。Chaudhuri [1978] は東インド会社を中心に、松井透 [1991] は「世界市場形成」という視角からそれをえがきだす。インドが世界の大道の要をなし、アジアの中心であった以上、インドを制したイギリスが、アジアを制したのはゆえなきことではない。イギリス「帝国」のアジア戦略も、インドの経営と保全を第一義に考慮したものである。信夫清三郎 [1968 (1943)] が描くラッフルズの事績、東南アジアの植民地化・近代形成も、その文脈をみのがしてはならない。中国史が世界史を肌で感じ出すのも、そうした過程においてである。インドの植民地化進行が、清朝の隆盛・混乱と表裏一体をなすのは、あまりに明白な歴史事実だろう。

中国近代史は久しく、「西洋の衝撃」を主要テーマとしてきた。マルクス以来、その「衝撃」の内容は、豊富なイギリス側の史料に支えられて、いまや十分すぎるほど、明らかになった。衛藤藩吉 [1968]、田中正俊 [1973] がいかんなく描き出したいわゆる三角貿易は、かつて「西洋の衝撃」の代名詞であった。その文脈はさらにひろがって、ソウル [1974] が示した多角的決済構造は、濱下武志 [1990] にいたってほぼ決定的な解明をみた。これは杉原薫 [1996a] が的確に評したように、「ジェントルマン資本主義」論にさきがけて、イギリス「帝国」のアジア史的、世界史的意義を示してくれたものである。

ただつとに Greenberg [1951] が明らかにしたとおり、その多角的決済構造がアヘン・綿糸など、インド・中国間の貿易を基軸にしていたという事実は、別の解釈を生み出すことになる。中国に対する「西洋の衝撃」は、インドの衝撃にほかならぬ、ともいえるからである。そこから濱下武志 [1990]、杉原薫 [1996b] のような、近代の「アジア交易圏」という考え方がでてきた。ただしそこでは、中国内をいかなる構造としてみるかの実証的な追究と議論は、すっぱり抜け落ちている。

イギリスの「衝撃」にせよインドの「衝撃」にせよ、かつて中国史がそれを追究し

た動機は、中国の「半植民地」化の歴史を描くためであった。そもそも中国をひとくくりにして、その西洋との関係を、西洋近代の観点から読みとろうというものである。そうした視角の前提をうごかさなくては、中国人がいう「半植民地」をどう言い換えたところで、映る影像とその位置づけに、どれほどの違いもでてこない。西洋人のいう「世界経済」と「周縁化」はもとより、「自由貿易帝国主義」「協力者論」「非公式帝国」にしても、極論すればその例にもれない。その意味で、中国側の原典史料をなおざりにして、英語の文献・史料のみに依拠するかぎり、いかに Osterhammel [1986] が理論的な整理を試みようとも、Osterhammel [1999a][1999b]、秋田茂 [2003] など、イギリス「帝国」史の描く近代中国は、最新でありながらアウト・オブ・デートならざるをえないのである。

〈2〉中国近代史の論点

中国近代史は残念ながら明清史とちがって、日本の中国史研究のなかで、もっともたちおくれた領域だといってよく、外来の理論・概念・流行に過敏に反応しやすい体質をもつ。求められるのは、こうした外から見た研究の進展にみあうだけの、しかもそれに流されずに正当な批判ができるだけの、内から見た研究の蓄積であり、その第一歩としての、外国史料と中国側の史料との厳密なつきあわせである。たとえば、明治維新史における石井孝 [1966][1993] に比すべき研究の欠如が、そのまま日本の中国近代史の研究水準を物語っている。

その意味でいま一度、外国史料を理論の先入主なしに使っていた Morse [1910, 18]、Owen [1934]、Pelcovits [1948] をみなおさなくてはなるまい。そして日本語の矢野仁一 [1926][1930]、英語の Fairbank [1969 (1953)]、Hsü [1960] にはじまり、坂野正高 [1970]、佐々木正哉 [1958][1963] にいたる、外国史料に対する中国史料の校合と考証を通じた、対外関係史叙述の価値を再認識したい。

こうした国際的契機による中国近代史の展開は、本書第10章であつかつているので立ち入らないが、その内部構造としていくつかの点を加えておく必要がある。その全体をみわたすには、Morse [1920 (1908)] がいまも参照に値する。なかでも重要なのは、軍事と財政の転換である。まず軍事は羅爾綱 [1939]、鈴木中正 [1971 (1952)]、王爾敏 [1967]、波多野善大 [1973]、これを支えた借款・関税・釐金は、湯象龍 [1987]、徐義生 [1962]、湯象龍編著 [1992]、羅玉東 [1936] で概観できる。これらが当時の政治社会構造と密接な関係にあったのは、くりかえすまでもない事実だが、その解明は、経済史・社会史の個別研究が進展をみせるなか、意外にすすんでいない。制度そのものを視野に入れた洞察を十分にともなっていないからである。近年でまとまったものとしては、Kuhn [1970]、黒田明伸 [1994]、岡本隆司 [1999]、岩井茂樹 [2004]、本野英一 [2004] があるくらいで、なお総合というにはほど遠い。さしあたって波多野善大 [1961]、村松祐次 [1980 (1970)] など、他方面の考察と関

連づけるところから出発するばかりではない。「アジア交易圏」論も「グローバル・ヒストリー」論も、そうした作業をあくまで史料分析に即して組み込むことで、はじめて中国内をも正当に位置づける、実のある議論になってゆくであろう。

以上の財政・軍事力の問題は、清朝内部の統治構造に影響をあたえたばかりではなく、同時に対外紛争史の展開とも不可分の関係にあつて、後者がとりわけ日本の研究史上、手薄だといわざるをえない。その重要性はたとえば、Cordier [1902]、邵循正 [2000 (1935)]、Eastman [1967] に見える、ヴェトナムをめぐる清仏関係の内情を一瞥すれば、ただちに諒解できるし、あらたな視角の端緒をも掴みうる。そうした対外紛争史の全体をみわたすには、蔣廷黻 [1934]、入江啓四郎 [1935]、坂野正高 [1973] がやはり至便である。

〈3〉非ヨーロッパ列強と中国

なかでもロシア・日本との関係が、直接に清朝の体制を変革する契機になった点で重要である。Бантыш-каменский [1882]、Cahen [1912] を古典とする清代のロシア関係史研究は、本書第9章でふれたように、急速な進展を見せているけれども、いっそう重大な19世紀後半以降のそれをも包括する視点は、吉田金一 [1963] [1974] があるくらいで、なお不十分の観がいなめない。まず焦点となるのは西北、新疆であつて、その点でヤクープ・ベク政権、左宗棠の西征、そして新疆の建省は、どれほど強調しても過ぎることのない大事件である。その背景は羽田明 [1982]、榎一雄 [1984-87] によって、その過程は Jelavich and Jelavich (eds.) [1959]、Hsü [1965a]、Chu [1966]、Ходжаев [1979] で、ひとまず大筋をつかむことができる。以後の新疆問題もしたがって重要たるを失わない。課題は民族主義形成と新疆在地支配の推移を、いかに関連づけて対外関係史のなかに位置づけるかであつて、佐口透 [1963]、濱田正美 [1983] [1993]、Hamada [1990] などのトルキスタン研究を統合する視角と作業が必須である。その最大の成果は Kim [2004] であつて、これをこなしたうえであらためて、Hsü [1965b]、劉石吉 [1971] がつとに提起した、「海防・塞防」論争の中国史・世界史上における意義を考えるべきであろう。

新疆に劣らず、そして日本人にとってはるかに、重大な意義をもつのが、日清・日露戦争を導く東三省・朝鮮半島方面の問題である。これに関しては、佐々木揚 [1979] [1996] が内外の文献・史料を懇切に教えてくれるけれども、露文史料への接近がなかなかすすんでいない。その点でも Романов [1928] と Нарочницкий [1956] は必読である。前者は英訳も和訳もあるが、むしろ矢野仁一 [1937] [1941] との併読を勧めたい。

日清戦争にかぎれば、日本近代史の加速度的な細分化のなかにあつて、田保橋潔 [1940] [1951]、信夫清三郎 [1970] が、さして事情はかわらなくなった中国史の側でも、王信忠 [1937] が、ひろい視野から基本的な論点・史実・史料を教えてくれるも

のとして、なお価値を失っていない。近年は研究蓄積と史料状況の不均衡によって、目配りのゆきとどいた、バランスある論述がかえって困難になっており、岡本隆司 [2004] はそうした状況を克服しようとした試みである。日清戦争開戦史として、高橋秀直 [1995] と Sasaki [1984] を読み比べるだけでも、そのあたりの事情がはっきりするであろう。

日清戦争・義和団・日露戦争とつづく世紀交の歴史過程は、日本史はもとより、中国史にとつても世界史にとつても、大きな分水嶺である。19世紀後半にそれなりの安定を保っていた中国は、いっきに混乱と革命の時代に入った。パクス・ブリタニカを謳歌したイギリスの覇権も、Nish [1966]、Young [1970] にあるように、極東で名誉ある孤立を放棄せざるをえないところまで追い込まれた。そのなかで日本が浮上し、アメリカが登場してくる。20世紀前半の中国史は、帝国主義の勢力角逐の場と化すなか、民族主義の成立と実現がその主旋律をなす。そこで絶大な役割をはたしたのは、ヨーロッパならざる日本とロシアとアメリカであつた。Louis [1971] はイギリスの立場から、如実にその状況を描き出す。

かえりみて明治維新以来、その動機が異なっても、中国が日本を敵視しなかったことはない。それは佐々木揚 [2000] に説くとおりでである。清末民国の政治史上、李鴻章から梁啓超、孫文、蒋介石にいたるまで、とくにその民族主義の形成において、日本は身近なモデルとして、譲れないライバルとして、絶大な位置を占めた。20世紀にはいつてからの中国史は、そうした意味で日本の衝撃でもあり、きわめて明快である。したがって中国近代史を日中関係史に矮小化してしまう向きも少なくなく、そこには歴大な蓄積もあるが、そうは簡単にいかない。

なかでもアメリカとの関係は、あらためて腰を入れてとりくむべき課題のように思える。そもそも日本では、ヨーロッパ学に比してシナ学はもとより、それにもまして、ロシア学・アメリカ学の蓄積が乏しい。日露・日米関係はそれなりの蓄積があつても、ほかにまで十分に手が回らない、というのが実情なのであろう。だが日露にせよ日米にせよ、その関係史は大部分、中国を抜きにして考えられないのであつて、中国史との相互関連は中国史の立場からそれに応じ、かつ補ってゆく必要がある。

それでもロシアのほうは、ツァーリズム・コムニズムいずれにしても、詳細はともかく、中国の外交・内政に対するそのプレゼンスは自明に属するし、日本に限らない史料条件の制約のなかにあつては、比較的良好にわかっているというべきであろう。本書第11章にふれた国共合作と深い関係にある事情で、中国の学界からも手がかりを獲られるから、省略してさしつかえない。それに対し、はるかに史料条件が良好なはずのアメリカは、明らかに手薄である。

〈4〉アメリカの登場と中国史

第一次世界大戦からワシントン体制の時期、世界の大国としてアメリカが抬頭して

きて以後、極東国際政治におけるその役割は、細谷千博・斎藤眞編 [1978] をはじめ、参考文献に事欠かないから、ここでくわしくくりかえすまでもない。むしろ19世紀から、そこにいたるアメリカの役割、その比重の連続・断絶がなお、系統的な研究をへていない課題である。やはりまず、Dennett [1922], Treat [1963 (1932, 38)] にあたって、その全体をつかんでおかななくてはならない。あまりに外交に偏っているのなら、Hunt [1983] で補うとよいだろう。

個別の問題では、中国人移民が第一に重要である。まず油井大三郎 [1989], 貴堂嘉之 [1992][1995] を参照すべきだが、とくに日本語による研究は、アメリカ史・移民史から接近するものがほとんどで、視角と史料はその意味でかぎられている。中国史の文脈では、菊池貴晴 [1974 (1966)], 張存武 [1966], 吉澤誠一郎 [2003], さらに革命史と関連する歴大な研究にうかがえるように、ほとんど20世紀初頭の民族主義形成に収斂してきたテーマであった。両者のあいだをいかに接続、充実させてゆくかを課題としなくてはならない。そうした点で、Yen [1985][1995] が注目する移民保護の外交制度史は、一つの出発点になりうる。百瀬弘訳注 [1969], 羅香林 [1977] が言及する中国側の留学生・教育事業も、それと不可分の関係を有しつつ、中国内の政治外交全体にひろがる問題である。これに経済史的な関係の分析成果がくわわってようやく、古矢旬 [2002] がいつそうひろい文脈で描く、アメリカの世界制覇の展開と考えあわせる必要も出てこよう。

19世紀半ばにアメリカ合衆国が、太平洋をはさんで日本・中国と関係を取りむすんだ事実は、別の角度からみれば、現在に直接つながるグローバル世界史展開の最終段階に入ったことを意味しており、環太平洋地域がようやく、本格的に世界史の舞台となりはじめる。1850年代、カリフォルニア・オーストラリアのゴールドラッシュで本格化する中国人移民も、いわばその一環であって、移民問題はかくて、アメリカ・中国の二国間関係にとどまらない。内田直作 [1949] 以来、日本人が日本華僑を主たる対象にしてきた、いわゆる華僑・華人史研究も、そうしたひろがりのなかで、時代の段階と地域の偏差を十分に考慮に入れて、構築しなおす時期にさしかかっている。可見弘明 [1979] はその視点から、あらためて読みなおすべきだし、Yen [1976][1986] の豊かな情報と斯波義信 [1990][1995] のひろい視野は、その足がかりになるであろう。

新たな動きは実際に始まっており、籠谷直人 [2000] はその代表的な成果といってもよい。しかしそれと並存していた近代国家・多国籍企業のネットワークとの総合的な比較や相互関連をも、追究しなくてはなるまい。後者の研究は個別ならざるをえないから、これで完全に十分だということはあるまい。それでもたとえば、銀行史の権上康男 [1985], King [1987, 88], 日本の外交通商史で、角山榮編 [1986], 角山 [1988] のように、ずっと先行する蓄積がある。にもかかわらず、近年それらは閑却されがちではあるまいか。華僑・華人というものの存在じたい、さまざまな側面で近代国家の形成と支配を前提とするのは、白石隆 [2000] の主張をまたずとも自明であ

る。それなら逆に、やはりさながら自明の存在である近代国家・多国籍企業も、それとの関連から位置づけなおす可能性も生まれてくる。ともあれ、人種差別と民族主義形成の政治史だけでも、唐人街と華僑・華人共同体内部の社会史だけでも、単なる労働力移動と交易金融関係の経済史だけでも不十分であって、すべてを統合できる視座をつきとめなくてはならない。

もっとも課題をそのようにさだめたなら、それは何も、アメリカ・太平洋・中国人移民という論点にかぎったことではなくなる。環太平洋地域が重要になってゆく過程は、そのまま現在も進行中の20世紀中国史、民族主義が成立する経過と重なり合う。マルクス流にえば、「上部構造」にあたるこの民族主義成立に対する考察は、必然的に「下部構造」をどうとらえ、それとの相互関連をどうみるべきかという課題ともなう。それは「社会主義市場経済」という、言葉の上では矛盾する現代中国のありようが、1980年代以降の中国史研究につきつけた課題とも相通するものであって、すでに中国史の内部にも、内藤虎次郎 [1914][1924] 以来の「国家と社会」に対する考察をあらためて要請してきた。その構図を世界規模にひろげて、ごく乱暴に単純化するなら、中国の北方と環太平洋地域が「上部構造」を少なからず規定したのに対し、国内・国外を問わずに存在する、経済・文化的な共同体という「下部構造」が、南方とシナ海・インド洋と密接に関わっていた、という事実をどのようにみるか、そして近代日本は、そのなかでいかなる位置を占めていたのか、という問題になってくる。国民革命から中華人民共和国建国までの過程と、日・英・米・ソのプレゼンスの政治的・経済的比重およびその推移とを考えあわせるだけで、その構図を全体として描きなおす必要性は認識できるだろう。換言するなら、20世紀中国史と19世紀中国史の関連であって、いずれかしかみないようでは、片手落ちだということである。

〈5〉世界史と中国史——課題にむかって

その探究がすすんだなら、狭義のいわゆる近代史はもとより、前後の時代に対するみかたも、やがてかわってくるであろう。もっともいまは、そうした事情を課題ともみさない向きが主流である。研究者の関心と精力が急速に、20世紀の事象にシフトしつつあるのは、そのあらわれだとみることもできよう。中華人民共和国でさえ、なかば歴史の対象と化しつつある現在、その中国を基準に考えるのはやむをえない状況なのかもしれない。しかしそれもしよせんは、歴史的存在にほかならない。大きな中国の変化は、見た目よりはるかに緩慢である。その変化の実相と転換点を見失わない長い目をもちたい。そこに歴史を学ぶということの意義もあろう。学問は歴史に極まる、のである。

19世紀からは「国民国家」、冷戦以後20世紀も終わりになると、それに代わり、「文明圏」がわれわれの世界観をしばっている。かつて木村尚三郎 [1968][1975] はその転回を、ヨーロッパ史の時代区分のみなおしに託して、「近代の神話」と表現し

た。まさしく西洋人が世界を自儘に定義した「神話」ではあろう。だがこのフレーズが耳ざわりのよい、俗耳に入りやすい言葉であることじたい、西洋人ならざるわれわれが、いかに西洋的思考をすりこまれているかを逆説的に示している。一知半解でもたれかかりがちなヨーロッパ的価値のみなおしばかりでなく、「神話」の神話たるゆえんにまで、さかのぼって考えなくては、「神話」を再生産する循環に陥ってしまう。そうした点、飯塚浩二〔1969 (1960)〕の議論は残念ながら、いまなお意味を失っていない。歴史学にかぎっていうなら、川北稔〔2003〕のように「西ヨーロッパ中心史観への疑念は」「ウォーラーステインやフランクがそれを確信にした」といわしめるがごとき思考は、われわれからみれば、あいもかわらぬ西洋中心史観以外の何物でもない。

ウォーラーステインにせよフランクにせよ、アジア史を歴史学的にきちんとやったわけではない。しかし欧米語のアジア史文献をおさえたうえで、主観的にはあれ、旧来の西洋史の枠組を乗り越えようとした。せめて日本の西洋史は、自国の日本史・アジア史を咀嚼消化したうえで発言し、できうべくんば西洋製の西洋史とは異なる西洋史をつくってもらいたい。率直に言って、東洋史の学徒が自国の西洋史を勉強するのと同程度は、東洋史を勉強してほしいと思う。西洋史が直面する苦悩の打開は、それがひとつの足がかりとなるのではないだろうか。

もちろん妄言でなければ、望蜀のたぐいであろう。そう言うには何よりもまず、西洋史そして日本史にふりむいてもらえるような、良質のアジア史と中国史をつくる必要がある。西洋史と日本史とのほごまにあつて、おそらく百年単位の格差が蔽存するなか、両者の参照に堪える研究を産み出すには、いかにすすんでゆくべきか。たちどころに答えがでるならば、本書はそもそも無用である。問い続けていかざるをえない問題なのだろう。

新しい事象・資料・観点・手法を追い求めざるをえないのは、何も歴史学にかぎらない学問の宿命である。けれどもそれが、従前に不十分なまま省みられないものを放置してよいことにはならない。とくに歴史学はそうであつて、なかでもアジア史・中国史の実証研究にあてはまらう。真の世界史構築のため、過去のそして将来の中国史研究が負うべき責務は、やはり軽からざるものがある。

子曰く「先づ其の言を行ひて、而して後に之に従ふ」。こちたき議論を重ねるよりは、みずから一步をふみだすにしかず。遅れているからこそ、可能性もあろうというものだ。本章がそして本書が、少しでもその可能性をひろげるよすがならんことを願っている。

(岡本隆司)

第II部 中国歴史研究のために

A. 史資料を読むために

井上 進・浅原達郎・大澤顯浩

1 目録学——読書の門徑

◆中国史研究における史料

まったく当たり前の話だが、史料を用いぬ歴史研究などというものは存在しない。そして中国史の研究となると、必ず史料として書籍を利用することになる。何を今更、そんなこと当然ではないか、と思われるかもしれないが、これはたぶん中国史研究の著しい特徴である。というのも、たとえば今日の日本史研究では、どんなテーマを論ずるにせよ、文書をまったく用いないことなどまず考えがたい、一般的に言えばそうであろう。ところが中国史の論文となると、引かれる史料は書籍だけ、文書はまったく登場しない、というのも決して稀ではないのである。なぜそうなるのであろう。中国には日本、ないし西欧におけるような形で文書が伝わっていないから、むしろそうには違いない。ならばそうした差異はどこから生じてくるのか。

中国では日本、あるいは西欧と異なって、領主制の成立を見ることはついになかった。更に近千年になると、社会内容の流動性は科举という制度的保証を得てより高まり、支配階級は総体としてはなほ安定する一方、個別の家系は上昇下降を繰り返すこととなる。つまり近千年の中国において、何百年にもわたって永続する「家」というものは、帝室という特殊な例外を除き存在しない。しかも中国の中央集権的な皇帝制度は、行政、司法等の文書を官府、そして朝廷に集中せしめ、結果として一旦その王朝が崩壊すると、それまで蓄積されていた文書類が根こそぎ失われる、という事態を招いた。

更にもうひとつ、いわば「積極的」な原因もある。すなわち伝統中国における史学の発達、ということである。近代になって、中国がはじめて自らを圧倒しようとする異質な文明と向き合った時、中国人は自らの何者たるか、中国文明とは何であったのかを問わねばならなかったが、そうした中国文明の総点検、総決算をやってみると、「中国では各種の学問の中で、史学こそがもっとも発達した。史学は世界各国の中で、

中国こそがもっとも発達した。(二百年前にはそう言うことができた)」という結論が導き出された(梁啓超『中国歴史研究法』第二章)。たしかに中国には、前8世紀からの明確な紀年をもつ年代記(『春秋』)が存在し、前1世紀に『史記』が成立して後は、絶えることなく、二千年にわたって歴代王朝の歴史が書き続けられた。かくして今日の我々は、驚異的な正確さで数百年、ないし千年、二千年以上も昔のことを知りうることとなったのである。

だがこうした史学の発達、もともと国家が設けた史官制度と深く結びついたもので、歴史叙述を中央の政治史に偏重せしめ、また整理、加工を経ていないナマの、一次的史料を伝わりにくくもした。結果として中国における史料というのは、まず何よりも史籍、ついでその他の書籍を中心とし、文書や金石にしても、やはり多くの場合は原形のままでなく、編纂され書籍となった形で利用する、ということになる。

こうして二千年以上にわたり、間断なく生み出されつづけた史籍は、まったく他の国に類を見ない膨大な量となっているし、また史料としての書籍、というのは要するに書籍一般も、この持続する文明の中で、信じがたい厚みの堆積をなして今に伝わっている。中国の書籍世界を語るとなると、常に用いられるのが「浩として煙海のごとし」という言葉だが、これはじっさい少しも誇張のないところであろう。ならばこの書籍の海に漕ぎ出す、それも岸辺のポート遊びというのではなく、本格的な航海に出るといふ時、海図とかコンパスをもたない、あるいはもっていても使い方を知らないというのでは、これはもうどうにもなるまい。この書籍の海に海図やコンパスに当たるもの、それが目録である。

◆目録と目録学

ある方面の研究に関心を持ち、自分でもその方面の問題を考えてみようとなった時、主としてどういう史料(書籍)を用いるべきなのかは、それまでに読んだ著書、論文などを通じて、ある程度分かっているであろう。そしてそれが、たとえば『史記』や『漢書』であるなら、研究室なり図書館なりにある中華書局標点本を借り出してきて読む、といったことでひとまずは片がつくに違いない。だがその場合でも、自分が用いる史料の何たるか、それはいつの誰が著した、どういう内容、性格のものであるのか、またそれは著作ないし史料として、今までどのように評価されているのか、更にテキストや注釈にはどのようなものがあり、それらの特徴や得失についてはどう言われているのか、といったことを心得ておくのは当然、少なくとも研究というほどのことをやろうとするならそうである。

むしろ『史記』『漢書』ともなれば、そうしたことはかなりの程度まで常識であるし、また標点本にはふつう点校説明とか前言などが附いていて、その書物に関する基本的知識は、それを読めばだいたい得られるようになっていて、しかし一口に標点本と言っても、その水準はまちまちであるし、そこに附されている説明や前言にしても、よく書けているもの、あまり感心できないものと様々である。それにそもそも、「浩として煙海のごとし」き中国の書物のうちで、標点本があるのはほんの一部だけ、数の

上から言うなら、たいていの書物は説明もなければ整理もされていない、昔のままの本で読まねばならない。

かくしてまず査閲すべきは目録、となるのであるが、ここで用いるべき目録、もっぱら伝統中国の書籍、中国ではふつう「古籍」といい、わが国では「漢籍」と称される書物を著録（記載）する目録とは、いったいどのようなものなのか。それはいかなる基本理念のもとで、どういう構造によって成り立っているのか。また全体ないし分野別の代表的目録にはどのようなものがあるのか。そうしたことを何も知らないまま、ただやみくもにいくつかの目録を開け、索引を頼りに目指す書物を探してみても、しかるべき成果を得るのは難しいだろう。

目録とは何であろうか。それはもともと「その篇目を糸（箇条書きにして）、その旨意を撮り、録してこれを奏」（『漢書』芸文志）する、つまりある書物の篇目と主旨を録することを本義とした（余嘉錫『目録学発微』）ものであるが、そうした「録」の集合は最初から、というのは前漢末に成立した劉歆の『七略』から、すでに「九流もって別」たれる、明確な分類体系のもとに組織されており、これを承けて『漢書』芸文志は、「ここに目録を著」した（『漢書』叙伝下）のであった。つまりここで問題とする目録とは、その成立の当初から部目にしたがって書物を著録したものであったのであり、そこに一定の分類体系が存在するのは、改めて言うまでもない、当然のことなのである。よって書籍をその名の五十音順に並べたものなどは、わが国では往々「目録」と称されているけれど、実は簿録（帳簿）でこそあれ目録とは言いがたい。

ならば漢籍はどのように分類されるのか。それはその書物の内容が、伝統的学問体系の中で占める位置にしたがって分類されるのである。つまり漢籍の分類体系とは、伝統学問の体系そのものであり、目録とはその見取り図に他ならない。そしてこの体系の根幹をなすのが、経史子集の四部分類である。中国の学問は、すでに『七略』において明確な分類体系を有していたが、この古い体系は漢帝国の崩壊とともに変容を余儀なくされ、六朝を通じて四部分類という新しい体系に生まれ変わり、これが伝統中国の学問を最後まで規定したのであった。

四部分類は学問＝書籍の全体を経史子集の四部分に分かつものであったが、この経史子集とは何であろうか。まずはその首位を、というのは最高の地位を占める「経」。これは聖人の「制作」（文明ないし文明原理の創造）に係る、普遍的な価値（通義）を示したものであり、経部にはこの経書、およびその注釈（伝、注）、再注釈（疏）、更にはこれらを読むための基礎である「小学」（訓詁、文字、音韻の学）などが含まれる。ついで「史」とは「義」に対する「事」、普遍的な価値に対する具体的な事実を記す学問分野で、至高の「義」も具体的な「事」を通じてしか実現の途をはかりえないのであるから、史学は経学に次ぐ地位を占めることになる。

その次の「子」とは、諸子百家などという時の「子」で、「六経（経書）より以外に説を立つる者は、みな子書」（『四庫全書総目』子部総序）である。つまり子部の書

とは一人一家の、特定のある学者、学派の主張、学説を伝えた著作であり、正統思想たる儒家を筆頭に、兵家、法家、農家等々がこれに続くことになる。またこの子部には、何らかの「説を立つる者」がみな含まれるのであるから、正統からすれば価値と無関係な、ないしは反価値の書もすべて入ることになり、「士」たらんとする限り必ず修めねばならぬ「学」に対し、特殊専門家だけが関わればよい「術」を述べた書、医書や天文算法、術数、あるいは芸術、更には漢末以降における異端の典型、仏、道の宗教書などもここに属することになる。

最後は「集」。これは要するに詩文、文学と考えてよいが、それが四部の最後に位置するのは、文章表現に意をそそぐなど「壯夫はなき」ざる「雕虫篆刻」、言うに足らざる瑣末な技巧（揚雄『法言』吾子）にすぎず、「辞賦は小道」（曹植「与楊徳祖書」）、堂々の正論としてはそうだったからである。ただしこの小道は、それを自己目的化してはならぬものの、いわば最低限でもあるわけで、まともな詩文を作れないような者はそもそも士たりえない。かくして集部の書は、他の三部のいずれにもまして多く著され、量的には四部の首となっているのである。なお漢籍目録の分類につき、更に具体的な詳細を知りたい場合は、井波陵一『知の座標——中国目録学』（白帝社、2003年）に懇切な解説が備わっているので、そちらを参照していただければ幸いである。

以上のごとく全体を四部に、各部を若干類に分け、場合によっては類を更に細かく分類し、そこに対応する書物を撰者の年代順に配列した目録は、「類例すでに分かれたれば、学術おのずから明らかたり。その先後本末つぶさに在るをもってなり。……その書を觀れば、もってその学の源流を知るべし」（鄭樵『通志』校讐略）となるためのもので、過去の学術全体を体系的、系統的に反映する、というのがその理念である。つまり書籍を分類して著録するというのは、目録という形式を通じた学術史の記述であるべきものなのであり、ここから目録学なる学問が成立することとなる。目録学の理論化をはかった清代中期の学者章学誠が、目録とは「学術を辨章し、源流を考鏡」するもの、と言っている（『校讐通義』叙）のは、この目録学の理念をもっとも端的に表現したものであるだろう。

もっともだからといって、あらゆる目録はすべて学術史の著作であるなどと言うなら、それはかえって実際から乖離した、こけおどしの話になってしまうだろう。「学術を辨証し、源流を考鏡」するとは、あくまで最終的に目指すべき理念なのであって、現実における目録学の営為は、もっとうずと地味な、そこに至るための基礎研究こそを主要な内容としている。すなわちひとつひとつの書物の内容とテキストを正確に把握することである。そしてこの内容とテキストの把握というのは、言うまでもなく緊密に関係しあうものであって、ある書物の内容を深く、精密に把握しようとするなら、テキストの調査とそれにもとづく校勘がどうしても必要となってこよう。じっさい多くの本（テキスト）を集めて校勘を行い、定本化したうえで解題を作成するというのは、目録学の祖ともいべき劉向（劉歆の父）が、その図書整理事業におい

でもっとも力を尽くしたところであった。

校勘を成功させるためには、テキストの把握が必要であった。すなわち現存する諸本にどのようなものがあるのか、それらはいつ、どこで、誰が鈔写ないし刊行したのか、また各本の特徴はどのようなもので、その間の関係やいかん、といった版本の調査と研究が前提となるわけである。かくしてこの版本の研究は、今日ではそれ自体がひとつの専門、版本学となり、文献の学であると同時にモノの学でもあるという、独自の研究分野を形成するに至っている。

◆目録を読む

こうした目録学の営為をもっとも要約された形で表現した目録は、単に検索の用に供されるだけでなく、読まれるべきものでもある。なかんずく解題目録は、最初からふつうの意味で読むためのものとして著されており、ひろく漢籍の利用者一般にとって、とりわけ高い参考価値をもっている。もちろん解題目録といっても様々であって、その間には叙述の重点に違いもあれば、出来不出来の差もあるのだが、ここでまず取り上げるのは、解題目録の典型ないし代表と言ってよいだろうもの、張之洞が「群書を読むの門徑」と評した(『翰軒語』語学)『四庫全書総目』である。

『四庫全書総目』というのは、乾隆中の有名な文化事業、と同時に文化統制事業という意味をもつ『四庫全書』の編纂に際し、文淵閣著録(『四庫全書』に収録)の書はもとより、採録の価値なしとされた著作についても一々作成された解題を集めたもので、著録の書が約三千五百種、その選に漏れた存目(目録だけに見える)書が約六千八百種、つごう一万余種の総目に他ならない。一万余種の書とは、18世紀における現存書の大半というもさほど大げさではなく、ことに話を元代以前の著作に限るなら、そのほとんどはここに網羅されていよう。それだけの書物のすべてにつき、「まず作者の爵里を列ね、もって世を論じ人を知り、ついで本書の得失を考え、衆説の異同をはかり、もって文字の増刪、篇帙の分合に及ぶまで、みな詳らかに訂辨をなし、巨細遺さず(『四庫全書総目』凡例)という解題を作ったことは、何と言っても空前の大事業であった。

しかもこの解題の作成には、戴震や邵晋涵、姚鼐といった優れた学者も数多く参加し、それを更に総纂官紀昀、やはり相当の学者、が一手に修改したのであり、「その大体につきてこれを言わば、劉向の『別録』より以来、わずかにこの書ありと謂うべきなり」と称される(余嘉錫『四庫提要辨証』序録)のも、あながち過褒ではない。われわれがある書物を用いる、それについて調べるとなった時、まずこの目録を査閲するのが第一歩、となるゆえんである。

ここでちょっと本題からはずれて『四庫全書』の話。かつて『四庫全書』というと、その姿は『四庫全書珍本』なる叢書によって、部分的に窺うのみであったが、近年では文淵閣本全部の影印本が台湾商務、および上海古籍から出版され、その利用もすこぶる一般的となった。これはむしろ慶賀すべきことで、永楽大典本(流伝の絶えていた書物につき、『永楽大典』から輯出した本)をはじめ、ふつうには『四庫全書』本

でしか見られない著作もかなりあるし、その他についても一般の条件では、『四庫全書』本を用いるしかない、ということが少なくないだろう。だがその際に心得ておくべきなのは、『四庫全書』本が決してよい本ではない、ということである。

そもそも『四庫全書』は、官修の鈔本(写本)であった。そして官修というのは、古今東西を問わず無責任の同義語と言ってよいし、鈔本とはどうしてもある程度の、一般的に言えば刊本より多くの、訛脱を免れぬものである。つまり『四庫全書』にテキストの精善を求めるのは、最初からほとんど出来ない相談なのである。もとより『四庫全書』の纂修は、乾隆朝の「右文」を誇る一大事業であり、そこでは仕事の質にもそれなりの注意が払われてはいた。しかし監督の任に当たった官僚たちが問題にしたのは、本文の質であるよりは見た目の整齊であり、また「夷狄」といった「違碍」(不都合な)字面の刪改、およびそれをしかるべき期限内に仕上げることであった。したがって諸本の比較、底本の選定、校勘といったことははなから問題にならず、結果として提要が拠った本と『四庫全書』本の底本が異なってしまう、ために両者がうまく符合しない、といった傑作な事態さえ起こっているのである。

版本ばかりではない。『四庫全書』本は底本にあった序跋の類を録していないが、序跋というのは多くの場合、成書、出版の経緯、著者の意図などを述べていて、その書の何たるかを知る上ですこぶる重要なものである。またすでに言及した故意の刪改もある。これは「夷狄」等の「違碍」字面はもとより、「夷狄」の先輩たる金元の事跡について、更には四庫館臣ないし清朝「欽定」の価値基準に合致せぬ古人の行為、たとえば婦人の改嫁といったことにまで及ぶもので、そうした事実を明らかにしている魯迅の「病後雑談之余」(『且介亭雜文』)とか顧頡剛の証言(『古今偽書考』顧序)などを読めば、何とも苦勞なこと、と言いたくなるほどである。

『四庫全書』というのは、たしかに多くの利便を与えてくれるものの、同時に多くの問題をはらんでもおり、それを用いるには慎重さが必要であった。これは『総目』についてもまったく同じことで、そこには無意の誤りはむしろ、ろくに中身を読みもせず、草卒に事を了えた「官様の文章」や、版本に対する無責任、ないし無理解から来る誤りも多ければ、「欽定」の価値判断から来るきわめて強い主観性も存在している。

たとえば『総目』子部類書類存目一の『左粹類纂』には、「この編は『左伝』記す所の事をもって、十五門に分ちて編載す」と述べられているが、実のところ「左粹」の「左」とは『左伝』ならぬ左丘明で、ここでは『左伝』と『国語』のことを言っている。また同じく類書類存目三の『類書纂要』は三三巻、「国朝周魯撰」として著録されているが、これは明の鄒道元撰、万曆二三年刊本『彙苑詳註』三六巻の版木を流用し、書名を改めたうえ新しい序文と凡例をくっつけただけのもの、またその三三巻というのは、単に末三巻を欠く不全本に拠っただけのことに相違ない。

『総目』の著しい主観性をもっとも端的に現れるのは、明末の著作に対する評価においてである。四庫館臣たちは、明末の書といえは概ね漫罵をほしいままにし、更に

はこれをまったく無視し、往々にして存目にさえ取り上げなかった。たとえば「独り性靈を抒べて格套に拘ら」なかつた袁宏道ら公安三袁（公安県出身の宏道ら袁氏三兄弟）を抜きにして、明末の文学を語ることは不可能であろう。ところが袁宏道の集は『四庫全書』に収められず、更に存目におけるその評価は、三袁の文学など「ただその聡明を待」んだだけ、流弊の至るところ「律を破りて度を壊す」こととなり有害無益、という全否定である。しかも袁宏道はまだ存目に列なっているが、兄の宗道、弟の中道の集となると存目にさえ登場しない。むろんこうした否定、罵倒は、逆説的にすこぶる参考になるのではあるが、いずれにせよ『総目』というのが、用うべきものでこそあれ奉じて準繩となすべきものなどではないこと、これはまったく疑いない。

◆諸家書目

四庫館臣の立場やイデオロギーの問題は別にしても、一万余篇の解題となれば、そのうちに相当の誤りや不足が生ずるのは当然である。よってある書物をやや詳しく調べるといふなら、『総目』によるだけではとても間に合わず、先人のなした訂補や、その他の目録を査閲することが必要になってくる。まず『総目』の訂補について言うと、もっとも有名なのは余嘉錫『四庫提要辨証』（科学出版社、1958年。中華書局香港分局、1974年。中華書局、1980年等）。撰者の余氏は樸学（清朝考証学）の伝統を継承した碩学であり、しかもこの書は「一生の精力の萃まる」と自ら言う（序録）もの、その考拠の精も論断の確も、今に至るまで右に出るものがない。

ただこの書はたしかに精かつ確であるとはいえ、それが辨証するのは五百種に満たず、存目の書はごく僅かしか取りあげられていないし、文淵閣著録の書についても、問題とすべき点がすべて網羅されている、などということはむろんない。そこで更に参考に値するのが、胡玉縉『四庫全書総目提要補正』（中華書局、1964年）である。この書が考辨するのは二千三百余种、その各々につき目録や筆記、文集など、種々の文献より関係する記事を録して、引証するところは博しと謂うべく、そこには読者各人の研究にとって有用な文字も、往々にして見出すことができるであろう。もっともこの書の「博」には「要寡なし」の気味もあって、議論はしばしば支蔓瑣屑に流れるし、また事実というよりはある人の評価や意見なども長々と引用しており、これにはいささか閉口させられる、少なくとも私の場合はそうである。

余嘉錫や胡玉縉の著はそれぞれに有用なものであるが、「しかれども提要においてはなおいまだ十一に及ばざるなり。これを継ぎて作るあるは、すなわち後の学者に在り」（『補正』王欣夫跋）というわけで、これ以後にも李裕民『四庫提要訂誤』（書目文獻出版社、1990年）、崔富章『四庫提要補正』（杭州大学出版社、1990年）といった著作があるのだが、今はそれらとは別に、周中孚『鄭堂読書記』を紹介しておきたい。

この『読書記』は道光初年、周氏がある収蔵家に代わって著した蔵書志をもとにしたもので、現行本に収められる解題は四千余种、一人の力で、またたぶん四、五年ほどの限られた時間でこの大著をものしたとは、まったく驚くべきことである。もとよ

りそうした成立事情からして、その解題は篇々みな精義ありとはいかないが、それでも『総目』と併せ考えるだけの価値はあるし、またそこには『総目』以降の、乾隆よりほぼ嘉慶中に至る間の著作も数多く著録されており、この点でもすこぶる有用である。

なお『鄭堂読書記』には呉興叢書本、戦後台湾から出版された国学基本叢書本、およびもとの国学基本叢書本ないしその重版本があるが、前二者、つまり呉興叢書本と台湾の国学基本叢書本はあまりよろしくない。というのもそれらは、『読書記』の前身である『慈雲楼蔵書志』から輯出された「補逸」（羅振常『善本書所見録』商務印書館、1958年に附録の周子美「慈雲楼蔵書志考」を参照）を含んでいないからである。正編七一巻に対し「補逸」は三十巻、収めるところは千篇以上に及び、これを欠くことはほとんど致命的な問題と言ってよいだろう。

『四庫全書総目』が著録するのは、その纂修時にすでに古人となっていた者の著作のみであった。つまりこの目録によっては、清代の学界が挙げた成果の、その大半につき何も知り得ないわけである。そこでこの空白を埋めるべく著されたのが、『統修四庫全書総目提要』の原稿である。この『統修』の企画はほぼ1930年代、日本の対中国文化事業の一環として設立された北京人文科学研究所によって遂行されたものであるが、その撰者には呉承仕、倫明、胡玉縉、謝国楨等々、れっきとした学者が名を列ねており、原稿の内容自体に格別の政治的偏向を認めることはできない。もっともこの企画は、ついに完成することのないまま日本の敗戦を迎え、北京人文研に集められた原稿も、長い間放置されていたのであるが、1972年に至り、その一部一万余篇が台湾商務印書館より『統修四庫全書提要』として出版され、更に1993年には経部の全稿が中華書局より『統修四庫全書総目提要（経部）』として出版、そして1996年には、その全部三万余篇が齊魯書社より影印出版された。この目録は『総目』以降の著作のみならず、『総目』未収の明人著作なども多く収めており、その学術的価値はすこぶる高い。

総合的な解題目録についてはこれくらいとし、以下では個別分野の代表的目録や、その他の参考文献についていくらか紹介しておきたい。まず最初に取り上げるのは、目録というよりは史料学の著作というべき柴徳廣『史籍挙要』（北京出版社、1982年）である。この書はその名からも分かる通り、中国史を学ぼうという学生のため、正史や通鑑、三通といった基本史籍を解説したもののだが、その叙述はどうしてなかなか本格的で、各書の撰者、史料来源、史学史上の位置、注釈、版本などにつき行きとどいた叙述がなされており、著者の功力を十分に示している。中国史を専攻しようという者が、この書を読んで損することは決してない、と信ずるゆえである。じっさい柴氏は陳垣の高足で学に根柢あり、私など今もこの「入門書」のお世話になることがしばしばなのである。

次は経部書の総目『経義考』。この目録は清初の学者朱彝尊の撰で、『四庫全書総目』によってその概略を述べれば、「この編は歴朝経義の目を統考」し、「一書ごとに

前に撰人の姓氏、書名巻数を列ね、……次に存、佚、闕、未見の字を列ね、次に原書の序跋、諸儒の論説、およびその人の爵里を列ね、彝尊に考正する所のある者は、即ち案語を末に附列す。……またもって詳贍（詳細で充実している）と云うべし」というもの。つまりこの書は解題目録でこそないものの、少なくとも問題とするに足るほどの著作であれば、そこに録される序跋や批評を通じ、内容の大体や経学史上の位置などを知りうるし、またごく簡略とはいえ、撰者の字号、籍貫、履歴などに関する記載は、時として得がたい伝記史料ともなる。

もちろんこれは個人の著作であるから、いかに撰者の朱彝尊が博識多聞の学者であっても、一人の耳目が及ぶところには限りがあり、その存佚等の記載が一夕すべて正確というわけにはいかないし、著録もれもむろん若干はある。しかしこの目録が清初以前の経学史、ひいては學術史、文化史の極めて重要な参考書であること、またより一般的に言っても利用価値のある目録であること、これはまったく疑いない。なお旧時の著作は検索が面倒、というか基本的には「検索」といった使い方を想定していないのであるが、この書には『経義考撰著者索引』（佐野公治・杉山寛行編、采華書林、1977年）があり、現代的な利用を可能にしてくれている。

更にもうひとつ、上海図書館編『中国叢書綜録』（中華書局、1959年。上海古籍出版社、1982年新版）もずいぶん有用な目録である。この書は従前のいかなる叢書目録より多くの、約二千八百種の叢書を著録し、これを総目（叢書を主として子目を列ねる）、子目（子目を主として所収の叢書を記す）、索引（子目の書名、撰者）の三分冊に分かつという、はなはだ完備した内容となっている。我々がある書物を見たいとなった時、ふつうには叢書本を用いるしかない、ということは少なくないし、そうでなくとも、その書にどんな叢書本があるのかを知れば、本文の不審をその本によって確かめてみる、といったことが可能になる。

以上に紹介したのはいずれも単行の編著書で、『史籍挙要』を除けば比較的大部なものばかりであるが、中国人の書物に関する研究は、実のところこうした単著の形ではなく、題跋や書後といった単篇の文章として著されたものがはなはだ多く、特に考証学が発達を遂げた清代の学者のそれには、参考価値の高いものが少なくない。そこでこれをいかに利用するかとなるが、この問題は王重民等『清代文集篇目分類索引』（北平図書館、1935年。国風出版社、1965年影印、1979年再版。北京図書館出版社、2003年影印）と羅偉国・胡平『古籍版本題記索引』（上海書店、1991年）によっておおむね解決できる。

この二索引によって検索しうるのは、大体について言うならば、前者が学者の題跋類、後者が収蔵家のそれであり、前者には本のみならず書に関する、つまり版本の問題だけでなく、その書物の成立事情や内容的な特徴に関する見解も多く含まれる一方、後者で論じられるのは、当然のことながら善本に関する版本問題が主となる。断っておけば、これは両者の性格がやや異なると言っているのだから、前者の価値が後者より常に優る、などと言っているのではない。もっとも収蔵家の題跋というのは、時として

自蔵本の善を誇ろうとするあまり、有意無意の誇張、はなはだしい場合には虚偽さえまじえることなしとせず、この点には少しく注意が必要である。

収蔵家の題跋類は善本に関する詳細を教えてくれるものであったが、実用的により必要なのは、どの書にどんな本があるのか、それも宋元の古版など、利用はおろか見ることさえ難しい善本ではなく、日常的に用いる普通本にどのようなものがあり、そのうちではどれが優れるのか、あるいは各々がどういう特徴をもつものなのか、を知ることであろう。ところがこれは非常な難題で、たいていの問題を一冊で解決してくれる、などという便利な参考書はないし、今後もそうしたものの出現は望めないであろう。ある書物の諸本を比較検討し、その佳否や版本系統を明らかにするというのは、それ自体が研究の名に値する仕事であって、ちょっと知名度の落ちるあらかたの書物について言うなら、本の問題は結局のところ自分で調べ、自分で解決するしかない。

本の問題というのはなかなかやっかいで、語るべきことはいくらかもあるのだが、今はすべて省略に従うこととする。すでに述べたとおり、本の研究は版本学というひとつの専門分野を形成しており、これをひととおりで紹介するには、少なくとも別に一章を設けることが必要となるし、また何より、これから中国史の研究を始めようという人にとって、版本を知ることの優先順位は、実のところそれほど高くないからである。現実に即して言うなら、版本のことなど何も知らなくても、あるテーマの研究に従事することは十分可能なのであり、書と本を比較すれば、書の優先順位は本のそれを圧倒している。

ただしここで知っておくべきなのは、宋元古版など善本といわれるもの（の影印本）はもとより、校勘をへた標点本でも、テキストについては何の問題もなし、などということはあるえないのであり、自分の読本に不審を感じた場合は、別本と対照してみるくらいのことは必要だ、ということである。そうした経験がある程度積んだ後に、改めて版本についての常識を身につければ、それは自らの研究にとって大いに役立つものとなる。

このほか、ある特定分野の研究にとってはなはだ重要な意味をもつ、あるいは非常に有用な目録はまだいくらかもある。古代の學術、文化史を考察するうえで不可欠の『漢書』芸文志、中世のそれについての『隋書』経籍志、唐宋の著作については簡略ながら解題のある晁公武『郡齋讀書志』、陳振孫『直齋書錄解題』、明一代の芸文を志した『千頃堂書目』（黃虞稷『明史芸文志』稿を増補したもの。一般には黃氏の撰とされるが、そうではない）、清人著作の単行本をもっとも網羅的に著録した孫殿起『販書偶記』（1936年、1959年中華書局版以降の新版あり）、同『販書偶記続編』（上海古籍出版社、1980年）といったものがこれである。こうした目録に加え、更に自分の関心、必要に応じ、たとえば唐人の別集を解説した万曼『唐集叙録』（中華書局、1980年）、宋人別集についての祝尚書『宋人別集叙録』（中華書局、1999年）、現存方志の総目たる北京天文台主編『中国地方志聯合目録』（中華書局、1985年）、年譜についての謝巍『中国歴代人物年譜考録』（中華書局、1992年）、明末史籍についての

謝國楨『増訂晚明史籍考』（上海古籍出版社、1981年、もと1964年内部発行）等々を利用すれば、「事半功倍」とまでは行かなくても、いささか読書の門徑を得て、余計な回り道をせずにすむところが必ずあるだろう。（井上 進）

2 金石学・考古学

◆金石学

金石学とは、その名のままに考えれば、金属や石材に書かれた史料を扱う学問である。金属に書かれたものの代表は、青銅器に鑄込まれた金文であろうし、石材については、だれしも第一に思いうかべるのは石碑に刻まれた文章であろう。つまり、金文史料や石刻史料のようなものをどう扱うかというのが、金石学の課題となると、ひとまずはいえる。ところが、近年、金石学の扱う史料の種類は多くなる傾向にあって、甲骨、竹簡・木簡、陶文、璽印など、材質からみても多岐にわたる史料が、金石学の範囲のなかに取りこまれつつある。容媛『金石書録目』（歴史語言研究所、1930、35年〔考古通訳1955-3に補編がある〕）は、金石関係の図書目録として今もなお有用であるが、「一 総類」「二 金類」「三 錢幣類」「四 璽印類（附封泥）」「五 石類」「六 玉類」「七 甲骨類」「八 陶類」「九 竹木類」「十 地志類」と分類する。ここにもうひとつ「帛類」でも補えば、現在の金石学の広がりカバーすることが可能で、さすがは金石学の心得のある学者が作成した目録だけのことはある。一般の漢籍目録の金石のところも、このように分類してもらえると、うれしいものである。

このいわば広義の金石学をどう定義するかというのは、かなり厄介なことなのだが、あえていえば、一般の書物に書かれた史料と異なるのは、そのテキストの書かれている物体とか媒体とか、それをいま試みにオブジェクトということにして、そのオブジェクトが史料の性格を大きく左右する、というところであろう。つまりはオブジェクトを離れては史料が成り立たないような史料が、広義の金石史料であり、それを扱う学問が金石学である。もっともそのようなことをいうと、敦煌文書や吐魯番文書などの古文書史料や、あるいは近代の檔案史料も、金石史料とみなしてわるくないことになる。たとえば、「帛類」という分類を立てたとしたら、繊維製品に書かれた古文書資料をそこから除外するいわれはない。もちろん、一般的には古文書資料が金石史料に含まれるとは思われていないだろうから、金石学の範囲のむやみな拡大が無条件に歓迎されるとは思えないが、しかし、金石学を論ずるとき、古文書資料のようなものについて、まったく視野からはずして考える必然性はないのである。そうすると、そのような広い意味での金石学を全般的に解説しなければならぬことになるのだが、それは相当に困難なことだといわざるをえない。

金石学を概説した文章などというものも、これまでなかったわけではないけれども、狭義の金石史料に関する解説が主となっていることが多い。もちろん、それはそれな

りに有用なのだが、しかし現在の金石学の範囲の拡大からすれば、もっと広い視野が求められてしかるべきである。しかも、かりに話題を狭義の金石史料に限ったとしても、そのなかでの多様性は確実に増してきているのであり、たとえば、同じく金属であり用途も近いものであっても、秦代の權（重量標準器）と宋元時代の錘（さおばかりの錘り）とを、もはや同じ心構えで扱うわけにはいかない。書かれている文字も内容も、それぞれに特徴があり、実際にそれらを研究対象にするとすれば、まったく違った予備知識が必要になろう。それらさまざまな金石学のすべてを、ここで説明するのは、分量からいっても、また私個人の学力からいっても、不可能である。

そこで、ここでは、金石史料を扱う上でのごく基本的な姿勢として、上策・中策・下策の三策のあることを、述べておきたいと思う。

まず、金石史料がどのようなものであろうと、その史料に書かれている事実そのものを理解してしまう、というのが「上策」である。かりに、ある歴史上の人物がいて、その人物のことはもうたいがい何から何までわかっているとしよう。そこにその人物の事跡を記した碑文があったとして、オブジェクトの性格に原因するのであってもテキスト自身の問題に原因するのであってもよいが、それがたいへん読みにくい碑文であったとしても、そこに何が書かれているかは、おおよそ予想することが可能だから、それを読みこなすことは難しくないであろう。万一、読み誤りあるいは読めない箇所が生じたとしても、それがその人物に関して致命的な誤解を引き起こす危険は大きくない。また碑文にこれまで知られていないことが書かれていたとしても、それに関連することがらがよくわかっているのであれば、それだけその新しい知見の意義がよりよく理解できるというものである。つまり、金石史料を読み解くもっとも重要な手がかりは、金石史料そのものについての知見ではなく、そこに書かれた事実そのものについての知見に求められるべきなのである。

次に、金石史料そのものについて、できるだけ多くの情報を集めて分析する、というのが「中策」となる。そのとき、当然ながらオブジェクトについての分析を、欠かすことはできない。できれば、そのオブジェクトを実検するのが望ましいし、また同種のオブジェクトに数多く接するというのも、しばしば有効である。オブジェクトを実検できないときには、オブジェクトを写した資料、写真であるとか拓本であるとか、について、同様のことを試みる必要がある。そしてそのとき、どのような方法で分析するのがよいかとなると、総じていえることは、あらゆる手立てを尽くすのがよいというしかなく、それが具体的にどういう手立てであるかは、オブジェクトの種類によって異なり、そこは各自の工夫によるしかないし、また各自の工夫が生きたところでもある。

そして最後の「下策」というと、金石史料に書かれた事実であるとか、金石史料そのものの性格であるとかには、ひとまず目をつぶって、ひたすら金石史料の目録作り精を出す、というもので、これも世にしばしばみられるところである。

金石史料を扱う上での「上策」「中策」の重要性は、自明のことだから、ここでと

りたてて強調する必要はないだろう。見のがしてならないのは、「下策」の有効性である。

まず、かの「上策」の適用できるのは、よほど運のよい場合に限られるのであって、多くの場合、事実そのものについての情報不足があり、それで金石史料が大きな意味を持つことになるのである。たとえばまったく未知の人物についての碑文となると、「上策」は無効であり、「中策」が最善の策となる。ところが、この「中策」を実行するためにも、かなり贅沢な環境を必要とする。たとえば日本国内で実検できるオブジェクトないしはその写しというのはきわめて限られてくる。もちろん、研究を志すからには、そのような消極的な姿勢ではいけないのであるが、ひとそれぞれ事情もあって、「中策」を実行しようにも、実際とりうる手立てが非常に少ない、という場合もあるだろう。またオブジェクトがすでに失われている場合も少なくない。もちろんだからといって史料としての価値が変わりはないから、オブジェクトの失われた金石史料を無視してよいとはいえない。ともかくそのようなさまざまな制約のために、「中策」をとることが困難だとすると、とりあえずは「下策」を採用するしかないことになるのだが、金石史料にとっては、この「下策」は単なる「下策」ではないのである。

中国の書物の伝統的な分類として、経・史・子・集の四部分類があり、金石学に関する書物は、史部の金石類に分類されることが多い。個別の目録によっては、璽印に関するものを子部（芸術類）に収めたりすることもあるので、注意を要するが、一般的には、容媛の書目のごとくあるべきだと、私は思う。その金石類がなぜ史部に入っているのかというと、それが歴史の史料だからだというのでは決してなく、四庫全書においてはそもそも「目録類」の名で、図書目録と一緒にいたのである。その目録類がどうして史部に入っているのかとなると、ひとことで説明することがむずかしいが、とりあえずは、経部や子部や集部には入らないからだと思っておいていただきたい。さてその目録類から金石類を独立させたのは、清朝も末期になって編まれた『書目答問』が最初である。そもそもなぜ、図書目録と金石史料が一緒になっていたのかというと、金石史料をそのままに写し取って印刷する技術が発達したのは後世になってからのことで、それ以前は、金石史料を集めた書物はいきおい金石史料の単なる目録とならざるをえず、すると性格の一番近いのは図書目録だったからである。それが清朝末期になると、印刷技術の発達によって、図書目録とはかなり異なったスタイルを持つことができるようになり、また金石学自身の発達もあって、分離独立したのである。ただ、いまでも書目類と金石類が隣り合わせになっている目録が多いのは、過去の目録類のなごりなのである。

つまり、金石学というものは、当初、金石史料の目録を作るところから発達したのである。だから、容媛の書目に集められた金石学関係の書物の多くが、金石史料の目録である。ひとくちに目録とはいっても、その採録範囲の広さ、その収集の精密さ、その描写の詳細さ、さまざまなものがある。そこで、金石学の初歩段階としては、まずこの既存の目録を読み解くところから始めなければならない。そしてそのときにも

つとも助けとなるのが、まず自分で目録を作ってみることなのである。目録の範囲や、精密さ、詳細さは、自らの興味や力量に応じて設定すればよい。はじめから完璧なものを作る必要はないが、ただしすべて自分の手で作業しなければ意味がない。自分ひとりの手間と工夫でどのくらいのことができるのかを実感してこそ、既存の目録に、どのくらいの手間がかけられているのか、またどのような工夫が施されているのかについて、見当をつけることができるのである。そしてその見当なしに、既存の目録を参照することは、危険である。

自分で目録を作ることの意義は、他人の作った目録を読むときの参考にするというだけでは、もちろんない。その作成した目録は、本人にとって当然ながら有用である。というより、有用であるように心がけて目録を編むことができるし、またそうでなければ自分で作る意味がない。さらに、もしも同様の目録が、すでに他人の作った目録として既に存在していたとしても、同じ目録をあらためて自分で作ってみることの意義は大きい。まったく同じ目録であっても、自分で作った目録には、作成の過程のさまざまな知見が凝縮されているのであり、その意味でも、自分で作った目録ほど使い勝手のよい目録はないのである。しかも、どのあたりに手が抜いてあるか、どこをどうひと工夫すればもっとよい目録になるか、ということも、作った本人にいちばんよくわかることなのであって、つまり作った本人にとってのみ、その目録は発展の可能性のある「生きた」目録なのである。

たとえば、かの王国維は、まず1914年に「宋代金文著録表」（『国学叢刊』1914年）と「国朝金文著録表」（『国学叢刊』1914年）を作成したのち、その翌年から続々と金文研究の論文を発表していった。そんなことはどこにも書かれてはいないけれども、このふたつの目録が王の研究にとっての重要な資産となったろうことは、想像に難くない。もちろん王のこのふたつの目録が、他人にとっていまなお役に立つ目録なのかというと、そうではない。どちらについても、のちの学者による拡充されたバージョンが存在するし、もっと広く材料を集めた目録も編まれていて、そちらを利用の方がよいであろう。しかし王のいくつかの研究論文の珠玉のごとき輝きはいまでも損なわれておらず、それを生み出したという点からいって、ふたつの目録はいまでも意味のないものとはいえないのである。

またわが国でも、林巴奈夫の、他の追隨を許さぬ青銅器研究の初期の仕事として、『三代吉金文存器影参照目録』（大安、1967年、台湾：学生書局、1971年再版）のあることは、あまり知られていないかもしれない。この目録よりも汎用性の高い同種の目録が、その後、周法高によって作成された（『三代吉金文存著録表』周法高自刊、1977年）から、現在、われわれが林の目録を使用することはほとんどないであろう。しかし、この目録が林の研究を推し進める役割をになったことは、まちがいない。その1971年の再版本の自序に、「編者が自分でいふのもおかしいが、頗る便利なもので、恐らく一番頻繁に利用したのは編者自身であろう」とある。この目録は、羅振玉が自蔵の金文拓本をコロタイプ印刷にして出版した『三代吉金文存』に採録されたりスト

にもとづき、その青銅器の器形のわかる写真が見られる著録を、注記したものである。器形による青銅器の編年の確立を優先させた林にとって、もっとも有用な目録であったはずである。同時に、林ほどに器形を見る目を持ち合わせないひとにとっては、中途半端な目録でしかなかったであろう。器形の有無にかかわらずすべての著録が参照されている周の著録表の方が、使い道が広い。しかし、まず林の研究を生み出したという点で、林の目録書の意義は大きいし、さらにご本人は、自分の目録の方がいまだに使いやすいとおっしゃるかもしれない。それは、参照項目が器形のわかる著録にしばらくこんであるというようなことではない。どの著録に器形が載っているかなどということは、専門家であればたちどころにわかるはずで、そこは周の著録表であっても、問題ないはずである。ただ、目録を作るときに、どの範囲の資料を集めたか、あるいはどういうところにミスが生じる可能性があるかないか、など、いちばんよく知っているのは目録を作った本人である。それがわかっている目録と、そうでない目録との使い勝手の差は大きい。わからない目録について何かを調べたとすると、自分の予期しない見落としをする可能性があるからである。世の中に完璧な目録などない。そこでよい目録とは、どの程度完全であり、どの程度不完全であるかが、ちゃんとわかっている目録なのであって、それは自分で作った目録にほかならないのである。

したがって、金石学にとりこむ第一歩として、まずおすすめしたいのは、自分のとりあげようと思う金石史料について自分で目録を作ってみることである。その際、それを公表して万人に役立つものを作る、というようなことをめざすのではなく、あくまで自分で使うことを主眼において、自分で資料を集め、自分で形式を工夫し、自分で目録を作成しなければならない。最近ではコンピュータが使いやすくなっているから、自分の能力に応じてそれを利用することはたいへんよいことだが、入力作業はやはり自分でしなければ何のための目録かわからないし、検索などの便利な機能も自分の使い道に応じて調整できることが、望ましい。要は、自分で操作できることが多ければそれだけよい目録となる可能性がでてくるのであって、単純作業だからといって、他人にそれを委託したりするのは、それこそ「下策のそのまた下策」である。そして、最後にやはり忘れてならないのは、それはあくまで「下策」なのだということであって、できることなら、金石史料そのものについて検討すべきであるし、最終的はさらに、そこに書かれた事実そのものを理解することなのだ、ということである。

◆考古学

考古学とは何かについては、考古学者の方で定義があろうから、ここでは論じないとしよう。ただ、考古学も歴史学である。この書物は、中国史の研究法を解説する書物であるから、中国考古学も本来解説の範囲に含まれておかしくはない。しかし、ここに「考古学」の一項が立てられているのは、ひとまずそれを別格のものとして扱おうということなのであって、すると、考古学に対するこちらがわ、すなわち考古学でない歴史学の方を、何と呼ぶかがさしあたり問題となる。いまかりに、それを文献学あるいは文献史学とよんでおくとして、その文献史学の立場からすると、たとえば、

さきほどの金石史料について、オブジェクトを離れては史料が成り立たないような史料が金石史料であると説明したが、そのオブジェクトそのものの研究は、もっぱら考古学の領域ということになる。その点で金石学は文献史学と考古学との接点にあるといえるかもしれない。ただしもちろん、オブジェクト、考古学のことばに置き換えれば遺物、の研究は、考古学の任務の単に一部分にすぎない。

考古学を、歴史考古学と先史考古学に分けて考えたとき、文献史学とかかわりが深いのはむしろ歴史考古学の方であるが、中国考古学について、さかんに研究されている下限は、明代あたりと考えてよい。もちろんそれより新しい時代においても、考古学の研究は不可能ではないが、とりあえずは、清代以後の歴史については、考古学に関心を払う必要は少なくなってくる。また、時代がさかのぼるに従って、考古学の重みが増すことも、だいたい常識的に想像されるとおりだと思ってよかろう。中国の歴史考古学の上限はやや決めにくいところがあって、甲骨文字の発見されている殷代後期までは歴史時代といえよう。また、新石器時代の考古学は、先史考古学の範疇に入るが、そこから殷代後期までのあいだに、若干のグレーゾーンがある。もっともそのグレーゾーンのことをそれほど気にかける必要はない。というのも中国の場合、おおまかに見て新石器時代から、つまりは早期仰韶文化から、現在まで、文化的にはひとすじの伝統のもとにあると思われる。だから、歴史・先史の境界を越えて、新石器時代あたりまでは、「中国史」としてのつながりが想定できるのであり、文献史学の研究者として関心を払うべき上限は、新石器時代である。ただし、新石器時代の研究においては、もはや考古学のひとり舞台であり、文献史学の出番はわずかである。そしてさらに先史考古学をさかのぼって、旧石器時代となると、文献史学の方から関連するところは、ほとんどなくなってくるといえよう。

中国考古学を明代まで通して概説した書物としては、中国社会科学院考古研究所『新中国的考古發現和研究』（文物出版社、1984年）があり、よい日本語訳（関野雄監訳『新中国の考古学』平凡社、1988年）もある。ただし、20年前のものであるから、その後の考古学の進展を念頭に置いて読む必要がある。これとは別に、各省ごとの考古学の成果を回顧するシリーズの最新のものとして文物出版社編『新中国考古五十年』（文物出版社、1999年）があり、1999年までの状況が概観できるのだが、系統的な記述という点では、中国社会科学院考古研究所前掲書の代役とはなりえない。

中国社会科学院考古研究所前掲書後の中国考古学についての各種の情報を得るための参考書として、『中国考古学年鑑』がある。中国考古学会が編集し、1984年から毎年一冊ずつ出ている。その内容は、その前年（2001年版なら2000年）における中国国内の考古学が対象になっており、「考古学研究」（学界動向、主要な論文の紹介）、「考古文物新發現」（各地の考古調査の簡略な紹介）、「考古学文献資料目録」の三種に多くのページがさかかれている。専門の考古学者にとっては、「考古文物新發現」の内容が簡略にすぎることと、刊行までの一、二年のタイムラグがあることなどから、ややものたりない『年鑑』ではあろうが、門外から中国考古学を概観するには十分であ

る。また、金石学についてもかなり有益な部分が多く、とくに「考古学文献資料目録」に付される「新発表古代銘刻資料簡目」は、新出の金石史料の目録として貴重である。

『中国考古学年鑑』よりもさらに詳しい、あるいは新しい、情報を得るためには、中国考古学関係の雑誌、報告書、論文集などを、こまめにチェックするしかない。重要な雑誌としては、『考古』『考古学報』『文物』のほか、地方的な性格の『考古与文物』(陝西)『中原文物』(河南)『華夏考古』(河南)『江漢考古』(湖北)などがある。『考古』はこのところ、新刊の紹介欄を充実させているようである。さらには毎週二回発行される『中国文物報』に目を通すことができればということないし、また当然ながらインターネット上にも、情報をさがす手がかりは多い。

日本における中国考古学については、日本中国考古学会の『中国考古学』(年刊、前身は『日本中国考古学会会報』)があり、欧米のそれとしては、中国のみに限定されるものでないが、*Journal of East Asian Archaeology*がある。ただしどちらも歴史の浅い雑誌であり、今後の発展が望まれる。

日本人の考古学者によって書かれた、中国考古学の概説書もいくつかあり、最新のものは、飯島武次『中国考古学概論』(同成社、2003年)である。また林巳奈夫『中国文明の誕生』(吉川弘文館、1995年)は、中国考古学の概説書として読むこともできる。英語で書かれたものとしては、張光直、*The Archaeology of Ancient China*, 4th ed. (Yale University Press, 1986)が有名である。やや古くなってしまったが、張の考え方の根源をさぐる意味では、いまだに読む価値がある。ただし、いずれも殷周ないし秦漢時代までの考古学に限られる。時代別あるいは地域別のテーマで、中国語で書かれた中国考古学の概説書も、もちろん多種あつて、もう紹介する余裕がないが、いずれにしても、考古学の専門家でないわれわれとしては、著者の個性を感じ取りながら読むことが重要である。そのことを以下に簡単に述べておきたい。

それはつまり、文献史学の立場から考古学をどう扱うかについても、金石史料の場合と同様に、上策・中策・下策の三策があるということである。

まず「上策」であるが、みずから考古学者になってしまうというのが、ほんとうはいちばんよいのである。考古学は、それなりの訓練と知識を必要とする学問である。考古学を理解するには、あたりまえのことながら考古学の専門家になるのが早道である。しかし、考古学者はその全精力をかたむけて考古学者になっているのであるから、文献学者でもありつつ考古学者でもあるためには、素質と努力において、なみなみならぬものを要求される。しかも、考古学者として要求される能力は、科学的な分析技術の進歩によって、ひとむかし前よりもずっと高くなっているように、考古学者でない私などには思われる。不可能とはいきれないから、ひとまずそれを「上策」としてあげておくと、同時に考古学者でもあり文献学者でもあることは、実際には極めてむずかしいことであることは、覚悟されたい。しかも、それをめざすのであれば、読まなければならないのは、考古学の入門書であつて、この書物ではない。そこでこ

の「上策」については、これ以上は述べないことにする。

みずから考古学者になることをあきらめるのであれば、考古学者のことをよく知るというのが、その次の「中策」となる。つまり、考古学者でない者が、考古学を理解するには、まず考古学者を理解しなければならない、ということである。考古学者はときどき、遺物はウソをつかない、と誇らしげにいう。文献にはウソが書いてあることがあつて、文献史学においては絶えずそれを気にしていなくてはならないけれども、考古学にはその心配がない、ということなのであるが、考古学者にとってはそれはそのとおりであると私も思う。しかし、考古学史料はウソをつかないとしても、考古学者はウソをつくかもしれない。意図的にウソをつく考古学者はいないとして、すべての考古学者がいつも考古学史料を正確に解釈するとは限らない。考古学者でない者は、考古学史料を、考古学者の解釈を仲介として理解するのであるから、その解釈がどれだけ正確であるかは切実な問題である。当然ながら、仲介する考古学者がどのような考古学者であるかを知ることが、重要になってくる。

そのためには、日頃から考古学者の思考の方式について慣れておくことが大切である。もし身近に考古学者あるいは考古学を志す者がいるならば、できればそのひとびとと接する機会をもつことが望ましい。そのひとびとの研究分野が中国考古学であるにこしたことはないが、別に日本考古学であつてもかまわない。要は、考古学者がどのようなときに慎重な推論をするか、どのようなときに結論を急ぎがちであるか、というようなところの感覚を、つかみとらなければならないのである。もちろん、そのうちにみずから考古学者としての能力をわずかなりとも身につける、つまりは「上策」のまねごとをやってみる、というようなことも、あつて悪くない。もっとも初歩的なことをいうと、貴重な遺物を手にするときには、白い手袋を着用しなければならない、などというマナーは、単に考古学の概説書を読んだだけでは、なかなか身につかないものである。

身近に考古学関係者がおらず、直接に考古学者と接する機会が持てない場合は、それはそれでやむをえない。その場合にしてもとにかく、中国考古学の論文や報告やあるいは概説書を読むことは必要になってくるが、そのとき、その論文等の執筆者をイメージしつつ読む努力をすべきである。そのためには、日頃から、ある程度の範囲の中国考古学関係の文献をざっと見ておいて、ある考古学者の名前が与えられたら、その学者がやってきた仕事についての情報が取りだせるようにしておき、そして必要であればその書いたものを通読してみて、そのおおまかな志向や学風を味わいつつ、その学者の考古学史料に対する解釈を受け取る、という姿勢が必要である。つまり、目の前にあるのは論文や報告やあるいは概説書ではなく、それを書いた考古学者である、というぐらいつもりで読むべきである。もちろんこれは、日本人の考古学者の書いたものであつても、同様である。そしてそれを何度かくり返しているうちに、見る目も肥えてきて、一篇の論文からだけでも、考古学者の力量や学風の見当がつくようになったら、しめたものである。

またそのとき、その考古学者の所属や地位を重視せざるをえないし、またそれに惑わされないようにしなければならない。考古学者にとって、そのフィールドの实地調査の経験があるかどうか、あるいはその遺物を常に手にしうる立場にあるかどうか、は、何にもまして重大事である。したがってまずは、そのような点で有利な位置にある考古学者の意見を尊重すべきである。しかししばしば、優秀な考古学者は、そのような点で必ずしも有利な位置にないにもかかわらず、鋭い推察やあざやかな解釈を提出することがある。またそのような点で有利な位置にある考古学者は、かえってそのフィールドや遺物にとらわれてしまい、強引な解釈に走ることもある。やはりひとりひとりの考古学者の個性を味わいながら、考古学の論文や報告や概説書を読まなければならないのである。

もちろん、そのようなことができない場合もありえて、そのときは「下策」を採るしかない。

考古学者の引き出した結論を、専門の考古学者が言っているのだからということで、そのまま受け入れるというのは、「下策」である。逆に、とくに歴史考古学において、考古学者が文献史料を扱う場面に遭遇することは少なくないと思われるが、そのとき文献学者の結論だけを、たとえば現代語訳だけを、うのみにして、それにもとづいた推論をしたらどうかを考えてみてほしい。極端なことをいうと、ある金石史料の年代について、そのテキストから得られた結論に自信がもてないときに、そのオブジェクトに対する考古学者の分析を援用したとしよう。ところが実はその考古学者が、やはりオブジェクトから得られた結論に自信がもてなくて、ひそかにテキストに対する文献学者の分析を援用していたとしたら、どうなるであろうか。もちろん、なんとんでも外国の考古学であるからには、なじみのない考古学者の結論を、検証する手段にもめぐまれず、とりあえず引用しておくしかすべがないという場合は、しばしば避けられないところであるし、絶対にやっていけないことなのではない。ただし、それがあくまで「下策」であることは、納得した上のことでなくてはならない。そしてもし、それが危険だからといって、考古学の成果をまったく無視したり、あるいは考古学史料を素人流に解釈して平然としていたりするのは、それこそ「下策のそのまた下策」であり、絶対に避けるべきである。なんとんでも、考古学者はその全精力をかたむけて考古学者になっているのだからである。(浅原達郎)

3 地理学——歴史的舞台の理解に向けて

『中国歴史研究入門』という枠組みの中で地理学を講じるということだが、研究入門としては、森鹿三『東洋学研究 歴史地理篇』（東洋史研究会、1970年）の諸論や、研究史や版本にも目配りの行き届いた梅原都「歴史地理学」（島田虔次編『アジア歴史研究入門』3、同朋舎出版、1983年）をみれば現在でも基本の用は足りる。紙幅も

限られているので、中国史を理解するうえでの歴史的舞台の約束事、つまり伝統的地理学や歴史的地名、風土に関する知識、それらを歴史史料として扱うときの注意点を、必要かつ有用な体系として提供する方がよいだろう。

われわれが一般に持っている中国の地理的な枠組みは現代の中華人民共和国をもとにしたものであるが、歴史上の各王朝の境域、首都、中心と辺縁という感覚は当然現代とは異なったものである。歴史をさかのぼれば、漢代には楽浪郡や帯方郡が朝鮮半島に置かれたし、ベトナムも中国王朝の直接支配下に置かれたこともたびたびあった。東トルキスタンが中国であるという主張を聞けば宋代の士大夫は一笑に附すであろうし、雲南が中原王朝により統治されるようになったのは蒙元時代以後のことである。沿海州は女真族の支配地ではあったが清末にはロシア領となり、鄭成功が17世紀にオランダ人を逐い出した台湾も清末には日本の植民地となった。チベットが直接北京の政権に支配されるようになったのは人民共和国以後といってもよい。これらはすべて疆域をめぐる歴史地理の問題でもあるのだが、漢民族の感覚としては、ごく大雑把にいて州・県といった親民官の地方政府の官衙がおかれたところは中華文明の地であり、そうではない化外の地では王朝に服属する地方有力者（例えば卑弥呼や倭の五王、さらには足利義満のようなもの）に王や將軍といった肩書きを授けた王朝の一方的主観的な間接統治ということができる。遼東都指揮使司を置いて女真人の酋長に衛所制の軍官の位階を授けた明代の満洲なども同様で、実態はともかく一応形式的には明朝による一種の軍政ということもできるが、清代では国初の一時期を除き王朝の故地として、関外（山海関の外、長城外）への漢人の入植は禁止されていたのである。

◆地理学史

伝統的な地理学の祖形は『漢書』地理志に見られるが、『漢書』の編纂が「普天之下、莫非王土」（『孟子』万章）といった儒家的世界認識を反映した記述である以上、統一帝国の運営上必要な情報を記すことだけでなく「禹貢」に象徴される儒家的天下観と対応させる必要が生じた。中国の地理学が歴史地理を中心に発達したのは、「漢書地理志」に見られるように、経書すなわち古と現実を繋ごうとしたためであることは記憶する必要がある。中国における地理学の歴史を知るのであれば、海野一隆「第一部、地理学の歴史 第一編、東洋」（海野一隆他『地理学の歴史と方法』大明堂、1970年）がやはり最も優れているが、近年まとめられた同『東西地図文化交渉史研究』（清文堂、2003年）、同『東洋地理学史研究』大陸篇（清文堂、2004年）も参照すべきである。ニーダム『中国の科学と文明6 地の科学』（海野一隆他訳、思索社、1976年初版、1991年）にも多くの文献リストがある。中国のものでは古くは王庸『中国地理学史』（商務印書館、1938年初版、1955年重印）、同『中国地理図籍叢考』（商務印書館、1947年初版、1956年修訂重印）があり、今なお史料集として重宝できる。その後では、中国科学院自然科学史研究所地学史組『中国古代地理学史』（科学出版社、1984年）や胡欣・江小群『中国地理学史』（文津出版、1995年）などがある。

地理学者とその著作については、王兆明・傅朗雲主編『中華古文献大辞典 地理卷』（吉林文史出版社，1991年）、譚其驤主編『中国歴代地理学家評伝 1 秦漢魏晋南北朝唐，2 兩宋元明，3 清・近現代』（3冊，山東教育出版社，1990～93年）というものもある。地図学史については、海野一隆「漢民族社会における歴史地図の変遷」（同『東洋地理学史研究』大陸篇，所収）や盧良志『中国地図学史』（測繪出版社，1984年）があり、また閻平・孫果清編『中華古地図集珍』（西安地圖出版社，1995年）は100の図に中国地図学史とも言うべき説明が付されたものである。また、1980年以前の歴史地理学関係の中国文の論著を調べるには杜瑜・朱玲玲編『中国歴史地理学論著索引（1900-1980）』（書目文獻出版社，1986年）がある。鄒逸麟主編『中国歴史人文地理』（科学出版社，2001年）は国家領域の形成過程や歴代の行政区画の構造と機能、人口分布の変遷、各種の鉱工業の分布、都市の発展と交通路の変遷、商業の発展と空間構造の変化などを総合的に一冊にまとめており有用である。中国文の雑誌としては、中国地理学会の『歴史地理』（年刊）、陝西師範大学の『中国歴史地理論叢』（季刊）がある。

中国では地理学史は自然科学史の一環として扱われるので自然地理の観点からの研究も多い。その中では気候が生物に与える影響を対象とする物候学という分野も最近では環境史や生態学との関連で注意すべきであろう。また、歴史地図を注意してみると分かるように、黄河も金の明昌5年（1194年）や清末の咸豊5年（1855年）の大洪水によって、現在のように北流して渤海に注いだり、南流して淮河に合流して東シナ海に注いだりしている。こうした黄河河道の変遷の他にも、長江や珠江のデルタのように後世になって形成された土地もある。そのような文献史学の方面からはつい手薄になりがちで自然地理的な問題を取り上げるものは、学問分類上の理由もあってか中国に多いが、日本では、秋山元秀「上海島の成立——江南歴史地理の一コマ」（『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所，1984年）があげられる。また、橋本萬太郎のとなえた言語類型地理論をもとにした平田昌司「雪晴れの風景——中国言語文化圏の「内」と「外」」（『中国——社会と文化』9，1994年）の議論は、移住、開発の歴史や漢民族の発展史を考える場合に示唆に富む。

◆風水・天文分野

地理という語を説く時に必ず引かれるのは『易』繫辭伝上に「仰以觀於天文，俯以察於地理」ということばである。現在では、地理は geography の訳語として中国語でも定着しているが、かつて地理といえば風水をさすことがごく普通であったのは、この地表の文様ということばが大地に流れる気の流れを表現するのにぴったりとしていたからであろう。漢民族の風水の観念については海野一隆「漢民族の地理思想」（同『東洋地理学史研究』大陸篇，所収）、宮崎順子「地理・風水」（『中国思想文化事典』東京大学出版会，2001年）が要領よくまとめている。最古の学術体系の表現というべき「漢書芸文志」で地理書が収められたのは数術の形法家であり、『山海経』の他に『国朝』『宮宅地形』などのいわば地形学と抱き合わせのような形で収められてい

た。梁の阮孝緒『七録』になって、後の史部に相当する紀伝録のなかに土地部という項目が立てられたのは、六朝時代に地方的な著述の編纂が盛になったことが反映しているだろう。隋書經籍志では史部地理類に139部が著録されたが、ほぼ現在の地理書概念に相当するものが分類され、「図経」や「地記」といった方志、南方開発に伴って編纂されたと考えられる「異物志」「風俗記」といった名称を持つもの、『洛陽伽藍記』のように都市や宮殿、旧蹟に関するもの、さらに法顯『仏国記』といった仏僧の紀行文や見聞記が現れる。一方で、風水書は子部の五行類に収められることになり、地形学と地誌が原則として分離された。

天文分野説は漢以前からの古い観念で、天界の星宿が地上のどの区域に照応するかを表現するものである。『呂氏春秋』や『淮南子』をはじめ『史記』天官書に記される。「漢書地理志」に記されるが、後世の地理的記述にも、『大明一統志』巻1、順天府に、「[建置沿革] 禹貢冀州之域，天文尾箕分野。」というように禹貢の九州とそれに対応する天文分野が最初に述べられる。その後も地図に表されることがしばしばあり、明末の日用類書にも「二十八宿分野皇明各省地輿總図」（『三台万用正宗』巻2、地輿門）という題名の地図が附されている。また、明初の劉基『大明清類天文分野之書』24巻は、顧炎武『天下郡国利病書』にも引用されているし、顧祖禹『讀史方輿紀要』にも分野説の記載があるが、以上はその寿命の長さを示しているといえよう。

一方、風水の観念は天文分野説のように地理学の表面に出ることはなく、学ではなく術として伝統的な地理学に存在した。『通志』芸文略にはそれまでには無い149部5140巻の葬書が挙げられ（五行類巻68）、唐中期以降に風水書が発展したとすることができる。貴族制が崩壊して富貴が身分からではなく、科擧の功名から得られるようになった社会では、個人の頭上に生まれながらに存在していた門閥制というガラスの天井が取り払われたわけであり、個人の能力でこれまでにはない社会的上昇が可能になる。しかし、死後に子孫の繁栄を保障すべきものはない。そのような状況の中で、風水に優れた土地を墓地に定めるといったことは一定の資産があれば可能なことであり、子孫に幸運を託すべき現実味のある手段として発展したと考えてよい。いわば、風水は科擧官僚制に伴って発展定着したとすることができよう。科擧の路がほぼ閉ざされた元代にはさほど流行せず、明代以降になって再び発展したのもこれに符合する。

龍脈の概念のもととなった唐の僧一行の山河兩戒説（『新唐書』巻31、天文志）は、北宋末の税安礼『歴代地理指掌図』に収められ（『山河兩戒図』）、様々に引用されて影響を与えたようで、南宋の朱熹が北宋の程頤とは対照的に風水に理解を示したのも故のないことではない。明の嘉靖末には風水理論を集大成した『地理人子須知』が「三大幹龍」の論をとりあげて、万暦年間の百科全書、王圻『三才図会』巻16や章潢『圖書編』巻30にも引用されたほか、明末の余應虬『四書引蒙翼経図解』という建陽の書坊の俗書とはいえ経書の参考書にまで引用が見える。また明末の日用類書には、地輿門とは別に宮宅門、地理門、壘宅門、堪輿門などとして風水が取り上げられていて当時の一般化を示している。さらに、朱子（朱熹）も風水を尊重したといわれて

『二刻拍案驚奇』巻12 硬勘案大儒争間気 甘受刑俠女著芳名の入話にいささか道化じみた役まわりで取り上げられるのは、いかにも明末的であるが、朱子と風水の結びつきの観念の普及を物語っている。

◆地 図

中国で作成された地図については、北京図書館善本特蔵部輿図組編『輿図要録』（北京図書館出版社、1997年）や李孝聡『欧州収蔵部分中文古地図叙録』（国際文化出版公司、1996年）、同『美国国会図書館蔵中文古地図叙録』（文物出版社、2004年）のような目録がある。その他、実際のカラー図版を収めるものには、曹婉如他編『中国古代地図集——戦国一元、明代、清代』（3冊、文物出版社、1990、94、97年）や中国測絵科学研究院『中華古地図珍品選集』（哈爾濱地図出版社、1998年）などがある。中国における地図学史的研究については既に挙げた諸論考に譲り、ここでは地図がいかに用いられたかについて簡単に記したい。西晋の裴秀「禹貢地域図」や唐の賈耽「海内華夷図」が非常に大きなものであったのは利用の方法が現代とは異なっていたからであろう。地図を宮殿内に掛けたり、宮殿の壁面に地図が描かれたことはしばしば史料に見える（『玉海』巻14、至道滋福殿観地図）。他にも憲宗が浴室に掲げたという魏博節度使の攻略のために作成された「河北險要所在」を描いた地図（『旧唐書』巻146、李吉甫伝）や、李徳裕が蜀にいた時に描かせたという籌邊樓の山川險要の図（『新唐書』巻180）などがある。また、屏風に仕立てられた地図もあった。唐の太宗が屏風に高級地方官僚の名を記したのは地図とは明記されないが（『貞観政要』巻3、扱官）、南宋の乾道3年（1163）に孝宗が画かせた華夷図の屏風は地方官僚の職位姓名を黄色い札で記したものであった（『玉海』巻91、乾道選徳殿御屏風華夷図）。また明代では張居正によって地方官の名を記した屏風が、まだ幼い万曆帝に上呈され（『国権』万曆2年12月壬子）、各地の地方官僚の姓名を記したものが歴代皇帝の周辺に置かれていたことがわかる。

現存する山水図式地図またはパノラマ図式地図というべきもののうち、最も古いものは明清のもので、海野一隆「絵画としての地図」（同『東洋地理学史研究』大陸篇、所収）の紹介する内閣文庫蔵の写本『輿地図』や『中国古代地図集——明代』に掲げる北京図書館（中国国家図書館）所蔵の万曆年間の絹本彩色の『江西全省図説』や『淮安府図説』がある。地方区画ごとの山水図式地図が代々描かれていたことは『江西省府県分図』（『中国古代地図集——清代』第20図）や『雲南輿図』（同第5図）、中国第一歴史檔案館・広州市檔案局他編『広州歴史地図精粹』（中国大百科全書出版社、2003年）の各図などからわかる。これらの原型は、前掲海野「絵画としての地図」がいうように賈耽「海内華夷図」につながるのかもしれないが、直接には北宋の景德4年（1007）に画工を各地に派遣して製作させたという「景德山川形勢図」（『玉海』巻14）のようなものであったろう。『大明一統志』や各地の方志に描かれる地図は精粗の差こそあれ、概ねこの山水図方式の地図といってよいのは、方志には絵画としての表現が求められていたからではないだろうか。方志の地図には官僚の視点が反

映されているというのは、張哲嘉「明代方志の地図」（黄克武主編『画中有話——近代中国的視覚表述与文化構図』中央研究院近代史研究所、2003年）であり、方志に付された地図は官府に坐し外を眺める官僚の眼にうつった世界を写し取ったものだと指摘し、その結果として『広輿図』のような方格地図にみえる正確さよりも、官府や学校などの政治的文化的権威が強調されることになったという。

地図は世界観の視覚化であり、ランドマークを記すものであるから、山水や塔を視標としてもちいるのは不思議ではない。ただ、中国では裴秀の理論化した「製図六体」という形で早くから正確に作図する原理が知られていたにもかかわらず、この山水図式地図が正統な位置を占めていた。一つには山水図式地図は視覚に訴えることで、識字層、非識字層を問わない。現存する地図の多くは刊行されて書籍の形になったものである。つまり、各種歴史地図に見るように文字を知る士大夫の世界の持ち物であって、戦場で用いられる兵士の世界の地図とは異なる可能性が高い。もう一つは天文と地理の相関関係（天文分野説）がよくいわれるように、土地の生じる気を表現するためのものであったということである。そこには、海野のいうような「絵画としての地図」という観念があって、正確な方位距離よりもその地の山水のもつ気韻を表現しようとしたのではないか。版図ということばに象徴されるように、地図には権力の正統性の問題が常に絡んでくる。定期的に中央へ送らせ続けたのは軍事面での実用性の問題もあるが、正統な支配を続けているという象徴性の問題もあるだろう。地図を所有することは、まさにその地の象徴の獲得であり、その地を支配することを意味した。南宋の黄裳が天文図と地理図を対にして作成したように、土地を支配することは、天に存在する星象に照応する地上を支配するということである。その地の地図はその地の気を享けることにつながるからこそ、官府に収められた地図にはその土地の姿を写しとる絵画的表現が必要とされたのだろう。その対極にあったのが「禹跡図」や「地理図」などの石刻地図で、これらの地図は府学や文廟に置かれた。石刻経書は正確なテキストのために刻まれたといえるが、石刻地図も同様の役割を期待されたのに相違ない。しかし、唐代までは宮廷内に秘められていた地図が、宋代の一時期になって急に各地に石刻図として現れるようになったのには、「地理図」の説明に際してよく説かれるように、民族意識の影響を挙げなければならないだろう。

ひるがえって、西欧で作成された中国地図には、明末清初期のイエズス会士マルティニ（衛匡国）が明代の伝統的な方格地図の羅洪先『広輿図』をもとに作成した『新シナ図帳』（*Novus Atlas Sinensis*, 1655）があり、マルティニ図をそのまま用いたアムステルダム版の地図出版業者ヨアン・ブラウ（J. Blaeu）のアトラス（オランダ語版9巻本）を抄録したゴス『ブラウの世界地図——17世紀の世界』（同朋舎出版、1992年）にカラー図版で収められ、アジア図の他に中国図、北直隸（北京）、陝西、山東、南京（江南）、福建の各図が採られている。また、清代になって測量作成された「皇輿全覽図」の稿本がパリのデュ・アルド（J. B. du Halde）のもとに送られ、ダンヴィル（D'Anville）の手によって西洋式に描き改められてデュ・アルド『シナ帝国全

誌』(Description géographique, historique, etc. de l'Empire de la Chine etc. 1735. 初版)に収められ、マルティニ以来の中国地図を一新した。これらの西欧で作成された中国地図については、『広輿図』の西欧への伝播を述べた海野一隆「ヨーロッパにおける廣輿図——シナ地図学西漸の初期状況」(『研究集録』[大阪大学教養部] 26, 27, 1978~79年)のほか、京都外国語大学附属図書館所蔵の西洋古刊地図を紹介する木村宏「京都外国語大学附属図書館所蔵の西洋古刊地図(アジア篇)と解説」(『京都外国語大学研究論叢』45, 48, 50, 1995, 97, 98年)などがある。古地図は所蔵も限られ、直接見ることは難しいが、神戸市立博物館や神奈川県立歴史博物館、東洋文庫、天理図書館などにコレクションがあり、各種図録にも取り上げられる。大阪大学の「西洋古版アジア地図」コレクションや京都大学の室賀信夫コレクションなど、各博物館や大学のウェブサイトでも見ることができるものもあって、漢字ばかりの世界に疲れたときには格好の気分転換となるだろう。海外の古地図に関する充実したリンク集をもつ Virtual Library の Map History のサイト Images of early maps on the web (<http://www.maphistory.info/webimages.html>) を付け加えておく。その他、工具書としての地図に関しては、国立国会図書館のウェブサイト「テーマ別調べ案内」アジア関係資料 (http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/theme_bunrui_1.html) の地名・地図の部分がよくまとまっているので参考にされたい。

◆地名、郡望

六朝時代の建康は現在の南京、唐の長安が現在の西安、元の大都在現在の北京であるということくらいはよく知られている。しかし、蘇州・杭州・広州・泉州というような州というかつての地方区画を意味する言葉を含む都市名が多く存在するのは何故か、ということは過去の地方制度を理解して初めてわかることである。また、明代に明州府が国号と同じために寧波府と改称されたり、万曆帝の諱を避けて河南省の鈞州が禹州に改められたような地名における避諱の事実や天台山と五臺山のように旧字でも書き分けられるものがあることも、史料上は注意する必要がある。以上は歴史地理のなかでも中国において非常に発達し主要な位置を占めている沿革地理をめぐるひとこまでであるが、要するにその地の歴史的背景を知ることである。

歴史地名を調べるについては、旧仮名遣いという点には注意を要するが、出版当時の民国の行政区画にもとづいて顧祖禹『讀史方輿紀要』の地名を対照、排列した青山定雄編『支那歴代地名要覧読史方輿紀要索引』(東京東方文化学院, 1933年, 後に『中国歴代地名要覧読史方輿紀要索引』と改題して大安, 1965年。省心書房, 1974年復刊)があり、いまでも有用であることは、台湾でたびたび『中国歴代地名要覧』と銘打った影印復刊がなされていることからわかる。他には劉鈞仁の原著を増訂した塩英哲編『中国歴史地名大辞典』(全7冊, 凌雲書房, 1980~81年)、近年では魏嵩山編『中国歴史地名大辞典』(広東教育出版社, 1995年)、また同名の史為棠主編『中国歴史地名大辞典』(上・下, 中国社会科学出版社, 2005年)といった地名辞典類がある。文学的な名所旧跡についても、国家文物事業管理局主編『中国名勝詞典』

(上海辞書出版社, 1981年)や1万8千余目を挙げる魏嵩山主編『中国古典詩詞地名辞典』(江西教育出版社, 1989年)というものがあり、前者には日本語訳(鈴木博訳『中国名勝旧跡事典』全5巻, ベリかん社, 1986~89年)がある。また別に正史地理志も重要な史料であり、台湾の中央研究院歴史語言研究所の漢籍電子文献の資料庫 (<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>) には、正史の地理志や列伝が網羅されており、零細な地名を調べるのにも格段に条件が整っている。歴史地図には、『アジア歴史事典』の別巻になる松田寿男・森鹿三『アジア歴史地図』(平凡社, 1966年初版, 1984年復刊)があるほか、譚其驥主編『中国歴史地図集』(全8冊, 地図出版社, 1982~87年)があり、後者には繁体字版(香港:三聯書店, 台北:曉園出版社, ともに1991~92年)もある。またハーバード大学と復旦大学が共同して作成した China Historical GIS (<http://www.fas.harvard.edu/~chgis/>) は、歴史地図に史料テキストを組み合わせたものといえよう。他に侯仁之主編『北京歴史地図集』1, 2集(北京出版社, 1988, 97年)、史念海主編『西安歴史地図集』(西安地図出版社, 1996年)、山西省地図集編纂委員会『山西省歴史地図集』(中国地図出版社, 2000年)といった各地の歴史地図集が次々と出版されている。また、陳正祥『中国歴史・文化地理図冊』(原書房, 1982年)は各種の歴史的な主題図が役立つ。現代地名については、崔乃夫主編『中華人民共和国地名大詞典』(全5巻, 商務印書館, 1998~2002年)が最も詳しいが、政区や集落、自然事物、交通、企業、名勝古跡といった分類の結果、同一の省の項目も分散してやや使いにくい。台湾を除く全国合計8318の鎮、8万273の郷を列挙する『全国郷鎮地名録』(測絵出版社, 1986年)もある。人民共和国における標準地図というべきものには地図出版社編『中華人民共和国地図集』(地図出版社, 1979年)とその後をうけた国家地図集編纂委員会編『中華人民共和国国家普通地図集』(中国地図出版社, 1995年)があり、前者には地名索引が別にある(『中国地名録』地図出版社, 1983年)。また都市図には中国城市地図集編輯部『中国城市地図集』(上・下, 中国地図出版社, 1994年)がある。最近では英文でも地名は普通話のピンイン表記が一般的になったが、従来用いられたウェード式表記を対照するものとして竹之内安巳『英中対照中国地名人名辞典』(国書刊行会, 1979年)、加藤祐三監修『英中・日中対照 中国地名辞典』(原書房, 1985年改題復刻, 外務省情報部編『支那地名集成』日本外事協会, 1936年原版)がある。

また、北京を燕京、蘇州を呉門、南京を金陵というように雅名や古名で土地を呼ぶことがあるが、晋(山西)・冀(河北)・魯(山東)・豫(河南)・鄂(湖北)・皖(安徽)・粵(広東)や寧(南京)、滬(上海)などというように、現在でも電報などで各省や都市名を一字に略して表現する通称がしばしば用いられ、鉄道の路線や新聞の名前、国共内戦時期の解放区から料理の流派まで各処に見られる。そして、某地の名門ということを表したいがために、後代にも家柄を語るときにその古名がまま用いられた。魏晋南北朝時代に九品官人法によって確立された各地の名族は望族と呼ばれた。望族には県望や郡望、州望というように各州県の広さに応じたものがあつたが、後に

郡望という言い方でその地の名族を表すことが定着し、隴西李氏、太原王氏、范陽盧氏、汝南周氏というように地方名を冠して呼ばれた。しかし、唐宋変革の結果、貴族制が崩壊して実質的には五代以前に家系はさかのぼれなくなり、後世にはこの郡望を借用して某地の某氏と名乗って無関係な本籍地を自称したり、同姓の歴史的な著名人がいる場合は、「家」の字をかぶせて勝手にご先祖様に仕立ててその一族を称すということもおこった。郡望は内藤湖南『支那史学史』にも評価された明代の人物事典、凌迪知『古今万姓統譜』にも記され、明末の董蒙書が「百家姓郡望」として、「趙〔天水〕 銭〔彭城〕 孫〔樂安〕 李〔隴西〕」というように『百家姓』に郡望を注記し、後の『東園雜字』等に受け継がれているのは、まさしくその需要があったからであろう。銭大昕『十駕齋養心録』巻12、郡望に「唯民間嫁娶名帖偶一用之」といって、婚礼の時に李は必ず隴西、王は必ず瑯琊などといって出自を飾るとするのはこの根拠のない自称の郡望を批判したものであるが、それだけ郡望の概念は後々にまで定着していたし、魯迅『阿Q正伝』でも引き合いにだされていた。また、正史では諱（本名）を記すのであまりお目にかかれぬが、鎌倉殿とか水戸のご隠居のような尊称なのか、著名人を出身地で呼ぶことも随筆などではよくあり、明末の徐階は華亭、張居正は江陵、葉向高は福清と記され、清末では曾国藩を湘郷、李鴻章を合肥、袁世凱を項城というような例もあった。

◆都市

都市研究に関してはとにかく斯波義信『中国都市史』（東京大学出版会、2002年）を見る必要がある。参考文献の紹介も充実しているし、スキナー説を用いた都市のシステムの計量的地理学的な分析には蒙を啓かされる。都市を研究の対象とするならば、まず、旧中国の都市についての具体的なイメージを持つようにすべきであろう。しかし、従来は史料上の制約もあって、歴代王朝の首都の他には蘇州、杭州という近世の大都市に関する文化や社会史的な研究に重点があった。旧時の都市の画像資料には張挾端「清明上河図」や徐揚「姑蘇繁華図」などがあるが、歴史図として徐蘋芳編『明清北京城図』（地図出版社、1986年）を挙げておく。この図のもとになった乾隆15年（1750）の北京城図（中国第一歴史檔案館所蔵）は縮尺約650分の1、縦14m横13mの巨大なもので17段がそれぞれ3冊の計51冊に分けられていた。後に約2400分の1の縮尺で北京市古代建築研究所・北京市文物事業管理局資料中心編『加模乾隆京城全図』（北京燕山出版社、1996年）として影印出版されている。また、張錫昌編『中国城市老地図』（上海辞書出版社、2004年）は1930年代を中心として城壁のあった頃の地方都市の地図を簡単ながらも多く掲げていて、大縮尺の都市図を集めた地図資料編纂会編『近代中国都市地図集成』（柏書房、1986年）よりも民国時代の都市図に手軽に接することができる。

旧中国の都市というといかにも城壁を構えた都市という感じがあるが、州県にはもともと普通名詞としての都市という意味はない。古くから「方百里」（『漢書』巻19上、百官公卿表）の県といわれるように、もともと州県とは領域を持った地方の区画

のことで、その地方政府の所在地の行政都市が州城・県城というように呼ばれた。現代語で都市を都市という意味に用いるように、城とは城壁またはそれによって囲まれる都市を指す言葉であり、あらゆる都市が城と呼ばれたわけではない。県城の要件とは経済的な意義から与えられたものではなく、行政上の役割から決定される。それに対して鎮とは自然に発生したある集落（地点であって郊外を含んだ面ではない）をさすことばで、州県とは本来カテゴリーが異なる。唐代くらいまでは都市（城）と農村（郷）の二分法が通用し、行政または軍事の面から都市を把握すれば事足りたが、宋代以降、交通の要所に自然発生した商業集落（鎮）が発展していき、商業都市や工業都市を形成するようになる。宋代の鎮は基本的性格として課利（両税以外の税）を徴収される商業集落のことを指し、置かれたのは親民官ではなく、特定の業務（商税や酒税の徴収や警察）担当官が監鎮官として置かれた。県城というと、いかにも朝廷から派遣された官僚のいる治所という感じがするが、宋代くらいまでは城壁を備えないものも少なくないし、経済的にも鎮とあまり規模が変わらず、実態はまだ地方の小都市という程度に考えたほうがよい。宋代に中央集権制が確立され、中央から派遣される科挙官僚の定数が定められ、民衆（土地）を支配するのは朝廷から派遣された父母官でなければならないという原則が確立する（宋学はこのような父母官としての士大夫という状況に応じた思想運動でもあったであろう）。

この宋代以降に発展した鎮のように、市場町や港町、宿場町、手工業や塩田、鉱山などで発達した都市は、いかに経済的に繁栄しようとも治所が置かれぬ限り、施政の対象となる領域をもった州県として認知されない。明清時期になると漢口（湖北）や佛山（広東）、朱仙（河南）、景德（江西）のいわゆる四大鎮のように県城でもなくとも数十万もの人口を抱えた大都市というべきものも現れた。旧中国では人口に応じて行政サービスを提供するという発想など存在しなかったし、州県の官僚からみれば徴収すべき税額が欠けなければ何の問題もない。州県の治所が置かれるということは、それに付随する官僚機構が同時に置かれるということであり、文廟などの国家的な祭祀の施設が設けられるということ、さらに明清時代であれば学校が置かれ科挙の受験資格の生員の定額が設けられる。科挙を見込める知識人もあればともかく、庶民にとってはお膝元ということで納税の手間が省けるわけではないし、逆に臨時に物品の徴収をされたり、額外の付加税が課せられたりする可能性もあり、役所が近いといっても特にメリットもない。

◆府州県とその等級

明清時代を例に取ると、府はだいたい元代の路を置き換えたもので、省の下、州県の上に設置された管轄上の存在である。府とはもともと幕府という語があるように「役所」の意味で、州県のような地方区分とは別の由来のものと考えた方が分かりやすい。府城の民に臨むのは府城におかれた一、二の附郭の県であり、行政的には府の名を冠した都市があるわけではない。いってみれば、北海道庁は札幌市街にあって北海道全域を管轄とするが、北海道はあくまでも地方の名前であって札幌のように個別

の都市の名ではないようなものである。北京順天府の附郭の県は宛平、大興の二県で、蘇州府の附郭は吳、長洲の二県、杭州府は錢塘と仁和、広州府は南海と番禺、というように府と附郭の県の名は原則として異なっていると思つてよい。原則としたのは、浙江の嘉興府は嘉興県と秀水県、金華府は金華県というような例もあるからである。さらにややこしいのは湖北の武昌府（附郭は江夏県）や山西の太原府（附郭は陽曲県）で、府城とは別の離れたところに武昌県、太原県が存在する。ついでだが、徽州文書で知られる安徽の徽州府の附郭は硯で有名な歙県である。歙は『漢書』地理志（巻28上、丹陽郡）の顔師古の注によれば掇（せふ）という音であり、現代音では「しょう」と読むべきである。ワープロにあるからそういう音になるのではないし、辞書がいつも必ず正しいのでもない。こんなことを書くこと自体が時代遅れなのだろうが、少なくとも研究として中国史を志すならば、一字をゆるがせにして何となく読んでいてはいけぬ（はずである）と教えられた。

附郭の県概念など知らなくてもまず問題はないが、実際に地方志を調べる時に杭州府と仁和県や錢塘県の関係がわからないと見落とすことも出てくるし、列伝などに某地の人とあるのは府ではなく県の名である。府は直接民を治めず県が民に臨むということはこのようにところに現れている。付け加えると、正史の列伝に某県人とあるといつてもその地で生まれ育つたとは限らない。その地に登録された戸籍があるということであり、官僚である祖父や父の任地に従つたり受験のため北京や南京などの首都に行つたりして、現住所地とは異なることが往々にしてあるので念のため。例えば、黄宗羲や張廷玉、王引之は、父に従つて幼少年期を他郷で過ごしている。なお人民共和国では市は明清の府にあたるレベルとしたために、市の下に幾つかの県が存在する形になり、日本と反対の関係になっている。以上のような州県概念については、いささか古い伊藤東涯『制度通』巻2「州県郡国の事」の記載は今もなお有用である。『制度通』は他の分野についても実に明快な概括を提示してくれることは記憶しておいてよい。

史料中で順天府といえば官僚としての知府、大興県といえば同じく知県のことを指すことがあるように、州県とは地方官僚のポストを意味すると考えたほうが理解しやすい場合がある。唐代では同じ県令でも州県の等級に応じて官階が異なっている（『旧唐書』巻42、職官志、九品職事）、州県の等級は一面では官僚制の中での地方官ポストのランクを示していた。このような州県のランク分けは早くから存在し、漢代には同じ長官でも県令（万戸以上）と県長（万戸未満）の二つの区分があったが（『日知錄集釈』巻8、州県品秩）、後になるとさらにランクが細かくなり、唐代に赤、畿、望、緊、上、中、下の七等級となる（杜佑『通典』巻33、職官、県令）。このようなランクが全国的に明示されているのは中国全体を対象とする伝統的地理書である総志や正史地理志であり、唐代の『元和郡県図志』以降、宋代の総志、王存『元豊九域志』10巻、王象之『輿地紀勝』200巻や歐陽忞『輿地広記』38巻などにも見られる。その他に『玉海』巻14によれば、唐宋時代の行政区分図である「十道図」にも

「地望」や「郡県の上下緊望」というランクが示されていた。元代では『大元一統志』にも記されていたが、明代では基準が異なったためか、上・中・下と記されるのは王圻『統文獻通考』輿地考くらいである。そして『大明一統志』には見られず、嘉慶重修の『大清一統志』にも見えない。また正史の地理志では『旧唐書』・『新唐書』にランクが記され、『宋史』や『元史』にも引き続いて記されている。これらは、政治、軍事上の重要性や戸口の数をも勘案して定められたものだが、明初の洪武年間に府州県のランク分けの戸口基準から糧額基準への変更が行われた（『明史』職官志、巻75）。その結果なのか『明史』地理志には等級は記されない。その後『清史稿』地理志には上・中・下にかわつて「衝繁疲難」の記載がある。本来、州県をランクづける行政上の必要性とは徴税そのものといつてよい。従つて、府州県の等級を戸口数による基準から税糧額に基づく等級へと変化させたことは、里甲制の編成とあわせて考えれば、徴税原理への何らかの変更が為されたことを意味し、扱つた税糧額の規模を含めた州県の等級が、単純に戸口数によっては定まらない現状を規定に反映したといえる。里甲制が機能しなくなり、より複雑な要素を勘案しなければ実際に地方衙門を運営することが不可能になった状況を、衝繁疲難や淳刁、瘠盜という「吏治の評語」に集約させていったのではないだろうか。明代前期のランクを一覧できるのは羅洪先『広輿図』の附表であり、上・中・下と衝煩僻などの文字がよく用いられている。吏治の評語を直接に地方官僚の叙遷に反映させるようになってからのものには万曆年間の宝善堂刊の『大明官制』5巻本があるが、衝煩僻などは見えるが上中下の文字はない。このようにして明末になって「吏治の評語」によって州県の評価と地方官のポストとがリンクされる条件がととのい、清代の衝繁疲難の四字缺のシステムへとつながっていく（大澤顯浩『詞章之学』から『輿地之学』へ——地理書にみえる明末』『史林』76-1、1993年）。雍正年間に衝繁疲難の四字缺のシステムが確立すると地方官のポストの評価そのものを意味するようになった。

◆方志の性格

現在では漢籍の地理書（史部地理類）の分類は、例えば京都大学人文科学研究所の漢籍目録によると以下のようになっている。

1. 総志、2. 輿図、3. 古地志、4. 今地志、5. 雑地志、6. 辺防、7. 外紀、8. 水道水利、9. 考古、10. 名勝、11. 宮殿学校祠墓寺觀名園、12. 游記紀程路程総記、13. 土謠習俗、14. 目録叢刻

この中で史料として最もよく眼にするものは、おそらく今地志（明代以降の編纂の方志）であろう。方志（地方志）とは各省から府・州・県、鎮以下に至る各地方区画ごとに編纂された総合的な人文・歴史地理書で、それぞれ通志（省志）、府志、州志、県志、鎮志などと呼ばれる。方志の概論として山根幸夫「中国の地方志について——県志を中心に」（『歴史学研究』641、1993年）があり、工具書には所蔵各機関を挙げる中国科学院北京天文台主編『中国地方志聯合目録』（中華書局、1985年）の他に、近年では各方志の内容も示す金恩輝・胡述兆主編『中国地方志総目提要』（全3

卷, 漢美図書, 1996年), 1949年以降に編纂された新地方志3402種を対象とする同『中国地方志総目提要(1949-1999)』(漢美図書, 2002年)などがある。

方志は郡・国の地図に説明を付した「図経」に始まるとされるが、魏晋南北朝時代に南方に漢民族がおわれると、主に長江以南を対象に「地記」が編纂され、地理や古跡、人物、伝記に関して記した。また、常璩『華陽国志』や習鑿齒『襄陽耆旧伝』、宗懐『荊楚歲時記』のような地域性のある著作が続々と編纂されたのも、地域と人物を注視した六朝時代の地方分立性を反映したものであろう。南北朝を統一した隋唐になると全国的に行政組織が整い、図経を定期的に地方衙門から中央に上呈させるようになり、隋では尚書(『隋書』経籍志地理類総叙)、唐では兵部の職方司が管轄した(『通典』巻23, 兵部)。宋代の中央集権制、中央からの地方への官僚の派遣は、個々の官僚が地域情報を必要とする度合いを高めた。方志が地方官の治政の参考になったり、治績を誇るために編纂されたりする例もあっただろうが、唐代までの図経と異なり、芸文や人物に比重を移した方志は行政面での必要性から作られた編纂物というよりも地方史となっていくた。そのモデルとなったのが、宋初の総志、樂史『太平寰宇記』200巻であり、人物・風俗・題詠・名勝などを増加した百科全書性格の地理書の始まりであった。芸文は科挙の詩作、人物は家格が予め確定していないという貴族制の崩壊のもたらした二つの事情から定着していったとも考えられる。

現存する8577種(金恩輝・胡述兆主編『中国地方志総目提要』凡例)ともいわれる方志は明代以降のものがほとんどで、漢籍目録では『大清一統志』に従って排列し、刊行の年号をとり万曆『某県志』のように呼ばれる。清代になると地方官の認可が必要になったり、定期的な編纂が求められるようになったりして、方志は地方官のルーティン・ワークという程度の認識が一般化し、「方志は何よりもまず史たるべし」という章学誠の方志への要求はその反動として現れたともいえる。一般的な内容は巻首に境域や衙門の図をおき、以下に地理(歴代の沿革や山川、古跡)、城池、廟祠、学校、食貨、物産、風俗、選挙(科挙関係)、職官(歴代地方官)、名宦、人物、兵事、芸文や雑記等の記載が続く。食貨には戸口や徭役等各種の細かな統計数字が挙げられ、当地の出身者や赴任した人物を探るには人物や名宦の伝記をみればよい。また当地に関係のある人物の詩文を収めたり出身者の著作を挙げる他、地方政治に関わる文章や碑文が収録されることもある。しかし、方志はたいがい官僚・紳士が主体となって編纂されたものであるから、当然、農民や商工業者の観点は存在しない。中心となる記述の一つは文学的背景を理解するための地理的知識であり、他は読書人の観念に基づいた地域の美化である。大人口をかかえる鎮であっても方志がないことも多く、方志にはやはり基本的に官僚の存在が不可欠なのである。

従って、大量に存在するからといっても本質的にはそんなにバラエティのあるものではなく、制度や人物の情報を除いてはさほど多様ではないという限界も認識すべきである。方法論を意識しなければ、結局、史料への切り込み方にもよるが、成果を期待しても文字通り屋上屋を重ねた方志の堆積のなかを彷徨することとなる。また、地

畝や度量衡の地方差は『日知録集釈』巻10、斗斛丈尺、地畝大小などが示すようによく知られているが、前近代の中国では(場合によっては現在でも)各地方で相違があることが当たり前の状況であって、統計数字を扱う場合には注意を要する。官僚制の常として、責任を負わされる範囲内での整合性があればよしとされるのである。だから、実際に地方の風俗や社会関係を描く興味深い記事は、かえって王土性『広志鐸』5巻や黄印『錫金識小録』12巻のような筆記や私撰の地誌にあることが多い。方志に描かれたのは概ね土地と人民を支配する県レベル以上の衙門から見た地域の姿であり、政治都市ならともかく商業都市や工業都市としての姿などは本来捨棄されているからである。そして、方志に個別で具体的な規定が並べられていることが、直接民衆の生活像を示すものではないことには注意しなければならない。上に政策があれば下に対策があるのであり、政策の方は記録されても対策の方が記されることは稀なのである。

◆外界への眼差し

玄奘や義浄など仏教僧侶の求法の旅行記などは古くからあるし、宋代の陸游『入蜀記』や范成大『吳船録』などの名はよく知られている。しかし、識字人口の規模にもよるのだろうが、国内の一般の旅行記で史料的に有用なものは少なく、かえって日本から渡った円仁や策彦あるいは西洋から来たマテオ・リッチ(利瑪竇)の記録のほうが歴史的に興味深い記事を含むのは、対象(中国)に対する視線の相違なのだろう。明末になって、黄汭『一統路程図記』以下の路程書が数多く出版されるようになり、日用類書のなかにも商旅門(『三台万用正宗』巻21)のようなものが現れたが、官僚や一部の商人は別にしても大多数の人々にとって、当時の制度はなお自由な旅行を前提としたものではなかった。明末の『徐霞客遊記』も自然地理的な記載ではよく知られるが、歴史研究の史料としては必ずしも有用とはいえない。麟慶『鴻雪因縁図記』は図もあり清末の旗人の生活を描いて興味深いのが、名所の紹介にはなっても史料として用いにくいのは、現代とは視点が異なるからである。

眼を海外に転じれば、知識人は自らを貴かしとする中華の感覚にどっぴりと潰かって外国のことなど知る必要を感じなかったし、旅行記に塞外や海外の事情を記すことも稀だった。そうでない人々はほとんどの場合、文章を書くことはおろか読むこともなかった。明清時代、建前とすれば『一統志』が相当するであろうが、実際にイエズス会士が渡って来てリッチの世界図「坤輿万国全図」やアレーニ(艾儒略)の世界地誌『職方外紀』五巻が作られても、漢民族の撰述になる世界地誌などは作られなかったし、崇禎年間の陳組綬『皇明職方地圖』ではリッチ図の世界知識は「譏而不論」として捨て置かれたという(船越昭生「在華イエズス会士の地図作成とその影響について」『東洋史研究』27-4, 1969年)。清代では、トリシェン『異域録』のような特派された使節の報告を別にすれば、雍正8年序(1730)の陳倫炯『海国聞見録』や嘉慶25年(1820)に楊炳南が筆録した謝世高『海録』のように海防の任に当たった武将(といってももとは海賊つまりは商人の末裔)や偶然漂流した商人の記録が編纂さ

れたことはあったが、知識人自身が世界地誌の必要性を感じるのは清末の列強の侵略を待たねばならなかった。北虜南倭の切迫した事情の中から生み出された明代の地理書の豊富さからみれば、その分清代は平和であったということが可能なだろう。

考えてみれば、キリスト教や仏教の伝道というものはあるが、儒教の伝道などという言葉はそもそも概念自体が存在しない。キリスト教には福音を説く宣教師がおり、イスラム教はムスリム商人が商業活動を通じて広めていった。強いていえば南中国の漢民族化がそれにあたるのかもしれないが、儒教文化では商人は儒教を体現するものではないし、明代になって六論の宣講が行われたりしたが、儒教には祈願の対象となる教会や寺院というものもない。文廟とは孔子に弟子入りした士大夫が祭祀を行うところであり、原則として女性や庶人が足を踏み入れることは無く、人々が祈願をこめて礼拝するところではなかった。横浜中華街にあるのも関帝廟であって、孔子廟（文廟）ではない。国内での階層秩序——正統性を付与された不平等が、中華文明の帯びる外への冷やかな眼差しに底に存在している。中国に限らず東アジアに通底する観念となったその自らを貴かしとする姿勢からは、時には華夷の別や中体西用論が生み出され、また時にはその裏返しのように民族岐視への反発の口号を声高に唱えさせることはあっても、対等な関係が結ばれることは本質的に無かった。

中華文明を生活レベルで理解することは難しい。旧ソ連邦の訪問記でスターリン時代の本質を見抜いたのは、唯一アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』（岩波文庫、1992年復刊）くらいのものであったが、人民共和国に何度招待されても、中華文明のある側面はわからない。留学や現地での生活とまではいわないが、少なくとも招待客でない立場に身をおいて初めて理解が可能となることがある。旧中国の史料も同様で、それを知らないまま士大夫の描いた美しい「口号」を鵜呑みにして、史料にある制度的完璧性を現実のものとして解するのは危険ですらある。旧中国でも書く側と書かれる側との乖離を意識してしすぎることはない。

（大澤顯浩）

B. 付 録

中砂明德

筆者には、中国史を学ぶ際に知っておいたほうがよいと思われるいくつかの事柄を紹介することが課せられている。しかし、ナビゲーターとして適任とは言いかねる。内外の図書館を歴訪し、文献を渉猟するという、足で稼ぐタイプにはあらざる横着者だし、かといって机まわりの工具書やパソコンを駆使して、涼しげに仕事をこなす armchair detective たりうるには、余りにも要領が悪すぎるからである。

そんな人間でも、専門課程に進んできた3回生に対して「入門」の授業をしなければならぬ。その際に、学生諸君には入門心得として、『アジア歴史研究入門』1（同朋舎出版、1983年*。2005年8月現在で新本を入手できないものには、*を付した。以下同じ）の島田度次「序論」を紹介することになっているが、「院生の時に読んで、自分が今まで必要なプロセスを飛ばして来てしまったことが分かって、恥ずかしかった」と付言している。本当に反省したのなら、その時一から出直せばよかったのだが、そんな殊勝な人間にはできていない。ただ、読者諸兄弟には、手遅れになる前に島田の文章を読むことをお勧めする。

◆図書館

学生のころ、書誌がどうだとかは、ほとんど気にならなかった。書誌情報のありがたみが少しだけ分かるようになり、稀見の書の探索に心血を注いだ人々の存在が視野に入ってきたのは、教える側にまわってからのことである。たとえば、清末の学者楊守敬（1839～1915）である。彼は公使の随員として1880年から4年間日本に滞在していた間に、本土で見られなくなっていた書物の探査に努め、日本に残存していた鈔本や宋・元時代の刻本が、六朝から宋に至る學術史に有益な情報を提供しうることを、その著『日本訪書志』において示した。

『日本訪書志』には、しばしば「楓山官庫」の名が見える。これは、寛永16年（1639）に江戸城内の紅葉山に作られた文庫（紅葉山文庫、御文庫、楓山文庫などと呼ばれる）のことで、明治政府に受け継がれ、楊の帰国後まもなく内閣制度の施行とともに発足した内閣文庫の中核を、昌平坂学問所蔵本などとともに形成することにな

る。内閣文庫は今日では皇居の向いにある国立公文書館に所属している。

長崎を通じた購入や、大名等の献本を主とする収蔵書には、中国で見られなくなった孤本も数多い。また、徳川吉宗が購入に努めた清初の地方志コレクションは内外に名高い。こうした江戸期の蓄積が、内閣文庫を単なる稀見書の巢窟に止まらない、明清史研究の宝庫にしている。その歴史については『内閣文庫百年史(増補版)』(汲古書院、1986年*)につくべきであろうが、読み物としては福井保『紅葉山文庫』(郷学舎、1980年*)を薦めたい。なお、1891年に宋元の善本が図書寮(現宮内庁書陵部)に移管されている(内閣文庫と異なり、閲覧には事前の手続きを要する)。他にも、前田家の尊経閣文庫(東京、要予約)、尾張徳川の蓬左文庫(名古屋)などの大名由来の蔵書には見るべきものが多い(以上の文庫については、いずれも蔵書目録がある)。

これらの文庫は、いわば江戸時代の日中文化交流史を体現したもののだが、近代以後になると、のんきに「交流」とばかりも言っていられなくなる。書籍の購入は、向こうから見れば文化の略取である。

清末有数の蔵書家陸心源(1834~1894)の死後、蔵書が売られてたてられた時、内外から購入希望の聲が上がったが、結局は三菱の岩崎弥之助(1851~1908)の手にわたり、静嘉堂文庫に収まった。この中には陸心源が「皕宋楼」と誇った宋版、さらに元版のうち250種強が含まれる。この時、中国における出版の最大手商務印書館をリードし、近代文化史に大きな足跡を印した張元済(1867~1959)は、貴重な文化財の流出を阻止しようとして果たさなかった。のちに訪日した時、因縁の静嘉堂をはじめ、各所の珍本を閲覧して渴を癒し、内藤湖南(1866~1934)や当時の静嘉堂文庫長諸橋敏次(1883~1982)らの学者と交歓したが、その胸中は複雑だったろう。中日文化交流史の研究者厳紹盪もそうした思いを共有する一人である。彼の『日本蔵漢籍珍本追跡紀実』(上海古籍出版社、2005年)は、上掲の図書館に加えて、徳富蘇峰(1863~1957)の成篋堂文庫を収めたお茶の水図書館や、東福寺などの仏寺の書庫の訪問記録であり、現代の北京大学教授の日本観察記としても読むことができる。

このように、日本には本国の人も羨み、嘆息するような稀見書が多く蔵されている。近年、これらの書物は楊・張の時代よりもさらに大規模に、彼の地で影印されるようになったので(たとえば、台湾刊行の「中国方志叢書」第三期には内閣文庫など日本所蔵本の影印が数多く含まれている)、我々にとってもそれらの文庫に足を運ぶ労がある程度は省かれている。しかし、実際にこれらの場所を訪れ実物を手にして、たとえば林羅山らが施した手校の跡を目でなぞってみるのも悪くないだろう(静嘉堂や国立国会図書館の古典籍資料室などでは、ものによってはマイクロリーダーでの閲覧を求められる)。

以上の文庫は確たる見通しのもとに蒐書が行われたわけではない。蔵書形成には偶然の要因も大きく作用している。これに対して、「研究第一」に作られた図書館の代表例が、京都大学人文科学研究所東方面図書館(現、漢字情報研究センター図書室)

である。

人文研東方面の前身は、義和団事件の賠償金による「対支文化事業特別会計」の一環として1929年に作られた東方文化学院である。その出発時点で購入されたのが、陶湘(1871~1940)の蔵書2万8千冊であった。彼の蒐集の特色は、さまざまな書籍を収録した清代の叢書を多種とり揃えていたことにある。近現代の中国学の前提をなしているのは、清朝の考証学である。できるだけ良質のテキストを求め、これに校勘を施すことがその前提となる。それらの成果がコンパクトに反映されている叢書は、後世の学徒に裨益すること大であった。その点、稀書の収集でなく、所員の研究に役立つ収書という方針を立てた研究所にとって願ったりかなったりのコレクションだった(もともと、中国側からすれば、これも文化の略取に数えられる)。

その反面、稀見史料の収集という面では弱点を抱えていたが、のちに内閣文庫所蔵の明版文集や清初の地方志、海外図書館収蔵の稀見書の影照が精力的に行われて、ある程度はカバーされた。その結果、西の人間は、東京に行かなくても、ここでかなり用が足りる。

東方文化学院は京都と同時に東京にも作られた。東京大学東洋文化研究所は戦後その蔵書を受け継ぎ、ユニークな個人蔵書(大木文庫、仁井田文庫など)を含めて、国内有数の収蔵機関となっている。なお、人文研の漢籍目録は他大学・図書館がつくった漢籍目録の範となったので、『京都大学人文科学研究所漢籍目録』(上・下、1979~80年*)に就いて、その体例を押さえておく必要がある。また、両研究所が中心となって、国内の図書館(現在30数機関)に所蔵される漢籍のデータベース(全国漢籍データベース)が構築されつつある。

人文研とおなじく明確な意図をもって作り上げられてきたのが、東洋文庫である。岩崎弥之助の甥久弥(1865~1955)がオーストラリアのジャーナリスト、ジョージ・アーネスト・モリソン(1862~1920)から買い上げた中国関係の欧文コレクション2万4千冊(cf. *Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison*, 2 vols., 1924*)を中心にして成立した東洋文庫は、アジア研究の拠点たらしめとして、さらに多くのコレクションを吸収し、新たな資料収集に努めてきた。中国のみについても、モリソンが集めたパンフレット類、あるいは西洋人の手になる地図や旅行記等はもちろんのこと、地方志の収集も豊富であって、じつに多彩である。当文庫については、その維持拡張に尽力した榎一雄(1913~1989)による紹介が参考になる(『榎一雄著作集』第9巻、汲古書院、1994年)。また、文庫形成期の日本の東洋研究は、ある意味では今より世界に通路が開けていた。その時代の空気を嗅ぐには、初代主事石田幹之助(1891~1974)の名著『欧米に於ける支那研究』(創元社、1942年*)につくのがよいだろう。

以上の両研究所、東洋文庫は近代史関係の資料が豊富なことでも知られている。近代中日交渉史の研究者にとっては、外務省外交史料館や防衛庁防衛研究所も通いなれた道であるらしいが、門外漢の筆者は訪れたことがない。

和漢洋問わない収蔵という点では、天理図書館の名を逸するわけにはゆかないが、筆者は、漢籍についてはその全貌をつかんでいない（地方志を除くとまとまった漢籍目録がない）。しかし、中国だけでなく広くアジア史を見渡そうとすれば、東洋文庫に負けない魅力を有する図書館である。それは「天理大学善本叢書」に収められるような稀見書に限られない。たとえば、筆者がかつてここに通った目当ての一つは、欧人のアジア研究書にあったが、アンカット本を開くために何度もカウンターでペーパーナイフを借りたものである。もっと探査されてしかるべき宝の山である。

なお、ここでは国内の図書館の紹介に止めたが、大陸の図書館の歴史、蔵書について、潘美月・沈津編『中国大陸古籍存蔵概況』（国立編訳館、2002年）という便利な本がある。

◆書店

いずこも本の収納スペースに困っている現在、「本は図書館で見るべし、借りるべし」というのが合理的な態度というものであろう。しかし、東京や京都界隈で学生・研究生活を送っていると実感しにくいことであるが、中国史をやるのに一通り必要な書籍をそろえている図書館というのは、非常に数が限られている。日本史を学ぶようなわけにはとてもゆかない。結局この稼業を営んでいくには、相当量の書籍を自分で背負い込まざるを得ない（今はそうでもないのかも知れないが）。

中国書籍を扱う書店についても、東京や京都への集中という点では、図書館と事情はさほど変わらず、店舗を覗いてみるのも容易ではない。しかし、各書店が定期的に出しているカタログや、ウェブサイトのサーチエンジンが助けになる（ただし、タイトルを見て期待し、届いて中身を見てガックリ、ということは中国書の場合特に多いので注意）。ここでは、いくつかの書店について紹介するが、網羅的なものでないことをお断りしておく（書店の所在地、ウェブサイト等については、山田崇仁作成の「中国書籍販売店データベース」<http://www.shuiren.org/books/index-j.html>を参照）。

各書店がそれぞれ工夫をこらしたホームページを作っているが、今のところもっとも多様で便利なのは東方書店（東京）の「本の情報館」である。サーチエンジンもきめ細かくできています。また、PR誌『東方』はエッセイ、書評など読みどころも多い。同様のPR誌には、魯迅ゆかりの内山書店（東京）の『中国図書』などがある。

朋友書店（京都）と亜東書店（東京）はカタログを毎月、中国書店（福岡）は年4回出している。琳琅閣書店（東京）は夏期セール書目に特色がある。中文出版社（京都）、高畑書店（京都）は台湾書に強く、北九州中国書店は考古学専門の目録も出している。オンライン専門書店としては、書虫の品揃えが豊富である。

ウェブサイトやメールによって、書物の内容紹介がある程度可能になったが、取り上げる点数には限度がある。紙のカタログでこれを実現しているのが、上海学術書店である。中国からの輸入仲介をしていて、向こうで作られたカタログ（というより広告）をそのまま送ってくる。新聞をなめる様に読み、チラシのチェックを欠かさないような人にはお勧めである。

この文章で取り上げる参考文献の大半が、新本では入手できない。そこで、古書店の出番となる。なかでも、鶴本書店（東京）、東城書店（東京）は、豊富な在庫を有している。いずれも、「日本の古本屋」に登録しているので、そちらのサイトからの検索も可能である。最後に、アジア関係の洋書を広く扱っている書店として、胡桃書房（東京）の名を挙げておく。

◆暦・年表

清代の考証学者王鳴盛の没年を A. Hummel (ed.) *Eminent Chinese of the Ch'ing Period 1644-1912* (『清代名人伝略』1943~44年。成文書局、1970年景印) は1798年とするのに対し、日本の事典 (『東洋史辞典』『アジア歴史事典』など) は1797年とするものが多い。我々は中国の年号に該当する西暦年をそのまま生卒年として採用しがちなので、日付が旧暦の年末だと、こうしたことがしばしば起こるわけである。

陳垣 (1880~1971) は『中西回史日曆』(北京大学研究所、1926年*) の序文において、朱子のライバル陸九淵を例にとりあげて、このずれについて説明を加える。陸九淵は紹熙三年卒だが、これは西暦では1192年に当たる。しかし、死んだ日の十二月十四日は西暦に直すと1193年1月18日になる、と。

陳垣はこう切り出して、実事求是のためには中・西の暦を比較対照する工具書が必要だと述べ、さらに長春真人『西遊記』の「辛巳の年 (1221) 塞藍城 (カザフスタン南部) に来ると、十一月四日に現地の人々が新年を祝っていた」という記述を持ち出し、これが新年でなく、イスラム暦618年10月の「開齋大節 (断食明け) であることが分かるには中・回暦の対照が必要だと述べる。彼がこう力説するのも、当時回教の中国伝播について研究していたからだが、元朝以後多くのムスリムを抱え込むことになる中国ゆえに、三つの日暦の対照も時には必要になるのである。

ただ、この本は西暦紀元後の2000年間の日にちをすべて表示するため嵩が少し張る。また、分裂時代には用いる暦が違うのだが (たとえば、遼朝と宋朝で暦日が一日ずれていたために、宋の使節が遼暦の冬至に当たる日に入賀を求められても面子を守って断ったという話がある)、それを表にあらわすことが難しい。そこで、南北朝は南朝、遼金宋では宋の朔閏を採用している (ただし、太平天国暦は併記されている)。こうした異同も含め、月の大小や閏月の位置を確認するには、同人の『二十史朔閏表』(北京大学研究所、1925年。『日曆』同様に民国30年以後2000年に到るまでを補ったのは『中国年曆総譜』の著者で台湾に渡った董作賓 (1895~1963) である) でよい。近年のものとしては、方詩銘『中国史暦日和中西暦日対照表』(上海辞書出版社、1987年*) がある。これは、共和 (前841) 以後の暦日と、西暦紀元以後の対照表 (朔、11、21日) を示したものであり、付録にはそれ以前の殷・西周の表も載せる。なお、『二十史朔閏表』は前漢から始まっているが、漢初は殷暦を用いたとの前提に立っている。1972年に山東省臨沂県銀雀山から出土した竹簡の古暦によって、その前提は崩れ、その後に出た方の本の表も、後者に基いている。

ただ、史書の日付はしばしば干支で表記されるのに、これらの対照表ではそれが一

目では分かりにくい。その点、時代的な限定はあるが、徐錫祺編『西周（共和）至西漢曆譜』（北京科学技術出版社、1997年）、平岡武夫編『唐代の曆』（京都大学人文科学研究所、1954年*）、洪金富編『遼宋金夏元五朝日曆』（中央研究院歴史語言研究所、2004年）、鄭鶴声編『近世中西史日対照表』（商務印書館、1936年*。1516～1941年をカバー）などであれば、干支紀日と陽曆紀日の対応を一目で確認することができる。ロシアとの交渉に関して、革命前まで使用されたユリウス曆と対照する時には、紀大椿編『中西回俄曆表（1821～2020）』（新疆人民出版社、2002年）がある。

曆法の問題は極めて複雑である。しばしば改変が行われるし、それがまた必ずしも正確を期してなされるものとは限らず、時の支配者の都合による主観的な改変もあって一筋縄ではゆかない（『唐代の曆』の平岡武夫の序説参照）。

なお、今では台湾中央研究院の「両千年中西曆轉換」などのサーチエンジンを使うほうが手っ取り早いのかも知れないが、前掲の洪金富は「実際に使ってみると麻煩である」として、紙本に軍配を上げている。

歴史年表にこれはといふものはない。年表はやはり自分でつくるものなのだろう。ただ、年号と西曆年の対照には簡便で携行に便利な藤島達朗・野上俊静編『東方年表』（平楽寺書店）があり、そのうたい文句「歴史・古美術研究者必携」に偽りはない。1955年の初版以来刷を重ねている掌中版に加えて、卓上用の大字版も刊行されている。

◆人物

生卒年と言えば、王鳴盛の義弟錢大昕（1728～1804）が有名人の生卒年を示した「疑年録」というジャンルを始めている。前掲の陸心源の『三統疑年録』にいたっては、3千人を収録し、陳垣にも『釈氏疑年録』の作がある。最近、賈貴榮他編の「疑年録集成」（北京図書館出版社、2002年）も出た。また、有名人の誕生日をまとめた朱彭寿（1869～1950）『古今人生日考』が影印されている（北京図書館出版社、2002年）。

ここで、人名事典について述べておく。一通りのことを知るには『アジア歴史事典』で用は足りる。さらに、関連事項を引き出すためには、伝記のみならず、その人物に関する文章の出所を示した一連の「伝記資料索引」（昌彼得・王徳毅他編『宋人伝記資料索引』鼎文書局、1974～76年、1977年増訂版。Igor de Rachewiltz and May Wang (eds.), *Repertory of Proper Names in Yuan Literary Sources*（『元朝人名録』南天書局、1988年、補篇1996年など）が役に立つ。唐代までなら情報は正史周辺に限定されるが、宋代以降になると文集や地方志の量が増え、検索範囲を広げねばならないから、こうした工具書が作られるのである。地方志の人名索引もいくつか出始めている。

前掲ハンメル『清代名人伝略』や、その姉妹編ともいふべきL. C. Goodrich and Chaoyin Fang（房兆楹）(eds.), *Dictionary of Ming Biography 1368-1644*（『明代名人伝』Columbia University Press、1976年、南天書局、1978年景印*）は内容も詳細で、

欧米の研究者が必ず参照するものである。近代（アヘン戦争以後）については陳玉堂編『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』（浙江古籍出版社、2005年）、徐友春主編『民国人物大辞典』（河北人民出版社、1991年）が役に立つそうである。また、来華外国人について調べる際にやっかいなのは名前の漢字表記で、誰のことか容易に分からない。その際には、黄光域『近代中国専名翻訳詞典』（四川人民出版社、2001年）の索引から逆引きするのも一つの方法である。

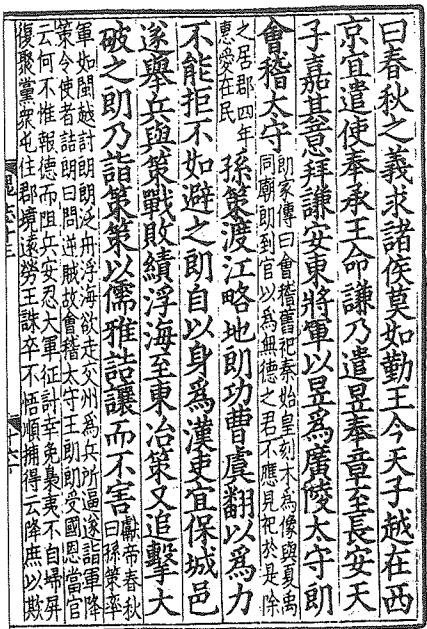
しかし、人物の履歴を詳しく調べようとするなら、やはり年譜につくべきである。楊殿珣『中国歴代年譜総録』（書目文献出版社、1980年、1996年増訂版）、謝巍『中国歴代人物年譜考録』（中華書局、1992年*）などで年譜の種類・所在を確認できる（後者の方が詳しい）。年譜の集成として中華書局の「年譜叢刊」、台湾商務印書館の「新編中国名人年譜集成」シリーズがあるが、やはり一級の有名人に限られる。最近1200種を収録した「北京図書館蔵珍本年譜叢刊」（北京図書館出版社、1999年）が出たのはありがたいが、購入している図書館はそう多くないだろう。

年譜には、史料にハサミを入れて編集したものだけでなく、原史料の形をできるだけ残した資料集的なものもかなり存在する。その立場に徹底したものを「年譜長編」（『資治通鑑』編集の前段階の史料集としての「長編」から命名）という。たとえば、丁文江他編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、1983年*）は譜主の存在が巨大なだけに、近代史の資料集としても有用であり、さらに詳細な注を付した日本語訳が岩波書店から出ている（2004年）。「年譜」と書名にあっても、実際には長編に近いものもある。たとえば、フランス人デュランの編んだ『戴名世年譜』（中華書局、2004年）は千頁を優に超える巨冊である。下手な評伝を読むより、ずっと役に立つ。

さて、史料にはその人物の名（諱）が出てくるとは限らない。というより、字・号・諡、あるいは官名・地名との組み合わせで出てくるものがしばしばであるが、字や別号については、陳徳芸『古今人物別名索引』（広州嶺南大学図書館、1937年）が汎用されてきた。最近では収録例を増やした尚恒元他編『中国人名異称大辞典』（山西人民出版社、2002年）が出ている（下限は1949年）。各時代について、楊廷福他編の『明人室名別称字号索引』（上海古籍出版社、2002年）、『清人室名別称字号索引（増補本）』（同、1988年、2001年増補版）など詳しいものが出ている。近代以降は筆名も加わり、ますます別称が増える。これに対応したものとして、朱宝樑『20世紀中文著作者筆名録』（1977年の初版はアメリカで刊行。修訂第3版、広西師範大学出版社、2002年）があり、前掲の陳玉堂の本の名号索引も使える。

◆史諱

史料で必ずしも名（諱）でなく、字や号がしばしば出てくるのは、直接名指しするのを避ける習慣によるものである。特に皇帝（とその祖先）の名は、その王朝の文献においては使用できなかった。裏返せば、この「避諱」が文献・文物の時代を絞り込むことを可能にする。錢大昕をはじめとする清人が散発的に研究を行ったが、これを史学の一補助学科としての「避諱学」にまで高めたのが、前掲の陳垣である。銭の生



誕二百周年を記念して発表された『史諱举例』（『燕京学報』第4期，1928年）がいかに有用であるかは，書誌学の大家阿部隆一（1917～1983）が，日本で手に入れにくいから重印してほしいと台湾の出版社にリクエストしたという話からもわかる。

今日もどこかの漢文演習で教師が「清代の文献では）なぜ鄭玄があざなの康成で出てくるのか」「唐代の文献では）十干の丙が景となるのはなぜか」と問うて学生を試しているかも知れない。そうした質問を浴びるうちに経験的に身につくようになるものだが，法則をはみ出す例外も多く，断片的な知識では勘違いを犯す危険性がある。歴代にわたって，様々なケースをとりあげて紹介した同書の内容は価値はいまなお高い。

漢字を代替するのではなく，字の一部

を欠く「欠筆」はいつごろ始まったのか。音声と同じまたは近い字まで避ける（嫌名）ケースにどのようなものがあるか。二字名の場合，それぞれの字を避ける必要は無いという原則（二名不偏諱）が後世ほとんど守られていない（たとえば，康熙帝の名の玄暉に鄭玄は片方しか引かかかっていないのに，避けている）等。とくに，「避諱学」を踏まえないうために古人もやらかした数々の誤りを取り上げた巻6は必読である。

文献の出版時点を確定するのにも，避諱を利用できる。とくに，避諱にうろさかった宋代の場合，欠筆によって版木作成時期の上限をある程度決めることができる。もっとも，現代の標点本を使う限り，欠筆にお目にかかることはない。だから，とりあえずは，張元済が苦心して集めた「百衲本二十四史」の宋版影印本のどれか一つをサンプルとして手元におくのがよいだろう。ここには張が特に執心していた宮内庁書陵部蔵本を配した『三国志』の王朗伝を掲げた。「朗」（宋朝の始祖の名が玄朗）の字が欠筆であることが分かるだろう（もっとも注の中の「朗」は普通の字で，この民間出版本の避諱のいいかげんさを表している）。

なお，避諱は皇帝の御名のみに限られない。孔子の名である「丘」が避けられて「邱」が使われることがあったり，御名の避諱にはうろさくない元朝が，色々と忌字を指定したりしている。陳垣の頃には容易に見られなかった周広業（1730～1798）

『経史避名匯考』（北京図書館古籍珍本叢刊所収）を大いに利用して作られた王彦坤編『歴代避諱字匯典』（中州古籍出版社，1997年）がこうした様々な例を収録している。また，書籍だけでなく，地図の制作年代の確定についても避諱が手がかりとなることがある。地名については，李徳清『中国歴史地名避諱考』（華東師範大学出版社，2002年）がある。

◆ローマ字表記

人名のローマ字転写のサンプルとして，17～18世紀のフランス人宣教師が翻訳した『通鑑綱目』，19世紀のイギリス人外交官が編み出したもの，現在中華人民共和国で使われているピンイン方式の三つを表に示した。

16世紀の末以来，西洋人は漢語学習のために，漢字音のローマ字転写に工夫を凝らしてきた。そのうち，現在まで行用されているのが，ウェード・ジャイルズ式である。中国で長年外交畑を歩いてきたトマス・ウェード（1818～1895）は，後輩たちに中国語を学ぶための階梯を提供することに腐心した。なかでも，彼が工夫した orthography（綴字法）は，1867年刊行の北京官話学習教科書『語言自選集』（*Yü-yen Tzū-erh Chi*）が好評を博したことにより，普及してゆく。帰国後の彼にはケンブリッジ大学の漢語教授の講座が用意されていた。その後任，ハーバート・ジャイルズ（1845～1933）が1912年に改版された *Chinese-English Dictionary* においてさらに改良を加えたのが，ウェード・ジャイルズ式のローマ字表記である。

欧米の研究書や論文を読む時，少しやっかいなのが人名・地名に出くわした時である。一昔前の洋書には，活字の問題のために本文に漢字を挟み込みにくかった。拼音世代ではウェード式表記の語句はピンと来ず，確かめようとすればいちいち巻末の glossary まで頁をめくらねばならなかった。その glossary の漢字も下手くそな筆写体が多く，そもそも語彙の拾い落としがあった。むろん例外もあって，欧州の老舗雑誌 *T'oung Pao*（1890年発刊）やアメリカの *Harvard Journal of Asiatic Studies*（1936年発刊）には当初から本文に活字が入っていた。今日では，それも珍しくなくなり，しかも当然正字体で入っているのだから，旧漢字離れの進んでいる我々が見ると一瞬気圧されるのだが，よくみると誤字を幾らでも拾える。やはり欧米人にとって漢字は「異物」なのであろう。その点，前掲の『清代名人伝略』『明代名人伝』は中国人が関与しているせいか，誤りがない。これらの本ももちろんウェード式だが，他には Charles O. Hucker (ed.), *A Dictionary of Official Titles in Imperial China* (Stanford

	ド・マイヤ	ウェード	ピンイン
司馬遷	sse ma tsien	ssü ma ch'ien	sī mǎ qiān
班固	pan kou	pan ku	bān gù
爾朱榮	er tchu jong	êrh chu jung	ěr zhū róng
石敬瑭	che king tang	shih ching t'ang	shí jìng táng
張獻忠	tchang hien tchong	chang hsien chung	zhāng xiàn zhōng

University Press, 1985) などもそうであるし、ピンイン優勢の中でウェード式を固守している研究者もいる。欧米だけではない。音写に注音字母を用いる台湾においても、ローマ字表記の際にウェード式が用いられている。必携の辞書、愛知大学編『中日大辞典』の末尾に注音字母を加えた対照表が載っている。

◆度量衡

『三国志演義』の劈頭、三英傑の出会いの場面で、劉備の目から見た関羽は「身長九尺、髯長二尺」と描写されるが、正史の『三国志』に身長の記事はない。元代の時点では「九尺二寸」になっているが(『三国志平話』)、それがどこまでさかのぼるのかは知らない。元代の一尺は31cmあるいはそれ以上なので、当時の読者がそれをまともに受けとれば、関羽はとんでもない巨人になってしまう。一方、後漢時代末なら約24cmなので、210cm強、なんとか常識の範疇には収まる。読者は、いったいどちらをイメージしたのだろうか？

八、九尺どころか、一丈の偉丈夫がごろごろ出てくる小説の世界でこんなことをまともに考えること自体ナンセンスなのだろう。では、これならどうか。宋代の人が「曹操に仕えた怪力無双の典韋の二本の戟は合わせて八十斤の重さ。しかし、今に換算すれば三十斤に過ぎない」とわざわざ記しているのを見ると、度量衡制の変遷を頭に入れないで勘違いすることもあったのだろう。

このように、中国の度量衡は、時代的変遷が大きい。度量衡は税の取収から礼楽の制定までにかかわる重要な問題なので、多くの学者が注目し、格闘してきた。わが国でも、前掲『日本訪書志』にしばしば名前が出てくる、江戸期の蔵書家・考証学者狩谷掖斎(1776~1835)の『本朝度量衡考』(富谷至校注、平凡社東洋文庫、1991~92年)が皇国と西土(中国)の詳細な比較を行っている。

次頁の表は、メートル法導入にかかわった吳承洛(1892~1955)の『中国度量衡史』(商務印書館、1937年。1957年に程理濬の大幅な改訂版が出ているが、データそのものは新しくなっていない)所掲の表に載る数値を並べたものである(ただし、歩・里・畝は尺の数値から計算したもの。また、南北朝の部分は簡略化している)。この本は度量衡に関する古典的著作で、卑近な例を挙げれば角川の『新字源』付録の度量衡表もほぼこの数字を踏襲している。しかし、その数値には大いに問題がある。それでも今なお吳承洛の数値が流通しているのは、度量衡全体にわたって数字をすっきり示したものがいないからである。

この表のうち、まず問題になるのが、王莽以前の周・秦・漢である。『新字源』もこの部分は「周・春秋・戦国・前漢」という項で一括りにして、違う数字を載せているし、1980年に出た梁方仲『中国歴代戸口、田地、田賦統計』(上海人民出版社。座右に備えておきたい一冊である)の「中国歴代度量衡変遷表」に載る吳承洛の表も、秦以前を切り落としている。しかし、梁は吳承洛を批判した1958年の万国鼎(『秦漢度量衡考』)の数値(1尺一晚周・秦漢23.1cm, 1升一秦漢199.7ml, 1斤一秦漢240g)を示しながらも、参考扱いに止めている。また、尺度の歴代変遷表について

	朝代	1尺(cm)	歩(m)	里(m)	畝(a)	升(ml)	両(g)	斤(g)
前 1122-225	周	19.91	(6尺)1.19	(300歩)358	(100歩)1.42	193.7	14.93	228.86
前 350-206	秦	27.65	1.66	498	(240歩)6.61	342.5	16.14	258.24
前 206-8	漢	27.65	1.66	498	6.61	342.5	16.14	258.24
9-24	新	23.04	1.38	415	4.59	198.1	13.92	222.73
25-80	後漢	23.04	1.38	415	4.59	198.1	13.92	222.73
81-220	後漢	23.75	1.43	429	4.91	198.1	13.92	222.73
220-265	魏	24.12	1.45	434	5.03	202.3	13.92	222.73
265-317	晋	24.12	1.45	434	5.03	202.3	13.92	222.73
317-420	東晋	24.45	1.47	440	5.19	202.3	13.92	222.73
479-502	南齐	24.51	(宋から陳)			297.2	20.88	334.10
502-589	梁・陳					198.1	13.92	222.73
386-534	北魏	三種の尺を雑用, 27.81, 27.90, 29.51				396.3	13.92	222.73
534-557	東魏・北齐	29.97					27.84	445.46
557-566	北周	29.51				157.2	×	×
566-581	北周	26.68				210.5	15.66	250.56
581-602	隋	29.51	1.77	531	7.52	594.4	41.76	668.19
603-618	隋	23.55				198.1	13.92	222.73
618-960	唐・五代	31.10	(5尺)1.56	(360歩)560	5.80	594.4	37.30	596.82
960-1279	宋	30.72	1.54	553	5.67	664.1	37.30	596.82
1279-1368	元	30.72	1.54	553	5.67	948.8	37.30	596.82
1368-1644	明	31.10	1.56	560	5.80	1073.7	37.30	596.82
1644-1912	清	32.00	1.60	576	6.14	1035.3	37.30	596.82

注) 100畝=1頃, 1升=10斗, 1斛=10升, 1斤=16両

は、吳承洛をしのいだとされる楊寬(『中国歴代尺度考』)など他の学者のデータを併記しているのに、量・衡については吳承洛の数字を転載するだけで、その中には前漢も含まれている。これでは万国鼎と吳承洛のどちらを支持しているのか分からない。しかし、これは梁方仲の矛盾というより、それだけ量・衡の問題が難しいということだろう。

ちなみに、1994年に出た『漢語大詞典 付録・索引』の最初に載る「測算簡表」の「統一換算」の欄の秦、前漢の、1尺は23.1cm, 1升は200mlで万国鼎のデータと同じだが、1斤は秦253g, 前漢248g, とする。刻みが細かくなったように見えるが、出土物の実測値幅の中を取ったものである。出土文物の増加により、文献に準拠するしかなかった吳承洛の時代より、ずいぶん状況はよくなったが(それらの文物を紹介したのが『中国古代度量衡図集』文物出版社、1981年。山田慶児・浅原達郎訳、みすず書房、1985年)、さりとて量的に処理できるほどデータが充実しているわけではない。そこで、簡潔な変遷表を作るより、実測値を並べたほうが無難ということに

なる。

さらにやっかいなのが魏晉南北朝時代の変化である。後漢と隋の間で、度が28%増、量・衡が3倍になっていることは確かなのだが、その間がトンネル状態で、何が起きていたのか明らかでない（『新字源』は賢明にも？このトンネルをカットしている）。度量衡がもっとも激しく動いた魏晉から元朝までを扱い、とくに計器の問題に着目することで新知見を打ち出している郭正忠『三至十四世紀中国的権衡度量』（中国社会科学出版社、1993年*）によりつつ、表の数字の凸凹について説明しよう。

まず右欄の衡から。後漢の数字が梁・陳、隋後期にも現れ、南齊はその1.5倍に、北周が1.125倍、隋初が3倍になっている。これは『隋書』律曆志の「梁陳は古秤により、齊は古秤1斤8兩を1斤とし、周の玉秤4兩は古秤4兩半にあたり、開皇（年間）は古秤3斤をもって1斤となし、大業中に古秤に依復す」とあるのをもとにしている（なお、吳承洛は「齊」=南齊とするが、北齊が正しい）。

東魏・北齊の数字が2倍になっているが（孔穎達の『左伝』正義による）、北齊を併合した北周でへこむので、やはり隋の跳ね上がり際立つ。実際、こうした史料から顧炎武（1613~1682）は「隋代に一変して三倍となった」と主張しているのである。郭正忠は文献を再検討した結果、古秤が一貫して用いられていたわけではなく、大秤が早くから存在しており、たびたび政府が古秤に改正しても、現実には大秤が存続したことを指摘する。つまり、隋代の改制は「大秤の現実」を認めた（北周時代にすでに古秤の3倍だったとする史料もある）ものということになる（東魏・北齊の数字もその現実を反映したもの）。

唐以後の数字が同じになっているのは、清末に度量衡を研究した吳大澂（1835~1902）が、唐錢10枚（1枚=2銖4累、つまり10枚で1兩）の重さが清の庫平（財政収支に使う秤）1兩と一致していることを「発見」したことに基づいている。そこから、吳承洛はその間の宋から明も不変と推測したのだが、錢の重量はあまりあてにならない。実際、50年代以降に次々と出土した銀錠・銀板の重量データによると、1斤=唐初680g、中期660g程度という数字が出てくる。宋はさらに軽くなり、明にまた下がって清の数字に落ち着く、というのが実勢らしい。なお、ここでは1斤=16兩として数字を示しているが、たとえば宋代の交易においては、官庁仕様の省秤（1斤=16兩、貴金属の交易に用いる）のほかに、1斤=20兩（食料）あるいは22兩（薪炭）という単位があった。

量について。南北朝の凸凹、隋後半の減少は、衡と同じ事情による。こうした量・衡におけるダブル・スタンダードは、唐代に大小二制として成文化された（小升・小兩は音律の調整や、日時計の計測、薬の調合等の際に用いられた）。ただ、衡と違って数字が宋以後大幅に増えている。そのこと自体は間違いでないのだが、宋（『夢溪筆談』の記事による）とそれをもとにはじき出された元の数字（「宋の一石は今の七斗」にあたるという『元史』の記述による）も諸説の一つであるにすぎない。

また、斛・斗・升・合の関係は十進法だが、本来は重量単位だった石（1石=120

斤）も量の単位として斛と通用していた。南宋期の五斗斛（マス）の普及にともない、5斗=1斛、2斛=1石になったが、その一方で相変わらず斛・石が混用されていたことは注意を要する。

最後にまだしも変動の少ない度について。吳承洛は、清の营造尺（工部で作成し、建築や土地測量に用いる）7寸2分が王莽の新しい1尺にあたりとみて、新尺を $32 \times 0.72 = 23.04$ cmとし、『隋書』律曆志の各代尺の比較から魏晉南北朝の数値を算定した（隋後半の数字は量衡と同じく古尺への復帰）。この計算の前提はその後の研究で覆されたが、新~隋について各研究者の算定数値はこれとさして変わらない。唐代の数字はその後の研究で29.6cmあたりに落ち着いている。これが唐代後半に伸びてゆき、宋代へと繋がる。また、表では宋・元の数字が同じだが、これは「元の史料に特段の記述がないから従来どおりに違いない」と推測しただけで、金・元で尺長は伸びたらしい。

用途・地方によって使う尺の長短差があることにも注意しなければならない。たとえば、重要な税種のひとつである絹の単位は匹（唐代一匹=幅1尺8寸、長さ40尺。五代一幅2尺5分、長さ42尺）だが、その計量には营造尺とは別の布帛尺が用いられる。宋代は五代を引き継いで1匹=42尺だが、1匹=40尺など他の単位も存続した。これは尺の長さの地方差によるものである。

歩は長さの単位（周代1歩=6尺、唐代以後=5尺。里は逆に300歩から360歩となりここで帳尻が合う）であると同時に、面積の単位（方歩）でもある（周代の1畝は100歩、秦漢以後は240歩）。ただし、唐以後の長さ1歩=5尺の公式も、官尺より短い尺度（たとえば、南方で使われた浙尺）には当てはまらない。

以上、あまり要領のいい説明ではないが、吳承洛の数字の位置づけの手助けになれば幸いである。

◆貨幣

度量衡と密接にかかわる貨幣の歴史も複雑怪奇である。そして、度量衡同様、決定版とよべる通史はまだ書かれていないが、度量衡の吳承洛にあたるのが彭信威の『中国貨幣史』（群聯出版社、1954年。上海人民出版社、1965年再修訂）だろうか。関連史料・データが豊富で、経済史の専家に重宝がられているようである。しかし、その分千頁弱と分厚い。むしろ、より簡略な通史がいくつも出ているが、中国人によるこの手の概説書の叙述は往々にして退屈である。

日本ではどうかというと、中国語訳もされている『唐宋時代における金銀の研究』（東洋文庫、1925~26年*）を著した経済史家加藤繁（1880~1946）の講義録をまとめた『中国貨幣史研究』（東洋文庫、1991年）も宋代までしか扱っていない。通史ではないが、リーダブルで近年の研究の進展を踏まえ、制度的側面を越えた貨幣からみた中国社史叙述になっている山田勝芳『貨幣の中国古代史』（朝日新聞社、2000年）と、黒田明伸『貨幣システムの世界史』（岩波書店、2003年）を挙げておくに止め、単位にかかわる問題だけを略述する。

天下を統一した秦以後の重量単位は石・鈞・斤・両・銖（「五權」）だが、銅銭名も重さで表されるようになった（半両銭，五銖銭。ただし，実際の貨幣は額面どおりの重量ではない）。小額貨幣である銅銭は束ねて使われることが多く，秦の時代にすでに官庁では一括り千枚で扱われた。漢になると，千銭の単位として「緡」「貫」が使われる一方で，百枚単位も並存した。

秦代に行用された金の単位は鎰（20両あるいは24両）だが，漢代になると斤（16両）が使われるようになる。当時，「一金」「千金」という場合の単位は斤（銅銭でほぼ1万銭に相当）である。しかし，金の価格上昇に伴い，一金＝一両となる（ただし，「○○金」といっても金を指すとは限らず，銀両あるいは銅銭の枚数を指すこともあり，銀の普及後は銀両を指すことが多い）。

後漢以後，金の国外流出や退蔵，鑄銭の減少・悪化が進行する。銭不足のため（別の説明もあるが），本来銭100文＝1陌であるところを70～80銭で1陌とした短陌という現象が始まり，後世に受け継がれてゆく（たとえば，宋代には1陌＝77文と公定されたが，地方・市場によって，1陌の銭数は様々であった）。

ながらく続いた五銖銭時代を終わらせた唐の開元通宝（あるいは開通元宝）1枚の重さは重量表記銭の時代に終止符をうつとともに，銭1枚＝2.4銖つまり10分の1両で，銭が重量の単位として両の下に組み入れられる端緒ともなった。

宋代になると，金銀とりわけ銀の貨幣的行用がさかんになるが，やはりコインではなく秤量貨幣としてであった。銖累制（10累＝1銖，24銖＝1両）から十進法できめ細かい両銭分厘制への変化が完成した主因はこの金銀の計量にあると考えられている。そして，インゴットとしての単位名の錠が錠となる。大錠＝50両は，元・明の元宝，清の宝銀にも受け継がれる（より重い500両錠や，10両，3～5両の中・小錠も存した）。また，宋代に銅銭が大量に鑄造されたことはよく知られているが，「小平」（1銭＝1文）「折二」（二文相当として行用する銭）がセットで鑄造されるのが常態化し，折五，当十銭も珍しくない。

宋・金・元は紙幣が前面におどり出てくる時代である。とくに，元朝では紙幣の行用が盛んである。鈔一枚の額面は10文とか1貫といった銭の単位で表されるが，実際には銀との関係が強く，計数にも両，錠が用いられた（1貫＝1両，50両＝1錠）。

明清時代には，銀がますます盛んに用いられるようになるが，いちおう一定の形態を持つ銅銭と違って，国家は統一の意図を示さなかった。秤量貨幣として形状もいわゆる馬蹄銀だけでなく，粒銀の形で使われ，銀の含有量（成色）によって価値が細分化されていた。大量に流れ込んだ外国からの銀銭も，銀錠に作り直されるのが普通で，コインのまま，枚数単位（圓，元）で行用されるようになったのは19世紀に入ってからである（西洋側も銀両を相手にするわけだが，両をポルトガル人がtael〔テール〕と呼んだのが定着する）。メキシコの独立以後に発行された「鷹洋」が19世紀後半に市場を席卷するなか，その影響で国内でも銀貨が鑄造されるようになるが，地方的な使用に止まった。本格的に普及したのは王朝末期の「光緒元宝」だが，発行は各

省まちまちであった。なかには「圓」を刻印したものもあり（重さは洋銭に準じて7銭2分），その下部貨幣として銀角も発行される一方で，両を単位とするものもあったのである。

いよいよ統一的な「大清銀幣」を発行しようという段になってもまだ銀両派の勢いは強く，何とか圓を単位とすることが決まった翌年に辛亥革命が起きる。その後も，銀貨の傍らで，銀両もしぶとく生き残り，国民政府が廃兩改元を行ったのは1933年である。貨幣の多種多様性については，現在刊行中の「中国歴代貨幣大系」シリーズ（上海書店）でビジュアルに確認できる。マニア向けには雑誌『中国銭幣』がある。

◆ 検 索

これまで紹介してきた中にもあちこちで顔を出しているように，コンピュータの有用性はこの分野にも浸潤しつつある。漢文演習で，こちらが史料の出典を探せずにと，学生が「四庫全書」CD-ROMの検索をかけてプリントアウトしたものを「ほらここに」と差し出してくることがある。筆者自身は，これらのツールを使いこなせないで（「使わない」のではない），他人事なのだが，それでも「台湾から出ている明清檔案のシリーズが今後CD-ROMのみで紙上印刷はしない」といった話を聞くと，少しだけ暗澹とした気分になる。張元済が心血を注ぎ込んで善本を集め，中国学のベースマップの役割を果たしてきた「四庫叢刊」も本棚に並べると場所ふさぎだが，今ではCD-ROM24枚に収められている（ただし，ほぼ一定の書体で写された「四庫全書」はともかく，様々な版本を集めた「四庫叢刊」のビジュアル的価値が減ずることはない）。

とうてい，コンピュータやインターネットについて語る資格はないので，漢字文献情報処理研究会の編になる『電腦中国学』（好文出版。I. 1998年，II. 2001年）に下駄を預けることにしたい。ただ，台湾の中央研究院による語句検索サイトと，基幹図書館で蔵書検索が可能なサイトをいくつか挙げておく。

中央研究院漢籍電子文獻 <http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>

全国図書目録資訊網（台湾） http://nbinet.ncl.edu.tw/screens/opac_menu.html

中国国家図書館 <http://www.nlc.gov.cn/>

全国漢籍データベース <http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>

東京大学東洋文化研究所 <http://www3.ioc.u-tokyo.ac.jp/kandb.html>

東洋文庫 <http://www.toyo-bunko.or.jp/library/SearchMenu.html>

研究論文の検索については，人文科学研究所が毎年刊行している『東洋学文献類目』の流れを引く検索サイト，

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db/CHINA3/>

があるが，ごく最近のものについては載っていないし，抜けもある。最近刊のものについては雑誌『東洋史研究』の近刊叢欄がもっとも便利で，『史学雑誌』毎年第5号掲載の「回顧と展望」は前年に日本で公刊された論文をほぼ網羅する。また，大陸で出た学位論文，雑誌論文を探すには，今世紀に入ってきた「中国学術データベー

ス」(CNKI) というのがある。プリペイドカード形式での利用となっていて、検索や摘要の閲覧は無料だが、全文表示には課金される仕組で、今のところ高価である。不真面目な筆者は使ったことがないが、体験記を読むと、お金の問題もさることながら、膨大な数の論文が「見つかってしまう」らしく、空恐ろしくてますます使う気が失せた(詳しくは東方書店のホームページを参照)。

ある学生が漢文演習の下調べをしていた。その文章に引かれた史料の頁を何度めくっても、出典個所が見当たらないと言う。脇にいた院生がそれを取り上げると、すぐに見つかった。「おかしいなあ、何で見つからなかったんやろ」と首をひねっている学生と昔の自分が重なった。パソコンで検索すれば造作ない。しかし、こうした「節穴」経験は決して無駄でない¹と考える、いや考えたい。

今回、この項目を書くために改めていろいろな工具書をひっくり返してみたが、この面での日本の立ち遅れを感じさせられた。むろん、すぐれた工具書が個別には存在する。しかし、欧米のものに比べると、徹底度でひけをとることは否めない。たとえば、必要があつてオランダの Brill 書店刊行の東洋学ハンドブックシリーズの1冊 *Handbook of Christianity in China* に目を通したが、その行き届きぶりには舌をまく(ハンドブックというには余りに分厚いが)。また、いい悪いは別にして、洋書の index は昔からうるさいくらいに細かいものが多いのに対し、和書の索引はパソコンで自動的に語句が拾えるようになって、人名・書名・事項名がバラバラに並ぶだけで、拾われた語句の中での小項目(たとえば、「徐光啓と農業著作」「一と仏教」「一と暦法改革」など)が立てられるのは少数派である(もともと、索引がめったにつかない中国本よりはマシだが)。電算利用の進展はこれらの欠点? をカバーしてゆくのだろうが、根本のところが変わらない限り、便利だけれど不徹底で中途半端なツールがたくさん出ることになりはしないだろうか……というのは世の中の進展についてゆけない人間のやっかみである。

文献一覧

第1章 先 秦

- 艾蘭 [1992]「論甲骨文的契刻」『英国所蔵甲骨集』下編上冊, 中華書局
- 相原俊二 [1969]「春秋期に至る燕の変遷——燕国考, その2」『中国古代史研究』3, 吉川弘文館
- [1975]「五霸の成立について(その1)」『東洋大学文学部紀要(史学科篇)』1
- 赤塚忠 [1989]『赤塚忠著作集』7, 研文社
- 浅野裕一 [1997]『孔子神話——宗教としての儒教の形成』岩波書店
- [2001]「『春秋』の成立時期——平勢説の再検討」『中国研究集刊』29
- 飯島武次 [1998]『中国周文化考古学研究』同成社
- 池澤優 [2002]「『孝』思想の宗教学的的研究——古代中国における祖先崇拜の思想的発展」東京大学出版会
- 池田雄一 [1981]「中国古代聚落の展開」『歴史学研究別冊特集 地域と民衆』(同 [2002] 所収)
- [1996]「春秋時代の治獄について」『アジア史における制度と社会』刀水書房
- [2002]『中国古代の聚落と地方行政』汲古書院
- 伊藤道治 [1963]「先秦時代の都市」『研究』(神戸大学) 30
- [1968]「春秋会盟地理考——两周地理考の二」『田村博士頌寿東洋史論叢』同記念事業会
- 上原淳道 [1993]『上原淳道中国史論集』汲古書院
- 宇都木章 [1965]「西周諸侯系譜試論」『中国古代史研究』2, 吉川弘文館
- [1969]「春秋時代の宋の貴族政治」『古代学』16-1
- [1979]「輿人考」『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』同編集委員会
- [1983]「春秋時代の莒国墓とその鐘銘——莒魯交争始末」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』燎原書店
- [1984]「『春秋左伝』に見える鄆国について」『青山史学』8
- [1985]「曾侯乙墓について」『三上次男博士喜寿記念論文集・歴史篇』平凡社
- 宇都宮清吉 [1951]「西漢時代(紀元前二世紀間)の都市について」『東方学』2 (同 [1955] 所収)
- [1955]『漢代社会経済史研究』弘文堂
- [1963]「管子弟子職篇によせて——古代専制体制と社会集団との関係に就いての考察」『名古屋大学文学部論集』29 (同 [1977] 所収)
- [1977]『中国古代中世史研究』創文社
- 江頭廣 [1970]『姓考——周代の家族制度』風間書房
- [1977]『先秦官職資料』佐賀大学教育学部国語国文学会
- [1987]『左伝民俗考』二松学舎大学出版部
- [1992]『古代中国の民俗と日本——『春秋左氏伝』に見る民俗資料から』雄山閣出版
- 江村知朗 [2002]「春秋時代の『国際』秩序について」『集刊東洋学』87
- 江村治樹 [1989]「戦国時代の都市とその支配」『東洋史研究』48-2 (同 [2000] 所収)
- [1994]「変貌する古代国家——春秋・戦国時代」『アジアの歴史と文化』1, 同朋舎出版
- [1995]「呉越の興亡」『日中文化研究』7
- [2000]『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』汲古書院
- [2001]「春秋時代盟誓参加者の地域的特質」『名古屋大学東洋史研究室報告』25
- 大櫛敦弘 [1995]「統一前夜——戦国後期の『国際』秩序」『名古屋大学東洋史研究報告』19
- 太田幸男 [1969]「斉の田氏について——春秋末期における邑制国家体制崩壊の一側面」『歴史学研究』350
- [1975]「商鞅変法の再検討」『歴史学研究別冊特集 歴史における民族の形成』

- 岡崎文夫 [1950]「参国伍鄙の制について」『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』東洋史研究会
- 尾形勇 [1979]『中国古代の「家」と国家』岩波書店
- 岡村秀典 [1985]「秦文化の編年」『古史春秋』2
- 小倉芳彦 [2003a]「春秋左氏伝研究」『小倉芳彦著作選』3, 論創社
- [2003b]「古代中国を読む」『小倉芳彦著作選』1, 論創社
- 訳 [1988-89]『春秋左氏伝』岩波書店
- 小澤正人・谷豊信・西江清高 [1999]『中国の考古学』同成社
- 小野沢精一 [1982]『中国古代説話の思想史的考察』汲古書院
- 貝塚茂樹 [1973]『論語』中央公論社
- [1976a]「中国の古代国家」『貝塚茂樹著作集』1, 中央公論社
- [1976b]「中国思想と日本」『貝塚茂樹著作集』9, 中央公論社
- 影山剛 [1979]「中国古代における都市と商工業」『歴史学研究』471 (同 [1984] 所収)
- [1984]『中国古代の商工業と専売制』東京大学出版会
- 鎌田正 [1963]『左伝の成立と其の展開』大修館書店
- 河地重造 [1959]「先秦時代の「土」の諸問題」『史林』42-5
- 木村英一 [1971]『孔子と論語』創文社
- 木村正雄 [1958]「中国の古代専制主義とその基礎」『歴史学研究』217
- [2003]『新訂版 中国古代帝国の形成——特にその成立の基礎条件』比較文化研究所
- 裴錫圭 [1991]「西周銅器銘文中の「履」」『甲骨文与殷商史』3, 上海古籍出版社
- 久富木成太 [1986]「『春秋左氏伝』における“免”字の用法と刑鼎の公開」『金沢大学教養部論集(人文科学篇)』23-2
- 五井直弘 [1982]「都市の形成と中央集権体制」『歴史学研究別冊特集 民衆の生活文化と変革主体』(同 [2002] 所収)
- [2002]『中国古代の城郭都市と地域支配』名著刊行会
- 黄錫全 [2001]『先秦貨幣通論』紫禁城出版社
- 黄天樹 [1991]『殷墟王卜辭的分類与断代』天津出版社
- 古賀登 [1976]「尽力説攷——戦国魏の李悝の経済政策」『社会科学討究』21-3 (同 [1980] 所収)
- [1980]『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』雄山閣出版
- 後藤均平 [1957]「陳について」『中国古代の社会と文化』東京大学出版会
- [1960]「春秋時代の周と戎」『中国古代史研究』吉川弘文館
- [1967]「中国古代文明と越族」『歴史教育』15-5/6
- 小林伸二 [1989a]「春秋時代の滅国について」『中国古代史研究』6, 研文出版
- [1989b]『黄君孟夫婦墓と黄国』『鴨台史論』2
- [2002]「元咺の立場」『国士館大学教養論集』52
- 斎藤(安倍)道子 [1979]「春秋前期における楚の対外発展——『左伝』を中心に」『東海大学紀要(文学部)』32
- [1984]「春秋楚国の申県・陳県・蔡県をめぐる」『東海大学紀要(文学部)』41
- [1991]「春秋時代における統治権と宗廟」『中国の歴史と民俗 伊藤清司先生退官記念論文集』第一書房
- [1992]「春秋時代の婚姻」『東海大学文明研究所紀要』12
- 佐藤三千夫 [1973]「晋の文公即位をめぐる——とくに三軍成立との関連において」『白山史学』17
- [1982]「晋の三行について」『白山史学』20
- [1989]「春秋時代の晋の卿について」『中国古代史研究』6, 研文出版

- [1992]「春秋時代の晋の公族と公族大夫について」『青山史学』13
- 佐原康夫 [1984]「戦国時代の府・庫について」『東洋史研究』43-1 (同 [2002] 所収)
- [2002]『漢代都市機構の研究』汲古書院
- 滋賀秀三 [1976]「中国上代の刑罰についての一考察」『石井良助先生還暦祝賀法制史論集』創文社
- [1989]「左伝に現れる訴訟事例の解説」『国家学会雑誌』102-1/2
- 上海博物館商周青銅器銘文選編写組 [1986-90]『商周青銅器銘文選』文物出版社
- 周法高編 [1974-77]『金文詁林』香港中文大學
- 編 [1982]『金文詁林補』中央研究院歷史語言研究所
- 白川静 [1964-84]『金文通釈』白鶴美術館 (同 [2004] 所収)
- [1972]『孔子伝』中央公論社 (中公文庫 BIBLIO, 2003 年)
- [1973]『金文通釈』4, 白鶴美術館
- [1980]『金文通釈』6, 白鶴美術館
- [1981]『詩経研究 通論篇』朋友書店
- [2004]『白川静著作集』別巻, 平凡社
- 杉本憲司 [1986]『中国古代を掘る——城郭都市の発展』中央公論社
- 孫稚雄 [1981]『金文著録簡目』中華書局
- 高木智見 [1985]「春秋時代の結盟習俗」『史林』68-6
- [1990]「春秋時代の神・人共同体について」『中国——社会と文化』5
- [1993]「春秋左氏伝」『中国法制史——基本資料の研究』東京大学出版会
- 田上泰昭 [1981]「春秋左氏伝の結末と越記事——蛮夷の覇者への対応」『竹内照夫博士古稀記念中国学論文集』同刊行会
- 田中柚美子 [1974]「晋をめぐる狄について」『中国古代史研究』4, 吉川弘文館
- [1975]「晋と戎狄」『國學院雑誌』76-3
- 谷口満 [1975]「若敖・蚡冒物語とその背景——古代楚国の一理解」『集刊東洋学』34
- [1978]「楚都邑考」『北海道教育大学紀要 (第一部 B)』28-2
- [1981]「若敖氏事件前後——古代楚国の分解 (その一)」『史流』22
- [1987]「春秋楚鼎試論——新県邑の創設およびその行方」『人文論究』(北海道教育大学) 47
- [1988]「春秋時代の都市」『東洋史研究』46-4
- 谷口義介 [1988]『中国古代社会史研究』朋友書店
- [1990]「申国考」『布目潮瀧博士古稀記念論集 東アジアの法と社会』汲古書院
- [1996]「仲山甫とその余裔」『学林』24
- 谷田孝之 [1989]『中国古代家族制度論考』東海大学出版会
- 中国社会科学院考古研究所 [1984-90]『殷周金文集成』中華書局
- 鶴間和幸 [1992]「古代中華帝国の統一法と地域——秦帝国の法とその虚構性」『史潮』新 30
- 手塚隆義 [1961]「中国の虞と蛮夷の呉」『史苑』22-1
- 西嶋定生 [1949]「中国古代帝国形成の一考察——漢の高祖とその功臣」『歴史学研究』141 (同 [1983] 所収)
- [1950]「古代国家の権力構造」歴史学研究会編『国家権力の諸段階』岩波書店 (同 [1983] 所収)
- [1961]『中国古代帝国の形成と構造——二十等爵制の研究』東京大学出版会
- [1983]『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
- 野間文史 [1972]「春秋時代における楚国の世族と王権」『哲学』(広島哲学会) 24
- [1989]『春秋正義の世界』溪水社
- 花房卓爾 [1978]「春秋時代・晋の軍制」『広島大学文学部紀要』38-2

- [1979]「春秋時代の晋の軍事組織」『広島大学文学部紀要』39
- [2000]「春秋列国出奔考」『広島大学文学部紀要』60
- 林巳奈夫 [1984]『殷周時代青銅器の研究——殷周青銅器綜覧一』吉川弘文館
- [1989]『春秋戦国時代青銅器の研究——殷周青銅器綜覧三』吉川弘文館
- 平勢隆郎 [1988]『春秋晋国『侯馬盟書』字体通覧』東京大学東洋文化研究所
- [1995]『新編史記東周年表——中国古代紀年の研究序章』東京大学東洋文化研究所
- [1998]『左伝の史料批判的研究』東京大学東洋文化研究所
- 藤田勝久 [1997]『史記戦国史料の研究』東京大学出版会
- 彭裕商 [1994]『殷墟甲骨断代』中国社会科学出版社
- [2003]「西周金文中的「賈」」『考古』2003.2
- 増淵龍夫 [1951]「漢代における民間秩序の構造と任侠的習俗」『一橋論叢』26-5 (同 [1996] 所収)
- [1955a]「戦国秦漢時代における集団の「約」について」『東方学会編『東方学論集』3 (同 [1996] 所収)
- [1955b]「戦国官僚制の一性格」『社会経済史学』21-3 (同 [1996] 所収)
- [1957]「先秦時代の山林藪沢と秦の公田」中国古史研究会編『中国古代の社会と文化』(同 [1996] 所収)
- [1958]「先秦時代の封建と郡県」『一橋大学研究年報 経済学研究』2 (同 [1996] 所収)
- [1962]「所謂東洋的専制主義と共同体」『一橋論叢』47-3 (同 [1996] 所収)
- [1970]「春秋戦国時代の社会と国家」『岩波講座世界歴史』4
- [1996]『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店
- 松井嘉徳 [1992]「鄭の七穆」『古代文化』44-1
- [2002]『周代国制の研究』汲古書院
- 松本木雄 [1981]「左伝士義釈例——四民分業の一端として」『文化』44-3/4
- [1990]「先秦時代における商業観の変移」『東北大学東洋史論集』4
- [1991]「左伝における商と賈」『集刊東洋学』66
- 松丸道雄 [1977]「西周青銅器製作の背景——周金文研究・序章」『東京大学東洋文化研究所紀要』72 (同編 [1980] 所収)
- [1984]「殷・周青銅器と金文の製作技法について」『出光美術館館報』47
- [1988]「「甲骨文」における「書体」とは何か」『書道研究』1988.12
- [1990]「殷周金文の製作技法について」『中国法書ガイド』1 甲骨文・金文 二玄社
- 編 [1980]『西周青銅器とその国家』東京大学出版会
- 松本光雄 [1952]「中国古代の邑と民・人との関係」『山梨大学学芸学部研究報告』3
- [1953]「中国古代社会における分邑と宗と賦について」『山梨大学学芸学部研究報告』4
- [1956]「中国古代の「室」について」『史学雑誌』65-8
- 水野卓 [2002]「春秋時代の君主」『史学』71-2/3
- 宮崎市定 [1962]「戦国時代の都市」『東方学会創立十五周年記念東方学論集』(同 [1976][1991] 所収)
- [1976]『アジア史論考』中, 朝日新聞社
- [1991]『宮崎市定全集 3 古代』岩波書店
- 茂沢方尚 [1982]「番と沈尹氏」『駒沢史学』29
- 榎山明 [1980]「法家以前——春秋期における刑と秩序」『東洋史研究』39-2
- [1988]「春秋訴訟論」『法制史研究』37
- [1994]「春秋・戦国の交」『古代文化』46-11
- 山田統 [1981]「衛の政治的困厄と元咺の提訴」『山田統著作集』1, 明治書院

- 山田崇仁 [1997] 『浙川下寺春秋楚墓考』『史林』80-4
 — [1998] 『春秋楚霸考——楚の対中原戦略』『立命館文学』554
 — [2001] 『「世本」と『国語』韋昭注引系譜資料について——N-gram 統計解析法による分析』『立命館史学』22
 — [2004] 『歴史記録としての『春秋』——N-gram 統計解析法による分析』『中国古代史論叢』立命館東洋史学会
 楊寛 [1980] 『戦国史 (増訂版)』上海人民出版社 (1955年初版。台湾商務印書館, 1997年増訂版)
 好並隆司 [1971] 『前漢帝国の二重構造と時代規定』『歴史学研究』375 (同 [1978b] 所収)
 — [1978a] 『中国における皇帝権の成立と展開』『思想』1978.2 (同 [1978b] 所収)
 — [1978b] 『秦漢帝国史研究』未来社
 吉本道雅 [1985a] 『春秋載書考』『東洋史研究』43-4
 — [1985b] 『晋国出土載書考』『古史春秋』2
 — [1986] 『春秋国人考』『史林』69-5
 — [1987] 『史記原始 (一) 西周期・東遷期』『古史春秋』4
 — [1988] 『史記述春秋経伝小考』『史林』71-6
 — [1989] 『国語小考』『東洋史研究』48-3
 — [1990a] 『春秋齊霸考』『史林』73-2
 — [1990b] 『周室東遷考』『東洋学報』71-3/4
 — [1990c] 『春秋事語考』『泉屋博古館紀要』6
 — [1992] 『檀弓考』『古代文化』44-5
 — [1993] 『春秋晋霸考』『史林』76-3
 — [1994] 『春秋五等爵考』『東方学』87
 — [1995a] 『春秋世族考』『東洋史研究』53-4
 — [1995b] 『楚史研究序説』『立命館文学』541
 — [1995c] 『秦史研究序説』『史林』78-3
 — [1995d] 『曲礼考』『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所
 — [1996] 『史記原始——戦国期』『立命館文学』547
 — [1997] 『楚公穀鐘の周辺』『泉屋博古館紀要』13
 — [1998a] 『三晋成立考』『春秋戦国交代期の政治社会史的研究』科研費報告書
 — [1998b] 『秦趙始祖伝説考』『立命館東洋史学』21
 — [1998c] 『史記戦国紀年考』『立命館文学』556
 — [2000a] 『先秦王侯系譜考』『立命館文学』565
 — [2000b] 『呉系譜考』『立命館文学』563
 — [2002] 『左伝成書考』『立命館東洋史学』25
 — [2003] 『春秋国人再考』『立命館文学』578
 — [2005] 『先秦』『中国の歴史 (上) 古代—中世』昭和堂
 李学勤 [1957] 『戦国題銘概述 (上) (中) (下)』『文物』1957.7~9
 — [1984a] 『兮甲盤与駒父盃——論西周末年周朝与淮夷的關係』『西周史研究』人文雑誌叢刊
 — [1984b] 『東周与秦代文明』文物出版社 (1991年増訂版)
 — [1990 (原書 1985)] 小幡敏行訳『中国古代漢字学の第一歩』凱風社
 — 彭裕商 [1996] 『殷墟甲骨分期研究』上海古籍出版社
 李零 [1993] 『中国方術考』人民中国出版社
 林漢 [1984] 『小屯南地発掘与殷虚甲骨断代』『古文字研究』9, 中華書局
 渡辺信一郎 [1986] 『中国古代社会論』青木書店

- [1992] 『中国古代専制国家論』『歴史評論』504 (同 [1994] 所収)
 — [1994] 『中国古代国家の思想構造——専制国家とイデオロギー』校倉書房
 渡辺卓 [1973] 『古代中国思想の研究』創文社
 渡辺英幸 [2000] 『春秋時代の「戎」について』『集刊東洋学』83

Crump, J. I. [1964] *Intrigues: Studies of the Chan-kuo Ts'e*, University of Michigan Press.

第2章 秦・漢

- 浅野裕一 [1992] 『黄老道の成立と展開』創文社
 浅原達郎 [1998] 『牛不相当穀廿石』『泉屋博古館紀要』15
 阿部幸信 [2004] 『漢帝国の内臣・外臣構造形成過程に関する一試論——主に印綬制度よりみたる』『歴史学研究』784
 安作璋・熊鉄基 [1984-85] 『秦漢官制史稿』上・下, 齊魯書社
 池田温 [1982] 『中国歴代墓券略考』東京大学東洋文化研究所編『アジアの社会と文化』1, 東京大学出版会
 池田雄一 [1975] 『咸陽城と漢長安城——とくに漢長安城建設の経緯をめぐって』『中央大学文学部紀要 (史学科)』20
 — [2002] 『中国古代の聚落と地方行政』汲古書院
 板野長八 [1995] 『儒教成立史の研究』岩波書店
 伊藤徳男 [1954a] 『前漢の三公について』『歴史』8
 — [1954b] 『前漢の九卿について』『東方学論集』1
 稲葉一郎 [1978] 『秦始皇の貨幣統一について』『東洋史研究』37-1
 — [1984] 『漢代の家族形態と経済変動』『東洋史研究』43-1
 — [1987] 『漢代における民間秩序の形成——いわゆる豪族を中心とする』川勝義雄・磯波護編『中国貴族制社会の研究』京都大学人文科学研究所
 上田早苗 [1972] 『漢初における長者——『史記』にあらわれた理想的人間像』『史林』55-3
 鶴飼昌男 [2003] 『漢代郡太守の持つ人事権について——地方長官の欠員を視点に』富谷至編『辺境出土木簡の研究』朋友書店
 宇都宮清吉 [1951] 『西漢時代 (紀元前二世紀間) の都市について』『東方学』2 (同 [1955] 所収)
 — [1952a] 『史記貨殖列伝について』『名古屋大学文学部研究論集』2 (同 [1955] 所収)
 — [1952b] 『西漢の首都長安について』『東洋史研究』11-4 (同 [1955] 所収)
 — [1953] 『僮約研究』『名古屋大学文学部研究論集』5 (同 [1955] 所収)
 — [1954] 『劉秀と南陽』『名古屋大学文学部研究論集』8 (同 [1955] 所収)
 — [1955] 『漢代社会経済史研究』弘文堂
 — [1959] 『孝経庶人章によせて』『東洋史研究』17-4 (同 [1977] 所収)
 — [1963a] 『管子弟子職篇によせて——古代専制体制と社会集団との関係に就いての考察』『名古屋大学文学部研究論集』29 (同 [1977] 所収)
 — [1963b] 『漢代豪族論』『東方学』23 (同 [1977] 所収)
 — [1977] 『中国古代中世史研究』創文社
 王勇華 [2004] 『秦漢における監察制度の研究』朋友書店
 汪桂海 [1999] 『漢代官文書制度』広西教育出版社
 大島利一他 [1960] 『世界の歴史3 東アジア文明の形成』筑摩書房

- 太田幸男 [1974]「共同体と奴隸制——アジア」『現代歴史学の成果と課題』2, 青木書店
 大庭脩 [1970]「漢王朝の支配機構」『岩波講座世界歴史』4 (同 [1982] 所収)
 —— [1977]『図説中国の歴史 2 秦漢帝国の威容』講談社
 —— [1982]『秦漢法制史の研究』創文社
 —— [1984]『木簡学入門』講談社学術文庫
 —— [1995]「武威旱灘坡出土の王杖簡」『史泉』82
 大淵忍爾 [1991]『初期の道教——道教史の研究 其の一』創文社
 尾形勇 [1979]『中国古代の「家」と国家』岩波書店
 影山剛 [1979]『漢の武帝』教育社歴史新書
 —— [1984]『中国古代の商工業と専売制』東京大学出版会
 加藤謙一 [1998]『匈奴「帝国」』第一書房
 加藤繁 [1919]「漢代に於ける国家財政と帝室財政の區別並に帝室財政一斑」『東洋学報』8-1, 9-1
 ~2 (同 [1952] 所収)
 —— [1952]『支那経済史考証』上, 東洋文庫
 金子修一 [1982]「漢代の郊祀と宗廟と明堂及び封禪」『東アジア世界における日本古代史講座』9,
 学生社 (同 [2001] 所収)
 —— [1998]「中国古代の即位儀礼の場所について」『山梨大学教育学部研究報告 (人文社会科学系)』
 49 (同 [2001] 所収)
 —— [2001]『古代中国と皇帝祭祀』汲古書院
 狩野直禎 [1993]『後漢政治史の研究』同朋舎出版
 鎌田重雄 [1962]『秦漢政治制度の研究』日本学術振興会
 —— [1968]「漢代の尚書官——領尚書事と録尚書事とを中心として」『東洋史研究』26-4
 紙屋正和 [1982a]「前漢郡県統治制度の展開について——その基礎的考察 (上)(下)」『福岡大学人
 文論叢』13-4, 14-1
 —— [1982b]「前漢時代の郡・国の守・相の支配権の強化について」『東洋史研究』41-2
 —— [1997]「尹湾漢墓簡牘と上計・考課制度」『福岡大学人文論叢』29-2
 —— [2000]「前漢列侯国の官制——尹湾漢墓簡牘を手がかりに」『福岡大学人文論叢』31-4
 川勝義雄 [1950]「貴族政治の成立」『史林』33-4 (同 [1982] 所収)
 —— [1967]「漢末のレジスタンス運動」『東洋史研究』25-4 (同 [1982] 所収)
 —— [1974]『中国の歴史 3 魏晉南北朝』講談社 (講談社学術文庫, 2003 年)
 —— [1982]『六朝貴族制社会の研究』岩波書店
 木村正雄 [1965]『中国古代帝国の形成——特にその成立の基礎条件』不昧堂書店 (比較文化研究所,
 2003 年新訂版)
 —— [1979]『中国古代農民叛乱の研究』東京大学出版会
 楠山修作 [1976]『中国古代史論集』私家版
 —— [1997]「女子百戸牛酒について」『東洋文化学科学年報』(追手門学院大学) 12 (同 [2001] 所収)
 —— [2001]『中国史論集』朋友書店
 工藤元男 [1998]『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社
 栗原朋信 [1960]「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」同『秦漢史の研究』吉川弘文館
 —— [1970]「漢帝国と周辺諸民族」『岩波講座世界歴史』4 (同 [1978] 所収)
 —— [1972]「秦と漢初の「皇帝」号について」『東方学論集 東方学会創立二十五周年記念』(同
 [1978] 所収)
 —— [1978]『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館
 殿耕望 [1961]「秦漢地方行政制度」『中国地方行政制度史』上編, 巻上, 中央研究院歴史語言研究所

- 五井直弘 [1960]「豪族社会の発展」『世界の歴史 3 東アジア文明の形成』筑摩書房 (同 [2001] 所
 収)
 —— [1961]「秦漢帝国における郡県民支配と豪族」『静岡大学人文論集』12 (同 [2001] 所収)
 —— [1970]「後漢王朝と豪族」『岩波講座世界歴史』4 (同 [2001] 所収)
 —— [2001]『漢代の豪族社会と国家』名著刊行会
 古賀登 [1980]『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』雄山閣出版
 小嶋茂稔 [1999]「戦後中国古代国家史研究における「後漢史」の位置」『中国史学』9
 小南一郎 [1991]『西王母と七夕伝承』平凡社
 —— [1994]「漢代の祖霊観念」『東方学報』(京都) 66
 佐藤武敏 [1962]『中国古代手工業史の研究』吉川弘文館
 —— [1965]「漢代長安の市」『中国古代史研究』2, 吉川弘文館
 佐原康夫 [1991]「居延漢簡に見える物資の輸送について」『東洋史研究』50-1
 —— [1997]「居延漢簡に見える官吏の処罰」『東洋史研究』56-3
 —— [2002a]『漢代都市機構の研究』汲古書院
 —— [2002b]「江陵鳳凰山漢簡再考」『東洋史研究』61-3
 —— [2002c]「中国古代の貨幣経済論と貨幣史認識をめぐって」第 1 回中国史学国際学会実行委員会
 編『中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展』東京都立大学出版会
 沢田勲 [1996]『匈奴——古代遊牧帝国の興亡』東方書店
 滋賀秀三 [2003]『中国法制史論集——法典と刑罰』創文社
 重近啓樹 [1990]「秦漢の商人とその負担」『駿台史学』78 (同 [1999] 所収)
 —— [1999]『秦漢税役体系の研究』汲古書院
 スタン, R. A. [1967] 川勝義雄訳「紀元二世紀の政治 = 宗教的運動について」『道教研究』2
 関口順 [2000]「儒教国教化」論への異議」『中国哲学』29
 多田狷介 [1965]「漢代の地方商業について——豪族と小農民の關係を中心に」『史潮』92 (同
 [1999] 所収)
 —— [1966]「漢代の豪族」『歴史教育』14-5 (同 [1999] 所収)
 —— [1999]『漢魏晋史の研究』汲古書院
 谷川道雄 [1976]『中国中世社会と共同体』国書刊行会
 張建国 [1996] 富谷至訳「前漢文帝刑法改革とその展開の再検討」『古代文化』48-10 (同 [1997] 所
 収)
 —— [1997]『中国法系的形成と発達』北京大学出版社
 鶴間和幸 [1978]「漢代豪族の地域的性格」『史学雑誌』87-12
 —— [1989]「漢代皇帝陵・陵邑・成国渠調査記」『古代文化』41-3
 —— [1991]「秦漢比較都城論——咸陽・長安城の建設プランの継承」『茨城大学教養部紀要』23
 —— [2004]『中国の歴史 03 ファーストエンペラーの遺産 秦漢帝国』講談社
 富田健之 [1986]「内朝と外朝——漢朝政治構造の基礎的考察」『新潟大学教育学部紀要 (人文・社
 会科学編)』27-2
 —— [1994]「大司馬大將軍霍光」『新潟大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)』35-2
 —— [1995]「前漢中期の政治構造と「霍氏政権」」『新潟史学』35
 富谷至 [1979]「儒教の国教化」と「儒学の官学化」『東洋史研究』37-4
 —— [1992]「王杖十簡」『東方学報』64
 —— [1995]『古代中国の刑罰——罰體が語るもの』中央公論社
 —— [1998]『秦漢刑罰制度の研究』同朋舎
 —— [2003]『木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史』岩波書店

- 編 [2003]『辺境出土木簡の研究』朋友書店
- 中田薫 [1952]「支那における律令法系の発達について」『比較法雑誌』1-4 (同 [1964] 所収)
- [1953]「支那律令法系の発達について」補考『法制史研究』3 (同 [1964] 所収)
- [1964]『法制史論集』4, 岩波書店
- 永田英正 [1977]「江陵鳳凰山十号漢墓出土の簡牘」『森鹿三博士頌寿記念史学論集』同朋舎出版 (同 [1989] 所収)
- [1989]『居延漢簡の研究』同朋舎出版
- 西川利文 [1989]「漢代辟召制の確立」『鷹陵史学』15
- [1997]「漢代における郡県構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして」『文学部論集』(仏教大学) 81
- [1999]「漢代の儒学と国家——武帝期「官学化」議論を中心に」『史学論集』(仏教大学文学部史学科創設三十周年記念)
- 西嶋定生 [1949]「中国古代帝国形成の一考察——漢の高祖とその功臣」『歴史学研究』141 (同 [1983] 所収)
- [1961]『中国古代帝国の形成と構造——二十等爵制の研究』東京大学出版会
- [1965]「武帝の死——『塩鉄論』の政治史的背景」『古代史講座』11, 学生社 (同 [1983] 所収)
- [1970a]「皇帝支配の成立」『岩波講座世界歴史』4 (同 [1983] 所収)
- [1970b]「序説——東アジア世界の形成」『岩波講座世界歴史』4 (同 [1983] 所収)
- [1974]『中国の歴史2 秦漢帝国』講談社(講談社学術文庫, 1997年)
- [1975]「漢代における即位儀礼——とくに帝位継承のばあいについて」『榎博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社 (同 [1983] 所収)
- [1981]『中国古代の社会と経済』東京大学出版会
- [1983]『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
- 布目潮瀨 [1955]「前漢侯国考」『東洋史研究』13-5 (同 [2003] 所収)
- [2003]『布目潮瀨中国史論集』上, 汲古書院
- 馬大英 [1983]『漢代財政史』中国財政経済出版社
- 浜口重国 [1936]「漢代に於ける強制労働刑その他」『東洋学報』23-2 (同 [1966] 所収)
- [1937]「漢代の笞刑に就いて」『東洋学報』24-2 (同 [1966] 所収)
- [1938]「漢代の鈇趾刑と曹魏の刑名」『東洋学報』25-4 (同 [1966] 所収)
- [1942]「漢代に於ける地方官の任用と本籍地との関係」『歴史学研究』101 (同 [1966] 所収)
- [1943]「漢碑に見えたる守令・守長・守尉等の官に就いて」『書苑』7-1 (同 [1966] 所収)
- [1966]『秦漢隋唐史の研究』上・下, 東京大学出版会
- 林巳奈夫 [1989]『漢代の神神』臨川書店
- [1992a]『石に刻まれた世界』東方書店
- [1992b]『中国古代の生活史』吉川弘文館
- 編 [1976]『漢代の文物』京都大学人文科学研究所 (朋友書店, 1996年新版)
- 原宗子 [1994]「古代中国の開発と環境——『管子』地員篇研究」研文出版
- [1998]「生産技術と環境」『岩波講座世界歴史3 中華の形成と東方世界』
- [2005]『「農本」主義と「黄土」の発生——古代中国の開発と環境2』研文出版
- 原田正己 [1963]「民俗資料としての墓券——上代中国人の死霊観の一面」『フィロソフィア』45
- 東晋次 [1995]『後漢時代の政治と社会』名古屋大学出版会
- [1997]「中国古代の社会的結合——任俠的習俗論の現在」『中国史学』7
- [2003a]『王莽——儒家の理想に憑かれた男』白帝社
- [2003b]「漢代爵制論をめぐる諸問題」『日本秦漢史学会会報』4
- 平井正士 [1941]「董仲舒の賢良対策の年次に就いて」『史潮』11-2
- [1982]「漢代に於ける儒家官僚の公卿への浸潤」『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』国書刊行会
- 平中孝次 [1967]『中国古代の田制と税法』東洋史研究会
- 福井重雅 [1967]「儒教成立史上の二三の問題——五経博士の設置と董仲舒の事蹟に関する疑義」『史学雑誌』76-1 (同 [2005] 所収)
- [1988]『漢代官吏登用制度の研究』創文社
- [1994]「六経・六芸と五経——漢代における五経の成立」『中国史学』4 (同 [2005] 所収)
- [1996]「読『塩鉄論』芻議」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42-4
- [1997]「董仲舒の対策の基礎的研究」『史学雑誌』106-2 (同 [2005] 所収)
- [2005]『漢代儒教の史的考察——儒教の官学化をめぐる定説の再検討』汲古書院
- 藤田勝久 [1983a]「前漢時代の漕運機構」『史学雑誌』92-12
- [1983b]「漢代における水利事業の展開」『歴史学研究』521
- [1984]「中国古代の関中開発——郡県制形成過程の一考察」『佐藤博士退休記念中国水利史論叢』
- [1995]「漢代関中の渠と水利開発」森田明編『中国水利史の研究』国書刊行会
- 藤田高夫 [1990]「前漢後半期の外戚と官僚機構」『東洋史研究』48-4
- 蒲慕州 [1993]『墓葬与生死——中国古代宗教之省思』聯經出版事業公司
- 卜憲群 [2002]『秦漢官僚制度』社会科学文献出版社
- 保科季子 [1998]「前漢後半期における儒家礼制の受容——漢的伝統との対立と皇帝観の変貌」『方法としての丸山真男』青木書店
- 堀敏一 [1975]『均田制の研究』岩波書店
- [1982]「漢代の七科論とその起源」『駿台史学』57 (同 [1987] 所収)
- [1987]『中国古代の身分制——良と賤』汲古書院
- [1988]「中国古代の市」『栗原益男先生古稀記念論集 中国古代の法と社会』同記念会 (同 [1996] 所収)
- [1989]「中国古代の家と戸」『明治大学人文科学研究所紀要』27 (同 [1996] 所収)
- [1996]「中国古代の家族形態」同『中国古代の家と集落』汲古書院
- [2000]『中国通史——問題史としてみる』講談社学術文庫
- [2004]『漢の劉邦——ものがたり漢帝国成立史』研文出版
- 牧野巽 [1932]「西漢の封建相統法」『東方学報』(東京) 3 (同 [1979] 所収)
- [1942]「漢代の家族形態」『東洋学』4~5 (同 [1979] 所収)
- [1950]「中国古代の家族は経済的自給自足体に非ず——中国古代貨幣経済の発展」『社会科学評論』5 (同 [1985] 所収)
- [1953]「中国古代貨幣経済の衰退過程」一橋大学社会学部論文集『社会と文化の諸相』如水書房 (同 [1985] 所収)
- [1979]『牧野巽著作集』1, 御茶の水書房
- [1985]『牧野巽著作集』6, 御茶の水書房
- 増淵龍夫 [1951]「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」『一橋論叢』26-5 (同 [1996] 所収)
- [1952]「漢代における国家秩序の構造と官僚」『一橋論叢』28-4 (同 [1996] 所収)
- [1955]「戦国秦漢時代における集団の「約」について」『東方学論集』3 (同 [1996] 所収)
- [1957]「先秦時代の山林藪沢と秦の公田」中国古代史研究会編『中国古代の社会と文化』東京大学出版会 (同 [1996] 所収)

- [1960a]『中国古代の社会と国家——秦漢帝国成立過程の社会史的研究』弘文堂
- [1960b]「後漢党錮事件の史評について」『一橋論叢』44-6 (同 [1996] 所収)
- [1962]「所謂東洋的専制主義と共同体」『一橋論叢』47-3 (同 [1996] 所収)
- [1996]『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店
- 松浦千春 [1993]「漢より唐に至る帝位継承と皇太子——謁廟の礼を中心に」『歴史』80
- 松丸道雄・永田英正 [1985]『ビジュアル版世界の歴史5 中国文明の成立』講談社
- 他編 [2001]『中国史学の基本問題1 殷周秦漢時代史の基本問題』汲古書院
- 他編 [2003]『世界歴史大系 中国史』1, 山川出版社
- 水間大輔 [2002]「張家山漢簡「二年律令」刑法雑考——睡虎地秦簡出土以降の秦漢刑法研究の再検討」『中国出土資料研究』6
- 宮宅潔 [1998]「秦漢時代の裁判制度——張家山漢簡《奏讞書》より見た」『史林』81-2
- 宮崎市定 [1933]「古代中国賦税制度」『史林』18-2~4 (同 [1991a] 所収)
- [1934]「游侠に就て」『歴史と地理』34-4~5 (同 [1991b] 所収)
- [1991a]『宮崎市定全集3 古代』岩波書店
- [1991b]『宮崎市定全集5 史記』岩波書店
- 初山明 [1985a]「秦の裁判制度の復元」林巳奈夫編『戦国時代出土文物の研究』京都大学人文科学研究所
- [1985b]「爵制論の再検討」『新しい歴史学のために』178
- [1994]『中国歴史人物選1 秦の始皇帝——多元世界の統一者』白帝社
- [1995]「秦漢刑罰史研究の現状」『中国史学』5
- [1999]『漢帝国と辺境社会——長城の風景』中公新書
- 護雅夫 [1974]『李陵』中央公論社(中公文庫, 1992年)
- 守屋美都雄 [1962]「漢代の家族——その学説的展望」『古代史講座』6, 学生社(同 [1968] 所収)
- [1968]『中国古代の家族と国家』東洋史研究会
- 山田勝芳 [1974]「漢代財政制度変革の経済的要因について」『集刊東洋学』31
- [1975]「王莽代の財政」『集刊東洋学』33
- [1977]「後漢の大司農と少府」『史流』18
- [1977-78]「後漢財政制度の創設について(上)(下)」(上)は『北海道教育大学紀要』第一部 B27-2, (下)は『人文論究』38
- [1988]「前漢武帝代の三銖銭の発行をめぐって」『古代文化』40-9
- [1993]『秦漢財政収入の研究』汲古書院
- [2000]『貨幣の中国古代史』朝日新聞社
- 山本隆義 [1968]『中国政治制度の研究——内閣制度の起原と発展』東洋史研究会
- 楊樹達 [1933]『漢代婚喪礼俗考』商務印書館(上海文芸出版社, 1988年影印版)
- 吉川忠夫 [1986]『中国の英雄1 秦の始皇帝』集英社(講談社学術文庫, 2002年)
- 吉田虎雄 [1942]『兩漢租税の研究』大阪屋号書店(大安, 1966年再版)
- 好並隆司 [1978]『秦漢帝国史研究』未来社
- 米田賢次郎 [1989]『中国古代農業技術史研究』同朋舎出版
- 李開元 [2000]『漢帝国の成立と劉邦集團——軍功受益階層の研究』汲古書院
- 劉昭瑞 [2001]『漢魏石刻文字繫年』新文豊出版公司
- 渡辺信一郎 [1986]『中国古代社会論』青木書店
- [1989]「漢代の財政運営と國家的物流」『京都府立大学学術報告(人文)』41
- 渡邊義浩 [1995]『後漢国家の支配と儒教』雄山閣出版
- 渡部武 [1983]「漢代の画像に見える市」『東海史学』18

- [1987]『「四民月令」に見える後漢時代の豪族の生活』同訳注『四民月令——漢代の歳時と農事』平凡社東洋文庫
- [1991]『画像が語る中国の古代』平凡社

- Bielenstein, H. [1980] *The Bureaucracy of Han Times*, Cambridge University Press.
- Bodde, D. [1975] *Festivals in Classical China: New Year and Other Annual Observances during the Han Dynasty, 206B. C. -A. D. 220*, Princeton University Press.
- Ch'ü, T'ung-tsu (瞿同祖) [1972] *Han Social Structure*, University of Tokyo Press.
- Loewe, M. [1967] *Records of Han Administration*, 2 vols., Cambridge University Press.

第3章 三国五胡・南北朝

- 阿部幸信・伊藤敏雄編 [2005]『嘉禾吏民田家数値一覧』I, 新潟大学人文学部
- 池田温 [1979]『中国古代籍帳研究——概観・録文』東京大学出版会
- [1982]『中国歴代墓券略考』東京大学東洋文化研究所編『アジアの社会と文化』1, 東京大学出版会
- [1990]『中国古代写本識語集録』東京大学東洋文化研究所
- [1998]「北魏拓跋烏雷(文成帝)「皇帝南巡之頌」碑」『歴史と地理』513
- 石井仁 [1985]「南朝における随府府佐——梁の簡文帝集團を中心として」『集刊東洋学』53
- [1986]「梁の元帝集團と荊州政權——「随府府佐」再論」『集刊東洋学』56
- [1995]「孫吳軍制の再検討」中国中世史研究会編『中国中世史研究 続編』京都大学学術出版会
- [2000]『曹操——魏の武帝』新人物往来社
- [2001]「虎賁班劍考」『東洋史研究』59-4
- 石岡浩 [2002]「兩晋・南朝の効罪にみる肉刑と治士」池田温編『日中律令制の諸相』東方書店
- 伊藤敏雄 [1986]「正始の政変をめぐって——曹爽政權の人的構成を中心に」野口鐵郎編『中国史における乱の構図』雄山閣出版
- [1995]「魏晉期樓閣屯戍における交易活動をめぐって」『小田義久博士還暦記念東洋史論集』小田義久先生還暦記念事業会
- 今鷹真・小南一郎・井波律子訳 [1977-89]『三国志』全3巻, 筑摩書房
- 入矢義高 [1974]『洛陽伽藍記・水経注(抄)』平凡社中国古典文学大系21
- 岩本篤志 [2004]「羽田記念館所蔵「西域出土文献写真」766・767「十六国春秋」考——李盛鐸旧蔵敦煌文献をめぐって」『西北出土文献研究』創刊号
- 殷光明 [2000]『北涼石塔研究』覺風仏教芸術文化基金会
- 于振波 [2004]『走馬樓吳簡初探』文津出版社
- 内田吟風 [1975a]『北アジア史研究——匈奴篇』同朋舎出版部
- [1975b]『北アジア史研究——鮮卑柔然突厥編』同朋舎出版部
- 内田智雄編 [2005a (1964)]『富谷至解説・補注』訳注『中国歴代刑法志』創文社
- 編 [2005b (1971)]『梅原都補記』訳注『続中国歴代刑法志』創文社
- 内田昌功 [2004]「魏晉南北朝の宮における東西軸構造」『史朋』37
- 宇都宮清吉訳 [1969]『世説新語・顔氏家訓』平凡社中国古典文学大系9
- 宇和川哲也 [1984]「西魏・北周の胡姓賜与」『人文論究』(関西学院大学・人文学会) 34-3
- 榎本あゆち [1982]「梁末陳初の諸集團について——陳霸先軍團を中心として」『名古屋大学東洋史

- 研究報告] 8
 — [1985]「梁の中書舎人と南朝賢才主義」『名古屋大学東洋史研究報告] 10
 — [1987]「姚察・姚思廉の『梁書』編纂について——臨川王宏伝を中心として」『名古屋大学東洋史研究報告] 12
 — [1989]「『南史』の説話的要素について——梁諸王伝を手がかりとして」『東洋学報] 70-3/4
 — [1992]「鼎降北人と南朝社会——梁の將軍蘭欽の出自を手がかりに」『名古屋大学東洋史研究報告] 16
 — [1994]「北齊の中書舎人について」『東洋史研究] 53-2
 — [1995]「北魏後期・東魏の中書舎人について」中国中世史研究会編『中国中世史研究 統編』京都大学学術出版会
 — [2001]「西魏末・北周の御正について」『名古屋大学東洋史研究報告] 25
 袁維春 [1993]『三国碑述] 北京丁芸美術出版社
 王国維 [1984] 袁英光・劉寅生整理・標点『水經注校] 上海人民出版社
 王素 [1997]『吐魯番出土高昌文獻編年] 新文豐出版公司
 — [1998]『吐魯番出土文書』[卷] 附録殘片考釈] 中国文物研究所編『出土文獻研究] 3, 中華書局
 — [2003]「長沙走馬楼三国簡牘的研究及其基本問題——長沙走馬楼三国簡牘研究的回顧与展望」『明大アジア史論集] 9
 —・李方 [1997]『魏晉南北朝敦煌文獻編年] 新文豐出版公司
 王壯弘・馬成名編 [1985]『六朝墓誌檢要] 上海書画出版社
 王鐸・李淼編 [1990]『中国古代碑文] 知識出版社
 王利器 [1980]『顏氏家訓集解] 上海古籍出版社
 大川富士夫 [1967]「孫吳政權の成立をめぐる」『立正史学] 31
 — [1987]「六朝江南の豪族社会」雄山閣出版
 太田稔 [2003]「拓跋珪の「部族解散」政策について」『集刊東洋学] 89
 大知聖子 [2001]「北魏の爵制とその実態」『紀要] (岡山大学・院・文化科学) 12
 大庭脩 [1971]『親魏倭王] 学生社 (2001年増補版)
 岡崎文夫 [1932]『魏晉南北朝通史] 弘文堂
 — [1989]『魏晉南北朝通史 内編] 平凡社東洋文庫
 尾形勇 [1979]『中国古代の「家」と国家] 岩波書店
 — [1982]「中国の即位儀礼」井上光貞他編『東アジア世界における日本古代史講座 9 東アジアにおける儀礼と国家] 学生社
 岡部毅史 [1998]「梁陳時代における將軍号の性格に関する一考察——唐代散官との関連から」『集刊東洋学] 79
 — [2000a]「北魏の「階」の再検討」『集刊東洋学] 83
 — [2000b]「北魏における官の清濁について」『東洋史論叢] (大阪市立大学) 11
 — [2002]「魏晉南北朝期の官制における「階」と「資」——「品」との関係を中心に」『古代文化] 54-8
 長部悦弘 [1990a]「北朝隋唐時代における胡族の通婚関係」『史林] 73-4
 — [1990b]「北朝隋唐時代における漢族士大夫の教育構造」『東洋史研究] 49-3
 — [1993a]「北朝時代の武人官僚問題」『史林] 76-1
 — [1993b]「元氏研究——北朝隋唐時代における鮮卑族の文人士大夫化の一軌跡」磯波護編『中国中世の文物] 京都大学人文科学研究所
 — [1995]「劉(独孤)氏研究」『日本東洋文化論集] (琉球大学・法文) 1

- [2003]「宇文氏研究」『日本東洋文化論集] (琉球大学・法文) 9
 小田義久 [1972]「華北胡族国家の文化政策」『龍谷大学論集] 399
 越智重明 [1953]「南朝州鎮考」『史学雑誌] 62-12
 — [1957]「劉裕政權と義熙土断」『重松先生古稀記念九州大学東洋史論叢] 九州大学文学部東洋史研究室
 — [1970]『晋書] 明德出版社
 — [1980]「北朝の下層身分をめぐる」『九州大学東洋史論集] 8
 — [1982]『魏晉南朝の貴族制] 研文出版
 — [1985a]「宋の孝武帝とその時代」『魏晉南朝の人と社会] 研文出版
 — [1985b]「沈約と宋書」『魏晉南朝の人と社会] 研文出版
 — [1993]「六朝の免官, 削爵, 除名」『東洋学報] 74-3/4 (同 [2000] 所収)
 — [1997]「漢六朝の家産の多様性をめぐって」『戦国秦漢史研究] 3, 中国書店
 — [2000]『中国古代の政治と社会] 中国書店
 小尾孝夫 [2003]「劉宋前期における政治構造と皇帝家の姻族・婚姻関係」『歴史] (東北史学会) 100
 小尾孟夫 [2001]『六朝都督制研究] 汲古書院
 賀雲翔 [2005]『六朝瓦当与六朝都城] 文物出版社
 郭玉堂原著, 氣賀澤保規編 [2002]『復刻 洛陽出土石刻時地記——附 解説・所載墓誌碑刻目錄] 汲古書院
 片山章雄 [1988]「李柏文書の出土地」『中国古代の法と社会——栗原益男先生古稀記念論集] 汲古書院
 葛劍雄 [1997]『中国移民史 第二卷 先秦至魏晉南北朝時期] 福建人民出版社
 勝畑冬実 [1994a]「拓跋珪の「部族解散」と初期北魏政權の性格」『紀要(哲学・史学)] (早稲田大学・院・文) 別冊 20
 — [1994b]「「畿上塞困」から見た初期北魏の国家構造」『史滴] 16
 — [1995]「北魏の郊甸と「畿上塞困」——胡族政權による長城建設の意義」『東方学] 90
 勝村哲也 [1974]「南朝門閥の家産——文選所引「奏彈劉整」の新解釈」『仏教大学人文学論集] 8
 金子修一 [1980]「南朝期の上奏文の一形態について——『宋書』禮儀志を史料として」『東洋文化] 60 (同 [2001] 所収)
 — [2001]『古代中国と皇帝祭祀] 汲古書院
 — [2002]「古代中国の王権」『岩波講座 天皇と王権を考える] 1
 狩野直禎 [1959]「蜀漢政權の構造」『史林] 42-4
 神塚淑子 [1999]『六朝道教思想の研究] 創文社
 神矢法子 [1994]「『母』のための喪服——中国古代社会に見る夫権-父権・妻=母の地位・子の義務」近代文芸社
 川合安 [1986]「南朝財政機構の発展について」『文化] 49-3/4
 — [1988]「南朝の御史台について」『集刊東洋学] 60
 — [1989]「北魏孝文帝の官制改革と南朝の官制」三好迪代表『文化における「北」] 昭和 62・63 年度科研費研究成果報告書
 — [1992]「南朝・宋初の「同伍犯法」の論議」『集刊東洋学] 67
 — [1992-95]「沈約『宋書』の史論」『弘前大学人文学部 文経論叢] 27-3, 28-3, 『北海道大学文学部紀要] 43-1, 44-1
 — [1995a]「唐寓之の乱と士大夫」『東洋史研究] 54-3
 — [1995b]「沈約の地方政治改革論——魏晉期の封建論と関連して」中国中世史研究会編『中国中世史研究 統編』京都大学学術出版会

- [1996]『『南齊書』予章文獻王伝訳註』『史朋』29
- [1997-98]「訳注『宋書』沈約自序」『北海道大学文学部紀要』46-1~2
- [2002]『『宋書』と劉宋政治史』『東洋史研究』61-2
- [2003]「劉裕の革命と南朝貴族制」『東北大学東洋史論集』9
- [2004]「南朝貴族の家格」『六朝学術学会報』5
- 川勝義雄 [1954]「曹操軍団の構成について」『京都大学人文科学研究所創立廿五周年記念論文集』京都大学人文科学研究所（同 [1982] 所収）
- [1970]「貴族制社会と孫呉政権下の江南」中国中世史研究会編『中国中世史研究——六朝隋唐の社会と文化』東海大学出版会（同 [1982] 所収）
- [1974]『中国の歴史3 魏晉南北朝』講談社（講談社学術文庫, 2003年）
- [1982]『六朝貴族制社会の研究』岩波書店
- 川本芳昭 [1984]「五胡十六国・北朝期における胡漢融合と華夷観」『佐賀大学教養部研究紀要』16（同 [1998] 所収）
- [1998]『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院
- [1999]「北朝国家論」『岩波講座世界歴史』9
- [2000]「北魏文成帝南巡について」『九州大学東洋史論集』28
- [2001]「民族問題を中心としてみた魏晉南北朝隋唐時代史研究の動向」『中国史学』11
- [2002a]「漢唐間における「新」中華意識の形成——古代日本・朝鮮と中国との関連をめぐって」『九州大学東洋史論集』30
- [2002b]「魏晉南北朝時代における民族問題研究についての展望」第1回中国史学国際会議研究報告集『中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展』東京立大学出版会
- [2005]『中華の崩壊と拡大——魏晉南北朝』講談社
- 甘肅省文物考古研究所編 [1994]『敦煌祁家灣——西晋十六国墓葬発掘報告』文物出版社
- 編 [1998]『敦煌仏教廟湾西晋画像磚墓』文物出版社
- 甘肅省文物隊他編 [1985]『嘉峪関壁画墓発掘報告』文物出版社
- 神田信夫・山根幸夫 [1989]『中国史籍解題辞典』燎原書店
- 菊地英夫 [1986]「西魏二十四軍の「団」をめぐる従来の諸説とその検討」『史朋』20
- [1987]「北朝・隋の二十四軍制度における「団」」日野開三郎博士頌寿記念論集刊行会編『論集 中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店
- 魏書研究会編 [1999]『魏書語彙索引』汲古書院
- 稀代麻也子 [2004]『『宋書』のなかの沈約——生きるということ』汲古書院
- 北田英人 [1999]「稲作の東アジア史」『岩波講座世界歴史』9
- 邱陵編 [1991]『羅布淖爾資料彙編』《新疆文物》編輯部
- 喬治忠校注 [1989]『衆家編年体晋史』天津古籍出版社
- 金文京 [2005]『三国志の世界——後漢 三国時代』講談社
- 金民壽 [1989]「東晋政権の成立過程——司馬睿（元帝）の府僚を中心として」『東洋史研究』48-2
- [1992]「桓温から謝安に至る東晋中期の政治——桓温の府僚を中心として」『史林』75-1
- 草野靖 [2001-02]「魏晉南北朝時代における財政の發展（上）（中）（下）——特に課調制について」『人文論叢』（福岡大学）33-1, 3~4
- 窪添慶文 [1974]「魏晉南北朝における地方官の本籍地任用について」『史学雑誌』83-1~2（同 [2003] 所収）
- [1997]「国家と政治」魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題編集委員会編『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院（同 [2003] 所収）
- [2003]『魏晉南北朝官僚制研究』汲古書院

- 栗原益男 [1986]「曹魏の詔と令」『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』刀水書房
- 氣賀澤保規 [1993]「均田制研究の展開」谷川道雄編『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所
- [1999]『府兵制の研究』同朋舎
- 巖耕望 [1963]『中国地方行政制度史上編 卷中 魏晉南北朝地方行政制度』中央研究院歴史語言研究所
- 五井直弘 [1956]「曹操政権の性格について」『歴史学研究』195（同 [2001] 所収）
- [2001]『漢代の豪族社会と国家』名著刊行会
- 高敏 [2003]『南北史掇瑣』中州古籍出版社
- 高明士編 [1990]『中国史研究指南』全5巻, 聯経出版事業公司
- 侯燦・楊代欣編 [1999]『楼蘭漢文簡紙文書集成』天地出版社
- 興膳宏・川合康三 [1995]『隋書経籍志詳訳』汲古書院
- 編 [2000]『六朝詩人伝』大修館書店
- 古賀昭岑 [1980]「北魏の部族解散について」『東方学』59
- 小林聡 [1996]「晋南朝における冠服制度の変遷と官爵体系——『隋書』礼儀志の規定を素材として」『東洋学報』77-3/4
- [1998]『隋書』に見える梁陳時代の印綬冠服規定の来源について」『埼玉大学教育学部紀要』47-1
- 小林安斗 [2002]「北朝末宇文氏政権と賜姓の関係」『社会文化科学研究』（千葉大学）6
- 佐川英治 [1999a]「北魏の編戸制と徴兵制度」『東洋学報』81-1
- [1999b]「三長・均田両制の成立過程——『魏書』の批判的検討をつうじて」『東方学』97
- [2000]『魏書』の均田制叙述をめぐる一考察」『東洋史論叢』（大阪市立大学）11
- [2001a]「北魏均田制研究の動向」『中国史学』11
- [2001b]「北魏均田制の目的と展開——奴婢給田を中心として」『史学雑誌』110-1
- [2002]「孝武西遷と国姓賜与——六世紀華北の民族と政治」『紀要』（岡山大学・文）38
- 佐久間吉也 [1980]『魏晉南北朝水利史研究』開明書院
- [1984]「北魏朝における隸戸・奴婢の下賜について」大川富士夫代表『中国史上よりみた中国文化の伝播と文化受容』昭和58年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
- [1985a]「北魏朝における私奴婢について」『紀要』（郡山女子大学）21
- [1985b]「北魏時代の邸閣について」『福大史学』39
- [1987]「北魏朝における奴婢の形成と身分について」郡山開成学園編『郡山開成学園創立四十周年記念論文集』郡山開成学園
- 佐々木栄一 [1977]「北魏均田法の基礎的研究——発足当初の施行事例について」『論集（歴史学・地理学）』（東北学院大学）8
- [1978]「北魏均田法の基礎的研究(2)——三長論議と均田法」『論集（歴史学・地理学）』（東北学院大学）9
- [1982]「スタイン漢文文書613号（いわゆる計帳様文書）に見える税租について」『古代文化』34-3
- [1985]「再びスタイン漢文文書613号（いわゆる計帳様文書）の性格について」『論集（歴史学・地理学）』（東北学院大学）15
- [1987]「スタイン漢文文書613号（いわゆる計帳様文書）をめぐって——「実年18」を中心に」『論集（歴史学・地理学）』（東北学院大学）18
- [1989]「スタイン漢文文書613号（いわゆる計帳様文書）をめぐって——劉文成戸の記事を中心に」『論集（歴史学・地理学）』（東北学院大学）20
- [1992]「北魏均田法の基礎的研究(3)——狭郷規定をめぐって」『東北大学東洋史論集』5

- [1994]「スタイン漢文文書 613号 (いわゆる計帳様文書) をめぐって——給田の実態を中心に」『論集 (歴史学・地理学)』(東北学院大学) 26
- [1996]「北魏均田制の基礎的研究(4)——発足当初の施行事例について (再論)」『論集 (歴史学・地理学)』(東北学院大学) 28
- [1999]「北魏三長考」『論集 (地理学・歴史学)』(東北学院大学) 31
- 佐藤圭四郎 [1998]「中国の邸店と波斯の邸店」『東アジア交流史の研究』同朋舎出版
- 佐藤賢 [2002]「北魏前期の「内朝」・「外朝」と胡漢問題」『集刊東洋学』88
- 佐藤智水 [1998]『北魏仏教史論考』岡山大学文学部
- 佐藤佑治 [1998]『魏晉南北朝社会の研究』八千代出版
- 滋賀秀三 [2003]『中国法制史論集——法典と刑罰』創文社
- 島田虔次他編 [1983]『アジア歴史研究入門』1, 同朋舎出版
- 朱季海 [1984]『南齊書校箋』中華書局
- 周一良 [1963]『魏晉南北朝史論集』中華書局 (北京大学出版社, 1997年増補版)
- [1998 (1985)]『周一良集 第二卷 魏晉南北朝史札記』遼寧教育出版社
- 周祖謨 [2000]『洛陽伽藍記校釈』上海書店出版社
- 周法高 [1960]『顏氏家訓箋注』中央研究院歷史語言研究所
- 祝総斌 [1995]「門閥制度」白寿彝総主編『中国通史』7, 丙編第三章, 上海人民出版社
- 徐高阮 [1960]『重刊洛陽伽藍記』中央研究院歷史語言研究所
- 徐震堦 [1984]『世説新語校箋』中華書局
- 任乃強 [1987]『華陽国志校補図注』上海古籍出版社
- 鈴木俊 [1980]『均田, 租庸調制度の研究』刀水書房
- 鈴木真 [1997]「礼制改革にみる北魏孝文帝の統治理念」『社会文化史学』37
- 西北出土文献を読む会 [1999]「トゥルファン出土漢語文書校訂稿」『東アジア——歴史と文化』8
- 妹尾達彦 [1999]「中華の分裂と再生」『岩波講座世界歴史』9
- 石声漢 [1957-58]『齊民要術今釈』科学出版社
- 關尾史郎 [1981]「前燕政權 (337-370年) 成立の前提」『歴史学研究』488
- [1982]「北涼政權と「真興」奉用」『東洋史苑』21
- [1983]「六朝期江南の社会」『東アジア世界の再編と民衆意識——歴史学研究別冊特集』
- [1998]「承陽」備忘——『吐魯番出土文書』割記再補『東洋史苑』50/51
- [1999]「古代中国における移動と東アジア」『岩波講座世界歴史』19
- [2000]「曹魏政權と山越」『東アジア史の展開と日本——西嶋定生博士追悼論文集』山川出版社
- [2004]「トゥルファン将来, 「五胡」時代契約文書簡介」『西北出土文献研究』創刊号
- 編 [2005]『中国西北地域出土鎮墓文集成 (稿)』新潟大学超域研究機構
- ・岩本篤志編 [2005]『トゥルファン出土「五胡」時代漢文文書俗字データベース』新潟大学超域研究機構
- 走馬樓簡牘整理組編 [1999]『長沙走馬樓三国簡・嘉禾吏民田家荊』文物出版社
- 編 [2003]『長沙走馬樓三国簡・竹簡 [卷]』文物出版社
- 外村中 [1998]「六朝建康都城宮城放」田中淡編『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所
- 竹浪隆良 [1984]「北魏における人身売買と身分制支配——延昌三年 (514) 人身売買論議を中心として」『史学雑誌』93-3
- 多田惲介 [1999]『漢魏晋史の研究』汲古書院
- 谷川道雄 [1971]『隋唐帝国形成史論』筑摩書房
- [1976]『中国中世社会と共同体』国書刊行会

- [1977]『世界帝国の形成——中国の歴史』2, 講談社現代新書
- [1987]『中国中世の探求——歴史と人間』日本エディタースクール出版部
- [1992]「六朝時代における都市と農村の対立的関係について」唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院
- [1993]「東西両魏時代の河東豪族社会——「敬史君碑」をめぐって」礪波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所
- [1998]『増補 隋唐帝国形成史論』筑摩書房
- 編 [1993]『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所
- 谷口房男 [1996]『華南民族史研究』緑蔭書房
- [1997]「南北朝時代の蛮酋」『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
- [2003]「南朝の左郡左県について——六朝時代における民族認識の在り方を求めて」『東洋大学文学部紀要』57
- 編 [1981]『華陽国志人名索引・付華陽国志民族関係語彙索引』国書刊行会
- 田沼真弓 [2003]「北魏皇帝の喪礼の変遷」『紀要』(国学院大学栃木短期大学) 37
- 田村實造 [1985]『中国史上の民族移動期——五胡・北魏時代の政治と社会』創文社
- 譚其驥 [1987]「晋永嘉乱後之民族遷徙」『長水集』上, 人民出版社
- 趙超 [1992]『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社
- [1997]『中国古代石刻概論』文物出版社
- 張慎生 [1980]『魏書地形志校釈』德育書局
- 張宝璽編 [2001]『嘉峪関西漢魏晉十六国墓壁画』甘肅人民美術出版社
- 趙万里編 [1956]『漢魏南北朝墓誌彙編』科学出版社
- 長沙吳簡研究会編 [2001]『嘉禾吏民田家荊研究——長沙吳簡研究報告』第1集, 長沙吳簡研究会
- 編 [2004]『長沙吳簡研究報告』2, 長沙吳簡研究会
- 陳寅恪 [1943]『唐代政治史述論稿』商務印書館 (同 [2001] 所収)
- [1944]『隋唐制度淵源略論稿』商務印書館 (同 [2001] 所収)
- [2001]『陳寅恪集 隋唐制度淵源略論稿 唐代政治史述論稿』生活・読書・新知三聯書店
- 陳連慶 [1999]『《晋書・食貨志》校注, 《魏書・食貨志》校注』東北師範大学出版社
- 塚本善隆 [1974a]『塚本善隆著作集 1 魏書』積老志の研究』大東出版社
- [1974b]『塚本善隆著作集 2 北朝仏教史研究』大東出版社
- [1975]『塚本善隆著作集 3 中国中世仏教史論攷』大東出版社
- 津田資久 [1998]『魏略』の基礎的研究』『史朋』31
- 都築晶子 [1997]「六朝時代の江南社会と道教」『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
- 丁福林 [2002]『宋書校箋』上海古籍出版社
- 田余慶 [1989]『東晉門閥政治』北京大学出版社
- [1993]『秦漢魏晋史探微』中華書局 (2004年増補版)
- 唐長孺 [1955]「晋代北境各族「変乱」の性格と五胡政權在中国的統治」同『魏晉南北朝史論叢』生活・読書・新知三聯書店
- [1989]「新出吐魯番文書簡介」同『山居存稿』中華書局
- 主編 [1992]『吐魯番出土文書』卷, 文物出版社
- 東方学術協会編 [1947]『中国史学入門』上・下, 高桐書院
- 富谷至 [2000]「晋泰始律令への道 第一部 秦漢の律と令」『東方学報』72
- [2001a]「晋泰始律令への道 第二部 魏晋の律と令」『東方学報』73
- [2001b]「スウェーデン国立民族学博物館所蔵未発表紙文書」同編『流沙出土の文字資料——楼蘭・尼雅文書を中心に』京都大学学術出版会

- [2003]『木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史』岩波書店
 内藤乾吉 [1930]「唐の三省」『史林』15-4 (同 [1963] 所収)
 —— [1963]『中国法制史考證』有斐閣
 直江直子 [1983]「北魏の鎮人」『史学雑誌』92-2
 —— [1998]「『領民酋長』制と北魏の地域社会覚書」『紀要』(富山国際大学) 8
 —— [2001]「北朝北族伝——侯莫陳氏」『紀要 (人文社会)』(富山国際大学) 1
 直海玄哲 [1984]「北魏太武帝廃仏考」『仏教史研究』19~20
 中嶋隆藏 [1985]『六朝思想の研究——士大夫と仏教思想』平楽寺書店
 中林史朗訳 [1995]『華陽国志』明德出版社
 長畑武 [1982]「北魏の俸禄制施行とその意義」『集刊東洋学』47
 —— [1984]「北魏における考課制度の運営について——門閥主義との関連において」『秋大史学』30
 中村圭爾 [1974]「晋南朝における除名について」『人文研究』26-11 (同 [1987] 所収)
 —— [1978-79]「晋南朝における官人の俸禄について」『人文研究』30-9, 31-8 (同 [1987] 所収)
 —— [1980]「『劉劭基志銘』考——南朝における婚姻と社会的階層」『東洋学報』61-3/4 (同 [1987] 所収)
 —— [1981]「六朝時代三呉地方における開発と水利についての若干の考察」『佐藤博士還暦記念中国水利史論集』国書刊行会
 —— [1983]「南朝貴族の地縁性に関する一考察」『東洋学報』64-1/2 (同 [1987] 所収)
 —— [1984a]「建康と水運」『佐藤博士退官記念中国水利史論集』国書刊行会
 —— [1984b]「台伝——南朝における財政機構」『中国史研究』8
 —— [1986]「晋南朝における律令と身分制」唐代史研究会編『律令制——中国朝鮮の法と国家』汲古書院
 —— [1987]『六朝貴族制研究』風間書房
 —— [1988]「建康の『都城』について」唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』刀水書房
 —— [1989]「南朝における議について——宋・齊代を中心に」『人文研究』40-10
 —— [1992a]「建康と三呉地方」唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院
 —— [1992b]「南朝戸籍に関する二問題」『人文研究』44-12
 —— [1993]「江南六朝墓出土陶器の一考察」磯波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所
 —— [1995a]「六朝史と『地域社会』」中国中世史研究会編『中国中世史研究 続編』京都大学学術出版会
 —— [1995b]「晋南朝律令と身分制の一考察」『堀敏一先生古稀記念 中国古代の国家と民衆』汲古書院
 —— [1997]「六朝貴族制と官僚制」『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
 —— [1999a]「南朝国家論」『岩波講座世界歴史』9
 —— [1999b]「南朝政権と南徐州社会」唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』刀水書房
 —— [1999c]「日本における魏晋南北朝史研究」『唐代史研究』2
 —— [2000]「魏晋南北朝の公文書の種類と体系」『人文研究』52-2
 —— [2001a]「東晋南朝における豫州・南豫州について」『人文研究』53-2
 —— [2001b]『魏晋南北朝における公文書と文書行政の研究』平成10~12年度科学研究費補助金研究結果報告書
 —— [2002]「『風聞』の世界」『東洋史研究』61-1
 —— [2004]『魏晋南北朝都城史料輯佚 (初稿)』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化センター

- 那波利貞 [1943]「塙主攷」『東亞人文学報』2-4
 西岡市祐 [2002]「南北朝・隋朝・唐朝の親耕籍田」『国学院雑誌』103-4
 西嶋定生 [1956]「魏の屯田制」『東京大学東洋文化研究所紀要』10 (同 [1966] 所収)
 —— [1963]「中国古代奴婢制の再考察——その階級的性格と身分的性格」『古代史講座』7, 学生社 (同 [1983] 所収)
 —— [1966]『中国経済史研究』東京大学出版会
 —— [1981]『中国古代の社会と経済』東京大学出版会
 —— [1983]『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
 —— [1999]『倭国の出現——東アジア世界のなかの日本』東京大学出版会
 西山武一・熊代幸雄 [1959]『校訂訳注齊民要術』アジア経済出版社
 西脇常記 [2002]『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都大学学術出版会
 野田俊昭 [1977]「東晋南朝における天子の支配権力と尚書省」『九州大学東洋史論集』5
 —— [1990]「南朝の郡太守の班位と清濁」『史淵』127
 —— [1994]「南朝における吏部の人事行政と家格」『名古屋大学東洋史研究報告』18
 —— [1997]「宋齊時代の参軍起家と梁陳時代の蔭制」『九州大学東洋史論集』25
 —— [2002]「両晋南朝の清議・郷論と天子の支配権力」『古代文化』54-1
 馬雍 [1990]「吐魯番出土高昌郡時期文書概述」『西域史地文物叢考』文物出版社
 長谷川道隆 [1986]「吳・晋 (西晋) 墓出土の神亭壺——系譜および類型を中心に」『考古学雑誌』71-3
 服部克彦 [1965]『北魏洛陽の社会と文化』ミネルヴァ書房
 —— [1968]『続北魏洛陽の社会と文化』ミネルヴァ書房
 羽仁真智 [1987]「北魏太武帝の廃仏毀釈に関する一考察」『茅茨』(青山学院大学) 3
 浜口重国 [1957]「魏晋南朝の兵戸制度の研究」『山梨大学学芸学部紀要』2 (同 [1966a] 所収)
 —— [1966a]『秦漢隋唐史の研究』上・下, 東京大学出版会
 —— [1966b]『唐王朝の賤人制度』東洋史研究会
 范祥雍 [1958]『洛陽伽藍記校注』古典文学出版社
 日比野丈夫 [1977]「墓誌の起源について」『江上波夫教授古稀記念論集 民族・文化篇』山川出版社
 繆啓倫 [1982]『齊民要術校釈』農業出版社
 福島繁次郎 [1979]『中国南北朝史研究 (増訂版)』名著出版
 福原啓郎 [1993]「西晋の墓誌の意義」磯波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所
 —— [1995]『西晋の武帝 司馬炎』白帝社
 藤井秀樹 [2001]「前秦における君主権と宗室」『歴史学研究』751
 藤家禮之助 [1984]「『南史』の構成——宋本紀をめぐる」『中国正史の基礎的研究』早稲田大学出版部
 —— [1989]『漢三国両晋南朝の田制と税制』東海大学出版会
 船木勝馬・谷口房男他訳 [1975-99]『華陽国志訳注稿』『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報』8~33
 北京呉簡研討班編 [2004]『呉簡研究』1, 崇文書局
 北京図書館金石組編 [1989]『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第3~8冊「北朝」, 中州古籍出版社
 朴漢濟 [1991] 尹素英訳「北魏洛陽社会と胡漢体制——都城區画と住民分布を中心に」『お茶の水史学』34
 堀敏一 [1968]「九品中正制度の成立をめぐる」『東京大学東洋文化研究所紀要』45
 —— [1974]「魏晋の占田・課田と給客制の意義」『東京大学東洋文化研究所紀要』62

- [1975]『均田制の研究——中国古代国家の土地政策と土地所有制』岩波書店
- [1980]「晋泰始律令の成立」『東洋文化』60
- [1987]『中国古代の身分制——良と賤』汲古書院
- [1988]「良奴・良賤制はいつ成立したか——川本芳昭氏の論に関連して」『史学雑誌』97-7
- [1996]『中国古代の家と集落』汲古書院
- [2001]『曹操——三国志の真の主人公』刀水書房
- 前島佳孝 [1999]「西魏・八柱国の序列について——唐初編纂奉勅撰正史に於ける唐皇祖の記述様態の一事例」『史学雑誌』108-8
- 前田正名 [1979]『平城の歴史地理学的研究』風間書房
- 増村宏 [1955]「宋書王弘伝の同伍犯法の論議」『鹿児島大学文学部文科報告』4
- [1956]「晋・南朝の符伍制」『鹿大史学』4
- 町田隆吉 [1982]「前秦政權の護軍について——「五胡」時代における諸種族支配の一例」『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』国書刊行会
- [1984]「北魏太平真君四年拓跋燾石刻祝文をめぐって——「可寒」「可敦」の称号を中心として」岡本敬二先生退官記念論集刊行会編『アジア諸民族における社会と文化——岡本敬二先生退官記念論集』国書刊行会
- [2000]「『資治通鑑考異』所引『十六国春秋』及び『十六国春秋鈔』について——司馬光が利用した『十六国春秋』をめぐって」『桜美林大学国際学レビュー』12
- 松浦千春 [1993]「漢より唐に至る帝位継承と皇太子——謁廟の礼を中心に」『歴史』(東北史学会) 80
- [2003]「魏晋南朝の帝位継承と積奠儀礼」『東北大学東洋史論集』9
- 松岡弘 [1996]「北魏漢化政策の一考察——皇太子恂の反乱」『駿台史学』98
- 松下憲一 [1999]「北魏の洛陽遷都」『史朋』32
- [2000a]「北魏の領民酋長制と「部族解散」」『集刊東洋学』84
- [2000b]「北魏石刻史料に見える内朝官——「北魏文成帝南巡碑」の分析を中心に」『北大史学』40
- [2002]「北魏道武帝の「部族解散」」『史朋』34
- 松永雅生 [1987]「北魏世祖の徭役策とその後の推移」日野開三郎博士頌寿記念論集刊行会編『論集 中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店
- 松丸道雄他編 [1996]『中国史』2, 山川出版社
- 松本善海 [1977]『中国村落制度の史的研究』岩波書店
- 三崎良章 [1991]「五胡諸国の異民族統御官と東晋——南蛮校尉・平呉校尉の設置を中心として」『東方学』82
- [2002]『五胡十六国——中国史上の民族大移動』東方書店
- 満田剛 [1999]「王沈『魏書』研究」『創価大学大学院紀要』20
- 宮川尚志 [1955]「三国呉の政治と制度」『史林』38-1
- [1956]『六朝史研究 政治・社会篇』日本学術振興会
- 宮崎市定 [1956]『九品官人法の研究——科挙前史』東洋史研究会 (同 [1992] 所収)
- [1960]「中国における村制の成立」『東洋史研究』18-4 (同 [1976] 所収)
- [1976]『アジア史論考』中, 朝日新聞社
- [1992]『宮崎市定全集 6 九品官人法』岩波書店
- 宮澤知之 [2000]「魏晋南北朝時代の貨幣経済」『鷹陵史学』26
- 村田治郎 [1981]『中国の帝都』綜芸舎
- 孟凡人 [1995]『楼蘭鄯善簡牘年代学研究』新疆人民出版社

- 森三樹三郎 [1986]『六朝士大夫の精神』同朋舎出版
- 訳 [1969]『世説新語 顔氏家訓』平凡社
- 森野繁夫・佐藤利行 [1996]『王羲之全書翰 (増補改訂版)』白帝社
- 守屋美都雄 [1951]『六朝門閥の一研究——太原王氏系譜考』日本出版共同株式会社
- 安田二郎 [1981]「王僧虔「誠子書」攷」『日本文化研究所研究報告』17 (同 [2003a] 所収)
- [1985]「南朝貴族制社会の改革と道徳・倫理」『東北大学文学部研究年報』34 (同 [2003a] 所収)
- [2003a]『六朝政治史の研究』京都大学学術出版会
- [2003b]『『梁書』『陳書』及び『南史』の史料論的研究』平成12~14年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 矢野主税 [1976]『門閥社会成立史』国書刊行会
- [1980]「北朝における郡望の性格(上)(下)」『第一経大論集』10-1~2
- 山下将司 [2000]「西魏・恭帝元年「賜姓」政策の再検討」『紀要』(早稲田大学・院・文学) 45
- [2001]「西魏・北周における本貫の関隴化について」『学術研究(地理・歴史学・社会科学)』(早稲田大学・教育) 49
- [2002]「唐初における「貞観氏族志」の編纂と「八柱国家」の誕生」『史学雑誌』111-2
- 山田勝芳 [2000]『貨幣の中国古代史』朝日選書
- 山根幸夫編 [1983]『中国史研究入門』上, 山川出版社
- 編 [1991]『中国史研究入門 (増補改訂版)』上, 山川出版社
- 余嘉錫 [1983]『世説新語箋疏』中華書局
- 楊守敬・熊会貞 [1957]『水経注疏』科学出版社
- [1971]『楊・熊合撰水経注疏』台湾中華書局
- [1989]『水経注疏』江蘇古籍出版社
- 楊朝明校補 [1991]『九家旧晋書輯本』中州古籍出版社
- 吉岡真 [1999]「北朝・隋唐支配層の推移」『岩波講座世界歴史』9
- 吉川忠夫 [1972]『王羲之——六朝貴族の世界』清水書院
- [1984]『六朝精神史研究』同朋舎出版
- [1989]『劉裕』中公文庫
- [1995]「梁の徐勉の「誠子書」」『東洋史研究』54-3
- 好並隆司 [1970]「曹操政權論」『岩波講座世界歴史』5
- 葭森健介 [1980]「晋宋革命と江南社会」『史林』63-2
- [1986]「魏晋革命前夜の政界——曹爽政權と州大中正設置問題」『史学雑誌』95-1
- 米田賢次郎 [1989]『中国古代農業技術史研究』同朋舎出版
- 羅新・葉煒 [2005]『新出魏晋南北朝墓志疏証』中華書局
- 羅福頤主編 [1987]『秦漢南北朝官印徵存』文物出版社
- 李均明・何双全編 [1990]『散見簡牘合輯』文物出版社
- 李方・王素編 [1996]『吐魯番出土文書人名地名索引』文物出版社
- 劉永明編 [1999]『漢唐紀年鏡函録』江蘇古籍出版社
- 柳洪亮 [1997]『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社
- 劉淑芬 [1992]『六朝的城市与社会』台湾: 學生書局
- 劉琳 [1984]『華陽國志校注』巴蜀書社
- 林梅村編 [1985]『樓蘭尼雅出土文書』文物出版社
- 盧海鳴 [2002]『六朝都城』南京出版社
- 渡辺信一郎 [1986]『中国古代社会論』青木書店

- [1995] 「古田・課田の系譜——晋南朝の税制と国家的土地所有」中国中世史研究会編『中国中世史研究 続編』京都大学学術出版会
- [1996] 『天空の玉座——中国古代帝国の朝政と儀礼』柏書房
- [2000] 「三五癸卒攷実——六朝期の兵役・力役徵発方式と北魏の三長制」『洛北史学』2
- [2001] 「戸調制の成立——賦斂から戸調へ」『東洋史研究』60-3
- [2002] 「北魏の財政構造——孝文帝・宣武帝期の経費構造を中心に」『北朝財政史の研究——『魏書』食貨志を中心に』平成11~14年度科学研究費補助金研究成果報告書
- [2003a] 「宮闕と園林——三~六世紀における皇帝権力の空間構成」『中国古代の王権と天下秩序——日中比較史の視点から』校倉書房
- [2003b] 「唐代前期における農民の軍役負担」『京都府立大学学術報告 (人文・社会)』55
- 渡邊義浩 [1988] 「蜀漢政權の成立と荊州人士」『東洋史論』6
- [2004] 「三国政權の構造と『名士』」汲古書院
- 渡部武 [1993] 「漢代陂池稻田模倣型器および関連画像資料集成」古川久雄・渡部武編『中国先史・古代農耕関係資料集成』京都大学東南アジア研究センター
- Balazs, Étienne [1953] “Étude sur la société et l'économique de la Chine médiévale I: *Le traité économique du Souei-chou,*” T'oung Pao, Vol. 42.
- [1954] “*Le traité juridique du “Souei-chou,”*” Bill.

第4章 隋・唐

- 青木敦 [1995] 「ポスト・ワルラスからのアプローチ」宋代史研究会編『宋代史研究会研究報告5 宋代の規範と習俗』汲古書院
- 青山定雄 [1969 (1963)] 『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館
- 足立喜六 [1942-43] 『大唐西域記の研究』上・下, 法蔵館
- ・塩入良道 [1970, 85] 『入唐求法巡礼行記』1・2, 平凡社東洋文庫
- 足立啓二 [1990] 「専制国家と財政・貨幣」中国史研究会編『中国史像の再構成II 中国専制国家と社会統合』文理閣
- 穴沢彰子 [1999] 「唐宋変革期における社会的結合に関する一試論——自衛と賑恤の「場」を手がかりとして」『中国——社会と文化』14
- アプー=ルゴド, ジャネット・L. [2001 (原書1989)] 佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前』上・下, 岩波書店
- 天野元之助 [1979 (1962)] 『中国農業史研究 (増補版)』御茶の水書房
- 荒川正晴 [1997] 「唐帝国とソグド人の交易活動」『東洋史研究』56-3
- [2003] 『オアシス国家とキャラヴァン交易』世界史リブレット, 山川出版社
- 池田温 [1964] 「唐代均田制をめぐって」『法制史研究』14
- [1965] 「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」『ユーラシア文化研究』1
- [1970] 「律令官制の形成」『岩波講座世界歴史』5
- [1979] 『中国古代籍帳研究——概観・録文』東京大学出版会
- [1990] 『中国古代写本識語集録』東京大学東洋文化研究所
- [2000a] 「唐令復原研究の新段階——戴建國氏の天聖令殘本発見研究」『創価大学人文論集』12
- [2000b] 「近年の日本における敦煌・吐魯番研究」『シルクロード研究』2
- [2003] 『敦煌文書の世界』名著刊行会

- ・岡野誠 [1977] 「敦煌・吐魯番発見唐代法制文献」『法制史研究』27
- 編 [1996] 『世界歴史大系 中国史2——三国~唐』山川出版社
- 石井正敏 [2001] 『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館
- 石田幹之助 [1979 (1941)] 『長安の春』講談社学術文庫
- 石原道博編訳 [1985 (1951)] 『魏志倭人伝他三篇——中国正史日本伝(1)』岩波文庫 (新訂版)
- 稲葉一郎 [1968] 『順宗実録考』『立命館文学』280
- 今村与志雄訳注 [1980-81] 『西陽雜俎』1~5, 平凡社東洋文庫
- 岩波講座 [1970] 『(旧版) 岩波講座世界歴史』5
- [1999] 『(新版) 岩波講座世界歴史』9
- 石見清裕 [1998] 『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院
- [1999] 『ラティモアの辺境論と漢~唐間の中国北辺』唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』刀水書房
- 植木久行 [1995 (1980)] 『唐詩歳時記』講談社学術文庫
- [1999 (1983)] 『唐詩の風景』講談社学術文庫
- 上田信 [1999] 『森と緑の中国史——エコロジカルヒストリーの試み』岩波書店
- [2002] 『トラが語る中国史——エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社
- 上山大峻 [1990] 『敦煌仏教の研究』法蔵館
- 柴新江 [2001a] 『中古中国与外来文明』生活・読書・新知三聯書店
- [2001b] 『敦煌学十八講』北京大学出版社
- 編 [1994] 『英国図書館蔵敦煌漢文非仏教文献残卷目録 S6981-S13624』新文豊出版公司
- NHK編 [2003] 『NHK スペシャル文明の道③ 海と陸のシルクロード』日本放送出版協会
- 翁育瑄 [2003] 「唐宋墓誌から見た女性の守節と再婚について——未亡人の選択とその生活」『唐代史研究』6
- 大木康 [1996] 『不平の中国文学史』筑摩書房
- 大澤正昭 [1973] 「唐末の藩鎮と中央権力」『東洋史研究』32-2
- [1996] 『唐宋変革期農業社会史研究』汲古書院
- [2005] 『唐宋時代の家族・婚姻・女性』明石書店
- 太田次男他編 [1993-98] 『白居易研究講座』全7巻, 勉誠社
- 大津透 [1986] 「唐律令国家の予算について」『史学雑誌』95-12
- [1990] 「唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考——唐朝の軍事と財政」『東洋史研究』49-2
- [2001] 「北宋天聖令・唐開元二十五年令賦役令」『東京大学日本史学研究室紀要』5
- 大原良通 [2003] 『王権の確立と授受——唐・古代チベット帝国 (吐蕃)・南詔国を中心として』汲古書院
- 大室幹雄 [1992] 『干渴幻想——中世中国の反園林都市』三省堂
- [1994] 『檻獄都市——中世中国の世界芝居と革命』三省堂
- [1996] 『遊蕩都市——中世中国の神話・笑劇・風景』三省堂
- 尾形勇 [1979] 『中国古代の「家」と國家——皇帝支配下の秩序構造』岩波書店
- 岡野誠 [1980] 「唐代における「守法」の一事例——衛禁律闖入非御在所条に関連して」『東洋文化』60
- [1987] 「敦煌発見唐水部式の書式について」『東洋史研究』46-2
- 奥村郁三 [1961] 「唐律の刑罰」『法学雑誌』8-2
- 小田義久 [1996] 『大谷文書の研究』法蔵館
- 愛宕元 [1994] 『唐両京城坊放』平凡社東洋文庫
- [1997] 『唐代地域社会史研究』同朋舎出版

- 愛宕松男 [1987]『愛宕松男東洋史学論集 第1巻 中国陶瓷産業史』三一書房
 小野勝年 [1964-69]『入唐求法巡礼行記の研究』全4冊, 鈴木学術財団
 —— [1989]『中国隋唐長安・寺院史料集成』史料篇・解説篇, 法蔵館
 小野四平 [1995]『韓愈と柳宗元——唐代古文研究序説』汲古書院
 加藤繁 [1926]『唐宋時代に於ける金銀の研究』東洋文庫 (1975年再版)
 —— [1952]『支那經濟史考証』上, 東洋文庫 (1974年再版)
 ——訳注 [1948]『旧唐書食貨志・旧五代史食貨志』岩波文庫
 金子修一 [1983]『唐代國際文書形式について』『史学雑誌』83-10 (同 [2001b] 所収)
 —— [2001a]『古代中国と皇帝祭祀』汲古書院
 —— [2001b]『隋唐の國際秩序と東アジア』名著刊行会
 川合康三 [1999]『終南山の姿容——中唐文学論集』研文出版
 菊池英夫 [1970]『府兵制度の展開』『(旧版) 岩波講座世界歴史』5
 北川俊昭 [1998]『『通典』編纂始末考——とくにその上獻の時期をめぐって』『東洋史研究』57-1
 北田英人 [1989]『唐代江南の自然環境と開発』柴田三千雄他編『シリーズ世界史への問い 歴史における自然』岩波書店
 来村多加史 [2001]『唐代皇帝陵の研究』学生社
 清水場東 [1996]『唐代財政史研究(運輸編)』九州大学出版会
 —— [1997]『帝賜の構造——唐代財政史研究 支出編』中国書店
 桑原隲蔵 [1924]『隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて』(同 [1968] 所収)
 —— [1968]『桑原隲蔵全集』2, 岩波書店
 —— [1989 (1923)]『蒲寿庚の事蹟』平凡社東洋文庫
 桑山正進 [1998 (1992)]『慧超往五天竺国伝研究(改訂版)』臨川書院
 氣賀澤保規 [1973]『寶建德集團と河北——隋唐帝国の性格をめぐって』『東洋史研究』31-4
 —— [1993]『均田制研究の展開』谷川道雄編『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所
 —— [1995]『則天武后』白帝社
 —— [1999]『府兵制の研究——府兵兵士とその社会』同朋舎出版
 ——編 [2004]『新版 唐代墓誌所在総合目録』汲古書院
 嚴耕望編 [1985-2003]『唐代交通図考』1~6, 台湾: 中央研究院歷史語言研究所
 胡戟他主編 [2002]『二十世紀唐研究』中国社会科学出版社
 吳松弟 [2002]『兩唐書地理志匯釈』安徽教育出版社
 吳廷燮 [1980]『唐方鎮年表』中華書局
 黄永年 [2002]『唐史史料学』上海書店出版社
 黄永武主編 [1986]『敦煌遺書最新目録』台湾: 新文豐出版公司
 黄正建 [1998]『唐代衣食行研究』首都師範大学出版社
 高世瑜 [1999] 小林一美・任明訳『大唐帝国の女性たち』岩波書店
 高明士主編 [1990]『中国史研究指南II 魏晉南北朝史・隋唐五代史』台湾: 聯經出版事業公司
 講座敦煌 [1980-92]『講座敦煌』全9巻, 大東出版社
 興膳宏・川合康三 [1995]『隋書經籍志詳攷』汲古書院
 古賀登 [1956]『唐代均田制度の地域性』『史観』46
 —— [1971]『新唐書』明德出版社
 谷霽光 [1962]『府兵制度考釈』上海人民出版社
 小島毅 [1996]『中国近世における礼の言説』東京大学出版会
 —— [1999]『宋学の形成と展開』創文社
 小林正美 [2003]『唐代の道教と天師道』知泉書館

- 西域文化研究会編 [1958-63]『西域文化研究』全6冊・別冊1, 法蔵館
 斎藤茂 [2000]『妓女と中国文人』東方書店
 齋藤勝 [1999]『唐代の馬政と牧地』『日中文化研究』14, 勉誠出版
 坂尻彰宏 [2003]『敦煌税羊文書考』『待兼山論叢(史学篇)』37
 酒寄雅志 [2001]『渤海と古代の日本』校倉書房
 佐竹靖彦 [1990]『唐宋変革の地域的研究』同朋舎出版
 佐藤武敏 [1978]『中国古代絹織物史研究』下, 風間書房
 佐藤長 [1958-59]『古代チベット史研究』上・下, 東洋史研究会
 佐藤信編 [2003]『日本と渤海の古代史』山川出版社
 史念海 [2000] 森部豊訳『漢・唐時代の長安城と生態環境』『アジア遊学』20
 ——主編 [1998]『中日歴史地理合作研究論文集 第一輯 漢唐長安与黄土高原』陝西師範大学中国歴史地理研究所
 ——主編 [1999]『中日歴史地理合作研究論文集 第二輯 漢唐長安与関中平原』陝西師範大学中国歴史地理研究所
 滋賀秀三 [1981]『唐代における律の改正をめぐる一問題』『法制史研究』30
 静永健 [2000]『白居易「諷諭詩」の研究』勉誠出版
 篠田統 [1974]『中国食物史』柴田書店
 —— [1978]『中国食物史の研究』八坂書房
 斯波義信 [2002]『中国都市史』東京大学出版会
 嶋崎昌 [1983 (1977)]『隋唐時代の東トルキスタン研究——高昌国史研究を中心として』東京大学出版会
 尚剛 [1998]『唐代工芸美術史』浙江文芸出版社
 章群 [1999]『通鑑・新唐書引用筆記小説研究』台湾: 文津出版社
 白須淨眞 [1997]『吐魯番社会——新興庶民層の成長と名族の没落』谷川道雄他編『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
 岑仲勉 [1977]『通鑑隋唐紀比事實疑』中華書局
 —— [1979 (1960)]『唐史余瀆』上海古籍出版社
 杉山正明 [1997]『遊牧民から見た世界史』日本經濟新聞社
 鈴木俊 [1936]『敦煌発見唐代戸籍と均田制』『史学雑誌』47-7 (同 [1980] 所収)
 —— [1950]『旧唐書食貨志の史料系統について』『史淵』45
 —— [1980]『均田, 租庸調制度の研究』刀水書房
 鈴木靖民編 [2001]『特集 九世紀の東アジアと交流』『アジア遊学』26
 砂山稔 [1990]『隋唐道教思想史研究』平河出版社
 齊東方 [1999]『唐代金銀器研究』中国社会科学出版社
 妹尾達彦 [1982]『唐代河東池塩の生産と流通——河東塩税機關の立地と機能』『史林』65-6
 —— [1999]『都市の生活と文化』谷川道雄他編『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
 —— [1999]『中華の分裂と再生』『(新版) 岩波講座世界歴史』9
 —— [2001]『長安の都市計画』講談社選書メチエ
 關尾史郎 [1988-99]『トルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究——條記文書の古文書学的分析を中心として(1)~(9)』新潟大学人文学部『人文科学研究』74~75, 78, 81, 83~84, 86, 98~99
 —— [1998]『西域文書からみた中国史』世界史リブレット, 山川出版社
 全漢昇 [1944]『唐宋帝国与運河』商務印書館 (同 [1976] 所収)
 —— [1976]『中国經濟史研究』上, 新華研究所

- 宋家钰 [2002] 徐建新訳「明抄本北宋天聖「田令」とそれに附された唐開元「田令」の再校録」『駁台史学』115
- 曹漫之 [1989]『唐律疏議訳注』吉林人民出版社
- 高田時雄 [1988]『敦煌史料による中国語史の研究』創文社
- 編 [2002]『草創期の敦煌学』知泉書館
- 高橋繼男 [1972]『劉晏の巡院設置について』『集刊東洋学』28
- [1987-96]「新唐書食貨志記事の典拠史料覚書(1)~(5)」, (1) (3) (4) (5)は『東洋大学文学部紀要』40, 44, 46, 49, (2)は栗原益男先生古稀記念論集『中国古代の法と社会』汲古書院
- [1993]『石刻史料新編第一・二・三輯』書名・著者索引『研究年報(東洋大学アジア・アフリカ文化研究所)』28
- [2001]「近五十年來出版の中国石刻関係図書目録(稿)」『唐代史研究』4
- 田口宏二郎 [1999]「前近代中国史研究と流通」『中国史学』9
- 田中淡 [1989]『中国建築史の研究』弘文堂
- 谷川道雄 [1956]「武后朝末年より玄宗朝初年にいたる政争について」『東洋史研究』14-4
- [1970]「拓跋国家の展開と貴族制の再編」『(旧版)岩波講座世界歴史』5
- [1978]「河朔三鎮における節度使権力の性格」『名古屋大学文学部研究論集』74
- [1998 (1971)]『増補 隋唐帝国形成史論』筑摩書房
- 他編 [1997]『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院
- 張國剛主編 [1996]『隋唐五代史研究概述』天津教育出版社
- 張沢咸 [1995]『唐代工商業』中国社会科学出版社
- [1999]『隋唐時期農業』天津出版社
- 趙超 [1998]『新唐書宰相世系表集校』上・下, 中華書局
- 陳寅恪 [1943]『唐代政治史述論稿』商務印書館(同 [2001] 所収)
- [1944]『隋唐制度淵源略論稿』商務印書館(同 [2001] 所収)
- [2001]『陳寅恪集 隋唐制度淵源略論稿・唐代政治史述論稿』生活・読書・新知三聯書店
- 辻正博 [1993]「唐代流刑考」『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所
- 土屋昌明 [2002]『神仙思想——道教的生活』春秋社
- 鄧小南主編 [2003]『唐宋女性与社会』上・下, 上海辭書出版社
- 唐長孺 [1992]『魏晉南北朝隋唐史三論』武漢大学出版社
- 唐代史研究会編 [1979]『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院
- [1992]『中国の都市と農村』汲古書院
- 戸崎哲彦 [1996]『柳宗元永州山水遊記考——中国山水文学研究・其一』中文出版社
- 礪波護 [1962]「中世貴族制の崩壊と辟召制——牛李の党争を手がかりに」(同 [1986] 所収)
- [1986]『唐代政治社会史研究』同朋舎出版
- [1998]『唐の行政機構と官僚』中公文庫
- [1999]『隋唐の仏教と国家』中公文庫
- ・武田幸男 [1997]『世界の歴史6 隋唐帝国と古代朝鮮』中央公論社
- 百橋明徳 [2003]「美術史学における敦煌学百年の軌跡」『仏教芸術』271
- ・中野徹編 [1997]『世界美術大全集 東洋編 第4巻 隋・唐』小学館
- 土肥義和 [1979]「唐代均田制の給田基準攷——とくに吐魯番盆地の実例を中心に」唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院
- [1988]「敦煌発見唐・回鶻間交易関係漢文書断簡考」栗原益男先生古稀記念論集『中国古代の法と社会』汲古書院
- [1995]「唐・宋間の「社」の組織形態に関する一考察——敦煌の場合を中心に」『堀敏一先生

- 古稀記念 中国古代の国家と民衆 汲古書院
- 敦煌研究院編 [1983-2000]『敦煌遺書総目索引』中華書局
- 内藤虎次郎(湖南) [1922]「概括的唐宋時代観」『歴史と地理』9-5 (同 [1969] 所収)
- [1969]『内藤湖南全集』8, 筑摩書房
- 内藤みどり [1988]『西突厥史の研究』早稲田大学出版部
- 中砂明徳 [1993]「唐代の墓葬と墓誌」礪波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所
- [1994]「中世人から近世人へ——唐宋時代の士人の位置」『古代文化』46-11
- 中田薫 [1926-64]『法制史論集』1~4, 岩波書店(1970~71年再版)
- 中田勇次郎編 [1975]『中国墓誌精華』中央公論社
- 中村治兵衛 [1995]『中国漁業史の研究 中村治兵衛著作集2』刀水書房
- 中村裕一 [1986]「隋唐五代の「致書」文書について」『武庫川女子大学史学研究室報告』5 (同 [1991] 所収)
- [1991]『唐代制勅研究』汲古書院
- [2003]『隋唐王言の研究』汲古書院
- 那波利貞 [1974]『唐代社会文化史研究』創文社
- 仁井田陞 [1933]『唐令拾遺』東方文化学院(東京大学出版会, 1964年復刊)
- [1957]「唐の律令および格の新資料——スタイン敦煌文献」『東洋文化研究所紀要』13 (同 [1958-64] 所収)
- [1958-64]『中国法制史研究』1~4, 東京大学出版会(1980年再版)
- [1983 (1937)]『唐宋法律文書の研究』第15章戸籍, 第6節戸籍に見える給田制, 東京大学出版会
- ・牧野巽 [1978]「故唐律疏議製作年代考」『訳註日本律令』1, 東京堂出版
- , 池田温編 [1997]『唐令拾遺補』東京大学出版会
- 西嶋定生 [1947]「碾礎の彼方——華北農業における二年三毛作の成立」『歴史学研究』125 (同 [1966] 所収)
- [1959]「吐魯番出土文書より見たる均田制の施行状態」西域文化研究会編『西域文化研究』2, 法蔵館(同 [1966] 所収)
- [1966]『中国経済史研究』東京大学出版会
- [1983]『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
- [2002]『西嶋定生 東アジア史論集 第3巻 東アジア世界と冊封体制』岩波書店
- , 李成市編 [2000]『古代東アジア世界と日本』岩波現代文庫
- 西村元佑 [1959]「唐代吐魯番における均田制の意義」西域文化研究会編『西域文化研究』2, 法蔵館(同 [1968] 所収)
- [1968]『中国経済史研究』東洋史研究会
- 西脇常記 [2000]『唐代の思想と文化』創文社
- [2002]『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都大学学術出版会
- 訳註 [1989]『史通内篇』東海大学出版会
- 訳註 [2002]『史通外篇』東海大学出版会
- 布目潮瀧 [1968]『隋唐史研究——唐朝政權の形成』東洋史研究会
- [1975]『隋の煬帝と唐の太宗』清水書院
- 羽田亨 [1953]「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集』上, 東洋史研究会
- 浜口重国 [1930]「府兵制度より新兵制へ」『史学雑誌』41-11~12 (同 [1966b] 所収)
- [1934]「唐の玄宗朝に於ける江淮上供米と地税との関係」『史学雑誌』45-1~2 (同 [1966b] 下, 所収)

- [1966a]『唐王朝の賤人制度』東洋史研究会
 —— [1966b]『秦漢隋唐史の研究』上・下、東京大学出版会
 濱田耕策 [2000]『渤海国興亡史』吉川弘文館
 林俊雄 [1992]『ウイグルの対唐政策』『創価大学人文論集』4
 原田種成 [1978-79]『貞観政要』上・下、明治書院新釈漢文大系
 原田淑人 [1920]『唐代の服飾』本文篇・図版・索引篇、東洋文庫 (1970年再版)
 —— [1987 (1963)]『古代人の化粧と装身具』刀水書房
 日野開三郎 [1974-75, 77]『唐代祖調唐の研究』I 色額篇・II 課輸篇上・III 課輸篇下、汲古書院
 —— [1980 (1942)]『支那中世の軍閥』日野開三郎東洋史学論集 1, 三一書房
 —— [1981]『日野開三郎 東洋史学論集 第3巻 唐代兩税法の研究 前篇』三一書房
 —— [1982]『日野開三郎 東洋史学論集 第4巻 唐代兩税法の研究 本篇』三一書房
 —— [1986]『唐代先進地帯の荘園』汲古書院
 —— [1992 (1968)]『日野開三郎東洋史学論集 第17~18巻 唐代邸店の研究』正・続、三一書房
 —— [1996]『唐末混乱史稿』日野開三郎 東洋史学論集 第19巻 唐末混乱史考』三一書房
 平岡武夫 [1998]『白居易——生涯と歳時記』朋友書店
 ——編 [1954-64]『唐代研究のしおり』全12冊、京都大学人文科学研究所 (同朋舎出版, 1985年再版)
 平田陽一郎 [2002]『唐代兵制=府兵制の概念成立をめぐる』『史観』147
 深谷憲一訳 [1990]『入唐求法巡礼行記』中公文庫
 福永光司 [1987]『道教思想史研究』岩波書店
 藤善眞澄 [2000 (1966)]『安祿山』中公文庫
 —— [2002]『道宣伝の研究』京都大学学術出版会
 —— [2004]『隋唐時代の仏教と社会——弾圧の狭間にて』白帝社
 船越泰次 [1996]『唐代兩税法研究』汲古書院
 古瀬奈津子 [2003]『遣唐使の見た中国』吉川弘文館
 古畑徹 [1998]『唐会要』の流伝に関する一考察』『東洋史研究』57-1
 —— [2003]『戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察』『東北大学東洋史論集』9
 北京大学中国中古史研究中心編 [1982-90]『敦煌吐魯番文獻研究論集』1~5輯、中華書局・北京大学出版社
 堀敏一 [1957]『黄巢の叛乱』『東洋文化研究所紀要』13 (同 [2002] 所収)
 —— [1960]『藩鎮親衛軍の権力構造』『東洋文化研究所紀要』20 (同 [2002] 所収)
 —— [1975]『均田制の研究』岩波書店
 —— [1987]『中国古代の身分制——良と賤』汲古書院
 —— [1993]『中国と古代東アジア世界』岩波書店
 —— [1996]『中国古代の家と集落』汲古書院
 —— [2002]『唐末五代変革期の政治と経済』汲古書院
 前嶋信次 [1958-59]『タラス戦考』『史学』31-1~4, 32-1 (同 [1971] 所収)
 —— [1971]『東西文化交流の諸相』同刊行会
 前島佳孝 [1999]『西魏・八柱国の序列について——唐初編纂勅撰正史に於ける唐皇祖の記述様態の一事例』『史学雑誌』108-8
 増井経夫 [1966]『史通——唐代の歴史観』平凡社
 松田壽男 [1970]『古代天山の歴史地理学的研究 (増補版)』早稲田大学出版部
 松本伸之 [2000]『唐代金銀器の諸相——1950年代から1999年までの発掘資料をめぐる』『東京国

- 立博物館紀要』35
 松本肇 [2000]『柳宗元研究』創文社
 松本保宣 [2001]『唐宣宗朝の聴政』『東洋学報』83-3
 —— [2002]『唐文宗皇帝の聴政制度改革について——開成年間を中心に』『古代文化』54-7
 丸橋充拓 [1996]『唐後半の北辺財政一度支系諸司を中心に』『東洋史研究』55-1
 —— [2001]『唐宋変革』史の近況から』『中国史学』11
 丸山宏 [1999]『民間信仰の形成』(新版) 岩波講座世界歴史』9 (同 [2004] 所収)
 —— [2004]『道教儀礼文書の歴史的研究』汲古書院
 水谷真成 [1999 (1983-84)]『大唐西域記』平凡社東洋文庫
 宮崎市定 [1992a (1965)]『宮崎市定全集2 東洋史』岩波書店
 —— [1992b (1965)]『隋の煬帝』『宮崎市定全集7 六朝』岩波書店
 —— [1993a (1968)]『大唐帝国』『宮崎市定全集8 唐』岩波書店
 —— [1993b (1973)]『アジア史概説』『宮崎市定全集18 アジア史』岩波書店
 —— [1993c (1977-78)]『宮崎市定全集1 中国史』岩波書店
 村川行弘監修、大阪経済法科大学・北京大学考古系編 [2000]『7・8世紀の東アジア——東アジアにおける文化交流の再検討』大阪経済法科大学出版部
 護雅夫 [1967]『突厥と隋・唐兩王朝』同『古代トルコ民族史研究』1, 山川出版社
 —— [1976]『古代遊牧帝国』中公新書
 森野豊 [2002]『唐前半期河北地域における非漢族の分布と安史軍淵源の一形態』『唐代史研究』5
 森安孝夫 [1984]『吐蕃の中央アジア進出』『金沢大学文学部論集 (史学科篇)』4
 —— [1991]『ウイグル=マンチ教史の研究』大阪大学文学部
 —— [2000]『河西滯義軍節度使の朱印とその編年』『内陸アジア言語の研究』15
 —— [2002]『ウイグルから見た安史の乱』『内陸アジア言語の研究』17
 家島彦一 [1991]『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店
 —— [1993]『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社
 安田二郎 [2003]『六朝政治史の研究』第2章西晋武帝好色改、京都大学学術出版会
 藪内清 [1989 (1944)]『増訂 隋唐曆法史の研究』臨川書店
 ——編 [1998 (1963)]『中国中世科学技術史の研究』朋友書店
 山口瑞鳳 [1983]『吐蕃王国成立史研究』岩波書店
 山崎崑士 [2003]『唐開元二十五年田令の復原から唐代永業田の再検討へ——明抄本天聖令をもとに』『洛北史学』5
 山下将司 [2002]『唐初における「貞観氏族志」の編纂と「八柱国家」の誕生』『史学雑誌』111-2
 山田俊 [1999]『唐初道教思想史研究』『太玄真一本際経』の成立と思想』平楽寺書店
 山田信夫 [1989]『北アジア遊牧民族史研究』東京大学出版会
 山根清志 [1982]『唐の「百姓」身分について』『社会経済史学』47-6
 山根直生 [2004]『唐宋政治史研究に関する試論——政治過程論、国家統合の地理的様態から』『中国史学』14
 山本達郎 [1977-78]『敦煌発見の籍帳にみえる「自田」』『東方学』53, 56
 楊遠 [1982]『唐代的鉞産』台湾学生書局
 吉岡眞 [1998]『現存唐代墓誌研究——総合目録の作成』平成8年度~平成9年度科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 研究成果報告書
 —— [2004]『影印・初公刊、羅振玉 (撰輯)『芒洛冢墓遺文』五編 (全) 六巻——(1): 巻1・2』『福大史学』76/77
 吉川忠夫編 [2000]『京都大学人文科学研究所研究報告 唐代の宗教』朋友書店

- ライシャワー, E. O. [1999 (原書 1978)] 田村完誓訳『円仁——唐代中国への旅』講談社学術文庫
 ライト, アーサー [1982 (原書 1978)] 布目潮風・中川努訳『隋代史』法律文化社
 李錦繡 [1995, 2001]『唐代財政史稿』上巻 3冊・下巻 2冊, 北京大学出版社
 李成市 [1997]『東アジアの王権と交易』青木書店
 —— [2000]『東アジア文化圏の形成』世界史リブレット, 山川出版社
 李伯重 [1990]『唐代江南農業的發展』農業出版社
 李斌城他編 [1998]『隋唐五代社会生活史』中国社会科学出版社
 李令福 [1999] 張樺訳『華北平原における二年三熟制の成立時期』『日中文化研究』14, 勉誠出版
 律令研究会編 [1979-96]『訳註日本律令』5~8『唐律疏議訳注篇』東京堂出版
 劉俊文 [1996]『唐律疏議箋解』上・下, 中華書局
 呂思勉 [1959]『隋唐五代史』上・下, 中華書局 (上海古籍出版社, 新版 1984年)
 渡辺信一郎 [1990]『唐代後半期の地方財政——州財政と京兆府財政を中心に』『中国史像の再構成』
 II 中国専制国家と社会統合』文理閣
 —— [1996]『天空の玉座——中国古代帝国の朝政と儀礼』柏書房
 —— [2003]『中国古代の王権と天下秩序——日中比較史の視点から』校倉書房
 渡邊孝 [1993]『中唐期における「門閥」貴族官僚の動向——中央枢要官職の人的構成を中心に』
 『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院
 —— [1995]『魏博と成徳——河朔三鎮の権力構造についての再検討』『東洋史研究』54-2
- Giles, L. (ed.) [1957] *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, London.
 Pulleyblank, E. G. [1955] *The Background of the Rebellion of An Lu-shan*, Oxford: Oxford University Press.
 Reischauer, E. O. [1955] *Ennin's Diary, the Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law*, New York: Ronald Press Co.
 Soymié, M. et al. (eds.) [1970-2001] *Catalogue des manuscrits chinois de Touen-houang*, vol. I, vol. III, vol. IV, vol. V, vol. VI, Paris: École française d'Extrême-Orient
 Yamamoto, T. et al. (eds.) [1978-2001] *Tunhuang and Turfan Documents: Concerning Social and Economic History*, I. Legal Text, II. Census Registers, III. Contracts, IV. She Associations and Related Documents, V. Supplement, Tokyo: Toyo Bunko.

第5章 五代・宋

- 青山定雄 [1951]『五代宋における江西の新興官僚』『和田清博士還暦記念東洋史論叢』講談社
 —— [1958]『唐宋地方誌目録及び資料考証』『横浜市立大学紀要』92
 —— [1963]『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館 (1969年再版)
 —— [1963, 65, 67]『宋代における華北官僚の系譜について』『聖心女子大学論叢』21, 25, 『中央大学文学部紀要』45・史学科 12
 —— [1974, 77]『宋代における華南官僚の系譜について I・II・III』, Iは『中央大学文学部紀要』72・史学科 19, 1974年, IIは宇野哲人先生白寿記念会編『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』1974年, IIIは『江上波夫教授古稀記念論集・歴史篇』山川出版社, 1977年
 —— [1976]『北宋を中心とする士大夫の起家と生活倫理』『東洋学報』57-1/2
 赤城隆治・佐竹靖彦編 [1987]『宋元官箴総合索引』汲古書院

- 阿部肇一 [1986]『増訂 中国禅宗史の研究——政治社会史的考察』研文出版
 天野元之助 [1962]『中国農業史研究』御茶の水書房 (1979年増補版)
 荒木敏一 [1969]『宋代科挙制度研究』東洋史研究会
 ——・佐伯富編 [1950]『官箴目次総合索引』京都大学東洋史研究会油印本
 ——・米田賢次郎編 [1967]『資治通鑑胡注地名索引』附載「宋代疆域図」人文科学会
 伊井春樹 [1996]『成尋の入宋とその生涯』吉川弘文館
 池田誠 [1951]『均産一揆の歴史的意義』『歴史学研究』152
 石井修道 [1987]『宋代禅宗史の研究』大東出版社
 石川重雄編 [1995]『宋元釈語語彙索引』汲古書院
 石田幹之助 [1945]『南海に関する支那史料』生活社
 —— [1985-86]『石田幹之助著作集』全4巻, 六興出版
 伊原弘 [1981]『宋代の浙西における都市士大夫』『集刊東洋学』45
 —— [1985]『宋代の士大夫覚え書——あらたな問題の展開のために』宋代史研究会編『研究報告第2集 宋代の社会と宗教』汲古書院
 —— [1987]『宋代を中心としてみた都市研究概論』『中国——社会と文化』2
 —— [1988]『中国中世都市紀行——宋代の都市と都市生活』中公新書
 —— [1991]『中国開封の生活と歳時——描かれた宋代の都市生活』山川出版社
 —— [1993a]『蘇州』講談社現代新書
 —— [1993b]『中国人の都市と空間』原書房
 —— [1994]『水滸伝を読む』講談社現代新書
 —— [1995]『宋代中国を旅する』NTT出版
 ——・梅村坦 [1997]『世界の歴史7 宋と中央ユーラシア』中央公論社
 ——・小島毅編 [2001]『知識人の諸相——中国宋代を基点として』勉誠出版
 ——編 [2003]『「清明上河図」をよむ』勉誠出版
 今堀誠二 [1995]『中国史の位相』勁草書房
 入矢義高・梅原郁訳注 [1983]『東京夢華録——宋代の都市と生活』岩波書店 (1993年再版。平凡社東洋文庫, 1996年 [平凡社本には元刊本の写真版は収載されていない])
 宇都宮清吉・内藤戊申共編 [1938]『冊府元龜奉使部外臣部索引』京都: 東方文化研究所
 幼方直吉・福島正夫編 [1974]『中国の伝統と革命2 仁井田陞集』平凡社
 梅原都 [1966]『文天祥』人物往来社
 —— [1970]『王安石の新政』佐伯富他『世界歴史 第9冊・中世3 東アジア世界の展開』I, 岩波書店
 —— [1977]『図説中国の歴史5 宋王朝と新文化』講談社
 —— [1983]『宋代の救済制度——都市の社会史によせて』中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房
 —— [1985]『宋代官僚制度研究』同朋舎出版
 ——編 [1978]『統資通鑑長編人名索引』同朋舎
 ——編 [1979]『東京夢華録夢梁録等語彙索引』京都大学人文科学研究所
 ——編 [1983]『建炎以来繫年要録人名索引』同朋舎
 ——編 [1984]『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所
 ——編 [1989]『統資通鑑長編語彙索引』同朋舎
 ——編 [1990]『慶元条法事類語彙索引』京都大学人文科学研究所
 ——編 [1993]『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所
 ——編 [1996]『前近代中国の刑罰』京都大学人文科学研究所

- 編 [2002]『訳注 中国近世刑法志』上冊(「旧五代史刑法志」「宋史刑法志」「遼史刑法志」「金史刑法志」)創文社
- 訳 [1986]『宋名臣言行録』講談社
- 訳注 [1986]『名公書判清明集』同朋舎出版
- 訳注 [2000]『夢梁録』全3冊,平凡社東洋文庫
- 王雲海 [1986]『宋会要輯稿考校』上海古籍出版社
- 王瑞来 [2001]『宋代の皇帝権力と士大夫政治』汲古書院
- 王德毅編著 [1978]『宋会要輯稿人名索引』新文豊出版公司
- 王麗萍 [2002]『宋代の中日交流史研究』勉誠出版
- 汪向栄・夏応元編 [1984]『中日関係史資料匯編』中華書局
- 大澤正昭 [1993]『陳旉農書の研究』農山漁村文化協会
- [1996]『唐宋変革期農業社会史研究』汲古書院
- [2005]『唐宋時代の家族・婚姻・女性——婦は強く』明石書店
- 編著 [1996]『主張する〈愚民〉たち』角川書店
- 編訳 [1991-95, 2000, 02, 05]『名公書判清明集』「懲悪門(1)~(5)」「人品門(上)(下)」「人倫門」訳注稿,清明集研究会
- 岡崎精郎 [1972]『タングート古代史研究』東洋史研究会
- 小笠原正治 [1954-55]『宋代弓箭手の研究』東京教育大学文学部東洋史学研究室『東洋史学論集』2, 4, 不昧堂書店
- 小笠原宣秀 [1963]『中国近世浄土教史の研究』百華苑
- 岡田宏二 [1993]『中国華南民族社会史研究』汲古書院
- 尾形勇・岸本美緒他編 [1994-]『歴史学事典』全15巻・別巻1, 弘文堂(2005年現在, 12巻刊行済み)
- 小川貫弑 [1964]『大蔵経』百華苑
- [1973]『佛教文化史研究』永田文昌堂
- 小川環樹訳 [2001]『呉船録・攬轡録・膠鸞録』平凡社東洋文庫
- 愛宕元 [1974]「五代宋初の新興官僚」『史林』57-4
- [1991]『中国の城郭都市』中公新書
- 愛宕松男 [1969]『世界の歴史11 アジアの征服王朝』河出書房新社
- [1987]『愛宕松男東洋史学論集1 中国陶瓷産業史』三一書房
- 小野寺郁夫 [1967]『王安石』人物往来社
- 何竹淇編 [1976]『南宋農民戦争史料彙編』上・下編(北宋・南宋), 全4冊, 中華書局
- 何忠礼 [2004]『中国古代史史料学』上海古籍出版社
- 郭声波・王蓉貴編 [2000]『新旧五代史地名族名索引』四川辞書出版社
- 郭黎安編著 [2003]『宋史地理志匯釈』安徽教育出版社
- 加藤繁 [1925-26]『唐宋時代に於ける金銀の研究』東洋文庫
- [1944]『支那経済史概説』弘文堂書房
- [1952]『支那経済史考証』上, 東洋文庫
- [1953]『支那経済史考証』下, 東洋文庫
- [1991]『中国貨幣史研究』東洋文庫
- 他訳 [1925-26]『宋史食貨志』『商学研究』(東京商科大学商学研究編輯所編)4-3, 5-1, 6-1~2
- 華東師範大学古籍研究所編 [1985]『文献通考経籍考』全2冊, 華東師範大学出版社
- 金井徳幸 [1976]『宋代の村社と仏教』『仏教史学研究』18-2
- [1979]『宋代の村社と社神』『東洋史研究』38-2

- [1980]『宋代の郷社と土地神』『中嶋敏先生古稀記念論集』上, 同編集委員会
- 河上光一 [1966]『宋代の経済生活』吉川弘文館
- [1992]『宋代塩業史の基礎研究』吉川弘文館
- 河原由郎 [1980]『宋代社会経済史研究』勁草書房
- 川村康 [1993]『宋代杖殺考』『東洋文化研究所紀要』120
- 韓振華注補 [2000]『韓振華撰集2 諸蕃志注補』香港大学亞洲研究中心
- 神田信夫・山根幸夫編 [1989]『中国史籍解題辞典』燎原書店
- 木田知生 [1994]『中国歴史人物選 司馬光とその時代』白帝社
- 衣川強 [1970]『宋代の俸給について——文臣官僚を中心として』『東方学報』41
- [1971]『官僚と俸給——宋代の俸給について統考』『東方学報』42
- [1973]『宋代の名族』『神戸商大人文論集』9-1/2
- [1977]『「開禧用兵」をめぐって』『東洋史研究』36-3
- [1989]『劉整の叛乱』『劉子健博士頌寿紀念宋史研究論集』同刊行会, 同朋舎出版
- [1994]『中国歴史人物選 朱熹』白帝社
- 編 [1974]『宋元学案・宋元学案補遺人名字別名索引』京都大学人文科学研究所
- 木宮泰彦 [1955]『日華文化交流史』富山房(1965年再版)
- 許逸民・常振国編 [1987]『中国歴代書目叢刊』第一輯, 上・下冊, 現代出版社
- 京都大学人文科学研究所・附屬東洋学文献センター(梅原郁)編 [1995]『宋会要輯稿編年索引』京都大学人文科学研究所・附屬東洋学文献センター
- 京都大学東洋史研究会編 [1954]『中国隨筆索引』日本學術振興会(朋友書店, 1972年再版)
- 金渭頭編著 [1983]『食貨史学叢書 高麗史中韓關係史料彙編』上・下冊, 食貨出版社
- 草野靖 [1962]『南宋時代淮南路の通貨問題——鉄錢文子の廃復をめぐって』『東洋学報』44-4
- [1966]『南宋行在会子の発展』『東洋学報』49-1~2
- [1985]『中国の地主経済——分種制』汲古書院
- [1989]『中国近世の寄生地主制——田面慣行』汲古書院
- 久須本文雄 [1980]『宋代儒学の禅思想研究』日進堂書店
- 熊本崇 [1987]『熙寧年間の察訪使』『集刊東洋学』58
- 栗原益男 [1968]『乱世の皇帝』桃源社(1979年再版)
- [1988]『五代宋初藩鎮年表』東京堂出版
- 桑田六郎 [1993]『南海東西交通史論考』汲古書院
- 桑原隲蔵 [1925]『歴史上より観たる南北支那』『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』(同 [1968a] 所収)
- [1935]『蒲寿庚の事蹟』岩波書店(同 [1968b] 所収。平凡社東洋文庫, 1989年)
- [1968a]『桑原隲蔵全集 第2巻 東洋文明史論叢』岩波書店
- [1968b]『桑原隲蔵全集 第5巻 蒲寿庚の事蹟・考史遊記』岩波書店
- 胡戟主編 [1997]『隋唐五代史論著目録(1982-1995)』陝西師範大学出版社
- 呉洪沢編 [1995]『宋人年譜集目 宋編宋人年譜選刊』巴蜀書社
- ・尹波主編 [2003]『宋人年譜叢刊』全12冊, 附:人名索引, 四川大学出版社
- 小岩井弘光 [1998]『宋代兵制史の研究』汲古書院
- 國際歴史学会議日本国内委員会編 [1959-85]『日本における歴史学の発達と現状』I~VI, I~Vは東京大学出版会刊, 1959, 66, 69, 76, 80年, VIは山川出版社刊, 1985年
- 編 [1989]『日本における歴史学の発達と現状VII 歴史研究の新しい波』山川出版社
- 国家図書館善本金石組編 [2003a]『宋代石刻文献全編』全4冊, 北京図書館出版社
- 編 [2003b]『隋唐五代石刻文献全編』全4冊, 北京図書館出版社
- 小島毅 [1986]『宋朝士大夫の研究をめぐって』『中国——社会と文化』1

- [1996]『中国近世における礼の言説』東京大学出版会
- 編 [1999]『アジア遊学7 宋代知識人の諸相』勉誠出版
- 小林義廣 [2000]『歐陽脩——その生涯と宗族』創文社
- 近藤一成 [1979a]「南宋初期の王安石の評価について」『東洋史研究』38-3
- [1979b]「宋代永嘉学派葉適の華夷観」『史学雑誌』88-6
- 佐伯富 [1941]『支那歴史地理叢書 王安石』富山房 (『中国史研究』第3, 同朋舎, 1977年所収。中公文庫, 1990年)
- [1943]『統資治通鑑長編目次・三朝北盟会編目録・建炎以来繫年要録目次』『東亜経済研究』第27-4
- [1969]『中国史研究』第1, 東洋史研究会
- [1971]『中国史研究』第2, 東洋史研究会
- [1987]『中国塩政史の研究』法律文化社
- 他 [1970]『世界歴史 第9冊・中世3 東アジア世界の展開』I, 岩波書店
- 編 [1941]『宋代茶法研究資料』東方文化研究所 (大空社, 1997年再版)
- 編 [1956]『職源撮要索引』東洋史研究会
- 編 [1958]『蘇東坡全集索引』叢文堂
- 編 [1959]『宋名臣言行録輯釈索引』京都大学東洋史研究室油印本
- 編 [1960]『中国隨筆雜著索引』東洋史研究会
- 編 [1961]『資治通鑑索引』東洋史研究会
- 編 [1963]『宋史職官志索引』東洋史研究会 (同朋舎出版部, 1974年再版)
- 編 [1967]『東洋の歴史 第6冊 宋の新文化』人物往来社
- 編 [1970]『宋人文集索引』東洋史研究会
- 編 [1977]『宋史刑法志索引』台湾学生書局
- 編 [1978]『宋史兵志索引』台湾華世出版社
- 編 [1979]『宋史河渠志索引』省心書房
- 編 [1982]『宋史選舉志索引』同朋舎出版
- 編 [1991]『元豊官志索引』東洋文庫
- 佐竹靖彦 [1973-74, 77]『『作邑自箴』訳注稿(1)(2)(3)』『岡山大学法文学部学術紀要』33, 35, 37
- [1990]『唐宋変革の地域的研究』同朋舎出版
- [1992]『梁山泊』中公新書
- [1993]『『作邑自箴』の研究』『人文学報 (歴史学)』238
- 他編 [1996]『中国史学の基本問題3 宋元時代史の基本問題』汲古書院
- 佐藤圭四郎 [1981]『イスラーム商業史の研究』同朋舎出版
- 施廷鏞編撰 [2003]『中国叢書綜録続編』北京図書館出版社
- ジェルネ, J. [1990] 栗本一男訳『中国近世の百万都市——モンゴル襲来前夜の杭州』平凡社
- 四川大学古籍整理研究所編 [1990]『現存宋人別集版本目録』巴蜀書社
- 滋賀秀三 [1966]『仁井田陸博士の『中国法制史研究』を讀みて』『国家学会雑誌』80-1/2
- [1967]『中国家族法の原理』創文社 (1976年再版)
- 編 [1993]『中国法制史 基本資料の研究』東京大学出版会
- 重松俊章 [1931a]「宋代均産一揆とその系統」『史学雑誌』42-8
- [1931b]「唐宋時代の弥勒教匪」『史淵』3
- 斯波義信 [1968]『宋代商業史研究』風間書房 (1979年再版)
- [1974]「中国都市をめぐる研究概況」『法制史研究』23
- [1988]『宋代江南経済史の研究』汲古書院 (2001年訂正版)

- [2002]『中国都市史』東京大学出版会
- 他編 [1997]『世界歴史大系3 中国史 五代一元』山川出版社
- 島居一康 [1970]「王小波・李順の乱の性格」『東洋史研究』29-1
- [1993]『宋代税政史研究』汲古書院
- 島津草子 [1959]『成尋阿闍梨母集・參天台五台山記の研究』大蔵出版
- 清水茂 [1962]『中国詩人選集 第二集4 王安石』岩波書店
- 上海古典文学出版社編輯部編 [1956]『東京夢華録 外四種』上海古典文学出版社
- 上海図書館編 [1982]『中国叢書綜録』全3冊, 上海古籍出版社
- 朱士嘉編 [1963]『宋元方志伝記索引』中華書局 (上海古籍出版社, 1986年再版)
- 祝尚書 [1999]『宋人別集叙録』全2冊, 中華書局
- 昌彼得・王徳毅・程元敏・侯俊徳編 [1974-76]『宋人伝記資料索引』全6冊, 鼎文書局
- 商務印書館編 [1937]『十通索引』商務印書館 (重版もある)
- 沈治宏・王蓉貴編撰 [1997]『中国地方志 宋代人物資料索引』全4冊, 四川辞書出版社
- ・——編撰 [2002]『中国地方志 宋代人物資料索引続編』全4冊, 四川辞書出版社
- 鈴木俊・西嶋定生編 [1957]『中国史の時代区分』東京大学出版会
- 鈴木哲雄 [1985]『唐五代禅宗史』山喜房仏書林
- 周藤吉之 [1950]『社会構成史体系 宋代官僚制と大土地所有』日本評論社
- [1954]『中国土地制度史研究』東京大学出版会
- [1956]『東洋史料集成』平凡社 (『五代・宋代』の「史料」解説部分)
- [1962]『宋代経済史研究』東京大学出版会
- [1965]『唐宋社会経済史研究』東京大学出版会
- [1969]『宋代史研究』東洋文庫
- [1980]『高麗朝官僚制の研究——宋制との関連において』法政大学出版局
- [1992]『宋・高麗制度史研究』汲古書院
- 他 [1957]『世界史大系8 東アジアII』誠文堂新光社
- ・中嶋敏編著 [1974]『中国の歴史5 五代・宋』講談社 (『五代と宋の興亡』講談社学術文庫, 2004年改題再版)
- 蘇金源・李春圃編 [1963]『宋代三次農民起義史料彙編』中華書局
- 曾棗莊・劉琳主編 [1988-]『全宋文』既刊50冊 (1988年6月~1994年7月), 巴蜀書社
- 宋衍申主編 [1998]『兩五代史辞典』山東教育出版社
- 宋晞編 [1983]『宋史研究論文と書籍目録(増訂本)』中国文化大学出版社
- [2003]『宋史研究論文と書籍目録続編』中国文化大学出版社
- 宋史提要編纂協力委員会編 [1957, 59, 70]『宋代研究文献目録』『同補編』『同III篇』東洋文庫
- 編 [1961] 青山定雄編纂『宋代研究文献提要』東洋文庫 (1974年再版)
- 編 [1967]『宋代史年表 (北宋)』東洋文庫
- 編 [1968]『宋人伝記索引』東洋文庫
- 編 [1974]『宋代史年表 (南宋)』東洋文庫
- 宋代史研究会編 [1983]『研究報告第1集 宋代の社会と文化』汲古書院
- 編 [1985]『研究報告第2集 宋代の社会と宗教』汲古書院
- 編 [1988]『研究報告第3集 宋代の政治と社会』汲古書院
- 編 [1993]『研究報告第4集 宋代の知識人——思想・制度・地域社会』汲古書院
- 編 [1995]『研究報告第5集 宋代の規範と習俗』汲古書院
- 編 [1998]『研究報告第6集 宋代社会のネットワーク』汲古書院
- 編 [2001]『研究報告第7集 宋代人の認識——相互性と日常空間』汲古書院

- 曾我部静雄 [1940]『開封と杭州』富山房
 — [1941]『宋代財政史』生活社 (大安, 1966年再版)
 — [1943]『宋代軍隊の入墨について』『支那政治習俗論攷』筑摩書房
 — [1949]『日宋金貨幣交流史』宝文館
 — [1951]『紙幣発達史』印刷庁
 — [1963]『中国及び古代日本における郷村形態の変遷』吉川弘文館
 — [1974]『南宋の水軍』『宋代の効用兵』『唐宋の軍隊の編成名, 都と指揮について』『宋代政経史の研究』吉川弘文館
 — [1976]『中国社会経済史の研究』吉川弘文館
 高雄義堅 [1952]『中国仏教史論』平楽寺書店
 — [1975]『宋代仏教史の研究』百華苑
 高島俊男 [1987]『水滸伝の世界』大修館書店
 高橋弘臣 [2000]『元朝貨幣政策成立過程の研究』東洋書院
 高橋芳郎 [2001]『宋一清身分制の研究』北海道大学図書刊行会
 — [2002]『宋代中国の法制と社会』汲古書院
 谷川道雄 [1976]『中国史研究の新しい課題——封建制の再評価問題にふれて』同『中国中世社会と共同体』国書刊行会 (1989年再版)
 — 編 [1993]『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所
 — ・森正夫編 [1979]『中国民衆叛乱史 2 宋～明中期』平凡社東洋文庫
 田村實造 [1964]『中国征服王朝の研究』上, 東洋史研究会
 丹喬二 [1975]『北宋末の方臘の乱に関する基礎的考察』『日本大学人文科学研究所研究紀要』17
 — [1980]『宋初四川の王小波・李順の乱について』『東洋学報』61-3/4
 譚其驥主編 [1982]『中国歴史地図集 6 宋遼金時期』地図出版社 (その後, たびたび重版)
 笠沙雅章 [1967]『蘇東坡』人物往来社
 — [1971]『北宋士大夫の徙居と買田——主に東坡尺牘を資料として』『史林』54-2
 — [1974a]『方臘の乱と喫菜事魔』『東洋史研究』32-4 (同 [1982b] 所収)
 — [1974b]『喫菜事魔について』『青山博士古稀記念宋代史論叢』同刊行会, 省心書房 (同 [1982b] 所収)
 — [1975]『宋の太祖と太宗』清水書院
 — [1982a]『宋代官僚の寄居について』『東洋史研究』41-1
 — [1982b]『中国仏教社会史研究』同朋舎出版 (朋友書店, 2002年増訂版)
 — [1983]『五代・宋』島田虔次他編『アジア歴史研究入門』第1巻・中国I, 同朋舎出版
 — [1995]『中国歴史人物選 范仲淹』白帝社
 — [2000]『宋元仏教文化史研究』汲古書院
 — 編 [1994]『アジアの歴史と文化 3 中国史・近世I』同朋舎出版
 千葉熒 [1967]『韓侂胄』『山崎先生退官記念東洋史学論集』山崎先生退官記念会
 中国史研究会 [1983]『中国史像の再構成——国家と農民』文理閣
 中国社会科学院歴史研究所魏晉隋唐史研究室 [1985]『隋唐五代史論著目録』江蘇古籍出版社
 張希清・王秀梅主編 [1998]『官典』全4冊, 吉林人民出版社
 張興武 [2003]『五代芸文考』巴蜀書社
 張国剛主編 [1996]『隋唐五代史研究概述』天津教育出版社
 張星烺編注 [2003 (1930)]『中西交通史料匯編』全4冊 (輔仁大学図書館, 1930年初版。中華書局, 1977年, 2003年新版 (朱傑勤校訂))
 張東翼編著 [2000]『宋代歴史資料集録』ソウル大学出版部

- 張万起編 [1980]『新旧五代史人名索引』上海古籍出版社
 陳生璽輯 [1996]『政書集成』全10冊, 中州古籍出版社
 陳乃文・陳燮章輯 [1989-90]『藏族編年史料集』(一), (二)上・下冊, 民族出版社
 陳智超 [1995]『解開〈宋会要〉之謎』社会科学文献出版社
 — 他 [1983]『中国古代史史料学』第6章『宋史史料』北京出版社
 — 整理 [1988]『宋会要輯稿補編』全国図書館文献縮微複製中心
 陳素素 [2002]『宋史芸文志考証』廣東人民出版社
 塚本善隆 [1974]『成尋の入宋旅行記に見る日中仏教の消長——天台山の巻』『塚本善隆著作集 6 日中仏教交渉史研究』
 — [1975]『塚本善隆著作集 5 中国近世仏教史の諸問題』大東出版社
 寺地遵 [1988]『南宋初期政治史研究』溪水社
 — [1991]『日本における宋代史研究の基調』『中国史学』1
 寺田剛 [1965]『宋代教育史概説』博文社
 屠友祥校注 [1996]『宋明清小品文集輯注』『嶺外代答』上海遠東出版社『宋明清小品文集輯注』2
 陶晋生・王民信編 [1974]『李濂統資治通鑑長編宋遼關係史料輯録』全3冊, 中央研究院歷史語言研究所
 陶敏・李一飛 [2001]『中国古典文学史料研究叢書 隋唐五代文学史料学』中華書局
 鄧之誠注 [1959]『東京夢華錄注』商務印書館 (中華書局, 1982年再版)
 東京教育大学東洋史学研究室編 [1953-59]『宋代社会経済史研究補助資料』東京教育大学文学部東洋史学研究室アジア史研究会油印本
 東洋史研究会編 [1954]『文献通考五種総目録』東洋史研究会
 東洋史研究室編 [1950]『職官分紀目次』京都大学東洋史研究室油印本
 東洋史研究論文目録編集委員会編 [1967]『日本における東洋史論文目録』I～IV, 日本學術振興会
 東洋文庫・宋代史研究委員会編 [1970]『宋会要研究備要——目録』東洋文庫
 — ・ — 編 [1982]『宋会要輯稿 食貨索引 人名・書名篇』東洋文庫
 — ・ — 編 [1985]『宋会要輯稿 食貨索引 年月日・詔勅篇』東洋文庫
 — ・ — 編 [1995]『宋会要輯稿 食貨索引 職官篇』東洋文庫
 徳田隆訳 [1999]『中国人の死体観察学——『洗冤集録』の世界』雄山閣出版
 礪波護 [1966]『馮道』人物往来社 (中公文庫, 1988年)
 — [1968]『宋代士大夫の成立』『中国文化叢書 8 文化史』大修館書店
 外山軍治 [1939]『支那歴史地理叢書 岳飛と秦檜——主戦論と講和論』富山房
 — [1964]『金朝史研究』東洋史研究会
 鳥谷弘昭・吉田寅編 [1990]『立正大学東洋史研究資料II 五代史研究文献目録』立正大学文学部東洋史研究室
 内藤湖南 [1922]『概括的唐宋時代観』『歴史と地理』9-5 (同 [1969a] 所収)
 — [1938]『支那絵画史』弘文堂 (同 [1973] 所収。ちくま学芸文庫, 2002年)
 — [1947]『中国近世史』弘文堂 (『支那近世史』と改題して, 同 [1969b] 所収。ちくま学芸文庫, 2002年)
 — [1949]『支那史学史』弘文堂 (同 [1969c] 所収。平凡社東洋文庫, 1992年)
 — [1969a]『内藤湖南全集 第8巻 東洋文化史研究』筑摩書房
 — [1969b]『内藤湖南全集 第10巻, 筑摩書房
 — [1969c]『内藤湖南全集 第11巻, 筑摩書房
 — [1973]『内藤湖南全集 第13巻, 筑摩書房
 中嶋敏 [1988]『東洋史学論集——宋代史研究とその周辺』汲古書院

- [2002]『東洋史学論集続編』汲古書院
- 編 [1992]『宋史選挙志訳注』1, 東洋文庫
- 編 [1996]『宋史選挙志訳注』2, 東洋文庫
- 編 [1999a]『宋史食貨志訳注』2, 東洋文庫
- 編 [1999b]『宋史食貨志訳注』3, 東洋文庫
- 編 [2000]『宋史選挙志訳注』3, 東洋文庫
- 編 [2002a]『宋史食貨志訳注』4, 東洋文庫
- 編 [2002b]『宋史食貨志訳注(一)~(四)語彙索引』東洋文庫
- 編 [2004]『宋史食貨志訳注』5, 東洋文庫
- 長瀬守 [1983]『宋元水利史研究』国書刊行会
- 中村治兵衛 [1992]『中村治兵衛著作集1 中国シャーマニズムの研究』刀水書房
- [1995]『中村治兵衛著作集2 中国漁業史の研究』刀水書房
- 編 [1990]『増補中国聚落史関係研究文献目録』唐代研究会編『中国聚落史の研究』刀水書房
- 中村喬 [2000]『宋代の料理と食品』中国芸文研究会, 朋友書店(発売)
- 中村健寿 [1968]『王小波李順の乱における反乱集団の構成』『中国農民戦争史研究』2
- 仁井田陸 [1937]『唐宋法律文書の研究』東方文化学院東京研究所(東京大学出版会, 1983年復刻)
- [1942]『中国身分法史』東方文化学院東京研究所(東京大学出版会, 1983年再版)
- [1951]『中国の社会とギルド』岩波書店(東京大学出版会, 1989年再版)
- [1952a]『中国法制史』岩波書店(1963年増訂再版)
- [1952b]『中国の農村家族』東京大学出版会
- [1954]『中国社会の法と倫理』弘文堂(1967年再版)
- [1957]『大木文庫私記——とくに官職・公牘と民衆とのかわり』『東洋文化研究所紀要』13(幼方直吉・福島正夫編『中国の伝統と革命2 仁井田陸集』平凡社, 1974年所収)
- [1959]『中国法制史研究——刑法』東京大学出版会(1980年補訂再版)
- [1960]『中国法制史研究——土地法・取引法』東京大学出版会(1980年補訂再版)
- [1962]『中国法制史研究——奴隸農奴法・家族村落法』東京大学東洋文化研究所(1980年補訂再版)
- [1964]『中国法制史研究——法と慣習・法と道徳』東京大学出版会(1980年補訂再版)
- [1967]『中国の法と社会と歴史』岩波書店
- [1968]『東洋とは何か』東京大学出版会
- 西岡弘晃 [2004]『中国近世の都市と水利』中国書店
- 裴汝誠主編 [1992]文淵閣影印本附載の「人名・作者・篇名索引」, 上海古籍出版社
- 橋本紘治 [1974]『南宋における漕運の特殊性——北辺の軍糧調達における漕運の役割』『青山博士古稀記念宋代史論叢』同刊行会, 省心書房
- 畑地正憲 [1987]『宋代における攬載について』『日野開三郎博士頌寿記念論集——中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店
- 羽田亨監修 [1938]『東洋文化史大系4 宋元時代』誠文堂新光社
- 東一夫 [1970]『王安石新法の研究』風間書房
- [1975]『王安石——革新の先覚者』講談社
- [1980a]『王安石と司馬光』沖積舎
- [1980b]『王安石事典』国書刊行会
- [1987]『日本中・近世の王安石研究史』風間書房
- ・吉田寅編 [1971]『中国政治思想と社会政策』研究文献目録I 五代・宋『中国政治思想と社会政策』研究会

- 日野開三郎 [1942]『支那中世の軍閥』三省堂(『唐代藩鎮の支配体制』と改題し『日野開三郎東洋史学論集』第1期第1巻, 三一書房, 1980年所収)
- [1983]『日野開三郎東洋史学論集6~7 宋代の貨幣と金融(上)(下)』三一書房
- [1984]『日野開三郎東洋史学論集9~10 北東アジア国際交流史の研究(上)(下)』三一書房
- [1988]『日野開三郎東洋史学論集11 戸口問題と糶買法』三一書房
- [1990]『日野開三郎東洋史学論集16 東北アジア民族史(下)』三一書房
- 編 [1939]『東洋中世史』第3編, 平凡社
- 日比野丈夫 [1977]『中国歴史地理研究』同朋舎出版部
- 他 [1974]『世界歴史シリーズ13 中国文化の成熟』世界文化社
- 苗書梅等点校, 王雲海審訂 [2001]『宋会要輯稿・崇儒』河南大学出版社
- 平田茂樹 [1997]『世界史リブレット9 科挙と官僚制』山川出版社
- 平林文雄 [1978]『參天台五台山記 校本並に研究』風間書房
- 傅璇琮・張忱石・許逸民編撰 [1982]『唐五代人物伝記資料綜合索引』中華書局
- 馮承鈞校注 [1940]『史地小叢書 諸蕃志校注』商務印書館
- 藤枝晃 [1950]『李繼遷の興起と東西交通』『羽田博士頌寿記念 東洋史論叢』羽田博士選暦記念会
- 藤田豊八 [1932]『東西交渉史の研究・南海篇』岡書院(国書刊行会, 1974年再版)
- 藤善真澄 [1991]『関西大学東西学術研究所訳注シリーズ5 諸蕃志』附:文献目録・索引, 関西大学出版部
- 船越泰次 [1985]『宋白統通典輯本 附解題』汲古書院
- 古林森廣 [1987]『宋代産業經濟史研究』国書刊行会
- [1995]『中国宋代の社会と經濟』国書刊行会
- 北京大学南亞研究所編 [1994]『中国載籍中南亞史料匯編』上・下冊, 上海古籍出版社
- 北京図書館金石組編 [1990]『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』中州古籍出版社, 「五代十国 附:大理」1冊, 「北宋」6冊, 「南宋」2冊(第36冊~第44冊)
- 方積六・呉冬秀編撰 [1992]『唐五代五十二種筆記小説人名索引』中華書局
- 法蘭西学院漢学研究所編 [1978]『宋遼金史書籍論文目録通檢中文部分(一九〇〇至一九七五)』法蘭西学院漢学研究所「漢学通檢提要文献叢刊」5
- 朴尚得訳 [1995]『宣和奉使高麗図経』国書刊行会
- 北平図書館編 [1936]『影印宋会要輯稿縁起』北平図書館
- 堀敏一 [1953]『五代宋初における禁軍の発展』『東洋文化研究所紀要』4
- 他 [1961]『世界の歴史6 東アジア世界の変貌』筑摩書房
- 前田直典 [1948]『東アジアに於ける古代の終末』『歴史』1-4(同 [1973]所収)
- [1973]『元朝史の研究』東京大学出版会
- 牧田諦亮 [1957]『中国近世仏教史研究』平樂寺書店(一部, 『中国仏教史研究』第2, 大東出版社, 1984年所収)
- [1971]『五代宗教史研究』平樂寺書店
- 松田壽男 [1942]『漠北と南海——アジア史における沙漠と海洋』四海書房
- [1986-87]『松田壽男著作集』全6巻, 六興出版
- ・森鹿三編 [1966]『アジア歴史地図』平凡社(1985年再版)
- 三浦国雄 [1985]『王安石』集英社
- 三上次男 [1987-88]『陶磁貿易史研究』全3巻, 中央公論美術出版
- [1989]『中国陶磁史研究』中央公論美術出版
- 宮崎市定 [1930a]『王安石の更士合一策』『桑原博士選暦記念東洋史論叢』(同 [1957-78] 1, 同 [1991-94] 10所収)

- [1930b]「鄂州之役前後」『内藤博士頌寿記念史学論叢』(同 [1957-78] 1, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1931]「宋代の太学生生活」『史林』16-1, 4 (同 [1957-78] 1, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1934]「西夏の興起と青白塩問題」『東亜経済研究』18-2 (同 [1957-78] 1, 同 [1991-94] 9 所収)
- [1935]「北宋史概説」(羽田亨監修 [1938] 所収の文章を再編集したもの) (同 [1957-78] 1, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1940-41]「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」『史林』25-4, 26-1 (同 [1957-78] 2, 同 [1991-94] 19 所収)
- [1941a]「南宋政治史概説」『支那地理歴史大系 4 支那政治史』白揚社 (同 [1957-78] 2, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1941b]「南宋末の宰相賈似道」(原題「賈似道略伝」)『東洋史研究』6-3 (同 [1957-78] 2, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1943]『五代宋初の通貨問題』星野書店 (同 [1991-94] 9 所収)
- [1945a]「宋の太祖被弑説について」『東洋史研究』9-4 (同 [1957-78] 3, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1945b]「胥吏の陪備を中心として」『史林』30-1 (同 [1957-78] 3, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1946]『科学』秋田屋書店 (『科学史』として改編, 平凡社東洋文庫, 1987年。同 [1991-94] 15 所収)
- [1948a]『アジア史概説』人文書林 (学生社, 1973年増補再版。中公文庫, 1987年。同 [1991-94] 18 所収)
- [1948b]「五代史上の軍閥資本家」『人文科学』2-4 (同 [1957-78] 3, 同 [1991-94] 9 所収)
- [1948c]「宋学の論理」『東光』3 (同 [1957-78] 3, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1950]『東洋的近世』教育タイムス社 (同 [1976] 上巻, 同 [1991-94] 2 所収)
- [1952]「宋代以後の土地所有形体」『東洋史研究』12-2 (同 [1957-78] 4, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1953a]「宋代州県制度の由来とその特色」『史林』36-2 (同 [1957-78] 4, 同 [1991-94] 10 所収)
- [1953b]「宋代の士風」『史学雑誌』62-2 (同 [1957-78] 4, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1953c]「水滸伝的傷痕」『東方学』6 (同 [1957-78] 4, 同 [1991-94] 12 所収)
- [1954]「宋元時代の法制と裁判機構——元典章成立の時代的・社会的背景」『東方学報』(京都) 24 (同 [1957-78] 4, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1957-78]『アジア史研究』全5冊, 東洋史研究会, 同朋舎 (その後, 再版)
- [1962]「漢代の里制と唐代の坊制」『東洋史研究』21-3 (同 [1976] 中巻, 同 [1991-94] 7 所収)
- [1963a]「宋代官制序説——宋史職官志を如何に読むべきか」佐伯富編『宋史職官志索引』東洋史研究会 (同 [1991-94] 10 所収)
- [1963b]『科学——中国の試験地獄』中央公論社 (同 [1991-94] 15 所収)
- [1967]「宋江は二人いたか」『東方学』34 (同 [1976] 下巻, 同 [1991-94] 12 所収)
- [1971a]「部曲から佃戸へ——唐宋間社会変革の一面」『東洋史研究』29-4, 30-1 (同 [1976] 中巻, 同 [1991-94] 11 所収)
- [1971b]『中国文明選 第11巻 政治論集』朝日新聞社 (『中国政治論集』と改題, 中公文庫, 1990年。同 [1991-94] 別巻所収)
- [1972]「水滸伝——虚構のなかの史実」中公文庫 (中公文庫, 1993年。同 [1991-94] 12 所収)

収)

- [1976]『アジア史論考』全3冊, 朝日新聞社
- [1977-78]『中国史』上・下, 岩波書店 (同 [1991-94] 1 所収)
- [1981]「水滸伝と江南民屋」『文学』49-4 (同 [1991-94] 12 所収)
- [1989]「辨姦論の姦を辨ず」『劉子健博士頌寿記念宋史研究論集』同朋舎出版 (同 [1991-94] 11 所収)
- [1991-94] 佐伯富等編『宮崎市定全集』全24冊, 岩波書店
- 編 [1959]『図説世界文化史大系 第17巻 中国III』角川書店
- ・佐伯富編著 [1961]『世界の歴史 第6冊 宋と元』中央公論社
- 宮澤知之 [1998]『宋代中国の国家と経済——財政・市場・貨幣』創文社
- 村田治郎 [1981]『中国の帝都』綜芸社
- 森克己 [1948a]『日宋貿易の研究』国立書院 (同 [1975] 1 所収)
- [1948b]『続日宋貿易の研究』国立書院 (同 [1975] 2 所収)
- [1948c]『続々日宋貿易の研究』国立書院 (同 [1975] 3 所収)
- [1950]『日宋文化交流の諸問題』刀江書院 (同 [1975] 4 所収)
- [1975]『森克己著作選集』全5巻, 国書刊行会
- 柳田節子 [1982]「一九七〇年代における宋代農民戦争研究——方臘起義を中心として」『唐代史研究会編『中国歴史学界の新動向』刀水書房
- [1983]「宋・元時代」山根幸夫編『中国史研究入門』上, 山川出版社
- [1986]『宋元郷村制の研究』創文社
- [1995]『宋元社会経済史研究』創文社
- [2003]『宋代庶民の女たち』汲古書院
- 戴内清編 [1968]『宋元時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所 (朋友書店, 1997年再刊)
- 山内晋次 [2003]『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館
- 山内正博 [1970]『南宋政權の推移』『世界歴史第9冊 中世3 東アジア世界の展開』I, 岩波書店
- 山根三芳 [1996]『宋代礼説研究』淡水社
- 山本隆義 [1968]『中国政治制度の研究——内閣制度の起源と発展』東洋史研究会
- 兪如雲編 [1992]『宋史人名索引』上海古籍出版社
- 幸徹 [1967]「北宋時代東南塩の官売法の推移に就いて」『東方学』34
- 陽海清編撰 [1999]『中国叢書広録』上・下冊, 湖北人民出版社
- 楊渭生等編著 [1999-2002]『韓国研究叢書 十至十四世紀中韓關係史料彙編』上・下冊, 学苑出版社
- 楊博文校訳 [1996]『中外交通史籍叢刊 諸蕃志校訳』附: 海外地名・各国物産索引, 中華書局
- 楊武泉校注 [1999]『中外交通史籍叢刊 嶺外代答校注』附: 人名・地名・物名・雜類索引, 中華書局
- 楊翼轅編 [1994]『中国史学史資料編年 (第二冊・兩宋時期)』南開大学出版社
- 吉岡義信 [1978]『宋代黄河史研究』御茶の水書房
- 吉田清治 [1941]『北宋全盛期の歴史』弘文堂書房
- 吉田寅 [1974]『救荒活民書』と宋代の救荒政策』『青山博士古稀記念宋史史論叢』同刊行会, 省心書房
- 編 [1992]『立正大学東洋史研究資料IV 慶元条法事類諸本対校表(稿)』立正大学東洋史研究室
- ・棚田直彦編 [1972]『日本現存宋人文集目録』汲古書院
- 李華瑞 [2004]『王安石变法研究史』人民出版社
- 李国玲編纂 [1994]『宋人伝記資料索引補編』全3冊, 四川大学出版社
- 編著 [2001]『宋僧録』上・下冊, 線装書局

- 李之亮撰 [2001]『宋代郡守通考』全10冊, 巴蜀書社
 ——撰 [2003a]『宋代路分長官通考』全3冊, 巴蜀書社
 ——撰 [2003b]『宋代京朝官通考』全5冊, 巴蜀書社 (以上「宋代職官通考」三部作, 全18冊)
 劉俊文主編 [1997]『官箴書集成』全10冊, 官箴書集成編纂委員會編, 黃山書社
 劉佩等編 [1995]『二十四史中的海洋資料』海洋出版社
 劉琳・沈治宏編著 [1995]『現存宋人著述總錄』巴蜀書社
 梁天錫編著 [1996]『宋宰相表新編』國立編譯館
 論說資料保存会編 [1964-]『中国關係論說資料』第3分冊, 歴史・政治・経済分冊 (現在, 第45号まで刊行。第41号からはCD-R版も刊行)
 和田清編 [1939]『支那地方自治発達史』中華民国法制研究会 (『中国地方自治発達史』と改題して, 汲古書院, 1975年再版)
 ——編 [1942]『支那官制発達史』中央大学出版部 (『中国官制発達史』と改題して, 汲古書院, 1973年再版)
 ——編 [1960]『東洋文庫論叢第44 宋史食貨志訳註1』(1978年再版)
 渡辺敏良 [1981]『淳熙末年の建寧府——社倉米の昏類と糶糴と』『中嶋敏先生古稀記念論集』下, 記念事業会
 渡部忠世・桜井由雄編 [1984]『中国江南の稲作文化』日本放送出版協会

第6章 遼・西夏

- 愛新覺羅烏拉照春 [2004]『契丹語言文字研究』, 『遼金史与契丹女真文』ともに東亞歴史文化研究会
 荒川慎太郎・佐藤貴保編 [2003]『西夏関連研究文献目録 2002年度版』中尾正義・井上充幸編『瀾海蒼茫』総合地球環境学研究所
 井上正夫 [1996]『遼北宋間の通貨問題——太平銭偽造の経緯について』『文明のクロスロード Museum Kyushu』51
 今井秀周 [1992]『二税戸小考』『東海女子短期大学紀要』18
 —— [2000]『遼祭山儀考』『東海女子短期大学紀要』26
 今野春樹 [2003]『遼代契丹墓の研究——分布・立地・構造について』『考古学雑誌』87-3
 岩崎力 [1990]『西夏建国とタングート諸部族』『中央大学アジア史研究』14
 遠藤和男 [1990]『遼朝君主の即位儀礼について』『信大史学』15
 ——編 [2000]『契丹(遼)史研究文献目録(1892-1999)』自費出版
 王民信 [1976]『沈括熙寧使虜圖抄箋証』学海出版社
 岡崎精郎 [1959]『西夏の李元昊と禿髮令』『東方学』19
 —— [1972]『タングート古代史研究』東洋史研究会
 小川裕充・弓場紀知編 [1998]『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏』小学館
 愛宕松男 [1959]『契丹古代史の研究』東洋史研究会
 河上洋 [1993]『遼五京の外交的機能』『東洋史研究』52-2
 韓蔭晟 [2000]『党項と西夏資料匯編』全9冊, 寧夏人民出版社
 金渭頭編著 [1983]『高麗史中中韓關係史料彙編』上, 食貨出版社
 金成奎 [2000]『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院
 氣賀澤保規編 [1996]『中国仏教石経の研究——房山雲居寺石経を中心に』京都大学学術出版会
 吳天墀 [1983]『西夏史稿(増訂本)』四川人民出版社
 佐藤貴保 [2003]『西夏法典貿易関連条文訳註』森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学21

- 世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」報告書第3巻) 大阪大学大学院文学研究科
 —— [2004]『十二世紀後半における西夏と南宋の通交』『待兼山論叢』(史学篇) 38
 史金波 [1988]『西夏仏教史略』寧夏人民出版社
 ——・聶鴻音・白濱 [2000]『天盛改旧新定律令』法律出版社
 ——・白濱・吳峰雲 [1988]『西夏文物』文物出版社
 島田正郎 [1952]『遼代社会史研究』三和書房(巖南堂書店, 1978年復刊)
 —— [1978]『遼朝官制の研究』創文社
 —— [1979]『遼朝史の研究』創文社
 —— [1993]『契丹国——遊牧の民キタイの王朝』東方書店
 —— [2003]『西夏法典初探』創文社
 謝繼勝 [2002]『西夏藏伝絵画 黒水城出土西夏唐卡研究』全2巻, 河北教育出版社
 白石典之 [1994]『モンゴル部族の自立と成長の契機』『人文科学研究』(新潟大学) 86
 —— [2001]『世界の考古学 19 チンギスカンの考古学』同成社
 —— [2002]『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社
 代田貴文 [1992]『遼史』に見える「大食(国)」について』『中央大学アジア史研究』16
 曹峰・神谷正弘 [2001]『遼朝陳国公主墓出土の副葬用馬具について』『古文化談叢』46
 高井康典行 [1999]『遼の幹魯朶の存在形態』『内陸アジア史研究』14
 —— [2002a]『オールド(幹魯朶)と藩鎮』『東洋史研究』61-2
 —— [2002b]『遼の武臣の昇遷』『史滴』24
 高橋学而 [1987]『中国東北地方に於ける遼代州県城——その平面構造, 規模を中心として』岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの考古と歴史——岡崎敬先生退官記念論集』上, 同朋舎出版
 —— [1997]『遼南京(燕京)析津府の平面プランについて』『古文化談叢』37
 武田和哉 [1994]『遼朝の蕭姓と国舅族の構造』『立命館文学』537
 —— [2001]『契丹国(遼朝)の北・南院枢密使制度と南北二重官制について』『立命館東洋史学』24
 —— [2003]『契丹国(遼朝)道宗朝の政治史に関する一考察——慶陵出土の皇后哀冊の再検討』『立命館大学考古学論集』3
 —— [2005]『蕭孝恭墓誌より見た契丹国(遼朝)の姓と婚姻』『内陸アジア史研究』20
 田村實造 [1947]『遼宋交通史料注稿』『東方史論叢』1, 養徳社
 —— [1964]『中国征服王朝の研究』上, 東洋史研究会
 —— [1985]『中国征服王朝の研究』下, 同朋舎出版
 笠沙雅章 [2000]『宋元仏教文化史研究』汲古書院
 —— [2003]『黒水城出土の遼刊本について』『汲古』43
 中国国家博物館・寧夏回族自治区文化庁編 [2004]『大夏尋踪 西夏文物輯萃』中国社会科学出版社
 寺地遵 [1988]『遼朝治下の漢人大姓——玉田韓氏の場合』『広島大学東洋史研究室報告』10
 陶晋生・王民信編 [1974]『李焘統資治通鑑長編宋遼關係史料輯録』全3冊, 中央研究院歴史語言研究所
 徳永洋介 [2003]『遼金時代の法典編纂(上)』『富山大学人文学部紀要』38
 外山軍治 [1964]『金朝史研究』東洋史研究会
 長澤和俊 [1963]『西夏の河西進出と東西交通』『東方学』26
 中嶋敏 [1934]『西羌族をめぐる宋夏の抗争』『歴史学研究』1-6
 —— [1936]『西夏に於ける政局の推移と文化』『東方学報』(東京) 6
 西田龍雄 [1997]『西夏王国の言語と文化』岩波書店
 野上俊静 [1953]『遼金の仏教』平楽寺書店
 畑地正憲 [1974]『北宋・遼間の貿易と歳贈とについて』『史淵』111

- 日野開三郎 [1984] 『日野開三郎東洋史学論集 第10巻 北東アジア国際交流史の研究(下)』三一書房
- [1990] 『日野開三郎東洋史学論集 第16巻 東北アジア民族史(下)』三一書房
- 関丙彪 [1996] 「西夏・金の交聘関係に 対하여」『中央아시아研究』1
- 馮家昇 [1959 (1933)] 「遼史初校」『遼史証誤三種』中華書局
- 藤枝晃 [1950] 「李繼遷の興起と東西交通」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』同記念会
- [1951] 「遼金」東方学術協会編『中国史学入門』平安文庫
- 藤原崇人 [2003] 「遼代興宗朝における慶州僧録司設置の背景」『仏教史学研究』46-2
- 古松崇志 [2003] 「脩端「辨遼宋金正統」をめぐって——元代における『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程」『東方学報』75
- 星城夫 [1941] 「蒙古の第三回西夏侵寇について」『東洋学報』28-4
- [1944] 「蒙古勃興期における金・西夏関係」『北亞細亜学報』2
- 松木民雄 [2001] 「北京・戒台寺の諸仏塔」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』13 (2000)
- [2003] 「北京・天寧寺塔」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』15 (2002)
- 松澤(野村)博 [1979] 「西夏文・土地売買文書の書式」『東洋史苑』14/15
- [1986] 「西夏・仁宗の訳経について——甘肅省天梯山石窟出土西夏経を中心として」『東洋史苑』26/27
- 松田光次 [1975] 「遼の榷塩法について」『龍谷史壇』70
- [1976] 「遼代経済官庁の一考察」『東洋史苑』10
- [1978] 「書評「慶陵の壁画 田村實造著」」『東洋史苑』12
- [1979] 「遼朝科挙制度攷」『龍谷史壇』77
- [1982] 「遼朝漢人官僚小考——韓知古一族の系譜とその事跡」小野勝年博士頌寿記念会編『小野勝年博士頌寿記念東洋学論集』龍谷大学東洋史学研究室
- [1986] 「趙志忠と『虞廷雜記』——北宋期一婦明人の事跡」『龍谷史壇』87
- 宮崎市定 [1934] 「西夏の興起と青白塩問題」『東亞經濟研究』18-2
- [1935] 「宋と遼・西夏との関係」『世界文化史大系 宋元時代』誠文堂新光社
- 毛利英介 [2004] 「一〇七四年から七六年におけるキタイ(遼)・宋間の地界交渉発生の原因について——特にキタイ側の視点から」『東洋史研究』62-4
- 森安孝夫 [1982] 「渤海から契丹へ——征服王朝の成立」『東アジア世界における日本古代史講座7 東アジア世界の変貌と日本律令国家』学生社
- [2002] 「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17
- 山本澄子 [1951] 「五代宋初の党項民族及びその西夏建国との関係」『東洋学報』33-1
- 楊若薇 [1991] 「契丹王朝政治軍事制度研究」中国社会科学出版社
- 李錫厚 [1981] 「葉隆礼和契丹国志」『史学史研究』1981-4 (『契丹国志』点校本, 1985年所収)
- 劉鳳翥 [1983] 「《全遼文》中部分碑刻校勘」『黒龍江文物叢刊』1983-2
- 劉浦江編 [2003] 『二十世紀遼金史論著目錄』上海辭書出版社
- Кычанов, Е. И. [1968] *Очерк истории тангутского государства*, Москва.
- [1987-89] *Измененный и заново утвержденный кодекс девица царствования Небесное процветание* [1149-1169], В4-х книгах., Наука, Москва.
- Кычанов, Е. И., Нисида, Т., Аракава, С. [1999] *Каталог тангутских буддийских памятников института востоковедения российской академии наук*, Кюто.
- Samosyuk, K. [2001] "Donors" in the Tangut Painting from Khara-Khoto: Their Meaning and

- Function...", *The Tibet Journal*, 26-3/4.
- Shiba, Yoshinobu (斯波義信) [1983] "Sung Foreign Trade: Its Scope and Organization." Rossabi, M. (ed.), *China among Equals: the Middle Kingdom and its Neighbors 10th-14th Centuries*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Wittfogel, K. A. and Feng Chia-sheng (馮家昇) [1949] *History of Chinese Society Liao (907-1125)*, (Transactions of the American Philosophical Society 36), Philadelphia: The American Philosophical Society.
- 第7章 金・元
- 赤松紀彦 [1986] 「山西中南部の戯曲文物とその研究」『中国文学報』37
- 他 [2004] 「元刊雜劇の研究(1)「尉遲恭三奪梨」全訳校注」『京都府立大学学術報告 人文・社会』56
- 安部健夫 [1954] 「元時代の包銀制の考究」『東方学報』(京都) 24 (同 [1972] 所収)
- [1959] 「元代知識人と科挙」『史林』42-6 (同 [1972] 所収)
- [1972] 『元代史の研究』創文社
- 飯山知保 [2001] 「金元代華北社会研究の現状と展望」『史滴』23
- [2003a] 「金元代華北社会における在地有力者——碑刻からみた山西忻州定襄県の場合」『史学雑誌』112-4
- [2003b] 「金元代華北における州県祠廟祭祀からみた地方官の系譜——山西平遥県応潤侯廟を中心に」『東洋学報』85-1
- 井黒忍・船田善之 [2002] 「陝西・山西訪碑行報告(附:陝西・山西訪碑行現存確認金元碑目録)」『史滴』24
- 井黒忍 [2001] 「金代提刑司考——章宗朝官制改革の一側面」『東洋史研究』60-3
- [2004] 「山西洪洞県水利碑考——金天眷2年「都総管鎮国定両県水碑」の事例」『史林』87-1
- 池内功 [1977] 「李全論——南宋・金・モンゴル交戦期における一民衆反乱指導者の軌跡」『社会文化史学』14
- [1978] 「金末義軍制度の考察」『社会文化史学』16
- [1980a] 「史氏一族とモンゴルの金国経略」『中嶋敏先生古稀記念論集』上, 同記念事業会
- [1980b] 「モンゴルの金国経略と漢人世侯の成立(1)」『創立三十周年記念論文集』(四国学院大学文化学会)
- [1980c] 「モンゴルの金国経略と漢人世侯の成立(2)」『四国学院大学論集』46
- [1981a] 「モンゴルの金国経略と漢人世侯の成立(3)」『四国学院大学論集』48
- [1981b] 「モンゴルの金国経略と漢人世侯の成立(4)」『四国学院大学論集』49
- [1994] 「元朝郡県祭祀における官費支出について——黒城出土祭祀費用文書の検討」『四国学院大学論集』85
- [2002a] 「モンゴル朝下漢人世侯の権力について」野口鐵郎先生古稀記念論集刊行委員会編『中華世界の歴史的展開』汲古書院
- [2002b] 「河南における元代非漢族諸族軍人の家系」松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(科学研究費報告書)
- 石濱裕美子 [1994] 「バクバの仏教思想に基づいたフビライの王権像」『日本西蔵学会会報』40 (同 [2001] 所収)
- [2001] 『チベット仏教世界の歴史的的研究』東方書店

- 市丸智子 [2002] 「元代貨幣の質文・錠両単位の別について——黒城出土及び徽州契約文書を中心として」『社会経済史学』68-3
- 入矢義高 [1956] 「蔡美彪氏編「元代白話碑集録」を読む」『東方学報』(京都) 26
- 亦隣真 [2001a] 加藤雄三訳「1276年龍門萬王廟バスバ字令旨碑を読む——ニコラス・ポッペ訳注の書評を兼ねて」『内陸アジア言語の研究』16
- [2001b] 加藤雄三訳「元代直訳公文書の文体」『内陸アジア言語の研究』16
- 岩村忍・田中謙二校定 [1964] 『校定本元典章刑部』第一冊, 京都大学人文科学研究所元典章研究班
- ・——校定 [1972] 『校定本元典章刑部』第二冊, 京都大学人文科学研究所元典章研究班
- 植松正 [1968] 「元代江南の豪民朱清・張瑄について——その誅殺と財産官没をめぐって」『東洋史研究』27-3 (同 [1997] 所収)
- [1981] 「元初の法制に関する一考察——とくに金制との関連について」『東洋史研究』40-1
- [1993] 「元典章・通制条格・附遼・金・西夏法」滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究』東京大学出版会
- [1996] 「元朝支配下の江南地域社会」『宋元時代史の基本問題』汲古書院
- [1997] 『元代江南政治社会史研究』汲古書院
- [2003] 「元初における海事問題と海運体制」京都女子大学東洋史研究室『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学
- [2004a] 「元典章文書分析法」『13, 14世紀東アジア史料通信』2
- [2004b] 「元代の海運万戸府と海運世家」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』史学編 3
- NHK取材班編 [1992] 『大モンゴル3 大いなる都——巨大国家の遺産』角川書店
- 榎本涉 [2001a] 「順帝朝前半期における日元交通——社絶から復活へ」『日本歴史』640
- [2001b] 「日本遠征以後における元朝の倭船対策」『日本史研究』470
- [2001c] 「明州市舶司と東シナ海交易圏」『歴史学研究』756
- [2002] 「元末内乱期の日元交通」『東洋学報』84-1
- 大島立子 [1974] 「金末紅襖軍について」『明代史研究』1
- 愛宕松男 [1941] 「李璫の叛乱と其の政治的意義——蒙古朝治下に於ける漢地の封建制とその州県制への展開」『東洋史研究』6-4 (同 [1988] 所収)
- [1943] 「元朝の対漢人政策」『東亜研究所報』23 (同 [1988] 所収)
- [1950] 「蒙古人政権治下の漢地における版籍の問題——特に乙未年籍・壬子年籍及び至元七年籍を中心として」『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』羽田博士選慶記念会 (同 [1988] 所収)
- [1951] 「遼金宋三史の編纂と北族王朝の立場」『文化』15-4 (同 [1988] 所収)
- [1965] 「元朝税制考——税糧と科差について」『東洋史研究』23-4 (同 [1988] 所収)
- [1970] 「元の中国支配と漢民族社会」『岩波講座世界歴史9 (中世3)』(同 [1988] 所収)
- [1988] 『愛宕松男東洋史学論集 第4巻 元朝史』三一書房
- 小野浩 [1997] 「とこしえなる天の力のもとに」『岩波講座世界歴史11 中央ユーラシアの統合』
- 片山共夫 [1977] 「元朝四怯薛の輪番制度」『九州大学東洋史論集』6
- [1980a] 「元朝怯薛出身者の家柄について」『九州大学東洋史論集』8
- [1980b] 「怯薛と元朝官僚制」『史学雑誌』89-12
- 衣川強 [1977] 「開闢用兵」をめぐって『東洋史研究』36-3
- 金文京 [1983] 『元刊雜劇三十種』序説『未名』3
- [1996] 「関漢卿の出自をめぐって——元代における演劇隆盛の一背景」『宋元時代史の基本問題』汲古書院
- [2002] 『事林廣記』刑法類・公理類訳注『東方学報』(京都) 74
- [2003] 「李齊賢在元事跡考(其の一) 第一次入元から峨眉山奉使行まで」『朝鮮儒林文化の形

- 成と展開に関する総合的研究』(科学研究費報告書)
- ・玄幸子・佐藤晴彦訳註, 鄭光解説 [2002] 『老乞大——朝鮮中世の中国語会話読本』平凡社東洋文庫
- 窪徳忠 [1967] 『中国の宗教改革』法蔵館
- [1992] 『モンゴル期の道教と仏教』平河出版社
- 桂華淳祥 [1988] 「真定府獲鹿県靈巖院について——金代寶額寺院の形態」『大谷学報』68-1
- [1989] 「金朝の寺觀名額発売と鄉村社会」『大谷大学史学論究』3
- [2000] 「宋金代山西の寺院」『大谷大学研究年報』52
- 「元代の社会と文化」研究班 [2003] 『事林広記』人事類訳注『東方学報』(京都) 75
- [2004] 『事林広記』学校類訳注(一)『東方学報』(京都) 76
- [2005] 『事林広記』学校類訳注(二)・家礼類(一)『東方学報』(京都) 77
- 佐伯富 [1985] 「元代における塩政」『東洋学報』66-1/2/3/4 (同 [1987] 所収)
- [1987] 『中国塩政史の研究』法律文化社
- 櫻井智美 [1998] 「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』56-4
- [2002] 「日本における最近の元代史研究——文化政策をめぐる研究を中心に」『中国史学』12
- [2004] 「元代科挙受験持込許可書をめぐって——『文場備用排字礼部韻註』を中心に」『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所
- 末松保和 [1942] 「朝鮮覆刻本「史学指南」について」『東洋史研究』6-6 (同 [1997] 所収)
- [1997] 『末松保和朝鮮史著作集6 朝鮮史と史料』吉川弘文館
- 杉山正明 [1978] 「モンゴル帝国の原像——チンギス・カンの一族分封をめぐって」『東洋史研究』37-1 (同 [2004] 所収)
- [1982] 「クビライ政権と東方三王家」『東方学報』(京都) 54 (同 [2004] 所収)
- [1984] 「クビライと大都」『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所 (同 [2004] 所収)
- [1990] 「元代蒙漢合璧命令文の研究(一)」『神戸市外国語大学外国学研究』21 (同 [2004] 所収)
- [1991a] 「日本におけるモンゴル(Mongol)時代史研究」『中国史学』1
- [1991b] 「西夏人儒者高智耀の実像」河内良弘編『清朝治下の民族問題と国際関係』(同 [2004] 所収)
- [1991c] 「元代蒙漢合璧命令文の研究(二)」『神戸市外国語大学外国学研究』23 (同 [2004] 所収)
- [1993] 「八不沙大王の令旨碑より」『東洋史研究』52-3 (同 [2004] 所収)
- [1995a] 『クビライの挑戦』朝日選書
- [1995b] 「大元ウルスの三大王国——カイシャンの尊権とその前後(上)」『京都大学文学部研究紀要』34
- [1996a] 「モンゴル時代史研究の現状と課題」『宋元時代史の基本問題』汲古書院
- [1996b] 『モンゴル帝国の興亡』上・下, 講談社現代新書
- [1997] 「日本における遼金元時代史研究」『中国——社会と文化』12
- [1999] 「大都と上都の間——居庸南北口をめぐる小事件より」礪波護編『中国歴代王朝の都市管理に関する総合的研究』(同 [2004] 所収)
- [2003] 『史料研究の新時代』『歴史と地理』564
- [2004] 『大元ウルスとモンゴル帝国』京都大学学術出版会
- ・北川誠一 [1997] 『世界の歴史9 大モンゴルの時代』中央公論社
- 祖生利・李崇興点校 [2004] 『大元聖政国朝典章・刑部』山西古籍出版社

- 高橋弘臣 [1991]「金末行省の性格と実態」『社会文化史学』27
 — [2000]『元朝貨幣政策成立過程の研究』東洋書院
 高橋文治 [1986]「泰山学派の末裔達——一・二・三世紀山東の学芸について」『東洋史研究』45-1
 — [1995]「モンゴル時代全真教文書の研究(一)」『追手門学院大学文学部紀要』31
 — [1997a]「張留孫の登場前後——発給文書から見たモンゴル時代の道教」『東洋史研究』56-1
 — [1997b]「モンゴル時代全真教文書の研究(二)」『追手門学院大学文学部紀要』32
 — [1997c]「モンゴル時代全真教文書の研究(三)——「大蒙古国累朝崇道恩命之碑」をめぐる」『追手門学院大学文学部紀要』33
 — [1997d]「晋祠至元四年碑をめぐる」『追手門学院大学創立三十周年記念論集 文学部篇』
 — [1997e]「至元十七年の放火事件」『東洋文化学科年報』12
 — [1999a]「モンゴル王族と道教——武宗カイシャンと苗道一」『東方宗教』93
 — [1999b]「承天観公據について」『追手門学院大学文学部紀要』35
 — [1999c]「クビライの令旨二通——もう一つの「道仏論争」」『アジア文化学科年報』2
 田村實造 [1964-85]『中国征服王朝の研究』上・中・下, 東洋史研究会, 同朋舎出版
 田村祐之 [1996-98]「訳注『朴通事諺解』(1)~(4)」『火輪』1~4
 — [1996-2002]『『朴通事諺解』翻訳の試み(1)~(7)』『饗饗』4~10
 檀上寛 [1994]『中国歴史人物選9 明の太祖朱元璋』白帝社
 — [2001]「元末の海運と劉仁本」『史窓』58
 — [2003]「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」京都女子大学東洋史研究室『東アジア海洋圏の史的研究』京都女子大学
 笠沙雅章 [1973]「漢籍紙背文書の研究」『京都大学文学部研究紀要』14
 — [1982]『中国仏教社会史研究』同朋舎出版(朋友書店, 2002年増訂版)
 — [2000]『宋元仏教文化史研究』汲古書院
 陳高華 [1984]佐竹靖彦訳『元の大都——マルコ・ポーロ時代の北京』中公新書
 — [2001]「兩種『三場文選』中の元代科挙人物名録——兼説錢大昕『元進士考』」『中国社会科学院歴史研究所学刊』1
 —・張帆・劉曉 [2004]『《元典章・戸部・祿廩》校釈』『中国社会科学院歴史研究所学刊』3
 堤一昭 [1992]「元代華北のモンゴル軍団長の家系」『史林』75-3
 — [1995]「李璘の乱後の漢人軍閥——濟南張氏の事例」『史林』78-6
 — [1996]「元朝江南行台の成立」『東洋史研究』54-4
 — [1998]「大元ウルスの江南駐屯軍」『大阪外国語大学論集』19
 — [2000a]「大元ウルス治下江南初期政治史」『東洋史研究』58-4
 — [2000b]「大元ウルス江南統治首脳の二家系」『大阪外国語大学論集』22
 寺田隆信・熊本崇他校定 [1986]「校定元典章兵部(上)」『東北大学東洋史論集』2
 — [1988]「校定元典章兵部(中)」『東北大学東洋史論集』3
 — [1990]「校定元典章兵部(下)」『東北大学東洋史論集』4
 寺地遼 [1988]『南宋初期政治史研究』溪水社
 — [1999]「方国珍政権の性格——宋元期台州黄巖県事情素描 第三篇」『史学研究』223
 外山軍治 [1964]『金朝史研究』東洋史研究会
 那珂通世 [1907]『成吉思汗実録』大日本図書株式会社
 中島樂章 [2001]「元代社制の成立と展開」『九州大学東洋史論集』29
 中村淳 [1993]「元代法旨に見える歴代帝師の居所——大都の花園大寺と大護国仁王寺」『待兼山論叢(史学篇)』27
 — [1994]「モンゴル時代の「道仏論争」の実像——クビライの中国支配への道」『東洋学報』75-

- [1999]「元代大都の敷建寺院をめぐる」『東洋史研究』58-1
 — [2002]「元代チベット命令文研究序説」松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(科学研究費報告書)
 —・松川節 [1993]「新発見の蒙漢合璧の少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8
 仁井田陞 [1956]「元明時代の村の規約と小作証書など——日用百科全書の類20種の中から」『東洋文化研究所紀要』8
 丹羽友三郎 [1968-69]『『憲台通紀』の校訂・訳注(一)~(三)』『三重法経』19/20~22
 — [1994]『中国元代の監察官制』高文堂出版社
 野上俊静 [1953]『遼金の仏教』平楽寺書店
 野沢佳美 [1986]「張柔軍団の成立過程とその構成」『大学院年報』(立正大学大学院)3
 — [1988]「モンゴル太宗定宗期における史天沢の動向」『立正大学東洋史論集』1
 蜂屋邦夫 [1998]『金元時代の道教』汲古書院
 羽田亨 [1928]「元朝の漢文明に対する態度」『狩野教授還暦記念支那学論叢』同記念会, 弘文堂書房(同 [1957]所収)
 — [1935]「宋元時代総説」『世界文化史体系 第9冊 宋元時代』誠文堂新光社(同 [1957]所収)
 — [1957]『羽田博士史学論文集 上巻 歴史篇』東洋史研究会
 藤枝晃 [1948]『征服王朝』秋田屋書店
 松田善之 [1999a]「元朝治下の色目人について」『史学雑誌』108-9
 — [1999b]『『元典章』を読むために——工具書・研究文献一覧を兼ねて』『開篇』18
 — [2000]「元代の戸籍制度における色目人」『史観』143
 — [2001]「元代史料としての旧本『老乞大』——鈔と物価の記載を中心として」『東洋学報』83-1
 古松崇志 [2000]「元代河東塩池神廟碑研究序説」『東方学報』(京都)72
 — [2001, 05]「元代カラホト文書解読」『オアシス地域研究会報』1-1, 5-1
 — [2003]「脩端「辯遼宋金正統」をめぐる——元代における「遼史」「金史」「宋史」三史編纂の過程」『東方学報』(京都)75
 星斌夫 [1982]『大運河発展史』平凡社東洋文庫
 前田直典 [1973]『元朝史の研究』東京大学出版会
 牧野修二 [1979a]「元代の儒学教育——教育課程を中心にして」『東洋史研究』37-4
 — [1979b]「元代廟学書院の規模について」『愛媛大学法文学部論集(文学科編)』12
 — [1980]「元代生員の学校生活」『愛媛大学法文学部論集(文学科編)』13
 松井太 [1997]「カラホト出土蒙漢合璧税糧納入簿断簡」『待兼山論叢(史学篇)』31
 — [2002]「モンゴル時代ウイグルスタンの税役制度と徴税システム」松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(科学研究費報告書)
 松川節 [1995]「大元ウルス命令文の書式」『待兼山論叢(史学篇)』29
 松田孝一 [1985]「モンゴル帝国領漠地の戸口統計」『待兼山論叢(史学篇)』19
 — [1992a]「モンゴル帝国東部国境の探馬赤軍団」『内陸アジア史研究』7/8
 — [1992b]「チャガタイ家千戸の陝西南部駐屯軍団(上)」『国際研究論叢』5-2
 — [1993]「チャガタイ家千戸の陝西南部駐屯軍団(下)」『国際研究論叢』5-3/4
 — [2000]「中国交通史——元時代の交通と南北物流」同編『東アジア経済史の諸問題』阿吡社
 松本善海 [1977]『中国村落制度の史的研究』岩波書店
 三浦秀一 [1995a]「金朝性理学史稿——13世紀前半の北中国における程朱学と新道教の交錯」『文

- 化』58-3/4
- [1995b]「金末の宋学——趙秉文と李純甫、そして王若虚」『東北大学文学研究年報』44
- 三上次男 [1967]「金の科挙制度とその政治的側面」『青山史学』1 (同 [1973] 所収)
- [1970]『金史研究2 金代政治制度の研究』中央公論美術出版
- [1972]『金史研究1 金代女真社会の研究』中央公論美術出版
- [1973]『金史研究3 金代政治・社会の研究』中央公論美術出版
- 宮紀子 [1998a]『『孝経直解』の挿絵をめぐって』『東方学』95
- [1998b]『『孝経直解』の出版とその時代』『中国文学報』56
- [1999a]「大徳十一年「加封孔子制誥」をめぐる諸問題」『中国——社会と文化』14
- [1999b]「鄭鎮孫と『直説通略』(上)(下)」『中国文学報』58~59
- [2001]「程復心『四書章句』出版始末攷——大元ウルス治下における江南文人の保挙」『内陸アジア言語の研究』16
- [2002]『『廟学典礼』簡記』『東方学』104
- [2003]「『対策』の対策——大元ウルス治下における科挙と出版」文部省科学研究費特定領域研究「古典学の再構築」総括班『古典学の現在』5
- [2004]『『龍虎山志』からみたモンゴル命令文の世界——正一教教団研究序説』『東洋史研究』63-2
- [2005]『徽州文書新探——『新安忠烈廟神紀実』より』『東方学報』(京都) 77
- 宮崎市定 [1969]「洪武から永楽へ——初期明朝政権の性格」『東洋史研究』27-4
- 宮澤知之 [2001]「元代後半期の幣制とその崩壊」『鷹陵史学』27
- 村岡倫 [2001]「モンゴル時代初期の河西・山西地方——右翼ウルスの分地成立をめぐって」『龍谷史壇』117
- [2002]「モンゴル時代の右翼ウルスと山西地方」松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(科学研究費報告書)
- 村上哲見 [1994a]「武臣と遺民——宋末元初江南文人の亡国体験」『東北大学文学部研究年報』43 (同 [1994b] 所収)
- [1994b]『中国文人論』汲古書院
- 蒙思明 [1938]『元代社会階級制度』哈仏燕京学社
- 森田憲司 [1988]「李璣の乱以前——石刻史料を材料にして」『東洋史研究』47-3 (同 [2004b] 所収)
- [1989]「陳垣編『道家金石略』」『奈良史学』7
- [1990]「元代漢人知識人研究の課題二、三」『中国——社会と文化』5 (同 [2004b] 所収)
- [1992]『『廟学典礼』成立考』『奈良史学』10
- [1993]『『事林広記』の諸版本について——国内所蔵の諸本を中心に』『宋代史研究会研究報告』4 宋代の知識人』汲古書院
- [1994]『『大朝崇褒祖廟之記』再考——丁酉年における「聖人の家」への優免』『奈良史学』12 (同 [2004b] 所収)
- [1999a]「異民族王朝下の科挙」『月刊しにか』1999年9月号
- [1999b]「碑記の撰述から見た宋元交替期の慶元における士大夫」『奈良史学』17 (同 [2004b] 所収)
- [2001a]「元朝の科挙資料について——錢大昕の編著を中心に」『東方学報』(京都) 73 (同 [2004b] 所収)
- [2001b]「元朝における代祀」『東方宗教』98
- [2004a]「中国学・韓国学の十年後——歴史(中国中世~近世) デジタル化の彼方にあるもの

- は?』『月刊しにか』2004年3月号
- [2004b]『元代知識人と地域社会』汲古書院
- 森平雅彦 [1998a]「耐馬高麗國王の成立——元朝における高麗王の地位についての予備的考察」『東洋学報』79-4
- [1998b]「高麗王位下の基礎的考察——大元ウルスの一分権勢力としての高麗王家」『朝鮮史研究会論文集』36
- [2001]「元朝ケシク制度と高麗王家——高麗・元関係における禿魯花の意義に関連して」『史学雑誌』110-2
- [2004]『『寶王録』にみる至元十年の遣元高麗使』『東洋史研究』63-2
- 箭内互 [1916]「元代社会の三階級」『満鮮地理歴史研究報告』3 (同 [1930] 所収)
- [1930]『蒙古史研究』刀江書院
- 柳田節子 [1977]「元代郷村の戸等制」『東洋文化研究所紀要』73 (同 [1986] 所収)
- [1986]『宋元郷村制の研究』創文社
- 山田慶児 [1980]『授時暦の道——中国中世の科学と国家』みすず書房
- 横手裕 [1990]「全真教の変容」『中国哲学研究』2
- 吉川幸次郎 [1974]「朱子学北伝前史——金朝と朱子学」『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』同記念会
- 劉浦江編 [2003]『二十世紀遼金史論著目録』上海辞書出版社
- 渡辺健哉 [1999]「元代の大都南城について」『集刊東洋学』82
- [2005]「大都研究の成果と課題」『中国——社会と文化』20

第8章 明代

- 青山治郎 [1996]『明代京宮史研究』響文社
- 浅井紀 [1990]『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版
- 浅見雅一 [1990]「教会史料を通してみた張獻忠の四川支配」『史学』59-2/3
- 足立啓二 [1989]「明代中期における京師の銭法」『熊本大学文学部論叢』29
- [1990a]「専制国家と財政・貨幣」中国史研究会編『中国専制国家と社会統合——中国史像の再構成II』文理閣
- [1990b]「明清時代における銭経済の発展」中国史研究会編『中国専制国家と社会統合——中国史像の再構成II』文理閣
- [1991]「中国からみた日本貨幣史の二・三の問題」『新しい歴史学のために』203
- [1992]「東アジアにおける銭貨の流通」荒野泰典他編『アジアの中の日本史III 海上の道』東京大学出版会
- 甘利弘樹 [1998]「明末清初期、広東・福建・江西交界地域における広東の山寇」『社会文化史学』38
- [2002a]「明朝檔案を利用した研究の動向について——『中国明朝檔案総匯』刊行によせて」『満族史研究』1
- [2002b]『『中国明朝檔案総匯』について』『汲古』42
- 新宮(佐藤)学 [1984]「明代北京における鋪戸の役とその銀納化——都市商工業者の実態と把握をめぐって」『歴史』(東北史学会) 62
- [1985]「明代南京における鋪戸の役とその改革——「行」をめぐる諸問題」『国士館大学人文学会紀要』17
- [1987]「明末清初期一地方都市における同業組織と公権力」『史学雑誌』96-9

- [1990a]「明代前期北京の官店場坊と商税」『東洋史研究』49-1
- [1990b]「明代の牙行について——商税との関係を中心に」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下, 汲古書院
- [1991]「明代の首都北京の都市人口について」『史学論集』(山形大学) 11
- [1993a]「南京遷都——永楽19年4月北京三殿焼失の波紋」『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社会』汲古書院(同[2004]所収)
- [1993b]「洪熙から宣徳へ——北京定都への道」『中国史学』3(同[2004]所収)
- [1997]「初期明朝政権の建都問題について」『東方学』94(同[2004]所収)
- [1998]「明清社会経済史研究の新しい視点——顧誠教授の衛所研究をめぐって」『中国——社会と文化』13
- [2000]「通州・北京間の物流と在地社会——嘉靖年間の通惠河改修問題をてがかりに」山本英史編『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会
- [2004]『北京遷都の研究』汲古書院
- 有井智徳 [1985]『高麗李朝史の研究』国書刊行会
- 尹韻公 [1990]『中国明代新聞傳播史』重慶出版社
- 章慶遠 [1999]『張居正和明代中後期政局』広東高等教育出版社
- 五十嵐正一 [1979]『中国近世教育史の研究』国書刊行会
- 伊藤正彦 [1996]「明代里老人制理解への提言」足立啓二編『東アジアにおける社会・文化構造の異化過程に関する研究』科研報告書
- [1997]「元末—地方政治改革案——明初地方政治改革の先駆」『東洋史研究』56-1
- [1998]「中国史研究の「地域社会論」」『歴史評論』582
- 井上進 [1990]「蔵書と読書」『東方学報』62
- [1992]「機学の背景」『東方学報』64
- [1993]「復社姓氏校録」『東方学報』65
- [1994]『顧炎武』白帝社
- 井上徹 [1986a]「黄佐「泰泉郷礼」の世界」『東洋学報』67-3/4(同[2000]所収)
- [1986b]「「郷約」の理念について」『名古屋大学東洋史研究報告』11
- [1987]「宋代以降における宗族の特質の再検討——仁井田陞の同族「共同体論」をめぐって」『名古屋大学東洋史研究報告』12(同[2000]所収)
- [1990]「明朝の「里」制について——森正夫著『明代江南土地制度の研究』に寄せて」『名古屋大学東洋史研究報告』15
- [1992]「元末明初における宗族形成の風潮」『文経論叢(人文)』(弘前大学) 27-3(同[2000]所収)
- [1993]「宗族形成の動因について」『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社会』汲古書院(同[2000]所収)
- [1995]「祖先祭祀と家廟」『文経論叢(人文)』(弘前大学) 30-3(同[2000]所収)
- [1998a]「伝統中国の宗族に関する若干の研究の紹介」『文経論叢(人文)』(弘前大学) 33-3(同[2000]所収)
- [1998b]「宋元以降における宗族の意義」『歴史評論』580
- [2000]『中国の宗族と国家の礼制——宗法主義の視点からの分析』研文出版
- 他編 [2005]『宋—明宗族の研究』汲古書院
- 井上充幸 [2000]「明末の文人李日華の趣味生活」『東洋史研究』59-1
- 岩井茂樹 [1989]「張居正財政の課題と方法」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所
- [1993a]「明末の集権と「治法」主義」『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社会』汲古書院
- [1993b]「明清時期の商品生産をめぐって」谷川道雄編『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所
- [1994]「徭役と財政のあいだ——中国税・役制度の歴史的な理解にむけて(1)~(4)」『経済経営論叢』(京都産業大学) 28-4, 29-1~3(同[2004b]所収)
- [1996]「十六・十七世紀の中国辺境社会」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- [1997]「公課負担団体としての里甲と村」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院
- [2004a]「十六世紀中国における交易秩序の模索——互市の現実とその認識」同編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所
- [2004b]『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会
- 岩淵慎 [2003a]「洪熙朝政権の性格」『明代史研究会創立三十五年記念論集』汲古書院
- [2003b]「中国明朝檔案総匯総目録」川越泰博編『明代海外情報の研究』科研報告書
- 岩見宏 [1986]『明代徭役制度の研究』同朋舎出版
- [1989]「晚明財政の一考察」同・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所
- 于志嘉 [1990a]「明代軍戸の社会的地位について——軍戸の婚姻をめぐって」『明代史研究』18
- [1990b]「明代軍戸の社会的地位について——科挙と任官において」『東洋学報』71-3/4
- 上田信 [1981]「明末清初, 江南の都市の「無頼」をめぐる社会関係——打行と脚夫」『史学雑誌』90-11
- [1983]「地域の履歴——浙江省奉化県忠義郷」『社会経済史学』49-2
- [1984]「地域と宗族——浙江省山間部」『東洋文化研究所紀要』94
- [1995]『伝統中国——〈盆地〉〈宗族〉にみる明清時代』講談社
- 白井佐知子 [1997]「徽州文書と徽州研究」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院(同[2005]所収)
- [2005]『徽州商人の研究』汲古書院
- 梅原郁編 [2003]『訳注中国近世刑法志』下, 創文社
- 榎一雄 [1984]「明代のマカオ(一)~(三)」『季刊東西交渉』10~12
- 榎本涉 [2002]「元末内乱期の日元交通」『東洋学報』84-1
- [2003]「14世紀後半, 日本に渡来した人々」『遙かなる中世』20
- 遠藤隆俊 [1994]「中国近世宗族論の展開」『集刊東洋学』71
- 王剣英 [1992]『明中都』中華書局
- 大木康 [1990]「山人陳繼儒とその出版活動」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上, 汲古書院
- [1995]『明末のはぐれ知識人』講談社
- [1997]「嚴嵩父子とその周辺」『東洋史研究』55-4
- [2004]『明末江南の出版文化』研文出版
- 大澤顯浩 [1992]「『肇域志』の成立」『東洋史研究』50-4
- [1994]「『広輿記』の明版について」『史林』77-3
- [1996]「地理書と政書——掌故のあらわした地域」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- 大隅晶子 [1982]「明初洪武朝における朝貢について」『MUSEUM』371
- [1984]「明代永楽朝における朝貢について」『MUSEUM』398
- [1990]「明代洪武帝の海禁政策と海外貿易」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史

- 論叢』上, 汲古書院
- 大田由紀夫 [1993] 「元末明初期における徽州府下の貨幣動向」『史料』76-4
- [1995] 「12~15世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布——日本・中国を中心として」『社会経済史学』61-2
- [1997] 「15・16世紀中国における銭貨流通」『名古屋大学東洋史研究報告』21
- [1998] 「15・16世紀東アジアにおける銭貨流通」『人文学科論集』(鹿児島大学) 48
- [2001a] 「南京回帰——洪武体制の形成」『名古屋大学東洋史研究報告』25
- [2001b] 「中国王朝による貨幣の発行と流通」池享編『銭貨——前近代日本の貨幣と国家』青木書店
- [2003] 「中都放棄の背景・再論」『鹿大史学』50
- 太田弘毅 [2002] 『倭寇——商業・軍事史的研究』春風社
- 大野晃嗣 [1999] 「明代の廷試合格者と初任官ポスト」『東洋史研究』58-1
- [2003] 「最近の明代官僚制研究」『中国史学』13
- 岡美穂子 [2002] 「キリシタン時代のマカオにおける聖パウロ・コレジオの役割」『キリスト教史学』56
- 岡野昌子 [1989] 「嘉靖一四年の遼東兵変」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所
- [1996] 「万曆二十年寧夏兵変」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- 岡本さえ [1996] 『清代禁書の研究』東京大学出版会
- [2000] 『近世中国の比較思想』東京大学出版会
- 岡本弘道 [1999] 「明朝における朝貢国琉球の位置付けとその変化」『東洋史研究』57-4
- 小川尚 [1999] 『明代地方監察制度の研究』汲古書院
- [2001] 「明代都察院の再編成について」『明代史研究』29 (同 [2004] 所収)
- [2003] 「明代都察院体制の成立」『明代史研究会創立三十五年記念論集』汲古書院 (同 [2004] 所収)
- [2004] 『明代都察院体制の研究』汲古書院
- 小川陽一 [1995] 『日用類書による明清小説の研究』研文出版
- 奥崎裕司 [1978] 『中国郷紳地主の研究』汲古書院
- [1990] 「方国珍の乱と倭寇」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上, 汲古書院
- 奥山憲夫 [1980] 「明代中期の京営に関する一考察」『明代史研究』8 (同 [2003] 所収)
- [1986] 「明代巡撫制度の変遷」『東洋史研究』45-2 (同 [2003] 所収)
- [1999] 「軍拡から肅軍へ——洪武朝の軍事政策」『国史館史学』7
- [2003] 『明代軍政史研究』汲古書院
- 小野和子 [1996] 『明季党社考——東林と復社』同朋舎出版
- 小山正明 [1992] 『明清社会経済史研究』東京大学出版会
- 何冠彪 [1997] 『生与死——明季士大夫的抉抉』聯経出版事業公司
- 何炳棟 [1993] 寺田隆信他訳『科挙と近世中国社会——立身出世の階梯』平凡社
- 鹿毛敏夫 [2003] 「15・16世紀大友氏の対外交渉」『史学雑誌』112-2
- 藤木原洋 [1996] 「洪武帝期日中間関係研究の動向と課題」『東洋史訪』2
- [1997] 「明使仲猷聞・無逸克勤帰国以後の日明関係」『東洋史訪』3
- 加藤雄三 [1997-98] 「明代成化・弘治の律と例(1)(2)」『法学論叢』(京都大学) 142-3, 143-6
- 川勝守 [1980] 『中国封建国家の支配構造——明清賦役制度史の研究』東京大学出版会
- [1981] 「明末清初の訟師について」『九州大学東洋史論集』9 (同 [2004] 所収)
- [1990] 「徐階と張居正」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上, 汲古書院
- [1992] 『明清江南農業経済史研究』東京大学出版会
- [1999] 『明清江南市鎮社会史研究——空間と社会形成の歴史学』汲古書院
- [2000] 『日本近世と東アジア世界』吉川弘文館
- [2004] 『中国城郭都市社会史研究』汲古書院
- 川越泰博 [1990a] 「靖難の役における燕王麾下の衛所官について」『中央大学文学部紀要(史学)』35 (同 [1997a] 所収)
- [1990b] 「靖難の役後における燕王麾下の衛所官について」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上, 汲古書院 (同 [1997a] 所収)
- [1990c] 「靖難の役における建文帝麾下の衛所官について」『人文研紀要』(中央大学) 11 (同 [1997a] 所収)
- [1991] 『「明実録」稿本所載の琉球国記事について』『日本歴史』519 (同 [1999] 所収)
- [1993] 「土木の変と親征軍」『東洋史研究』52-1 (同 [2001] 所収)
- [1994] 『「李実題本」考』『集刊東洋学』72 (同 [1999] 所収)
- [1995] 『「逆臣録」と『藍玉党供状』』『中央大学文学部紀要(史学)』40
- [1997a] 『明代建文朝史の研究』汲古書院
- [1997b] 「袁彬「北征事蹟」の成立」『東方学』94 (同 [1999] 所収)
- [1998] 「袁彬の題本について——『明英宗実録』における摂取の構造」『中央大学文学部紀要(史学)』43 (同 [1999] 所収)
- [1999] 『明代異国情報の研究』汲古書院
- [2001] 『明代中国の軍制と政治』国書刊行会
- [2002a] 『明代中国の疑獄事件——藍玉の獄と連座の人々』風響社
- [2002b] 「太監喜寧擒獲始末」『中央大学文学部紀要(史学)』47
- [2003a] 『モンゴルに拉致された中国皇帝——明英宗の教育なる運命』研文出版
- [2003b] 『明代長城の群像』汲古書院
- [2005] 「靖難の役と蜀王府(一)——四川成都三護衛の動向を手掛りに」『中央大学文学部紀要(史学)』50
- 韓大成 [1991] 『明代城市研究』中国人民大学出版社
- 神田信夫編 [1999] 『世界歴史大系 中国史4 明・清』山川出版社
- 岸本美緒 [1995] 「清朝とユーラシア」『講座世界史2 近代世界への道——変容と摩擦』東京大学出版会
- [1997] 『清代中国の物価と経済変動』研文出版
- [1998] 「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」『岩波講座世界歴史』13
- [1999] 『明清交替と江南社会——17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会
- ・宮嶋博史 [1998] 『世界の歴史12 明清と李朝の時代』中央公論社
- 北島万次 [1995] 「永楽帝期における朝鮮国王の冊封と交易」田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館
- [1996] 「明の朝鮮冊封と交易関係」『中世史講座』11, 学生社
- 許濂新他編 [1985] 『中国資本主義発展史 第一巻 中国資本主義的萌芽』人民出版社
- 金文崇 [2002] 「明代万曆年間の山人の活動」『東洋史研究』61-2
- 久芳崇 [2002] 「十六世紀末, 日本式鉄砲の明朝への伝播」『東洋学報』84-1
- 黒田明伸 [1999] 「一六・一七世紀環シナ海経済と銭貨流通」歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店
- [2003] 『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』岩波書店

- 顧誠 [1997]『南明史』中国青年出版社
 — [1998] 新宮学訳「明代の衛籍について」『東洋史論集』(東北大学) 7
 呉金成 [1990] 渡昌弘訳「明代社会経済史研究——紳士層の形成とその社会経済的役割」汲古書院
 伍躍 [2000]『明清時代の徭役制度と地方行政』大阪経済法科大学出版部
 — [2001]「日明関係における「勘合」——とくにその形状について」『史林』84-1
 黄仁宇 [1989] 稲畑耕一郎他訳『万曆十五年——一五八七「文明」の悲劇』東方書店
 黄中青 [2001]『明代海防的水寨与遊兵——浙閩粵沿海島嶼防衛の建置与解体』明史研究叢刊1, 明史研究小組
 小島毅 [1990]「城隍廟制度の確立」『思想』792
 — [1991]「正祠と淫祠」『東洋文化研究所紀要』114
 — [1993]「もうひとつの明儒学案——福建朱子学展開の物語」『中国哲学研究』5
 酒井忠夫 [1958]「明代の日用類書と庶民教育」林友春編『近世中国教育史研究』国土社
 — [1960]『中国善書の研究』弘文堂(増補版『酒井忠夫著作集』1~2, 国書刊行会, 1999~2000年)
 阪倉篤秀 [1978]「建文帝の政策」『人文論究』(関西学院大学) 27-3/4
 — [1983]「武宗朝における八虎打倒計画について」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所
 — [1987]「成化元年における散館請願について——明朝庶吉士制の検討」『東洋史研究』46-3(同 [2000] 所収)
 — [1989a]「徐溥の庶吉士制改革案」『関西学院創立百周年文学部記念論文集』(同 [2000] 所収)
 — [1989b]「掣籤法と吏部尚書孫丕揚」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所(同 [2000] 所収)
 — [2000]『明王朝中央統治機構の研究』汲古書院
 坂出祥伸 [1998]「明代「日用類書」医学門について」『関西大学文学論集』47-3
 佐久間重男 [1990]「明・清からみた東アジアの華夷秩序」『思想』796(同 [1992] 所収)
 — [1992]『日明関係史の研究』吉川弘文館
 櫻井俊郎 [1992]「明代題奏本制度の成立とその変容」『東洋史研究』51-2
 — [1996]「隆慶時代の内閣政治——高拱の考課政策を中心に」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
 佐藤邦憲 [1993]「明律・明令と大誥および問刑条例」滋賀秀三編『中国法制史』東京大学出版会
 佐藤文俊 [1985]『明末農民反乱の研究』研文出版
 — [1993]「明・太祖の諸王封建について」『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社会』汲古書院(同 [1999] 所収)
 — [1999]『明代王府の研究』研文出版
 — [2001]「一六四四(崇禎一七, 順治一)年の江南における李公子像」『歴史人類』29
 重田徳 [1975]『清代社会経済史研究』岩波書店
 島田度次 [2001]『中国の伝統思想』みすず書房
 — [2003]『中国における近代思惟の挫折』平凡社東洋文庫
 車恵媛 [1996]「明末, 地方官の人事異動と地方輿論」『史林』79-1
 — [1997]「明代における考課政策の変化——考満と考察の関係を中心に」『東洋史研究』55-4
 朱鴻 [1988]『明成祖与永楽政治』国立台湾師範大学歴史研究所専刊17
 周紹泉 [1993] 岸本美緒訳「徽州文書の分類」『史潮』新32
 徐仁範 [1995]「明代中期の陝西の土兵について」『集刊東洋学』74
 — [1997]「明中期の北辺防衛と軍戸」『集刊東洋学』78
 — [1999]「衛所と衛所軍」『明代史研究』27
 — [2000]「土木の変と勤王兵」『東洋学報』82-1
 常建華 [1991]「最近の中国における明清社会史研究」『中国——社会と文化』6
 城井隆志 [1985a]「万曆三十年代における沈一貫の政治と党争」『史淵』122
 — [1985b]「嘉靖初年の翰林院改革について」『九州大学東洋史論集』14
 — [1987]「明代の六科給事中の任用について」『史淵』124
 — [1990]「明末の一反東林派勢力について」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上, 汲古書院
 — [1993a]「明代前半期の御史の任用」『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社会』汲古書院
 — [1993b]「明代の科道官の陞進人事」川勝守編『東アジアにおける生産と流通の歴史 社会学的研究』中国書店
 進藤尊信 [2002]「明代の司礼監とその周辺」『秋大史学』48
 — [2004]「司礼監太監に至る過程と宦官の経歴について」『秋大史学』50
 陶安あんど [1999a]「中国刑罰史における明代贖法」『東洋史研究』57-4
 — [1999b]「律と例の間」『東洋文化研究所紀要』138
 — [2001]「明代の審録」『法制史研究』50
 鈴木博之 [1994]「明代における宗祠の形成」『集刊東洋学』71
 — [1997]「徽州の村落と祠堂」『集刊東洋学』77
 全漢昇 [1996]『中国近代経済史論叢』稻郷出版社
 曹永和 [1979, 2000]『台湾早期歴史研究』正・続, 聯経出版事業公司
 曹永祿 [2003] 渡昌弘訳「明代政治史研究——科道官の言官的機能」汲古書院
 高瀬弘一郎 [1996]「マカオ・コレジオの創設について」『キリスト教史学』50(同 [2001] 所収)
 — [2001]『キリスト教時代の文化と諸相』八木書店
 高橋芳郎 [1982]「明末清初期, 奴婢・雇工人身分の再編と特質」『東洋史研究』41-3(同 [2001] 所収)
 — [1999]「明律「威逼人致死」条の淵源」『東洋学報』81-3
 — [2001]『宋一清身分法の研究』北海道大学図書刊行会
 — [2002]『宋代中国の法制と社会』汲古書院
 田口宏二郎 [1997]「明末畿輔地域における水利開発事業について」『史学雑誌』106-6
 — [1999]「前近代中国史研究と流通」『中国史学』9
 — [2000]「明代の京・通倉」『待兼山論叢(史学)』(大阪大学) 34
 — [2004]「畿輔での「鈔・税」——安文壁『順天題稿』をめぐって——」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所
 田仲一成 [1973-87]「一五・六世紀を中心とする江南地方劇の変質について(一)~(六)」『東洋文化研究所紀要』60, 63, 65, 71~72, 102
 — [1981]『中国祭祀演劇研究』東京大学東洋文化研究所
 田中健夫 [1975]『中世対外関係史』東京大学出版会
 — [1988]「倭寇図雑考」『東洋大学文学部紀要(史学科)』41
 田中正俊 [1973]『中国近代経済史研究序説』東京大学出版会
 谷光隆 [1991]『明代河工史研究』同朋舎出版
 谷井俊仁 [1993]「『明南京車駕司職掌』の研究」『富山大学人文学部紀要』19
 — [1996]「路程書の時代」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
 谷井陽子 [1996]「明代裁判機構の内部統制」梅原都編『前近代中国の刑罰』京都大学人文科学研究所

- [1999] 「明律運用の統一過程」『東洋史研究』58-2
 — [2002] 「明朝官僚の徴税責任——考成法の再検討」『史林』85-3
 グニエルス, C. [1988] 「明末清初における新製糖技術体系の採用及び国内移転」『就実女子大学史学論集』3
 — [1992] 「明末清初における甘蔗栽培の新技術」『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』山川出版社
 — [1995] 「一六〜一七世紀福建の竹紙製造技術」『アジア・アフリカ言語文化研究』48/49
 谷口規矩雄 [1986] 「東陽民変」『東方学報』58
 — [1996] 「明末北辺防衛における償帥について」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
 — [1998] 『明代徭役制度史研究』同朋舎出版
 檀上寛 [1978] 「明王朝成立期の軌跡——洪武朝の疑獄事件と京師問題をめぐって」『東洋史研究』37-3 (同 [1995] 所収)
 — [1980] 「初期明王朝の通貨政策」『東洋史研究』39-3 (同 [1995] 所収)
 — [1982] 「義門鄭氏と元末の社会」『東洋学報』63-3/4 (同 [1995] 所収)
 — [1983] 「『鄭氏規範』の世界——明朝権力と富民層」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所 (同 [1995] 所収)
 — [1986] 「明代科挙改革の政治的背景——南北卷の創設をめぐって」『東方学報』(京都) 58 (同 [1995] 所収)
 — [1992] 「明初建文朝の歴史的位置」『中国——社会と文化』7 (同 [1995] 所収)
 — [1993] 「明清郷紳論」谷川道雄編『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所 (同 [1995] 所収)
 — [1995] 『明朝専制支配の史的構造』汲古書院
 — [1997a] 「初期明帝国体制論」『岩波講座世界歴史』11
 — [1997b] 『永楽帝——中華「世界システム」への夢』講談社
 — [1997c] 「明初の海禁と朝貢——明朝専制支配の理解に寄せて」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院
 — [2000] 「明初の対日外交と林賢事件」『史窓』(京都女子大学) 57
 — [2003] 「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学研究叢刊
 — [2004] 「明代海禁概念の成立とその背景——遼禁下海から下海通番へ」『東洋史研究』63-3
 趙園 [1999] 『明清之際士大夫研究』北京大学出版社
 趙毅他編 [2002] 『二〇世紀明史研究綜述』東北師大出版社
 張鑑 [1997] 『龐迪我与中国』北京図書館出版社
 張頌清 [1992] 『嚴嵩伝』黄山書社
 張治安 [2000] 『明代監察制度研究』五南圖書出版
 張哲郎 [1995] 『明代巡撫研究』文史哲出版社
 陳学文 [1997] 『明清時期商業書及商人書之研究』洪葉文化事業公司
 陳梧桐 [1993] 『洪武皇帝大伝』河南人民出版社
 陳尚勝 [1993] 『閉関と開放——中国封建晩期対外関係研究』山東人民出版社
 陳大康 [1996] 『明代商賈と世風』上海文芸出版社
 陳智超 [2001] 『明代徽州方氏親友手札七百通考釈』安徽大学出版社
 鶴成久章 [2002] 「明代会試の舞台裏——嚴嵩撰「南省志」を読む」『福岡教育大学紀要 (文科編)』

- 鶴見尚弘 [1989] 『中国明清社会経済研究』学苑出版社
 丁易 [1983 (1949)] 『明代特務政治』群衆出版社
 鄭克晟 [1988] 『明代政争探源』天津古籍出版社
 鄭傑生 [1985] 『明・日関係史の研究』雄山閣出版
 寺田隆信 [1972] 『山西商人の研究』東洋史研究会
 — [1995] 「明末北京の官僚生活について」『東北大学文学部研究年報』44
 寺田浩明 [1994] 「明清法秩序における「約」の性格」溝口雄三他編『アジアから考える4 社会と国家』東京大学出版会
 寺地遵 [1999] 「方国珍政権の性格——宋元期台州黄巖県事情素描 第三篇」『史学研究』(広島大学) 223
 湯開建 [1999] 『澳門開埠初期史研究』中華書局
 豊見山和行 [2002] 『日本の中世5 北の平泉・南の琉球』中央公論新社
 那思陸 [2002] 『明代中央司法審判制度』正典出版文化有限公司
 中純夫 [1991] 「徐階研究」『富山大学教養学部紀要 (人文・社会科学)』24-1
 中島榮章 [1994] 「明代中期の老人制と郷村裁判」『史滴』15
 — [1996] 「明代徽州の一宗族をめぐる紛争と同族結合」『社会経済史学』62-4 (同 [2002] 所収)
 — [2000] 「明代の訴訟制度と老人制」『中国——社会と文化』15
 — [2002] 「明代郷村の紛争と秩序——徽州文書を史料として」汲古書院
 — [2003] 「永楽年間の日明朝貢貿易」『史淵』(九州大学) 140
 中砂明德 [2002] 『江南——中国文雅の源流』講談社
 永積洋子 [1990] 『近世初期の外交』創文社
 南炳文 [2001] 『輝煌, 曲折と啓示——20世紀明史研究回顧』天津人民出版社
 — 他 [1985, 91] 『明史』上・下, 上海人民出版社
 西嶋定生 [1966] 『中国経済史研究』東京大学出版会
 野口鐵郎 [1986] 『明代白蓮教史の研究』雄山閣出版
 — 編訳 [2001] 『訳注明史刑法志』風響社
 野田徹 [1993] 「明朝宦官の政治的地位について」『九州大学東洋史論集』21
 — [1996] 「明代在外宦官の一形態について」『九州大学東洋史論集』24
 — [2000] 「嘉靖期における鎮守宦官裁革について」『史淵』(九州大学) 137
 橋本雄 [2002] 「遺明船の派遣契機」『日本史研究』479
 荷見守義 [1995] 「明朝の冊封体制とその様態——土木の変をめぐる李氏朝鮮との関係」『史学雑誌』104-8
 — [1999] 「李朝の交隣政策とその展開——土木の変期の明・女直・日本との関係を中心にして」『人文研紀要』(中央大学) 34
 — [2000a] 『『明史』と『明実録』のあいだ——孫氏評価問題をめぐって』『中央大学アジア史研究』24
 — [2000b] 「景泰政権の成立と孫皇太后」『東洋学報』82-1
 — [2002] 「辺防と貿易——中朝関係における永楽期」『中央大学アジア史研究』26
 濱島敦俊 [1981] 「北京図書館蔵『按輿親審檄稿』簡紹」『北海道大学文学部紀要』30-1
 — [1982] 『明代江南農村社会の研究』東京大学出版会
 — [1983] 「北京図書館蔵『莆陽讞牘』簡紹」『北海道大学文学部紀要』32-1
 — [1984] 「明清時代, 中国の地方監獄」『法制史研究』33
 — [1986] 「明代中期の江南商人について」『史朋』20
 — [1988] 「明初城隍考」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院

- [1989]「明末江南郷紳の具体像」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所
- [1993]『明代の判牘』滋賀秀三編『中国法制史』東京大学出版会
- [2001]『総管信仰——近世江南農村社会と民間信仰』研文出版
- 万明 [2000]『中国融入世界的步履——明与清前期海外政策比較研究』社会科学文献出版社
- 傅衣凌 [1982]『明清社会經濟史論文集』人民出版社
- 藤井宏 [1953-54]「新安商人の研究」『東洋学報』36-1~4
- 藤田明良 [1997]「『蘭秀山の乱』と東アジアの海域世界——14世紀の舟山群島と高麗・日本」『歴史学研究』698
- 藤高裕久 [2001]「明初における専制権力の背景について」『史観』（早稲田大学）145
- 藤原利一郎 [1986]『東南アジア史の研究』法蔵館
- 夫馬進 [1980]「明末反地方官士変」『東方学報』（京都）52
- [1981]「明末反地方官士変・補論」『富山大学人文学部紀要』4
- [1990]「万曆二年朝鮮使節の「中華」国批判」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上、汲古書院
- [1993]「明清時代の訟師と訴訟制度」梅原郁編『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所
- [1994]「訟師秘本『蕭曹遺筆』の出現」『史林』77-2
- [1996]「訟師秘本の世界」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- [1997]『中国善会善堂史研究』同朋舎出版
- [2003]「日本現存朝鮮燕行録解題」『京都大学文学部紀要』42
- 編 [1999]『増訂使琉球録解題及び研究』榕樹書林
- フランク, A. G. [2000] 山下範久訳『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店
- 堀地明 [1992]「明末城市の搶米と平糶政策」『社会經濟史学』57-5
- [1995]「明末福建諸都市の火災と防火行政」『東洋学報』77-1/2
- [1999]「明末江南の搶米風潮と救荒政策」『名古屋大学東洋史研究報告』23
- 前迫勝明 [1990]「明初の書宿に関する一考察」明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上、汲古書院
- 真栄平房昭 [1993]「琉球・東南アジア貿易の展開と華僑社会」『九州史学』76
- 増淵龍夫 [1983]『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店
- 松浦章 [1995]「中国第一歴史檔案館所蔵『錦衣衛選簿 南京親軍衛』について」『満族史研究通信』5
- [1997]「『武職選簿』に見る鄧茂七の乱」『満族史研究通信』6
- [1998]「鄭和「下西洋」の随行員の事跡」『東西学術研究所紀要』（関西大学）31
- 編 [2002]『明清時代中国与朝鮮的交流』楽学書局
- 松本隆晴 [1979]「洪武学制改革の政治的意図」『史観』（早稲田大学）101
- [1984]「明代中都建設始末」『東方学』67（同 [2001] 所収）
- [2001]『明代北辺防衛体制の研究』汲古書院
- [2003]「明初の総兵官」『明代史研究会創立三十五年記念論集』汲古書院
- 間野潜龍 [1979]『明代文化史研究』同朋舎
- [1980]「宦官劉瑾と張永との対立」『三田村博士古稀記念東洋史論集』立命館大学人文学会
- 馬淵昌也 [1996]「最近の日本における明清時代を対象とする「社会史」的研究について」『中国史学』6

- 三木聰 [1987]「抗租と阻米」『東洋史研究』45-4（同 [2002] 所収）
- [1988]「抗租と法・裁判」『北海道大学文学部紀要』37-1（同 [2002] 所収）
- [1992]「明代里老人制の再検討」『海南史学』30（同 [2002] 所収）
- [1996]「福建巡撫許孚遠の謀略」『高知大学人文学部研究』4
- [1998]「明清時代の地域社会と法秩序」『歴史評論』580
- [2002]『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会
- 溝口雄三 [1978]「いわゆる東林派人士の思想(上)」『東洋文化研究所紀要』75
- [1980]『中国前近代思想の屈折と展開』東京大学出版会
- [1995]『中国の公と私』研文出版
- 三田村泰助 [1976]『生活の世界歴史2 黄土を拓いた人びと』河出書房新社
- 宮崎市定 [1969]「洪武から永楽へ——初期明朝政権の性格」『東洋史研究』27-4（同 [1992] 所収）
- [1992]『宮崎市定全集』13、岩波書店
- 宮崎正勝 [1997]『鄭和の南海大遠征——永楽帝の世界秩序再編』中央公論社
- 宮澤知之 [1993]「唐より明にいたる貨幣經濟の展開」中村哲編『東アジア専制国家と社会・経済』青木書店
- [1996]「明代贖法の変遷」梅原郁編『前近代中国の刑罰』京都大学人文科学研究所
- [1999]「中国専制国家財政の展開」『岩波講座世界歴史』9
- [2002a]「明初の通貨政策」『鷹陵史学』28
- [2002b]「中国専制国家の財政と物流——宋明の比較」中国史学会編『中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展』東京都立大学出版会
- 村井章介 [1988]『アジアのなかの中世日本』校倉書房
- [1993]『中世倭人伝』岩波書店
- 毛佩琦・李焯然 [1994]『明成祖史論』天津出版社
- 桃木至朗 [1999]「南の海域世界」『岩波講座世界歴史』9
- 百瀬弘 [1980]『明清社会經濟史研究』研文出版
- 森紀子 [1989]「新都の楊氏と小説二題」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所（同 [2005] 所収）
- [2005]『転換期における中国儒教運動』京都大学学術出版会
- 森正夫 [1982]「中国前近代史研究における地域社会の視点」『名古屋大学文学部研究論集』83
- [1988]『明代江南土地制度の研究』同朋舎出版
- [1991]「『寇變紀』の世界」『名古屋大学文学部研究論集』110
- [1995]「明末における秩序変動再考」『中国——社会と文化』10
- [1996]「江南デルタの郷鎮志について——明後半期を中心に」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- 山田賢 [1998]「中国明清時代史研究における「地域社会論」の現状と課題」『歴史評論』580
- 山根幸夫 [1993]「明・清の会典」滋賀秀三編『中国法制史』東京大学出版会
- [1994]「明代の路程書について」『明代史研究』22
- 山本進 [1998]「明清時代の地方統治」『歴史評論』580
- 熊遠報 [1997]「倭寇と明代の「海禁」」村井章介他編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社
- 楊一凡 [1988]『明大誥研究』江蘇人民出版社
- 楊正泰 [1994]『明代駅站考 付一統路程図記、士商類要』上海古籍出版社
- 楊雪峯 [1978]『明代的審判制度』黎明文化事業公司
- 吉尾寛 [2001]『明末の流賊反乱と地域社会』汲古書院

- 樂成頭 [1998] 『明代黃冊研究』 中国社会科学出版社
- 李金明 [1990] 『明代海外貿易史』 中国社会科学出版社
- 李小林他編 [1988] 『明史研究備覽』 天津教育出版社
- 李伯重 [2000] 『江南の早期工業化 1550~1850年』 社会科学文献出版社
- [2002] 『發展と制約 明清江南生産力研究』 聯經出版事業公司
- 李文治 [1993] 『明清時代封建土地關係の鬆解』 中国社会科学出版社
- 他 [1983] 『明清時代の農業資本主義萌芽問題』 中国社会科学出版社
- リヴァシーズ, L. [1996] 君野隆久訳『中国が海を支配したとき——鄭和とその時代』 新書館
- 劉重日 [1989] 姜鎮慶訳『徽州文書の収蔵・整理と研究の現状について』 『東洋学報』 70-3/4
- 梁其姿 [1997] 『施善と教化 明清の慈善組織』 聯經出版事業公司
- 林為楮 [2003] 『明代的江防体制——長江水域防衛の建構と備禦』 明史研究叢刊 7, 明史研究小組
- 林仁川 [1987] 『明末清初私人海上貿易』 華東師範大学出版社
- 呂進貴 [2002] 『明代的巡檢制度——地方治安基層組織及運作』 明史研究叢刊 6, 明史研究小組
- 和田正広 [1985] 『明代の地方官ポストにおける身分制序列に関する一考察——県缺の清代との比較を通じて』 『東洋史研究』 44-1 (同 [2002] 所収)
- [1995] 『中国官僚制の腐敗構造に関する事例研究——明清交替期の軍閥李成梁をめぐって』 九州国際大学社会文化研究所
- [2002] 『明清官僚制の研究』 汲古書院
- 渡昌弘 [1983] 『明初の科挙復活と監生』 『集刊東洋学』 49
- [1986] 『明代捐納入監概観』 『集刊東洋学』 56
- [1990] 『明代監生の回籍について』 明代史研究会他編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』 上, 汲古書院
- [1999] 『明代生員の徭役優免特権をめぐって』 『東方学』 97
- [2003] 『明代監生の増減に関する一検討』 『東洋史論集 (東北大学)』 9
- Brook, T. [1993] *Praying for Power: Buddhism and the Formation of Gentry Society in Late-Ming China*, Council of East Asian Studies, Harvard University and the Harvard-Yenching Institute.
- [2002] *Geographical Sources of Ming-Qing History*, second ed., Center for Chinese Studies, The University of Michigan.
- Brokaw, C. J. [1991] *The Ledgers of Merit and Demerit: Social Change and Moral Order in Late Imperial China*, Princeton University Press.
- Chia, Lucille [2002] *Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries)*, Harvard University Asia Center.
- Clunas, C. [1991] *Superfluous Things: Material Culture and Social Status in Early Modern China*, Polity.
- Dardess, John W. [1982] *Confucianism and Autocracy: Professional Elites in the Founding of the Ming Dynasty*, University of California Press.
- Dennerline, J. [1981] *The Chia-ting Loyalists: Confucian Leadership and Social Change in Seventeenth Century*, Yale University Press.
- Elman, B. A. [2000] *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China*, University of California Press.
- Esherick, J. W. and Rankin, M. B. (eds.) [1990] *Chinese Local Elites and Patterns of Dominance*, University of California Press.

- Farmer, Edward L. [1976] *Early Ming Government: The Evolution of Dual Capitals*, Harvard University Press.
- Huang, R. [1974] *Taxation and Governmental Finance in Sixteenth-Century Ming China*, Cambridge University Press.
- Ko, D. [1994] *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth Century China*, Stanford University Press.
- Levathes, Louise [1994] *When China ruled the Sea: The Treasure Fleet of The Dragon Throne, 1405-1433*, Oxford University Press.
- Marks, R. B. [1998] *Tigers, Rice, Silk, and Silt: Environment and Economy in Late Imperial South China*, Cambridge University Press.
- Perdue, P. C. [1987] *Exhausting the Earth: State and Peasant in Hunan, 1500-1800*, Council on East Asian Studies at Harvard University.
- Smith, P. J. and von Glahn, R. (eds.) [2003] *The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History*, Harvard University Asia Center.
- Spence, J. D. and Wills, J. E. (eds.) [1979] *From Ming to Ch'ing: Conquest, Region, and Continuity in Seventeenth-Century China*, Yale University Press.
- Struve, L. A. [1984] *The Southern Ming 1644-1662*, Yale University Press.
- von Glahn, R. [1996] *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000-1700*, University of California Press.
- Wakeman, F. Jr. [1985] *The Great Enterprise*, University of California Press.

第9章 清 代

- 浅井紀 [1990] 『明清時代民間宗教結社の研究』 研文出版
- [1993] 『羅教の継承と変容——無極正派』 『明清時代の法と社会 和田博徳教授古稀記念』 汲古書院
- 足立啓二 [1978a] 『明末清初の一農業経営——『沈氏農書』の再評価』 『史林』 61-1
- [1978b] 『大豆粕流通と清代の商業的農業』 『東洋史研究』 37-3
- [1981] 『清代華北の農業経営と社会構造』 『史林』 64-4
- [1982] 『清代蘇州府における地主的土地所有の展開』 『文学部論叢』 (熊本大学) 9
- [1983] 『清~民国初期における農業経営の発展——長江流域の場合』 中国史研究会『中国史像の再構成』 文理閣
- [1991] 『清代前期における国家と錢』 『東洋史研究』 49-4
- [1998] 『専制国家史論——中国史から世界史へ』 柏書房
- 阿南惟敬 [1980] 『清初軍事史論考』 甲陽書房
- 安部健夫 [1957] 『米穀需給の研究——「雍正史」の一章としてみた』 『東洋史研究』 15-4 (同 [1971] 所収)
- [1971] 『清代史の研究』 創文社
- 天野元之助 [1978] 『中国農業経済論』 全3冊, 龍溪書舎 (改訂復刻版)
- [1979] 『中国農業の地域的展開』 龍溪書舎
- 荒武達朗 [1998] 『清朝後期東北地方における移住民の定住と展開』 『東方学』 96
- [1999] 『清代乾隆年間における山東省登州府・東北地方間の人々の移動と血縁組織』 『史学雑誌』 108-2

- 石橋崇雄 [1988]「清初ハン(han)権の形成過程」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院
 — [1994]「清初皇帝権の形成過程——特に「丙子年四月〈秘録〉登ハン大位檔」にみえる太宗ホン=タイジの皇帝即位記事を中心として」『東洋史研究』53-1
 — [1997]「マンジュ(manju, 満洲)王朝論——清朝国家論序説」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院
 — [2000a]『大清帝国』講談社
 — [2000b]「無圏点満洲文檔案『先ゲンギェン=ハン賢行典例・全十七条』」『国史館史学』8
 石橋秀雄 [1956]「清朝中期の畿輔旗地政策——特に雍正、乾隆年間の制度上にあらわれた旗地の崩壊防止と旗人の救済に関する政策を中心として(1)(2)」『東洋学報』39-2~3
 — [1989]「清代官僚の動向研究」『清代漢人官僚に関する一考察』同『清代史研究』緑蔭書房
 石濱裕美子 [2001]『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店
 石原潤 [1973]「河北省における明・清・民国時代の定期市」『地理学評論』46-4
 — [1980]「華中東部における明・清・民国時代の伝統的市(market)について」『人文地理』32-3
 稲田清一 [1992]「清末江南の鎮董について——松江府・太倉州を中心として」森正夫編『江南デルタ市鎮研究』名古屋大学出版会
 — [1993]「清代江南における救荒と市鎮——宝山県・嘉定県の「賑」をめぐって」『甲南大学紀要(文学)』86
 稲葉岩吉他 [1939]『興京二道河子旧老城』建国大学
 井波陵一 [1996]「康熙辛卯江南科場案について」『東方学報』(京都) 68
 井上進 [1989]「張氏顧亭林先生年譜補正」岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所
 — [1992]「樸学の背景」『東方学報』(京都) 64
 — [1994]『顧炎武』白帝社
 井上徹 [2000]『中国の宗族と国家の礼制——宗法主義の視点からの分析』研文出版
 伊原弘介 [1988]「清朝郷村支配の構造——順荘法に基づいて(1)浙西杭嘉湖三府の場合」『静岡大学教養部研究報告(人文・社会科学)』24-2
 — [1990]「清朝郷村支配の構造——順荘法に基づいて(2)湖州府・杭州府の場合」『静岡大学教養部研究報告(人文・社会科学)』26-1
 岩井茂樹 [2000a]「清代の版図順荘法とその周辺」『東方学報』(京都) 72
 — [2000b]「武進県『実徴堂簿』と田賦徴収機構」夫馬進編『中国明清地方檔案の研究』京都大学大学院文学研究科東洋史研究室
 — [2001]「武進県の田土推収と城郷関係」森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
 — [2004]『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会
 岩見宏 [1957]「雍正時代における公費の一考察」『東洋史研究』15-4
 — [1963]「養廉銀制度の創設について」『東洋史研究』22-3
 上田信 [1981]「明末清初・江南の都市の「無頼」をめぐる社会関係」『史学雑誌』90-11
 — [1986]「村に作用する磁力について——浙江省郵県勤勇村(鳳溪村)の履歴」『中国研究月報』40-1~2
 — [1988]「明清期・浙東における生活循環」『社会経済史学』54-2
 — [1995]『伝統中国——「盆地」「宗族」にみる明清時代』講談社
 — [1999]『森と緑の中国史——エコロジカル・ヒストリーの試み』岩波書店
 — [2002]『トラが語る中国史——エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社

- 白井佐知子 [2005]『徽州商人の研究』汲古書院
 江嶋寿雄 [1999]『明代清初の女直史研究』中国書店
 太田出 [2000]「清中期江南デルタ市鎮をめぐる犯罪と治安——緑營の汛防制度の展開を中心として」『法制史研究』50
 大谷敏夫 [1991]『清代政治思想史研究』汲古書院
 — [2002]『清代の政治と文化』朋友書店
 大野晃嗣 [2001]「清代加級考——中国官僚制度の一側面」『史料』84-6
 岡洋樹 [1988]「ハルハ・モンゴルにおける清朝の盟旗制支配の成立過程」『史学雑誌』97-2
 — [1992]「乾隆帝の対ハルハ政策とハルハの対応」『東洋学報』73-1/2
 — [1994]「清朝国家の性格とモンゴル王公」『史滴』16
 岡田英弘 [1974]「ドルベン・オイラトの起源」『史学雑誌』83-6
 — [1979]『康熙帝の手紙』中公新書
 岡本さえ [1976]「武臣論」『東洋文化研究所紀要』68
 — [1996]『清代禁書の研究』東京大学出版会
 岡本隆司 [1999]『近代中国と海関』名古屋大学出版会
 — [2001]「清末票法の成立——道光期阿准塩政改革再論」『史学雑誌』110-12
 小田則子 [2000]「清代の華北における公議」『名古屋大学東洋史研究報告』25
 愛宕元 [1991]『中国の城郭都市——殷周から明清まで』中公新書
 小沼孝博 [2004]「清朝によるオーロト各オトク支配の展開——モンゴル諸部に対する「旗」支配の導入」『東洋学報』85-4
 小山正明 [1957-58]「明末清初の大土地所有」『史学雑誌』66-12, 67-1(同 [1992]所収)
 — [1992]『明清社会経済史研究』東京大学出版会
 何炳棣 [1993]『寺田隆信・千種真一訳『科挙と近世中国社会——立身出世の階梯』平凡社
 柏祐賢 [1944]『北支農村経済社会の構造とその展開』京都帝国大学人文科学研究所(同 [1985]所収)
 — [1985]『柏祐賢著作集』第2巻, 京都産業大学出版会
 片岡一忠 [1991]『清朝新疆統治研究』雄山閣出版
 — [1992-94, 96]「洪亮吉伝(初稿)」1~4『歴史人類』20~22, 24
 — [1998]「朝賀規定からみた清朝と外藩・朝貢国の関係」『駒沢史学』52
 片岡芝子 [1959]「明末清初の華北における農家経営」『社会経済史学』25-2/3
 片山剛 [1982a]「清末広東省珠江デルタの図甲表とそれをめぐる諸問題——税糧・戸籍・同族」『史学雑誌』91-4
 — [1982b]「清代広東珠江デルタの図甲制について——税糧・戸籍・同族」『東洋学報』63-3/4
 — [1984a]「清末広東省珠江デルタの図甲制の諸矛盾とその改革(南海県)」『海南史学』21
 — [1984b]「清末広東珠江デルタの図甲表と同族支配の再編(順徳県・香山県)」『中国近代史研究』4
 — [1993]「珠江デルタ桑園圃の構造と治水組織——清代乾隆年間~民国期」『東洋文化研究所紀要』121
 — [1996]「清末・民国期, 珠江デルタ順徳県の集落と「村」の領域——旧中国村落の再検討へ向けて」『東洋文化』76
 — [2001]「珠江デルタの市場と市鎮社会——19世紀初頭順徳県龍山堡の大岡墟」森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
 — [2002]「清代珠江デルタの里甲経営と地域社会——順徳県龍江堡」『待兼山論叢(史学篇)』36
 加藤繁 [1953]「清代に於ける村鎮の定期市」『支那経済史考証』下, 東洋文庫

- 加藤直人 [1983a] 「天理図書館蔵『伊犁奏摺』について」『史叢』32
 —— [1983b] 「一七二三年ロプザン・ダンジンの反乱——その反乱前夜を中心として」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社
 —— [1986] 「ロプザン・ダンジンの叛乱と清朝——叛乱の経過を中心として」『東洋史研究』45-3
 —— [1993] 「清入関前の法制史料」滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究』東京大学出版会
 —— [1997] 「大興安嶺地区における「民族」と「地域」——光緒11年、布特哈総管衙門副総管ボドロの上訴をめぐる」『歴史学研究』698
- 加藤雄三 [2000-01] 「清代の胥吏取引について」『法学論叢』(京都大学) 147-2, 149-1
- 狩野直喜 [1984] 『清朝の制度と文学』みすず書房
- 唐澤靖彦 [1998] 「清代における訴状とその作成者」『中国——社会と文化』13
- 川勝守 [1980] 『中国封建国家の支配構造——明清賦役制度史の研究』東京大学出版会
 —— [1992] 『明清江南農業経済史研究』東京大学出版会
 —— [1999] 『明清江南市鎮社会史研究——空間と社会形成の歴史学』汲古書院
 —— [2004] 『中国城郭都市社会史研究』汲古書院
 —— 編 [1993] 『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』中国書店
- 河内良弘 [1992] 『明代女真史の研究』同朋舎出版
- 神田信夫 [1964] 「清朝の実録について」『歴史教育』12-9
 —— [1972] 「満洲 (Manju) 国号考」『山本博士選歴記念東洋史論叢』山川出版社
 —— [1979] 「清朝興起史の研究——序説「満文老檔」から「旧満洲檔」へ」『明治大学人文科学研究年報』20
 —— [1989] 「後金国の山城・都城の研究」『明治大学人文科学研究年報』30
 —— [2005] 『清朝史論考』山川出版社
 —— 他 [2003] 『内国史院檔 天聰七年』東洋文庫
- 菊池俊彦 [1998] 「北方世界とロシアの進出」『岩波講座世界歴史』13
- 岸本美緒 [1997a] 『清代中国の物価と経済変動』研文出版
 —— [1997b] 「明清時代における「找価回贖」問題」『中国——社会と文化』12
 —— [1998] 『東アジアの「近世」』山川出版社
 —— [1999] 『明清交替と江南社会——17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会
 —— [2000] 「中国史学 前近代II 宋代から清代中期を中心に」『東方学』100
 —— [2002] 「皇帝と官僚・紳士——明から清へ」『岩波講座 天皇と王権を考える』2
- 北村敬直 [1953] 「清代の商品市場について」『経済学雑誌』28-3/4 (同 [1972] 所収)
 —— [1972] 『清代社会経済史研究』大阪市立大学経済学会
 —— [1983] 「清初における河南省孟県の綿布について」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所
- キューン、フィリップ [1996] 谷井俊仁・谷井陽子訳『中国近世の靈魂泥棒』平凡社
- 楠木賢道 [1994] 「康熙三〇年のダグル駐防佐領の編立」『松村潤先生古稀記念 清代史論叢』汲古書院
 —— [1999a] 「天聰年間におけるアイシン国の内モンゴル諸部に対する法支配の推移」『社会文化史学』40
 —— [1999b] 「清初、入関前におけるハン・皇帝とホルチン部首長層の婚姻関係」『内陸アジア史研究』14
 —— [2001] 「清朝の八旗に組み込まれたジャルト部モンゴル族」『自然・人間・文化——地域統合と民族統合』筑波大学大学院歴史・人類学研究科
- 黒田明伸 [1994] 『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会

- [2003] 『貨幣システムの世界史』岩波書店
- 伍躍 [2000a] 「清代捐納制度論考——報捐を中心に」夫馬進編『中国明清地方檔案の研究』京都大学大学院文学研究科東洋史研究室
 —— [2000b] 『明清時代の徭役制度と地方行政』大阪経済法科大学出版部
 —— [2004] 「清代の捐納制度と候補制度について——捐納出身者の登用問題をを中心に」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所
- 洪性鳩 [2003] 「明末清初の徽州における宗族と徭役分担公議——祁門県五都桃源洪氏を中心に」『東洋史研究』61-4
- 高銘鈴 [2002] 「清代台湾の財政構造に関する一考察」『九州大学東洋史論集』30
- 香坂昌紀 [1972, 75, 83-84] 「清代濬壑関の研究(1)~(4)」『東北学院大学論集(歴史学・地理学)』3, 5, 13~14
 —— [1985] 「清代における大運河の物貨流通——乾隆年間、淮安関を中心として」『東北学院大学論集(歴史学・地理学)』15
 —— [1986] 「清代の餽送——江蘇巡撫吳存礼を中心にとして」『東北学院大学論集(歴史学・地理学)』16
 —— [1990] 「清代の北新関と杭州」『東北学院大学論集(歴史学・地理学)』22
 —— [1991] 「清代中期の杭州と商品流通——北新関を中心として」『東洋史研究』50-1
 —— [1992] 「雍正年間の関制改革とその背景」『東北大学東洋史論集』5
 —— [1993] 「清朝中期の国家財政と関稅收入」『明清時代の法と社会 和田博徳教授古稀記念』汲古書院
- 小口彦太 [1986] 「清代中国の刑事裁判における成案の法源性」『東洋史研究』45-2
- 小林一美 [1983] 「齊王氏の反乱——嘉慶白蓮教反乱研究序説」青年中国研究者会議『中国民衆反乱の世界(続)』汲古書院
- 近藤秀樹 [1958] 「清代の銓選——外補制の成立」『東洋史研究』17-2
 —— [1963] 「清代の捐納と官僚社会の終末(上)(中)(下)」『史林』46-2~4
- 佐伯富 [1956] 『清代塩政の研究』東洋史研究会
 —— [1970-72] 「清代雍正朝における養廉銀の研究——地方財政の成立をめぐる」『東洋史研究』29-1, 29-2/3, 30-4 (同 [1977] 所収)
 —— [1977] 『中国史研究』第三, 東洋史研究会, 同朋舎出版
 —— [1987] 『中国塩政史の研究』法律文化社
- 佐伯有一他編註 [1975] 『仁井田陸博士輯北京工商ギルド資料集』全6冊, 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター
- 酒井忠夫 [1997-2002] 『酒井忠夫著作集』6冊, 国書刊行会
- 佐口透 [1963] 『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館
 —— [1986] 『新疆民族史研究』吉川弘文館
 —— [1995] 『新疆ムスリム研究』吉川弘文館
- 佐々木正哉 [1963] 「咸豊二年 鄭県の抗糧暴動」近代中国研究委員会『近代中国研究』第五輯, 東京大学出版会
- 佐藤公彦 [1999] 『義和団の起源とその運動——中国民衆ナショナリズムの誕生』研文出版
- 佐藤長 [1972] 「ロプザンダンジンの反乱について」『史林』55-6
 —— [1973] 「近世青海諸部落の起源(上)(下)」『東洋史研究』32-1, 32-3 (「青海オイラット諸部落の起源」と改題して, 同 [1986] 所収)
 —— [1986] 『中世チベット史研究』同朋舎出版
- 真田安 [1977] 「オアシス・バーザールの静態研究——19世紀後半カシュガリアの場合」『中央大学

- 大学院研究年報』6
 — [1983]「創設期清伯克制からみたカシュガリア・オアシス社会」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社
 佐野公治 [1988]『四書学史の研究』創文社
 滋賀秀三 [1984]『清代中国の法と裁判』創文社
 — [1987]「中国法文化の考察——訴訟のあり方を通じて」『東西法文化——哲学年報 (1986)』
 — [1998]「清代の民事裁判について」『中国——社会と文化』13
 — [2003a]「大清律例をめぐって——〔附〕会典, 則例, 省例等」同『中国法制史論集 (法典と刑罰)』創文社
 — [2003b]「中国法の基本的性格」同『中国法制史論集 (法典と刑罰)』創文社
 — [2003c]『中国法制史論集 (法典と刑罰)』創文社
 — 編 [1993]『中国法制史——基本資料の研究』東京大学出版会
 重田徳 [1956]「清初における湖南米市場の一考察」『東洋文化研究所紀要』10 (同 [1975] 所収)
 — [1975]『清代社会経済史研究』岩波書店
 斯波義信 [2002]『中国都市史』東京大学出版会
 澁谷浩一 [1991]「露清関係とローレンツ・ラング——キャプタ条約締結に向けて」『東洋学報』72-3/4
 — [1994]「キャプタ条約以前のロシアの北京貿易——清側の受入れ体制を中心にして」『東洋学報』75-3/4
 渋谷裕子 [1990]「明清時代, 徽州江南農村社会における祭祀組織について——『祝聖会簿』の紹介 (1) (2)」『史学』59-1~2/3
 — [1995]「清代徽州農村社会における生員のコミュニティについて」『史学』64-3
 — [1997]「徽州文書にみられる「会」組織について」『史学』67-1
 — [2000]「清代徽州休寧県における糊民像」山本英史編『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会
 — [2002]「安徽省休寧県龍田郷活田嶺村における山林経営方式の特徴」『史学』71-4
 杉山清彦 [1998]「清初正藍旗考——姻戚関係よりみた旗王権力の基礎構造」『史学雑誌』107-7
 — [2001a]「八旗旗王制の成立」『東洋学報』83-1
 — [2001b]「清初八旗における最有力軍団——太祖ヌルハチから摂政王ドルゴンへ」『内陸アジア史研究』16
 — [2001c]「大清帝国史のための覚書——セミナー「清朝社会と八旗制」をめぐって」『満族史研究通信』10
 鈴木中正 [1971]『清朝中期史研究』燎原書房 (復刊)
 — [1974]『中国史における革命と宗教』東京大学出版会
 — 編 [1982]『千年王国の民衆運動の研究——中国・東南アジアにおける』東京大学出版会
 鈴木秀光 [2002]「杖斃考——清代中期死刑案件処理の一考察」『中国——社会と文化』17
 鈴木博之 [1990]「清代における旗産の展開」『山形大学史学論集』10
 鈴木真 [2001]「雍正帝による旗王統制と八旗改革——鑲紅旗旗王スヌの断罪事件とその意義」『史境』42
 周藤吉之 [1944]「清初に於ける畿輔旗地の成立過程 (上) (下)」『東方学報』(東京) 15-1~2
 全漢昇 [1934]『中国行会制度史』新生命書局
 相田洋 [1994]『中国中世の民衆文化——呪術・規範・反乱』中国書店
 園田一亀 [1991]『鞞鞞漂流記』平凡社東洋文庫
 台湾総督府編 [1972]『臨時台湾旧慣調査会第一部報告 清国行政法』汲古書院 (復刊)

- 高嶋航 [2000a]「清代の賦役全書」『東方学報』(京都) 72
 — [2000b]「呉県・太湖片の経造」夫馬進編『中国明清地方檔案の研究』京都大学大学院文学研究科東洋史研究室
 高遠拓児 [1999]「清代秋審制度と秋審條款——とくに乾隆・嘉慶年間を中心として」『東洋学報』81-2
 高村雅彦 [2000]『中国江南の都市とくらし——水のまちの環境形成』山川出版社
 滝野邦雄 [2004]『李光地と徐乾学——康熙朝前期における党争』白桃書房
 滝野正二郎 [1985]「清代淮安関の構成と機能について」『九州大学東洋史論集』14
 — [1986, 94]「清代乾隆年間における官僚と塩商(1) (2)——両淮塩引案を中心として」『九州大学東洋史論集』15, 22
 — [1988]「清代常関における包攬について」『山口大学文学会志』39
 — [1993]「清代の鳳陽関をめぐる物資流通について」『明清時代の法と社会 和田博徳教授古稀記念』汲古書院
 — [2001]「清代乾隆年間の常関徴税額に関する一考察」『九州大学東洋史論集』29
 田尻利 [1999]『清代農業商業化の研究』汲古書院
 田仲一成 [1989]「蕭山県長河鎮米姓祠産簿剖析」『東洋文化研究所紀要』108
 田中正俊 [1984]「明・清時代の問屋制前貸生産について」西嶋定生博士選歴記念論叢編集委員会編『東アジア史における国家と農民』山川出版社
 谷井俊仁 [1988]「清代外省の警察機能について——割辦案を例に」『東洋史研究』46-4
 — [1994]「順治時代政治史試論」『史林』77-2
 — [1999-2004]「大清律輯註考釈(1)~(6)」『人文論叢』(三重大学) 16~21
 — [2002]「清朝官俸制における合理性」『Historia Juris 比較法史研究——思想・制度・社会』10
 — [2005]「一心一徳考——清朝における政治的正当性の論理」『東洋史研究』63-4
 谷井陽子 [1989]「道光・咸豊期外省における財務基調の変化——張集馨の生涯を軸に」『東洋史研究』47-4
 — [1990]「戸部と戸部則例」『史林』73-6
 — [1995]「清代則例省例考」『東方学報』(京都) 67
 — [2000]「做招から叙供へ——明清時代における審理記録の形式」夫馬進編『中国明清地方檔案の研究』京都大学大学院文学研究科東洋史研究室
 — [2005]「八旗制度再考(一)——連旗制論批判」『天理大学学報』208
 グニエルス, クリスマン [1992]「明末清初における甘蔗栽培の新技術——その出現及び歴史的意義」神田信夫先生古稀記念論集編纂委員会編『清朝と東アジア』山川出版社
 — [1995]「16~17世紀福建の竹紙製造技術——『天工開物』に詳述された製紙技術の時代考証」『アジア・アフリカ言語文化研究』48/49
 谷口規矩雄 [2002]「漢口鎮の成立をめぐって」『愛大史学』10
 チェイフィー, J. W. [2002] 鈴木弘一郎訳「中国社会と科学——欧米における研究動向」『中国——社会と文化』17
 趙世瑜 [2002]『狂歌与日常——明清以来の廟会与民間社会』生活・読書・新知三聯書店
 陳学文 [1993]『明清時期杭嘉湖市鎮史研究』群言出版社
 — [2000]『明清時期太湖流域的商品经济与市場網絡』浙江人民出版社
 鄭振滿・陳春聲編 [2003]『民間信仰与社会空間』福建人民出版社
 寺田隆信 [1958]「蘇・松地方に於ける都市の棉業商人について」『史林』41-6
 — [1968]「蘇州踰布業の経営形態」『東北大学文学部研究年報』18 (同 [1972] 所収)
 — [1971]「明清時代における商品生産の展開」『岩波講座世界歴史』12

- [1972]『山西商人の研究——明代における商人および商業資本』東洋史研究会
 寺田浩明 [1997]『権利と冤抑——清代聴訟世界の全体像』『法学』(東北大学) 61-5
 —— [2003]『中国清代民事訴訟と「法の構築」——『淡新檔案』の一事例を素材にして』『法社会学』 58
 杜家驥 [1998]『清皇族と国政関係研究』五南図書出版公司
 黨武彦 [1990]『乾隆初期の通貨政策——直隸省を中心として』『九州大学東洋史論集』 18
 —— [2003]『乾隆末年における小銭問題について』『九州大学東洋史論集』 31
 中見立夫 [2000]『中央ユーラシアの周縁化』小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社
 中村茂夫 [1973]『清代刑法研究』東京大学出版会
 —— [1979]『伝統中国法＝雛形説に対する一試論』『法政理論』(新潟大学) 12-1
 中村正人 [1993]『清律誤殺初考』梅原都編『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所
 並木頼寿 [1983]『清代河南省の漕糧について』『東洋大学東洋史研究報告』 2
 奈良修一 [1993]『十七世紀中国における生糸生産と日本への輸出』『明清時代の法と社会』和田博徳教授古稀記念』汲古書院
 檜木野宣 [1975]『清代重要職官の研究』風間書房
 仁井田陸 [1951]『中国の社会とギルド』岩波書店
 西川喜久子 [1981]『清代珠江下流域の沙田について』『東洋学報』 63-1/2
 —— [1983-84]『順徳北門羅氏族譜』考(上)(下)『北陸史学』 32~33
 —— [1988]『順徳団練総局の成立』『東洋文化研究所紀要』 105
 —— [1994, 96]『珠江デルタの地域社会——新会県のばあい』『東洋文化研究所紀要』 124, 130
 西村元照 [1974]『清初の土地丈量について——土地台帳と隠田をめぐる国家と郷紳の対抗関係を基軸として』『東洋史研究』 33-3
 —— [1976]『清初の包攬——私徴体制の確立、解禁から請負徴税制へ』『東洋史研究』 35-3
 則松彰文 [1985]『雍正期における米穀流通と米価変動——蘇州と福建の連関を中心として』『九州大学東洋史論集』 14
 —— [1989]『清代中期の経済政策に関する一試論——乾隆十三年(一七四八)の米貴問題を中心に』『九州大学東洋史論集』 17
 —— [1990]『清代中期の浙西における食糧問題』『東洋史研究』 49-2
 —— [1992]『清代における「境」と流通——食糧問題の一齣』『九州大学東洋史論集』 20
 —— [1993]『清代中期江南における流行衣料について』『明清時代の法と社会』和田博徳教授古稀記念』汲古書院
 —— [1998]『清代中期社会における奢侈・流行・消費——江南地方を中心として』『東洋学報』 80-2
 萩原守 [1990]『一八世紀ハルハ・モンゴルにおける法律の推移』『東洋史研究』 49-3
 服部宇之吉 [1966]『清国通考』大安(復刊)
 羽田明 [1963]『Ghazat-i-Muslimin — Ya'qub-bag 反乱の一史料』『遊牧社会史探究』 18
 —— [1982]『中央アジア史研究』臨川書院
 濱島敦俊 [2001]『総管信仰——近世江南農村社会と民間信仰』研文出版
 ——他編 [1994]『華中・南デルタ農村実地調査報告書』大阪大学文学部
 濱田正美 [1973]『ムッラー・ピラールの『聖戦記』について』『東洋学報』 55-4
 —— [1983]『19世紀ウイグル歴史文献序説』『東方学報』 55
 —— [1998]『モグール・ウルスから新疆へ——東トルキスタンと明清王朝』『岩波講座世界歴史』 13
 林和生 [1980]『明清時代、広東の墟と市——伝統的市場の形成と機能に関する一考察』『史林』 63-

- 1
 —— [1984]『中国近世における地方都市の発達——太湖平原烏青鎮の場合』梅原都編『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所
 林田芳雄 [1996]『鄭氏台湾政權の成立過程』『史窓』 53
 潘喆・康世儒 [1984]『獲鹿県編審冊初歩研究』『清史研究集』第3輯, 中国人民大学出版社
 范金民 [1998]『明清江南商業的發展』南京大学出版社
 —— [2003]『岩井茂樹訳「清代蘇州都市文化繁栄の実写——「姑蘇繁華園」』『都市文化研究』 2
 樊樹志 [1987a]『明清江南市鎮と郷村の都市化について』『史泉』 65
 —— [1987b]『明清江南市鎮の実態分析——蘇州府吳江県を中心として』『中国近代史研究』 5
 —— [1988]『明清江南市鎮の実態分析——湖州府を中心として』『九州大学東洋史論集』 16
 —— [1990]『明清江南市鎮探微』復旦大学出版社
 坂野正高 [1970]『外交交渉における清末官人の行動様式——一八五四年の条約改正交渉を中心として』『近代中国外交史研究』岩波書店
 —— [1973]『近代中国政治外交史』東京大学出版会
 平野聡 [2004]『清帝国とチベット問題』名古屋大学出版会
 夫馬進 [1996]『訟師秘本の世界』小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
 —— [1997]『中国善会善堂史研究』同朋舎出版
 ホアン, フィリップ [1998]『唐澤端彦訳「中国における法廷裁判と民間調停——清代の公定表現と実践」序論』『中国——社会と文化』 13
 星斌夫 [1971a]『明清時代交通史の研究』山川出版社
 —— [1971b]『大運河——中国の漕運』近藤出版社
 細谷良夫 [1968]『清朝に於ける八旗制度の推移』『東洋学報』 51-1
 —— [1972]『畿輔旗地の成立と性格』『一関高等工業専門学校研究紀要』 7
 —— [1983]『雍正朝におけるニルの名号呼称について』藤雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社
 —— [1984]『三藩の乱の再検討——尚可喜一族の動向を中心に』『東北大学東洋史論集』 1
 —— [1991]『中国東北部における清朝の史跡 1986-1990年』平成2年度科学研究費補助金(総合研究B) 成果報告書 No. 3
 —— [2003]『三藩の史跡——福州・広州・桂林の旅』『滿族史研究』 2
 堀直 [1979]『清朝の回疆統治についての二、三の問題——ヤールカンドの一史料の検討を通じて』『史学雑誌』 88-3
 —— [2001]『回疆社会経済史研究とマンジュ語史料——佐口透氏所蔵の一文書の紹介』『滿族史研究通信』 10
 マカートニー, ジョージ [1975] 坂野正高訳『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫
 増井寛也 [1993]『滿族入関前のムクンについて——『八旗滿洲氏族通譜』を中心に』『立命館文学』 528
 —— [1999a]『明末建州女直の有カムクン(シャジのフチャ・ハラ)について』『立命館文学』 559
 —— [1999b]『明末のワルカ部女直とその集団構造について』『立命館文学』 562
 —— [2001]『グチュ gucu 考——ヌルハチ時代を中心として』『立命館文学』 572
 松浦章 [1983]『清代における沿岸貿易について——帆船と商品流通』小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所
 —— [1985]『清代における山東・盛京間の海上交通について』『東方学』 70
 —— [1988a]『清代漢口の民船業について』『海事史研究』 45
 —— [1988b]『清代寧波の民船業について』『関西大学東西学術研究所紀要』 21

- [1988c] 「清代福建の海船業について」『東洋史研究』47-3
- [1989] 「清代客商と遠隔地商業」『関西大学東西学術研究所紀要』22
- [2002] 『清代海外貿易史の研究』朋友書店
- [2003] 『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林
- [2004] 『清代上海沙船航運業史の研究』関西大学出版部
- 松浦茂 [1987] 「清朝辺民制度の成立」『史林』70-4
- [1991] 「18世紀末アムール川下流地方の辺民組織」『鹿児島大学法文学部紀要（人文学科論集）』34
- [1995] 『中国歴史人物選 11 清の太祖ヌルハチ』白帝社
- [1996] 「十八世紀アムール川下流地方のホジホン」『東洋史研究』55-2
- [1997] 「一八世紀のアムール川中流地方における民族の交替——八姓と七姓ヘジェの移住をめぐる」『東洋学報』79-3
- [1998] 「十七世紀アムール川中流地方住民の経済活動」『東方学』95
- 松田吉郎 [2002] 『明清時代華南地域史研究』汲古書院
- 松村潤 [1969] 「崇徳の改元と大清の国号について」『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』同記念会
- [1983] 「シュルガチ考」護雅夫編『内陸アジアと西アジアの社会と文化』山川出版社
- [1992] 「天聰九年のチャハル征討をめぐる諸問題」『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』山川出版社
- [2001] 『清太祖実録の研究』『東北アジア文献研究会』
- 三木聰 [2002] 『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会
- 三田村泰助 [1965] 『清朝前史の研究』東洋史研究会
- 宮崎市定 [1991a] 「雍正殊批論旨解題——その史料的价值」『宮崎市定全集』14, 岩波書店
- [1991b] 「雍正帝——中国の独裁君主」『宮崎市定全集』14, 岩波書店
- [1991c] 「清朝における国語問題の一面」『宮崎市定全集』14, 岩波書店
- [1991d] 「清代の胥吏と幕友——特に雍正朝を中心として」『宮崎市定全集』14, 岩波書店
- [1992a] 「東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会」『宮崎市定全集』2, 岩波書店
- [1992b] 「素朴主義と文明主義再論」『宮崎市定全集』2, 岩波書店
- [1993a] 「中国政治論集——王安石から毛沢東まで」『宮崎市定全集』別巻, 岩波書店
- [1993b] 「科挙史」『科挙——中国の試験地獄』『宮崎市定全集』15, 岩波書店
- 宮崎洋一 [1991] 「清朝前期の石炭業」『史学雑誌』100-7
- [1994] 「明清時代、森林資源政策の推移——中国における環境認識の変遷」『九州大学東洋史論集』22
- [1997] 「清代十八世紀の水害とその対策」『史淵』134
- 宮脇淳子 [1981] 「17世紀のオイラット——「ジュンガル・ハーン国」に対する疑問」『史学雑誌』90-10
- [1983] 「モンゴル=オイラット関係史——十三世紀から十七世紀まで」『アジア・アフリカ言語文化研究』25
- [1995] 『最後の遊牧帝国——ジュンガル部の興亡』講談社
- 村上信明 [2002] 「乾隆期の繙訳科挙と蒙古旗人官僚の台頭」『社会文化史学』43
- [2003] 「乾隆期中葉以降の藩部統治における蒙古旗人官僚の任用」『史境』47
- 百瀬弘 [1980] 『明清社会経済史研究』研文出版
- 森紀子 [1983] 「清代四川の塩業資本——富榮廠を中心に」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所
- [1987] 「清代四川の移民経済」『東洋史研究』45-4

- 森正夫 [1985] 「「郷族」をめぐる」『東洋史研究』44-1
- [1999] 「清代江南デルタの郷鎮志と地域社会」『東洋史研究』58-2
- 編 [1992] 『江南デルタ市鎮研究——歴史学と地理学からの接近』名古屋大学出版会
- 森川哲雄 [1976] 「チャハル・ハオトクとその分封について」『東洋学報』58-1/2
- [1983a] 「チャハルのブルニ親王の乱をめぐる」『東洋学報』64-1/2
- [1983b] 「アムルサナをめぐる露清交渉始末」『九州大学歴史学・地理学年報』7
- 森田明 [1974] 『清代水利史研究』亜紀書房
- [1976] 「清代の「畿園」制とその背景」『社会経済史学』42-2
- [2002] 『清代の水利と地域社会』中国書店
- 安野省三 [1985] 「中国の異端・無頼」木村尚三郎他編『中世史講座』7, 学生社
- [2002] 「王穆の西郷県志」『東洋学報』84-2
- 柳澤明 [1988] 「キャプタ条約への道程——清の通商停止政策とイズマイロフ使節団」『東洋学報』69-1/2
- [1989] 「キャプタ条約以前の外モンゴル—ロシア国境地帯」『東方学』77
- [1994] 「いわゆる「ブトハ八旗」の設立について」『松村潤先生古稀記念 清代史論叢』汲古書院
- [1997] 「清代黒龍江における八旗制の展開と民族の再編」『歴史学研究』698
- [2001] 「八旗再考」『歴史と地理』541
- 山口端鳳 [1963] 「順夷汗のチベット支配に至る経緯」『岩井博士古稀記念典籍論集』大安
- 山田賢 [1995] 「移住民の秩序——清代四川地域社会史研究」名古屋大学出版会
- [1998a] 「中国の秘密結社」講談社
- [1998b] 「地方社会と宗教反乱——18世紀中国の光と影」『岩波講座世界歴史』13
- [2001] 「「官逼民反」考——嘉慶白蓮教反乱の「叙法」をめぐる試論」『名古屋大学東洋史研究報告』25
- 山根幸夫 [1995] 『明清華北定期市の研究』汲古書院
- 山本進 [2002a] 「清代の市場構造と経済政策」名古屋大学出版会
- [2002b] 『明清時代の商人と国家』研文出版
- [2002c] 『清代社会経済史』創成社
- [2002d] 『清代財政史研究』汲古書院
- 山本英史 [1977] 「清初における包攬の展開」『東洋学報』59-1/2
- [1980] 「浙江省天台県における「図頭」について——十八世紀初頭における中国郷村支配の一形態」『史学』50
- [1981] 「均田均役法より順荘法に至る一過程——清初における呉江・震沢両県の場合」『山口大学文学会志』32
- [1985] 「清初華北における丁税科派についての一見解——黄六鴻の「編審論」をめぐる」慶應義塾大学東洋史研究室編『西と東と 前嶋信次先生追悼論文集』汲古書院
- [1989] 「「自封投櫃」考」『中国——社会と文化』4
- [1990] 「紳衿による税糧包攬と清朝国家」『東洋史研究』48-4
- [1992] 「雍正紳衿抗糧処分考」『中国近代史研究』7
- [1999] 「清代の郷村組織と地方文献——蘇州洞庭山地方の郷村役を例にして」『東洋史研究』58-3
- [2000] 「清代康熙年間浙江在地勢力」(同編 [2000] 所収)
- [2004] 「清朝の江南統治と在地勢力」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所

- 編 [2000] 『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会
熊遠報 [2003] 『清代徽州地域社会史研究——境界・集団・ネットワークと社会秩序』汲古書院
楊啓樵 [1987] 『「雍正篡位」再論』『史林』70-6
横山英 [1961] 『清代における端布業の経営形態』『東洋史研究』19-3~4
—— [1962] 『清代における包頭制の展開——端布業の推転過程について』『史学雑誌』71-1~2
吉田金一 [1984] 『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』東洋文庫近代中国研究センター
—— [1992] 『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』環翠堂
羅一星 [1994] 『明清仏山経済発展与社会変遷』広東人民出版社
羅希・景庭 [1984] 『清代山東経営地主経済研究』齊魯書社
李伯重 [2002] 『発展と制約——明清江南生産力研究』聯経出版事業公司
劉小萌 [1995] 『満族の部落与国家』吉林文史出版社
劉石吉 [1987] 『明清時代江南市鎮研究』中国社会科学出版社
遼寧省博物館等編 [1986] 『盛世滋生園』文物出版社
若松寛 [1967] 『中国人物叢書 8 奴兒哈赤』新人物往来社
—— [1983] 『ジュンガル王国の形成過程』『東洋史研究』41-4
渡部忠世他編 [1984] 『中国江南の稲作文化——その学際的研究』日本放送出版協会
渡辺修 [1981] 『清代の歩軍統領衙門について』『史苑』41-1
和田清 [1959] 『東亞史研究 (蒙古篇)』東洋文庫
綿貫哲郎 [2002] 『清初の旧漢人と八旗漢軍』『史叢』67
—— [2003] 『「六条例」の成立——乾隆朝八旗政策の一断面』『社会文化史学』45
- Crossley, Pamela Kyle [1990] *Orphan Warriors, Three Manchu Generations and the End of the Qing World*, Princeton University Press.
—— [1997] *The Manchus*, Blackwell.
Elliott, Mark C. [2001] *The Manchu Way, The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*, Stanford University Press.
Huang, Philip C. C. [1985] *The Peasant Economy and Social Change in North China*, Stanford University Press.
—— [1990] *The Peasant Family and Rural Development in the Yangzi Delta: 1350-1988*, Stanford University Press.
Perkins, Dwight H. [1969] *Agricultural Development in China: 1368-1968*, Aldine Publishing Company.
Petech, Luciano [1972] *China and Tibet in the Early XVIIIth Century, History of the Establishment of Chinese Protectorate in Tibet*, Monographies du T'oung Pao, Volume 1, second and revised edition, Leiden.
Rowe, William T. [1984] *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City: 1796-1889*, Stanford University Press.
Skinner, G. William (ed.) [1977] *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press.

第10章 近代

- 青山治世 [2005] 『清末における「南洋」領事増設論議』『歴史学研究』300
浅原達郎 [1987-95] 『「熱中」の人一端方伝』1~7『泉屋博古館紀要』4, 6~11

- 足立啓二 [1978] 『大豆粕流通と清代の商業的農業』『東洋史研究』37-3
—— [1998] 『専制国家史論——中国史から世界史へ』柏書房
阿部洋 [1990] 『中国の近代教育と明治日本』福村出版
—— [1993] 『中国近代学校史研究——清末における近代学校制度の成立過程』福村出版
有田和夫 [1984] 『清末意識構造の研究』汲古書院
安藤潤一郎 [2002] 『清代嘉慶・道光年間の雲南省西部における漢回対立——「雲南回民起義」の背景に関する一考察』『史学雑誌』111-8
飯島渉 [1990] 『中国近代における常関制度——牛莊洋関による営口常関の管理を中心として』『社会経済史学』56-3
—— [1993] 『「裁釐加税」問題と清末中国財政——一九〇二年中英マッケイ条約交渉の歴史的位置』『史学雑誌』102-11
—— [1995] 『近代中国のコミュニケーション・ネットワーク——郵便事業の展開と「中国」地域』中村義編『新しい東アジア像の研究』三省堂
—— [2000] 『ベストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容』研文出版
—— [2005] 『マラリアと帝国——殖民地医学と東アジアの広域秩序』東京大学出版会
——編 [1999] 『華僑・華人史研究の現在』汲古書院
池田誠 [1983] 『孫文と中国革命』法律文化社
——他 [1988] 『図説中国近現代史』法律文化社
石井摩耶子 [1998] 『近代中国といギリス資本——19世紀後半のジャーディン・マセソン商会を中心に』東京大学出版会
石川禎浩 [1993] 『一九一〇年長沙大搶米の「鎮圧」と電信』『史林』76-4
石川亮太 [2000] 『19世紀末東アジアにおける国際流通構造と朝鮮——海産物の生産・流通から』『史学雑誌』109-2
—— [2004] 『開港後朝鮮における華商の貿易活動——1894年の清国米中継貿易を通じて』森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所
石田 (山下) 米子 [1965] 『辛亥革命の時期の民衆運動』『東洋文化研究所紀要』37
市古宙三 [1969] 『カラー版世界の歴史 20 中国の近代』河出書房 (河出文庫, 1990年)
—— [1977] 『近代中国の政治と社会 (増補版)』東京大学出版会
稲田清一 [1988] 『太平天国期のチワン族反乱とその背景——広西省横州・永淳県の場合』『史林』71-1
井上裕正 [1975] 『レイ・オズボーン艦隊事件の外交史的意義について』『東洋史研究』34-2
—— [1977] 『清代咸豊期のアヘン問題について——特に咸豊八 (1858) 年におけるアヘン貿易の合法化をめぐる』『史林』60-3
—— [1994] 『中国歴史人物選 12 林則徐』白帝社
—— [2004] 『清代アヘン政策史の研究』京都大学学術出版会
今堀誠二 [1953] 『中国の社会構造——アンシャンレジームにおける「共同体」』有斐閣
岩井茂樹 [2004] 『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会
植田捷雄 [1969] 『東洋外交史』上, 東京大学出版会
白井佐知子 [1984] 『太平天国末期における李鴻章の軍事費対策』『東洋学報』65-3/4
—— [1986] 『同治四 (一八六五) 年, 江蘇省における賦税改革』『東洋史研究』45-2
—— [1989] 『太平天国期における蘇州紳士と地方政治』『中国——社会と文化』4
衛藤藩吉 [1968] 『近代中国政治史研究』東京大学出版会
江夏由樹 [1994] 『近代東三省社会の変動——清末, 旧奉天省における在地勢力の抬頭』溝口雄三他編『アジアから考える 3 周縁からの歴史』東京大学出版会

- 王曉秋 [1991] 小島晋治監訳, 中曾根幸子・田村玲子訳『アヘン戦争から辛亥革命——日本人の中国観と中国人の日本観』東方書店
- 汪婉 [1998]『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院
- 汪向荣 [1991] 竹内実監訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 大里浩秋・孫安石編 [2002]『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房
- 大谷敏夫 [1995]『清代政治思想と阿片戦争』同朋舎出版
- 岡本隆司 [1999a]『近代中国と海関』名古屋大学出版会
- [1999b]『清末民国と塩税』『東洋史研究』58-1
- [2004]『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会
- 小野和子 [1978]『中国女性史——太平天国から現代まで』平凡社
- 小野信爾 [1957]『李鴻章の登場——淮軍の成立をめぐる』『東洋史研究』16-2
- [1977]『新書東洋史5 人民中国への道』講談社
- 小野川秀美 [1969]『清末政治思想研究(増補版)』みすず書房
- ・島田慶次編 [1978]『辛亥革命の研究』筑摩書房
- 小山正明 [1992]『明清社会経済史研究』東京大学出版会
- 夏曉虹 [1998] 藤井省三監修, 清水賢一郎・星野幸代訳『纏足をほどいた女たち』朝日選書
- 藤山雅博 [1992]『清末江蘇省における「日本型」学校制度の導入過程——張謇の活動を中心として』『国立教育研究所紀要』121
- 籠谷直人 [2000]『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会
- 片岡一忠 [1991]『清朝新疆統治研究』雄山閣出版
- 加藤祐三 [1985]『黒船前後の世界』岩波書店
- 金田真滋 [1998]『中国開港後の外国銀行』『史学雑誌』107-9
- 可見弘明 [1979]『近代中国の苦力と「猪花」』岩波書店
- 他編 [1998]『民族で読む中国』朝日新聞社
- ・斯波義信・游仲勲編 [2002]『華僑・華人事典』弘文堂
- 金子肇 [2000]『清末民初における江蘇省の認捐制度』『東洋史研究』59-2
- 蒲豊彦 [2003]『宣教師, 中国人信者と清末華南郷村社会』『東洋史研究』62-3
- 川勝平太 [1985]『アジア木綿市場の構造と展開』『社会経済史学』51-1
- 編 [2003]『アジア太平洋経済圏史 1500~2000』藤原書店
- 川島真 [1994]『光緒新政下の出使大臣と立憲運動』『東洋学報』75-3/4
- [2000]『中国における万国公法の受容と適用・再考』『東アジア近代史』3
- [2004]『中国近代外交の形成』名古屋大学出版会
- 河田梯一 [1987]『中国近代思想と現代』研文出版
- 関西中国女性史研究会編 [2005]『中国女性史入門——女たちの今と昔』人文書院
- 神戸輝夫 [1985]『マーガリ事件をめぐる英清交渉』『東洋史研究』44-2
- 菊池貴晴 [1970]『現代中国革命の起源——辛亥革命の史的意義』巖南堂書店 (1973年新訂版)
- [1974]『中国民族運動の基本構造——対外ボイコットの研究(増補版)』汲古書院
- 菊池道樹 [1993]『東南アジアと中国』溝口雄三他編『アジアから考える2 地域システム』東京大学出版会
- 菊池秀明 [1998]『広西移民社会と太平天国』(本文編) 風響社
- [1999]『太平天国と歴史学——「客家ナショナリズム」の背景』『岩波講座世界歴史20 アジアの近代』
- [2003]『世界史リブレット65 太平天国にみる異文化受容』山川出版社
- 貴志俊彦 [1992]『「北洋新政」体制下における地方自治制の形成』横山英・曾田三郎編『中国の近代

化と政治的統合』溪水社

- 岸本美緒 [1997]『清代中国の物価と経済変動』研文出版
- 北山康夫 [1972]『中国革命の歴史的研究』ミネルヴァ書房
- 金鳳珍 [1995]『東アジア三国の「開国」と万国公法の受容』『北九州大学外国語学部紀要』84
- 金城正篤 [1978]『琉球処分論』沖縄タイムス社
- 久保亨 [1995]『中国経済100年のあゆみ——統計資料で見る中国近現代経済史』(第二版) 創研出版
- 久保田文次 [1985]『近代中国像は歪んでいるか』『史潮』新16
- [1992a]『中国の近代化をめぐる』辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
- [1992b]『辛亥革命の理解をめぐる』辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
- 倉橋正直 [1976]『清末, 商部の実業振興について』『歴史学研究』432
- 栗原純 [1984]『清代台湾における米穀移転と郊商人』『台湾近現代史研究』5
- 黒岩高 [2002]『械闘と謠言——19世紀の陝西・渭河流域に見る漢・回関係と回民蜂起』『史学雑誌』111-9
- 黒田明伸 [1994]『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会
- [2003]『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』岩波書店
- 巖安生 [1991]『日本留学精神史 近代中国知識人の軌跡』岩波書店
- 巖中平 [1966] 依田憲家訳『中国近代産業発達史 中国棉紡織史稿』校倉書房
- 胡垣坤・曾露凌・譚雅倫編 [1997] 村田雄二郎・貴堂嘉之訳『カミング・マン——19世紀アメリカの政治諷刺漫画のなかの中国人』平凡社
- 胡繩 [1974] 小野信爾他訳『中国近代史 1840-1924』平凡社
- 孔祥吉 [1988]『康有為変法奏議研究』遼寧教育出版社
- 黄尊三 [1986] さねとうけいしゅう・佐藤三郎訳『清国人日本留学日記 1905-1912年』東方書店
- 黄東蘭 [2005]『近代中国の地方自治と明治日本』汲古書院
- コーエン, P. A. [1988] 佐藤慎一訳『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』平凡社
- 小島晋治 [1978]『太平天国革命の歴史と思想』研文出版
- [1993]『太平天国運動と現代中国』研文出版
- ・丸山松幸 [1986]『中国近現代史』岩波新書
- ・並木頼寿編 [1993]『近代中国研究案内』岩波書店
- 小島淑男 [1960]『辛亥革命における上海独立と商紳層』東京教育大学アジア史研究会中国近代史部会編『中国近代化の社会構造——辛亥革命の史的位罫』教育書籍
- [1989]『留日学生の辛亥革命』青木書店
- 小瀬一 [1989]『一九世紀末中国開港場間流通の構造——營口を中心として』『社会経済史学』54-5
- 小羽田誠治 [2003]『清末成都における勸業場の設立』『史学雑誌』112-6
- 小浜正子 [2000]『近代上海の公共性と国家』研文出版
- 小林岳二 [1999]『清末・日本統治直後, 政權交代期の台湾先住民——文書から見た「帰順」』『東洋学報』80-4
- 小林一美 [1978]『義和団の民衆思想』野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』2, 東京大学出版会
- [1986]『義和団戦争と明治国家』汲古書院
- [1992]『義和団研究から中国全体史の研究へ』辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
- 小林共明 [1992]『留日学生史研究の現状と課題』辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と

課題] 汲古書院

- 小林善文 [2002]『中国近代教育の普及と改革に関する研究』汲古書院
 近藤邦康 [1972]『辛亥革命』紀伊国屋新書
 佐伯富 [1956]『清代塩政の研究』東洋史研究会
 嵯峨隆 [1994]『近代中国アナキズムの研究』研文出版
 酒井忠夫 [1992]『中国民衆と秘密結社』吉川弘文館
 — [1997]『酒井忠夫著作集 4 中国幫会史の研究 青幫篇』国書刊行会
 — [1998]『酒井忠夫著作集 3 中国幫会史の研究 紅幫篇』国書刊行会
 — [2002]『酒井忠夫著作集 6 近・現代中国における宗教結社の研究』国書刊行会
 — 編 [1983]『東南アジアの華人文化と文化摩擦』巖南堂書店
 坂出祥伸 [2001]『改訂増補 中国近代の思想と科学』朋友書店
 坂元ひろ子 [2004]『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』岩波書店
 佐々木正哉 [1970]『清末の秘密結社』前篇、巖南堂書店
 — [1977-78]『義和団の起源』上・中・下『近代中国』1~3
 — [1979-82]『鴉片戦争の研究——英軍の広州進攻からエリオットの全権罷免まで』1~7『近代中国』5~11
 — [1983-84]『鴉片戦争の研究——ポテンチャーの着任から南京条約の締結まで』1~3『近代中国』14~16
 — [1985]『『海国図志』余談』『近代中国』,17
 — [1991]『南京条約の締結とその後の諸問題』『近代中国』22
 佐々木楊 [1979a]『近代露清関係史の研究について——日清戦争期を中心として』『近代中国』5
 — [1979b]『1895年の対清・露仏借款をめぐる国際政治』『史学雑誌』88-7
 — [2000]『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会
 佐々木波子 [1991]『一九世紀末、中国に於ける開港場・内地市場間関係——漢口を事例として』『社会経済史学』57-5
 里井彦七郎 [1972]『近代中国における民衆運動とその思想』東京大学出版会
 佐藤公彦 [1999]『義和団の起源とその運動——中国民衆ナショナリズムの誕生』研文出版
 佐藤三郎 [1984]『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館
 — [2003]『中国人の見た明治日本——東遊日記の研究』東方書店
 佐藤慎一 [1996]『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会
 — 編 [1998]『近代中国の思索者たち』大修館書店
 佐藤仁史 [1999]『清末・民国初期上海農農村部における在郷有力者と郷土教育——『陳行郷土志』とその背景』『史学雑誌』108-12
 さねとうけいしゅう [1970]『中国人日本留学史 (増補版)』くろしお出版
 斯波義信 [1995]『華僑』岩波新書
 — [2002]『中国都市史』東京大学出版会
 島田慶次 [1965]『中国革命の先駆者たち』筑摩書房
 — 小野信爾編 [1968]『辛亥革命の思想』筑摩書房
 — 他編 [1983]『アジア歴史研究入門』2, 同朋舎出版
 清水稔 [1972]『長沙米騒動と民衆』『名古屋大学東洋史研究報告』1
 シャング, ウィリアム (安田震一) [2001]『絵画に見る近代中国——西洋からの視線』大修館書店
 朱徳蘭 [1997]『長崎華商貿易の史的的研究』芙蓉書房出版
 周一川 [2000]『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会
 シュウォルト, B. [1978]『平野健一郎訳『中国近代化と知識人——嚴復と西洋』東京大学出版会

- 藤文綱 [1998]『清末上海における事業投資とその資金調達——ゴム株式恐慌 (一九一〇年) に至る過程を中心に』『社会経済史学』63-5
 辛亥革命研究会編 [1992]『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
 新免康 [1994]『「辺境」の民と中国——東トルキスタンから考える』溝口雄三他編『アジアから考える 3 周縁からの歴史』東京大学出版会
 末成道男 [1995]『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会
 菅野正 [2002]『清末日中関係史の研究』汲古書院
 杉原薫 [1996a]『近代アジア経済史における連続と断絶——川勝平太・濱下武志氏の所説をめぐって』『社会経済史学』62-3
 — [1996b]『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
 杉山伸也・グループ, L. 編 [1999]『近代アジアの流通ネットワーク』創文社
 鈴木智夫 [1977]『近代中国の地主制』汲古書院
 — [1992a]『洋務運動研究の現状と課題——わが国における近年の研究を中心に』辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
 — [1992b]『洋務運動の研究』汲古書院
 瀬川昌久 [1993]『客家——華南漢族のエスニシティとその境界』風響社
 — [1996]『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住』風響社
 曾田三郎 [1975]『商会の設立』『歴史学研究』422
 — [1992]『清末の産業行政をめぐる分権化と集権化』横山英・曾田三郎編『中国の近代化と政治的統合』溪水社
 — [1994]『中国近代製糸業史の研究』汲古書院
 — 編 [1997]『中国近代化過程の指導者たち』東方書店
 — 編 [2001]『近代中国と日本』御茶の水書房
 孫文研究会編 [2003]『辛亥革命の多元構造』汲古書院
 「孫文とアジア」国際学術討論会日本語版編集委員会編 [1993]『孫文とアジア 1990年8月国際学術討論会報告集』汲古書院
 高嶋航 [1997]『水龍会の誕生』『東洋史研究』56-2
 — [2003]『天足会と不纏足会』『東洋史研究』62-2
 — [2004]『教会と信徒の間で——女性宣教師による纏足解放の試み』森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所
 高田淳 [1970]『中国の近代と儒教——戊戌変法思想』紀伊国屋新書
 高田幸男 [1993]『清末地域社会における教育行政機構の形成——蘇・浙・皖三省各庁州県の状況』『東洋学報』75-1/2
 — [2001]『清末江蘇における地方自治の構築と教育会——江蘇教育総会による地域エリートの「改造」』『駿台史学』111
 高橋孝助 [1984]『近代初期の上海における善堂——その「都市」的状況への対応の側面について』『宮城教育大学紀要 (人文・社会科学)』18
 — [1990]『中国の常関・釐金・海関』柴田三千雄他編『シリーズ世界史への問い 3 移動と交流』岩波書店
 — 他編 [1995]『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』東方書店
 卓南生 [1990]『中国近代新聞成立史 1815-1874』ペリカン社
 竹内弘行 [1995]『中国の儒教的近代化論』研文出版
 武内房司 [1997]『清末土司システムの解体と民族問題——貴州西南ブイ族地区を中心に』『歴史学研究』700

- 竹内好・橋川文三編 [1974]『近代日本と中国』上・下, 朝日選書
 武田雅哉 [1988]『翔べ! 大清帝国——近代中国の幻想科学』リポポート
 田中一成 [1990]『粵東天地会の組織と演劇』『東洋文化研究所紀要』111
 田中比呂志 [1995]『清末民初における地方政治構造とその変化——江蘇省宝山県における地方エリートへの活動』『史学雑誌』104-3
 ——・飯島渉編 [2005]『中国近現代史研究のスタンダード——卒業論文を書く』研文出版
 田中正俊 [1973]『中国近代経済史研究序説』東京大学出版会
 田中正美 [1978]『危機意識・民族主義思想の展開——アヘン戦争直前における』野沢豊他編『講座中国近現代史』1, 東京大学出版会
 グニエルス, クリスチャン [1984]『中国砂糖の国際的位置』『社会経済史学』50-4
 チェン, J. [1980]『守川正道訳『袁世凱と近代中国』岩波書店
 千葉正史 [1998]『清末における電気通信事業の国有化再編過程について』『社会経済史学』63-6
 —— [1999]『情報革命と義和団事件——電気通信の出現と清末中国政治の変容』『史学雑誌』108-1
 —— [2002]『清末における国家的物流システム維持と近代交通手段の導入——漕運問題史上における蘆漢鐵路計画の位置』『立命館言語文化研究』14-2
 —— [2005]『清末立憲改革下における国家統合の再編と鉄道』『史学雑誌』114-2
 中国女性史研究会編 [2004]『中国女性の100年——史料にみる歩み』青木書店
 張偉雄 [1999]『文人外交官の明治日本——中国初代駐日公使団の異文化体験』柏書房
 陳捷 [2003]『明治前期日中學術交流の研究——清国駐日公使館の文化活動』汲古書院
 陳来幸 [2001]『長江デルタにおける商会と地域社会』森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
 土屋洋 [2000]『清末山西における鉱山利権回収運動と青年知識層』『名古屋大学東洋史研究報告』24
 坪井善明 [1991]『近代ヴェトナム政治社会史』東京大学出版会
 丁文江・趙豊田編 [2004]『島田慶次編訳『梁啓超年譜長編』1~5巻, 岩波書店
 鉄山博 [1991]『清末四川仇教運動の展開と守旧派官紳指導』上・下『鹿児島経済大学論集』31-4, 32-1
 寺広映雄 [1979]『中国革命の史的展開』汲古書院
 天津地方史研究会編 [1999]『天津史——再生する都市のトポロジー』東方書店
 東田雅博 [1998]『図像のなかの中国と日本——ヴィクトリア朝のオリエンツ幻想』山川出版社
 —— [2004]『纏足の発見——ある英国女性と清末中国』大修館書店
 中井英基 [1996]『張謇と中国近代企業』北海道大学図書刊行会
 永井算巳 [1983]『中国近代政治史論叢』汲古書院
 中田吉信 [1986]『「漢奸」から「愛国者」へ——左宗棠の「復権」をめぐる』『就実女子大学史学論集』1
 中野美代子・武田雅哉 [1989]『世紀末中国のかわら版——絵入新聞『点石齋画報』の世界』福武書店 (中公文庫, 1999年)
 中見立夫 [1994]『モンゴルの独立と国際関係』溝口雄三他編『アジアから考える3 周縁からの歴史』東京大学出版会
 中村義 [1979]『辛亥革命研究』未来社
 中村哲夫 [1984]『近代中国社会史研究序説』法律文化社
 —— [1990]『移情閣遺聞——孫文と呉錦堂』阿叻社
 —— [1992]『同盟の時代——中国同盟会成立過程の研究』人文書院
 —— [1998]『光緒新政への政策転換の背景』『史学雑誌』107-1
 —— [2002]『辛亥革命研究の課題と展望』『孫文研究』31 (辛亥革命90周年記念特集)

- 中山義弘 [1983]『近代中国における女性解放の思想と行動』北九州中国書店
 夏井春喜 [2001]『中国近代江南の地主制研究——租税関係簿冊の分析』汲古書院
 並木頼寿 [1981]『捻軍の反乱と圩寨』『東洋学報』62-3/4
 —— [1989]『中国の近代史と歴史意識——洋務運動・曾国藩の評価をめぐる』小島晋治編『岩波講座現代中国4 歴史と近代化』岩波書店
 —— [1990]『苗沛霖団練事件』『東京大学教養学部人文科学科紀要』92
 —— [1993]『日本における中国近代史研究の動向』小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店
 ——・井上裕正 [1997]『世界の歴史19 中華帝国の危機』中央公論社
 仁井田陞 [1951]『中国の社会とギルド』岩波書店
 新村谷子 [2000]『アヘン貿易論争——イギリスと中国』汲古書院
 西川喜久子 [1966-67]『太平天国運動』『東洋文化』41, 43
 —— [1988]『順徳団練總局の成立』『東洋文化研究所紀要』105
 西川真子 [1994]『清末裁判制度の改革』『東洋史研究』53-1
 西川正夫 [1978]『辛亥革命と民衆運動——四川保路運動と哥老会』野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』3, 東京大学出版会
 西里喜行 [1992]『琉球処分と樺太・千島交換条約』荒野泰典他編『アジアのなかの日本史IV 地域と民族』東京大学出版会
 —— [2001]『バウン号の苦力反乱と琉球王国——揺らぐ東アジアの国際秩序』榕樹書林
 —— [2005]『清末中琉日関係史の研究』京都大学学術出版会
 西村成雄 [1984]『中国近代東北地域史研究』法律文化社
 日本上海史研究会編 [2000]『上海——重層するネットワーク』汲古書院
 日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会編 [1999]『孫文と華僑——孫文生誕130周年記念 国際学術討論会論文集』汲古書院
 根岸信 [1953]『中国のギルド』日本評論新社
 野沢豊 [1972]『辛亥革命』岩波新書
 ——編 [2001]『近きに在りて』39
 ——・田中正俊編 [1978]『講座中国近現代史』1~7, 東京大学出版会
 箱田恵子 [2002]『清末領事派遣論——1860, 1870年代を中心に』『東洋史研究』60-4
 —— [2003]『清朝在外公館の設立について』『史料』86-2
 狭間直樹 [1963]『山東萊陽暴動小論——辛亥革命における人民闘争の役割』『東洋史研究』22-2
 —— [1964]『中国近代史における『資本のための隷農』の創出およびそれをめぐる農民闘争』『新しい歴史学のために』99
 —— [1976]『中国社会主義の黎明』岩波新書
 ——他 [1996]『データでみる中国近代史』有斐閣
 ——編 [1999]『共同研究 梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房
 ——編 [2001]『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会
 波多野善大 [1961]『中国近代工業史の研究』東洋史研究会
 —— [1973]『中国近代軍閥の研究』河出書房新社
 濱下武志 [1989]『中国近代経済史研究——清末海關財政と開港場市場圏』東京大学東洋文化研究所
 —— [1990]『近代中国の国際的契機——朝貢システムと近代アジア』東京大学出版会
 —— [1997]『朝貢システムと近代アジア』岩波書店
 —— [2000]『中国近現代史研究の視点』『東方学』100
 ——・川勝平太編 [1991]『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』リポポート

- 他編 [1997-2000]『地域の世界史』12冊, 山川出版社
- 原田環 [1997]『朝鮮の開国と近代化』溪水社
- 原田正己 [1983]『康有為の思想運動と民衆』刀水書房
- 早川敦 [2003]「清末の学堂奨励について——近代学制導入期における科挙と学堂のあいだ」『東洋史研究』62-3
- 林建朗 [1979]「1853-54年の太平天国と列強」『東洋学報』60-3/4
- 坂野正高 [1970]『近代中国外交史研究』岩波書店
- [1973]『近代中国政治外交史——ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで』東京大学出版会
- [1985]『中国近代化と馬建忠』東京大学出版会
- 他編 [1974]『近代中国研究入門』東京大学出版会
- 東アジア近代史学会編 [1997]『日清戦争と東アジア世界の変容』上・下, ゆまに書房
- 姫田光義他 [1982]『中国近現代史』上・下, 東京大学出版会
- 平野聡 [2004]『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版会
- 広瀬一恵 [1990]「清末プロテスタント教会の布教に関する最近の研究」『近代中国』21
- 深澤秀男 [2000a]『戊戌変法運動史の研究』国書刊行会
- [2000b]『中国の近代化とキリスト教』新教出版社
- 復旦大学歴史系・上海師範大学歴史系編著・[1981]野原四郎・小島晋治監訳『中国近代史』3冊, 三省堂
- 藤井昇三 [1966]『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として』勁草書房
- 藤岡喜久男 [1985]『張謇と辛亥革命』北海道大学図書刊行会
- 藤村是清 [1995]「環流的労働移動の社会的条件——1876-1938」富岡信雄・中村平八編『近代世界の歴史像』世界書院
- 藤村道生 [1995]『日清戦争前後のアジア政策』岩波書店
- 藤谷浩悦 [1987]「湖南変法運動の展開と郷紳による抵抗の論理」『老百姓』5
- [1992]「清末変法運動研究の動向と課題」辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門 現状と課題』汲古書院
- [1993]「一九〇〇年の長沙米騒動と郷紳——中央と地方の対抗をめぐって」『社会文化史学』31
- [2003]「中国近代史研究の動向と課題」『歴史評論』638
- [2004]「1906年の萍瀏醴蜂起と民衆文化——中秋節における謡言を中心に」『史学雑誌』113-10
- 夫馬進 [1997]『中国善会善堂史研究』同朋舎出版
- フリードマン, M. [1987]田村克己・瀬川昌久訳『中国の宗族と社会』弘文堂
- [1991]末成道男・西澤治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文堂
- 古田和子 [2000]『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会
- [2003]「経済史における情報と制度——中国商人と情報」『社会経済史学』69-4
- 彭沢周 [1969]『明治初期日韓清関係の研究』塙書房
- [1976]『中国の近代化と明治維新』同朋舎・出版部
- 帆刈浩之 [1994]「近代上海における遺体処理問題と四明公所——同郷ギルドと中国の都市化」『史学雑誌』103-2
- [1996]「香港東華医院と広東人ネットワーク——二十世紀初頭における救災活動を中心に」『東洋史研究』55-1
- 細見和弘 [1996]「李鴻章と清仏戦争——北洋艦隊の派遣拒否問題についての再検討」『中国——社会と文化』11

- [1998]「李鴻章と戸部——北洋艦隊の建設過程を中心に」『東洋史研究』56-4
- 堀川哲男 [1962]「辛亥革命前の利権回収運動」『東洋史研究』21-2
- [1964]「義和団運動研究序説」『東洋史研究』23-3
- [1966]『林則徐』人物往来社 (中公文庫, 1997年)
- 編 [1995]『アジアの歴史と文化5 中国史——近・現代』同朋舎出版
- 真栄平房昭 [1994]「十九世紀の東アジア国際関係と琉球問題」溝口雄三他編『アジアから考える3 周縁からの歴史』東京大学出版会
- 増井経夫 [1978]『中国の二つの悲劇』研文出版
- 松丸道雄他編 [2002]『世界歴史体系 中国史5——清末～現在』山川出版社
- 松本英紀 [2001]『宋教仁の研究』晃洋書房
- 訳 [1989]『宋教仁の日記』同朋舎出版
- 丸山松幸 [1982]『中国近代の革命思想』研文出版
- 溝口雄三 [1983]「近代中国像は歪んでいないか——洋務と民権および中体西用と儒教」『歴史と社会』2
- [1989]『方法としての中国』東京大学出版会
- 他編 [1993-94]『アジアから考える』1-7, 東京大学出版会
- 三石善吉 [1991]『中国の千年王国』東京大学出版会
- [1996]『中国, 一九〇〇年——義和団運動の光芒』中公新書
- 宮川尚子 [2001]「清末における留学帰国者を対象とする官僚登用試験について」『寧楽史苑』46
- 宮崎市定 [1965]「太平天国の性質について」『史林』48-2 (同 [1993] 所収)
- [1993]『宮崎市定全集』16, 岩波書店
- 宮田道昭 [1981]「清末における外国貿易品流通機構の一考察——ギルドの流通支配を中心として」『駿台史学』52
- [1986]「19世紀後半期, 中国沿岸部の市場構造——「半植民地化」に関する一視点」『歴史学研究』550
- 宮原佳昭 [2003]「清末湖南省長沙における民立学堂設立と新教育界の形成について——胡元倓と明德学堂を中心に」『東洋史研究』62-2
- 三好千春 [1989]「アヘン戦争に関する燕行使情報」『史艸』30
- 村尾進 [1985]「カントン学海堂の知識人とアヘン弛禁論, 嚴禁論」『東洋史研究』44-3
- [1992]『「海国四説」の意味』『東洋史研究』51-1
- [1996]「珠江・広州・澳門——英文および絵画史料から見た「カントン・システム」」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所
- 村上衛 [2000]「清末厦門における交易構造の変動」『史学雑誌』109-3
- [2003]「閩粵沿海民の活動と清朝——一九世紀前半のアヘン貿易活動を中心に」『東方学報』(京都) 75
- [2004]「19世紀中葉, 華南沿海秩序の再編——イギリス海軍と閩粵海盜」『東洋史研究』63-3
- 村田雄二郎 [1994]「王朝・国家・社会——近代中国の場合」溝口雄三他編『アジアから考える4 社会と国家』東京大学出版会
- [1995]「中国近代革命と儒教社会の反転」溝口雄三他編『これからの世界史4 中国という視座』平凡社
- 村松祐次 [1976]『義和団の研究』巖南堂書店
- 目黒克彦 [1985]「十九世紀末湖南の情勢と変法派の対応」『集刊東洋学』54
- 茂木敏夫 [1987]「李鴻章の属国支配観——1880年前後の琉球・朝鮮をめぐる」『中国——社会と文化』2

- [1993] 「中華世界の「近代」的変容——清末の辺境支配」溝口雄三他編『アジアから考える2地域システム』東京大学出版会
- [1997] 『世界史リブレット41 変容する近代東アジアの国際秩序』山川出版社
- [2000] 「中国における近代国際法の受容——「朝貢と条約の並存」の諸相」『東アジア近代史』3
- 本野英一 [2002] 「アジア経済史研究者からの三つの質問」川勝平太編『グローバル・ヒストリーに向けて』藤原書店
- [2004] 『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会
- 森悦子 [1988] 「天津都統衙門について」『東洋史研究』47-2
- 森時彦 [2001] 『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会
- 編 [2001] 『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
- 編 [2004] 『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所
- 森山茂徳 [1987] 『近代日韓関係史研究』東京大学出版会
- 矢沢利彦 [1958] 「長江流域教案の一考察」『近代中国研究』1
- [1972] 『中国とキリスト教』近藤出版社
- 安岡昭男 [1995] 『明治前期日清交渉史研究』巖南堂書店
- 柳田節子先生古稀記念論集編集委員会編 [1993] 『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院
- 山岡由佳 [1995] 『長崎華商経営の史的的研究』ミネルヴォ書房
- 山田賢 [1995] 『移住民の秩序——清代四川地域社会史研究』名古屋大学出版会
- 山根幸夫 [1994] 『近代中国のなかの日本人』研文出版
- 編 [1976] 『論集近代中国と日本』山川出版社
- 編 [1995] 『中国史研究入門(増補改訂版)』下, 山川出版社
- 山室信一 [2001] 『思想課題としてのアジア』岩波書店
- 山本進 [2002a] 『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会
- [2002b] 『清代財政史研究』汲古書院
- 山本澄子 [1972] 『中国キリスト教史研究』近代中国研究委員会
- 山本達郎編 [1975] 『ベトナム中国関係史』山川出版社
- ヤング, A. [1994] 藤岡喜久男訳『袁世凱總統』光風社出版
- 兪辛焯 [1989] 『孫文の革命運動と日本』六興出版
- [2002] 『辛亥革命期の中日外交史研究』東方書店
- 熊達雲 [1998] 『山梨学院大学社会科学研究所叢書3 近代中国官民の日本視察』成文堂
- 游仲勳先生古稀記念論文集編集委員会編 [2003] 『日本における華僑華人研究——游仲勳先生古稀記念論文集』風響社
- 湯本國穂 [1980] 「辛亥革命の構造的検討——1911年の中国西南地方における政治変動の社会史的意味・昆明の事例」『東洋文化研究所紀要』81
- 横山英 [1977] 『辛亥革命研究序説』新歴史研究会
- 編 [1985] 『中国の近代化と地方政治』勁草書房
- ・曾田三郎編 [1992] 『中国の近代化と政治的統合』溪水社
- 横山宏章 [1983] 『孫中山の革命と政治指導』研文出版
- [1996] 『現代アジアの肖像1 孫文と袁世凱』岩波書店
- 吉澤誠一郎 [2002] 『天津の近代——清末都市における政治文化と社会結合』名古屋大学出版会
- [2003] 『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国を見る』岩波書店

- 吉田金一 [1974] 『世界史研究双書16 近代露清関係史』近藤出版社
- 羅玉東 [1936] 『中国蠶金史』商務印書館
- 李若文 [1994] 「清末中国, 欧米宣教師による“干預訴訟”問題の一側面——プロテスタントの対応策を中心に」『東洋学報』76-1/2
- 劉香織 [1990] 『断髮——近代東アジアの文化衝突』朝日選書
- 劉世龍 [2002] 『中国の工業化と清末の産業行政——商部・農工商部の産業振興を中心に』溪水社
- 廖赤陽 [2000] 『長崎華商と東アジア交易網の形成』汲古書院
- 林原文子 [1988] 「清末, 民間企業の勃興と実業新政について」『近きに在りて』14
- 渡辺祐子 [1994] 「清末揚州教案」『史学雑誌』103-11
- Banno, M. [1964] *China and the West 1858-1861, the Origins of the Tsungli Yamen*, Harvard University Press.
- Daniels, Christian and Menzies, Nicholas K. [1996] *Science and Civilisation in China*, Vol. 6, Part III, Agro-Industries and Forestry, Cambridge University Press.
- Enatsu, Yoshiki [2004] *Banner Legacy: the Rise of the Fengtian Local Elite at the End of the Qing*, Center for Chinese Studies, The University of Michigan.
- Fairbank, J. K. [1953] *Trade and Diplomacy on the China Coast, the Opening of the Treaty Ports, 1842-1854*, Harvard University Press.
- Motono, Eiichi [2000] *Conflict and Cooperation in Sino-British Business, 1860-1911: the Impact of the pro-British Commercial Network in Shanghai*, Macmillan Press.
- Rowe, W. T. [1984] *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford University Press.
- [1989] *Hankow: Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895*, Stanford University Press.
- Skinner, G. W. (ed.) [1977] *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press.

第11章 現代

- 秋田茂・籠谷直人編 [2001] 『1930年代のアジア国際秩序』溪水社
- 浅田喬二編 [1981] 『日本帝国主義下の中国——中国占領地経済の研究』楽游書房
- 鏗屋一 [2002] 『章士釗と近代中国政治史研究』芙蓉書房出版
- 阿部洋 [1990] 『中国の近代教育と明治日本』福村出版
- 編 [1983] 『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』第一書房
- 天野祐子 [2004] 「日中戦争期における国民政府の食糧徴収——四川省の田賦実物徴収を中心に」『社会経済史学』70-1
- 飯島涉 [1997] 「香港—日本関係の中の香港日本商工会議所」波形昭一編『近代アジアの日本人経済団体』同文館出版
- [2000] 『ベストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容』研文出版
- 飯塚靖 [1986] 「南京政府の原棉政策に関する覚書」中国現代史研究会編『中国国民政府史研究』汲古書院
- [2001] 「1930年代河北省における棉作改良事業と合作社」『駿台史学』112
- 家近亮子 [2002] 『蔣介石と南京国民政府』慶應義塾大学出版会
- 生田頼孝 [2001-02] 「商紳政権」『立命館文学』569, 571, 576

- 池田誠編 [1987]『抗日戦争と中国民衆——中国ナショナリズムと民主主義』法律文化社
- 石川滋 [1960]『中国における資本蓄積機構』岩波書店
- 石川洋 [1993]『師復と無政府主義』『史学雑誌』102-8
- 石川慎浩 [1991]『南京政府時期の技術官僚の形成と発展——近代中国技術者の系譜』『史林』74-2
- [2001a]『中国共産党成立史』岩波書店
- [2001b]『農村革命へのシフト』森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
- [2004]『初期コミンテルン大会の中国代表 (1919~1922年)』森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所
- 石島紀之・久保亨編 [2004]『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会
- 石田浩 [1986]『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房
- 泉谷陽子 [1997]『南京国民政府の水運業政策』『史学雑誌』106-4
- [2000]『新中国建国初期の対民営企業政策——「民主改革」・「三反五反」運動と汽船会社の公私合営化』『社会経済史学』66-4
- 井上清・衛藤藩吉編 [1988]『日中戦争と日中関係——盧溝橋事件50周年日中學術討論会記録』原書房
- 今井駿 [1997]『中国革命と対日抗戦——抗日民族統一戦線史研究序説』汲古書院
- 岩武照彦 [1990]『近代中国通貨統一史——15年戦争期における通貨闘争』みすず書房
- 岩間一弘 [2001]『民国期上海の女性誘拐と救済』『社会経済史学』66-5
- [2003]『両大戦間期の上海における商業教育の展開と新中間層形成』『中国——社会と文化』18
- 上原一慶 [1978]『中国社会主義の研究』日中出版
- 内田知行 [2005]『黄土の大地 1937~1945 山西省占領地の社会経済史』創土社
- 内山雅生 [1990]『中国華北農村経済研究序説』金沢大学経済学部
- [2003]『現代中国農村と「共同体」——転換期中国華北農村における社会構造と農民』御茶の水書房
- 宇野重昭・小林弘二・矢吹晋 [1986]『現代中国の歴史——1949~1985 毛沢東時代から鄧小平時代へ』有斐閣
- 編 [2001]『深まる侵略 屈折する抵抗——1930年~40年代の日・中のはざま』研文出版
- ・天兒慧編 [1994]『20世紀の中国 政治変動と国際契機』東京大学出版会
- 江崎隆哉 [1995]『第一次国共合作と西山会議派の形成』『法学政治学論究』24
- 江田憲治 [1990]『陳独秀と「二回革命論」の形成』『東方学報』(京都) 62
- [1992]『五四運動の研究 17 五四時期の上海労働運動』同朋舎出版
- [2001]『中国共産党史における都市と農村』森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
- 榎本泰子 [1998]『楽人の都・上海』研文出版
- 王柯 [1995a]『東トルキスタン共和国研究——中國のイスラムと民族問題』東京大学出版会
- [1995b]『モンゴル民族独立運動と中国共産党民族政策の成立』『中国研究月報』49-1
- 大江志乃夫他編 [1992-93]『岩波講座 近代日本と植民地』
- 岡崎清宣 [2001]『恐慌期中国における信用構造の再編』『社会経済史学』67-1
- 緒形康 [1995]『危機のディスカール——中国革命 1926~1929』新評論
- 岡部達味・毛里和子編 [1991]『現代中国論 2 改革・開放時代の中国』日本国際問題研究所
- 岡部利良 [1992]『旧中国の紡績労働研究』九州大学出版会
- 岡本隆司 [1999]『近代中国と海関』名古屋大学出版会
- 奥村哲 [1983]『日本における中国近現代経済研究の動向(II)——資本主義関係の諸問題』『新しい

- 歴史学のために』170
- [1999]『中国の現代史——戦争と社会主義』青木書店
- [2004]『中国の資本主義と社会主義——近現代史像の再構成』桜井書店
- 小野信爾 [1987]『五四運動の研究 13 救国十人団運動の研究』同朋舎出版
- [2003]『五四運動在日本』汲古書院
- 尾上悦三 [1970]『中国の産業立地に関する研究』アジア経済研究所
- 加々美光行 [2001]『歴史の中の中国文化大革命』岩波現代文庫
- 編 [1985]『現代中国の挫折 文化大革命の省察』アジア経済研究所
- 籠谷直人 [2000]『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会
- 笠原十九司 [1990]『山東主権回収運動史試論——五・四運動史像の再構成にむけて』『人文研紀要』(中央大学) 10
- 片岡一忠 [1982]『五四運動の研究 2 天津五四運動小史』同朋舎出版
- 金子肇 [1987]『上海資本家階級と国民党統治 (1927~29)』『史学研究』176
- [1989a]『商民協会と中国国民党 (1927~1930)』『歴史学研究』598
- [1989b]『国民政府予算策定機構の形成過程 (1928~1931)』『史学研究』185
- [1997a]『袁世凱政権における国家統一の模索と諮詢機関の役割』『東洋学報』79-2
- [1997b]『1930年代の中国における同業団体と同業規制』『社会経済史学』63-1
- [2000]『清末民初における江蘇省の認捐制度』『東洋史研究』59-2
- 金丸裕一 [1993]『中国「民族工業の黄金時期」と電力産業——1879~1924年の上海市・江蘇省を中心に』『アジア研究』39-4
- [1995]『工業史』野澤豊編『日本の中華民国史研究』汲古書院
- 蒲豊彦 [1992]『地域史のなかの広東農民運動』狭間直樹編『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所
- 川井悟 [1982]『全国経済委員会の成立とその改組をめぐる一考察』『東洋史研究』40-4
- 川井伸一 [1987]『戦後中国紡織業の形成と国民政府——中国紡織会社の成立過程』『国際関係論研究』6
- [2001]『中紡公司与国民政府の統制——国有企業の自立的経営方針とその挫折』姫田光義編『戦後中国国民政府史の研究——1945~49年』中央大学出版部
- 河田悌一 [2002]『胡適と国故整理と戴震評価』関西大学文学部中国語中国文学科編『文化事象としての中国』関西大学出版部
- 川原勝彦 [2003]『中国同郷団体の改造・解体過程 (1945~1956年)』『アジア研究』49-3
- 関西中国女性史研究会編 [2005]『中国女性史入門』人文書院
- 菊池一隆 [1996]『中国トロツキー派の生成、動態、及びその主張——1927年から34年を中心に』『史林』79-2
- [2003]『日本人反戦兵士と日中戦争——重慶国民政府地域の捕虜収容所と関連させて』御茶の水書房
- 菊池貴晴 [1987]『中国第三勢力史論』汲古書院
- 菊池敏夫 [2000]『1930年代の金融危機と申新紡織公司』日本上海史研究会編『上海——重層するネットワーク』汲古書院
- 貴志俊彦 [1997]『永利化学工業公司と范旭東』曾田三郎編『中国近代化過程の指導者たち』東方書店
- [2003]『国民政府による電化教育政策と抗日ナショナリズム』『東洋史研究』62-2
- 樹中毅 [1996]『南京国民政府統治の制度化とイデオロギーの形骸化』『法学政治学論究』31
- [2001]『強い権威主義支配と弱いレーニン主義党』『法学政治学論究』51

- キムチョンミ [1992]『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室
- 姜珍亜 [2003]「1930年代中国における徴税請負制度の改革と国家——広東省陳済棠政權の徴税システム整備の試み」『歴史学研究』771
- 清川雪彦 [1974]「中国綿工業技術の発展過程における在華紡の意義」『経済研究』(一橋大学) 25-3
- [1983]「中国繊維機械工業の発展と在華紡の意義」『経済研究』(一橋大学) 34-1
- 金沖及主編 [1992-93] 狭間直樹監訳『周恩来伝 1898-1949』上・中・下, 阿吽社
- 主編 [1999-2000] 村田忠禧・黄幸監訳『毛沢東伝 1893-1949』上・下, みすず書房
- 主編 [2000] 劉俊南・譚佐強訳『周恩来伝 1949-76』上・下, 岩波書店
- 楠瀬正明 [1994]「中華民国初期の梁啓超と第一国会」『史学研究』206
- 久保亨 [1982]「戦間期中国経済史の研究視角をめぐって」『歴史学研究』506
- [1995]『中国経済 100年のあゆみ——統計資料で見る中国近現代経済史(第二版)』創研出版
- [1999]『戦間期中国〈自立への模索〉——関税通貨政策と経済発展』東京大学出版会
- [2003]「今日の中華民国史研究」『歴史学研究』779
- [2004]「中国 1949年革命の歴史的位置」『歴史評論』654
- [2005]『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院
- 久保田文次 [1985]『孫文の対日観』辛亥革命研究会編『中国近現代論集 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院
- 吳曉林 [2002]『毛沢東時代の工業化戦略——三線建設の政治経済学』御茶の水書房
- 国分良成編 [2003]『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会
- 小杉修二 [1988]『現代中国の国家目的と経済建設——超大国志向・低開発経済・社会主義』龍溪書舎
- 小瀬一 [1997]「中国海関と北京特別関税会議」『東洋史研究』56-2
- 国家資本輸出研究会編 [1986]『日本の資本輸出——对中国借款の研究』多賀出版
- 後藤延子 [1992]「李大釗とマルクス主義経済学」『人文科学論集』(信州大学) 26
- [1999, 2001-04]「蔡元培と宗教」『人文科学論集』(信州大学) 33, 35~38
- 小浜正子 [2000]『近代上海の公共性と国家』研文出版
- 小林弘二編 [1986]『旧中国農村再考——変革の起点を問う』アジア経済研究所
- 編 [1987]『中国農村変革再考——伝統農村と変革』アジア経済研究所
- 小林善文 [2002]『中国近代教育の普及と改革に関する研究』汲古書院
- 小宮隆太郎 [1989]『現代中国経済——日中の比較考察』東京大学出版会
- 小山三郎 [1993]『現代中国の政治と文学——批判と肅清の文学史』東方書店
- 近藤邦康 [2003]『毛沢東——実践と思想』岩波書店
- 斎藤道彦 [1992]『五・四運動の虚像と実像——一九一九年五月四日北京』中央大学出版部
- 嵯峨隆 [1994]『近代中国アナキズムの研究』研文出版
- [1996]『近代中国の革命幻影——劉師培の思想と生涯』研文出版
- 笹川裕史 [1985]『1920年代前半の湖南省政民主化運動』横山英編『中国の近代化と地方政治』勁草書房
- [1986]「1920年代湖南省の政治変革と地方議会」『史学研究』171
- [2002]『中華民国期農村土地行政史の研究——国家-農村社会間関係の構造と変容』汲古書院
- [2004]「糧食・兵士の戦時徴発と農村の社会変容——四川省の事例を中心に」石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会
- 佐々木力 [2002]「復権する陳独秀の後期思想」『思想』939
- 佐藤忠男・刈間文俊 [1985]『上海キネマポート』凱風社
- 塩田浩和 [1992]「広東省における自治要求運動と県長民選」『アジア研究』38-3

- [1999]「広東商団事件」『東洋学報』81-2
- [2002]「広州における国会」『法学研究』75-1
- 宍戸寛他 [1989]『中国八路军, 新四軍史』河出書房新社
- 渋谷由里 [1993]「張作霖政權下の奉天省民政と社会」『東洋史研究』52-1
- [1995]「九・一八」事変直後における瀋陽の政治状況」『史林』78-1
- [1997]「張作霖政權成立の背景」『アジア経済』38-5
- 島田慶次 [1987]『五四運動の研究 12 新儒家哲学について——熊十力の哲学』同朋舎出版
- 清水稔 [1992]『五四運動の研究 16 湖南五四運動小史』同朋舎出版
- 周偉嘉 [1998]『中国革命と第三党』慶應義塾大学出版会
- 徐秀麗 [2000]「“1949年の中国” 国際学術討論会総述」『近代史研究』2000年第2期
- 城山智子 [1999]「上海金融恐慌(1934年~1939年)に関する一考察」『東洋史研究』58-2
- 新免康 [1989]「新疆コムルのムスリム反乱(1931~32年)について」『東洋学報』70-3/4
- [1994]「東トルキスタン共和国(1933~34年)に関する一考察」『アジア・アフリカ言語文化研究』46/47
- 杉原薫 [1996]『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
- 杉山伸也・グローブ, L. 編 [1999]『近代アジアの流通ネットワーク』創文社
- 砂山幸雄 [1989]「五四」の青年像」『アジア研究』35-2
- 曾田三郎 [1994]『中国近代製糸業史の研究』汲古書院
- 編 [1997]『中国近代化過程の指導者たち』東方書店
- 孫文研究会編 [1986]『孫中山研究日中国際学術討論会報告集』法律文化社
- 編 [1993]『孫文とアジア——1990年8月国際学術討論会報告集』汲古書院
- ・神戸華僑華人研究会編 [1999]『孫文と華僑——孫文生誕130周年記念国際学術討論会論文集』汲古書院
- 高田幸男 [2001]「教育における“復員”と教職員」姫田光義編『戦後中国国民政府史の研究』中央大学出版部
- [2004]「重慶国民政府の教科書政策」石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会
- 高網博文 [1991]「孫文の“大アジア主義講演”をめぐって」『歴史評論』494
- [1996]「孫文の帝国主義観に関する再検討」『経済科学研究所紀要』(日本大学) 21
- 高橋伸夫 [1997]「中国共産党の組織と社会」『法学研究』(慶應義塾大学) 70-6
- [1998]「中国共産党組織の内部構造」『法学研究』(慶應義塾大学) 71-5
- [2000]「根拠地における党と農民(1)(2)」『法学研究』(慶應義塾大学) 73-3~4
- 高村直助 [1982]『近代日本綿業と中国』東京大学出版会
- 竹内弘行 [1987]『五四運動の研究 14 後期康有為論——亡命・辛亥・復辟・五四』同朋舎出版
- [1992]「康有為と呉佩孚」狭間直樹編『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所
- 田中仁 [2002]『1930年代中国政治史研究——中国共産党の危機と再生』勁草書房
- 田中比呂志 [1991]「民国元年の政治と宋教仁」『歴史学研究』615
- [1993]「近代中国における国家建設の模索」『歴史学研究』646
- 段瑞聡 [1997]「新生活運動の組織構造と人事」『法学政治学論究』34
- [1998]「蒋介石の権力の浸透と新生活運動」『法学政治学論究』38
- チェン, ジェローム [1984] 北村稔他訳『軍紳政權——軍閥支配下の中国』岩波書店
- 中央大学人文科学研究所編 [1986]『五・四運動史像の再検討』中央大学出版部
- 編 [1988]「五・四」運動研究史シンポジウム記録』中央大学出版部
- 編 [1999]『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部

- 中華民国重要史料編輯委員会編 [1981-88]『中華民国重要史料初編』中国国民党中央委員会党史委員会
- 中国近現代経済史シンポジウム運営委員会編 [1986]『中国蚕糸業の史的展開』中国近現代経済史シンポジウム運営委員会
- 中国近現代経済史シンポジウム事務局編 [1989]『中国経済政策史の探求』中国近現代経済史シンポジウム事務局
- 中国現代史研究会編 [1986]『中国国民政府史の研究』汲古書院
- 中国資本蓄積研究会 [1976]『中国の経済発展と制度』アジア経済研究所
- 中国女性史研究会編 [1999]『論集中国女性史』吉川弘文館
- 編 [2004]『中国女性の100年』青木書店
- 中国第二歴史檔案館編 [1979-2000]『中華民国史檔案資料彙編』1~5, 江蘇古籍出版社
- 中国綿業史セミナー報告者他執筆 [1984]『中国産業史研究への模索——『中国綿業史セミナー』の開催』『近きに在りて』5
- 中国労働運動史研究会編 [1977-86]『中国労働運動史研究』1~15
- 張新民 [1994]『抗日救国運動における上海映画界の動向とその意義』『歴史研究』(大阪教育大学)
- 31
- 陳正醒 [1985]『新哲学論戦とデボリン批判』『東洋文化』65
- [1993-95]『上海大学時代の瞿秋白について (上)(中)(下)』『人文学科論集』(茨城大学) 26~28
- 陳来幸 [1983]『五四運動の研究 5 虞洽卿について』同朋舎出版
- [2001]『長江デルタにおける商会と地域社会』森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
- 塚瀬進 [1997]『奉天における日本人商人と奉天商業会議所』波形昭一編『近代アジアの日本人経済団体』同文館出版
- 塚本元 [1994]『中国における国家建設の試み 湖南 1919~1921年』東京大学出版会
- 土田哲夫 [1993]『東三省易幟の政治過程 (1928年)』『紀要 (社会科学)』(東京学芸大学) 44
- 土屋光芳 [2000]『汪精衛と民主化の企て』人間の科学新社
- 鄭超麟 [2003]『長堀祐造他訳『初期中国共産党群像——トロツキスト鄭超麟回憶録』1~2, 平凡社東洋文庫
- 丁文江・趙豊田編 [2004]『島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』全5巻, 岩波書店
- 天津地域史研究会 [1999]『天津史——再生する都市のトポロジー』東方書店
- 栃木利夫・坂野良吉 [1997]『中国国民革命——戦間期東アジアの地殻変動』法政大学出版局
- 富澤芳亜 [1994]『銀行団接管期の大生第一紡織公司——近代中国における金融資本の紡織企業代理経営をめぐる』『史学研究』204
- [2000]『1937年の棉紗統稅引き上げと日中紡織資本』『東洋学報』82-1
- 内藤陽介 [1999]『マオの肖像——毛沢東切手で読み解く現代中国』雄山閣出版
- 中井英基 [1996]『張謇と中国近代企業』北海道大学図書刊行会
- [1998-99]『中国近現代の官・商関係と華僑企業家』『歴史人類』(筑波大学) 26, 27
- [2003]『清末民初の中国製粉業』『史境』46
- 中尾友則 [2000]『梁漱溟の中国再生構想——新たな仁愛共同体への模索』研文出版
- 中島太一 [1970]『中国官僚資本主義研究序説——帝國主義下の半植民地的後進資本制の構造』滋賀大学経済学部
- 中田昭一 [1998]『恐慌下の中国における銀行融資』『史学研究』222
- 中村哲 [1991]『近代世界史像の再構成 東アジアの視点から』青木書店

- [2000]『近代東アジア史像の再構成』桜井書店
- 中村隆英 [1983]『戦時日本の華北経済支配』山川出版社
- 中村政則・高村直助・小林英夫編 [1994]『戦時華中の物資動員と軍票』多賀出版
- 中村元哉 [2004]『戦後中国の憲政実施と言論の自由 1945-49』東京大学出版会
- 波形昭一編 [1997]『近代アジアの日本人経済団体』同文館出版
- 西村成雄 [1991]『中国ナショナリズムと民主主義——20世紀中国政治史の新たな視界』研文出版
- [2004]『20世紀中国の政治空間 「中華民族的国民国家」の凝集力』青木書店
- 編 [2000]『現代中国の構造変動 3 ナショナリズム——歴史からの接近』東京大学出版会
- 日本上海史研究会 [2000]『上海——重層するネットワーク』汲古書院
- 野沢豊 [1999]『中国共和史をめぐる(2)』『近きに在りて』35
- 編 [1974]『中国国民革命史の研究』青木書店
- 編 [1981]『中国の幣制改革と国際関係』東京大学出版会
- 編 [1995]『日本の中華民国史研究』汲古書院
- ・田中正俊編 [1978]『講座中国近現代史』全7巻, 東京大学出版会
- 萩原充 [2000]『中国の経済建設と日中関係——対日抗戦への序曲 1927~1937年』ミネルヴァ書房
- [2004]『重慶国民政府期の民間航空——援蔣ルートに関する一考察』石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会
- 狭間直樹 [1982]『五四運動の研究 1 五四運動研究序説』同朋舎出版
- [1986]『孫文思想における民主と独裁』『東方学報』(京都) 58
- [1987]『“三大政策”と黄埔軍校』『東洋史研究』46-2
- [1992]『“五四運動の研究”の刊行を終えるにあたって』狭間直樹・森時彦編『五四運動の研究 18 総索引』同朋舎出版
- 編 [1992]『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所
- 編 [1995]『1920年代の中国』汲古書院
- 編 [2000]『共同研究 梁啓超』みすず書房
- 橋本浩一 [1992]『福建人民革命政府の政權構想, 組織およびその実態』『歴史研究』(大阪教育大学) 29
- 馬場毅 [2001]『近代中国華北民衆と紅槍会』汲古書院
- 濱下武志 [1990]『近代中国の国際的契機』東京大学出版会
- 范力 [2002]『中日“戦争交流”研究——戦時期の華北経済を中心に』汲古書院
- 坂野良吉 [2004]『中国国民革命政治過程の研究』校倉書房
- 一橋大学経済研究所 [2000]『中華民国期の経済統計——評価と推計』国際ワークショップ報告論文集
- 姫田光義他 [1993]『中国20世紀史』東京大学出版会
- 編著 [2001]『戦後中国国民政府史の研究——1945-1949年』中央大学出版部
- 平野聡 [2001a]『近現代チベット史における「親中」の位相』毛里和子編『現代中国の構造変動 7 中華世界——アイデンティティの再編』東京大学出版会
- [2001b]『「解放」とは何か』『中国——社会と文化』16
- 平野正 [1983]『中国民主同盟の研究』研文出版
- [1987]『中国の知識人と民主主義思想』研文出版
- 深町英夫 [1999]『近代中国における政党・社会・国家——中国国民党の形成過程』中央大学出版部
- 福士由紀 [2004]『国際連盟保健機関と上海の衛生——1930年代のコレラ予防』『社会経済史学』70-2
- 福本勝清 [1992]『中国革命への挽歌』亜紀書房

- 藤井昇三 [1981a] 「二一カ条交渉時期の孫文と「中日密約」」『論集近代中国研究』山川出版社
 —— [1981b] 「孫文の対日態度」『現代中国和世界——その政治的展開』慶應通信
 —— [1996] 「孫文の民族主義再論」『歴史評論』549
 藤井省三・大木康 [1997] 『新しい中国文学史』ミネルヴァ書房
 藤岡喜久男 [1999] 『中華民国第一共和制と張作霖』汲古書院
 藤本博生 [1982] 『五四運動の研究3 日本帝国主義と五四運動』同朋舎出版
 弁納才一 [1995] 「農業史」野澤豊編『日本の中華民国史研究』汲古書院
 —— [2003] 『近代中国農村経済史の研究——1930年代における農村経済の危機的状況と復興への胎動』金沢大学経済学部
 —— [2004] 『華中農村経済と近代化——近代中国農村経済史像の再構築への試み』汲古書院
 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編 [2002] 『興亜院と戦時中国調査』岩波書店
 松尾洋二 [1988] 「曹錕・呉佩孚集團の興亡」『東洋史研究』47-1
 松重充浩 [1990] 「「保境安民」期における張作霖地域権力の地域統合策」『史学研究』186
 —— [1994] 「植民地大連における華人社会の展開」曾田三郎『近代中国と日本』御茶の水書房
 —— [1997] 「国民革命期における東北在地有力者層のナショナリズム」『史学研究』216
 松本俊郎 [2000] 『「満洲国」から新中国へ——鞍山鉄鋼業から見た中国東北の再編過程 1940～1954』名古屋大学出版会
 松本英紀 [2001] 『宋教仁の研究』晃洋書房
 松本ますみ [1999] 『中国民族政策の研究——清末から1945年までの「民族論」を中心に』多賀出版
 丸川知雄 [1993] 「中国の「三線建設」(1)(2)」『アジア経済』34-2～3
 —— [2002] 「中国の「三線建設」再論」『アジア経済』43-12
 丸田孝志 [1993] 「抗日戦争期における中国共産党の勤奸政策」『史学研究』199
 —— [1998] 「陝甘寧辺区の記念日活動と新暦・農暦の時間」『史学研究』221
 —— [2004] 「抗日戦争期・内戦期における中国共産党根拠地の象徴」『アジア研究』50-3
 丸山昇 [2001] 『文化大革命に到る道——思想政策と知識人群像』岩波書店
 三品英憲 [2000] 「近代における華北農村の変容過程と農家経営の展開」『社会経済史学』66-2
 水野明 [1994] 『東北軍閥政権の研究——張作霖・張学良の対外抵抗と対内統一の軌跡』国書刊行会
 水羽信男 [1994] 「施復亮の「中間派論」とその批判をめぐって」今永清二編『アジアの地域と社会』勁草書房
 —— [1995] 「「満洲事変」前夜(1928～31年)における羅隆基の「国民」像」『史学研究』208
 —— [1997] 「抗日戦争と中国の民主主義」『歴史評論』569
 三谷孝編 [1993] 『農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録』内山書店
 —— [1999-2000] 『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録』1～2, 汲古書院
 三石善吉 [1985] 「商団事件と黄埔軍校」『筑波法政』8
 —— [1986] 「ソヴェト軍事顧問と黄埔軍校」『筑波法政』9
 —— [1988] 「廖仲愷暗殺とバラディーンの戦略」『筑波法政』11
 南亮進 [1990] 『中国の経済発展——日本との比較』東洋経済新報社
 三好章 [2003] 『摩擦と合作——新四軍 1937-41』創土社
 村松祐次 [1949] 『中国経済の社会態制』東洋経済新報社
 毛里和子編 [1990] 『現代中国論1 毛沢東時代の中国』日本国際問題研究所
 ——編 [1995] 『現代中国論3 市場経済化の中の中国』日本国際問題研究所
 ——他編 [2000] 『現代中国の構造変動』全8巻, 岩波書店
 本野英一 [2004] 『伝統中国商業秩序の崩壊』名古屋大学出版会

- 森時彦 [2001a] 『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会
 ——編 [2001b] 『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所
 森紀子 [1995] 「虚無主義者の再生」『東洋史研究』54-1
 安井三吉 [1991] 「孫文・講演「大アジア主義」の研究を深めるために」『歴史評論』498
 —— [1993] 『盧溝橋事件』研文出版
 —— [2003] 『柳条湖事件から盧溝橋事件へ——一九三〇年代華北をめぐる日中の対抗』研文出版
 矢内原忠雄 [1937] 「支那問題の所在」『中央公論』52-2
 柳澤和也 [2000] 『近代中国における農家経営と土地所有』御茶の水書房
 柳沢遊 [1999] 『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史』青木書店
 山口榮 [2000] 『胡適思想の研究』言叢社
 山田辰雄 [1980] 『中国国民党左派の研究』慶應通信
 —— [1990] 「今こそ「民国史観」を」『近きに在りて』17
 ——編 [1996] 『歴史のなかの現代中国』勁草書房
 山本真 [1998] 「日中戦争期から国共内戦期にかけての国民政府の土地行政——地籍整理・人員・機構」『アジア経済』39-12
 —— [2001] 「全国的土地改革の試みとその挫折」姫田光義編『戦後中国国民政府史の研究』中央大学出版部
 山本有造編 [1993] 『「満洲国」の研究』京都大学人文科学研究所(緑蔭書房, 1995年改訂新版)
 横山英・曾田三郎編 [1992] 『中国の近代化と政治的統合』溪水社
 横山宏章 [1983] 『孫中山の革命と政治指導』研文出版
 —— [1985] 「孫中山の晩年(1920年代)の評価について」『アジア研究』32-1
 —— [1996] 『中華民国史——専制と民主の相剋』三一書房
 ——・久保亨・川島真編 [2002] 『周辺から見た20世紀中国——日・韓・台・港・中の対話』中国書店
 吉澤誠一郎 [2002] 『天津の近代』名古屋大学出版会
 —— [2003] 「中華民国史における「社会」と「文化」の探求」『歴史学研究』779
 吉田滋一 [1975] 「20世紀中国の一綿作地帯における農民層分解について」『東洋史研究』33-4
 —— [1983] 「日本における中国近現代経済研究の動向(I)——農業を中心として」『新しい歴史学のために』170
 —— [1986] 「20世紀前半華北穀作地帯における農民層分解の動向」『東洋史研究』45-1
 吉田豊子 [1996] 「中国共産党の少数民族政策」『歴史評論』549
 —— [2001a] 「中国共産党の国家統合における内モンゴル自治政府の位置」『東洋学報』83-3
 —— [2001b] 「戦後国民政府の内モンゴル統合の試み」『アジア研究』47-2
 劉大年・白介夫編 [2002] 曾田三郎他訳『中国抗日戦争史——中国復興への路』桜井書店
 林原文子 [1983] 『五四運動の研究6 宋則久と天津の国貨提唱運動』同朋舎出版
 —— [2000-01] 「近代中国における機械製洋式貨物の盤金免除とその対象製品の拡大」『研究論集』(関西外国語大学) 72, 74
 鹿錫俊 [2001] 『中国国民政府の対日政策 1931～1933』東京大学出版会
 ワークショップ「1930～1940年代中国の政策過程」事務局編 [2004] 『1930～1940年代中国の政策過程』信州大学人文学部・久保亨
 和田春樹 [1992] 『金日成と満洲抗日戦争』平凡社

<欧文献>

- Cheek, T. and Saich, T. [1997] *New Perspectives on State Socialism of China*, M. E. Sharpe.

Wakeman, Jr., F. and Edmonds, R. L. (eds.) [2000] *Reappraising Republican China*, Oxford University Press.

第12章 世界のなかでの中国史

- 秋田茂 [2003] 『イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』名古屋大学出版会
- 朝尾直弘 [1994] 『將軍権力の創出』岩波書店 (同 [2004] 所収)
- [2004] 『朝尾直弘著作集』3, 岩波書店
- 足立啓二 [1992] 『東アジアにおける錢貨の流通』荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史III 海上の道』東京大学出版会
- [1998] 『専制国家史論——中国史から世界史へ』柏書房
- アブールゴド, J. L. [2001] 佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前——もうひとつの世界システム』上・下, 岩波書店
- 荒野泰典 [1988] 『近世日本と東アジア』東京大学出版会
- 飯塚浩二 [1969 (1960)] 『アジアのなかの日本 (増補版)』中央公論社 (同 [1975] 所収)
- [1975] 『飯塚浩二著作集』4, 平凡社
- 生田滋 [1971] 『大航海時代の東アジア』榎一雄編『東西文明の交流 5 西欧文明と東アジア』平凡社
- 石井孝 [1966] 『増訂 明治維新の国際的環境』吉川弘文館
- [1993] 『明治維新と外圧』吉川弘文館
- 市古宙三 [1977 (1971)] 『近代中国の政治と社会 (増補版)』東京大学出版会
- 稲葉稜 [2001] 『安史の乱時に入唐したアラブ兵について』『国際文化研究』5
- 入江啓四郎 [1935] 『支那辺疆と英露の角逐』ナウカ社
- 岩井茂樹 [2004] 『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会
- 岩生成一 [1953] 『近世日支貿易に関する数量的考察』『史学雑誌』62-11
- [1966] 『南洋日本人町の研究』岩波書店
- [1985 (1958)] 『新版 朱印船貿易史の研究』吉川弘文館
- [1987] 『続 南洋日本人町の研究』岩波書店
- 上田信 [1995] 『伝統中国——〈盆地〉〈宗族〉にみる明清時代』講談社
- 内田直作 [1949] 『日本華僑社会の研究』同文館
- 梅棹忠夫 [2002 (1967)] 『文明の生態史観ほか』中央公論新社
- 柴新江・李孝聡主編 [2004] 『中外関係史——新史料与新問題』科学出版社
- 衛藤藩吉 [1968] 『近代中国政治史研究』東京大学出版会 (同 [2004] 所収)
- [2004] 『衛藤藩吉著作集』1, 東方書店
- 榎一雄 [1984-87] 『新疆の建省——二十世紀の中央アジア』『近代中国』15~19 (同 [1992] 所収)
- [1992] 『榎一雄著作集』2, 汲古書院
- 王爾敏 [1967] 『准軍志』中央研究院近代史研究所
- 王信忠 [1937] 『中日甲午戦争之外交背景』国立清華大学
- 應地利明 [1996] 『絵地図の世界像』岩波書店
- [1999] 『東南アジアをどう捉えるか——インド世界から』坪内良博編『総合的地域研究』を求めて——東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会
- 岡本隆司 [1999] 『近代中国と海関』名古屋大学出版会

- [2004] 『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会
- 貝塚茂樹 [1964] 『中国の歴史』上, 岩波書店
- 籠谷直人 [2000] 『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会
- 片山誠二郎 [1953] 『明代海上密貿易と沿海地方郷紳層——朱紉の海禁政策強行とその挫折の過程を通しての一考察』『歴史学研究』164
- 葛兆光 [1999] 『“天下”“中国”与“四夷”——作為思想文献の古代中国的の世界地図』『學術集林』16
- 可児弘明 [1979] 『近代中国の苦力と「猪花」』岩波書店
- 川勝平太 [1991] 『日本文明と近代西洋——「鎖国」再考』日本放送出版協会
- [1997] 『文明の海洋史観』中央公論社
- 川北稔 [2003] 『風はどこかに吹いているのか——ヨーロッパとアジア』『史学雑誌』112-11
- 菊池貴晴 [1974 (1966)] 『増補 中国民族運動の基本構造——対外ボイコット運動の研究』汲古書院
- 岸本美緒 [1995] 『清朝とユーラシア』歴史学研究会編『講座世界史 2 近代世界への道——変容と摩擦』東京大学出版会
- [1998a] 『時代区分論』『岩波講座世界歴史 1 世界史へのアプローチ』
- [1998b] 『東アジアの「近世」』山川出版社
- [2003] 『東アジア地域論』『歴史と地理』564
- 木田章義他編 [2002] 『学びの世界——中国文化と日本』京都大学附属図書館
- 貴堂嘉之 [1992] 『19世紀後半期の米国における排華運動——広東とサンフランシスコの地方世界』『地域文化研究』4
- [1995] 『「帰化不能外人」の創造——1882年排華移民法制定過程』『アメリカ研究』29
- 木宮泰彦 [1926-27] 『日支交通史』上・下, 金刺芳流堂
- [1955] 『日華文化交流史』富山房
- 木村尚三郎 [1968] 『歴史の発見——新しい世界史像の提唱』中央公論社
- [1975] 『近代の神話——新ヨーロッパ像』中央公論社
- 京都大学西洋史学研究室編 [2002] 『二十一世紀の西洋史研究のために——西洋史読書会第七十回記念』京都大学大学院文学研究科西洋史学研究室
- 金田章裕他編 [2001] 『近世の京都図と世界図——大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図』京都大学附属図書館
- 久保一之 [1997] 『ティムール朝とその後』『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』
- 黒田明伸 [1994] 『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会
- [2003] 『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』岩波書店
- 桑原隲藏 [1898] 『中等東洋史』大日本図書 (同 [1968a] 所収)
- [1935] 『蒲壽庚の事蹟』岩波書店 (同 [1968b] 所収)
- [1968a] 『桑原隲藏全集』4, 岩波書店
- [1968b] 『桑原隲藏全集』5, 岩波書店
- 小杉泰・林佳世子・東長増編 [近刊] 『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会
- 小葉田淳 [1968 (1939)] 『中世南島通交貿易史の研究 (増補版)』刀江書院
- [1969 (1930)] 『日本貨幣流通史』刀江書院
- [1969 (1941)] 『中日日支通交貿易史の研究』刀江書院
- [1976] 『金銀貿易史の研究』法政大学出版局
- 権上康男 [1985] 『フランス帝国主義とアジア——インドシナ銀行史研究』東京大学出版会
- 近藤治 [2003] 『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会

- 佐伯富 [1987]『中国塩政史の研究』法律文化社
 坂本勉 [1999]『中東イスラーム世界の国際商人』『岩波講座世界歴史 15 商人と市場——ネットワークの中の国家』
 佐口透 [1963]『18～19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館
 佐久間重男 [1992]『日明関係史の研究』吉川弘文館
 佐々木正哉 [1958]『営口商人の研究』近代中国研究委員会編『近代中国研究』1
 —— [1963]『咸豊二年鄭県の抗糧暴動』近代中国研究委員会編『近代中国研究』5
 佐々木揚 [1979]『近代露清関係史の研究について——日清戦争期を中心として』『近代中国』5
 —— [1996]『日清戦争をめぐる国際関係——欧米の史料と研究』『近代中国研究叢報』18
 —— [2000]『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会
 佐藤彰一・池上俊一・高山博編 [2005 (2000)]『西洋中世史研究入門 (増補改訂版)』名古屋大学出版会
 史学会編 [2004]『歴史学の最前線』東京大学出版会
 信夫清三郎 [1968 (1943)]『ラッフルズ伝——イギリス近代的植民政策の形成と東洋社会』平凡社
 —— [1970] 藤村道生校訂『増補・日清戦争——その政治的・外交的観察』南窓社
 斯波義信 [1990]『華僑』柴田三千雄他編『シリーズ世界史への問い 3 移動と交流』岩波書店
 —— [1995]『華僑』岩波書店
 清水和裕 [1999]『マムルークとグラーム』『岩波講座世界歴史 10 イスラーム世界の発展』
 徐義生 [1962]『中国近代外債統計資料 (一八五三—一九二七)』中華書局
 邵循正 [2000 (1935)]『中法越南関係始末』河北教育出版社
 蔣廷黻 [1934]『近代中国外交史資料輯要』中, 商務印書館
 ジョーンズ, E. L. [2000] 安元稔・脇村孝平訳『ヨーロッパの奇跡——環境・経済・地政の比較史』名古屋大学出版会
 白石隆 [2000]『海の帝国——アジアをどう考えるか』中央公論社
 杉原薫 [1996a]『近代アジア経済史における連続と断絶——川勝平太・濱下武志氏の所説をめぐって』『社会経済史学』62-3
 —— [1996b]『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
 杉山伸也・グループ, L. 編 [1999]『近代アジアの流通ネットワーク』創文社
 杉山正明 [1995]『クビライの挑戦——モンゴル海上帝国への道』朝日新聞社
 —— [2002]『逆説のユーラシア史——モンゴルからのまなざし』日本経済新聞社
 —— [2003 (1997)]『遊牧民から見た世界史——民族も国境もこえて』日本経済新聞社
 鈴木中正 [1971 (1952)]『清朝中期史研究』燎原
 西藏自治区檔案館編 [1995]『西藏歴史檔案萃』文物出版社
 蘇秉琦 [2004] 張明声訳『新探中国文明の起源』言叢社
 ソウル, S. B. [1974] 堀晋作・西村閑也訳『世界貿易の構造とイギリス経済 1870～1914』法政大学出版局
 対外関係史総合年表編集委員会編 [1999]『対外関係史総合年表』吉川弘文館
 高橋秀直 [1995]『日清戦争への道』東京創元社
 田代和生 [1981]『近世日朝通交貿易史の研究』創文社
 田中正俊 [1973]『中国近代経済史研究序説』東京大学出版会
 谷川道雄編著 [1993]『戦後日本の中国史論争』河合文化教育出版社
 谷川稔編 [2003]『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社
 田保橋潔 [1940]『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中樞院
 —— [1951]『日清戦後外交史の研究』刀江書院

- 田村實造 [1990]『アジア史を考える——アジア史を構成する四つの歴史世界』中央公論社
 張光直 [2000] 小南一郎・間瀬収芳訳『中国古代文明の形成』平凡社
 張存武 [1966]『光緒卅一年中美工約風潮』中央研究院近代史研究所
 張東翼 [1994]『高麗後期外交史研究』潮閣
 —— [1997]『元代麗史資料集録』서울대학교출판부
 —— [2000]『宋代麗史資料集録』서울대학교출판부
 —— [2004]『日本古中世高麗資料研究』SNU Press
 角山榮 [1980]『茶の世界史——緑茶の文化と紅茶の社会』中央公論社
 —— [1984]『時計の社会史』中央公論社
 —— [1988]『通商国家』日本の情報戦略——領事報告を読む』日本放送出版協会
 ——編 [1986]『日本領事報告の研究』同文館
 寺田隆信 [1972]『山西商人の研究——明代における商人および商業資本』東洋史研究会
 湯象龍 [1987]『中国近代財政経済史論文選』西南财经大学出版社
 ——編著 [1992]『中国近代海関稅収和分配統計 一八六—一九一〇』中華書局
 磯波護 [1993]『東洋史学と世界史学』板垣雄三編『地域からの世界史 21 世界史の構想』朝日新聞社
 トビ, R. [1990] 速水融・永積洋子・川勝平太訳『近世日本の国家形成と外交』創文社
 内藤虎次郎 [1914]『支那論』文会堂書店 (同 [1972] 所収)
 —— [1924]『新支那論』博文堂 (同 [1972] 所収)
 —— [1972]『内藤湖南全集』5, 筑摩書房
 中砂明徳 [2002]『江南——中国文雅の源流』講談社
 永田雄三 [1986]『歴史の中のアーヤーン——19世紀トルコ地方社会の繁栄』『社会史研究』7
 —— [1997]『後期オスマン帝国の徴稅請負制に関する若干の考察——地方名士の権力基盤としての側面を中心に』『駿台史学』100
 永積洋子 [1990]『近世初期の外交』創文社
 ——編 [1987]『唐船輸出入品数量一覧』創文社
 中村栄孝 [1969]『日鮮関係史の研究』中・下, 吉川弘文館
 西嶋定生 [1983]『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
 —— [2000] 李成市編『古代東アジア世界と日本』岩波書店
 波多野善大 [1961]『中国近代工業史の研究』東洋史研究会
 —— [1973]『中国近代軍閥の研究』河出書房新社
 羽田明 [1982]『中央アジア史研究』臨川書店
 濱下武志 [1990]『近代中国の国際的契機——朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会
 —— [1997]『朝貢システムと近代アジア』岩波書店
 ——・川勝平太編 [2001 (1991)]『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』藤原書店
 濱田正美 [1983]『19世紀ウィグル歴史文献序説』『東方学報』(京都) 55
 —— [1993]『「塩の義務」と「聖戦」との間で』『東洋史研究』52-2
 林佳世子 [1997]『オスマン帝国の時代』山川出版社
 速水融・宮本又郎編 [1988]『日本経済史 1 経済社会の成立』岩波書店
 坂野正高 [1970]『近代中国外交史研究』岩波書店
 —— [1973]『近代中国政治外交史——ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで』東京大学出版会
 費孝通 [2001]『新世紀 新問題 新挑戦』『費孝通文集』15, 群言出版社
 ピアソン, M. N. [1984] 生田滋訳『ポルトガルとインド——中世ジャラートの商人と支配者』岩波書店

- 平川祐弘 [1969, 97] 『マッテオ・リッチ伝』1~3, 平凡社
- 平野聡 [2004] 『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版会
- 藤井譲治他編 [2004] 『絵図・地図から見た世界像』京都大学文学部研究科 21 世紀 COE プログラム
- 藤井宏 [1943] 『明代塩商の一考察——辺商・内商・水商の研究 (一)~(三)』『史学雑誌』54-5~7
- [1953-54] 『新安商人の研究 (一)~(四)』『東洋学報』36-1~4
- 藤本勝次訳注 [1976] 『シナ・インド物語』関西大学東西学術研究所
- フランク, A. G. [2000] 山下範久訳 『リオリエント』藤原書店
- 古矢旬 [2002] 『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』東京大学出版会
- 細谷千博・斎藤眞編 [1978] 『ワシントン体制と日米関係』東京大学出版会
- 本田實信 [1991] 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会
- 前田徹他編 [2000] 『歴史学の現在——古代オリエント』山川出版社
- 松井透 [1991] 『世界市場の形成』岩波書店
- [1999] 『商人と市場』『岩波講座世界歴史 15 商人と市場——ネットワークの中の国家』岩波書店
- 松浦章 [2002] 『清代海外貿易史の研究』朋友書店
- 松田壽男 [1987] 『松田壽男著作集』5, 六興出版
- [1992 (1971)] 『アジアの歴史——東西交渉からみた前近代の世界像』岩波書店 (同 [1987] 所収)
- 間野英二 [1977] 『新書東洋史⑧ 中央アジアの歴史——草原とオアシスの世界』講談社
- [2001] 『バーブル・ナーマの研究 IV バーブルとその時代』松香堂
- 宮崎正勝 [1997] 『鄭和の南海大遠征——永楽帝の世界秩序再編』中央公論社
- 宮嶋博史 [1994] 『東アジア小農社会の形成』溝口雄三・濱下武志・平石直昭・宮嶋博史編 『アジアから考える 6 長期社会変動』東京大学出版会
- [1995] 『両班 (ヤンバン) ——李朝社会の特権階層』中央公論社
- 村松祐次 [1980 (1970)] 『近代江南の租棧——中国地主制度の研究』東京大学出版会
- 本野英一 [2004] 『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会
- 百瀬弘 [1980] 『明清社会経済史研究』研文出版
- 訳注 [1969] 『西学東漸記——容閔自伝』平凡社
- 森安孝夫 [2002] 『ウイグルから見た安史の乱』『内陸アジア言語の研究』17
- 矢沢利彦 [1971] 『イエズス会の来華とカトリック布教の展開』榎一雄編 『東西文明の交流 5 西歐文明と東アジア』平凡社
- [1972] 『中国とキリスト教』近藤出版社
- 家島彦一 [1991] 『イスラム世界の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店
- 訳注 [1996-2002] 『大旅行記——イブン・バトゥータ』1~8, 平凡社
- 矢野仁一 [1926] 『近代支那史』弘文堂書房
- [1928] 『支那近代外国関係研究——ポルトガルを中心とする明清外交貿易』弘文堂書房
- [1930] 『近世支那外交史』弘文堂書房
- [1937] 『日清役後支那外交史』東方文化学院京都研究所
- [1941] 『満洲近代史』弘文堂
- 山本澄子 [1972] 『中国キリスト教史研究——プロテスタントの「土着化」を中心として』近代中国研究委員会
- 山本有造編 [2003] 『帝国の研究——原理・類型・関係』名古屋大学出版会

- 山脇徳二郎 [1964] 『長崎の唐人貿易』吉川弘文館
- 油井大三郎 [1989] 『一九世紀後半のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動』同他 『世紀転換期の世界——帝国主義支配の重層構造』未来社
- 余英時 [1991] 森紀子訳 『中国近世の宗教倫理と商人精神』平凡社
- 楊海英 [2004] 『チンギス・ハーン祭祀——試みとしての歴史人類学的再構成』風響社
- 吉澤誠一郎 [2003] 『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店
- 吉田金一 [1963] 『ロシアと清の貿易について』『東洋学報』45-4
- [1974] 『近代露清関係史』近藤出版社
- 羅玉東 [1936] 『中国釐金史』商務印書館
- 羅香林 [1977] 『梁誠の出使美国』香港大学亞洲研究中心
- 羅爾綱 [1939] 『湘軍新志』商務印書館
- 李成市 [2000] 『東アジア文化圏の形成』山川出版社
- リード, A. [1997, 2002] 平野秀秋・田中優子訳 『大航海時代の東南アジア』1~2, 法政大学出版局
- 劉迎勝 [1995] 『絲路文化』草原卷・海上卷, 浙江人民出版社
- 劉石吉 [1971] 『清季海防与塞防之爭的研究』『故宮文獻』2-3
- 林玉茹・李毓中 [2004] 森田明監訳 『台湾史研究入門』汲古書院
- 渡辺浩 [1997] 『東アジアの王権と思想』東京大学出版会
- Adshead, S. A. M. [1970] *The Modernization of the Chinese Salt Administration, 1900-1920*, Cambridge, Mass.
- [1992] *Salt and Civilization*, Basingstoke, London.
- Alden, D. [1996] *The Making of an Enterprise: The Society of Jesus in Portugal, Its Enterprise, and Beyond, 1540-1750*, Stanford.
- Boxer, C. R. [1965] *The Dutch Seaborne Empire, 1600-1800*, London.
- [1969] *The Portuguese Seaborne Empire, 1415-1825*, London.
- Cahen, G. [1912] *Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous le Pierre le Grand (1689-1730)*, Paris.
- Chaudhuri, K. N. [1978] *The Trading World of Asia and the English East India Company, 1660-1760*, Cambridge, etc.
- Chaudhury, S. and Morineau, M. (eds.) [1999] *Merchants, Companies and Trade: Europe and Asia in the Early Modern Era*, Cambridge.
- Chu, Wen-djang [1966] *The Moslem Rebellion in Northwest China, 1862-1878, a Study of Government Minority Policy*, The Hague, Paris.
- Cordier, H. [1902] *Histoire des relations de la Chine avec les puissances occidentales, 1860-1900*, Tome 2, Paris.
- Dennett, T. [1922] *Americans in Eastern Asia, a Critical Study of the Policy of the United States with reference to China, Japan and Korea in the 19th Century*, New York.
- Eastman, L. E. [1967] *Throne and Mandarins: China's Search for a Policy during the Sino-French Controversy 1880-1885*, Cambridge, Mass.
- Fairbank, J. K. [1969 (1953)] *Trade and Diplomacy on the China Coast, the Opening of the Treaty Ports, 1842-1854*, Stanford.
- Greenberg, M. [1951] *British Trade and the Opening of China 1800-1842*, Cambridge.
- Hamada, M. [1990] "La transmission du mouvement nationaliste au Turkestan oriental (xinjiang)."

- Central Asian Survey, 9-1.
- Hsü, I. C. Y. [1960] *China's Entrance into the Family of Nations: the Diplomatic Phase, 1858-1880*, Cambridge, Mass.
- [1965a] *The Ili Crisis: A Study of Sino-Russian Diplomacy 1871-1881*, London.
- [1965b] "The Great Policy Debate in China, 1874: Maritime Defense vs. Frontier Defense," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 25.
- Hunt, M. H. [1983] *The Making of a Special Relationship: The United States and China to 1914*, New York.
- Jelavich, C. and Jelavich, B. (eds.) [1959] *Russia in the East, 1876-1880: The Russo-Turkish War and the Kuldja Crisis as seen through the Letters of A. G. Jomini to N. K. Giers*, Leiden.
- Kim, Hodong [2004] *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*, Stanford.
- King, F. H. H. [1987, 88] *The History of the Hongkong and Shanghai Banking Corporation*, Vols. 1, 2, 3, Cambridge.
- Kuhn, P. A. [1970] *Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure, 1796-1864*, Cambridge, Mass.
- Lombard, D. et Aubin, J. (éds.) [1988] *Marchands et hommes d'affaires asiatiques dans l'Océan Indien et la Mer de Chine 13^e-20^e siècles*, Paris.
- Louis, Wm. R. [1971] *British Strategy in the Far East, 1919-1939*, Oxford.
- Mathee, R. P. [1999] *The Politics of Trade in Safavid Iran: Silk for Silver 1600-1730*, Cambridge.
- Morse, H. B. [1920 (1908)] *The Trade and Administration of China*, 3rd ed., London, etc.
- [1910, 18] *The International Relations of the Chinese Empire*, 3vols., Shanghai, etc.
- Nish, I. H. [1966] *The Anglo-Japanese Alliance: The Diplomacy of Two Island Empires, 1894-1907*, London.
- Osterhammel, J. [1986] "Semi-Colonialism and Informal Empire in Twentieth-Century China: Towards a Framework of Analysis," W. J. Mommsen and J. Osterhammel, eds., *Imperialism and After: Continuities and Discontinuities*, London.
- [1999a] "Britain and China, 1842-1914," *The Oxford History of the British Empire Vol. 3 The Nineteenth Century*, Oxford.
- [1999b] "China," *The Oxford History of the British Empire Vol. 4 The Twentieth Century*, Oxford.
- Owen, D. E. [1934] *British Opium Policy in China and India*, New Haven, London.
- Pelcovits, N. A. [1948] *Old China Hands and the Foreign Office*, New York.
- Pelliot, P. [1959, 68, 73] *Notes on Marco Polo*, I, II, III, Paris.
- Rossabi, M. [1975] *China and Inner Asia, from 1368 to the Present Day*, London.
- [1990] "The 'Decline' of the Central Asian Caravan Trade," J. D. Tracy ed., *The Rise of Merchant Empires: Long-Distance Trade in the Early Modern World, 1350-1750*, Cambridge.
- Sasaki, Y. [1984] "The International Environment at the Time of the Sino-Japanese War (1894-1895) — Anglo-Russian Far Eastern Policy and the Beginning of the Sino-Japanese War," *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 42.
- Tracy, J. D. (ed.) [1991] *The Political Economy of Merchant Empires: State Power and World Trade, 1350-1750*, Cambridge.
- Treat, P. J. [1963 (1932, 38)] *Diplomatic Relations between the United States and Japan*, 3 vols., Gloucester, Mass.

- Yen, Ching-Hwang [1976] *The Overseas Chinese and the 1911 Revolution with special reference to Singapore and Malaya*, London, etc.
- [1985] *Coolies and Mandarins, China's Protection of Overseas Chinese during the Late Ch'ing Period (1851-1911)*, Singapore.
- [1986] *A Social History of the Chinese in Singapore and Malaya, 1800-1911*, Singapore.
- [1995] *Studies in Modern Overseas Chinese History*, Singapore.
- Young, L. K. [1970] *British Policy in China 1895-1902*, London.
- Бантыш-каменский, Н. Н. [1882] *Дипломатическое собрание дел между российским и китайским государствами, с 1619 по 1792 год*, Казань.
- Бартольд, В. В. [1963-1977] *Сочинения*, 1-9, Москва.
- Нарочницкий, А. Л. [1956] *Колониальная политика капиталистических держав на Дальнем Востоке, 1869-1895*, Москва.
- Романов, Б. А. [1928] *Россия в Маньчжурии (1892-1906)*, Ленинград.
- Ходжаев, А. [1979] *Цинская империя, Джунгария и Восточный Туркестан (колониальная политика Цинского Китая во второй половине XIX в.)*, Москва.

執筆者一覧

(50音順, *は編者)

- | | |
|---------------|----------------|
| 浅原達郎 (京都大学) | * 杉山正明 (京都大学) |
| 井上 進 (名古屋大学) | 妹尾達彦 (中央大学) |
| 井上裕正 (奈良女子大学) | 關尾史郎 (新潟大学) |
| 岩井茂樹 (京都大学) | 谷井俊仁 (三重大学) |
| 石見清裕 (早稲田大学) | 檀上 寛 (京都女子大学) |
| 江田憲治 (京都大学) | * 礪波 護 (大谷大学) |
| 江村治樹 (名古屋大学) | 中砂明德 (京都大学) |
| 大澤顯浩 (学習院大学) | 宮澤知之 (仏教大学) |
| 岡本隆司 (京都府立大学) | 村上 衛 (横浜国立大学) |
| 加藤直人 (日本大学) | 榎山 明 (埼玉大学) |
| 川合 安 (東北大学) | 森田憲司 (奈良大学) |
| * 岸本美緒 (東京大学) | 森安孝夫 (大阪大学) |
| 木田知生 (龍谷大学) | 吉本道雅 (京都大学) |
| 久保 亨 (信州大学) | 渡辺信一郎 (京都府立大学) |
| 佐原康夫 (奈良女子大学) | |

中国歴史研究入門

2006年1月10日 初版第1刷発行

2007年1月30日 初版第2刷発行

定価はカバーに
表示しています

編者 礪波 護
岸本美緒
杉山正明
発行者 金井雄一

発行所 財団法人名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町名古屋大学構内
電話(052)781-5027/FAX(052)781-0697

© Mamoru TONAMI et al., 2006

Printed in Japan

印刷・製本 錦洋社

ISBN978-4-8158-0527-2

乱丁・落丁はお取替えいたします。

☑ <日本複写権センター委託出版物>

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の
例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写
権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。